仮面ライダー白式

イクリプス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー白式

【Ｎコード】
Ｎ４３０３Ｒ

【作者名】
イクリプス

【あらすじ】
若干オリジナルのつもりが、気付けば結構原作から乖離してました（笑）
あと、クロスオーバーっぽいところはありますが、あくまで扱いはＩＳの世界の中でのテレビ番組とかそんな感じです。
とりあえず、合言葉は「束さんの仕業か！？」で（笑）

注意事項（必読）

◎注意事項その１

本作は携帯で執筆、投稿しています。
また、下記の通り多種類の括弧を多用していますのでパソコンでの閲覧の場合文章の途中で変なルビが表示される場合がありますが御了承下さい。

使用括弧一覧

■「」
キャラクターの台詞。
または文章中での強調。
例：「〇〇〇な場合」だとか……

■『』
キャラクターの台詞の中で、特に機械の台詞の場合に使用。
また、「」の様に文章中での強調に使用する場合も。

■「（）」
「」の中に（）が入っている場合は通信での会話……特に特定の者同士にしか聞こえない会話に用いられる。
または口では「」内の内容を喋っているが、内心では（）内の内容の様に思っている場合に使用。

■『（）』
機械の場合である事以外は「（）」と同一。

■《》
物の固有名詞、本作内では機体名や武装の名称、唯一仕様の特殊才能の名称がこれに当たる。

◎注意事項その２
本作は一応、

■ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＜
■仮面ライダー　シリーズ

の二つの作品のクロスオーバーですが、主人公機が仮面ライダーを模した機体であるだけであり、仮面ライダー自体はあくまでＩＳの世界で放送しているテレビ番組であり、本物がＩＳの世界にやって来たりはしません。

募集内容（第1弾、終了）

対後の話なので、まだ先の話ですが、ヒロイン達のＩＳ（シルバリオ・ゴスペル）をパワーアップさせる予定です。
既に《甲龍》と《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》のパワーアップ後の名称は決めているのですが、《ブルー・ティアーズ》と《シュヴァルツェア・レーゲン》のパワーアップ後の名称がなかなか決まらないので読者様から募集しています。

条件は二つありまして、

まず一つ目が
《ブルー・【英語】》
《シュヴァルツェア・【独語】》
という体裁にして欲しいという事。

二つ目は
意味までは深くこだわりませんが、あまりにも変な意味なのは遠慮して欲しいという事。

の二点です。

また、他人の意見に対する誹謗中傷は絶対にやめて下さい。

以上のルールの元、皆さんの沢山の案をお待ちしております。

以下は、現在候補案を出して頂いた方とその候補名の一覧です。

○Ａｐｏｃａｒｉｕｓさん

・《ブルー・ジェット（Ｂｌｅ　Ｊｅｔ）》
・《ブルー・スターター（Ｂｌｕｅ　Ｓｔａｒｔｅｒ）》

元ネタは成層圏で発生する放電現象で、
前者は、青系統の色で、細長い形をしている「上向きの雷」。
後者は、ブルージェットに先立って現れる放電現象。

○蒼き星さん

・《ブルー・インパルス（青い衝撃）》

○作者（ネタ）

・《ブルー・レット》
置くだけ

○鳴神さん

・《シュヴァルツェア・ヴォルフ【黒狼】》

○クロススケアさん

・《ブルー・バースト（Ｂｌｕｅ　Ｂｕｒｓｔ）》

元ネタ

ファンタシースターオンライン　ブルーバースト（ＰＳＯＢＢ）

○さすらいの一般市民さん

・《ブルー・スフィア》

雫が硬い珠になった

・《シュヴァルツェア・クーゲルシュライバー》

・・・まぁ黒ボールペ（ゲフンゲフン

○ｓｎｏｗさん

・《ブルー・ミーティア（流星）》

雫→水→氷→彗星の芯は氷→だけど彗星（コメット）だと語呂が悪い→なら流星（ティアーズ）でいいんじゃね？　雫にも一部被ってるし

という連想ゲームで決めちゃいました

《シュヴァルツェア・フルス（川）》

雨→雨が降ると地表に溜まる→地表に溜まった水は川に流れ込む→川という連想ゲームで決めました

○ジェットエンジントーマスさん

・《ブルー・グレイル》
・《ブルー・グラール》

ティアーズはイギリス機ということでアーサー王物語より「奇跡をなす聖杯」から

・《シュバルツェア・ヴォーダン》

レーゲンは「雨」にかかわる名前なので、北欧神話の一説より「戦いの神、嵐の神」から

○蒼の雫さん

・《ブルー・クリスタル（結晶）》

前記は雫→結晶に。
ベタですけど（苦笑）
普通に雫の次ならって辞書引いて考えました

・《シュバルツア・デストロイ》
・《シュバルツア・フリーゲン》

前記↓なんかもう・・・黒いイメージから離れなかったので漆黒の破壊者にしました元ネタは種運命からです
後記は雨↓翼ｏｒ羽にしました。
本来フリーゲンとは『飛ぶ』という意味で、ブリューゲルが『翼、羽』ですが、ティアーズも和訳だと、雫では無く涙なのでこうゆう形にしました。

○駄ディケイドさん

・《ブルー・ミラージュ（蒼い蜃気楼）》

ブルー・ミラージュは、
本来、その場所から見えない物が見えたり、あり得ない形に変化したように見える蜃気楼と、変幻自在な攻撃が可能なビットを掛けて。

・《シュバルツア・スパーダ（漆黒の矛）》

シュバルツア・スパーダは、
力だけで戦っていたラウラが、新たに出来た絆と想いを胸に、大切な人達を護るために振るう《矛》

○外剛さん

・《ブルー・エンプレス（蒼き女帝）》
元々ブルー・ティアーズの名前のもとになったのはビット型の武器のことですし、それを兵隊のように使うなら女帝ということで。
まあ、第二形態の武器がビットの進化形なのか、そうでないのかで変わってきますが。
白式第二形態の名前も第二形態移行したときに出てきた雪羅を由来にしてますし。

・《シュヴァルツェア・シュトゥルム（黒い嵐）》
雨より強そうな名前は嵐しか思いつかなかった。ｗｗｗ

募集内容（第2弾、募集中）

さて、本編での戦いも激化していく中、ヒロインズのＩＳも《ブルー・ティアーズ》、《甲龍》、《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》、《シュヴァルツェア・レーゲン》、《打鉄弐式》、《紅椿》と出揃っていき、出て無いのは《ミステリアス・レディ》ぐらいのものです。

物語も遂に本題といいますか、これまでの「仮面ライダー白式」はもうすぐ”一夏が仮面ライダーになるまで”の段階から”異形と戦う異形、仮面ライダー”へと移ろうとしています。

そこで、真に戦うべき敵、”ヤツら”事　地球外生命体の総称を読者の皆様に決めて欲しいのです。
〆切りはまだかなり先ですが、前回募集した《ブルー・ティアーズ》と《シュヴァルツェア・レーゲン》のパワーアップ後、つまり前回の募集の当選者発表後とさせていただきます。

現在、公開しているヤツらの情報はというと…

・地球外生命体の大群である
・金属で出来た細胞みたいな生物で、取り込んだ物を糧に化ける（糧というのは単に材料という意味だけではなく、取り込んだ物の保有する情報を元に新たな形を形成する事もある）
・単に寄生するだけで宿主を乗っとる事が出来る
・侵略する気満々

という特徴を持っています
まぁ、イメージとしては宇宙から来たネオ生命体のドラスの大群っ

ところでしょうか？

では、皆さんの沢山の案をお待ちしております

あと、前回同様、他人の案に対する誹謗中傷は絶対にしないで下さい

案が集まり次第、順次更新していきます

応募していただいたアイデア一覧

○クロススケアさん
レギオン
元ネタ：ガメラ2　レギオン襲来のレギオン
更に言ってしまうとレギオンには元ネタがあります。
新約聖書のマルコによる福音書5章9節：主が、「名は何か」とお尋ねになると、それは答えた。「わが名はレギオン。我々は、大勢であるがゆえに」に現れる言葉です。
→Ｗｉｋｉより引用

○Ｗｈｉｔｅ　Ｓｅａｌさん
かなり古い作品なんですが、「アスラクライン」でおなじみ三雲岳

人先生の「道士さまといっしょ」シリーズに似たような設定の＜獣（イェーガー）＞ってのが登場しますよ。

○蒼き星さん
刹那「名前はまだ決まっていなかったのか、あいつら」
士樹「なら、ｕｓｕｒｐという英単語の読みから取ってザープというのはどうかな？」

○駄ディケイドさん
アルトネリコと言うゲームに出て来る架空の言語（ヒュムノス）から合いそう物を何個か見繕って来ました。
操る、操作する、意のままにする〈ティクティム〉
災い、禍、災厄〈デレイア〉
夢魔　悪夢　迷夢〈レベリス〉
むさぼり食う〈ジェンジャット〉
不幸、災い〈ジェンハー〉
壊滅〈デグル〉
問題、障害〈オーヴィクル〉

○灰狼さん
パラサイトで。それかきゅうべ（此処から先が真っ赤に染まっている）

○魔火さん
インベーダーかアグレッサーで（どちらも意味は侵略者）。

○　ＨＴさん
性質的に侵略を企んでる以外は「ファフナー」のフェストゥムや「００劇場版」のＥＬＳに似てますね。
寄生する上に宿主に害を与えるから悪い意味で「パラサイト」はどうでしょう？

プロローグ

あれは確か、束さんがＩＳを発表する二週間ぐらい前の事だったと思う。
千冬姉が仕事で家を空ける事が多かったのはいつもの事だったが、時期的に決算が近かったからだろうか、いつも以上に忙しそうだったのを覚えている。

どの位忙しそうだったかといえば、二、三日家を空ける場合、いつもならファースト幼なじみの箒の実家に俺を預けるところを、その時に限って何故か箒の姉の束さんに直接俺を世話する様に頼んでしまうぐらいテンパっていたのだ。

もう少し詳しく経緯を説明するのなら、多分俺の様子を見ておきたかったのだろう、千冬姉が忙しいのに無理して仕事の合間に一旦帰宅し、少しの間団欒して、最後に俺に二、三日家を空ける旨を伝えてそのまますぐに勤め先に戻ろうかと玄関に向かったところで束さんから電話が掛かって来たのである。

会話の内容は分からなかったが、多分束さんの事だ、また思い付きでトンデモ発明でもやったのだろう。
それを聞いてる千冬姉もまぁいつも通りというか、どうでもよさそうに適当に相槌をうっていたのだが、時間が押していた事もあり、ついには

「あ～、わかったわかった、その話なら後でたっぷりと聞いてやるから」
「え～、ちーちゃんまた仕事なの？」

「そうだ。というか、急がないと間に合わんかもしれん」
「え!?そ～なの?それは大変だね。じゃあ、いっくんの世話は私に任せといて!」
「あぁ、頼んだ。……っと、そろそろマズいな。一夏、また二、三日空ける事になるが束が来るから何かあったら束を頼れ。じゃあな、束もまた後で」

そんなやり取りがあって千冬姉は足早に勤め先に戻っていったのだった。

まぁ、束さんも千冬姉の親友であるので当然こっちの家庭の事情は知っていた。
だから普段がアレでも無理に引き止めて仕事の邪魔になる様な事はしなかったのだが、あの束さんである。

「いっく～ん。今日の晩御飯はいっくんの作ったハンバーグが食べた～い♪」

……この人、何しにきたんだっけ？

初日からいきなり自分の世話をしてくれるハズの人の為に夕飯を作らされるという珍妙な事態に陥ったものの、俺は千冬姉が仕事で家を空けている事が多かったので自炊する機会が多かった。
だから、まぁ、ハンバーグぐらい作れない事もない。
…というか千冬姉、仕事が忙しい分俺とは逆に殆ど家事をする機会が無かったとはいってもアレは無い。
そのくせ俺には、

「インスタントばかりでは健康に悪いからな。ちゃんと自分で自炊出来る様にしとけよ」

とかねぇ…。
その言葉、そっくりそのままお返ししますよ、とは言わなかったものの、考えてることがバレたのだろう、直後に容赦の無い一撃を貰う事になった。
うぅ、暴力反対。

んで翌朝。
朝起きたら既に束さんが朝食を用意していた。

束さん、一応自分が何しに来たのにかは理解していたらしい。
ちなみに献立はご飯と味噌汁といういたってシンプルな日本の朝食だったが、特にこの味噌汁の味は十年たった今でも追いつける気がしないほど美味かった。
箒からは束さんが自宅で家事をやってるなんて聞いた事無かったので、気になって家でも作ったりするのかと聞いてみると、

「ん～？今日が初めてだけど、どうかした？」

なんて返されて戦慄したのを覚えている。
初めてでこの味を出せるとか…。
いや、まぁ、昔から何をやっても人の上を行く人だったけど、まさかここまでとはねぇ…。

さて、ここからが本題なのだが、日曜の朝といえばスーパーヒーロータイムだろう。
当時の俺ぐらいの年代の子供にとって、その時間帯にテレビを見るのは毎週の恒例行事だったといえる。
もちろん当時の俺もテレビの中のヒーローに夢中だった。
ちょうど戦隊モノが終わってＣＭに入ったところで束さんが俺に、

「ねぇねぇ～、いっくん。誕生日、何か欲しいものある？なんでも作ってあげるよ？」

なんて尋ねてきた。
そういえば一週間後が誕生日だったかと思い出し、そこで漸く千冬

姉が妙に忙しそうだった理由に思い至った。
決算でもなんでもなく、俺の誕生日に合わせて休暇を取る為だったのだ。
まぁ、その結果として前述の通り初日に俺が束さんのお守りをする事になったのだが、それはそれ。
気にしたら負けな気がするので本題の方を進めるが、束さんが今回は珍しく事前に何が欲しいか聞いてきたのだ。
「買ってあげる」では無く「作ってあげる」な辺りが束さんらしい。

いつもならサプライズで妙に役に立つ変なものを作ってくれたりするのだが、事前に聞かれる事は今までなかったのでいざ聞かれると迷うのだ。

相手はあの束さんである。
多少無茶振りしてもホントに作ってしまいそうで…。

そう考えるとだんだん流石の束さんでも作れないものは何かないだろうかと考えてみたりしたのだがこれが中々思い付かず、どうしたものかと思案していたところで、ＣＭが終わってしまい、テレビに目を向ける。

きっかけはほんの些細なもので、それでも、確かにここから始まったのだ。

「じゃあ、ホントに変身出来る仮面ライダーの変身ベルトを」
「うん、オッケー♪」

結局、思い付きでプレゼントをリクエストしてしまったワケだが、やっぱり束さんは束さんだった。
二つ返事でそれを承諾してしまったという事は、つまり、束さんにとって「ホントに変身できる仮面ライダーの変身ベルト」は作れないものではないということになるのだろう。
流石束さんというか、不思議と俺はそんな束さんに驚く事もなく、束さんだもんなぁ…と、納得してしまったのだった。

第1話「…正直、普通に藍越学園に通いたかったです」（前書き）

え～、すんません、仮面ライダーとのクロスですが、まだライダーの登場は先です

第1話「…正直、普通に藍越学園に通いたかったです」

そんな事（詳しくはプロローグを読んでくれ）もあったりしたが、結局はいつも通りの日々で、まぁ、ちょっとした事件にも巻き込まれたりもしたが現在俺はＩＳ学園にいる。
事件についてはまぁ、機会があればその時にまた説明するとしよう。
それで、なんで俺がＩＳ学園にいるのかといえば、試験会場を間違えてしまったからである。
藍越とＩＳって似てるよね、響きが。
とはいっても、試験会場を間違えたぐらいではこのＩＳ学園には入学できない。

何故なら、ＩＳは女性にしか扱えないものなのだから。

ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＜とは篠ノ之博士が……という束さんが作ったトンデモ発明の一種であり、元々は宇宙用マルチフォームスーツだったのだが『白騎士事件』以降、今までの兵器を軽く凌駕するその性能から急速に世界中で採用される事になった。
だが、一つ大きな欠陥があって……いや、まぁ束さんの事だからワザとなんだろうけど、何故かＩＳは女性にしか扱えない。

じゃあ、何故俺（織斑一夏）がＩＳを使用できるのか？
勿論、実は織斑一夏は男装した女子だった、なんて事は無い。
俺は男性である。
男性の、ハズである。
…そう、だよな？
実は女の子だったけど、もの心つく前に性転換しました～、とかでは無いハズだ。
そんな事はないハズなんだが……。
……アレ？
なんか考え出したら不安になって……あ～もうっ、やめやめ、とにかく俺は男だ。
そうだ、男なんだ！
ＩＳだってたまたま動かせただけで……はっ！？　まさか束さんの仕業か！？
いや、まさかも何も束さんの仕業なんだけどね。

まぁ、ともかく動かせちゃったもんはしょうがないというか、俺はＩＳ学園へ強制入学となった。
政府のお偉さんは世界で唯一の男の操縦者の保護の為とかなんとか言ってたが、結局は俺という貴重なサンプルを独占したかったのだろう。
実際、世界中が俺の身柄を欲しているらしいし。
俺自身、今時の日本人よろしく緒外国ほど祖国に愛着があるわけでも無いが、かといってＩＳが動かせる程度の理由で国籍を変えるつもりも無い。
というか、日本もそうだがどの国も俺が「唯一ＩＳを動かせる男性」だからってやる事が露骨過ぎる。
キレイなお姉さんから怖～いお兄さん、軽～いお誘いから誘拐まで、いろんな人達がいろんな手段で…それはもう、バリエーションに富んだ勧誘だった。

その度に千冬姉が、

「そこまでだ！」

と、まるでヒーローの様に駆け付けてくれたから助かったものの、俺一人だったらどうなっていた事やら。

というか、千冬姉、仕事の方は大丈夫だったんだろうか？

ただでさえそんな状況だったのにコレである。

俺以外クラスメイトはみんな女子、勿論他のクラスだって女子しかいない。

それ自体はわかってた事だがキツイものはキツイ。

何がキツイかって、まず俺以外はみんな女子なんて状況がキツイ。

生憎、「ここは俺のハーレムだ！」なんて開き直れるほど度胸も無いし、何よりこの好奇の視線が１番キツイ。

学園内で男が珍しいのは分かるがこれはない。

パンダか俺は。

なるほど、毎回動物園に行く度にパンダが隅っこの方でうずくまっていたのはこういう事か。

そうかそうか、お前も辛かったんだな。

解るよ、その気持ち。

まぁ、解ったところで俺はどうもしてやれないけど。

つ～か、この状況をどうにかして欲しいわ。

「あの、織斑君？次は織斑君の番ですよ～。聞いてますかぁ～？織斑く～ん」

「え？あっ、はい！すいません」

しまった、つい考え事（現実逃避とか言うな）してる間にもう俺の番か。
いや、まぁ、あいうえお順だからすぐに自分の番になるのは解ってたんだけどね。

「あ～、え～っと、織斑一夏です。よろしく」
（じ～～）

とりあえず当たり障りの無い自己紹介で済ませたハズなんだが、なんだか様子がおかしい。

アレ？俺やらかした？
普通に挨拶したつもりだったんだけど、何かマズイところでもあったか？

言葉遣い？
いや、特に問題無かったハズだ。

表情？
そりゃ、まぁ、緊張で多少は強張ってるかもしれんがそこまでおかしな表情じゃないだろう。

顔？
俺は別にこの顔を気に入ってるワケでも嫌ってるワケでも無いがクラスに打ち解ける為にわざわざ整形するつもりは無いので諦めてくれ。

な、なんだよ！？
なんで皆俺をそんな目で見るんだよ！

これは辛い。

どれぐらい辛いかといえば逃げ出したくなるほど辛い。
そ、そうだ、これは戦略的撤退であって逃避では無い！
無いったら無い！
若しくは後ろに向かって前進！
そうだ！
そうに違いない！
そうだと言って！
……うん、なんかいろいろダメっつうか終わってる様な気もするけど、もう気にしたら負けかどうか以前に負けてる気がするので変わらんだろう。
そうと決まれば……！

「ん？…何だ、まだ自己紹介の途中だったか」

俺の葛藤を余所に、プシュッと気の抜ける様な自動ドアの開く音が妙な静けさに包まれた教室に響く。
音と共に教室現れた人物は俺のよく知る人物だった。
というか、千冬姉だった。
…なんでさ？

「あ、千冬ｎ…」

バシィッ！と、これまたいい音が教室に響き渡る。
間一髪で白刃取りが決まったから良かったものの、考えるまでも無く当たれば相当痛い目にあっていただろう。

「…ここでは織斑先生と呼べ」
「り、了解」

ギロリ、と人が殺せそうな鋭い視線が恐ろしい。
千冬姉マジ怖ぇぇぇぇぇっ！！
流石にそんな事は口に出さないが…つ～か、出したら殺されると脳内会議で満場一致で結論が出た。

恐々としている俺を余所に、千冬姉はいつものポーカフェイスで告げる。

「諸君、私が織斑千冬だ。私の言う事はよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

ツッコミを期待してるのだろうか？
俺はやらんぞ、後が怖いからな。

「キャーーー！千冬様ぁ～！」
「お姉様～」
「キャ～～～～～」

千冬姉も千冬姉だが、クラスの女子達も女子達である。
千冬姉の自己紹介が終わった瞬間コレだ。
なんかもう、黄色い悲鳴が教室中に響き渡って……正直喧しい。
女三人揃えば姦しいとは言うが……さて、このクラスの女子はいったい何人いたっけか。
というかもう、この悲鳴を差し置いてもクラスの雰囲気が異様である。
百合か？百合なのか？

流石は（実質）女子校、今まで共学で過ごして来た俺には新鮮というかなんというか…。
新鮮過ぎるわぁぁぁぁぁぁっ！！！

なんかそう思うといよいよ俺が場違いな気がしてきた。
…帰ってもいいよね？
返事は聞きたくない！

一方、羨望の眼差しと共に黄色い悲鳴のフルコーラスを聞かされている千冬姉は、それはもう心底ウザそうに、反応してやるのも億劫だと言わんばかりの蔑む様な目で生徒達を見ている。
……教師がそれいいのか？

「きゃぁぁぁぁ、お姉様ぁ！もっと罵って！」

…うん、ホント逞しいね、女子は。

…俺、これからどうなるんだろう？

第1話「…正直、普通に藍越学園に通いたかったです」（後書き）

まぁ、普通　女子高の中に一人放り込まれたらこうなるよね　という話ですね

第2話「納得がいきませんわ！」（前書き）

2話目です

第2話「納得がいきませんわ！」

みなさんこんにちは。
皆のアイドル　織斑一夏です☆（キラッ）

……すんません、調子こきました。

なんというか、また俺が現実逃避してるのにはワケがありまして。
えぇ、それはもう、海より深ぁ～いワケがあるんですよ、はい。

～回送開始～

ただでさえ女の園に男一人なんていう肩身の狭い思いで過ごしている俺としては、出来るだけ波風立てたく無いワケなんだが……って、おいコラ、今「うらやましい」とか「代われ」とか言ったヤツ、ちゃんと第1話読んだのか？
周りに女子しかいないって事はな、つまりなんかやらかしたら最期なんだよ！
はぁ？

「何も問題起こさなければ大丈夫」だぁ？
んなモンこっちが問題起こす気があるかどうかなんて関係無ぇんだよ！
問題ってのはなぁ、こっちにその気が有ろうが無かろうが勝手に起こるモンなんだよ！

視線一つにしたってそうだ。
いやらしい目でみるなんて以っての外、そうで無くても偶然……なんて事は十分ありえる。
かと言ってそういうハプニングに遭遇しない様に気を使って、人目を避ける様にコソコソと行動すればかえって怪しまれる。
そんな、一般の高校なら、俺が行くつもりだった藍越学園なら絶対しなくても済んだハズの苦労をこれから三年間も続けなければならないと思うともぅ……。

まぁ、それでもこうなってしまったモンはしょうがないと、諦め……いや、気持ちを切り替えたところでコレである。

「納得がいきませんわ！」

俺だって納得いかね～っつうの。
いや、まぁ、俺とオルコット嬢とでは何に納得がいかないのかは別なワケだが。
俺のはさっき説明した通り。
んで、オルコット嬢はクラス代表に俺が推薦された事が納得出来ないらしい。
俺だって納得出来んわ。
波風立てたくないってのになんで俺が、そんな面倒な事をしなきゃならんのだ。

「え～と、んじゃ、俺はオルコット嬢を推薦するわ。実力的に」
「そ、そうですわ！男性か女性か以前に、つい最近ＩＳが操縦できる事が出来る事が判明した様な方と私では実力が違い過ぎます！」
そうだそうだ！
いいぞオルコット嬢、もっと言ってやれ。
「え～、でもせっかく唯一ＩＳ使える男子がいるんだし～」
「私も織斑君が戦ってるとこ見たいな～」
「だよね～」
こら、女子Ａ、Ｂ、Ｃ、いらんこと言うな。
ホラ見ろ、オルコット嬢キレかかってんぞ。
「…実力、という意味では織斑とオルコットの言う通りなんだがな。だが、多数決では織斑の方が大多数を…」
ちょっ、千冬姉も余計な事言わないでぇぇぇぇぇぇぇっ！
オルコット嬢マジでキレちゃうから！
他の女子はともかく、いや、その他大勢様でも十分アウトなんだが、代表候補生に睨まれるとかマジ勘弁。
……はぁ、目立つ様な事は極力避けたかったんだが、こうなったら仕方が無いか。
「じゃ、じゃあ、こうしよう。俺とオルコット嬢とで模擬戦やって、勝った方がクラス代表って事にしよう」
「なっ、貴方何を言って…」
「いや、だってさ、クラスの皆は俺をクラス代表にしたい。でも、搭乗時間が５分以下のペーペーがクラス代表になったって他のクラスに勝てないのは目に見えてる」

「と、当然ですわ」
「だからだよ」
「？」

俺の言葉に首を傾げるオルコット嬢、多分クラスメイトの皆も俺が何を言いたいのか解らないのだろう。
だから、嘘ではないがホントの事でも無い、ソレがホントになるかは誰にも解らない様な話を尤もらしくして……有り体に言えば、少し脅してみる事にした。

「たしかに、代表候補生と素人じゃあ、言うまでもなく代表候補生の方が強い。
だけど、話題性という意味では代表候補生よりも『ＩＳを操縦できる唯一の男』の方に軍配が上がる。ここまではいいな？」

オルコット嬢だけでは無く、クラスメイト全員に言い聞かせる様に言葉を選びながら。

「…でも、クラス代表ってのはアイドルの一日警察署長とワケが違う。クラス代表は、文字通りクラスの代表として振る舞える人間でなければならないんだ。俺自身、そこまでいい加減な人間じゃないつもりだが、クラス対抗戦の事もある。それに…」

長々と喋って渇いた口内を潤す為に一旦言葉を区切り、トドメとばかりに言い放った。

「皆は此処（ＩＳ学園）が何なのか、ホントにわかっているのか？
表向きスポーツ色が強くても、篠ノ之博士が宇宙用マルチフォームスーツのつもりで作ったものでも、ＩＳは所詮兵器だ」

束さんの事が話題に出た途端、箒が反応したが、気付かない振りをして続ける。

「仮にも兵器を扱う場所である以上、皆は危険に曝される事が全く無いとは言えない。例えば日本が外国の、逆に外国が日本のＩＳのデータを盗む為に事を起こすかもしれない。国に関わらずどこかの犯罪組織が襲撃してくるかもしれない…」

「そんな、大袈裟な…」

「大袈裟なんかじゃないさ」

少し脅かすつもりで話してたけど、この危機感の無さはホントに危ないかもしれない。

ホントに俺の言うような事態になったらどうするつもりだったんだろうか、この娘達は。

「オルコット嬢、此処にいる俺は『何』だ？」

「……『唯一ＩＳを操縦できる男性』、ですわね。……なるほど、貴方の言いたい事はだいたい解りましたわ。つまり、貴方という餌（唯一ＩＳを操縦できる男性）に群がる危機に、皆さんを巻き込みたくない。そう、おっしゃりたいのですね？貴方は」

「…あぁ」

沈黙が重い。

代表候補生であるオルコット嬢はともかく、誰も俺の懸念していた事に思い至っていなかったのだろう。

…まぁ、当然といえば当然か。

俺の様にＩＳ絡みで事件に巻き込まれた事も無い少年少女にそんな事を想像しろなどと言われても無理がある。

それでも、この危機感の無さは危ない。

もう少し意識してもらわないと、誰も自分の身を守る事なんて出来

やしない。
……それに、これからの日々は俺が、俺自身の存在が皆を危険に曝す事に成り兼ねないのだから。

「ＩＳ学園は…いや、世界は俺が実際強いのか弱いのかよりも、『唯一ＩＳを操縦できる男』の謎を解明したいハズだ。
けど、有事の際にクラスを守るって仕事もしなければならないクラス代表がその標的だと俺のせいで皆を危険に曝す事になる。所詮俺達は学生だから、守るって言ってもせいぜい避難誘導ぐらいだろうけど、やっぱり皆を守らなければならない者自体が危険を呼び寄せる様じゃ本末転倒なんだ。だから、クラス代表はオルコット嬢に任せたいんだ」

「…納得がいきませんわ」

なんでやねん。
ま、まさか…、俺が面倒臭いからクラス代表したくないってのがバレたのか！？
いや、その面倒臭いってのは皆を守りながら自分の身を守るのが難しいって意味も含まれるのであって、決して単純にクラス代表の仕事が面倒だと思ったワケじゃないんですよ？
ホントダヨ？

「皆さんを危険に巻き込みたくない、そう思う事は立派な事です。
…ですが貴方は自分が助かろうとは思わないのですか！」

いや、そうじゃなくて、俺は単に自分の身を守りながら他人の安全に気を配るのは難しいからこういう話をしてるのであって、別に自己犠牲とかそういうんじゃないんですが。

「貴方だって守られるべき生徒ではないですか！」

いや、だから……あ～、こりゃ何を言ってもダメか。
千冬姉、ヘルプ。

「全く、お前は…。さっきから黙って聞いていれば、そんなに大人が…私が頼り無く見えるのか？」
「え…、いや…」

あれ～？
千冬姉もそっち側なの？

「織斑君！私、足手まといにならないようにがんばるから！」
「私も！」
「私だって！」
「織斑君、行かないで！」

え？え？
ちょっ、コレどうゆうことなの？
何この空気？
いつの間にかアウェーっぽいんですけど！？
って、おい最後のヤツ、勝手に脳内で俺の転校手続きすんな。

あわよくばこの話で戦わずしてオルコット嬢にクラス代表を押し付けるつもりだったのに。
クラスメイトの皆からやっぱりオルコット嬢が適任だ～、みたいな感じにもって行きたかったのにぃ～っ！

～回送終了～

まぁ、そんなこんなで一応こちらの提案通りクラス代表の座を賭けてオルコット嬢との模擬戦をする事になったんだが……。

学校側が用意するって言った癖に俺のＩＳがまだ届いてないとかどうなってんだよ！
つ～か、ホントは戦いたく無かっただけなのにこの間の一件でクラスメイトからは俺がいい人だって変な風に勘違いされるわ、千冬姉の機嫌が悪くなるわ……納得がいかんわ！

第2話「納得がいきませんわ！」（後書き）

焦らしプレイ継続中（笑）

次回、漸く一夏が変身です

第3話「変身っ！！！」（前書き）

前座で盛り上げ過ぎちゃった（笑）

第3話「変身っ！！！」

「すみませんすみません！織斑君のＩＳ、向こうの方で立て込んでるらしくてまだ届いてないんです！」

当然の事ながら、第2話から第3話へと話を跨いだからといってＩＳが届くワケでもなく、さっきからずっとこんな調子で副担任の山田先生がペコペコと俺に頭を下げている。
勿論、あくまで発送を間に合わせなかった……え～と、なんていうメーカーだっけか？まぁ、別に山田先生のせいではない事だけは確かだ。
俺としては山田先生がペコペコと頭を下げる度に揺れるきょぬーが見れてとても眼福…

ゴシャッ！

「…貴様、何処を見ている」
「何でもありません、サー」

…うぅ、ついついあの魅惑の果実に見とれていたせいで油断した。
だって男の子だもん。
ってか、さっき千冬姉に殴られた時に洒落にならん音がしたんだが、大丈夫か？俺の頭は。

「安心しろ、それ以上貴様が馬鹿になる事は無い」

…さいですか。
つ～か、そんな事より試合どうすんのさ。

ＩＳ無いんじゃ話にならんだろ。

「…織斑先生、《打鉄》でも《ラファール》でもどっちでもいいんで使用許可下さい」

「いいのか？専用機が届くのを待ってからでも…、何なら日を改めるか？」

「いや、操縦時間５分以内のペーペーじゃあ専用機使っても練習機使っても大差無いでしょ」

仮にその専用機に『一撃で相手のＩＳを倒す武器』があっても当たらなければ意味がない。

いや、仮にも相手は代表候補生である。

そもそもこちらの攻撃が当たるなんて事あるのか？

「山田先生、空いている機体は？」

「え、空いてる機体ですか？う～ん、実習中ならともかく、今は自由時間ですから多分他の生徒が全部使用しているかも……あ、調度（ラファール）が２機余ってます！」

どっちかっていうと《打鉄》の方がよかったんだが、他の生徒が使ってるなら仕方がないか。

ＩＳの数には限りがあるんだから。

束さんがなんで作るのをやめてしまったのか俺には解らないが、現在ＩＳのコアは５００機も無い。

コアが他の誰かに作れるのならまだしも、生憎コアを製作出来るのは束さんただ一人なのだ。

しかも束さんは現在絶賛失踪中。

そうなると各国は現存するＩＳだけでやり繰りするしかないワケで、このＩＳ学園も世界で唯一のＩＳ専門の教育機関という特性上、割と多目にＩＳがあるんだがあくまで『割と多目』であってやはり数

が足りているとは言い難い。
聞くところによると順番待ちで二、三日待たされる事はザラなんだとか。

因みに全くの余談なのだが、束さんは前述通り唯一ＩＳのコアを製造出来る人なので世界中から追われる身なのである。
が、当の本人にその自覚が無いのか、割と頻繁に家に遊びに来たりする。
多分、いや、確実に千冬姉より織斑宅にいる時間長いんじゃなかろうか？

「待ってましたわ！……って、貴方、そのＩＳは…」
「あぁ、どうもメーカーの方でトラブルがあったらしくてな、まだ専用機が届いてないんだよ」
「だったら別に日を改めても…」
「いや、さっきも千冬姉…じゃなかった、織斑先生にも言ったんだがな、素人じゃ専用機使おうが練習機使おうがたいして変わらんだろ？」

そう言ってマシンガンを構える。
自分でも解るぐらい構えが素人臭いのでなんだか締まらんが、まぁ、こんなもんだろ。

昔剣道やってたし、《打鉄》ならもう少し様になったかも知れんが、どう見てもオルコット嬢のＩＳは遠距離型のソレである。
全く近付けずに撃たれまくってお終いになるぐらいなら、《ラファール》で下手な鉄砲数撃ちゃ当たる作戦の方がまだ希望はあるだろう。
……まぁ、その希望も、１％にも満たないだろうが。
「安心しろ。負けた理由を機体のせいにするほど堕ちちゃいねぇよ」
「そこは『例え練習機でもお前に勝って見せる』と言ってみせるところでしょう？」

違いない。
そう言えたら格好もついたんだろうがな。
生憎こっちは素人だ。
代表候補生相手に勝てるだなんて最初（ハナ）から思っちゃいない。
だけど…。

それでも、と。

クラス代表になりたくないが為にワザと挑んだところは確かにある。
結果的にとはいえ、自分から喧嘩を売った以上、八百長で負けるつもりも無い。

せいぜい、これからの為の練習台になって貰う！

「いくぞ！セシリア・オルコットォォォッ！！！」
「来なさい！イチカ・オリムラ！」

さて、ハイパーセンサーから送られてくる情報を元に……ってのがセオリーなんだろうが、勿論今まで俺は銃なんか撃った事なんて無いし、そもそもまともにＩＳを動かしたのは入試で教官相手に体当たりぶちかましたっきりで、授業の方もまだ装着と歩行訓練程度で、正直アレを操縦時間に含めていいのか微妙である。
つまり、俺のＩＳ操縦時間が５分ってのはあくまで殆ど動かした事がないという意味であって、ホントに５分しか動かした事が無いという意味ではない。
まぁ、何が言いたいかというと……。

ハイパーセンサーから来た情報をどう判断したらいいのかが全く解らん！

さっきからよく解らん計器の数字が変動しているが、どれが何を示しているのかなんてサッパリだ。
これに付いては後で聞いた話なんだが、実は古い電話帳と間違えて捨てた説明書にちゃんと記載されていたらしい。
つまり、後の祭りってヤツだ。
ハッハッハッハッハッ！
……って、笑い事じゃねぇ！

「こんのおぉぉぉぉぉぉっ！」

あ～もう、こうなりゃヤケだ。
計器なんか無視無視、とりあえずマシンガンなんだからトリガー引

きっぱなしで銃動かしてりゃ少しぐらい当たるだろう。
一応、掠る程度だがとりあえずはダメージを与える事は出来てるし。
でも、この状況はまだオルコット嬢が余り積極的に攻めて来てないから実現している事であって、実力的に俺に攻撃する暇すら与えず倒す事すら出来たハズだ。

では、何故そうしないのか？

勿論、代表候補生が素人相手に本気になっても…というのもあるだろう。
だが、オルコット嬢は代表候補生としてＩＳ学園に来ているのだ。
しかも、俺という『唯一ＩＳを操縦できる男』とクラスメイトなのである。
多分、「可能な限り対象（織斑一夏）のデータを取って来い」みたいな事をお国から言われているのだろう。
オルコット嬢にも立場というものがあるのだから、それ自体はどうしようも無い事だし、どうも思わない。

せいぜい取れるとしても戦闘データぐらいのものだろうし、生体データ、つまりＤＮＡを採取したところで無駄だという事は『知って』いる。

まぁ、ソレをオルコット嬢自身やイギリス、いや各国が知っているワケでは無いのだが、あえて言い触らすつもりもない。
というか、学園側が生体データなんて取らすを許しているのならとっくの昔に世界中に出回っているだろう。
一応検査は受けたがそこまでおかしな事はされていないし、ＤＮＡなら血液なり毛髪なりで十分なハズだ。

まぁ、そんなワケでそんなにデータが欲しいのなら、もう少し射撃

練習に付き合ってもらって……アレ？
ちょっ、こんな時に弾切れかよ！
あ、今　赤字で0が表示されてるのが残弾のメーターだったワケね。
うん、これで一つ賢くなった……って暢気に納得してる場合か！

「さて、素人にしては頑張ったみたいですが、それもここまでです。
ここから先は一気にキメさせていただきますわ！」
「くっ」

ヤベェ！
オルコット嬢も本腰入れて来やがった！

「行きなさい、《ブルー・ティアーズ》！」
「うおっ」

クソッ、こんなものまで持ってやがったのか！？
ただでさえオルコット嬢の狙撃を回避仕切れて無いのに子機からもビーム撃って来やがった！
…おいおい、ビームの檻で囲んで狙撃とか洒落にならんぞ。

「くっ…この！…うわ！」
「さぁさぁ、踊りなさいな」

ちぃっ、回避に精一杯で他の武装を出す暇すら無ぇ！

「あらあら、素人素人とおっしゃっていた割には上手く回避出来ているじゃありませんか」
「言ってろ！こちとら伊達や酔狂でブリュンヒルデの弟やってるワケじゃねぇんだよ！」

俺がＩＳを操縦できるかどうかなんて関係無く、千冬姉…いや、最強のＩＳ操縦者（ブリュンヒルデ）の存在は現役を引退した今もなお大きい。
そうなると必然的にその弱みである俺自身の存在も世界的にそれなりに大きいものになり、結果、年に数回は誘拐されかかるなんて冗談みたいな生活を送って来た。
実際に誘拐された事もあり、それが原因で世界大会二連覇を逃したりドイツに出向したりと千冬姉にはかなり迷惑を掛けてきた。
未遂も含めて全部千冬姉に助けられて来たワケなんだが、そうでなくとも両親不在な中で俺を養う為に散々苦労を掛けて、俺にとって千冬姉はホントに頭の上がらない存在なのだ。
俺だって、千冬姉の負担を減らす為に色々とやって来たつもりだ。
撃退出来ずとも逃げ仰せる様、身体を鍛えた。
経済的な負担を少しでも減らそうと、学費が安く将来の就職先も安心な藍越学園を受験……するつもりが会場を間違えたせいで今こうしてオルコット嬢の猛攻から逃げ回っているワケだが。

でも、今までやって来た事は無駄じゃ無かったと思う。
現に今、オルコット嬢の《ブルー・ティアーズ》のビームの直撃を受けずにいられるのは誘拐犯から逃げてた時の経験の賜物だ。
…まぁ、出来ればそんな経験　一生したく無かったんだが。

「くっ、ちょこまかと！」

中々直撃させられないせいか、段々オルコット嬢も焦れてきた様である。
その証拠にさっきから狙いが甘くなってきた。

なら今の内に武器を…と、ＩＳに武器を検索させようと一瞬意識を反らした瞬間、アリーナに爆音が響き渡る。
喰らったのが俺じゃなかったとはいえ突然の大音量に思わずたたら

を踏んだ。

「な…、何事ですの!?」

爆発の中から飛び出して来た…いや、爆発によって吹き飛ばされたオルコット嬢の《ブルー・ティアーズ》は見る影も無くボロボロで、とてもさっきまで殆ど無傷だったとは思えない状態だった。
それでも姿勢制御をこなして着地出来るその技術は、流石は代表候補生といったところか。

俺とオルコット嬢が見つめる先、爆煙の中から悠然と襲撃者は現れた。

白亜に輝く装甲。
翼を模したスラスター。

右手には刀を、左手には銃を。
その名を《白式》といった。

「そんな!どうして《白式》が!?だって、アレは…」

「くっ…、原因の究明は後です！山田先生は生徒の避難を！」
「は、はい！」

襲撃者の纏うＩＳは間違いなく今日届くハズだった、本来なら織斑一夏のＩＳになるハズだった機体である。
それがどうして…いや、どうしてもこうしても無く、見ての通りあの襲撃者によって盗まれたのだろう。

迂闊だった。
学園側も襲撃自体は想定していたが、まさか織斑一夏と専用機が揃う前に事を起こされるのは想定外であった。

「クソッ、渋滞にしては遅過ぎるとは思ったが、まさかこう来るとは……織斑！オルコット！貴様等も早く逃げろ！もうすぐ教師が……っな！？」

アリーナのバリアが最高レベルで張られている？
しかもこちらの操作を受け付けないだと！？

「打つ手無し、か…」

ギリッ、と歯を噛み締める音が管制室に響いた。

「くっ、逃げろオルコット！コイツの狙いは俺だ！」
「し、しかし…」
「…ご名答。さて織斑一夏、用件は解っているな？」
「はっ！大人しく捕まってたまるかってんだ！」
「…だろうな。だが、そういう事なら力づくで連れて行くまでだ！」

そう言って、さっきオルコット嬢を撃ち落とした銃をこちらに向ける襲撃者。
その大口径から放たれるであろう弾丸の威力は専用機ですら大破させるほど強力だ。
当たればただでは済まないなんて、考えなくても解ってしまう。
だが、こっちの《ラファール》はさっきの戦闘でダメージの蓄積が酷く上手く回避出来るかどうかなんて怪しい。
オルコット嬢の二の舞程度では済まないかもしれない。

「クソッ、反応が鈍い！」

《ブルー・ティアーズ》程ではないにしろ、破損している事には変わりない。
そんな状態で、しかもシールドエネルギーも底を着き掛けて来ている。
笑ってしまう程不利な状況、いや不利なんてもんじゃない。
正真正銘、絶体絶命というヤツだ。

「がぁぁぁぁぁっ！？」

クソッ、左腕をやられた！
このままじゃ…。

「さて、これでトドメとさせて貰おう」
「グッ…」

最悪だ。
ダメージが酷過ぎてもう飛行も走行ままならない。
…万事休す、か。

「喰ら「やらせませんわ！」…っ何！？」

トドメを刺される寸前、オルコット嬢の放った《ブルー・ティアーズ》の最後の一機が襲撃者の銃を破壊した。

「…黙って見ているのなら放っておいたものを。そんなに死にたいのか！」

マズい！
オルコット嬢はもう殆ど動けない上にさっきの《ブルー・ティアーズ》はミサイル、つまり使い捨てだ。
今度こそ何も出来なくなったオルコット嬢に襲撃者の凶刃が迫る。

「ぐぅ…、間に合えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！」

瞬間、俺の視界は赤く染まった。

奇跡的にオルコット嬢に向かう凶刃の間に割って入る事には成功したが、その代償は大きかった。
まず、《ラファール》は完全に大破。
砕け散ったパーツが今だに宙を舞っている。
そして俺自身も《ラファール》が耐え切れ無かった分のダメージを受けて吹き飛ばされた。

「ふむ、少々やり過ぎたか。だが、任務の内容は対象の生け捕り。アジトに連れて行くまで生きていれば特に問題はなかろう」

そう言って、襲撃者は一歩一歩確実に近づいてくる。
正直、もう指一本動かすのも辛い。
……辛いが、だからといって立ち止まるワケにはいかない。
こんなところで、立ち止まる、ワケに、は…。

「ほう、まだ立つか」
「お、オリムラさん！逃げて下さい！早く！」

「うるさい！女の子一人残して俺一人だけ逃げられるか！」

「な!?意地を張ってる場合ですか!」
「そこの小娘の言う通りだ。ＩＳを失った貴様になにができる?」

…何が出来る、か。

「クッ、…フフフ、アハハハハハハ!!!」
「…何が可笑しい」

突然笑い出した俺を不審に思ったのか、襲撃者の足が止まった。

「あぁ、悪い。篠ノ之博士なら…いや、束さんならこういう時こそ『こんな事もあろうかと』って言うんだろうなって思うと、なんだか可笑しくてさ」
「篠ノ之博士、だと?」

ホント、束さんサマサマだな。
襲撃者は襲撃者で俺の言葉に警戒心でも抱いたのか、表情が強張っているがそんな事はどうでもいい。

ポケットから取り出した大きめのバックルを腹に翳した瞬間、バックルから延びたベルトが腰に巻き付き身体に固定される。
両腕を交互に大きく振り、力の限り叫ぶ。

「変身っ！！！」

直後、俺の身体は光に包まれ、光が止んだ場所には俺（織斑一夏）の姿は無い。

そこにいたのは大地を踏み締める機械仕掛けの異形。
立ちはだかる者と同じく白亜に輝く装甲は全身を包み込み、頭部を覆う漆黒のバイザーの奥で、真紅の瞳が灯を燈す。

反撃が、始まる。

第3話「変身っ！！！」（後書き）

次回、スーパーヒーロータイム（笑）

第４話「白式　ＶＳ　白式」（前書き）

編集途中で操作ミスって文章全消しとか……泣くかと思った

第４話「白式　ＶＳ　白式」

「なっ……」

なんだコレは、と。

その動揺はある意味当然のもので、少なくとも、目の前の襲撃者にとって俺の姿が異様である事は確かだった。

まず、外見からして既存のＩＳと違う。

たいていのＩＳが頭と胴体が軽装で手足が巨大化しているのに対し、こちらは全身を包む黒いボディースーツの上から更に全身を満遍なくアーマーが包んでおり、どちらかと言えば特撮ヒーローのソレに近い。

フルメイル自体珍しくはあるが、お国柄肌を晒す事を禁じられている国もあるので全く無いワケではない。

だが、それを差し置いてもこの機体は既存のＩＳと比べて異彩を放っている。

多分、襲撃者が一番違和感を感じている原因はこの脚部の構造だろう。

既存のＩＳなら大きさに機種差があったとしても、一様におおよそ歩く事を前提にしていない様なデザインをしている。

勿論どのＩＳも歩行は可能であるが、妙にヒールが高かったり、機体が大きいくせに接地面積が操縦者の足のサイズとたいして変わらなかったり、脚部そのものがスラスターになっていたりと、どれにしたってとても『しっかりと大地を踏み締める』様には見えないデザインをしている。

更に言えば、大きさも全然違う。

脚部のみに限らず、俺のこの機体は他のＩＳと比べて随分スリムに出来ていて、見れば見るほどＩＳというよりは、やはり特撮ヒーローのソレに近いものがある。
また、既存のＩＳなら脚部だけでなく全てが生身の人間と比べて大型になっている為、必然的に視点が高くなるのだが、こちらはデザインがデザインである。
特に視点の高さの変化を感じる様な事も無い。

そしてなにより、件の襲撃者も含めて、この機体を見た人間は勘違いするだろうが、この機体がＩＳに似ているのではない。

ＩＳが、この機体に似ているのだ。

「なんだソレは…。いや、貴様、何をした？」

疑問には答えず、嘲笑で応えた。
マスクごしで相手には解らないだろうが、口元が緩むのが自分でも解る。
恐らくあの襲撃者は…いや、あの襲撃者の纏っているＩＳがこの機体を上手く認識出来ていないのだろう。
ＩＳの様でＩＳでは無い、まだＩＳになる前のこの機体を。
せいぜいサーチした結果、この機体がＩＳの類似品か何かと出たぐらいでこちらの事など何も解っちゃいないのだ。
いや、そもそも後発という意味ではＩＳこそこの機体の類似品というべきか。
それを相手はこちらがジャミングを掛けたせいで上手く情報が得られないのだと勘違いしていらしいが、一々訂正してやる必要も無いだろう。

逆に、こちらからは相手の情報が手に取る様に解る。
この機体は、《打鉄》や《ラファール》の様な量産品でも無く、更には一般にいう専用機の様に一次移行（ファースト・シフト）を経てそうなったものでもない。
完全に、最初から俺専用に束さんが作ったものなのだから。
ハイパーセンサーにしたってそうだ。
さっきまで使っていた《ラファール》の様に残弾数を始めとする様々な数値を一挙にディスプレイに表示するなんて事はしない。
俺の思考を読んで、欲しい情報だけを解りやすく教えてくれる。
完全に俺専用に作られただけあって説明も俺が理解しやすい説明の仕方をしてくれる。
お陰でさっきまで使っていた《ラファール》と違って、サーチした結果を理解するのにタイムラグが殆ど無い。
襲撃者の纏うＩＳが本来俺の専用機になるはずだった《白式》という機体である事まで教えてくれるなんて、索敵機もびっくりの情報収集能力だ。

「…まぁ、いい。その機体を調べるのは貴様を回収した後でじっくりやればいいさ」
「やれるもんならやってみやがれぇぇぇぇぇぇっ！！！」

跳躍と同時に近接武装を検索、とりあえずリストの一番上にある武装を選択してその名を叫ぶ。

「ライダァァァァッ、パァァァァンチ！！！」

宣言と同時に拳がエネルギーに包まれて真っ赤に輝き、その拳を相手に叩き込んだ。

「ぐぅぅっ」

衝撃と共に吹き飛ぶ相手から目を反らす事なく、俺は次の武装を検索する。

・ライダーパンチ
・ライダーチョップ
　・大切断
・ライダーキック
　・ドリルキック
　・反転キック
・真空地獄車
・エレクトロファイヤー
・超電ウルトラサイクロン
・カセットアーム
　・マシンガンアーム
　・パワーアーム
・十字手裏剣
・電磁ナイフ
・リボルケイン
・ボルティックシューター
・マシンスライダー（バイク）
　・ライダーブレイク

～中略～

・ジャンボフォーメーション

結構沢山……って、えぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！？
ちょっ、ジャンボフォーメーションって、えっ、えぇぇぇぇぇぇっ！？
マジか！？
巨大化まですんのコレ！？
束さんなにやってんの！？

お、落ち着け俺。
こういう時は素数を数えるんだ。
1、2、3、4、…ってダメじゃん。
と、取り敢えず目の前の事に集中しよう。

「喰らいやがれぇぇっ！大っ、切断！！！」

掛け声と共に腕を振り上げた瞬間、前腕部分の装甲が展開し三枚の刃が現れ、そして…

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「くっ…、なぁぁぁっ！？」

防ぐ刀ごと、切り裂いた。
信じられない…と、襲撃者の表情が強張る。
目元はバイザーで隠れているものの、その口元は確かに驚愕に開かれていた。

当然だろう。
予めどこまで向こうが情報を掴んでいたかは知らないが、盗んだ後

なら《白式》を纏う以上その刀が…《雪片》が唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《零落白夜》を使用する事を前提に作られた事を知っているハズだ。

だからこその驚愕。

こちらは襲撃者が現れた瞬間からハイパーセンサーごしに向こうの情報をリークされているので知ってはいるが、向こうはこちらの情報が一切掴めていない。

大方、何故俺のＩＳも《零落白夜》が使えるのかと思っているのだろう。

真相（こたえ）は至ってシンプル。

俺の纏うこの機体も、襲撃者の纏うあのＩＳも、《白式》なのだから。

《白式・影打》に出来る事が、《白式・真打》に出来ないハズがない。

全く違うＩＳ同士が同じ唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を発現させたのならともかく、同じ《白式》である以上、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）も同じである事は寧ろ必然ですらある。

更に言えば、どこぞのメーカーが《暮桜》を再現しようとして作った劣化コピーと、束さんが一から作った上に、家に来る度にヴァージョンアップを受けてきた機体では性能差なんて考えるまでもない。

それに、この機体に限らずＩＳというものはそもそも束さんが作っ

たものなのだ。
その束さんにかかれば《白式・影打》の様に《零落白夜》の使用にワザワザ《雪片》を使用する必要はない。
さっきの大切断にしてもそうだし、最初に使ったライダーパンチにすら《零落白夜》の恩恵を受ける事が出来る。
つまり、この《白式・真打》の前ではシールドバリアーなど無意味、上手くやれば全ての武装が必殺になりうる機体なのだ。

「くっ…そ、何なんだ！お前は！」

全ての武装を失い、襲撃者は後退る。
元々、《白式・影打》は《暮桜》のコピー機であり、こちらの《白式・真打》から送られてきた情報によると元来は《暮桜》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《零落白夜》をイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器として再現しようとした機体らしい。
が、見事に失敗。
その後の改造の結果、特殊兵器としてではなく唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）として《零落白夜》を発現するに至る。
…と、ここまでが《白式・真打》が得た情報なんだが、多分《零落白夜》が発現したのは束さんの仕業だろう。
劣化コピーしか作れなかったメーカーが後で《零落白夜》を再現出来る様になったと言われるより束さんの仕業と言われた方が納得出来てしまう辺りが束さんらしい。

そういえば目の前の襲撃者が纏っている《白式・影打》は改造後の機体なんだから《零落白夜》は使用出来たハズである。
使う前に俺が《雪片》をぶった切ったせいで使えなかったのか、他に何らかの事情で使えなかったのか……前者はともかく、後者は…

いや、後者も束さんの仕業な気がしてきたんだが…。
……何か、考えたら怖くなってきた。

「…」
「…」

俺がこうして長々と考え事をしていられるのも襲撃者の武装が、もう一つも無いからであり…というか元々《白式・影打》自体、《雪片》…正確には《雪片・弐型》の一振りしか武装が無かった上に恐らく他のＩＳから拝借したのであろう射撃武器もオルコット嬢の最後の一撃で破壊されてしまっているのだ。
更にいえば、《白式・真打》という想定外（イレギュラー）の存在のせいで様子見をせざるを得なかった上に、現在はその性能差の前に圧倒されて武装を全て失っている。
襲撃者としては撤退したいのも山々だが、余りの性能差に撤退しようにも逃げ切る自信も無く、結果として睨み合いになってしまっているのだ。

…ゴクリ、と、喉を鳴らしたのは果たしてどちらだったのか。
俺も襲撃者も、構えたまま動かない。
緊張で時間の感覚が狂って来たのか、一分経ったのか一時間経ったのか、まだ一秒しか過ぎていないのか、全く解らない。
今まで感じた事の無い、異様なまでの緊張感。
どうして、そんなものを感じるのか。
何故、俺は丸腰の襲撃者の何を警戒している？

相手の様子がおかしいからか？
…いや、そうは見えない。
そうは見えないのに、何か引っ掛かっている様な感覚が俺を苛む。
機体は、何も答えない。
だが、俺の本能は確かに警鈴を鳴らしていた。

気の狂いそうな緊張感に耐え兼ねて…いや、その緊張感から逃げる様に、俺は再び襲撃者に飛び掛かった。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
「！！」

叫び声を上げながら迫る俺に襲撃者は身構える。
助走である程度勢い着いたところで跳躍し、跳躍とともにその名を叫んだ。

「ライダァァァァァァァッキィィィィィックッ！！！」

猛スピードで落下する突き出した右足はライダーパンチを放った時以上に赤く発光し、視界を染め上げた。

「うおおおおおおおおおおっ！！！」
「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

ライダーキックが炸裂し、襲撃者は断末魔の様な叫び声を上げて吹

き飛び、アリーナのシールドバリアーに激突してそのまま落下。
落下と同時に《白式・影打》は大爆発を起こして炎に包まれた。

「…フフフ。ホント、お前には驚かされるよ。織斑一夏」
「なっ」
「…うそ」

聞こえるハズの無い声が、確かに聞こえた。
炎の中から滲み出る様に、襲撃者は再び俺の前に立ちはだかる。
それはまるで、襲撃者が顕れた時の焼き直しの様で、……一つだけ、違うところが有るとするならば。
その身に纏うＩＳが、炎の様に真っ赤であるというところだろう。

「さて、これで私とお前は一勝一敗。ここで決着をつけるとしよう」

戦いは終わらない。

第４話「白式　ＶＳ　白式」（後書き）

ドラゴンボール方式で引っ張ります（笑）

次回、決着

第5話「決着」（前書き）

すんません、かなり投稿が遅れました

第5話「決着」

クソッ、嫌な予感の正体ってコレかよ！

…始めから可笑しいとは思ってたんだ。

どうして《雪片弐型》しか武装が無いハズの《白式・影打》が射撃武器なんて携行していた？

そんなの、他のＩＳの武装を持って来たからに決まってるじゃないか。

いや、なんで俺はそれに気付いていたのに襲撃者が自前のＩＳを持っていた可能性を考えなかったんだ？　この間抜けめ！

ＩＳ学園に襲撃しに来たヤツがＩＳに対抗出来る武器を…ＩＳを持ってないハズ無いじゃないか！

束さんだって言ってたじゃないか、「ＩＳを打倒できるのはＩＳだけ」だって。

それなのに俺は…、束さんの…ＩＳ開発者の傍にいたハズなのに、どうしてその事に思い至らなかったんだ！？

畜生…、何が「皆を巻き込みたくない」だ。

舌の根も渇かない内に何をやってるんだ俺は！

「此処（ＩＳ学園）がどういう所かホントに解っているのか」だと？

一番解って無かったのはお前だろうが！

畜生、畜生、畜生ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！

「ッオォォォォォォォォォッ！！」

あまりの不甲斐なさに怒りが込み上げ、気付けば目の前の襲撃者に飛び掛かっていた。
それはまるで、怒りのはけ口を求めるかの様で、酷く不様で、非道い、八つ当たりだった。

「ふん、そう何度も同じ手は喰わんよ」

だから、この結果は当然の事で。

「がぁぁぁっ!?」
「オリムラさん!?」

跳躍中に撃ち抜かれ、不様に転がり落ちる。
仰向けに倒れた俺の視界にオルコット嬢の顔が映った。
不安や心配、その他諸々の感情が入り混じったその表情は今にも泣きそうで…。

ホント、何をやってるのだろう?
いつもいつも、千冬姉に守られてばかりで。
もの心つく頃にはいつも自分を守ってくれた千冬姉に憧れて。
いつか、自分も千冬姉の様に誰かを守れる様になりたいと願って。
その為に今まで頑張って来たのに。誰にも、あんな表情をさせたく無かったから、力を求めたのに。

…冷静になれよ織斑一夏。
後悔?
反省?
そんなもの後で幾らでも出来るだろう!
今はただ、目の前の敵を…いや、俺の後にいるオルコット嬢を守る事だけに集中しろ!

千冬姉みたいに誰かを守れる人になりたかったんだろう？
なら、今守らずしていつ守るっていうんだ！

「ぐ…、お…ぉ」

立ち上がり、襲撃者を睨み付ける。
さっきので右肩の装甲が砕け散ったみたいだが、そんな事はどうだっていい。
ハイパーセンサーを感度最大で起動。
今はとにかく情報が欲しい。
…《白式・真打》なら、束さんが俺の為に用意してくれたこの機体のハイパーセンサーなら、《白式・影打》の時の様に何か敵の情報が……、弱点の一つや二つぐらい簡単に掴めるハズだ。
…っと、来た。

『敵機、名称不明。
武装、初期装備（プリセット）として両腕部にワイヤーカッターの存在を確認。
ただし射程距離は不明。
射撃兵装は後付武装（イコライザ）として現在右腕に保持したグレネードランチャーのみ。
その他、近・中・遠、全距離（オールレンジ）での初期装備（プリセット）及び後付武装（イコライザ）の存在は確認出来ません。
拡張領域（バスロット）内にも武装の存在は確認出来ません。
武装内容から、敵（エネミー）はワイヤーカッターの使用によりこちらの行動を封じた上での必殺必中を狙っているものと想定。

戦術プラン、先手にて、《ボルティックシューター》による敵機ワイヤーカッター発射基部の破壊を推奨』

…よし、これだけ解れば十分だ。
今度はこちらから仕掛けさせてもらう！

「《ボルティックシューター》！！」

呼出し（コール）を認識した直後に腿部の装甲が展開、展開と同時にその姿を曝したボルティックシューターは即座にサブアームによって俺の右腕に手渡され、ハイパーセンサーとのリンクを開始し瞬時に標的（ターゲット）をロックする。
僅か０．０１秒の間にこれらの動作を終え、《白式・真打》は装着者に次の動作を促した。

「ハードショット！！」

俺自身に銃器を扱った経験が無くても、標準から射撃後の反動まで全てカバーしてくれるこの《白式・真打》なら必中は必然であり、寧ろ外す方が困難ですらある。
トリガーを引く瞬間に機体の方から動作補正が入り、放たれた光弾は狙い通りに敵のワイヤーカッターを撃ち抜いた。

「チッ」

襲撃者は忌ま忌ましげにこちらを見ながら後退り、尚且つこちらに近付かれない様に直ぐさまグレネード弾で応戦する。
だがそのグレネード弾も《ボルティックシューター》の光弾に破壊された。
言うまでもなく、これは俺の実力じゃない。

野球ボールをバットで打ち返すならともかく、飛んでくるグレネード弾を狙撃するなんて芸当は俺には無理だ。
じゃあ何故出来ないハズの事が出来たのか？
偶然当たっただけ？
それとも狙撃の才能が開花した？
そんなワケ無い。
偶然の方は万が一有ったとして、マンガじゃあるまいし、このタイミングで都合良く才能が開花するなんて有り得ない。
全てはこの機体の…いや、この機体を作ってくれた束さんのお陰か。
ホント、こういう面では束さんには世話になりっぱなしだな、俺は。

…さて、せっかくこんなにイイモノを貰ったんだ。
初陣ぐらい白星で飾らなきゃ嘘だろ？
だから…。

「このまま一気にっ……って何っ！？」

…身体が、動かな、い？
何で……って、そんな！？　ワイヤーカッターはさっき破壊したハズだろ！？

「くっ…、何で…」

「…『何で』はこっちの台詞なんだがね。どうやってお前が隠し武器の存在を察知したのかは知らんが、……残念だったな。確かにお前の狙い通り、ワイヤーカッターは両腕に仕込まれていたよ。だがな、数が違うんだ、数が。両腕に一基ずつ、じゃない。ワイヤーカッターは二機ずつ仕込まれていたのさ！」

…二機ずつ、だと？
いや、そもそもワイヤーカッター自体が両腕から延びていないじゃ

ないか。
一体どうなって…。

「何、たいした事じゃない。《白式》の爆発と同時に子機を射出していただけの事だ。予定としてはお前が壊した方のワイヤーカッターに気を取られている隙に本命の子機の方で絡め取るつもりだったんだがな。先に両腕のワイヤーカッターを破壊された時は焦ったぞ？……まぁ、結局お前は予定通り両腕の方に気を取られた隙に本命に捕まったワケなんだがな」

クソッ、そういう事かよ。
始めから狙いはあくまで俺の捕獲で、《白式・影打》の方はオマケだったって事か？
…いや、元々あっちとしては俺が《白式・真打》なんて持ってたのは想定外だったんだから、本来は俺と《白式・影打》の両方だったワケだから……もしかして、ここで《白式・真打》を使ったのは薮蛇だったか？
いや、でもここで使っていなかったら確実に連れて行かれてただろうし…。
とにかく、今はこの状態を打開する方法を考えないと…。
子機の方は《エレクトロファイヤー》でワイヤー伝いに高圧電流で破壊できるとしても、下手に放電なんかしたら後のオルコット嬢まで感電死しかねないし……。
飛び道具…は、両手足を固定されてる今じゃ使えるものがないな。
大切断も装甲が展開出来ないんじゃ無理か。

…やっぱりどうにかしてオルコット嬢を逃がす方が先か。
《ブルー・ティアーズ》が機能停止している以上、下手に逃がして流れ弾でも当たったらマズいし、救援が来るまで守り切ればいいかと思ったんだが……なんで救援が来ないんだ？

というか、急な事で気付かなかったんだけど普通コレって教師の仕事じゃね？
…おいおい、まさか他の場所も同時に攻められてるんじゃないだろうな？
だとしたら下手に別の場所に逃がすのもマズか？

…どうする？
このままここで守り切るべきか？
それともどこかへ逃がすべきなのか？
守り切るにしても俺自身が身動き取れないんじゃどうにもならない。
逃がすにしても伏兵に人質される可能性も……チィッ、ならっ！

「来いっ、《マシンスライダー》！」

呼出し（コール）と同時に俺の後ろに白い大型バイクが現れる。
《マシンスライダー》とは仮面ライダーでいうところの専用バイクの様な位置付けの支援機で、《白式・真打》の装着時の姿とセットで俺の小さい頃の願いの具現でもあった。
最初からあったという意味では初期装備（プリセット）だが、大きさが大きさである為オルコット嬢の《ブルー・ティアーズ》の様に本体に接続したままというワケにもいかず、他の後付武装（イコライザ）同様、拡張領域（バスロット）送りになっていた武装である。

「乗れ！」
「え！？…で、でも私バイクなんて乗った事「いいから！乗れば自動操縦で動いてくれる！とりあえずソレに乗って離れてくれ！」はっ、はい！…でもオリムラさんは…」

「俺の事はいいから。それに、そこにいられると大技に巻き込み兼ねない！」
「わ、解りましたわ！…そ、その、…ご武運を」
「…あぁ、すぐ戻る」

オルコット嬢がバイクに跨がったのを確認して《マシンスライダー》を走らせた。
一応、それほど遠くには行かない様にしてあるので何かあったらすぐ駆け付けられ……というか、さっきは自動操縦なんて言ったけど、ホントは思考操縦の間違いである。
そう言っとけばオルコット嬢も乗ってくれるだろうと思ったから出任せで言ってしまったが、バイクなんか乗った事無い俺じゃあそんな複雑な操縦は無理なのだ。

さて、程よく離れたな。
そんじゃ、いっちょっやりますか。

「《エレクトロファイヤー》！！」

呼出し（コール）直後に両腕から紫電がほとばしり、発せられた高圧電流が目論み通りワイヤーを伝ってワイヤーカッターの発進基部を破壊した。

「おいおい、さっきから何なんだお前のＩＳは？見た目といい武装といい、バイクまで出しやがって。…いつから篠ノ之博士は仮面ライダーまで作る様になったんだ？」
「羨ましいか？貸さんぞ」
「そうかい、そりゃあ残念だなぁっ！」

そう言って乱射してきたグレネード弾を必死にかわす。

格闘に関しては多少の心得はあるつもりだが、グレネード弾……というか、飛んでくる爆弾をかわすのはかなり難しい。
弾自体をかわしても爆風を喰らう場合があるからだ。
しかも今回は乱射された複数のグレネード弾の爆風まで計算に入れなければならないのだ。
撃たれる前に射線から外れる様に動けばいいだけのレーザーの方が楽かもしれない。

「ぐぅ…、がぁ！」

く…、弾切れまで持たないぞ、コレ。

「面白い事を教えてやろう。私のＩＳの唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）はな、爆薬を無限に生成する能力なんだ。だから弾切れなんて狙っても無駄なんだよ、織斑一夏。いい加減諦めろ」

おいおい、そんなのありかよ！？
クソッ、どうする？
ダメージ覚悟で特攻するか？
いや、これ以上喰らい過ぎればいくらなんでも持たない。
《ボルティックシューター》でグレネード弾ごと本体を撃ち抜くか？……って、もうそこまでするエネルギーが無いか。

こうなったら、一か八か、アレの貫通力に賭けるしか無い！

「うおぉぉぉぉぉぉっ！！」

「ハッ、言ったろ？同じ手は喰わないって！……って何ぃっ！？」

多分、これが最後の一撃になるだろう。
これを外せば何もかもが無駄になる。
今までずっと守ってくれた千冬姉の思いも、
束さんが俺の為に用意してくれた機体（コイツ）も、
そして、俺自身の意地も。
そんなの絶対に許せない。
他の誰かが許してくれたとしても、俺は俺自身が許せない。

だから、文字通り、貫き通す！

「ドリルキィィィィィィィックッ！！！」

迫り来る何発ものグレネード弾を全て貫き、それでも勢いは衰えない。
寧ろ、爆風を利用して更に加速して行くその様はまるで赤い竜巻の様で、竜巻と化した俺は全てを巻き込んで貫いた。

襲撃者のＩＳは大爆発を起こして砕け散った。
始まりが焼き直しなら終わりまで焼き直しとは、またなんとも。
流石に、三度目の正直は勘弁してもらいたいな。
なんて思っていたら、段々視界が狭くなって、あぁ、そういえば意識も…。

今回の襲撃事件に関してはこの辺りまでしか俺には記憶は無かった。
多分あの後疲労で倒れたんだと思う。
割とすぐ目が覚めたんだが、倒れたと同時に変身は解除されていたみたいで…いや、それよりアリーナで寝そべってるのはともかく、何で俺、オルコット嬢にひざ枕されてるの？

第5話「決着」（後書き）

次回は事後の話です。
あ、事後といってもエロい意味じゃないですよ？

第6話「いろいろあって…」（前書き）

予告通り、その後どうなったかの話です

第6話「いろいろあって…」

後になって聞いた話なんだが、襲撃直後からハッキングを受けていたらしく、会場内のシールドバリヤーが最高レベルで展開されていたせいで本来こういう事態に対応すべき教師の方々がアリーナに入って来れなかったらしい。
シールドの方も結局解決したのは襲撃者が去った後で……あぁ、そういえばあの時はそんな事気にしてなかったんだけど、アレだけやったら死んでるんじゃないかって心配になったんだが、まぁ、千冬姉曰く「あの程度の爆発で死体が残っていなかったのなら、恐らく逃げたんだろうよ」との事。
とりあえず俺は殺人犯にならずにすんだらしい。
で、シールドの方はというと襲撃が終わってからもそのままで、結局解除された一時間ぐらい後の事だった。
まぁ、俺としてはセシリアのひざ枕の…太腿の感触を十分に堪能出来たので大満足だったワケなんだが。
何で俺がオルコット嬢の事を名前の方のセシリアで呼んでいるのかというと、俺が気を失ってから目を覚ました後に

「ん…」
「目が覚めましたか?」
「あぁ…、ん?コレ、どういう状態なんだ?」
「オリムラさんはどこまで覚えていらっしゃいますの?」

あ～、確かあの赤いのを倒して、それで…、それからどうなったんだっけか？

「え～、あ～二回目？だっけか。取り敢えずアイツを倒したところまでは覚えてるんだが…」

「では倒れる直前までの事は覚えていらっしゃいますのね。えぇ、オリムラさんが気を失って今でだいたい３０分程経過しています。幸い、《ブルー・ティアーズ》のハイパーセンサーは生きていましたので一応警戒は続けていますが…」

「今のところは特に問題無し、と」

「えぇ」

成る程、３０分も気絶してたワケか。

「ならまぁ…大丈夫かなっ……っと」

「あっ」

起き上がろうとして、結局起き上がれなかった。

アレ？力が入らないんですけど？

何故？

「…オリムラさんのＩＳがどれほどの物だったのかは私には判断出来ませんが、アレだけの戦闘の後です、肉体的にも精神的にも限界なのではなくて？」

「…悪ぃ、そうっぽいわ」

セシリア自身にひざ枕されてる俺を見る目は穏やかで、もうあの時の様な泣き顔は何処にも無い。

それだけで…良かった、と思えた。

随分みっともない戦いだったけど、それでも、守れたのだから。

「…っとそうだ。オルコット嬢は無事か？何処か怪我とかは「セシリア」…？」
「私の名前です。今度からそう呼んで下さいな」
「分かった。そういうことなら俺も一夏で」
「えぇ、一夏さん」

何で突然名前で呼ぶ許しが出たのかは解らないが、その微笑みを見ていると理由なんてどうでもよくなって来た。
それに、さっきセシリアに言われた通り、疲れているんだろう。
頭がまだボ～っとして、まるで身体が考え事をするのを拒否しているみたいだ。

「…教師の方々が救援に来られるのももう少し先になると思いますから、それまでお休みなさいな」
「あぁ、悪いな、セシリア」

こうして、俺はまた眠りに着いた。
やっぱりというか、思いの外貯まっていた疲労のせいですぐに眠りに着く事になる。

「おやすみなさい、一夏さん。……それと――――

セシリアが何か言っていた様な気もするが、最後まで聞き取れなかった。

といったやり取りがあって、それから俺はオルコット嬢の事をセシリアと呼んでいる。

「おい…、聞いているのか?織斑一夏」

強圧的な声で現実に引き戻される。

目の前には全てを萎縮させる様な怒気を発する織斑先生こと千冬姉。

いつの間にスタンドが使えるようになったのか、その後ろに阿修羅が見えるのは多分、幻覚だと信じたい。

それに、そんなに睨まれたら俺だって上手く喋れない…というか、回りにいらっしゃる先生方も可哀相なぐらいガタガタ奮えて…まるで生まれたての小鹿の様だ。

「お…織斑先生、もう少し穏便に…ヒィッ」

ギンッ、と千冬姉に睨まれ、悲鳴を上げる山田先生。

あ、今ので千冬姉と山田先生以外のこの場にいた先生方が全滅した。

俺も先生方みたいに気絶出来れば楽になれたんだが…というか山田先生、いつもビクビクしてる割に案外タフなんですね。

…さて、そろそろお気づきかもしれないが、現在『千冬お姉さんの楽しい尋問（お説教）タイム　ｉｎ職員室』の真っ最中。

冒頭一ページ半に渡る回送シーン諸々は、実はいつもの現実逃避だったってワケだ。

「え…、え～と、《白式・真打》の事ですよね?」

「そうだ。…というか、届くハズだった機体が影打で貴様が所持していた方が真打だと?それ以前に私を含め学園側は貴様がＩＳを所持していたなどという申告は受けていないぞ。貴様、いつアレを入

手した？」

円滑に話を進める為だろうか、さっきよりは幾分か千冬姉の態度が軟化したみたいだが、やっぱり怖いもんは怖い。

これ以上怒らせるて山田先生にまで気絶されると味方がいなくなるので、とりあえず知ってる範囲で話す事にした。

「え～と、確か十年前だったかな。誕生日プレゼントに束さんに作ってもらったんだけど」

「十年前の……アレは確か立体映像を被せるだけのものじゃなかったのか？」

「さぁ？その辺はなんとも…」

ホントは束さんが家に来る度に改造されたからあぁなったんだけど、千冬姉と二人っきりじゃ無いから黙っとこう。

山田先生がスパイみたいな事をするだなんてこれっぽっちも思っちゃいないが、割と頻繁に篠ノ之博士が家に来るなんて知れ渡ったせいで家捜しなんかされたらヤダし。

「…まぁ、いい。他に知ってる事は？」

「あ～、コアナンバー０００を使用している事と、名称が《白式・真打》って事。これは戦った時にハイパーセンサーから送られて来た情報で初めて知って……あぁ千冬ｎ…じゃなかった、織斑先生の言う《白式》が《白式・影打》だっていう事もその時知りました」

「そうか。では何故それで戦えると思った？貴様の話では使うまであの機体の事など何も知らなかったのだろう？」

「それなんですが、気付いたら何故かポケットの中に入ってまして…。俺の記憶が正しければ、アレ、部屋の押し入れの中だったんで

すけど。しかも、《ラファール》で戦ってる時には無かったハズなのに、ですよ?それで、束さんが何かやったんじゃないかと…」
「なる程、録画映像の中の「こんな事もあろうかと」というのがそこに繋がるワケか」

コレも嘘。
実は最初からポケットの中に突っ込んでました。
束さん、何かあった時の為に肌身離さず持っとけって言ってたし。
というか、嘘ばっかだな、俺。
仕方がないとはいえ、あんまり千冬姉に嘘着くのは嫌なんだが…。

「あの~、どうして織斑君のポケットに《白式・真打》が入っていたのが篠ノ之博士の仕業だと思ったんですか?」

あ、そうか。
山田先生は束さんがどんな人か知らないんだっけ。

「山田先生、私は篠ノ之博士と幼なじみで、織斑も博士とは付き合いが長いのです。ですから、篠ノ之博士の人となりを知ってる私達の中では大概何か不可解な事があれば篠ノ之博士の仕業と相場が決まっているのですよ」
「そ、そうなんですか…」

そうなんですよ山田先生。
束さん、世界中のあらゆる法則無視するぐらいフリーダムだから。
多分、ホントに《白式・真打》を俺のポケットに転送するのも束さん的に三時のオヤツ前ぐらいでやってしまいますよ。

「さて、学園側…というか、国連側としても貴様からその機体を取り上げて調べ上げたいところなんだが……、篠ノ之博士の強い”

要望”でな、誰も貴様から《白式・真打》を取り上げる事が出来ん。だが、貴様の機体は子供が持つには些か強力過ぎる。だから有事の際以外は訓練も含めて《白式・真打》の使用は禁止とする」

要望って……ソレ、要求の間違いだよね？

束さん、今度は何したのさ？

「あの～、それはいいんですが。俺の機体はどうするんですか？確かデータが欲しいから専用機を用意するとか何とかで…」

元々、《白式・影打》もそういう名目で俺の機体になるハズだったんだし。

「それについてなんですが、織斑君には本来の予定通り、《白式・影打》の方を使用して貰う事になります。幸い、コアは無事だったので予備パーツですぐ元通りに組み直せますから」

「そういう事だ」

成る程、そうなるのか。

でも俺、ＩＳじゃない《白式・真打》の方で馴らしてるからなぁ…。

《ラファール》使ってて思ったけど、ＩＳ使うのって結構難しいっていうか、いや、《白式・真打》が使いやす過ぎるのか？

まぁ、使う機体もちゃんとしたＩＳになって、これで俺も、晴れてＩＳ学園の生徒ってとこかな。

第6話「いろいろあって…」（後書き）

今回から《白式・真打》の使用が禁止されてしまいましたが、ちゃんと”有事”の際は登場しますのでご安心を

第7話「…結局、そうなるのかよ」（前書き）

タイトルで何となく解るかもしれませんが、第６話との前後編っぽくなってます

そして、遂に箒嬢が満応じして登場！
もう空気だなんて言わせないっ！

第7話「…結局、そうなるのかよ」

「…はぁ……はぁ、はぁ…」

どうにも、上手く行かない。
刀を振る感覚がおかしい。
まるで自分の身体ではないかの様な違和感、ブランクがあるとはいえ、それなりに長い期間を修練に費やしたのにこのザマだ。
ホントに剣道をやっていたのか、自分でも疑わしい。

「はぁ……、はぁ…」
「どうした？お前の実力はこんなものじゃないだろう」

…そう、言われてもな。
感覚のズレが思いの外酷い。
頭で思い浮かべた、いや、身体に染み込ませたハズの感覚に、その身体が追い付かない。

「あの…篠ノ之さん？今日の一夏さん、具合が悪いのではなくて？」
「…いや、私も最初はそう思ったんだが。多分、ブランクの問題だろう」

…まぁ、箒のいう通り、ブランクの問題も有るんだろうけどな。
絶対ソレだけじゃないぞ、コレは。

「一夏、お前一年以上剣を握って無いだろう」

質問じゃなくて断定か。
流石は全国大会優勝するだけの事はあるな。

「…あぁ、元々ＩＳ学園じゃなくて藍越学園に行く予定だったからな、ずっと受験勉強だったし」
「そういえば前々から気になっていたのですが、一夏さんがＩＳを動かしたきっかけは何でしたの？一夏さん、元々ＩＳに関わりの無い生活を送っていたのでしょう？」
「そうだな、それについては私も気になっていた」

あ～、なんというかな、ＩＳを動かせるって事自体は前々から知ってたんだが…。
やっぱ、気になるよな。

「さっきも言ったけど、俺はＩＳ学園じゃなくて藍越学園を受験するつもりだったんだ。…というか、そもそも男じゃＩＳ動かせ無いからＩＳ学園なんて受験出来ないハズなんだがな。それでさ、普通に藍越学園を受験するつもりで試験会場に行ったんだが、行った先で迷ってな」
「迷った？」

今考えてもおかしいんだが、なんであんな迷路みたいな建物を試験会場にしたんだろう。

「あぁ、それでとりあえず会場にいた人に道を尋ねて、言われた場所に行ったら《打鉄》が置いてあってさ。んで、興味本位で触ってみたら動いた」
「「……」」

あぁ、沈黙が痛い。
えぇい、二人して「えぇ～」みたいな表情で俺を見るな！

「…何だ、そのマンガみたいな展開は」
「…ですわね」

言うな。
自分でも自覚あるんだから。

「それにしても…」
「何だよ？」
「ホントに襲撃犯と戦っていたのはお前なのか？織斑先生からはお前が倒したと聞いているが、とてもそうは見えんぞ」
「えぇ、確かに。私は一夏さんとアリーナに取り残されていたので一部始終を見ていましたが、確かに今の状態でしたらそうは見えませんわね」

確かにそう思うよな、これじゃあ。

なんというか、感覚が違うんだよね、《白式・真打》と《白式・影打》は。
例えるならママチャリとマウンテンバイク。
ママチャリ馴れしているところでマウンテンバイクに乗ったらサドルの高さの…いや、ハンドルが低さか？まぁ、座った感覚が妙に高くなって動かしにくいだろう？
あんな感じで高さとかにズレを感じるんだが…多分、俺だけなんだろうな、こんな風に感じるのは。
他のみんなは最初からあの機体（ママチャリ）じゃなくてＩＳ（マウンテンバイク）で馴らしてるんだし。

「何ていうかさ、高さが違うんだよ、高さが。お前だって厚底履いた状態でいつも通りの剣道なんか出来ないだろ？」
「ふむ…、そんなに違うものなのか？今使ってるＩＳと前に使っていたＩＳとでは」

そういえば箒は他の生徒と一緒に観客席から避難してて見てないんだっけ。

「確かにあの時一夏さんが使っていたＩＳと今使っているＩＳとでは随分見た目が違うというか……そもそもあのＩＳ、デザインの機種差以上に既存のＩＳと比べてどこか異質に感じましたわ」

やっぱＩＳ慣れしてるとそう思うよな。

俺としては逆にＩＳの方に違和感があるんだが…。

あと、セシリアも勘違いしてるみたいだけど、《白式・影打》はともかく、《白式・真打》はＩＳじゃないから。

まぁ、訂正はしないけど。

”今の”俺はあの機体について”殆ど何も知らない設定”なんだし。

「そうだよな～。アレ、昔誕生日プレゼントで束さんに貰った時にはただ単に立体映像被せるだけのおもちゃだったんだが……まぁ、束さんだしなぁ」

「全く、あの人は…」

「…し、篠ノ之博士って一体？」

束さんとの接点が無いセシリアはともかく、箒にとっては自分の姉だしなぁ。

珠にしか会わない俺からすれば面白い人なんだけど、四六時中アレだとキツイのかもしれん。

「《白式》…あぁ、真打の方な。アレだと、こう、生身の人間が頭で考えて、身体を動かすっていう作業を、頭で考えたら機体が身体ごと動かすっていうか…。ほら、鎧きてたらさ、身体が動いたら身体にくっついてる鎧ごと動くだろ？逆なんだよ《白式・真打》だと」

「逆？」
「…といいますと？」
説明下手だな、俺って。
まぁ、二人はあの機体を使った事が無いから余計に解りづらいのかもしれんが。
「あ～、なんて説明したらいいんだ？…え～と、なんていうか、《白式・真打》を装着してる間は俺にとって身体は肉体じゃなくて機体なんだ」
「…その、一夏さんの感覚では《白式・真打》を装着している間は脳からの命令で動くのが肉体ではなく機体の方ということですの？」
「そうそう、そんな感じ」
セシリアは今ので何となく理解してくれたみたいなんだが、それはそれで納得が行かないのか考え込んでしまった。
まぁ、そうだろう。
ＩＳはパワードスーツだ。
だから、頭からの指令で身体が動いて、それに機体が連動する。
それがセシリアをはじめとするＩＳ操縦者の感覚（常識）。
だが《白式・真打》は違う。
あの機体は装着者にとっては身体そのもの。
だから頭からの指令で機体（身体）が動く。
ＩＳは頭→身体→機体の三段階で動くが、あの機体は頭→機体（身体）の二段階で動けてしまうのだ。
その時点で絶対的に早さが違う。
それも、俺が初陣で勝てた理由の一つだ。

武装の威力もそうだが、操作性がまるで違う。
そうでなければ勝てなかっただろう。

「…というかさ、どうして俺がクラス代表なのさ」

そう、それなのだ。
ホントに襲撃事件が起きたんだから、あの流れだとセシリアがクラス代表だろ。
というか、普通クラス代表って代表候補生がいたら自動的にソイツになるんだろ？
だったら模擬戦する以前にセシリアで決まりじゃん。
納得がいかんわ！

「私もそのつもりだったのですが…」
「確か、中国から代表候補生が転校してくるんだったな」
「えぇ、なので普通は代表候補生がクラス代表を勤めるハズなのですが、代表候補生が二人となると…」

代表候補生の仕業か！？
…いや、代表候補生本人というよりお国の意思だよね、コレ。

「普通なら代表候補生が在籍しているクラスのクラス代表は代表候

補生が勤めるところなのですが、二人…というか二ヶ国以上の国の代表候補生が在籍しているとなるとそうもいきませんわ。ですから、角が立たない様に間を取った……というところでしょうね」
「それで『唯一ＩＳを動かせる男子』の一夏がクラス代表、か」
「あるいは、その『唯一ＩＳを動かせる男子』である一夏さんのデータが欲しいが為に我が国と中国が共謀した結果なのかもしれませんわね」

何ソレ、お国（大勢）の為ならクラス（小数）を危険に曝す事ぐらい何て事無いってか？
民主主義バンザイだな、オイ。
…いや、戦力を集中させてこの間の襲撃犯みたいなのに対する牽制にするつもりかなのか？
で、守ってやってるんだからデータぐらい寄越せ、と。
おいおい、それじゃあ他の国だって「俺も俺も」って寄ってくるじゃん。
天下の国連サマはうちのクラスを代表候補生の巣窟にでもするつもりかね？

「まぁ、なってしまったものは仕方ないだろう」
「そうですわね。こうなった以上は一夏さんにクラス代表に相応しい方になって頂かないと」

仕方ない、か。
全く、嫌になるねホント。

「では、休憩はここまでだ。まずは私ぐらい倒せる様になって貰わ

ないと、専用機持ちの名が泣くぞ？」

まぁ、せっかく美人二人を独占してるだし、せいぜい期待に応えてみせましょうかね。

『フラグ１、織斑一夏による両《白式》の所持、及び使用を確認』

第7話「…結局、そうなるのかよ」（後書き）

はい、本文中にあった通り、鈴音さんは原作と違って一夏と同じクラスになります
次回から登場するかどうかはまだ解りませんが

第8話「…わかりません」（前書き）

構成の都合上、第7話に一文追加しました。

また、活動報告の方でも触れていますが、ちょくちょく改訂しているので読み返してみると面白いかもしれません

第8話「…わかりません」

今日であの襲撃事件から一週間が経過した。
まぁ、前に俺が言った通りＩＳ学園が兵器を扱う場所だとはいえ、そう頻繁に事件が起こるワケでも無く、概ね平和だったと言ってもいい。
その一週間、俺がどのように過ごして来たかといえば…

「踏み込みが甘い！」
「ゲフッ」

箒に扱かれ、

「一夏さん、回避はもっと相手の動きをよく見て」
「んな事出来るかぁぁぁぁぁっ！！！」

セシリアには《ブルー・ティアーズ》で追い掛け回され、

「織斑、ここの答は？」
「…解りません」

バシンッ

「予習が足りん！」
「…すみません」

千冬姉には出席簿で殴られ、

と、まぁいつも通りの日々を……ってアレ？　俺、良いとこ無くね？

いやいやいやいや、俺だってちゃんとやってきたって！

箒との近接戦の訓練だって……いや、ＩＳを使用してるだけでやっぱり剣道だし、元々藍越学園を受験する気だった俺には一年以上のブランクがあるワケで、というより引っ越す前の俺と箒ならともかくブランク以前に全国大会優勝する様なヤツに勝てるか！

いくらＩＳで補正や強化されたとしてもそれは俺だけじゃなく箒も同じ事で、そうなるとやはり元の実力が勝敗を大きく分ける事になる。

本来、性能だけなら圧倒的に《打鉄》より《白式・影打》の方が上のハズだが、箒の動きは全くそれを感じさせる事が無い。

簡単にいえば、ＭＳ性能だけが戦力の決定差で無い事を教えられてる状態である。

ＭＳじゃなくてＩＳだけど。

セシリアとは箒の時より実戦的な模擬戦をやっているが、実力差をよりはっきりと思い知らされる。

なんとなく解ってはいたが、クラス代表決定戦では随分手加減されていたのだろう、全くといっていいほど近付く事も回避する事も出来やしない。

倍とまではいかずとも、今使っている《白式・影打》とあの時の《ラファール・リヴァイブ》ではスピードにかなりの差があるのに全弾被弾、５分以上持ったためしがない。

《白式・影打》を受領して初めての模擬戦で一次移行（ファースト・シフト）が成されたがそれが全くの無意味だったかの様にフルボッコにされてしまった。

実力もそうだが、知識面…つまり普通に教室でやる授業の方が重傷かも知れない。
元々藍越学園を受験する予定だった俺がＩＳについて勉強しているなんて事は当然無く、そもそもＩＳは女性にしか動かせないのたがら俺を含め男性は皆ＩＳとは無縁なのだ。
一応、束さんから《白式・真打》をもらった時とか珠に家に遊びに来た時なんかに話は聞いていたので他の男性よりは詳しいかもしれないが、こんな専門的な話は一切聞いてない。
多分、束さんも俺が細かい理論なんか理解出来ない事を解っていたのだろう、話の内容も子供同士がアニメの内容で少しマニアックな話をする様な感覚で、何々には実はこんな機能があるみたいな話ばかりだった。
それに、千冬姉が妙に俺がＩＳに関わるのを嫌がっている風だったので、俺もそこまで詳しく知ろうとは思わなかった。
全く興味がなかったワケでは無いが、束さんの話で満足出来ていたし、それに俺はあくまでＩＳ使いでは無いからだ。

だから、実力については実際にＩＳに触る機会を得るまで…つまり、ＩＳ学園に入学できるまで代表候補生以外の女子と変わらなかったとしても知識面である意味絶望的なまでの差が開いている。
期末や中間試験はまだ無いが、今の所ぶっちぎりで下から一番……
……はい、要するに最下位なワケで。
そもそも、仮に中二ぐらいから入試に向けて勉強していたとしてもその時点で二年近くスタートに差があるのだ。
更にいえばＩＳ学園なんて超の付く程の難関校に入学する為となるともっと前から勉強していたとしても何らおかしい事は無い。

だからこその絶望的なまでの知識差。
偶然ひょっこりやって来た様な人間と何年も前からその為に努力して来た人間の知識など、比べるまでも無い。
一応、山田先生に協力してもらって放課後に補習は受けているが……多分、在学中にこの差が埋まる事は無いだろう。
山田先生には悪いが、俺は元々物覚えが悪い。
身体を動かす方に関しては誘拐の事とかもあって必要に迫られたから剣道や体術は割とすんなり覚えられたが、それによって直感とか本能だとかそういった物が鍛えられてしまった弊害なのか、逆に理論的な……つまりは筆記とかに関しては散々なものになっていった。
あまり酷いと千冬姉に怒られるので必死に勉強したつもりだったが、それでもいつもテストの結果は赤点ギリギリで……だから、藍越学園入試に向けた勉強の日々は本っ当に苦労を通り越して苦痛の日々だった。

そんな俺が、藍越学園以上の難関校の授業に着いて行けるのかといわれれば断じて否、である。
授業中に当てられれば千冬姉の出席簿チョップを喰らうのはいつものオチで、小テストとなれば他のみんなのスラスラと問題を解いていくペンの音をＢＧＭにうんうんと唸り……ホント、藍越学園に行きたかったなぁ…。

実技は実技で何かとこのくらい専用機持ちなら当たり前だと言われるが、それについては異論がある。
専用機というのは代表候補生になりたい人が頑張った結果与えられるいわばご褒美みたいなもので、現在代表候補生でもなければ今後そうなる予定もつもりも無い俺としては押し売りで金を払わされる

感覚に近い。
…まぁ、それを言ったら恐ろしい事になるから言わないけど。

それでもまぁ、ＩＳを使う事自体は楽しい。
《白式・真打》とはまた違った万能感、特に飛べる、というのが良い。
《白式・真打》の方が《白式・影打》よりも武装が豊富でパワーやスピードも上なんだが一つだけ欠点がある。

《白式・真打》は跳べても、飛べないのだ。

束さんがあらゆる仮面ライダーを模倣する様に作った《白式・真打》だが、スカイライダーの様に飛ぶ事が出来ない。
最後にヴァージョンアップを受けたのは俺がＩＳ学園に入学する一月前で、確かその時と《リボルケイン（ボルティックシューター）》を追加して貰ったんだっけ。
まぁ、他にも俺がリクエストしなくても束さんが色々と追加していたみたいで、この間の襲撃事件の時に武装を確認した時は驚かされた。
ジャンボフォーメーションとか…ね。
《白式・真打》を使ったのはアレが初めてじゃ無かったけど、廃工場とかで束さんと稼動テストをしてたぐらいで、元々護身用に作ってもらったのに毎回千冬姉がすぐに駆け付けたり使う暇も無く捕まったりで結局事件当日まで日の目を見る事が無かったのだ。

つまり、《白式・真打》には実戦経験が無い。
多分、飛行が出来ないのもその辺りが大きいのではないだろうか。
俺や束さんの思い付きで武装やら機能やらを追加して来たが、実際に戦った事が有るのと無いのとでは何が必要とされるのかを理解出来るかに差が出る。
俺もそうだが、制作者の束さんも仮面ライダーの一種として作った

《白式・真打》が……いや仮面ライダーが飛ぶという事がイメージ出来なかったのかもしれない。
だからだろうか、同じ人間に作られた《白式・真打》とＩＳとでは絶対防御やシールドバリヤーといった防御機能や、初期装備（プリセット）や後付装備（イコライザ）といった武装等で共通点を持つのに《白式・真打》はＩＳの様に飛ぶ事が出来ないのだ。

…もしかすると、だが、束さんはワザと《白式・真打》を飛べない様に作ったのかもしれない。
地を駆ける《白式・真打》と天翔ける《白式・影打》、同じ《白式》と名付けられた二機が俺の手元にあるのには何か意味があるのだろうか？
千冬姉は《白式・影打》を《白式》というＩＳだと思っていた。
俺は《白式・真打》を《白式》だと思っていた。
両機が揃ったあの日まで、俺はあの機体を、千冬姉や学園側はあのＩＳを《白式》だと思っていた。
これは、どういう事なのだろうか？
真打、影打と名付けられた時点で両機に何らかの関係があるのは明らかだが、それが何なのか俺には解らない。
多分、千冬姉や学園側だってその事は気になってるだろうが、それがどういう意味を持つのかは解らないだろう。

…解らない、いくら考えても解答（こたえ）が思い浮かばない。

「あの～、織斑君？解らなかったら遠慮無く聞いて下さいね？…って、聞いてますか？織斑く～ん」

結局、答えは解らなかった。

第8話「…わかりません」（後書き）

はい、実は山田先生との補習中でした、というお話なのでした～（笑）

第9話「幻影」（前書き）

今日のお話は《白式・真打》　ＶＳ　《ブルー・ティアーズ》ですはたして、今回はどんな技（武装）が飛び出るのやら

第9話「幻影」

「あ〜ぁ、今日もダメだわ、こりゃ」

時刻はだいたい17：00ぐらい、俺は一人教室に残っていた。
ついさっきまで山田先生に補習に付き合ってもらっていたのだが、その山田先生も多分今は職員室に戻っている頃だろう。
IS学園に入学してから平日はほぼ毎日付き合ってもらっているワケだが、一向にクラスの皆との差が埋まる気配は無い。
まぁ、解ってはいたんだが…ね。

これぱかりは気にしたってしょうがない事だし、それに、今の俺は立場上落ち込んでいる暇すら与えられない。
平日は午前中から授業で、それが終われば山田先生との補習、そして最後は箒とセシリアにISを使用した模擬戦をしてもらって……と、いった具合にはっきり言って飯と寝る時以外自由時間らしい自由時間は殆ど無い。
教えを請う立場だから、というのもあるがお国の方がやたらと俺のデータを欲しがっているらしく、最初は自主的だった日課もいつの間にか半ば強制的なものになってしまった。
もう一人男性のIS操縦者が現れれば楽になる……というワケには当然なるハズが無く、ちょっと人数が増えたぐらいじゃ俺の労力が減るなんて事はまず無い。
一つの作業を分担するのではなく、皆同じ作業をするのがオチだろう。
というか、束さんがソレを由としない限り俺以外の男性のIS操縦者が現れる事など、まず有り得ないんだが。

「…っと、あまり待たせるのも悪いか」

今日の模擬戦はいつもとは違う。
普段なら訓練に《白式・影打》を使用するところを、今回は有事でも無いのにも関わらず《白式・真打》の使用許可が下りた。
というか、使用命令が下された。
対戦相手がセシリアである辺り、日英共に《白式・真打》の実戦データが欲しかったのだろう。

まぁ、当然といえば当然か。
束さんはコアだけなら４６７機分制作したが、自らＩＳという形になるまで制作した機体は《白騎士》と《暮桜》の二機しかなかった。
そこで第三の、更に新たなコアを搭載した機体の登場したのである。
国がどうこう以前にＩＳに関わる者なら気にならない方がどうかしている。
ホントはコアもコアナンバー０００と最新ではなく寧ろ最古のもので、機体も新型ではなく旧型の改造機な上にＩＳではないのだが、どの道関係の無い事だ。

アリーナに着くと、既にセシリアが《ブルー・ティアーズ》を纏い待ち構えていた。
国の関係者が来ているせいだろうか、その表情はいつもと違い緊張で強張っている。
それだけでは無い。
その表情はどこか後ろめたそうで……多分、束さんの作った機体の

データを取る為に友人を利用する事が気にかかっているのだろう。

そう思ってくれるだけで十分。

セシリアにはセシリアの、俺には俺の立場がある。

だからこそ、この状況に憤りを感じても、その怒りの矛先をセシリアに向ける事は無い。

それは、セシリアだって、きっとそう。

……だから、お互い、やれる事をやるだけだ。

「…セシリア、”気にするな”。”解ってるから”」

「！！……一夏さん。…そうですね、お互い、全力を尽くしましょう」

「あぁ、行くぞ！！……変身！！！」

言葉を交わし、駆（翔）ける。

俺の身体は光と共に一瞬で白亜の騎士に変わり、セシリアは《スターライトｍｋ？》を構えながら《ブルー・ティアーズ》を四機射出した。

増設していないのであれば、ビームを発射するタイプのものは全部展開した事になる。

ソレに合わせてこちらも武装を…と、ここでふと思い留まった。

あの襲撃事件で襲撃者にライダーパンチやライダーキック等を喰らわせたワケだが、その威力が…いや、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《零落白夜》の特性が厄介である事実を実感した。

あの時ハイパーセンサーから武装についての説明は受けたが、百聞は一見に如かずというか、あの時は精神的にそれどころじゃない程

追い詰められてたからロクに考えもしなかったが、後々考えると自分がどれだけ危険な事をしていたのかが解る。
バリヤーを無効化するその特性の前では相手がＩＳを装着しているかいないかなど全く関係無い、仮に相手のＩＳにまだエネルギーが残っていても例外無くライダーパンチで殴り殺せてしまう。
これは《白式・影打》にも言える事で、同じ唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を持つ以上、《雪片弐型》の斬撃で相手を斬り殺す事も当然可能なワケだ。
言い訳というか、俺が《白式・影打》で負け越しているのも初心者のクセにそれを気にしているからでもある。
初心者が慣れない機体で手加減しようなどと…そんな戦意の無い状態で勝てるハズが無いのだから。

だからこそ、迷う。
当然の事ながら俺にセシリアを殺す意思は無い。
だが、そうなると唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）に頼らない戦い方を強いられるワケで、使える武装も限られてくる。
更にいえば俺が近接戦闘を得意としている上に近接戦闘用の武装の殆どが《零落白夜》の使用を前提としているのだ。
つまり、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）に頼らない戦い方をする以上、不得手な銃撃戦を強いられる事になる。
《ボルティックシューター》以外にも射撃武器は有るには有るが、《カセットアーム》の《マシンガンアーム》は威力が心許ないし…
……ライダーマン、よくこんなのでデストロンの怪人と渡り合えたな。

他には…あぁ、コレは……威力は折り紙付きだけど、直撃は無理っぽいし……まぁいい、目くらましにでもなればいいさ。

「《ギガント》！」
「！！　ミサイル！？」

呼び出し（コール）に応え、四連装のミサイルランチャーが肩の上にのし掛かる。
機体の補助があるとはいえそれなりに重い、だが、その重さに怯んでいる暇なんて無い。
撃たれる前に撃つ！

「喰らいやがれっ」
「くっ…、《ブルー・ティアーズ》！」

放たれたミサイルはセシリアを捕らえる事無く《ブルー・ティアーズ》のビームによって迎撃されてしまう。
だが、それでいい。
拡張領域（バスロット）からミサイルを補充して発射、それをセシリアが迎撃する。
その繰り返し。
何度も繰り返されたその応酬に先に根を上げるたのはセシリアの方だった。
それでも、ミサイルがセシリアを捕らえる事は無い。
何故なら、次から次へと放たれたミサイルは前に発射されたミサイルの爆発に巻き込まれて誘爆を引き起こしているからだ。

「くっ、これでは埒が開きませんわ！「あぁ、そうだな」…なっ！？」

突如としてセシリアの後に現れたもう一人の俺は、バイザーに驚愕の表情を浮かべたセシリアの顔を写して《ボルティックシューター》を構えていた。

「なっ…」
「分身、だと…」
「そんなっ…、レーダーに《白式・真打》が二機表示されています！」
「なっ、どういう事だ！？」
管制室で見ていた千冬達も、セシリアと同様に驚愕の表情を浮かべる。
それは学園側だけではなく、日英両国から来た要人も同じだった。
「何かの間違いでは無いのか？」
「い、いえ、確かにレーダーには《白式・真打》が二機表示されています！」
「そんな馬鹿な！」
先程までのミサイルとビームの応酬の際は、「所詮男がＩＳを動かせても、それだけか」と退屈そうに模擬戦を眺めていた光景が嘘の様に喧騒に包まれている。
そして、彼らは再び思い知らされた。
たった一人の天才が、世界中の技術者達を凌駕するその事実を。
立体映像の様な虚像等では無い、自分達では到底不可能な、実体を

持つ分身を作る機体の存在を以って。

「そんな…、どうやって…!?」

後に回ったのか、と問おうとしてセシリアの顔が再び驚愕に引き攣る。

《ブルー・ティアーズ》のハイパーセンサーもまた、管制室のレーダー同様、《白式・真打》が二機存在すると示しているのだから。

驚愕の余りセシリアの動きが止まってしまった隙をもう一人の俺は当然見逃すハズも無く、《ボルティックシューター》の放つ光弾が四機の《ブルー・ティアーズ》を撃ち落とした。

「な、何がどうなっていますの!?」

「分身して、」

「挟撃しただけさ」

「…分、身?」

分身した俺達が交互に話し掛けるが、それはセシリアの混乱をより酷くするだけだった。

分身、それは仮面ライダーＺＸの立体映像に始まり、その後もあらゆるライダーが見せて来た技の一つ。

ライダー毎にトリックベント、ジェミニ、イリュージョンと名を変え、今は仮面ライダーオーズがガタキリバコンボで５０体に分身して見せた。
今俺は二体に分身しているから、ある意味ジェミニといったところか。
残念ながら小夜子なんて知り合いはいないのでバーニングザヨコはやりません……って、誰に向かって言ってるんだ？　俺。

「それよりさ、よそ見なんかしてていいの？」
「何を言って……！！！」

もう一人の俺がセシリアに語り掛けるが、セシリアはまだ混乱から抜け切っていないのか、一瞬ほうけた顔をしてもう一人の俺を見て気付いたが、もう遅い。
そう、話し掛けたのは”もう一人の俺”なのだ。
最初からいた方の俺はずっと《ギガント》を担いだままセシリアの前…いや、今セシリアはもう一人の俺の方を向いているのだから後か、…とにかく模擬戦開始時から動いていない。
《ブルー・ティアーズ》による迎撃が出来なくなったセシリアに、放たれたミサイルを迎撃し切る事は不可能であり、もはや詰んだと言ってもいい。

「くっ…いくらミサイルにストックが有っても、発射装置そのものを破壊すれば！」
「させると思うか？」
「なっ」

ミサイルを撃たせないという意味ではセシリアの判断は正しかったが、それも一対一の場合の話。
俺の《ギガント》を狙撃しようと構えた《スターライトｍｋ？》を、

もう一人の俺が《ボルティックシューター》で狙撃した。
更に、追い撃ちと言わんばかりに腰に装着してあったミサイル型の《ブルー・ティアーズ》も破壊し、無力化させる。
これでセシリアには攻撃手段が無くなった。
それでも、セシリアは諦めない。

「まだ終わったワケではありませんわ！たかが二機がかりぐらいで、このセシリア・オルコットを敗れると思ったら大間違いでしてよ！」

窮地に立たされ、それでもなおそう言い放ったセシリアの姿は美しく、気高かった。
近接ナイフ《インターセプター》を構えたその様はまるで本物の騎士の様で…。

それでも、セシリアに勝ち目等は無い。
何故なら…、

「そうか…、なら、これでどうだ！」

分身は、二体までとは限らないのだから。
セシリアの表情が今度こそ絶望に染まる。
無理も無い。
何故なら、今の俺は５０人なのだから。
アリーナを埋め尽くす程の俺達が、一斉に《ギガント》を構える。
放たれた２００発ものミサイルは、《ブルー・ティアーズ》のシールドエネルギーを０にするには、十分過ぎる数だった。

「あ～、その、なんていうか、スマンな」
「いいえ、一夏さんが気にする必要はありませんわ」
「でも、ホラ、お国の人とかが…」
「えぇ、大丈夫でしてよ。流石に本国の代表もアレはどうにもできませんから。ですから、今回の件でお咎めはありませんでしたわ」
「そっか、なら良かった」

あの模擬戦終了後、俺と箒とセシリアとの三人で、談話室で小さなお茶会を開いていた。
三人とも風呂は済ませた後なので、寝間着姿なのだが、箒もセシリアもどこか気合いの入った寝間着を着用していた。
こういうものでも格好を気にする辺り、二人とも年頃の女の子というか、ジャージ姿の俺とはえらい違いである。

「それにしても…５０体に分身するだなんて、ガタキリバか何かか、お前は」
「ガタキリバ？なんですの？ソレは」
「ん？…あぁ、何と言うか、まぁ、仮面ライダーの一種だ」
「仮面ライダー？……ああ、日本の特撮番組の」

イギリス人でイギリス育ちのセシリアが仮面ライダーに疎いのは仕方ないとして、流石はファースト幼なじみというか、箒は今日のアレの元ネタに心当たりがあったらしい。

「《白式真打》はさ、束さんが誕生日に…といってもまぁ、十年前なんだが、誕生日プレゼントで作ってくれたものなんだよ」
「まぁ、篠ノ之博士が」
「全く…あの人の事だ、大方、嬉々としてなんでもかんでもライダーの武装や能力を注ぎ込んだんだろうな」
「まぁ、俺も色々とリクエストしたしなぁ」

「お前もか…」

あぁそういえば、箒はディケイド否定派だっけか。
確かフォームチェンジならまだしも他の仮面ライダーになるだなんてとかなんとかで。

「篠ノ之さんも仮面ライダーに詳しいんですの？」
「まぁ…その、一夏の幼なじみだからな！小さい頃は二人でよく見ていた」
「まぁ、そうでしたの。ところで篠ノ之さん、興味本位で聞きますが、篠ノ之さんなら一夏さんとどう戦いますか？その、同じ機体を使ったとして」
「同じ機体で、か。そうだな、一夏の《白式・真打》が仮に本当に全ての仮面ライダーの武装や能力を使えるとして、か？」
「ええ」

少し思案して、箒は幾つか答えた。

「そうだな、まず同じ分身能力をつかって５０対５０になるのはどうだろう」
「なるほど、同数になる事によって相手の数的有利を無効化するのですね」
「あぁ、さらに他の分身能力を併用して逆にこちらが数的有利に…と、それは相手も同じか」
「ですわね」

おいおい、トリックベント×ジェミニ×イリュージョン×ガタキリバって、一体何体に分身するつもりだよ。

「そうだ、スチールベントならどうだ?」
「アレは…トリックベントで分身したのならまだしも、他の能力に適応されるのか?…いや、仮に適応されたとしても、アレは後出しの能力だろう?なら、スチールベントを使われたらスチールベント仕返せば無効になるんじゃないか?」
「あの…スチールベントというのは?」
「あぁ…そうだな、例えばセシリアが《ブルー・ティアーズ》を全部使って攻撃して来たとするだろ?そこで俺がスチールベントを使うとセシリアは《ブルー・ティアーズ》を封じられて更に俺がセシリアに対して《ブルー・ティアーズ》を使えるっていうヤツなんだ」
「なるほど、相手の武装の使用権を奪うのですね」
「まぁ、そんな感じ」

ふむ、いい手だと思ったんだが、確かに後出しの能力じゃあ箒の言う通り後出しで対応すればいいワケか。

「じゃあ、時間操作系の能力なんかどうだ?」
「時間操作系、ですか?」
「あぁ、なるほど。確かにそれなら先に使ってしまえば相手はどうしようもないな」
「具体的にどんな能力ですの?それは」
「そうだな、時間操作系の能力は大きく分けて二種類ある」
「タイムスカラベみたいに相手の時間を止める能力とか、タイムベントやハイパークロックアップみたいに自分以外の時間を巻き戻す能力とかだな」
「は、反則ではありませんの?ソレは…」

確かに、反則臭いよな。
使われたら最後とか無理ゲー過ぎる。

「いやいや、流石に束さんでも時間操作は無理だろ」
「そ、そうだな。いくらあの人でもそこまで非常識じゃないと思うぞ」
「でも、もしかしたら…」
「な、なんだよ」
「篠ノ之博士が若くしてＩＳを開発できたのも、それらの能力を併用しているからなのではないかと…」

え…、つまりタイムスカラベで対象（自分）の時間を止めて置いて、さらにハイパークロックアップで対象（世界）の時間を巻き戻していると？
いやいや、タイムスカラベってそこまで都合のいい能力じゃないし…でも束さんなら……いや、流石に束さんでもそこまでは……いや、でもあの束さんだぞ？

「「「……」」」

箒もセシリアも考えたら恐くなってきたのか、少し顔が青い。
鏡を見てないから解らないが、多分俺もだ。

「今日はもう、寝よう」
「そっ、そうだな。疲れている時に考え事をするのはよくないからな」
「そそそ、そ～ですわね」

こうして、今日のお茶会はお開きとなった。

第９話「幻影」（後書き）

流石にミサイル２００発は可哀相過ぎたか（笑）

第１０話「パンダの尻尾は白色です」（前書き）

すんません、風邪で寝込んでいたので少し更新間隔が開きました。
まだ完治したワケではありませんが、せっかく感想数が増えて来てるのにほったらかしにするのもアレなので、ティッシュ片手に鼻垂れながらの第１０話アップです。

以上、イクリプス（病み上がり必死隊）でした

第１０話「パンダの尻尾は白色です」

模擬戦から二日後の今日は朝から中国から転校して来る代表候補生の話題で持ち切りだった。
まぁ、無理も無い。
そういう決まりがあるワケではないが、普通、代表候補生は一クラスに一人いればいい方で、更にいえばその代表候補生がクラス代表を勤めるハズなのだから。
でも、うちのクラスは違った。
代表候補生を差し置いて俺の様な代表候補生でも何でもないどころかド素人がクラス代表に就任した上に更にクラスメイトにもう一人代表候補生が追加されるのだから。

「なぁ、セシリア。今日転校してくるヤツって誰か解るか？」
「いえ、流石にどなたがいらっしゃるかは…」
「だよな…」

中国から、か。
まさかな。
アイツも国に帰ったきりだけど、流石にそこまで都合のいい展開にはならんだろう。
それはそうと、前々から気になっていたんだが…、

「…あのさ、話変わるんだけど、このクラス、他のクラスと比べて人数少なくないか？」
「そういえば…」
「そうですわね」
「もしかして、この調子でどんどん代表候補生が転校して来る為に

ワザと席を空けてるんじゃ…」
「…否定出来ませんわね」

多分、思い当たる節があるのだろう、セシリアが苦笑いしながら答えた。
いや、俺なんていう希少動物（唯一ＩＳを動かせる男）を合法的に観察出来るのだからある意味当然といえば当然か。
イギリスが偶然希少動物を観察する権利を得たところで他の国が群がって来た、というよりは単にイギリスの準備が早かったからセシリアが最初からクラスにいただけで、他の国も準備が整い次第順次、といったところだろう。
転校して来る度に代表候補生に模擬戦を挑まれて～みたいな展開がありありと目に浮かぶ。
あ〝ぁ～面倒臭っ。

「ＨＲを始める。席に着け」

おっと、もうこんな時間か。
千冬姉の雷が落ちる前に席に戻るとしよう。

「んじゃ、二人ともまた後で」
「え、ええ」
「う、うむ」

他のクラスメイト同様、三人ともそそくさと席に戻った。
入学当初はお姉様ぁ～なんて言ってた生徒も、今では大人しいもんだ。
これも調きょ…もとい、訓練の成果だろう。
全員が席に着いたのを見計らって、千冬姉が口を開いた。

「諸君らも知っての通り、今日から中国の代表候補生がこのクラスに転入する。入れ」

ゴクリ、と、クラスの皆が息を飲むのが解る。
話題の代表候補生がどんなヤツなのか気になっているのだろう。
かくいう俺もそうだ。
イギリス人のセシリアが日本語ペラペラなんだし、流石に「○○アルよ」みたいな喋り方はしないと思うがどんなヤツなのかすっげー気になる。
…あ、そういえばＩＳの資料って日本語が殆どだからＩＳに関わっているなら外国人でも日本語ペラペラなのは当たり前なんだっけ？

「中国の代表候補生、凰鈴音よ」

中国から来た転校生は、そう名乗った。
そうかそうか凰さんっていうのか……って、えぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！？
ちょっ、おま、なんでいんの！？

「り、鈴！？　お、お前なんでここにいるんだよ！本場の中華料理を極めるって国に帰ったんじゃなかったのかよ！！？」
「あ、ああアンタこそなんでここにいんのよ！国であんたがテレビに出ててびっくりしたじゃない！っていうか何よコレ！アンタ、ここは俺のハーレムだ～なんて思ってるんじゃないでしょうね！？」
「んなワケあるか！お前男一人がどれだけ肩身が狭いか解ってんのか！？」
「知らないわよ！そんなの！」

「何を…！」
「何よ！」

バシンッ　バシンッ

「やめんか！貴様ら！」
「うぅ…」
「す、みません…」

痛っつうぅ～！
クソッ、どうなってんだよ！
中国の代表候補生が鈴だなんて聞いてないぞ！

「一夏、分かってるわね？」
「あぁ、後でな」

とりあえず、千冬姉のＨＲが終わるのを待とう。
流石に連続で出席簿チョップ（大切断）を喰らいたくはない。

『一夏さん、勿論私達にも説明して頂けるのでしょうね』

突然後からセシリアの声がしたので振り返……って、コレ、プライベートチャンネルってヤツか？
振り返った先にはセシリアと箒が妙に不穏な空気を醸し出していて……急に顔が青くなった。
はて？
何か忘れているような……？

『い、いいい一夏さん、う、後……』

後？
と、前に向き直ると、ＩＳ学園教師から阿修羅に二次移行（セカンド・シフト）した千冬姉がいた。
もはや怒気を通り越して殺気を放つ千冬姉に俺の回りの連中はバタバタと気絶していき……あぁ、幸か不幸か、千冬姉やそれ以外の殺気に慣らされて来た俺では気絶して楽になるなんて事は出来なくて、これから始まるであろう真の恐怖にただただ震えるしかなかったのだ。

「織斑ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

意識がブラックアウトする直前、自分の席でガタガタ震える鈴の姿が目に映る。
そういえばアイツ、昔から千冬姉が苦手だったっけ……。

まぁそんな事もあって昼休みを迎え、俺と箒とセシリアといういつものメンバーに鈴を加えた四人でテーブルを囲んで飯を食う事になった。
あの後、一応すぐに意識を取り戻したハズなのに午前中の授業内容は全く頭に入っていない。

というか、今朝千冬姉にぶっ叩かれた頭がまだ痛む。
タンコブの一つぐらい出来てるかも……と頭を触るとやたら自己主張の激しい丸みが一つ。
あぁ、やっぱりか。

「……で、一夏。そろそろこの女が誰なのか説明して貰おうか」
「そうですわね。…えぇ、時間はまだまだたっぷりありますから」

…何故だろう、二人とも普通に話かけてきてるのに、箒には刀を突き付けられている様な、セシリアには《ブルー・ティアーズ》で囲まれて更に《スターライトｍｋ？》の銃口にこちらの頭をロックオンされている様なヴィジョンが目に浮かぶ。
…幻覚、なんだよな？
首筋にチクリと当たっている刀も、席の回りを飛び回る《ブルー・ティアーズ》も、全部幻だよな？

とりあえず、黙ったままだと幻視（ヒュプノス）が現死（タナトス）に換えりそうなので、素直に薄情する事にしよう。
決して暴力に屈したワケでは無い。
頬を伝う涙も、きっと幻だ。

「あぁ、その、なんというか、鈴とは幼なじみでな」
「「幼なじみ！？」」

ガタッと、箒とセシリアが身を乗り出した。
俺、そんなに驚く様な事言っただろうか？
ってか、二人とも顔が近いってば。

「いや、箒は小四の頃に引越しただろ?で、鈴は小五からの幼なじみでな、まぁ中二ぐらいの時に国に帰った切りだったんだが…。あぁ、鈴。前に話ただろ?こいつが俺のファースト幼なじみの箒だよ」
「へぇ…、この子が。これからよろしくね」
「あぁ、こちらこそ」

殺気…じゃなかった、さっきから二人の威圧感に呑まれてしどろもどろになっている俺とは違って、鈴はどっしりと構えて箒を見据えている。
流石は中国人、これが中国四千年の重みというヤツか。

「「一夏、お前(アンタ)またくだらない事考えてるだろう(でしょう)?」」

異口同音、というワケではないが、ハモる様に二人が同時に喋る。
どうしてだか解らんが、昔からどうもこの二人には思考を読まれ安い。

「ふ、どうやら本当に一夏の幼なじみの様だな」
「アンタこそ……。で、そこの金髪は?もしかしてアンタも幼なじみ……ってワケじゃないか。流石に中二過ぎじゃ幼なじみって言わないわね」

今か今かと待っていたのだろう、話しを振られたセシリアが待ってましたと言わんばかりに立ち上がる。

「私はイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ!」
「へぇ…、アンタも」
「えぇ」

代表候補生同士、何か思う事でもあるのだろうか、不敵に笑い、相手を見据える二人。
その様子は正に龍虎相打つと言ったところか。
正に一触即発といった雰囲気だったが、急に鈴がこちらに視線を向け、

「そういえばさっきから気になってたんだけど、箒って子はまぁともかく、なんでイギリスの代表候補生まで一緒なワケ？アンタやっぱりハーレムでも作るつもりだったの？」

などと口走った。

「なっ…」
「ははははハーレムって貴女！」

鈴の発言に箒とセシリアが赤面する。
……そうだった、昔っからコイツはいらん事をほいほい口走るヤツだった。
そのせいで、俺が何度コイツのフォローに走り回った事か……。

「んなワケ無ぇだろ」
「またまた～、嘘言っちゃって。アレでしょ？友達１００人出来るかなみたいな感じで愛人１００人出来るかなってヤツ？」
「ちょっ、おま、何言ってんだよ！」
「え～、でも一夏ってば昔からモテてたじゃん」
「モテて無ぇよ！」

確かに俺の回りに女の子が寄ってくる事が多かったけど、誰も千冬姉の…ブリュンヒルデの弟だっていうフィルターごしにしか俺を見ていなかったのであって、決して俺がモテていたワケでは無い。

「なんだ、やはりそうだったのか」
「え？じゃあやっぱり一夏って昔っからモテモテだったんだ」
「そ、それは興味深いお話ですわね」

やれやれ、やっぱ女の子って皆こういう話が好きなんだねぇ…としみじみ思う。
いつの間にか話題が恋バナにシフトし、四人いるのに一人淋しくうどんを啜るハメになってしまったが、まぁ、三人仲良くやってくれてるならいいだろう。

こうして、昼休みが過ぎてい…

「そういえばさ、一夏。アンタのＩＳの戦闘映像みたんだけど、アンタＩＳ動かせるってだけでも十分非常識なのに、その上一人でＩＳニ機も持ってるってなんなのよ？」

…くのだった。
と、終わらせようとしたところで、また鈴がこちらに話題を振ってきた。
いや、なんなのよって言われてもねぇ…。
どう答えろと？

「それにさ、《白式・真打》だっけ？アレ、まんま仮面ライダーじゃん。何？次の新番組は『仮面ライダー一夏』なワケ？アンタ幾つよ？」
「あのなぁ…」

幾つって…まぁ、やっぱりアレ、傍目に年甲斐も無く仮面ライダーごっこしてる様に見えるんだろうけど。

「言っとくが、アレ、束さんに…あぁ、篠ノ之博士の事な？　篠ノ之博士に十年前の誕生日にプレゼントされたものだぞ」

「え…十年前のって、『白騎士事件』より前？じゃあ、《白騎士》じゃなくて《白式・真打》がＩＳの一号機だったって事！？」

妙に興奮した様子で鈴がまくし立てる。

勘違いなんだが…まぁ、あんなのが『白騎士事件』より前からあったって言われたら誰でもそう思うか。

見れば、箒もセシリアも凄く気になってるみたいな表情になってるし、視線が続きを促して…というか、催促している様に見える。

「前に箒達にも説明したんだけど、アレ、元々はスイッチ押したら立体映像被せて変身した様に見えるだけの玩具だったんだぞ？」

「え？そうなの？」

「十年前は、な。なのにさ、ホラ、鈴も聞いてるだろ？　この間の襲撃事件。あの時に急にポケットの中に転送されて来てさ。で、《ラファール》も壊れてたし、試しに使ってみたらそうなってたんだ」

真っ赤な嘘。

玩具だったアレが本物になっていくのも見ていたのだから、試しも何も《白式・真打》が戦闘用だった事だって知っていたし、そもそも始めからポケットに突っ込んでた。

また嘘ばかり、か。

どうして俺がＩＳを使えるのかについてもそうだが、秘密にしなければいけない事が多過ぎる。

束さんの本当の目的を知ればこそ、なんだが、どうもな…。

「篠ノ之博士が、ねぇ…」

そんな風に俺が思い耽っていたところでふと鈴が呟く。
快活な鈴にしては珍しく、どこか遠い目をしていた。
落ち込んでる、ってワケではなさそうだが、何かあったのだろうか？

「どうしたんだよ？」
「その、なんていうか……まぁ、機密じゃないからいっか。半年ぐらい前にさ、篠ノ之博士がうちの国に来てたのよ」
「「束さん（あの人）が？」」
「中国に、ですか？」

引きこもり界の女王を自称する束さんが外出とは珍しい。
…いや、ちょくちょく家に来るからそうでも無いのか？
でもなんで海外なんかに……ってか束さん、普段どこに住んでるんだ？

「あ、あの人がまた何か問題を引き起こしたのか！？」
「えっ、いやその本人は何もしていないっていうか……あぁ、でも不法入国もまぁ、問題なんだけどね。問題はそこじゃなくてさ」
「じゃあ何が問題だったんだよ」

不法入国が問題にならないって……いや、束さんだしなぁ。

「ホラ、篠ノ之博士ってさ、世界中から追われてるじゃん？だから

さ、うちの国で目撃情報があったから私も出撃したんだけど…」
「まさか、返り討ちにされましたの？」
「返り討ちっていうか……まぁ、とにかく私を含めて五人ぐらいで篠ノ之博士を包囲してさ、身柄を拘束しようとしたんだけど」
セシリアの問い掛けにも鈴は曖昧に答えた。
さっきから何が言いたいんだ？　鈴は。
「まぁ、目撃現場に出撃して、私を含めて五人で包囲して身柄を確保しようとしたんだけど…」
「けど？」
「うん、一応その、博士の方からこちらに来るように呼びかけてはみたんだけどさ」
「あの人が他人の話など聞くワケが無いだろう」
「うん、私もそれは聞いてたんだけどね。で、投降に応じないからって仲間の一人が武力行使にでたんだけど…」
普通その流れだと返り討ちっぽいんだが、そうじゃないのか？
「まぁ、ある意味返り討ちなんだけどさ。…急に動かなくなったのよ。ＩＳが」
「どういう事ですの？」
「よく解らないんだけど、威嚇射撃の為に篠ノ之博士に向かってライフル構えたらさ、急にロックオン出来なくなって」
「ジャミングでもかけたのか？あの人は」
「うん、仲間もそう思って目視で狙いを付けて発砲しようとしたんだけどさ、そしたら今度はトリガー引いても弾が出なくて」

あぁ、なるほど。
ということはアレが発動したワケか。

「で、しょうがないから直接捕まえようとして手を延ばしたんだけど、今度は触れる直前で手が動かなくなってさ」
「どういう事ですの？」
「解んないのよ、それが。しょうがないから私や他の仲間が取り押さえようとしたんだけどやっぱり動かなくなって。で、最終的に歩兵の人が発砲したんだけどシールドバリアーに阻まれてね」
「じゃあＩＳが動かなくなったのも、あの人のＩＳの能力か何かなのか？」
「それが……博士、ＩＳを展開して無いどころか所持すらしてなかったのよ」

箒とセシリアは鈴の言葉にますます混乱しているみたいだが、まぁ、当然だろう。
シールドバリアーなんか張ったら誰だって普通ＩＳの所持を疑うハズだ。
でも、《白式・真打》がそうである様に、束さんの手に掛かればＩＳという形にしなくてもＩＳと同様の機能を持った物ぐらい簡単に作れてしまうんだが……、まぁ、これも黙っておいた方がいいだろう。

「その間篠ノ之博士はどうしてましたの？」
「どうもこうも、最初っからニコニコ笑ってこっちの様子を見てただけよ」

束さんらしいというかなんというか……。
多分、ＩＳが機能停止したのは製作者権限が働いたからだろう。
確かアレ、操縦者権限より優先度が高くて……というか、アレが最

上位だったか。
とにかく製作者権限に該当する行為……今回の場合の様に「ＩＳは製作者（篠ノ乃束）に危害を加えてはならない」とか、そういったルールに反する様な事が出来ない様にコアに仕掛けがしてあるんだっけ。

「…で、結局そのまま逃げられちゃったってワケ」

やってらんないわよ、と鈴がため息混じりに言った。
それはそうと、最初っから気になってたんだが……。

「…で、結局束さんは何しに来たのさ？」
「……本場のパンダが見たかったそうよ」

……束さん。

第１０話「パンダの尻尾は白色です」（後書き）

記念すべき第１０話で鈴が登場したのに内容がだべるだけとか……

それはそうと、登場して無いのにこの存在感、それが束さんクオリティ！

第１１話「せめて、あの頃の様に」（前書き）

原作との乖離がより顕著になって来たのですが、ソレに伴い原作サイドの設定ミスやら映写不足やらがより目立つ様になって来ました……

うぅむ、精進せねば…

第11話「せめて、あの頃の様に」

とある人は言ったそうな。

『時間のいいところを教えてあげよう。必ず過ぎ去って行くというところだ』

まぁ、この一時にも確かに終わりは来るんだろう。
だが……、その人はこうも言った。

『時間の悪いところを教えてあげよう。必ず訪れるというところだ』

確かに、と思う。
やっぱり、というか放課後早速鈴との模擬戦が開始される事になった。
しかも、中国…からではなく、日本政府から分身の使用を禁止された上での模擬戦だ。
理由は簡単。
一方的過ぎて勝負にならない……というか、データを取る暇も無く終わってしまうからだそうだ。
日本だけではなく、世界中がこの間の分身を始めとして《白式・真打》のデータを欲しているのは知っている。
だが、《白式・真打》のプロテクトは異様なまでに強硬で、本体からデータを吸い出そうにも俺以外が触れようとすれば束さんが仕込んだ自動防護機能が作動してしまうのだ。
具体例を上げるなら、襲撃事件後に知らずに触れようとした政府関係者が待機状態の《白式・真打》から放たれた電撃を喰らって病院送りとなった事もあった。

それ以降も何度かアプローチを掛けたものの見事に惨敗。
そりゃそうだ。
束さんが《白式・真打》に仕掛けたプロテクトにはある条件がある。
その条件を満たしていないのなら、例え千冬姉ですら《白式・真打》に触れる事は出来ない。
……まぁ、散々束さん本人やその発明に振り回されてきた千冬姉の事だから、例えプロテクトに引っ掛からなかったとしても自分から触ろうとはしないだろう。

では直接データを吸い出せ無いならどうするか、と考えた結果がこの通達らしい。
《ボルティックシューター》の様に光弾や光線を発射するだけならセシリアの《ブルー・ティアーズ》でも出来るし、《ギガント》の様なミサイルも大きさはともあれ有り触れた武装だ。
《大切断》を始めとする近接戦闘用の武装や技も、《零落白夜》のデータ自体はメーカーが《暮桜》のコピー機として《白式・影打》を製作しようと思える程度には揃っている。

だが、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）として発現したのならともかく、この間の分身の様に実体の分身を生成するなんて技術はどこにも無い。
しかもデータが直接取れるワケでもないのに使ったら使ったで複数体《白式・真打》が存在する事以外何も計測出来なかった。
だから、とりあえず他に何かあるならそっちから調べてみようという事らしい。
多分、この調子でネタ切れ起こすまで　模擬戦→新技→新技使用禁止で次の模擬戦　のループを繰り返すつもりなのだろう。
手札を曝すのはまぁ……あまり気が進まないが、それよりも新技が出る度に解析不能なんて結果が出たら研究者の精神が持たないんじゃなかろうか？

「準備はいいかしら？　あぁ、別に逃げたかったら逃げてもいいのよ？」
「言ってろ。お前の方こそ途中で泣いたりなんかするなよ？」

戦意は十分。
お互い睨み合うが二人の視線に邪気は無く、どちらかといえばあの頃の様な……鈴が国に帰る前の様なあの空気に近い。
確かに鈴は女の子だが、まだお互い幼かった事もあり、どちらかといえば男友達の様な付き合いだった。
チャンバラもやったがフットワークの軽い鈴のスピードに翻弄されて負ける事もしばしばで、箒とはまた違った強さを発揮してたっけ。

だから、これはあの頃の続き。
獲物は丸めた新聞紙から機体に換わり、二人ともあの頃と比べ俺はより男らしく、鈴はより女らしく体格が変わった。
それでも二人は変わらない。
日本で誘拐犯に狙われ続けた俺も、国に帰って代表候補生になっていた鈴も、変わらなかった。
だから、回りの思惑がどうであれ、二人にとってこの模擬戦はあの頃の続きでしかなかったのだ。

開始のブザーがアリーナに鳴り響くと同時に俺達は叫ぶ。

「来なさい、《甲龍》！」
「変身！！！」

二人の身体が光に包まれ一瞬でそのシルエットが変貌する。
俺は《白式・真打》を、鈴は《甲龍》をその身に纏い構えた。
構えと同時にハイパーセンサーを起動し、《甲龍》のデータを収集させる。
セシリアの《ブルー・ティアーズ》はクラス代表の件や襲撃事件の時に見ていたのでだいたい解っていたが、鈴のＩＳを見たのはこれが初めてだからだ。
というか、鈴が来たのは今朝なのだからそれも当たり前ちゃっ当たり前か。

『敵機、名称《甲龍》
武装、初期武装（プリセット）に衝撃砲《龍咆》、後付武装（イコライザ）に両刃青龍刀《双天牙月》…』

衝撃砲？

『衝撃砲。空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出すもので、砲弾だけではなく、砲身すら目視不可能。また、砲身の稼動限界角度はありません』

何ソレ、撃たれるまで解らないって事かよ？

『肯定。ただし、制御装置自体は目視可能。両肩付近に浮遊しているものがそれに当たります』

なら、まずソイツを破壊する！

「《ボルティッ…「遅いっ」　がぁ！？」

《ボルティックシューター》を呼び出し（コール）しようとした瞬間、右の太腿に激痛が走った。

クソッ、これが衝撃砲ってヤツかよ……ホントにいつ撃たれたのか解んなかったぞ、おい！

しかも、さっきので格納スペースごと《ボルティックシューター》が破壊されちまった。

……まずい、威力自体はセシリアの《スターライトｍｋ？》ほどじゃないが全く見えないんじゃ対応のしようが無ぇ。

「確かに、単純に攻撃力とかスピードで比べたら《白式・真打》はどのＩＳよりも高性能よ。…でも、一つだけ決定的な弱点があるわ」

「…弱点？」

……弱点、だと？

そんな馬鹿な事があるか！

束さんが作ってくれたこの機体のどこに弱点なんかがあるって言うんだ！？

「《ボルティックシューター》をはじめ《白式・真打》の武装展開速度はほんの一瞬。でも、ソレを呼び出し（コール）する時のアン

タの発音はそうでもないわ。……つまり、アンタが何か喋るのを邪魔してやれば《白式・真打》は一切の武装が使えない！」

「なっ…」

…確かに、鈴の言う通り《白式・真打》は音声認識で武装を呼び出し（コール）する必要がある。

音声認識を必要としないものなんてセシリアとの模擬戦で使用した分身ぐらいかもしれない。

「ほらほら、さっきまでの威勢はどうたのよ！」

「グッ……がぁぁ！」

鳩尾に衝撃砲を喰らって吹っ飛び、更にアリーナの壁にぶち当たる。

妙に飛ぶな、と思ったが見た目通り《白式・真打》は他のＩＳと比べてかなり軽い。

だからといって防御力が低いというワケではないのだが、腹と背中に走る激痛はどうしたものか。

しかもそれだけでは鈴の猛攻は止まらず、呻く暇も与え無いと言わんばかりに《双天牙月》を振り下ろす。

大きいとは思っていたが、近くで見るとその大きさが更に際立ち、迫る刃は断頭台（ギロチン）を思わせるほど凶悪だった。

「もらったぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

「くぅっ」

間一髪で白刃取りが決まるが《双天牙月》程の大質量を受け止めた衝撃は洒落にならない程の威力を発揮し、両腕が悲鳴を上げた。

直撃を受けたワケでもないのにも関わらずこれほどの威力を発揮するのだ、ホントに喰らったらと思うとゾッとする。

「へぇ…、よく受け止めたわね。でも、無駄よ！」

何故？　と聞くまでもなく、衝撃と共に答が帰ってきた。

いや、衝撃こそが答だった。

再び衝撃砲の餌食となって吹き飛ばされ、地面に転がる。

……まずい、このままだと負ける。

いや、負けるのはともかく、一撃も与えられないまま終わるなんて納得出来るか！

でもどうすればいい？

今のままじゃ鈴の言った通り武装は全部使う前に封じられてしまう。

《零落白夜》ならあるいは……いや、ダメだ！　下手に使えば鈴を殺してしまう。

クソッ…、威力が高過ぎるのも考えものか…。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

「来ないの？…なら続けるわよ！」

「ぐっ」

さっきの衝撃砲で脳震盪を起こしかけてふらつく俺に《双天牙月》のフルスイングをぶちかまし……

「これで、とどめよ！衝撃砲、最大出力！」

…とどめの一撃を放った。

アリーナに響き渡る轟音、そして一拍遅れて舞い散る砂塵。
舞い散る砂塵は視界を奪い、二人がお互いの姿を確認する事は出来そうもない。
だが、それはあくまで目視の話、その程度ではハイパーセンサーの目から逃れる事など到底不可能だ。

「一夏は……ちっ、まだ健在か」

模擬戦終了のブザーは未だ鳴る気配は無い。
という事は《白式・真打》はまだ健在という事になるのだろう。
……満身創痍を健在といって良いのなら、だが。

「運が良かった……いや、悪かったのかな？この場合、今ので終わってたら楽になれたのにさ……って、これだとなんか私が悪役みたいじゃない」

鈴の軽口に一夏は答えなかった。
否、正解には答えられなかった。
いくら《白式・真打》が頑強でも衝撃砲の最大出力で壁に叩きつけられれば気絶ぐらいする。
搭乗者保護機能があっても、だ。

今のところある意味鈴の狙い通りの展開で事が進んでいる。
いや、進んでいたのだが、思いの外一夏が粘ったせいで計画に狂いが生じてきてしまった。

事前に分身は使用禁止にされているとは聞いていたが、あの篠ノ之博士が作った機体の特殊機能が分身だけだなんて本国も鈴自身も思っていなかった。鈴とて、好きで一夏の頭を狙う様に衝撃砲を最大出力で放ったワケでは無い。
ある程度追い詰めて隠された機能をさらけ出させようとしていた国の思惑に反してまで勝ちに行ったのには鈴なりの理由があった。

恐らく、いや、鈴が予想するまでもなく織斑一夏はＩＳ学園卒業後に世界中から追われる身になる。
それどころか篠ノ之博士よりも執拗に追われる可能性があるのだ。
確かに、篠ノ之博士は世界で唯一ＩＳのコアを製作出来る人間であるが、彼女がいなくても彼女の残したコアが４６７機分ある。

だが、織斑一夏は違う。
世界で唯一という意味では篠ノ之博士と同族だが、『ＩＳを動かせる男性』は彼一人なのだ。

彼の存在はＩＳの登場によって女尊男卑へと変貌した世界を再び覆す禁断の果実に等しい。
男性側に捕まって男性ＩＳ操縦者を増やす為の実験動物として生きていくか、女性側が女尊男卑の世を安泰にする為に暗殺するかの二択かそれ以外にしろ、どの道明るい未来など無いのだ。

だからこそ。
だからこそ、こんな風に彼の羽を一枚一枚毟り取る様な模擬戦はしたくなかった。
少しでも、彼が長い間自由に羽ばたける様にしたかった。
こんな事をしても、たいした時間稼ぎにはならない事ぐらいは理解している。

それでも、それでもと。
…なのに。

どうして、彼は立ち上がるのか。

「…どうして」

問い掛けるが、やはり彼は答えなかった。

「どうしてアンタはそんなにボロボロになってまで戦うのよ！」

叫ぶ姿はまるで泣いている子供の様で、それでも問い掛けられた男は答えなかった。
亀裂の入っていない部分を探すのが難しいぐらい装甲はボロボロで、半分砕けたバイザーから見える彼の目は虚でどこにも焦点が合っていない。

それでも、織斑一夏は倒れなかった。
でも、倒れていないだけ。

今度こそ、次の一撃で終わる。

「………今度こそ、とどめよ」

静かに言い放った鈴の両隣から再び衝撃が放たれる。

今度こそ、これで終わり。

…なのに、直撃したハズなのに、どうして彼はまだ立っているのだろう？

何故、吹き飛ばない？

それより、あの赤い光りは何だ？

『――――――――――――――！！！』

咆哮。

彼の口からは……いや、人間の口では発せられない様な、そんな声。

咆哮と共に機体の発する光は強くなっていき、やがて光が赤い柱を模る頃には《白式・真打》の姿は見えなくなった。

「な…、なんなのよ、コレ」

管制室側もその現象が異常である事を認識した。
いや、正確には異常事態である事以外何も理解出来なかったのだ。

「どうなっている！？」
「わかりません、全パラメーター測定不能！」

またなのか、と。
また篠ノ之博士は我々の理解出来ない領域の現象を引き起こすのか、と。
ある意味、この管制室内にいる人間は皆そう思っている。
だが、それぞれ意味が違う。
織斑一夏に近しい者とそうでないものとで、まるで正反対の捉え方をしていた。
近しき者は痛ましい目で、そうでない者は未知への好奇心で彼を見ている。

やがて光が消え、全員が食い入るように見つめる先に彼は立っていた。
その姿を変えて。

「二次移行（セカンド・シフト）？」

《甲龍》のハイパーセンサーは《白式・真打》の変化をそう結論着けた。

確かに、と鈴も思う。

鈴自身、自分の知る限りの知識ではそう結論着けるしか無い。

目の前に立ちはだかる幼なじみの纏う鎧は元通りにはならなかった。

所々大型化したお陰で前より少し外見が既存のＩＳに近付いたかもしれない。

それよりも目を引くの全身の装甲に走る亀裂であろう。

明らかにダメージでひび割れたそれではなく、あくまで規則的に走るその装甲の隙間からはまるで心臓の鼓動の様に赤い光りが明滅し続けている。

「あの光……まさか」

とどめに放った衝撃砲を無効化したあの光。

エネルギー兵器を無効化する力、つまりは……

「あれが、《零落白夜》…」

モンド・グロッソ優勝者である織斑千冬の使っていたＩＳ、《暮桜》の、そして現在織斑一夏の所有する二機の《白式》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《零落白夜》。

なるほど、確かに。

全身に纏える事までは知らされていなかったが、確かに事前に知らされていた情報通り、エネルギー無効化能力があるらしい。

そうでなければ《龍咆》の直撃を受けて立っている事など出来ない

ハズだ。
一夏がそうさせているのか《白式・真打》が勝手にやってる事なのかわからないが、《零落白夜》が発動している以上、衝撃砲による砲撃は無意味だ。
エネルギー兵器を無効化する能力とはいえ、先にあれだけダメージを与えた後なのだから時間稼ぎをすれば鈴の勝利は決まった様なものだが、本国がソレを認めるとは思えない。

そもそも、この模擬戦自体おかしい。
可能な限り長引かせろというのはまだ解るが、追い詰めても倒すなとはどういう事か。
セシリアも祖国から同じ命令を受けたかどうかは鈴には知る由も無いが、国の思惑がどうにも理解出来ない。
いくら篠ノ之博士の技術が欲しいからといって、代表候補生を当て馬にする必要などあるのだろうか？
確かに《白式・真打》は脅威だ。
だが、鈴がやった様にすれば倒す事自体は別に不可能というワケでは無い。
それなのに、だ。

寧ろ逆なのだろうか？

各国が技術欲しさに《白式・真打》を……織斑一夏を嫐っているのではなく、いや、嫐っているつもりになっているだけで、実際は今そうなった様に、《白式・真打》の……織斑一夏の成長を促す為に利用されているのでは無いだろうか？

「まさか、ね」

ありえない、と思考を切り捨てる。

仮にそうだとしたら、ますます意味が解らない。
篠ノ之博士なら、《白式・影打》が一次移行（ファースト・シフト）時点で唯一仕様の特殊才能（アビリティー）を発現させる程の技術があるのなら、機体の成長を促さずとも始めからそういう機体を作ればいいのだ。
操縦者にしたってそうだ。
何故、男性のＩＳ操縦者である必要がある？
何故、織斑一夏でなくてはならない？
最強の操縦者なら彼の姉の織斑千冬がいるではないか。
織斑千冬が最強である事など、他のだれよりも知っているハズの篠ノ之博士が何故その弟を選んだ？

「…って、私が考えても解るハズ無いか」

疑問が解決したワケでも無ければ解決するめどがついたワケでも無い。
それどころか、仮に答えを得てもその答えに納得出来るかも解らない。
第一、今の自分には黒幕の存在どころか国の思惑すらもどうすることも出来ないのだ。
なら、せめて…

「続き、始めるわよ」

せめて、この一時を楽しもう。
あの頃を思い出しながら。

第１１話「せめて、あの頃の様に」（後書き）

ホントは今話で二次移行（セカンド・シフト）して決着まで持って行きたかったのですが、
いつものくせでいらん事書いてたらこんな事に…
どうしてこうなった…

第１２話「神速」（前書き）

《白式・真打》ＶＳ《甲龍》、ついに決着！

第１２話「神速」

（どういうこと？）

続きを始めようにも、さっきから一夏の様子が妙だ。
ただ立っているだけで、模擬戦開始時の覇気がまるで無い。
機体の方だってそう。
恐らく二次移行（セカンド・シフト）であろう《白式・真打》の変化、それ自体はいい。
ＩＳは戦闘経験を蓄積していく事によって形態移行するものなのだから、こういう事もあるだろう。
珍しい場面に遭遇したといえばそれまでだが、それにしたって様子がおかしい。

『搭乗者の意識レベル、未だ回復の兆し無し。マニュアルモードでの戦闘の続行は不可能と判断』

衝撃砲を何度も喰らい、機体もそうだが搭乗者本人だってボロボロになったハズだ。
しかも、最大出力で放った一撃は確実に搭乗者の意識を刈り取る為に放ったもので、《双天牙月》による猛攻で徹底的に攻め立てて、

相手がソレに気を取られてる隙に《龍咆》を以ってとどめを刺す、というのが彼女の祖国での常勝パターンであり、この戦法は未だ代表以外に破られた事は無い。
だから、通常のＩＳ相手ならし損じる事など殆ど無いハズだ。
《白式・真打》は通常のＩＳかと問われれば否、だが、それでも最大出力の衝撃砲を喰らった上に頭から壁に激突しているのだから、いくらなんでも気絶しない方がおかしい。

『索敵範囲内に存在する敵機（エネミー）、一機のみと確認』

だから、それで立っていられる理由が解らない。
人間なら誰だって脳を揺さぶる様な攻撃を喰らえば意識の一つや二つ失ってもおかしく無いというのに、これはどういう事か。

立ったまま気絶している？
弁慶の立ち往生じゃあるまいし、それは無いだろう。
それに、気絶しているにしてはしっかりと立っているではないか。

まさかホントに仮面ライダー（改造人間）にでもなったのか？
それこそ無い。
篠ノ之博士ならそれぐらいの技術はありそうだが、いくらなんでも彼の周りが気付くだろう。

『マニュアルモードからオートモードへ移行。敵機の排除を以って搭乗者保護とする』

先に動き出したのは《白式・真打》の方だった。といっても、その場からは一歩も移動していない。
動きがあったのは、その装甲。
亀裂が更に開く様に全身の装甲がスライドしていき、隙間から漏れ出していた光はその強さを増していく。
やがて変化が終わり、二次移行（セカンド・シフト）で一回り大きくなった機体が更にもう一回り大きくなると、溢れ出した光がまるでオーラの様に機体を包み込んだ。
いや、オーラなどというほど綺麗なものではない。
赤い光は二次移行（セカンド・シフト）前と比べ毒々しさを増していき、まるで血の噴水を思わせるほど悍ましい。

そう、例えるなら妖気。
或は邪気や殺気といった負の性質そのもの。
とても彼が発しているとは思えないその負の性質を確かにこの光から感じる。

「…なんなのよ、これ」

彼ではないのなら、この悍ましさは機体から発せられているのだろうか。

確かに、ＩＳのコアには意思に似たものがあるらしい。

だが、ここまで明確にソレを感じるなんて果たして有り得るのだろうか。

『《大切断》、最大出力形態《スーパー大切断》で起動』

前腕部分の装甲がまた展開し、身の丈と同等かそれ以上の長さの刃が三枚延びた。

《甲龍》の《双天牙月》をはじめとして、近接武装に限らず殆どのＩＳの武装はどこか浮世離れした様な、有り体にいえばアニメ調なデザインをしている。

元の発明者の趣味、又はスポーツ色が強いから等諸説あるが、その外見はＩＳ本体同様かなり見た目にも凝ったものである事は確かだ。

勿論、見た目だけで威力がお粗末であるワケでは無く、寧ろそんな現実離れした様な外観で尚且つ武装としても強力である事が一種のステータスでもあり、インパクトのある外観は則ちそれだけ自国の技術に自信がある事の現れですらある。

そういった点では《白式・真打》自体も、他のＩＳとは変わらない。仮面ライダーという特撮ヒーローを再現して見せた事は技術力の誇示として申し分ないだろう。

勿論、いくら篠ノ之束が天才といえど限度はある。

例えば《大切断》にしてもギギの腕輪から供給される古代インカの力だとか、そういった細かい設定的な部分までは再現できていないので本物と比べれば威力や効果に差が出てしまうが、あくまでＩＳコアからのエネルギー供給であってギギの腕輪からでは無いのだから仕方のない事だ。

それに、《白式・真打》はあくまで《白式・真打》であり、仮面ライダーアマゾンでは無いのだから、いくら再現したところで別物であろう。

その証拠、というべきか、《白式・真打》の前腕から延びる刃で敵を切り裂く様を見れば、仮面ライダーらしいその外見から《大切断》を連想するかもしれないが、あくまでそれはアマゾンがその技を称しているだけであって、《白式・真打》にとっては別の技名があるのかもしれない。

違う例えをするのなら、同じ跳び蹴りでも仮面ライダー１号ならライダーキックだろうし、仮面ライダーＺＸならＺＸキックと、名前が違う。

…とはいっても、実際《白式・真打》の武装名は各ライダーと同一なのだが。

因みに、武装名については製作者が仮面ライダーに肖ったからなのか、単に考えるのが面倒だったのかは一夏の知るところではない。

名称云々についてはともかく、本体の外見そのものの凝り様につい

ては、やはり《白式・真打》も他のＩＳと変わらない。
だが、だからこそ、その腕から延びる刃が異様に写る。
ただ斬る事だけに特化した、飾りっ気のかけらもない刃が三枚並ぶのみ。
それはまるで、肉食獣の牙の様な……生物が長い年月を掛けて進化した結果としてのあるべきカタチであり、《ボルティックシューター》等の他の《白式・真打》武装と比べても異様であった。

ゆらり、と少し両腕を上げ、腰を少し屈める。
その様はまるで飛び掛かる前の獣そのもので、機体から発する赤い光に包まれてもなお、バイザーの奥から輝く瞳ははっきりと鈴にも見えた。

その瞳が、嗤う。
二次移行（セカンド・シフト）以前の優性が嘘の様に思える程の圧迫感。
いや、これは圧迫感などという程生易しいものでは断じて無い。
完全に狩る側と狩られる側の入れ変わった、そんな状態。
この場にいるのは、目の前いる獰猛な肉食獣と、自分という哀れな獲物だけ。

あの瞳を見てはいけない。
見れば、精神を食われる。
なのに、目を反らす事は出来ない。
目を反らしたが最後、本当にその身を食われるからだ。

嫌な汗が、鈴の全身から吹き出す。
何度祖国の代表や他の代表候補生と模擬戦を行ってもついぞ感じた事の無かった死への恐怖。

何故、そんなものを感じるのか。
織斑一夏が自分を殺す？
幼なじみの自分を？
そんな事は有り得ない。
確かに彼の家庭環境は他の一般家庭とは異なる部分もあったが、彼自身が特殊な家業をやっていたワケでも無ければ彼の家庭が特殊な家業を営んでいたワケでも無い。
有名な姉の存在に付随する自身の価値に加え、唯一ＩＳが操縦出来る男性という無二の価値から人間の悪意に触れる機会は多かっただろうが、かといって彼自身が人にこれほどの悪意を……いや、殺意を抱き、それを感じさせるなんて事があるのだろうか。
しかも、幼なじみである自分に。
殺意を抱くにしても向ける相手が違うし、第一、自身の知る彼は八つ当たりでそんな事をする人間では無かったハズだ。

万が一、彼が自分に殺意を抱いたとしても、こんな濃密な殺気を彼が出せるだろうか？
周りが彼を特別扱いしてきただけで、彼自身は平凡に過ごしてきただけなのに、睨んだってそんなに怖くもない彼が。
有り得ない。
別人ならともかく、織斑一夏がこれほどの殺気を醸し出すだなんて……。

「別人？……まさか、一夏じゃなくてＩＳの意思だっていうの？」

そんなまさか、という予想はすぐに裏切られた。
切り裂かれ、爆散した《龍咆》の爆音を以って。

「なっ…」

全く、見えなかった。
瞬く間に《白式・真打》が視界から消え失せ、慌ててハイパーセンサーを調べようとした途端に《龍咆》が真ん中からズレる様に切れて爆散する。
連続して起こった事態に混乱しながらも構えは崩さない。
ハイパーセンサーが捕らえた《白式・真打》の位置は…

「…っ上!?」

正確には超高速で直進し、すれ違いざまに《スーパー大切断》で《龍咆》を切断、その後続けざまにまだ前を向いたままの鈴の後から飛び掛かったところであるが、ハイパーセンサーがその動きを捕らえていても鈴の動体視力ではレーダーに写るマーカーの動きを捕らえ切れなかった為に急に上に現れた様に見えたのだ。

慌てて振り返る頃には既に《スーパー大切断》の刃が眼前に迫っており、我武者羅に回避行動をとるが間に合わず、左腕のアーマーを両断され、手首が中を舞う。

「ちょっ…、嘘でしょ!?」

《スーパー大切断》の斬撃は止まる事を知らず、寧ろ先程の斬撃を遠心力に変えて更にその速度を増していく。
今度は反応出来た鈴も《双天牙月》で防ぎに掛かるが…

「なぁぁっ!!?」

その《双天牙月》の巨刃すら切り裂かれ、宙を舞った。

《白式・影打》の《雪片弐型》すら切り裂くその切れ味の前では《双天牙月》もまた有って無い様なものである。
ましてや《零落白夜》によってシールドバリヤーが意味を成さないのなら、尚更。

（どうなってんのよ！　まさかホントに《白式・真打》が勝手に動いてるっていうの！？）

全速力で後退しながら思考を巡らすが、そうとしか思えない。
自身との模擬戦以前の、襲撃事件という実戦時すら彼は音声認識で武装を呼び出し（コール）していたハズである。
それなのに、何故今になってそれをしなくなった？
まさか、音声認識の必要が無かった？
なら何故それをしない？
ワザと隙を作って相手がそれを突いてくるのを待っていた？
それは無い。
もしそうならあんなにボロボロになるまで被弾する必要なんて無かったハズだ。
《龍咆》による衝撃砲が初見だったからにしても喰らい過ぎている。
だったら、ワザ喰らうのなら喰らうで鉄壁の防御力を以って相手に無力感を感じさせた方が有効的ではないか。
仮にそうするつもりだったにしても初撃で《白式・真打》にそこまでの防御力が無い事が解るハズなのだから、それも無い。

もし、彼の意思で動いているのなら、二次移行（セカンド・シフト）の結果、音声認識の必要が無くなったという可能性もある。
いや、それしか思い浮かばない。

音声認識による呼び出し（コール）の隙を突かれたという経験を元に……というのがその論拠だが、だとしても熱血漢なところのある彼が終始無言であるのは不自然であり、それに、機体が音声認識から思考認識まで対応する様になったからといってすぐに素人の彼が音声認識だった頃の癖を捨て切れるのだろうか。

（…やっぱりコイツ、勝手に動いてるわね）

常識的に考えて有り得ない……と思ったが、そもそもその常識というのも篠ノ乃束によって覆された後の常識である。
ＩＳを以って旧来の常識を覆した彼女の作った常識を覆す事など、彼女にとって造作の無い事であるのは寧ろ道理ですらあった。
増して、今も尚自身に襲い掛かってくる《白式・真打》は件の人物のお手製の機体である。
少しでも従来のＩＳと同一視する事自体がそもそもの間違いであり、現に《ブルー・ティアーズ》との交戦時に５０体に分身するなどという非常識をやってのけたではないか。

「いっけぇぇぇぇぇっ！」

残った方の《龍咆》を掴み投げ付ける。
《白式・真打》はそれを振り払うかの様に《スーパー大切断》を振るうが、刃が《龍咆》に触れる直前に《龍咆》自体が大爆発を起こした。

「これで……って、やっぱダメか」

模擬戦開始直後からの猛攻でかなりシールドエネルギーを削ったハズなのだから、或は…と思ったが、残念ながら《白式・真打》は未だ健在。

そもそもシールドエネルギーを0にして勝ったからといって、それで《白式・真打》が止まるかどうかなんて誰にも解らないのだ。

「もしかして…私の息の根を止めるまでって思って無いでしょうね？」

ふと、そんな不吉な事が思い浮かんだが、そうでは無いと思いたい。だが、返事は刃を以って返ってきた。

「ちょっ、本気!?」

咄嗟に出した右腕もまた、左腕と同じ末路を辿る。

「なんでそんなに殺る気満々なのよ、アンタは！」

もう逃げるしか無い鈴は必死の逃走を計るが、逃げる両足を斬り飛ばされて派手に転ぶ。

「う、嘘でしょ…」

武装を失い、四肢も失った今、鈴に出来る事はもう何も無かった。《白式・真打》の腕がとどめを刺す為に大きく振りかぶられ、そして…

「……なぁ、コレ、どういう状況なんだ？」
「は？」
その刃が振り下ろされる事は無かった。
正確には、寸止めの状態まで振り下ろされていた。

『搭乗者の意識の覚醒を確認、オートモードからマニュアルモードへ再移行します』

「…どういうってアンタ、こんだけ人をズタズタにしといてよく言うわね」
「いや、俺も結構ボロボロに……って、アレ？　なんかいつもと違う？」
「今頃気付いたの…」
変化した自身の鎧をまじまじと眺めている彼を見て、予想が核心に変わった。

（…やっぱり、途中から機体が勝手に動いていたのね）

「うおっ、何か動いた！」

展開していた装甲が元に戻り、気付けば、あのまがまがしい光も嘘の様に消え失せていた。

「なっ、え…、どうなってんだ！？」

さっきまで人が死ぬ思いでいたというのに、なんともまぁ暢気な事か。

文句とか文句とか文句とか…ついでに文句とか、いろいろと言ってやりたい事が有ったが、そんな彼を見ていると、なんだかどうでも良くなってきた。

結局、模擬戦の方は鈴が戦闘不能に陥ったという事で、一夏の勝利となったらしい。

鈴としては二次移行（セカンド・シフト）前の一夏だって気絶していたのだから、一夏こそ戦闘不能で負けだろうと思ったのだが、結果は覆らなかった。

とりあえず、一夏には腹いせにボディブローをお見舞いする事にしよう。

善は急げと、鈴は彼を探しに駆けて行く。

数分後、憐れな男子学生の悲鳴が学園内に響き渡ったそうな。

『フラグ2、二次移行（セカンド・シフト）、確認』
『フラグ3、展開装甲による形態移行、確認』

第１２話「神速」（後書き）

灰狼さんのリクエストに応えてアクセルフォーム……と、見せ掛けて声優ネタでデストロイモード。
最初、ＩＳで二次創作書くなら声優ネタで一夏のＩＳをユニコーンにしようかと思っていたのと、ファイズのアクセルフォームが調度装甲を展開する様なフォームチェンジの仕方だったので、今回はやりたかった事とリクエストをすり合わせる形にしてみました。

あと、今回のはあくまで展開装甲によって高速移動形態きなっただけで、こちらの予定しているフォームチェンジとはまた別ものです。

因み、暴走ネタもユニコーンに見せ掛けてカブトの赤い靴の話が元ネタだったりします。

それではまた、次回をお楽しみに

第１３話「想いの強さは被害に比例し」（前書き）

今回は若干鬱っぽい話なので注意して下さい

第１３話「想いの強さは被害に比例し」

模擬戦の翌日。
いつも通り放課後に彼が補習授業を受けている時間帯、その彼を接点とした三人が一同に揃っていた。
彼がいなければ集まりもしないだろう三人が、だ。

「…で、何のご用ですの？わざわざプライベートチャンネルまで使って呼び出して」
「急に部屋に来るから何事かと思ったぞ」

事の発起人は先日その彼との模擬戦を終えたばかりの中国代表候補生にて件の彼日くセカンド幼なじみ、鳳鈴音。
会談場所の提供者…というか突然の奇襲によって自室を占拠されてしまった件の彼のファースト幼なじみ、篠ノ之箒。
そして最後に、彼の初陣の相手を勤め、それ以降も親交のあるイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。

「多分、この面子で集まった時点で解ってると思うけど、その……一夏の事よ」
「一夏さんの？」
「…一夏が、どうかしたのか？」

彼がいなければ集まりもしない三人が集まった理由もまた、やはり件の彼……織斑一夏だった。

「前から気になってたんだけど、一夏って元々藍越学園に行くつもりだったのよね？」
「えぇ、そうですわ。確か、試験会場で迷って…」

「係の人に道を尋ねたんだったな」

それがどうかしたのか？　と、怪訝な反応をする二人。

「ソレ、おかしくない？」

「おかしい？」

「何がですの？」

「…だってさ、ＩＳは女性にしか扱えないハズだったのよ？　十年前から。なのに、どうして男の一夏をＩＳ学園の試験会場に案内するのよ？」

「「！！？」」

そう言われて、初めて気付いた。

確かに、ＩＳが女性にしか扱えない物だということは十年前からの常識であり、偶然居合わせた彼が動かすまで誰もがそう信じていた。

「…まさか、試験会場に案内した者は一夏がＩＳを扱えると知っていたというのか！？」

「そ、そんなハズ…」

「でも、そうとしか思えないじゃない」

確かに、鈴の言う通りなら、一夏を試験会場に案内した人物は彼がＩＳを扱える事を知っていた事になる。

だが、仮にそうだとして、何故その人物は彼がＩＳを扱える事を知っていたのか。

「…一夏さんのＩＳは篠ノ之博士が直々に製作したものなのでしょう？　なら、変装した篠ノ之博士がその試験会場のＩＳに細工して一夏さんが使える様にしていたのではなくて？」

「ん～、でもわざわざ変装してまで試験会場に潜り込む必要無いん

じゃないの？　篠ノ之博士が直接一夏専用にＩＳ作って渡せば済む話じゃない」
「それは……確かにそうですわね」

《白式・真打》は直接手渡された機体なので、ある意味鈴の予想は当たっているといえば当たっているのだが。

「…いや、ホントに変装して一夏を試験会場に誘い込んだのかもしれん」
「どういう事よ？」
「あの人は、自分が身内と思っている人間以外とは関わろうとしないんだ。だから、他人を使うなんて事はあまり考えられん。それに…」
「それに？」
「な、なんですの？」

勿体振る様な仕草をする箒に代表候補生二名は続きを急かす。
箒自身には勿体振っているつもりは微塵も無く、寧ろ説明した方が混乱させてしまうのではないかと逡巡していただけなのだが、目の前の二人の様子からして言葉を濁しても結局追求されるだけかと諦め、続けた。

「なんと表現したらいいのか解らんが……一言で言えば、あの人は愉快犯なんだ。いちいちその行動に他人様を納得させる必要性なんてカケラも感じていない。ただ、自分が面白そうだと思ってしまえば周りの迷惑など全く省みずに行動を起こしてしまうんだ。…しかも、それで成果を出してしまうから余計に性質（たち）が悪い」

「そ、そうなんだ…」
「その…、大変でしたわね」

何処か遠くを見る様な、いまいち焦点の合っていない視線を宙に向ける箒に二人は薮蛇だったかと焦った。
その瞳はただ開かれているだけで何も見ていない様にも、或は全てを見通し悟った様にも見え、その視線だけで彼女のこれまで負ってきた苦労が伺える。

「…白状するとな、私は姉が嫌いなんだ。姉もそうだが、ＩＳ自体もはっきり言って無くなってしまえばいいと思っている」
「え…」
「で、では何故…」

ＩＳ学園に、と、衝撃のあまり最後まで言葉を紡ぐ事が出来なかった。
ＩＳが嫌いなら、他の高校に進学する道だってあっただろうに。

「…何故、か。確かにそうだな。本当にＩＳが嫌いなら、そもそもこんな所にくるハズが無い。……あの人が、こんな物を作ったせいで、家族はバラバラになって、私は一夏と離れ離れにならなければならなかったんだ。…引越しの日はもう、二度と会えないのではないかと思って散々泣いたよ。……親の転勤ならまだ納得出来たんだ。多少遠くとも全く会えないワケではないからな。それなのに、あの人は全部自分の勝手で私も両親も散々振り回して、なのにあの人だけはいつもの様にヘラヘラしていて……今でもあの時の姉の顔を思い出すと殺意が沸くんだ」

独白を続ける箒から発せられる殺気は話の途中から徐々にその濃密さを増し、既に部屋中に充満して鈴もセシリアも奮え上がっている

のだが、箒は全く気付く様子もなく続ける。

「そんな私がＩＳ学園に行く気になったのはテレビで一夏の一件がニュースになっていたのを見たからなんだ。あの時は驚いたさ、なんで一夏がとな。それで一夏がＩＳ学園に通う事になったのを知って。……その時なんだ。散々人を振り回したくせに行方を眩ませたあの人から電話が掛かって来たのは。あの人は言ったよ、ＩＳ学園に行けばまた一夏に会えると、私が望むのなら学園側に口添えもするとな。それを聞いて私は恥も外聞も無くあの人に縋りついたさ。あんなに憎んでいたのにな。……あぁ、今思い出した。一夏がＩＳ学園に来る事になったのも、全部私のせいじゃないか」

「ど、どういう事よ？」

密に一夏に想いを寄せる二人には、箒がＩＳ学園に来ようとした動機が理解出来きた。

特に鈴は自分も外国に引越して離れ離れになった身であり、その後紆余曲折あって代表候補生にまで昇りつめた時にあのニュースを見た。

その時までもう会う事は出来ないだろうと思い、いっそあの時の思い出を振り切る為に代表候補生にまでなったのに、それなのに、ニュースを見た瞬間に記憶の底に押し込めていた想いが溢れ出し、その想いを止める事が出来ずに気付けば彼とは幼なじみなのだから自国他国問わず他の代表候補生より情報収集がしやすいと、他の代表候補生を押し退けて強引にＩＳ学園行きを決定させたのだから、尚更。

だから、箒の想いは理解出来る。

だが、全部自分のせいとはどういう事なのか？

「引越し当日に言ったんだ、『お前のせいで私は一夏と離れ離れになったんだ』とな。それをあの人は覚えていたんだろうよ」

「別にそれは関係無いのでは？」

「いや、そうでも無い。前に千冬さ…いや、織斑先生に聞いたんだが、あの人は今も周りを散々振り回し続けているし、自分にとって他人でしか無い人間には極端に冷淡だがな、アレで自分が身内と思っている者には甘い所があるらしい。だから、あの時私が言った事を思い出して私と一夏を引き合わそうとしたんだろうよ。……浅ましいな、私は。男に会いたいが為に恨み続けた姉に縋り付いて、そのうえ今度は自分がその姉の様に会いたかった男の人生を狂わせているのだから。…全く、度し難い姉妹だな、私達は」

「「……」」

なんと声を掛けてやればよいのか、解らなかった。

多分、事の真相を知っても彼は箒を責める事は無いだろう。

だが、それを言ったところで何になるのか。

第一、幼なじみである箒自身、それは解っているハズだ。

或は、被害者である彼がその事で責めてくれた方が余程気が楽だったかもしれない。

だが、自分達の知る彼は多少悪態を着いたとしても本気でそれを責める様な事はしないだろう。

贖罪をしようにも相手はそれを罪とは認めない。

だから、どうすれば許されるのかが解らない。

そもそも、彼は怒ってすらいないのだから、何を許せばいいのか解らない。

罰を負う事で償ったつもりになりたいだけといってしまえばそれまでだが、事実、責められない罪も辛かった。

「……あ、あのさ、話変えていい？」
「っと、すまんな。つい喋り過ぎた」
「え、あ、その、いいって。なんていうか、皆事情があってここにいるワケなんだし、ね？」
「そ、そうですわね！ところで鳳さん、お話というのは？」

結局、うやむやにして流す事しか出来なかった。
それぞれ特殊な家庭環境で育ったが故に、多少大人びている部分もあるが、本質はまだ若干１５歳の少女なのである。
まだまだ自分の事でいっぱいいっぱいで、他人を気遣おうにもどうしていいのか解らないのだ。

「あ～、その、ある意味さっきの話の続きなんだけどさ、そっちは模擬戦の時に変な命令されなかった？」
「？…いえ、特に何も。そちらは何かあったのですか？」
「それがさ、『なるべく長引かせろ。追い詰めても倒すな』って」
「なるべく長引かせろというのは解らなくもないが…」
「追い詰めても倒すな、というのは妙ですわね」
「でしょ？」

模擬戦開始前から感じていた違和感、ある意味鈴にとってはここからが話の本題であった。

第１３話「想いの強さは被害に比例し」（後書き）

まぁ、皆いろいろあるんだよ　って話

第１４話「アリジゴク」（前書き）

え～、お気づきの方もいらっしゃるかと思いますが、本小説は

新ヒロイン登場→バトル→考察とか

と、ヒロイン一人につき最低３話づつは用意する様にしていますので、原作の様なハイスピード感はあまりありませんのでご了承下さい

第１４話「アリジゴク」

少女達が意中の少年についていろいろ考えている頃、その話題の少年……織斑一夏はどうしていたかというと…

「……わ、わかりません」
「えぇ！？　これもですか？」

いつも通り、参考書と格闘していた。
真耶とて自分に知らされた範囲ではあるが、一夏の境遇については理解している。
つい最近まで彼の周りがＩＳに関わる有名人だっただけで、彼自身は他の男性同様全くＩＳに一関わりの無い生活を送って来たのだから、一般生徒が知ってて当たり前の事を彼が知らないのは当たり前の事だ。
だが、だからこその疑問もある。

どうしてこんなにもＩＳに関して無知なのに、代表候補生を下す程の戦闘が出来るのか、と。
勿論、あの篠ノ之博士が直接彼の為に作った機体なのだから、彼が使いやすい様には出来ているのだろうが、それにしたっておかしい。
彼が機体性能に頼った戦いをしているのは録画映像を見た者全てが感じている事だが、普通、全く知らないものに頼ろうとするだろうか？
例えば道に迷った時、近くに巡回中の警官がいれば道を尋ねるだろう。
警官個人に全く面識が無くても、警官とはそういう仕事もする役職だということを知っているからだ。

そう考えると、襲撃事件での彼の行動はその辺にいる知らない人間にほいほい着いて行ってしまうのに等しい。
案内人が善意を持って彼に接しているのか、悪意があって彼に近付いたのかが解らないからだ。
仮にその案内人が善意で彼に声を掛けたとして、ホントに役に立つか解らないのに、彼の行動はまるで全幅の信頼を寄せるかの様で、はっきりいって迂闊過ぎる。
あの、《白式・真打》とかいう機体を纏うまではよかったとして、逃げようとせずにいきなり戦闘を仕掛けるなんて、普通思うだろうか。

「ぬぅ…」

今もこうして初歩の初歩で頭を抱えている彼が、どうして襲撃犯に果敢に立ち向かおうとしたのか、全く理解出来ない。
この姉弟の言う通り《白式・真打》の贈り主が篠ノ之博士だったとして、どうしてそれが戦う為に送られて来たと思えるのか。
仮面ライダーっぽい外見だから？
馬鹿馬鹿しい。
仮面ライダーはあくまで空想上の産物であって、現実の世界には存在しないのだ。
見た目に仮面ライダーっぽくなったからといって怪人（襲撃犯）に立ち向かおうだなんて普通思わない。
彼がどうしようもないヒーロー願望の持ち主だったならまだしも、それならクラス代表に自分から立候補するハズである。
自分より強いからと他人を推薦する様では自己顕示欲なんて満たされるハズ無いのだから。

《白式・真打》の存在を前々から知っていたのならまだしも、それならここまでＩＳに関して無知なのはおかしい。

確かにＩＳはパワードスーツなのだから、ある程度は思った通りに動くが、あくまでそれは生身の人間が普通に身体を動かすのと同じ範囲の事であり、武装の扱いは勿論、高速移動にしたって知っておかなければならない知識があるというのにここまで無知なのはどういう事か。

彼の言う様に、そのつど機体が教えてくれたとして、戦闘中にその知識を理解させるなんて果たして可能なのだろうか。

どんな教え方をすれば……というか、そんな状況で教えられた内容を理解出来るならどうして今落ち着いて机に向かっているのに初歩が理解出来ない？

（も、もしかして…私の教え方に問題が…）

機械に負ける私って…と、自分の出した結論で落ち込む真耶だったが、幸か不幸か、当の一夏は参考書と睨めっこしながら唸っているだけで全く気付かれる事は無かった。

一夏の事で密に真耶が教師としての自信を無くしているとはつゆ知らず、少女達は彼の事について話込んでいた。

何処へ行っても彼の話題で持ち切りな辺り、流石は唯一の男子といったところだろう。

「ほら、《白式・真打》ってさ、篠ノ之博士と一夏しか触れないでしょ？だから何処の国も実戦データでしかあの機体を調べる事が出来ないし、だからまぁ、長引かせろっていうのも解るんだけどさ」

「えぇ、そういった意味では追い詰めても倒すなというのも理解出来るのですが…」

「そりゃあね、負けそうになったらどうにかしようとは普通思うけどさ、それってわざわざ念押しする必要無いと思わない？　いくらあの篠ノ之博士が直接作った機体とはいえ代表候補生の専用機だってその国の機密の塊みたいなものなのにさ、ただでさえ長引かせるだけで自国のデータを他国に曝す事になるのに、そんな解明出来る可能性の低い……というか、殆ど無理って言ってもいい様なもの為に手札を曝すだなんて馬鹿みたいじゃない」

「確かに、そうですわね…」

代表候補生二人が話し合うのを箒は黙って聞いているしか無い。

箒自身、専用機を所持しているワケでもなければ代表候補生でもないのであまりその辺りの感覚が解らないからだ。

そんな彼女でも、自分なりに思い付いた事は幾つかある。

「コアは無理なら、せめてその周りならという事なのか？」

「あ～、それはあるかも」

「ですわね。私の時は分身でしたけど、鈴さんの時には変形までしてましたし」

「私には分身の方がよっぽど大事だと思うのだが？」

「そうでもありませんわ」

「？」

確かに《白式・真打》の能力は多彩であり、分身に至ってはそれがホントの唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）ではないかと睨んでいる国もある。

その根拠は《白式・影打》が元々唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を別の方法で再現しようとした機体だったからだという事に起因し、開発メーカーは結局失敗しているものの、それを改造した篠ノ之博士は狙って唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）として《零落白夜》を発現させるぐらいの技術があったのだから、開発メーカーの当初の目的通りに《零落白夜》を再現する事ぐらい容易なのではないか、という事らしい。

「私の《ブルー・ティアーズ》を人型に置き換えたものを拡張領域（バスロット）内に格納していたと考えれば、そこまで不可思議な現象ではないのです」

「あ、やっぱりそっち（イギリス）でもそういう結論になったんだ」

「えぇ、こういう武装を使用しているのですから、当然といえば当然なのですが」

「でも、そうなると…」

「どうやってあれだけの数の無人機を操っていたのか、操る以前にどうすればあれほどの数を拡張領域（バスロット）内に格納出来るのかという問題に行き当たりまして…」

仮に拡張領域（バスロット）の問題が解決しても、結局どうやって機体を操るのかという問題に行き当たる為、この件に関しては保留扱いになっていた。

本人が直接マニュアル操作しているとは考えられないが、かといって操縦者を必要としない程のＡＩが果たして作れるのか、という問題が新たに浮上する。

もし、仮にそれが出来るのなら何故篠ノ之博士は始めから宇宙用マ

ルチフォームスーツとしてではなく作業用ロボットとしてＩＳを作らなかったのか、と更に問題は芋づる式に、或は鼠算の様に沸いてくるのでキリが無い。

「では、何故変形した事の方が重要なのだ？」

「どのＩＳも確かに装備を変えればあらゆる状況に対応できるわ。でも、それはあらかじめソレ用にセッティングしておく必要があるのよ」

「でも、一夏さんの《白式・真打》は違います。まだ拡張領域（バスロット）内にそれぞれのフィールドに応じた武装を格納していて、それをその場で装備したのならまだしも、機体そのものを変形させる事によってその状況に対応するだなんて他のＩＳには到底不可能ですわ。仮にそれが出来たとして、装備の換装や拡張領域（バスロット）の使用を必要としない事を前提とするだなんて発想がまず誰もしていませんでしたもの」

「？　だが変形なら一次移行（ファースト・シフト）や二次移行（セカンド・シフト）の時にやっているではないか」

箒の疑問も尤もである。

確かにＩＳは一次移行（ファースト・シフト）や二次移行（セカンド・シフト）でその形状を大きく変化させるのだから、変形した様に見えなくもない。

「確かにそう見えるけど、一次移行（ファースト・シフト）や二次移行（セカンド・シフト）の様な形態変化って不可逆なのよ。だから形が変わったらそのままじゃなきゃおかしいの。…これはこれで有り得ないんだけど、二次移行（セカンド・シフト）直後に三次移行（サード・シフト）したならまだ解らなくもないんだけど」

「でも、《白式・真打》は鳳さんとの模擬戦の途中で第三の姿に変化はしても結局、二次移行（セカンド・シフト）時の姿に戻りましたわ」

「状況に応じて姿を変えられる様に二次移行（セカンド・シフト）したとは考えられないか？」

「それはまぁ…そうなんだけど、だとしたら他のＩＳだってそういう変化をしているハズよ。少なくともつい最近代表候補生にでもなったヤツのＩＳじゃない限り経験するシュチュエーションだって多彩で稼動時間もかなり長いのに一機もそういう変化をしてないのはおかしいじゃない」

「ＩＳ自体の絶対数が少ないから、とも考えられますが、それを考慮しても一機もそういう変化が無いという以上、やはり《白式・真打》はどこか異質ですわね」

製作者が製作者なだけに、ある意味解っていた事だが、やはり考えれば考えるほど《白式・真打》は既存の機体と比べ何処か異質な存在に思えてくる。

「さっきから素人の意見ばかりでアレなのだが……その辺りは単に新型だからとう事ではないのか？」

「新型、ねぇ……まさか、《白式・真打》が第四世代機だっていうの？」

「そんな！　まだどの国も第三世代機の試作段階ですのに。……でも、製作者があの篠ノ之博士なら…」

「そもそも、同じ第三世代だっていう事を前提に考えてたのが間違いだったわ。世代が違うんじゃ開発目的が他と違うだなんて当たり前じゃない」

「そうですわね。学習する事で対応環境を増やしていく……となると、開発目的としては第二世代の発展系といったところでしょうか」

謎が全て解けた、というわけでは無く別の問題にすり代わっただけだが、流石に三人の持つ情報程度ではどの道結論に至る事は出来はしない。
そもそも、すり代わる以前に何一つ解決出来ていないのだから。
仮説を立てれば立てるほど遠ざかっていく様な感覚を覚えるばかりで、後に残るのはただの徒労、たった一機の為だけに、誰も彼もが深みに嵌まるその様はさながらアリジゴクといったところだろうか。

「そもそも、というか、私的にこっちが本題なんだけど、……なんで一夏なのかしら」
「確かに、仮に篠ノ之さんのいう通りの理由で一夏さんがＩＳに関わる事になったとしても、それなら《白式・影打》の方で十分ですものね」
「そうだな。確かに《白式・真打》は一夏には過ぎた力だ……というか、アレを持て余さない人間なんているのか？」
「ブリュンヒルデにまで昇りつめた織斑先生なら或は……。でも、それなら何故篠ノ之博士は織斑先生に《白式・真打》を託さなかったのかという問題になりますわね」

三人にとって、それこそが最大の謎である。
織斑一夏がＩＳを扱えるというのもそれなりに問題だが、国としては誰が、ではなく男性が、という事の方が重要であり、それと同等かそれ以上に篠ノ之博士が製作したＩＳが重要だった。
というのも、唯一ＩＳを動かせる男性が他の誰かではなく織斑一夏だというのが原因であり、他の誰かだったなら、第二第三の男性ＩＳ操縦者出現の可能性は出て来るが、織斑千冬の……篠ノ之博士の親友の弟がそうなったのなら話は別である。
篠ノ之博士が自身が身内だと思っている人間以外に冷淡であるのは

それなりに彼女の事を知る人間からすれば周知の事実であり、もし織斑一夏が彼女にとっての身内だからという理由でＩＳが動かせる様になったのなら、他の男性に希望は無いからだ。

「織斑先生と篠ノ之博士って親友なんでしょ？　なら、別に織斑先生に《白式・真打》を託してもいいと思うんだけど…」
「そうだな。そう考えると親友よりその弟に機体を託すのは……いくらあの人の行動原理が普段から無茶苦茶だとはいえ不自然だ」
「…一夏さんでなければならない理由でもあるのでしょうか」
「理由、ねぇ…」

三人とも考えてもどうしようもない事ぐらい解ってはいるが、気になるものは気になるのだ。
それが意中の男子の事となれば、尚更。
また三人で唸る事になるのだが、その思考もやがて終わりを告げる事になる。

「お～い、箒。今いるか？」
「あぁ、今出る」

部屋のドアをノックしたのは一夏だった。
補習を終え、いつもの日課の訓練の為に箒を誘いに来たのだ。

「っと、なんだ三人揃ってたのか。珍しいな」
「えぇ、そのこれからの一夏さんの訓練についてお話がありましたので（篠ノ乃博士に警戒されると厄介ですので、話を合わせて下さいな）」
「そうそう、喜びなさいよ！　アンタ、二人も代表候補生を独占で

きるんだから（わかった。続きはまた後で）」
「わ、私だって剣術指南を…」

いくら恋する乙女とはいえ、彼女らにも代表候補生という立場がある。
プライベートチャンネルで口裏合わせるのも仕方無い事だろう。
幸い、空気を読んだのか、箒は真相を語らなかった。

「ん、そうなのか？　じゃあ、俺も頑張らないとな」

そんな事とは露知らず、一夏はすんなりと二人の言った事を信じた。
この時ばかりは鈴もセシリアも彼の鈍感さに感謝したが、箒を含め、ここにいる三人は今までいろいろ彼女らなりにアプローチを仕掛けてきたのだが、彼の鈍感さの前に見事にスルーされてきているので余り素直に喜べる事でも無いのだが、それも今更である。

結局、次の会議には新たなメンバーを迎える事になるのだが、それはまた別のお話。

第１４話「アリジゴク」（後書き）

嘘予告

「ＨＲの前に転校生を紹介する。入れ」

教室に入って来た人物の顔に、クラス中が騒然となった。
その顔があまりにもある人物に似過ぎているからだ。

「亡国機業（ファントムタスク）から来た、織斑マドカだ」

「誰っ！？」

マドカ　ルート？

第１５話「トーナメント一週間前」（前書き）

症状がだいぶ落ち着いたのでそろそろ復帰しようかと思います。

復帰後の第１話となる第１５話は初心に帰って我らが主人公、織斑一夏の一人称で始まります

第１５話「トーナメント一週間前」

……さて、いつも通り補習が終わったから箒達に練習に付き合って貰おうと思ってまず一番近かった箒の部屋に行ったら珍しくセシリアや鈴までいて……うん、そこまでは良かったんだ。
で、何が問題かっていうと……

「げふぅ」
「まっ、こんなもんよね～♪」

今日の相手は鈴だったんだが、結果は上のセリフで察して欲しい。
うん、成長しないね、俺。

一応言い訳をさせてもらうと、俺は現在《白式・真打》と《白式・影打》の二機を交互に使い分けているから一機当たりの操作時間が短いのだ。
しかも、ＩＳに関してはまだまだ初心者の域を出ていない人間の言う”操作時間が短い”であるので生粋の代表候補生なんかと比べるのもおこがましいぐらい短い。
更にいえば、操作時間が長い方の《白式・真打》に至ってはＩＳですらないので操作感覚がまるで違う。
この操作感覚の違いがまたくせ者で、《白式・真打》は早いだけなんだが《白式・影打》の方はこう……何て言うか、遅いけど早い？どう表現したら言いのか解らんが、パンチを繰り出すという動作をするとして、《白式・真打》はこう…一人二人羽織りというか、考えるのは自分の頭なのに動くのは機体の方で、俺自身の身体は機体に動かされている様な……と、文章にするとなんだが凄く面倒な事をやってるのに対し、《白式・影打》は普通に鎧着てて鎧の重み

で少し動きが鈍くなる様な……いや、実際は自分で動くより早く動けるんだけどさ。
あ～、その、アレだ。
格ゲーとかで数値とかが上のキャラに変えても慣れてないせいで使い辛く感じたりするじゃん？
うん、そんな感じ。
この場合、《白式・真打》慣れしている俺としては本来鈴の《甲龍》に引けを取らないぐらいのスペックを持つハズの《白式・影打》がもの凄ぉ～く使い辛く感じるというワケだ。
しかも《白式・影打》ちゃんはブレードオンリーで後付装備（イコライザ）はノーサンキューな駄々っ子なので《ラファール・リヴァイブ》の時の様に取り敢えず撃っときゃ当たるなんてまず有り得ない。
つ～か、射撃武器が無いから撃てないし。

クラス代表同士のトーナメントに向けて《白式・影打》の方で慣らしとかなきゃならんというのに代表候補生の皆さんとやり合う時には《白式・真打》の方でやらされるから慣れる時間すら無いと来たもんだ。
……ホント、どうすんの、コレ。
し・か・も、千冬姉が言うには一週間以内にまた代表候補生が転校して来るらしい。
この調子でクラスメイトな代表候補生が増える↓普通（？）のＩＳでの操作データが欲しいから代表候補生なコーチが増えるなんて事になっていざ本番で負けようものなら……と、考えるだけで恐ろしい。
複数人もの代表候補生を捕まえといて負けでもしたら彼女らの顔に泥を……塗る事にならんでも情けなさ過ぎて死ねるわ。
精神的に。

専用機を宛がわれて、その上世界でトップクラスな代表候補生の方々に直々にコーチまでしてもらって負けるとか馬鹿じゃん。
そりゃあ、代表候補生な方々は束さんお手製のＩＳのデータと唯一ＩＳを扱える俺のデータさえ集められれば国的には問題無いんだろうけどさ、四組にいるらしい俺と違ってちゃんと代表候補生がクラス代表になったクラス代表さんに負けるのならともかく、代表候補生じゃない＝専用機持ちじゃない他のクラスのクラス代表に俺が負けでもしたら何て言われるか……。
特に鈴とか。
あと、箒もその辺り五月蝿そうだしなぁ……。
セシリアは……どうなんだろ？
仮にセシリアが責めなくてもダブル幼なじみは俺の弱点を確実に突いてくるだろうし、最悪、後で加わる代表候補生も含めて全員に詰られでもしたらと思うと恐ろしくて負けられない。
女の子が怖いからなんて負けられない理由としては格好悪いにも程があるんだが怖いもんは怖いのだ。
ＩＳが広まって女尊男卑になったのと関係無く、世の恐妻家の皆さんは常日頃からこの様な恐怖と戦っていたのだろうかと思うととても他人事とは思えなくなって来た。
…アレ？　おかしいな、目から汗が……。
いや、まぁ、俺には奥さんどころか彼女すらいないワケなんですが。

「《白式・真打》の性能に頼り切った戦い方するからこうなるのよ」

はい、おっしゃる通りで。

「《白式・影打》だって悪い機体じゃないのに……まぁ、ブレードオンリーな辺り変わってるちゃっ変わってるけど、かなり高性能な機体なのよ、コレ」

うん、知ってる。

「なのにアンタは……」

あ～あ、また始まったよスーパーお説教タイムが。

箒もそうだけど、鈴はこうなると長いからなぁ～。

その点セシリアは……いや、付き合いが短いからまだ俺がそういう一面を知らないだけでセシリアもそうなのかも知れんが。

「……って、聞いてるの!?　アンタ!」

はいはい、聞いてますよ。

九割型右から左に聞き流してますが。

「……ねぇ、箒、セシリア。一夏は私一人じゃ物足りないみたいだし皆で相手してあげましょうよ」

「…ほう、そうかそうか。そういう事なら…」

「まぁまぁ、一夏さんたら複数人同時だなんてお盛んですわねぇ…」

わ～い、４Ｐ……じゃないね、どう考えても。

「…何か、言い残す事はあるかしら?」

え～、死ぬ事前提なのかよ。

「…イジメ、良くない」

「「だったら真面目にやれ（やりなさい）！」」

「アーッ！」

「……で、実際の所どうなのだ？　代表候補生の目から見て」

「流石千冬さんの弟というか……まぁ、才能自体はあるわね」

「ですわね。ですが才能だけでやはり全然操作時間が足りてませんわ」

「それにさ、こんな癖のある機体を二機も使う事になっちゃったから……なのかな、機体性能に頼り過ぎる癖が着いてるわね」

「えぇ、もっとこう、《ラファール》だとか、ああいう程よい性能の万能機で基礎をしっかり身につけてから得意分野に特化していくのならまだしも、いきなり高性能な特化型を宛がわれたのでは仕方の無い事かもしれませんが……」

「流石に今からじゃクラス代表トーナメントに間に合わない、か」

「ええ」

流石は篠ノ之束が作った機体というべきか、《白式・真打》は一夏の様な初心者でも機体性能に頼り切って代表候補生を下せるほどに高性能過ぎる機体だった。

だが、《白式・影打》は違う。
《白式・影打》の性能は決して低いワケではなく、寧ろ高性能といえるほど性能のいい機体ではあるが、それはあくまでＩＳという括りの中での話であって、そもそも製造目的自体異なる《白式・真打》の性能が異次元過ぎるのだ。
まだそれぞれ違う方面に特化したＩＳ同士だったならともかく、片方はＩＳですらない機体を使っている以上操作感覚のズレは三人が思っている以上に深刻であり、どちらか一機に専念するワケにもいかない事情が習熟の妨げになっていた。

「どうしたもんかしらねぇ…」
「人の事を言えたきりではありませんが……この調子で他の代表候補生の方々がいらっしゃる度に《白式・真打》での模擬戦をするのではますます一夏さんの練習時間が減ってしまいますものねぇ…」
「「「はぁ…」」」

言ってもしょうがない事とは解ってはいるのだが、文句の一つも言いたくなるというものだ。
約二名ほど自分の事を棚上げしている様な気もしなくもないが、その辺りはご愛嬌。

「まぁ、よっぽど強い娘に当たらない限りは練習機には負ける事は無いでしょうけど…」
「やはり、問題は四組の代表候補生の方ですわね…」
「そうよねぇ…、そりゃあ《白式・真打》の方でやっていいんなら一夏の一人勝ちなんでしょうけど、そういうワケにもいかないか」
「ですわね～」

一夏は一夏なりに頑張っている事ぐらいは解ってはいるが、特に《白式・真打》から《白式・影打》に乗り換えた時などまるで自転車

の補助輪を外した時の様な危なっかしさで、正直見ていられなかった。
どういうつもりで篠ノ之博士が一夏に《白式・真打》を送ったのか三人には知り様の無い事だが、これでは一夏の才能を腐らすだけではないのだろうか。

「いっそ、《白式・影打》の方も篠ノ之博士製だったらこんな苦労も無かったんでしょうけど…」
「その辺りは言っても仕方無かろう」
「ですわね…」

はぁ…、と再びため息を漏らすが、これについてもどうしようもない事だ。
第一、現在彼を取り巻く環境の殆どが彼が望んで得た物では無く、状況に流され続けた結果であり、今もなお彼はその状況に流され続けている。
無理もない、とは思う。一国どころか、あらゆる国家の思惑が絡んだ末の事なのだから、彼一人では……いや、彼女ら三人が加わったところで何の足しにもなりはしない。

「それはそうと前々から気になっていたんだが…」
「？　どうかしましたの？」
「四組のクラス代表も代表候補生なのだろう？　なら、何故四組のクラス代表は一夏と模擬戦をしないのだ？」
「ん～、ホラ、ＩＳって絶対数が少ないでしょ？　だから一夏みたいに二機も持ってるなんてまず有り得無いのよ。だから多分、トーナメントが終わるまでは試合する気無いんじゃないかしら」
「なるほど、先に模擬戦をしてしまうと一方的に一夏の方が相手の

戦い方を知っている事になるからフェアじゃなくなるからか」
「そういう事ですわね……と、私もさっきから気になっていたのですが…」
「ん？」
「どうかしたのか？」

自分もさっきまで忘れていたからか、少し後ろめたそうな様子で地面に指を差す。

「…一夏さん、いつ起こしますの？」
「「あ」」

セシリアが指差したその先に、織斑一夏だった物体が転がっていた。

「ちょっ、い、一夏しっかり～！」
「す、すまん！　べ、別に忘れてたワケでは無いのたが…」

結局、一夏が医務室送りになった為に今回の練習は中止となった。
勿論、これでトーナメントまでの貴重な練習時間が無駄に浪費されたのは言うまでもない事である。

第１５話「トーナメント一週間前」（後書き）

う～ん、復帰後だからとかそういうんじゃないと思いますが、自分でも今回の話は何だかイマイチな気がします。
書きたい所までの繋ぎの話じゃ上手く書けないみたいですね、今の自分だと

取り敢えず今回で考察っぽいフェイズは終了し、新キャラ登場フェイズに移行します。
皆さんお待ちかねのあの二人が登場です

第１６話「私は貴様を認めない！」（前書き）

キャラ崩壊注意！

先に謝っときます、ブラッククラビッツ党員の方々、ごめんなさい

第１６話「私は貴様を認めない！」

…ふぅ、全く、この間は酷い目に会ったぜ。
前回久しぶりに（地の文的な意味で）俺のターンだったのに途中でログアウトさせられるとは…。
全く、あの三人は手加減というものを知らないから困る。
ちゃんと絶対防御が働いたから良かった様なものの、唐竹割りに衝撃砲、とどめとばかりに《ブルー・ティアーズ》の一斉掃射なんて喰らったら誰だって死ぬわ！
だがしかし！　今回こそ……今回こそはずっと俺のターンで終わらせてみせる！
え？　新キャラメインで話が進むから俺のターンじゃない？
大丈夫！　地の文的な意味だから！

「お前、さっきから何を誰もいない方向に向かって喋っているんだ？　ついに頭がおかしくなったか？」

ヒデェ…、つ～か、ぶっ叩いたのはアンタでしょうに。

「ほらほら、一夏さん。早く席に着かないとまた織斑先生に叱られますわよ」
「そ～よ。さっさと座んなさい」

いや、自分は関係無いみたいな態度しても無駄だからね？
いくら意識が飛ぶぐらい頭叩かれたからってちゃんと覚えてるからね？

「あ、ホラ、織斑先生来たわよ」

スルーですか、そうですか。

「織斑、さっさと席に着け。ＨＲを始める」

は～い。

と、いうワケで第１６話、ぼちぼち始まります。

「今日はまず、このクラスに転入してくる事になった転校生を紹介する。入れ」

転校生、ね。

うん、じゃあまた毎度お決まりのパターンで模擬戦ですね、解ります。

いやさ、あちらさんは国の命令で来てるんだろうから本人に文句言っても仕方無いのは解ってるんだけどさ、トーナメントの後にして欲しかったね、正直。

なんとな～く《白式・影打》の操縦にも慣れてきたかな～って時にまた模擬戦で《白式・真打》なんか使ったら感覚狂うっての。

「フランスから来ました、シャルロット・デュノアです」

「ドイツ軍所属、ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

まぁまぁ二人してわざわざ遠い所からご苦労様というか何というか…。

おフランスからいらっしゃったデュノアさんは見るからに朗らかそうで、何だか見てて落ち着くわ。

俺の周りの連中、我の強いヤツばっかだし。

んで、ドイツのロリッ娘は見た目通りというかやっぱり軍人さんなのね。

ドイツで軍属のＩＳ操縦者となると……多分、千冬姉の教え子か何かなんだろう。

ってか、現役の軍人さんだったら今更基礎から学び直す必要無くね？

アレか？　対象（俺）について詳細なデータを収拾する為の諜報任務ってヤツか？

ご苦労なこったね、全く。

おや、目が合っ……アレ？　何故にこちらに歩いて来るのかね？

心なしかこちらを睨んでいらっしゃる様にも見えるんだが…。

はっ！　まさか、その眼帯をとったらビームが出るとか考えてたのがバレたのか！？

「私は、認めない…」

は？　認めない？

……あ～、そうか。

この娘もそうなのか。

俺が誘拐されたせいで千冬姉がモンドグロッソ二連覇を逃したんだ、と、今でも珠に熱狂的な千冬姉の信望者の方に言われる事があるんだが、この娘もその口か。

十歳にもなってないガキにプロの誘拐犯から逃げおおせろとか、普通に考えて無理だって解んないのかね、全く。

「…貴様が仮面ライダーであるなど、認めるものか！」

「「「「「「「そっちかよ！」」」」」」」

予想外の言葉にア然とする俺の代わりにクラスのみんなから総ツッコミが入った。

「な…、何故？」

何故にいきなりこの娘はこんな事を口走ったのか、理解できなかった。

「バイクに乗りもしないお前を仮面ライダーだと認められるものか！」

え…、あ！　あ～、そういえば《マシンスライダー》も襲撃事件の時にセシリアを逃がす為に出したっ切りで結局自分で乗って無かったっけ。

いや、まぁ、この娘の言い分も解らなくもないけど、一つ言わせて欲しい。

「お前、仮面ライダーシンに謝れ」
「な！？　あ、アレはまだ序章だから仕方なかったんだ！　本編が始まればきっと専用のバイクに乗るハズだ！　そうだ、そうに違いない！　そうだと言ってくれ！」
「懇願！？」

な…、何なんだ、この娘は！？
キャラが全く掴めない……いや、うん、取り敢えずまた濃いのが来た事だけは理解した。

「あ、あの～、二人とも、そういう話は休み時間にして下さいね～」

ボーデヴィッヒって娘のトンデモ発言に頭を抱えている千冬姉の代わりに山田先生がＨＲを再開させた。
千冬姉のあの様子を察するに、この娘は昔からこういう娘だったのだろう。
ボーデヴィッヒさんがまた教壇の上に戻った所でふと、デュノアさんの姿が目に映る。
多分、さっきの俺達の会話に呆れていたのだろうか、苦笑しながら俺とボーデヴィッヒさんを見ていた。
うん、まぁそれが普通の対応だよね。

さて、時間はすすんで昼休み……え？　授業風景はどうしたって？
実技ならともかく、座学は相変わらずダメダメだからな、千冬姉にあてられる→わかりません→炸裂！　出席簿チョップ！　ぐらいしか説明する事なんてないぞ。
威張って言う事じゃないけどな。

「へぇ～、じゃあやっぱデュノアさんもボーデヴィッヒさんも専用機持ちなんだ？」
「ラウラでいい。私の《シュバルツェア・レーゲン》はただでは負けんぞ？　なんといっても我が国が誇る技術力を結集して作られた機体だからな。覚悟しておけ」
「僕の《ラファール・リヴァイブ・カスタム？》は第二世代機のカスタム機だからみんなの機体ほどパッとしないけどね。あ、僕もシャルロットでいいよ」
「ん、そうか。じゃあ俺の事も一夏でいいぜ」

いつものメンバーに今日転校してきた二人をプラスして昼食を取っているワケなんだが、なんだかラウラもシャルロットも始めから勝つ気が無い様な感じだな。
いいのか、それで。

「戦うからには勝つ……と言いたいところだが、ただでさえあれだけの高性能機を相手にせねばならんのに、毎度の様に新技を出されては堪らんからな。今回は情報収集に徹せさせてもらうさ」
「ん、そうか……って、何故俺の考えてた事が解った？」

「フフフ、昔教官が一夏ほど考えている事が顔に出るヤツも珍しいとおっしゃられていたが……どうやらホントのようだな」

え？　俺そんなに顔に出てるの？　って、皆して頷くなよ…。

マジか、今度から気をつけよう。

「…無駄だと思うがな」

ぐあ、早速バレてるし。

……このまま不利な状況が続くのも精神衛生上よろしくないんで話題を変える事にしよう。

これは敵前逃亡ではない！

戦略的撤退である……って前にも言ったな、コレ。

「そうえば一人称が僕なんて珍しいな」

「あぁ、ソレね。僕もちょっとおかしいんじゃないかって思うんだけど、なかなか癖が抜けなくてさ」

ふむ、やっぱ外国人に日本語は難しいんだろうか。

俺だって日本語以外は喋れないし。

「それがさ、今じゃもう笑い話にしかならないんだけど……一時僕の事を世界で二人目の男性ＩＳ操縦者って事でデビューさせる予定だったんだ」

「は？」

「へ？」

「そ、それは何故ですの？」

何故に男性ＩＳ操縦者？

アレって束さんがそうしないと成れ無いハズなんだが……って、

そうか。
世間様はそういう裏事情知らないんだっけか。
にしても勇気あるね、おフランスの人は。
バレたら世界中からフルボッコじゃん。

「まだその時は一夏が篠ノ之博士からＩＳを直接渡されたって情報が入っただけで、それがどんなものかまではうちの会社も知らなかったからさ、二人目の男性ＩＳ操縦者なら一夏に近付いてデータを盗み安いだろうって」
「そうか、お前はデュノア社の人間だったか」
「うん、そう」
「デュノア社？」

俺が何の会社？　みたいな顔をすると皆して「え！？　知らないの？」みたいな反応するんだが、…え？　そんなに有名なとこなの？

「そ、そういえば一夏はこの間までＩＳと関わりの無い生活してたんだよね？　一応、うちの《ラファール・リヴァイブ》は世界第三位のシェアを誇ってるんだけど…」

あ～、はいはい、あの《ラファール》のね。
で、そのデュノア社がどうかしたのかね？

「他のみんなは知ってると思うけど、いくら《ラファール・リヴァイブ》が第二世代機の中で優秀な機体とはいえ、所詮第二世代機なんだ。他の国は試作機とはいえ既に第三世代機を開発出来ているのにうちの国は…デュノア社はまだ開発の目度すら立っていない」

「なるほど、それで一夏の《白式・真打》のデータを盗んで第三世

代機開発の足掛かりにしようとしたワケか」
「うん、でもまぁ第三世代機すら作れないうちの会社が、あの篠ノ之博士が直接作った機体のデータを盗んだところで再現できるハズ無かったんだ。……初めて映像で《白式・真打》を見た時の社員の慌て様ときたら、もうこの世の終わりってぐらいの大混乱だったよ。それで計画は初期段階で中止になって、取り敢えずこれ以上他の国との差が開く事だけは避けたいからって他の国みたいにここに代表候補生を送り込む事になったんだけど、一応、デュノア社は国内で一番大きな会社だったからね。ＩＳ学園行きのチケットを賭けて代表候補生同士で戦う選抜試合に出場出来る様になったから出場してみたら、何の間違いか知らないけど真っ当な代表候補生を押しのけて僕が優勝しちゃったからここに来る事になったんだ」
「ふ～ん」
成る程ねぇ…まぁ、技術チートな束さんの作品をまるパクりだなんて無理だよな、普通。
「いや、ふ～ん…って、一夏、極端に言えば僕、スパイなんだよ？解ってるの？」
「ん、まぁそうなんだろうけどさ。…でも、シャルロットは乗り気じゃないんだろ？」
「なんでそう思えるのさ？」
「なんでって、俺、ブリュンヒルデの弟だぞ？　悪意があって近付いてくる人間とそうでない人間を見分けられるぐらい出来るさ」
そう、千冬姉の名声が高まれば高まる程、あらゆる意味でその名声のお零れに与ろうとする輩は増えていく一方だった。
当然、その矛先は俺にも向いて、遂には誘拐事件に発展したりもしたんだが、今更だしな。
それに、こういうとアレだが、仮にシャルロットが同情を引く為に

身の上話をしたのだとしても下手くそ過ぎる。
多分、シャルロットが本気でデータを盗みに掛かったとしても必ず何処かでボロが出て失敗するだろうし。

「いや、うん、仮にシャルロットがスパイだったとして、同情を引く為にさっきみたいな話をしたんだとしてもさ。それ、俺と二人っきりの時ならともかく、この代表候補生だらけのメンバーの中でそんな話したら俺が何もしなくても勝手に皆が牽制し合って結局上手くいかないと思うぞ」
「そうだな」
「そうよね」
「ですわね」
「全くだな」

皆もそう思っていたのだろうか、俺の言葉に同意してうんうん頷いていた。

「それにさ、箒は…まぁ、代表候補生じゃないからともかく、他の皆も《白式・真打》と俺のデータ取って来いって国から言われてるんだろ？　だからシャルロットも一々そのぐらいで気にする必要無いと思うぞ」
「そうかな…」
「そうそう」
「…一夏は逞しいね」
「いや、なんていうか今更だしなぁ」

俺がそう言うと、皆苦笑いを浮かべる。

皆は仕事で来てるんだし、何か危害を加えられでもしない限りソレ

を俺は咎める気は無い。
今こうやって後ろめたさで苦笑いを浮かべるしかない皆の様子を見るだけで悪い娘達でない事が解るからそれで十分だ。

それにしても、最初は箒と二人っきりだったのに、いつの間にやらこうやって同じテーブルを囲って食う連中が増えて、随分賑やかになったもんだ。
いい傾向だとは思う。
確かに、俺達の背後には国の利害が複雑に絡んでいる。
でも、それでもこうやって大勢で和気あいあいと食卓を囲む事が出来るのだから、そんな事はどうだっていい。
俺を養ってくれていたとはいえ、千冬姉も留守が多かったし、そう毎日毎日箒や鈴の食卓に転がり込むワケにもいかなかったから、小さい頃から一人で飯を食う事が多かった。
だから、家族ってワケじゃないけど、こうやって大勢で食卓を囲むってのは憧れでもあったんだ。
こんな日々がいつまでも続けばいいなと思う。
こんな風に、皆と仲良く過ごしていける日々が続けば、と。

キーン　コーン　カーン　コーン

「「「「「「「あ゛」」」」」」」

少々、長く話過ぎたらしく、午後の授業の予鈴が無慈悲に鳴り響く。
当然、急いで掻き込んでも間に合うハズも無く、早速六人揃って仲良く千冬姉の首席簿の餌食になったのは言うまでもない。

第１６話「私は貴様を認めない！」（後書き）

ラウラとのライダー談義は前々からやりたかったネタだったので、取り敢えず話をそこまで進める事が出来て満足です（笑）

第17話「覚醒」（前書き）

前回のラウラさんのセリフ、ウケ狙いだったとはいえあまりにもウケが良すぎてこっちが吹きました（笑）

第17話「覚醒」

「やめるんだ信彦（ラウラ）！」
「私と戦えブラックサン（一夏）！」
「…どうしても、戦うしかないのか！？」

「……あの二人は何をしていますの？」
「…仮面ライダーごっこかしら」
「…あ、あははははは」
「えぇいっ！真面目にやらんか！二人とも！」

っと、そろそろ外野が五月蝿くなってきたので真面目にやるとするか。

放課後いつも通りクラス代表トーナメントに向けた実戦訓練となったのだが、今日の相手はラウラだった。
俺の予想としては今日の放課後はお決まりのパターンで代表候補生のＩＳ対《白式・真打》で模擬戦やらされるのかと思ってたんだが、ラウラもシャルロットもデータなら後からでも取れるからと、こうしてトーナメントに向けた練習に付き合ってくれているのだ。
今朝の事もあり、こうしてネタを振ってみたんだが思いの外ラウラもノリノリでやってくれたので、気付けば二人して本気で仮面ライダーごっこに熱中してしまっていた。

多分、箒に怒鳴られていなかったらこのまま創世王を決めるところまでやっていたかもしれないだろう。
危うく貴重な練習時間をまた無駄に浪費するところだった。
危ない危ない。

「全く、一夏さんときたら……せっかく私達がついているのですから、もう少し真面目にしていただきませんと。本番までもう三日しかありませんのに…」
「まぁ、張り切り過ぎて本番前に怪我されるよりはいいんじゃないかな？」
「…そうよね、確かに問題よね」
「ほら、鳳さんだって…」

トーナメントまでの練習時間はもう殆ど無いのだから、そういう面ではセシリアの言い分も最もではあるが、残りの日数で劇的な変化を望めるワケでもないので、本番前に根詰め過ぎて怪我をしては本末転倒なので、シャルロットの意見も正しくはあった。
要するに一夏が真面目に怪我をしないように訓練に取り組めばいいだけの話であって、どちらの方が正しいという問題ではない。
一応、彼を擁護するなら、トーナメント本番が近付いた事によって緊張してガチガチにならないように緊張を解そうとしていただけで、ただ単にふざけていたというワケではないのだが。

「どっちかって言うと一夏がシャドームーンでラウラがブラックサ

ンでしょ、色的に」
「って、そういう問題じゃないでしょう！」
「いや、そうでも無いぞ。サタンサーベル（雪片弐型）を握る以上、やはり一夏がシャドームーンだろう」
「ちょっ、篠ノ之さんまで何を言っているのですか！」
「あははは…（だ、大丈夫……なんだよ、ね？）」

ダブル幼なじみのボケに振り回されるセシリア、そして未だに仮面ライダーごっこをしている一夏達を見るシャルロットは、ただ渇いた笑いを浮かべるぐらいしか出来なかったのだった。

「さて、時間も押している事だ、そろそろ真面目にやるとしようか」
「おいおい、俺は最初っから真面目だぜ？」
「ふ…、言ってろ」

そう言ってラウラが手刀を構えると、ぼうっとその手が光だし、やがてバチバチと音を立てて帯電しだした。
それに合わせて、俺も《雪片弐型》を構える。
一瞬だけ睨み合い、そしてお互い同時に飛び掛かった。

「おぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」

雄叫びと共に振るった刀をラウラは全く速度を落とさないどころかかわそうとすらしない。
まるで蛇の様に左手だけがスルりと俺の懐に潜り込み、刀を止めるのでは無く寧ろ振り切らせるかの様に誘導させながら俺を引き寄せる。
勿論、振り切らせた刀で自身を斬らせる様なヘマはせず、真横に振り抜くハズだった刀は上空にある物体を切り裂くかの様に誘導され、気付けば胴体ががら空きになってしまっていた。

「しまっ」
「…遅い！」

受け止めるのでは無く流す様な動作でがら空きにされた俺の腹にプラズマを纏ったラウラの手刀が炸裂する。
ラウラの猛攻はそれだけでは止まらず、鋭い痛みに思わずくの字に折れ曲がった俺の身体に容赦なく両手の手刀を連続で突き刺し、最後に右肩に浮かぶレールガンの零距離射撃を以って俺を吹き飛ばした。

「が…はっ」

くっ…そ、殆ど見えなかったぞ、今の。
右腕ごと刀の軌道を逸らされたのは何となく感触で解ったが、早業過ぎて殆ど目で追えず、気付けばめった打ちされて地面に転がっていた。
やっぱ本職の軍人さんは違うな。
セシリアは射撃向きだったからまだしも、近接戦闘を得意としている鈴よりずっと早くて正確に痛い所を突いてくる。
いくらシールドバリヤーに守られているとはいえ、ある程度は通ってしまう衝撃の全てが間接だとか身体の柔らかい部分に突き刺すか

の様に襲ってくるのだ。
多分、ラウラはまだこれで本気じゃないんだろうが、もし本気でやられていたら例えシールドエネルギーが有り余っててもたちまち行動不能にされてしまうだろう。

「…もう終わりか？」
「まさか」

立ち上がってまた刀を構え直したまではいいが、正直どうすればいいのかわからない。
確実に、また突っ込んで行けばさっきと同じ展開になるだろう。
…どうする？
……どうすればいい？

「来ないのなら、今度はこちらから攻めさせて貰う！」
「！」

言うや否や、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で一気に俺の眼前まで迫って来たラウラと目があった。
あと一歩で唇が触れ合うほどにまで接近したラウラが不適に笑い、
そして…

「跳べ」
「へ？……ぐぁっ！」

蹴り上げられた膝が見事に俺の鳩尾に炸裂し、上空に飛ばされそうになったかと思えば今度は急に足を強引に引っ張られるような感覚

が両足を襲う。
いつの間にか両足に絡みついていたワイヤーカッターによって慣性のままに吹き飛ばされる事を許されなかった俺は、今度は打ち上げられた時と同等かそれ以上の速度で地面叩きつけられた。

「が……ぐぅ…」

ヤバい。
さっきから痛みで意識が朦朧としたところを別の痛みで叩き起こされている様で辛い。
痛みを堪えながら起き上がろうと顔を上げるとラウラと目が合った。
どこか苛立ちを感じさせる様なその視線にたじろぐ。
不思議とその怒りが俺が弱い事そのものに対してのもので無い事が解ったが、ラウラが何に腹を立てているのか、全く見当が着かなかった。

「どういうつもりだ…」
「な、何を…」
「何故、《零落白夜》を使おうとしない？」
「それは…」
「何を、躊躇っている？」

まるで全てを見透かしたかの様なラウラの視線が俺を射抜いた。
酸素は十分足りているハズなのに、ナイフを首に突き付けられたかの様な錯覚に支配され、息苦しさに喘ぐ。

「エネルギーを消費するから、なんて詰まらん言い訳はしてくれるなよ？　いくら《零落白夜》が能力と引き換えに自身のシールドエネルギーを消費するとはいえ、ただ刀に纏わせて置いたぐらいでそうすぐにエネルギーが尽きるものか。私の攻撃だってわざと痛みを

感じ安い所を狙っただけで実際にお前が感じているほどエネルギーは消費していないハズだぞ」

そう言われて、初めてシールドエネルギーが余り減っていない事に気付いた。

あれだけの猛攻が嘘の様に消費エネルギーが少ない。

…なのに、この激痛は何なのか。

「わからない、という顔をしているな？…お前の様なルーキー相手ならともかく、実戦では敵の攻撃を全て回避しきるなんて到底不可能だ。なら、どう上手く敵の攻撃を防御するかが実戦で重要になってくるのは当然だろう？　その防御術を応用してＩＳを傷付けずに操縦者のみにダメージを与え、敵機を捕獲する。そういった戦術があるのだよ、我がドイツに限らず何処の国にもな。今回それをお前に披露してやったというワケだ」

一旦言葉を区切り、視線に宿る怒気を強める。

「もう一度、聞く。何故《零落白夜》を使わない？　いや、そもそも何故刀を振るう事自体を躊躇う？」

「……俺が、躊躇っている？」

《零落白夜》の事ならともかく、俺が刀を振るう事自体を躊躇っているだと？

「気付いていなかったのか？　私が潜り込む前からお前の最初の一振りは減速していたんだぞ」

「なん、だって…？」

「篠ノ之博士が何故お前にその二機を託したのかは知らんが……

大方、《白式・真打》の過剰威力を《零落白夜》の能力と混同しているのだろう？　お前は。確かに《零落白夜》のシールドバリヤーを含め相手のエネルギー兵器を無効化できる能力は驚異だが、”それだけ”だ。今使っている機体が《白式・真打》ならお前が危惧する様に相手を殺してしまう可能性も格段に上がるだろうがな、《白式・影打》は学園側が用意した機体だぞ？」

「あ…」

「お前の様な初心者が競技用にリミッターがついた機体で相手を殺してしまうなんて土台無理な話だ。第一、《白式・真打》の武装の殺傷率の高さは元の威力が異様に高い上に篠ノ之博士以外にリミッターを掛けられる人間がいないからであって、《零落白夜》のバリヤー無効化などただのおまけに過ぎん。それに、威力さえ足りていれば他のＩＳだって別に《零落白夜》の恩恵を受けずとも相手を殺す事ぐらい出来るんだぞ。そんな事で一々躊躇うな」

「なっ、そんな事って…「お前が思っている以上に、お前の価値は重い」…？」

さっきまでの怒気が嘘の様に、哀しみを、或は悔しさを浮かべながらラウラは続けた。

「お前は他の生徒とは違う。他の生徒なら卒業後の進路を自分で選ぶ事ができる……それが叶うかどうかは別としてな。だが、お前には選択権など無い！」

「なっ…」

…そうだ。

……そうだった。

唯一の存在である限り、俺は……。

「この学園を卒業したが最後、お前はあらゆる国家や企業、そして

犯罪組織にも追われる事になるだろう。お前一人の為だけにこの国を戦火で焼き尽くす事になる場合だって有り得る。日本やそれ以外の諸外国だってお前を恭順させる為ならお前が親しくしている人間をなんの躊躇いも無く利用するだろう。私達だってそうだ。お前を手に入れる為に私達を使わないハズがない」

「そんな…」

「大袈裟な話ではないぞ。これらは未来に起こりうる……いや、確定された未来だと言ってもいい。なのにお前がそのていたらくではすぐにどこかに捕まってしまって実験動物として飼い殺されるのがオチだぞ？……お前がそれでいいと言うのなら、もう私は何も言わない。だが、そうでないのなら覚悟を決めろ」

「覚、悟…」

「そうだ。お前が自ら選んだ道を進む為の覚悟を、その道に進む為に親しき者すら切り捨てる覚悟を」

親しい人達を……千冬姉を、束さんを、箒を、鈴を、弾を、蘭を、セシリアを、シャルロットを、ラウラを、皆を、切り捨てる？

そんな事、出来るハズが無い…。

そんな事をする為に力を手に入れたんじゃない。

国の利害なんて、そんなつまらないものに振り回される為に俺は束さんの計画に加担したんじゃない！

皆を…、大事な人達を守る為にこの力を手に入れたんだ！

その為に得た力で皆を切り捨てる？

そんな事、していいハズが無い！

もう誰も失いたくないと、今度こそ守って見せると、あの時誓ったのはお前だろう？　織斑一夏！

いい加減思い出せよ、いつまで寝ぼけているつもりだ？

力は得た。
なら後は守るだけじゃないか。
何を躊躇う事がある？
あの時全てを奪った連中に、また奪われるつもりか？

「…そんな事は、させない」
「？」
「あぁ、やっと”思い出した”よ。…そうだ、そうだった。俺はこの為に、力を手にしたんだったな」
「何を言って…」

一夏の豹変に気付いたのは、ラウラだけでは無かった。
箒も、鈴も、セシリアも、シャルロットも、それぞれ一夏と過ごした時間に差はあれど、そんな事は関係なく、恐らくは一夏とあまり関わらないクラスメイトですら気付くであろう変化に一同は戸惑うしかなかった。

「い、一夏さん？」
「ホントに一夏なの？」
「男子、三日会わざるはとは言うが、これは…」
「そんなレベルの話じゃないわよ、コレ」

戸惑う少女達をよそに、再び一夏が構える。
その構えは相変わらず素人臭ささが抜けていなかったが、纏う雰囲気がまるで違った。
殺気とは違う、どこか凄みを感じさせる視線に、今度はラウラがたじろぐ。
次第に増していく凄みが視覚化されたかの様に、《白式・影打》の機体が輝き出し、その姿を変えていく。

「二次移行(セカンド・シフト)!?　このタイミングで!!?」

光が収まったその先に、巨大化したウイングスラスターが羽ばたく。
翼と同じく各部のアーマーはその姿を改め、特に巨大化した左腕のクローが異様に目を引いた。

二次移行(セカンド・シフト)の様な変化ではなく、復元。
この姿こそが、《白式・影打》の真の姿であり、操縦者の覚醒に応え、その役目を果たすべく、あるべき姿へと戻ったのだ。

「…仕切り直しだ。俺の覚悟を思い知れ」

第17話「覚醒」（後書き）

大学の授業が始まったので更新のペースが落ちるかもしれませんが、極力このペースを保ちたいと思います。

第１８話「『彼』」（前書き）

だいたいオリジナル展開過ぎる話は今回で消化できたので、次回からは少し原作側に軌道修正出来そうです

第18話「『彼』」

彼の思いは覚悟へと昇華した。

彼の覚悟に応え、《白式・影打》は真の姿を取り戻した。

……そして、『彼』が目醒めた。

「…ああ、懐かしいな」

先程までの凄みが嘘の様に『彼』はラウラに向かって微笑む。
その顔はどう見ても織斑一夏のものなのに、全くの別人の様で、酷く不気味だった。
それは練習を見ていた少女達にとってもそうで、誰も『彼』を織斑一夏と認識出来ない。

「…お前は、誰だ？」
「ん？　誰って、織斑一夏だけど」
「そんな馬鹿な事があるか！　一夏は、織斑一夏は…」

こんな風に、まるで子供をあやすかの様な表情を自分に向けるハズが無い。
自分だけではない、ピットからこちらの様子を伺っている少女達に向ける目だってそうだ。
こんな風に、大人が子供を……まるで自分の娘に向ける様な目で自分達を見る様な男では無かった。
国の事情などお構いなしに、まるで本当の友人の様に、対等の存在として接してくれた彼が、こんな……。

「ふざけるな！　一夏を返せ！」

横薙ぎに払った手刀は紙一重でかわされてしまい、驚愕で一瞬とはいえ出来てしまった致命的な隙を……突かなかった。
『彼』はただ、微笑んでいるだけ。

「はあああああっ！」

後から切り掛かった鈴の斬撃を見る事も無く、ほんの少し前に出るだけでかわす。
確かにどのＩＳもハイパーセンサーによって死角をカバー出来る様になっているが、初心者だった一夏にこんな芸当、出来るハズが無かった。

「鳳！」
「気をつけて！　コイツ、前みたいに…！」

《白式・真打》が二次移行（セカンド・シフト）したあの時の様に、一夏の身体を乗っ取って、と言い切る前に、

「とにかく！　今は一夏さんを！」

放たれた《ブルー・ティアーズ》のビームすら全てかわされ、

「掛かった！」

囮だった《ブルー・ティアーズ》のビームに気を取られている隙に瞬時加速（イグニッション・ブースト）で急接近し、打ち出したパイルバンカーすらかわして、

「嘘っ！」

それでも『彼』は、ただ微笑んでいるだけだった。

「うんうん、皆元気そうでなによりだな」

余裕の現れなのか、『彼』は腕を組んで満足そうに何度も頷く。

他の誰かだったなら、まるで父親の様か何かの様なこの振る舞いも許せただろう。

だが、他でも無い彼が、織斑一夏が、こんな風にまるで弱者に対する余裕を見せるのが気に入らない。

彼こそが弱者で、……それでも、必死になって努力する彼が、好きだったのに。

誰かに頼って、頼られて、彼の周りにいるだけで笑い会えた、そんな彼が。

たった一人で立って（完成して）いる姿なんて見たく無かった。

こんな風に、誰もを突き放すかの様な笑みを浮かべる顔なんて、見たく無かった。

「一夏！」
「ん？　箒か？……あぁ、まだ専用機は持って無かったんだっけ」
「何を言って……いや、それよりいったいどうしたというんだお前は！　そんなの、お前らしく…」
「…『俺』らしく無い、ね。まぁ、言いたい事も解らなくは無いんだが……一応、俺だって織斑一夏なんだし、あんまりそう言われると流石に傷付くぞ？」

おどけて見せるその仕草は彼そのものなのに、目の前の『彼』はどうしてこんなにも違うのか。

「五月蠅い！　一夏の声で喋るな！」
「ちょっ、鈴。酷くないか、それ？」
「私の名前を呼んで良いのはアンタなんかじゃない！　返してよ…一夏を返してよ！」

泣き出してしまった鈴を見ても、『彼』の表情は微笑みから困った様な笑いに変わるだけだった。
彼なら、いつもの彼なら、慌てて慰めようとして、結局どうしていいか解らずアタフタして、そんな彼があんまりにも情けなくて、そんな彼を見ていると、なんだか泣いているのが酷く馬鹿らしく思えていつの間にか泣き止んでしまうのに。

「そりゃあ…まぁ、あの時の事は悪かったけどさ、アレは鈴があんな威力で頭ぶっ飛ばしたりなんかするから同調が崩れたせいなんだし、半分はお前のせいだぞ？」

一応、公表出来る範囲の情報とはいえ、ここにいる少女達は《白式・真打》と《甲龍》の交戦時のレポートは読んでいる。

だから、何となく『彼』が何を言いたいのかは見当が着いた。

「……貴方が《白式》ですの？」

「いや、違うんだが……まぁ普通そう思うよな」

「なら、貴方は一体……」

何なのか。

「最初に言ったろ？　織斑一夏だって」

「でも、君は一夏じゃ…」

「あぁ、確かに俺は君達の知ってる織斑一夏じゃない。でも、俺も織斑一夏だ」

『彼』の事が解らない。

《白式》の意思でもなく、彼でもない『彼』は自分も織斑一夏だと名乗った。

それでいて、彼とは違うと。

「仮に、僕達が知らなかっただけで、一夏が二重人格だったとして。どうして今出て来たの？　目的は何？」

「やっぱりシャルロットは鋭い。鈴みたいに頭ごなしに否定せずに目的なんて聞いてくるんだもんな。……まぁ、厳密には二重人格じゃないんだが、……まぁ、別にその辺りの説明はいいか。目的は……う～ん、強いて言うなら間に合いそうに無かったから、かな」

「僕達が教えるだけじゃトーナメントに勝てないって言うの？」

「そんな些細な事を言ってるんじゃないんだが……まぁ、それもかな」

シャルロットは出来るだけ情報を多く集めようと、冷静だった。

だが、隣に立っていたセシリアの方が先に限界を向かえてしまう。

シャルロットより一夏との付き合いが長いセシリアだからこそ、本人なのに別人の様な違和感を振り撒く存在を許容出来なかった。

「やっぱり、貴方は一夏さんではありませんわ。一夏さんは……私達の知ってる一夏さんは、一つ一つの物事にいつもいつも一生懸命で、こうして皆で取り組んで来た事を些細な事だなんて言いませんもの」

表情だけは冷静に、それでも怒気は隠し切れず、或は隠す気も無いのか、いつもの丁寧な口調から威圧感を滲ませながらセシリアが言い放った。

「はぁ～。ここまで慕われているアイツを褒めてやるべきか、ここまで嫌われてるのを嘆くべきか……。で、皆は俺がここにいるのは反対なワケ？」

「ああ」

「あったりまえでしょ！」

「当然ですわ！」

「僕も、いつもの一夏の方がいいな」

「貴様の様なすかしたヤツより、アイツの様に抜けたところのあるヤツの方が鍛え甲斐があるというものだ」

口々に答える少女らに苦笑を漏らし、その笑みを獰猛なものに変え、

「…なら、俺を倒してみせろ。月並みだが、それぐらいしてもらわないと安心して眠れやしない」

そう言い放ち、刀を抜いた。

「こんのぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」

まず動いたのは鈴だった。
フルスイングで振るわれる《双天牙月》の斬撃を『彼』は《雪片弐型》で軽くいなす。
その表情は相変わらず余裕で微笑んでいたが、今度は鈴も笑っていた。
《龍咆》から放たれる衝撃が『彼』の鼻っ柱を正確に捕らえる。

「痛っ」
「よそ見をしている場合では無くてよ！」

痛みに悶える暇も与えず、セシリアの《ブルー・ティアーズ》のビームが襲い掛かる。

「！？」
「私を忘れて貰っては困るな」

あらかじめビームがかわされるのを読んでいたラウラのＡ．Ｉ．Ｃが『彼』の動きを封じ、全てのビームが直撃、更に畳み掛けるように放たれた衝撃砲とレールガンが『彼』を襲う。

「今度こそ決める！」

トドメに叩き込まれたパイルバンカーをもろに喰らい、『彼』は地面へ落ちていった。

「あいたたた。効いた効いた。今のは効いたよ」

あれだけ攻撃を叩き込んだのにも関わらず、『彼』はまだ健在だった。

ビームや衝撃砲を《零落白夜》を纏わせた《雪片弐型》で受けたせいだろうか、思いの外ダメージが少ない。

それでも、流石に全方位からの攻撃を捌き切れなかったのか、所々破損しており、特に左のウイングスラスターが大破させることに成功したのは大きな収穫だろう。

「な～にが、効いた効いたよ。だったらもっと悔しそうな顔しなさいっての」

そう言う鈴の方が悔しそうにしていた。

口には出さないものの、他の皆も同様に苦虫を噛み潰した様な顔をしている。

「まぁまぁ、そんな顔しなさんな。皆せっかく美人さんなんだからさ、どうせなら笑ってた方がもっと綺麗だぞ？」
「貴方に言われても嬉しくありませんわ」

「そりゃ、残念」

軽口の応えとして放ったビームも、難無く切り払われた。
なのに、セシリアは不敵に笑う。
ビームを切り払う動作と同時にラウラがワイヤーカッターで足を絡め取り、さらにA．I．Cによって二重に拘束、動きが止まったところでシャルロットが残った右のウイングスラスター目掛けて射撃兵装を一斉掃射する事によって破壊し、トドメとばかりに鈴の《双天牙月》による唐竹割りが…

「さっきのといい、今のといい、即席のコンビネーションにしては良く出来てるけど…」

…左のクローによって受け止められた。

「…まだ、及第点はやれんな」
「なっ」
「馬鹿なっ！　A．I．Cは今だって…！？」

《双天牙月》を受け止めたクローが、左腕ごと輝く。
そう、この輝きこそが…。

「《零落白夜》か。だが、左腕しか動かせない貴様に何が出来る！」
「何って…、そうだな。ならこんなのはどうだ？」
どう見ても絶体絶命な状況にも関わらず、『彼』の笑みは変わらない。
それどころか、その状況すら楽しんでいるかの様で、不気味だった。
クローが大きく開かれ、掌から砲門が延びると同時に砲門から真っ赤な光がほとばしる。
そして、何気ない動作で左腕を大きく横に振るった。
振るわれた左腕から延びる光が少女らを襲う。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「ぐぅぅぅっ！」
荷電粒子の熱戦がシャルロットとラウラを捕らえ、それぞれシャルロットは咄嗟に防御しようと突き出した両腕のアーマーを破壊され、ラウラはワイヤーカッターを焼き切られた上にレールガンを破壊されてしまう。
ラウラがレールガンの爆発に気を取られ集中を解いてしまい、A・I・Cの束縛から脱出した『彼』は今度はセシリアに襲い掛かり、縦一文字にセシリアを切り裂き、助けに入ろうとした鈴を一閃の勢いのまま投擲した《雪片弐型》が鈴の両足のアーマーを切断した。
『彼』はたった一発の砲撃で戦局を崩し、瞬く間に少女らを窮地に立たせて見せたのだ。
「ちいっ！」
比較的損傷が軽微だったラウラがプラズマ手刀で切り掛かるが逆にあっさりと切り裂かれ、トドメとばかりに《雪羅》のクローが振り

かぶられる。
そして、振り下ろされたクローが無慈悲にラウラを切り裂く…

「やらせるかぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「篠ノ之！」
「箒か！」

…事は無かった。
箒が使用している《打鉄》はあくまで学園が保有する練習機であり、代表候補生が使用している様な専用機と渡り合う程の性能は望めない。
四機もの専用機を相手取る様な機体に真正面から挑むなど以っての他だ。
だから、ずっと息を潜め、機会を伺っていた。

代表候補生達とは戦闘中にプライベートチャンネルで打ち合わせを済ませ、箒に注意が向かない様に、無謀でも彼女らは『彼』に挑み続けた。
たった一度きりの、チャンスを掴む為だけに。
専用機を持たないが故に『彼』が戦力外と認識していた箒だからこそ、突く事が出来た隙。
その隙を彼女は逃す事無く、一刀の元に《雪羅》を切り落とした。

「くっ、この！」
「やらせはせん！」

箒を切り裂こうとした《雪片弐型》はラウラによって再び展開されたA．I．Cによって捕らえられ、動きを止める。

「今だ！　篠ノ之！」

「箒！」
「篠ノ之さん！」
「箒さん！」

「…返してもらうぞ、私達の一夏を！！！」

振り抜いた刀は《白式・影打》を肩から切り裂き、切り裂かれた箇所からは激しい火花が散り、『彼』は膝から崩れ落ちる。
ついに《白式・影打》のシールドエネルギーは底を着いた。

「…私達の、勝利だ」
「……あぁ、俺の負け、だな」

戦闘が終わり、全員それぞれのＩＳを解除し、集まる。

敗北し、大の字に倒れたままの『彼』の元へ。

「どう？　これで安心して消える気になった？」

「まぁ、な。今回は引き下がってもいいって思えるぐらいには安心したよ」

「…結局、お前は何なんだ？」

「それは言えない。まだ、時期じゃないからな」

「時期だと？」

「あぁ、その時が来たら嫌でも解るさ。…はぁ、全く、コイツがダメになった時の為に前々から準備して来たってのにお前が変に揺さぶったりするから…」

「なっ、いや、アレは…」

「確かに、コイツの将来はお前の言う通りになるだろうさ。だがな、そういう覚悟はコイツが自分のペースで勝手にするもんだろうに。お前達は状況に慣れる期間があったんだろうが、コイツは急に世界規模の話を押し付けられてもういっぱいいっぱいなんだからさ、あんまり追い詰めないでやってくれや。じゃないと、また俺が表に出ちまう」

「う、うむ。善処する」

「そいつは結構……っと、そろそろ時間か。まぁ、コイツが友人に恵まれてるって解っただけ儲けもんかな。……あぁ、次に表に出る時はプレゼントでも用意するから期待して待っててくれ」

「一生、出て来なくて結構です」

「うん、僕もずっといつもの一夏のままの方がいいな」

「釣れないねぇ…全く。……アイツを頼む。知っての通り、情けないヤツだからな。お前達が支えてやってくれ」

「ああ」

「勿論よ」

「当然ですわ」

「任せて」

「言われるまでも無い」
「……そうか、それは良かった。…じゃあな、お休み」
こうして、『彼』は再び長い眠りに着いた。

次に目覚めた時にはいつもの彼に戻っていたが、彼は機体が変化する辺りからの記憶がスッパリ抜け落ちており、彼女らもあえて何があったかは告げず、訓練中に気絶したと説明した。
これ以上彼に負担をかけて、また『彼』が現れ無い様に。

「『フラグ４　《白式・影打》の覚醒、確認』っと。うんうん、いいペースでフラグ回収してるみたいだね、いっくん」
地図には無い何処かで、とある女性がディスプレイに向かって呟いた。
女性の名前は篠ノ之束、ＩＳの開発を以って世界を変えた大天才。
ウサミミカチューシャにワンピースという、一人不思議の国のアリス状態な、常人が見ればとち狂った格好をしているとしか思えない様な服装をしているが、彼女はこの格好がお気に入りだった。

「それにしても…、私にバレない様にこんな仕掛けをしてただなんて、流石だね『いっくん』」
「あぁ、言ったろ。また会おうって」
「うんうん、ちゃ～んと覚えてるよ。でもまさか本当に約束守ってくれるだなんて、思ってもみなかったからさ～」

あんな状況じゃあ、守れないような約束だったし。
とまでは言わない。
言わなくても伝わっていると解っているから。

「…約束、したからな。一人にしないって」
「も～、『いっくん』たら～」

束さん照れちゃう！　と、赤らめた頬に両手をあてて照れる束に『一夏』は微笑む。

誰にも邪魔される事の無い、二人だけの空間。
久方ぶりの再開を心から喜び、その喜びを分かち合う。

第１８話「『彼』」（後書き）

漸く、二つの白式と二人の一夏が出揃いました。
さてさて、『彼』の正体を明かせるのはいつになる事やら…

第１９話「トーナメント当日」（前書き）

今回から始まる「激闘！　クラス代表トーナメント編」のプロローグという事で短めとなっております。

渇いた心に潤いを、という事で今までの妙なシリアス路線から一転、いろんな意味ではっちゃけるつもりなのでご了承下さい。

第１９話「トーナメント当日」

どうもシャルロットとラウラが転入して来た日の記憶がはっきりしない。
ラウラと仮面ライダーごっこしてた辺りまでは覚えているんだが、そこから先があやふやだ。
多分、また例によってボコボコにされたんだろうが、ラウラが言うには《白式・影打》が二次移行（セカンド・シフト）した途端に俺が気絶してしまったのでその日の訓練はそれでお開きになったんだとか。

《白式・真打》の時もそうだが、操縦者の意識を飛ばす様な二次移行（セカンド・シフト）って何なんだよ、一体。
成長痛か何かかっての。

まぁ、機体がパワーアップした事自体は素直にうれしいと思う。
明確に強くなったのが解るからな。
だがしかし、いつもなら手放しに喜ぶところなんだが、そうは問屋が許さないというか何というか、

？シャルロットとラウラが転入して来たのはトーナメント三日前である

？気絶した俺が目を覚ましたのはトーナメント前日の晩である

つ・ま・り、結局最後の最後まで訓練なんて録に出来無かったってワケだ。
はい、現在進行系で大ピンチです、俺。
一応、皆とはとりあえず同じ一年同士の事だけ考えようって事で、

四組にいる代表候補生との対戦に向けた訓練をしてきた……もとい、したかった。
が、しかし結果的になんやかんやで録に訓練時間が確保出来無かった。
更にいえばトーナメントは別に学年毎に分けるのではなく三学年合同で行われるので勝ち進めば勝ち進むほど二年三年のお姉様方と当たる可能性が大きくなってくるのだ。
いや、最初から上級生と当たる可能性だってある。
極めつけに二次移行（セカンド・シフト）した後の慣らし運転もしてい無いっつ～か気絶してたから出来るハズも無いので細かいパラメーターの調整なんか全くやって無い。

……何コレ？

……正直、勝てる気がしないんスけど。

「そう辛気臭い顔をするな。この私が訓練をしてやったのだ、お前が負ける道理など無いさ」

いや、貴女とは仮面ライダーごっこした記憶しかありませんからね？　ラウラさん？

「わ、私だって剣術を…！」

ごめん箒、一方的にボコられた記憶しか無いわ。

「せっかく私が相手になってあげたんだから、負けたら承知しないわよ」

うん、サンドバックという意味では確かに相手してもらいましたね。
サンドバック役は鈴じゃなくて俺だけどな！

「私との訓練を思い出せば必ず勝てますわ」

セシリアの中では俺を《ブルー・ティアーズ》で一方的に追いかけ回す事を訓練と言うらしい。

「が、頑張ってね。一夏」

すんません。
気絶してたせいで貴女の番まで訓練が回らなかったのは俺のせいじゃない様な気もするけど、また今度シャルロットには何かお詫びさせていただきます。

……アレ？

訓練、録にやってないんじゃなくて全く訓練になって無いんじゃないの？　コレ。

「は…、ははははは」

まずいまずいまずい！
すっげーまずい！
他のクラスの娘とかはちゃんと今日に向けて訓練してきてるのに俺

だけ訓練全くやって無いじゃん！

…お、落ち着け。

取り敢えず現状を再確認するところから始めよう。

？訓練は順調に滞っている

？機体が形態移行したのに全く慣らしてない

？俺が負けたら周りの娘達が恐い

……どうしよう、逃げ出したい。

無理じゃん！

どこに勝てる要素あんのコレ！？

「目指せ優勝！」

「「「お～！」」」

ちょっ、何勝手にハードル上げてんの！？

「織斑、私に恥をかかす様な真似はするなよ？」

なっ、千冬姉まで！

そんなに言うならもう自分で戦って下さい、マジで。

「織斑君、私、精一杯応援しますからね♪」

「おりむ～、がんばれ～！」

「織斑君ファイトー！」

みんな無邪気で可愛いなぁこん畜生！

やめて！　そんな期待の眼差しで俺を見ないで！

なにコレ？

クラスで自己紹介やった時以上にいたたまれないんですけど！？

あぁ～っもう！　こうなりゃヤケだ！

今更細かい事なんか考えてもどうにもならんわ！

某獣戦機隊のリーダーだって「野性を縛る理性はいらねぇ！」って言ってたしもうどうにでもなりやがれ！

「やぁってやるぜ！」

気合い十分。

あとダメダメ。

そんな調子で俺はトーナメントを迎えるのだった。

第１９話「トーナメント当日」（後書き）

小ネタ　「形態移行」

クラス代表を決める決闘にて、

一夏「俺のＩＳはあと二回変身を残している。この意味、解るな？」

セシリア「！？」

第２０話「魂の叫び　枯木も山の賑わい」（前書き）

ギリギリ一日で2話分投稿できました
が、これだったら前の話と繋げて1話にしてもよかったような……

ま、いっか

第２０話「魂の叫び　枯木も山の賑わい」

『はい、遂に始まってしまいましたクラス代表トーナメント！　実況は私　たっちゃんこと生徒会長の更織楯無、解説は一年一組担任の織斑先生でお送りしま～す♪　さぁて、今大会で最注目の選手といえばやはりあの”世界で唯一ＩＳを操縦できる男”こと織斑一夏君だと思われますが……どうでしょう、織斑先生？』

『どうもこうも、ただ珍しいというだけで別にアイツが特別強いというワケでもあるまい。せいぜい初戦で勝てればいい方だろうよ』

『またまた～、そんな事言ってやっぱり弟さんの事が心ぱ…イタッ！タタタタタ！ちょっ、織斑先生！ギブギブ！』

『…私は、からかわれるのが嫌いだ』

『痛い痛い！ちょっ、織斑先生！わかりました！　わ～か～り～ま～し～た～か～ら～！……あ、一旦カメラを会場へ返しま～す。…って、織斑先生！　いい加減は～な～し～て～……』

そんな感じのやり取りが会場に設置された巨大モニターに映し出されていた頃、鈴以外のいつものメンバーで選手控え室に集まっていた。

それにしても千冬姉、生徒会長相手でも容赦無いな。

あのヘッドロックは未だ束さんしか脱出出来た者がいない代物で、俺も何度アレでオチた事か……。

「一夏！　一回戦の対戦相手が決まったわよ」

っと、鈴が帰って来たか。

「んで、相手は？」

「二組の砂川って娘」

ああ、隣のクラスの。

会った事無いからどんな娘かは知らんが、まぁ取り敢えずいきなり上級生と当たらなかっただけ良しとしよう。

『――それでは、第一回戦一組目、織斑選手と砂川選手はＩＳを装着し――』

いきなりかよ。

まぁ、待たされて変に緊張するよりマシか。

「んじゃ、行って来るわ」

そう言って、待合室を跡にした。

《白式・影打》を纏いアリーナに向かうと、《打鉄》を身に纏った娘が先に来ていた。
ＩＳを纏っているという事は、あの娘が二組のクラス代表の砂川って娘なんだろう。
そういえば見た事ある様な気がしなくもない。
まぁ、見た事あったとしても廊下で擦れ違った程度なんだろうが。

それはそうとさっきのアナウンス、生徒会長じゃなかったみたいだが……まぁ、アナウンスはアナウンスで別にいるんだろう。
でもこの声どっかで聞いた様な気がするんだが……。

『え～、ここで臨時アナウンスです。生徒会長が医務室送りになったので、ここからの実況は私　新聞部の黛が代行させていただきま～す』

あぁ、新聞部の……って、生徒会長ぉぉぉぉぉぉぉっ！！？
実況が選手より先に医務室送りとかどうなってんだよ此処（ＩＳ学園）は！？

「いやいやいや、待て待て、いくら何でもやり過ぎだろ千冬姉！？」
『織斑。…此処（ＩＳ学園）では織斑先生と呼べと言ったハズだが？』

恐っ！
いつもならここで出席簿アタック（大切断）が飛び出すところなん

だが、流石に千冬姉でも管制室からじゃ手が届かんか。
手が届かん代わりに巨大モニターからどアップで千冬姉の睨み顔を拝むハメになってしまったが、ある程度耐性のある俺はともかく、会場の観客の安否が気掛かりだ。
あぁ、ハイパーセンサーごしにバタバタと気絶していく人達が見え……千冬姉、今ので何人医務室送りにしたんだろう？
……止そう。
考えるだけ無駄というか、考えたくないというか……。
これ以上は精神衛生上良くない気がする。

『は～い、ではでは！　さっそくですが、ＩＳ学園クラス代表トーナメント、一回戦第一試合！　始め～！』

アナウンスと共に試合開始のゴングが鳴り響き、お互いに刀を構える。
二次移行（セカンド・シフト）直後から全く操縦してないから不安は残るがしょうがない。
まぁ、なるようになるさ。

「ふ、ふふふふ……あぁ、やっとか…どれだけこの時を待ち侘びた事か…」
「え…、あの…」

「我が名は恭子！　砂川恭子！　悪（女の敵）を断つ剣なり！！！」

初っ端から濃いのキター！？

「チェストォォォォォォォッ！！！」
「のわっ！？」
「セイッ！　ハァッ！　トォッ！」

ちょっ、まっ、何だってんだよ一体！
いきなり飛ばし過ぎだろ！？

「だぁぁぁっりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」
「わ、わ、わ…！？」
「織斑一夏ぁぁぁっ！　貴様だけは、絶対に許さん！」

ホント何なんだよ！
俺が何したってんだ！？
初対面のハズだろ！？

「貴様みたいなメインキャラに私達モブキャラの気持ちが解ってたまるかぁぁぁぁぁぁっ！」
「だぁぁぁっ！？　んな事知るかぁぁぁぁぁぁぁっ！」

かなりメタな発言ではあったが、それは正しく魂の叫びだった。
…そう、彼女は一人ではない。

今の彼女はＩＳ学園だけに留まらず、全てのモブキャラの怨念を背負っているのだ。
もはやそれは彼女が怨念を背負っているなどという生易しいレベルで済むものでは無く、彼女こそがその怨念の集合体と言っていい。
だが…

「これは田中さんの分！　斎藤さんの分！　中川さんの分！　吉岡さんの分！　岸本さんの分！…」
「さっきから誰ー！？」
「そしてぇっ！　これがっ、原作に登場してるのに全く出番が無い人達の分だぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

俺にどうしろってんだぁぁぁぁぁぁっ！！？

砂川さんの猛攻は苛烈の一言に尽きるが、それでも箒ほどじゃない。
だから、やろうと思えばこの防戦一方な状況を覆す事だって出来るハズだ。
…なのに、それが出来なかった。
文字通り鬼気迫るその気迫にのまれてしまい、思うように身体が動かないのだ。
確かに俺は砂川さんと一対一で戦っているハズなのに、砂川さんが誰かの名前を叫ぶ度にどこかで見たような人やら全く会ったことの無いハズ誰かの顔が浮かんで見えるなんて幻覚を見てしまうほど今の砂川さんの存在が大きく見える。それこそ正に彼女が個人としては無く群体である事の証明であり、ある意味クラス代表として正しい様な……でもやっぱり何か違う様な在り様であった。

でも…、

「だぁぁぁぁっ！　《雪羅》！　クローモード！」

確かに砂川さんより背負っている人の人数は少ないけど、

「捕まえた！」

「！？」

俺だって、箒達の思いを背負ってる。

その思いが砂川さんの背負っているものより軽いだなんて思わない。

「…だから、ごめん。《雪羅》、バーストモード」

「きゃぁぁぁぁぁぁっ！！？」

真っ赤な閃光が貫き、更に《零落白夜》のクローで胴体を圧迫され、砂川さんのシールドエネルギーは０になった。

試合終了のブザーが会場に鳴り響く。

一応、勝ったハズなのに、余り嬉しく無い様な、かといって別に後悔しているワケでもない、自分でもどう判断したらいいのか解らない余韻に包まれるが、多分、いつものメンバー以外との試合だったからそのせいでいつもとはまた違う種類の緊張をしていたからだろう。

取り敢えず、吹き飛ばされたまま仰向けで倒れている砂川さんを抱き起こす。

シールドバリヤーがあるから大丈夫だとは思うが、零距離で荷電粒子砲の直撃を受けたのだから少し心配だ。

この辺りの力加減も早めに出来る様になっておかないと、いくら試合とはいえ女の子に怪我させたんじゃ後味悪いしな。

「大丈夫か？」

「……一応、ね。悔しいけど、今回は私の負けだわ。…でもね、織斑君」

「ん？」

「いつものメンバーばっかりじゃなくて、他の娘達も珠には構ってあげないとダメだよ？」

「……善処します」

「ん、宜しい」

そう言って、砂川さんは俺に背を向け、自身の控え室に戻って行く。

「あ、そうそう。私は愛人でも全然ＯＫだから♪」

最後に、そんな爆弾発言を残して。

「え、あ、愛人！？」

「ほぉ…、いつの間にあの女とそんな仲になったんだ？」

「あ・ん・た・ねぇ～！」

「あらあら、これはこれは、やはり一夏さんには一度私が紳士の嗜みというものを調きょ……ではなく、教育して差し上げねばなりませんわね」

「あはは。……これだけメンバーがそろってるのにまだ足りないって言うんだ？　本っ当にお盛んだね、一夏は」

「…お前というヤツは」

えっ、ちょっ、ま、まさか、このパターンは！

「「「「「一夏のバカ～！」」」」」

「何故～！？」

せっかく試合に勝ったのにこの仕打ちはどうかと思うな、俺は。

第２０話「魂の叫び　枯木も山の賑わい」（後書き）

どうかモブキャラ達の事も忘れないでやって下さい

一夏「お前が言うな」

あ、《白式・影打》が元の姿に戻ったって知ってるのは『彼』と束さんだけなので、他の人達は二次移行（セカンド・シフト）したんだと思ってるという事で

第２１話「葛藤」（前書き）

え～、幸いまだ指摘されて無いんですが

「別に、仮面ライダーじゃなくてもよくね？」

と、思っていらっしゃる方も少なからずおられるでしょう。
ですが、一応それなりに仮面ライダーである必要性も用意というかそういう話を書く予定はありますのでしばしお待ちを。

第２１話「葛藤」

あ～くそっ、さっきは酷い目にあった。
どう考えても俺は悪くないと思うんだが、何が気に障ったんだ？
アイツら。
いきなり愛人発言する砂川さんも砂川さんで何考えてんだか全然解らんし、それで俺を責めるアイツらなんかもっと何を考えてんだか解らんわ。
乙女心は複雑とは言うが、コレもう複雑ってレベルの話じゃないだろ、絶対。

多分、砂川さんは俺をからかってただけなんだろうと思う。
九割型女子高なＩＳ学園だから回りに同年代の男子が俺しか居ないとはいえ、俺なんかがモテるハズ無いし、小中学校時代だって割と女子に声を掛けられる事は多かったけど、どいつもこいつも俺をブリュンヒルデ（千冬姉）のオマケみたいな感じで見てた様で二言目には「お姉様ぁ」だったもんなぁ。
…あぁ、ちゃんと俺を俺個人として見てくれたという意味では弾とかは貴重な存在だった。
うん、いい友人を持ったな、俺。
今度会った時にでもなんか奢ってやろう。

で、此処は天下のＩＳ学園である。
千冬姉が何で有名になったかってそりゃ、ＩＳの世界大会　モンド・グロッソで総合優勝を果たしてブリュンヒルデの称号を得たほどのＩＳ操縦者だったからであって、こんな所（ＩＳ学園）にいたら前よりもっとひどく千冬姉のオマケで見られ続けるなんて考えるまでも無い事だった。

束さんの計画に共謀したせいで”世界で唯一ＩＳを操縦できる男”としてデビューするハメになったから、俺を千冬姉のオマケとして以外でも見る人間も出てきてはいるが、それも一般には新種の珍獣と殆ど同じ扱いで犯罪組織の皆さん的にはそれこそ何かのプレミア着きアイテムみたいな物に見えるらしく、オークションに掛ければ高値で売れるだなんて言われた時にはもう流石に笑うしかなかったわ、アレは。

有名人や有名人の親戚と聞くと物珍しさで声を掛けてみたくなるのも解らなくは無いが、そうされる側としては鬱陶しいことこの上ないワケで、当然、有名になると悪意を持って近付いてくる人間も出て来るワケで、昔から誘拐犯の方々によくエンカウントするっつうかされる生活を送ってきた。
中には顔を覚えてしまうほど何度も挑戦して来るヤツもいたりしたんだが……まぁ、それはともかく、そういった生活を送って来たせいか、いつの間にやら自分に近付く人間が悪意を持っているかどうかが解ってしまうというできればあまり収得したくないスキルまでついてしまった。

だから、俺の周りにいる人間に”悪意”をもって俺に近付いた人間がいない事も解っているのだ。
悪意も何も、ただの純粋な好奇心で寄って来るからこそ、対処に困る。
いっそ悪意をもって接してくれていたのなら、遠慮容赦無く追い払えたのに。

箒も、鈴も、セシリアも、シャルロットも、ラウラも、クラスの皆も、好奇心で近寄ってきた娘達も、み～んな悪意なんて持ち合わせていなかったからこそ、無下にする事なんて出来なかった。
そりゃあ、俺一人に何百だかよく解らん様な人数の人間にそれぞれ平等に接するなんて芸当、当然出来るハズも無いので結果としていつの間にか砂川さんに指摘された通りいつものメンバーとだけ吊るんでいた。
そのせいでもっと他の娘にも構えと注意を受けたワケだなんだが……。

「ったく、どうしろってんだよ…」

はぁ…と、ため息を零し、自分以外誰もいない自販機の前で一気にコーラを飲み干そうとして、噎せた。

「っ……あ～、何やってんだか、ホント」

ごまかすのは止そう。
…なんとなくだが、解ってはいるのだ。
その他大勢はともかく、いつものメンバーが俺をどう見ているのか。
幼なじみだった箒と鈴はともかく、他の代表候補生の皆とはどっちかというと仕事仲間的な意味での友人みたいな感覚だった。
最初はそうだったのに、いつの間にやらセシリアの俺を見る目がそれ以外の面を含みだして、今はそれ以外の面の方が大きくなって来ている事も、昔からそうだったのかセシリアがそうなったからなのかは知らんが、箒や鈴の俺を見る目が熱っぽくなってきていたのも。
そんな三人に当てられたのか、会って間もないシャルロットとラウラも妙に俺に親しくしてくれている理由（ワケ）も。

今まで全く気付きもしなかったのに、《白式・影打》が二次移行（セカンド・シフト）した後で目覚めてから急に自分がそういう目で見られていたのが解る様になってしまった。
それがあまりにも急だったから、どこか打ち所が悪かったんじゃないかと思ったが医務室の先生は特に異常は無いと言う。
まさか《白式・影打》にそんな機能があったのかと一瞬疑ったが、それはないだろう。
なんで急にそういう事が解る様になったのかは解らないが、そうなったという事実だけは認識出来た。
結局、そんなワケの解らない状態に混乱している間に朝を向かえてしまったのだが、皆の前ではいつも通りに振る舞えただろうか。

…それを知ってしまったとはいえ、俺には皆の気持ちに答える事は出来ない。
別に、心に決めた誰かがいるワケでは無く、単にそんな暇が無いだけ。
少なくとも、ヤツらを倒すまでは俺にそんな余裕は無いのだ。
束さんの計画に気付かなければ、或は誰かとそういう関係になれたのか。
皆の思いに気付かなければ、戦いに集中できたのか。
いっそどちらかに気付かなければよかったのに……と、思ってしまう。

束さんはもともと一人でケリをつけるつもりだったのだから、計画から降りてしまえば誰かとそういう関係にはなれただろう。
けど、知ってしまったあの日から、束さんを放っておく事は出来な

くなっていた。
確かに束さんは天才だけど、とても束さん一人で手に負える問題に見えなかったから。

いつも何処にいるのか解らないけど、あの時の束さんの目を思い出すと本当に何処か手の届かない所にいってしまいそうで、初めて千冬姉が長い仕事で長い期間家に帰って来なかったあの時の不安以上の何かを……もう二度と会えなくなるのではないかと子供心に焦躁に駆られて。

だから、せめてアイツらを倒すその日までは。
その日までは……。

「お悩みの様だね、織斑君♪」
「へ？」

「あ～もうっ、一夏のヤツ何処行ったのよ！」
「全くだ、私というものがありながらアイツは…」
「ちょっ、篠ノ之さん！？」

制さ……もとい、ヤキモチで（あくまで本人達の主観で）少しキツ

くあたってしまった為に一夏に逃げられてしまった五人はそれぞれ手分けして彼を探していたのだが、結局見つからなかった。
なのでこうして一旦集まって情報交換と相成ったのだが、結果は残念ながら全員手掛かり無し。

「まぁ、やっといて言うのもアレだけど、流石に五人掛かりでＩＳの武器なんかむけられたら逃げるよね。普通」
「む、確かに無理に不利な状況で戦わずに撤退するのは正しい判断だが……」
「ちょっと”お話”がしたいだけなのですから何も本気で逃げなくてもいいではありませんか」

もしここに一夏がいたら「アレのどこがお話なんだ！」といいそうなところだが、彼女達はアレで本気で話をするつもりでいたのだ。
特にＩＳに関わる女性に多く見られる傾向なのだが、実力行使で物事を解決しようとするきらいがある。
特に代表候補生四人はその”実力”で今の地位を勝ち取ったのだから尚更だろう。

「それにしても、発信機も上手く機能しないとは……《白式》め、どちらか両方なのかは知らんが、ジャミングを掛けたな」
「……アンタ、いつの間にそんな事やってたのよ」

本当に、悪気は無いのだ。

「え……な、なんで生徒会長が此処に？」

千冬姉にやられて医務室送りになったんじゃないの？

「まっさか～、織斑先生だって本気でそんな事しないわよ。……多分、本気だったら頭と首がお別れしてるんじゃないかしら」

「は…、ははは」

だよな、流石に千冬姉だって人様を無闇に病院送りにしたり……

…いや、待て。

今、生徒会長さん何て言った？

本気だったら頭と首がお別れしてる？

いやいやいやいや、流石にそりゃ無いって。

それもうヘッドロックじゃなくてギロチンじゃねぇか！

……千冬姉、別にＩＳ使わなくても十分なんじゃないかな。

「ところで、生徒会長さんは何故此処に？」

「ん、お仕事よ」

「仕事？」

「そ、こう見えて生徒会長さんはとっても忙しいのだ」

すんません、全くそう見えません。

どう見ても自販機で買った缶ジュースで一服してる様にしか見えないんですが。

「あ～、信じてないな～？　その目は。生徒の相談に乗るのも立派

な仕事なんだぞ」
「いや、別に相談する事なんて…」
相談できる事じゃないしな。
「いつもの五人と他の何かで板挟みってところかしら？」
「！？」
「あ、図星？　やっぱ織斑君って噂通り考えてる事がすぐ顔に出るんだ」
いや、噂って…。
何？　学園の皆に考えてる事バレバレなの？　俺。
それ、なんてサトラレ？
「ま、もう片方が何なのかは知らないけどさ。別にどっちかに絞る必要無いんじゃないの？」
「？」
「ほら、何て言うんだっけ……あぁ、そうそう。二兎追う者は二兎とも取れ？」
どこの天道さんですか。
「でも、織斑君だって仮面ライダーなんでしょ？　なら、そのぐらいのつもりでいいんじゃないの？」
「簡単に言ってくれますね…」
「何をどう思うかは織斑君の勝手だけどさ。最初っから出来ないって決めつけちゃったら出来るものも出来なくなるよ？」
「……」
それは……まぁ、そうなんだろうけど。

俺にそんな事出来るのか？
ヤツらを倒しながら、皆と……。

「まぁ、実際出来るかどうかはこれからの織斑君の頑張り次第だよ。
……お迎えも来たみたいだし、私はそろそろ行くね」

言うだけ言って、生徒会長は去って行った。
全く、勝手な事を……。
でも、まぁ、確かに生徒会長の言う通り、俺次第なんだよな。
色々と。

「此処にいたのか！　一夏！」
「捜しましたわよ！」

げ、見つかった……って、もうしっかり両腕をホールドされてるし！？

「ホラ、行くぞ。一夏」
「戻ったらＯＨＡＮＡ…もとい、お話がありますからね？」

ちょっと待てセシリア、今何て言おうとした！？
なんか不穏な単語が聞こえたぞ！？
えぇいっ、くそっ！

は～な～せ～。

あ、腕に当たってる胸の感触が……。

いやいやいやいや、待て待て落ち着け俺！
このまま連れて行かれたら確実に殺られるぞ！

でも、この感触もなかなか捨てがたいし……。

いやいやでも……。

葛藤している間に捕まった宇宙人よろしく控室前まで連行されてしまった。
多分、この中に残りのメンバーも控えているのだろう。控室だけに。
何となくオチも見えたところで、それでは皆さんさようなら～。

数秒後、彼の悲鳴が学園中に響き渡ったのは言うまでもない。

第２１話「葛藤」（後書き）

彼に訪れた変化。
それは成長なのか、それとも……

「篠ノ之」の誤字については１０話ぐらいまで修正完了。
今後も次話執筆と並行して修正作業を続けようかと思います。

第２２話「変態の脅威」（前書き）

タイトル通りというか……

変態警報発令、お読みになる方は十分に注意なさってお読み下さい（笑）

当方は一切責任は負いませんので悪しからず

第２２話「変態の脅威」

うん、いい加減俺があの五人にボコられて終わるってオチもマンネリ気味だと思うんだが……え？　全部お前が悪いって？　なんでやねん！？
まぁ……いい。
いや、全然良くないんだが、流石に五人掛かりだとどうにもならんな。
口でも力でも勝てる気がしない。
やっぱり戦いは数なのか……。

「んで、次の相手はどちらさん？」
「あ～、それなんだけど…」
「？」

珍しく鈴がいい淀む。
もしかして上級生と当たってしまったんだろうか。

「…三年の、橘って人よ」
「ささささ三年どすか！？」
「何故に京都弁？」

おっと、俺とした事が……にしても、よりによって三年かよ。
詰んだっぽいな、こりゃ。
参ったな～、でもまぁ三年相手なら千冬姉も勘弁してくれるかな。
……いや待て。

仮に千冬姉が勘弁してくれたとしてもこの五人もそうだとは限らないんじゃないか？

……アレ？

これって、前門の虎（三年の先輩）、後門の狼（目の前の五人）というヤツか？

俺、戦う前からピンチじゃね？

「は、はははは…」

「？　どうなさいましたの？」

「い、いや…、何でもない」

短い人生だったなぁ…。

『では、一回戦も全て終了しましたので、二回戦を始めます。二回戦第一試合の選手は織斑君と……』

それではみなさん逝ってきます。

次回からは新主人公の二号ライダーを主役とした「仮面ライダー白式2」の連載に引き継がれますが、応援よろしく。

「貴方が噂の織斑君ね……って、どうしたのよ？」

「はは…、いろいろあったんですよ。いろいろ…」

「そ、そう…」

あまりに俺の様子が酷いので若干先輩が引いているが、そんな事はどうだっていい。
状況が絶望的過ぎていちいち構ってられないからだ。
ははっ、どうせマグレで勝ててもまた俺がぶっ飛ばされるのがオチなんだろ？
やってらんねぇっての。
まぁ、そもそも勝てるハズ無いんだが。

『それでは二回戦第一試合、始め～！』
「何があったかは知らないけど、容赦なんてしてあげないわよ！織斑君！」

開始の合図と共に先輩が飛び上がり、飛び上がると同時にミサイルポッドを召喚。
すぐさま《白式・影打》のハイパーセンサーがロックオン警報を発して……って、おいおい、何なんだあのミサイルの大きさは。
《ギガント》並のがひい…ふう…みい……なっ、２０発も！？
あんなもん喰らったら一たまりも無いわ！

「さて、織斑君。流石の貴方でも全弾自動追尾機能のミサイルの群れから逃げ切れるかしら？」
「無理言うな！…って、のわぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

しかもコレ、自動追尾だけでもアレなのに一度に発射出来るのが２０発なだけで装填すれば何発でも発射出来ちゃう鬼畜仕様。

束さんから聞いた話だと、千冬姉は『白騎士事件』の時に《白騎士》のブレード一本で何千発ものミサイルを一度にぶった斬ったらしいが、無理無理、俺にはそんな人外染みた力なんかありませんから！それにしても２０発ずつのミサイル群が追い掛けて来るってのは中々恐ろしいもので、模擬戦でやったガタギリバ５０体分身での《ギガント》２００発を喰らったセシリアの恐怖を今度は自分が味わうハメになろうとは……コレが因果応報ってヤツかね？

「ほらほら、どこまでで逃げられるかしら？」

そう言って先輩は更にミサイルを追加、これで発射されたミサイルはちょうど３００発目になる。
俺がセシリアにやった時より酷い！

「先輩のドS！！！」
「あら、私はどっちかって言うとMよ？」
「なぁ！？」

ちょっ、何カミングアウトしてんのこの人！？
思わず飛行中にずっこけて地面に墜落……って、あ。
気を取り直して飛び上がろうと顔を上げると、そこには視界一杯に広がる夥しい数のミサイルの群れが。
……あぁ、詰んだな、コレ。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ」

３００発分もの爆音と衝撃、そして視界を埋め尽くす炎は俺の五感を麻痺させるには十分過ぎる代物だった。
辛うじて《雪片弐型》を杖にして立っているが、全身ボロボロでウイングスラスターはもう骨組みぐらいしか残っておらず、更にシー

ルドエネルギーの残量も残り二割という状況。
《ギガント》の方が威力が高かったからあの時２００発で《ブルー・ティアーズ》を墜せたのか、３００発ものミサイルに耐えられる程《白式・影打》が頑丈だったのか、或は両方なのかは解らないが、もう長くは持たない事だけは確かだ。

「はぁ……はぁ……っ……くっそ…」

やばい。
このままじゃ負ける。
どうする？
どうすればいい？
仮に次に発射されるミサイルを全弾かわせたとしても攻撃が届かない。
荷電粒子砲が当たればいいが、仮に直撃したとしても砂川さんが使ってた量産機の《打鉄》と違って先輩の機体は専用機だ。
高機動型なら《打鉄》より装甲が薄い可能性があったが、どう見ても先輩のは重装甲型のソレである。
とても一発当てたぐらいで墜ちるとは思えない。
かといって何発も撃てる程エネルギーがあるワケでも無く……
いや、この分だと一発が限界か。

なら《雪片弐型》に《零落白夜》を纏わせて斬った方がまだ倒せる可能性があるが、そもそもウイングスラスターがやられてるんじゃあの高さまで届かない。

どうする？
どうやって《零落白夜》をあの高さまで届かせる？

「ふふふふ、まさかあれだけの数を喰らって耐えるとは思わなかったけど、これで終わりよ」
「くっ…」

まずい！
何か……何か手は…。
……手？
っそうか！　コレなら！

「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
「なっ！？」

殴る様に突き出した左腕が飛び出す。
いや、正確には左腕に装着してあった《雪羅》が、だ。
元々《雪羅》は《白式・影打》が二次移行（セカンド・シフト）した事によって追加された武装であって、左腕そのものが変化したものではない。
なので、《雪羅》を外してしまえば今まで通りに左腕で《雪片弐型》を握る事も、両腕を使って正眼に構える事も可能なのだ。
更に言うと、今やった様にある程度の距離なら遠隔操作も可能だ。
……まぁ、自動追尾じゃなくてあくまでマニュアル操作だから細かい動作は向いて無いんだが。
その辺りはまぁ、《雪羅》のクロー自体が大型なのでどの道細かい作業に向いて無いから別にいいんだけど。

「そんなっ、腕ごと飛ばすなんて…！」

慌てて先輩が逃げようとするが、遅い。

先輩のＩＳの機体名が何なのかは知らないが、重装甲・重火力が売りなあの機体では《雪羅》の魔の手からは逃れられない。
或は、《打鉄》だったなら、先輩程の腕ならかわせたかもしれないが、その機体はあまりにも遅すぎた。

「捕まえた！」
「きゃっ、……あぁん！　もっとキツく…」

やり辛ぇ…。
ホントにＭだったんだ、この人。
……こんなんで大丈夫なのか、此処（ＩＳ学園）は。

「ハァハァ、わ、私を捕まえたぐらいじゃどうにもならないわよ」

ハァハァ言うな。
そんな期待の眼差しで見るな！
……もうヤダこの人の相手すんの。
誰か代わって下さい。
切実に。

「さぁ！　私をどうしようっていうの」

早くやれって言ってる様に聞こえるのは気のせいなんだよな？
うん、気のせい気のせい。
先輩の顔が赤いのも、さっきより息が荒いのも、きっと気のせいに決まってる。

「《零落白夜》、発動」
「なっ、シールドエネルギーが！？　は、早く脱出しないと！」

よかった。
やっと正気に戻ったか。

ギュッ

「あぁん！」

やっぱダメっぽいわ、この人。

結局、《零落白夜》を発動させた《雪羅》のクローによって束縛されたままでシールドエネルギーが底を突き、俺の勝利と相成ったワケなんだが。
俺が得たものは勝利の美酒でもなんでも無く、ただの疲労感だけだった。
主に精神的な意味で。

「…ね、ねぇ織斑君」

今日の試合は二回戦までなので、さっさと部屋に戻って寝ようかと思ったら件の先輩に捕まってしまった。

正直、逃げたいところだが長年の誘拐犯からの逃走経験が逃げ切れ無いと告げている。
部屋の前で待ち伏せとか、嫌な予感しかしない。

「ハァハァ、その、お願いが有るんだけど…」
「その前に息整えましょうね」
「そんな事より！」

ずいっと、一歩先輩が近づくのでそれに合わせて下がろうとしたが、残念ながら俺のすぐ後ろに壁があった為、それも儘ならない。
因みこの壁、何気に軍事基地並の強度を誇る代物だったりする。

「…その、ね？」

俺だって年頃の男だし、美人がモジモジしながら上目遣いでこちらを見ていたりなんかしたらかなり来るものがあるんだが、手放しに喜べない。

だってこの人変態だし。

俺はいたってノーマルなので、この手の手合いはノーサンキューなのだ。

「わ、私、織斑君との束縛プレイが忘れられなくて…」
「何口走ってんですか！　アンタ！」

先輩の中では《雪羅》のクローで握られるのは束縛プレイになるら

しい。
何ソレ恐い。

「だからお願い！　もっと私を縛って！」
「ちょっ、ま、待って下さい！　ダメですって！」

どこから取り出したのか解らない縄を力強く握り絞め、迫る先輩。
その目はマジでだった。
マジで恐かった。

「もぅ、今度は焦らしプ「もうアンタ黙れ」」

ダメだコイツ、早く何とかしないと。
マジで俺の貞操が危ない。

「ルームメイトの娘も最近全然構ってくれなくて、欲求不満なのよ。私」

誰だかは知らんが、ルームメイトの方には心底同情する。

「だから、ね？　良いでしょう？」

良くねぇよ。

遂に先輩の手が俺の肩を掴み……ちょっ、待て待て待ってくれ！
俺はノーマルなんだってば！

「ちょっ、誰か助け…」

「貴様、誰の弟に手を出している」
「へ？…きゃっ」

颯爽と現れた千冬姉の手によって俺と先輩は引き剥がされ、先輩は千冬姉のアイアンクローで宙釣りになってプラプラ揺れている。

「いたたたた！　あぁっ、でもソレがいいっ！」
「「……」」

いくら締め付けても先輩を喜ばせる一方だと判断したのか、千冬姉は延髄に手刀を喰らわせて先輩の意識を刈り取り、そのまま生徒指導室へ連行して行った。
…多分、先輩の事だ。
指導されても逆に喜ぶだけだろう。

それにしても酷い目にあった。
うん、今日はもう寝よう。
そう決心し、ベットに潜り込んで寝付いたまでは良かったが、その日俺は先輩に襲われる夢を見てしまい、しばらくの間　女性不信になってしまうのだった。

変態、こわい。

第２２話「変態の脅威」（後書き）

一夏が女性不信になったせいで（ヒロイン側からみて）攻略難易度がハードモードになりました（笑）

第２３話「二人目」（前書き）

すんません、本当は昨日ちゃんと更新する予定だったんですが、執筆中に寝落ちしてしまった為に更新が遅れました

今回は公式キャラが登場……のハズがどうしてこうなった！？

第23話「二人目」

あぁ…、昨日は酷い目に合った。
本当に、酷い目に、合った。
「…………うぅ、もうヤダ、お家帰りたい」
女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い女恐い……。

「なぁ、一夏。お前どうかしたのか？　朝から変だぞ、お前」
「はひっ！」
「な、何故そんなに怯えて………」

寝坊でもしているのかと思い彼を起こしに行ったのだが、彼は朝からずっとこの調子だった。
一応、起きてはいたのだが、彼は自分の肩を抱く様にして震えていたので風邪でも拗らせたかと熱を計ろうと近付いたところで悲鳴を挙げられてしまったのである。
なんら疚しい考えがあったワケでは無く、あくまで幼なじみを心配しての行動だったのにと、悲鳴を挙げられた箒としては些か心外であったが、それにしても一夏の怯え様が尋常じゃない。

（彼女らの主観で）彼が他の女にデレデレしていた場合等の制裁はもはや定番と化したオチだったが、いつも次の瞬間にはケロッとしていた彼が何故こうも怯えるのか。
確かに一回戦の終わりにいつものメンバーでいつもの様に制裁を加えたが、いや、その時点で十分問題アリなのだが、二回戦の後は珍しく制裁を加え無かったどころか、彼女を含めていつものメンバーはその後誰も彼とは接触していない。
となると下手人はいつものメンバー以外となるが一体誰が……。

「一夏さん、もう朝でしてよ！　さぁ、起きて下さいな」
「ひぃっ！」
「！？」
」

と、箒が悩んでいる間に　セシリア→鈴→シャルロット→ラウラの順で一夏を起こしに彼の部屋を訪ねたのだが結果は同じで惨敗。
誰かが部屋を訪ねて来る度に室内の人数が増え、それに比例するかの様にベットの中でガタガタ震えている一夏の震えが酷くなる一方で事態は悪化して行くばかり。
一応、トーナメントまでまだ時間があるとはいえ、とても試合に出れる様な状態には見えなかった。

「どうしちゃったのよ、一夏……」
「ガクガクブルブルガクガクブルブル…」
「ダメだこりゃ」

誰が話掛けても、何を話掛けてもずっとこんな調子で、どうすればいいのか全く解らない。

「箒さん、貴女何かしたんじゃありませんの？」
「わ、私がか！？」
「だって今日一番始めに一夏さんの部屋を訪ねたのは貴女ではありませんか！」
「た、確かにそうだが……。なら、お前達まで怯えられているのは何故なんだ！」
「う～ん、確かに一夏ってば僕達みんなにこんな感じだもんね…」
「…それに、我々が原因ならそれこそ今更だろう」
「そうよね～」

あ～でも無い、こ～でも無いと彼女らは頭を悩ませるが、やはりそれらしい答えは出そうも無い。
言うまでもなく、一夏はこの間もガタガタと震えているだけだった。

「織斑、起きて……と、もう手遅れだったか」
「なっ、教官！　冤罪です、我々は何も…」
「そんな事は解っている！　昨日の今日だからもしやとは思ったのだが…」
「…昨日の？　やはり何者かが一夏を！？」

少女らと同じ様に部屋を訪れた千冬に皆で詰め寄る。
流石の千冬も尋常じゃない雰囲気を醸し出す少女を五人もいっぺんに相手取るのは部が悪かったのか、一瞬たじろぎ、しかし、それを悟らせない様に、冷静に、あくまで冷静に事の次第を説明しだした。
千冬が言うには昨日の分の試合が終わった後、一夏が部屋に戻ろうとしたら二回戦の対戦相手だった三年生が待ち伏せしており、襲われかけたところでたまたま通り掛かった彼女が助けに入ったらしい。

しかも、性的な意味で襲われそうになったというのだから話を聞いた少女達の受けた衝撃もさる事ながら、実際に襲われ掛けた一夏もさぞショックだっただろう。

「教官、その下手人は今どこに？」
「聞いてどうする？」
「もちろん始末し…「その必要はない」しかし！」
「私が直接指導を……もとい、制裁を加えておいた。それでは不満か？」
「いえ、教官がそうおっしゃるのなら…」

何やら言い直した方が不穏な表現になっているが、それを問い質しても殺されなかっただけマシだと思えと返すだろう事は想像に難くない。

因みに件の下手人の橘もやっぱり懲りておらず、どうせ何か直接的な指導をするだけ喜ばせてしまうだけだからと千冬も途中で諦めて処分を自室謹慎に留めたのだが、橘の変態性は千冬の想像を数段上回っており、結局無意味だった。

「それより、試合の方はどうなさいますの？　一夏さんがこの様子では流石に…」
「試合は無理、よね」
「ええ」

そう、一番の問題はこれだった。
試合までもうあと３０分も無いというのに相変わらず肝心の一夏は震えてばかりいる。
無理もない事とはいえ、これではとても試合で勝つどころか出場することすら出来るかどうか……。

「代理で出場できるのなら私達の内の誰かが出場すればいいのですが…」
「途中での選手の変更は認められていない、か」
「でも一夏がこれじゃあ…」
「えぇいっ、あの女、つまらん置き土産を残して行きおって…！」
「全くだな」

打つ手無し…か、と千冬が呟く。
こんな形で終わるとは思ってはいなかったが、あの短い習熟時間で二回戦まで勝ち進んだのだから上出来だろう。

「…しかたない、か。棄権の手続きは私がやっておく。お前らも一旦部屋から出ろ、この様子だと我々がここにいても一夏の症状が酷く「その必要は無いよ」…何？」

千冬の言葉を遮ったのは彼女の弟だった。
否、確かに身体は彼女の弟のものであったが、声の主は別である。
声も、喋り方も全く同じなのに、纏う雰囲気だけがまるで違う。
そう、まるで別人の様な……。

「……『お前』か、ラウラの報告にあったもう一人の一夏とやらは」
「そ」

先程まで震えていたのがまるで嘘の様に、問い掛けに『彼』は笑顔で応えた。
それもそうだ。
震えていたのはあくまで彼であって、『彼』では無いのだから。

「お前が”そこ”にいるのは、束の仕業か？」

「いや、束さんにとっても俺の存在はイレギュラーだったみたいだよ」
「…何？」
違う人格を仕込むなんて非常識な芸当、束ぐらいにしか出来るハズがないと思っていた千冬だったが、宛が外れた様だ。
なら、その束にとってもイレギュラーな存在である『彼』は何なのか。
「…お前は、”何”だ？」
「何、と聞かれても……織斑一夏としか応え様が無いんだが」
やはり、『彼』の口から千冬の欲した応えは出てこなかった。
だが、それも想定の範囲内である。
「なら、何の為に”そこ”にいる？」
「何の為……う～ん、今のところは搭乗者の保護かな？」
「搭乗者の保護だと？　《白式》でも無いお前が？　いや、そもそも搭乗者保護の為に搭乗者の身体を乗っ取るだなんて非常識な…」
「いや、《白騎士》なんていう搭乗者保護機能で搭乗者の肉体まで復元する機体使ってた人がそれを言うかね」
「な！？　何故お前がそれを…」
「束さんに聞いた」
「……全く、アイツは」
搭乗者保護の為に搭乗者の身体を勝手に動かすのと肉体すら復元させるのでは、確かにどちらも非常識と言える。
「なっ、教官！　いくらＩＳに搭乗者保護機能があるとはいえ肉体の復元など…」

「そ、そうよ！　いくらなんでもそんな…」
「いくら《白式・真打》が非常識の塊だからってそんな無茶苦茶な…」

そう、確かにＩＳには絶対防御とシールドバリヤーというあらゆる危険から搭乗者を保護する二重の防壁をはじめ、元来の宇宙空間での活動を想定した酸素の供給機能等、多種多様な機能によって搭乗者を保護する様に出来てはいるが、肉体の復元までは不可能である。出来てせいぜい傷口を塞ぐだとか止血するだとか、あくまで”治療”の範疇であり、”復元”とまでいえる機能は無いハズなのだ。

「そりゃあ、復元まで出来るのは《白騎士》だけだったし、復元してるところなんて見た事無いんだったら信じられないのも無理ないけどさ……っと、もうこんな時間か。んじゃ、まぁ、試合の方は俺が出るから心配しなさんな」
「試合なんてどうでもいいんじゃなかったんですの？」
「試合は、ね。でも《白式・真打》と《白式・影打》……それに、”織斑一夏”の経験値を溜めておく必要があるし」
「…何の為に？」
「さぁ？　そこら辺はまだ秘密かな。んじゃ、応援よろしく～♪……あ、記憶の方はこっちで適当に弄っとくから」

そう言い残して会場へ去って行く『彼』を、ただ呆然と見送るしかなかった。

『はい、それでは昨日に引き続きクラス代表トーナメントを始めま～す。三回戦目となる今対戦は実質　生徒会長である更織楯無さんへの挑戦権を賭けた決勝戦となるワケですが…』

『きゃー♪　簪ちゃ～ん！　ファイト～！』

『……はい、本日の解説役の生徒会長がこんな調子なので実況・解説ともに昨日に引き続き私　黛が勤めさせていただきます。え～、今回のトーナメント決勝戦のカードはなんと一年一組代表の織斑一夏君と四組代表の更織簪さんという両者ともに一年生の異例の対戦カードどなりました！　どうした上級生！　しっかりしろ～』

確かに三学年全てのクラス代表でのトーナメントなのだから、決勝戦ともなれば三年生同士が通例で、稀に三年対二年の試合もあったりしたが、一年が決勝戦まで昇り詰めるなどという事は今まで無かった。

しかも、両者共に一年ともなれば異例中の異例とも言える対戦カードだろう。

しかし、決して二年生や三年生が弱かったワケでは無い。

寧ろ例年より強かったのだが、それ以上に決勝戦まで勝ち進んだ一年が強過ぎたのだ。

世界最強のブリュンヒルデの弟、織斑一夏。

学園最強の生徒会長の妹、更織簪。

この肩書の時点で一種卑怯とも言えるほど両者が才能に恵まれている事は誰の目にも明らかであり、更に織斑一夏のＩＳはあの篠ノ之博士が製作に関与したと噂される機体であった為、彼の決勝戦進出

は必然ですらあったのだ。

「……私、ずっと見てました」

「？」

「いつもいつも織斑君の事を、ずっと…」

（おいおい、昨日の変態さんに引き続いて今日のはストーカーさんかよ……）

「…見て、織斑君」

静かに、しかしそれでいてはっきりと目の前の少女は言った。

変身、と。

一瞬の光とともに、気の弱そうだった少女の姿は掻き消え、代わりに聳え立つのは無骨なメタリックグレーのフルメイル。

《白式・真打》を模したその姿もまた、仮面の騎士のものだった。

「…《打鉄二式》、またの名を仮面ライダー打鉄。……ふふふふ、これで、織斑君とお揃いだね」

妖しいく笑う少女の声はいっそ艶やかですらあった。

「なんてうらやまっ「ちょっ、落ち着きなさいよ！」」

その姿を見て取り乱す某ドイツ代表候補生がいたとかいなかったとか。

当人の名誉の為にこれ以上は割愛。

（フ…、ごっこ遊びで喜ぶ様な歳じゃないだろうに。まぁ、それはアイツもか。……それにしても”お揃い”か。ペアルックか何かのつもりなのかね？）

内心で目の前の少女と宿主を嘲りつつも、それを顔に出さずに冷静に観察する。

（おそらく、日本政府が作った劣化コピーなんだろうが……面白い、どれだけ近付けたのか採点してやろう）

「　」

『彼』は何事かを呟くと、左腕の《雪羅》を、右腕に握る《雪片弐型》を、更にはウイングスラスターすら消し去り丸腰の状態で構える。

「……どういうつもり？」

少女の問いは、この試合を観戦している全ての者の代弁であった。
武装を解除したとはいえ、構えている以上降伏するつもりでは無いらしいが…。

「どうもこうも、お前の様なバッタもんを叩きのめすのに武器など必要ないだろう？」

飛蝗だけに、と台詞の途中に言わない事が『彼』が彼ではない事の証明であるが、言わないだけで結局は同じ事である。

「…っ、馬鹿にして！」

『彼』の態度に激昂した簪が拡張領域（バスロット）から全武装を召喚し、瞬時に標準を合わせ、そして次の瞬間、
両肩に担がれた大型キャノンが、
右腕に持ったグレネードランチャーが、
左腕に持ったガトリンクキャノンが、
両足に装着されたミサイルランチャーが、

「《エンド・オブ・ワールド》！」

一斉に、『彼』へと襲い掛かった。

第２３話「二人目」（後書き）

はい、二人目のライダーという大役を原作新キャラの簪さんに務めていただきました。

次回、決着です

第２４話「梅花」（前書き）

Ｐｉｃｋ　ｕｐ　原作名だと検索に引っ掛からないのに、コピペしてキーワード検索したらちゃんと検索できるのは何故？

第２４話「梅花」

ＩＳの登場によって変化したのは何も社会状勢だけではない。
漫画やアニメ、特撮番組にいたるまで、寧ろそういったものこそがその影響を受ける事になった。

仮面ライダーだってそう。
平成以前のシリーズはまだライダースーツにプロテクターを装着した姿だったものの、それ以降のシリーズは織斑一夏が所有する《白式・真打》の様なフルメイルの”仮面ライダーっぽいデザインをしたＩＳ”といった姿に代わっていった。
仮面ライダーファイズの様に、一企業の製品ならまだしも、リントという古代民族の遺産である霊石アマダムの力で変身する仮面ライダークウガですら古代人の作ったＩＳの様な物で変身するという設定であり、その姿もやはり空想の超古代文明が作り出した様なデザインでありながら、ＩＳっぽさが抜け切れなかった。
どうしてもＩＳっぽさが抜け切らない理由の一つに武器の大きさが挙げられる。
武器を使うライダー自体は昔からいたが、平成以降のライダーは特にまるでＩＳの武装の様に身の丈以上は当たり前の世界に変わってしまい、徒手空拳で戦うシーンなど殆ど存在しなくなってしまったのである。

また、平成から入った若い世代はともかく、往年のファンからして見れば平成以降の作品は仮面ライダーと認められない傾向にあり、事実、デザインラインが違い過ぎて並ぶと別番組のヒーローが共演した様にしか見えず、稀に製作される歴代ライダー総出演の映画はたいていどちらのファンにも顰蹙を買う結果になりがちだった。

緩急話題。

「《エンド・オブ・ワールド》！」

少女の掛け声に応える様に次々と発射されるミサイルやグレネード弾、そしてガトリンクの弾丸の群れは視界を埋め尽くす程の夥しい数となって『彼』に襲い掛かる。

まず最初にガトリンクの弾丸が『彼』を襲った。

ミサイルやグレネード弾程の威力は無いとはいえ、ＩＳがＩＳにダメージを与える為に存在するそれは旧来のものとは比べものにならない程の威力を秘めている。

それなのに、『彼』は避けるそぶりすら見せず次々と着弾していくガトリンクの弾丸を受けてなお、余裕の表情を崩さない。

結局、一泊遅れて襲い掛かったミサイルやグレネード弾の猛火に包まれて肉眼で彼の姿が捕らえられなくなるまでその表情は崩れなかった。

「……？」

猛火に包まれ、姿の見えなくなった『彼』に、少女は容赦無く武装の一斉掃射を続けたのだが、どうも様子がおかしい。

途中から猛火の中に飛び込んでいったミサイルやグレネード弾が次

々と爆煙から飛び出し、明後日の方向に飛んで行くのだ。
確かに照準に熱源探知も利用してはいたが、爆心地以上の熱源はどこにも無いハズなのに、いったいこれはどういう事なのか。

不審に思い一旦砲撃を止め、やがて爆煙が晴れたそこには殆ど無傷の『彼』が立っていた。
相変わらず余裕の笑みを浮かべてはいたが、構えだけは砲撃の猛火に晒される前とは違い、両腕を肘が胸の高さより少し下に来るまで上げ、右腕は縦に、左腕は胸を覆う様に横に構えたその構えにヒーロー好きの少女、簪は見覚えがあった。

「その構え、赤心少林拳の…」
「…そう、赤心少林拳・梅花の型」
「じゃあ、まさか…」
「あぁ、途中からミサイルもグレネード弾も全て軌道を逸らし、更に軌道を逸らしたそれらをガトリンクの弾丸にぶつける事で全て防ぎ切らせてもらったよ。……どうだ？　武器なんか無くても案外どうにかなるもんだろ？」
「そんなっ…」

あまりの非常識さに、ありえない、と、言葉を続ける事すら出来なかった。
確かにＩＳを装着すれば生身よりは早く動けるだろう。
だが、それにしたって限度というものがある。
仮にミサイルを捕らえるほど早く動けたとしても、ミサイルに着弾を悟らせずに手動で軌道を逸らすなど、もはや雑業どころの話ではない。

『（もしやと思っていたが、貴様、あの時手を抜いていたな？）』
『（…あぁ、やっぱラウラにはバレてたか）』

プライベートチャンネルで問い質したラウラに『彼』はなんら悪びれた様子も無く、軽い調子で応えた。

『（…どういうつもりですの？）』
『（どうもこうも、こっちの都合でアイツにはこれぐらい出来る様になって貰わなきゃならんからな、こうして俺が珠に表に出て身体を鍛えて……っていう予定だったんだが）』
「こっ、このぉっ！」
『（だが、何よ？）』
「よっと（いや、お前らも含めて周りの連中……というか、環境があんまりにも精神的に擦り減らしてくれるもんだから、前回といい、今回といい、予定外の表出をしなきゃならんハメになってな）」
『（う〝っ）』

ミサイルは弾かれるからと、武装をガトリンクだけに絞って射撃を続ける簪の攻撃をかわしつつ、プライベートチャンネルでの会話を続ける。
確かにミサイルは逸らせるが、自動追尾が無い分、射線から外れる位置に移動するだけでいいので実はガトリンクの方がかわし安い。
普段の冷静な彼女ならその事に気付いてミサイルに気を取られている隙にガトリンクで仕留めるぐらいは考えつくのだが、『彼』がやった雑業のせいで普段の冷静さを欠いてしまっていた。

「よう」
「！？」

ガトリンクの射線から外れる様にサイドステップでかわし、間髪入

れずにひとっ跳びで至近距離まで接近し、

「舌、噛むなよ」

「え？」

「真空地獄車！」

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

簪の両肩を掴んでバク転でもするかの様に跳び上がる。

何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も背中から叩き着けるかの様に地面に激突しては跳び上がってシールドエネルギーを削りつつ、徐々に、確実に、簪の平行感覚を奪っていく。

やっと開放された頃にはもう立っているのがやっとな状態にまで陥っており、そんな簪にさらに追い撃ちをかけるかの様に『彼』は彼女の首と足を掴んで持ち上げ、

「ライダーきりもみシュート！」

「あぁぁぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁっ！？」

今度は側転でもさせるかの様に、ぶん回す。

『（え…、えげつない事するんだね）』

『（アイツならこんな事はやらないってか？）』

『（…まぁ、ね）』

何回転させたのか、回されている側も回している側も解らなくなった頃に、漸く簪は回転地獄から開放された。

ただし、投げ飛ばされて、だが。

「あぅ…、う……あぁ」

目が回り過ぎて、もう立つ事すら出来なくなった簪は立とうとしては膝をついてを繰り返すばかりで、誰の目にも、とても彼女が戦闘続行できる状態には見えなかった。

「んじゃ、ま、これで一応トドメって事にしときましょうかね」

そう言って、『彼』はまるで散歩にでも出掛けるかの様な気軽さで歩きながら簪に近付き、

「えい」
「はぅあ～」

軽く頭を小突いた。
小突かれた簪はついに仰向けに倒れダウンしてしまい、そのまま試合は”織斑一夏”の勝利という形で幕を閉じたのだった。

「…さて、次にアイツが起きる時には嫌な事全部忘れた状態にしとくけどさ、頼むからあんまりアイツを擦り減らさない様に気をつけてくれよ？」

「お、おう」
「勿論ですわ！」

試合終了後、『彼』と彼のいつものメンバーで控え室集まり、少女らは『彼』に注意を受けていた。

「アイツが精神的に脆いか強いかは関係無いんだ。……そうだな、お前らがアイツとは逆に男子校に一人だけ転入して来た女子だったら…どうだ？」
「それは……」
「確かに、キツいわね」
「だろ？　だから、いろいろ気をつけてやってくれよ？　あんまり予定外の表出が頻繁になると、今度はアイツが帰ってこれなくなるんだからさ」
「なっ、そんな！」

『彼』のもの言いに少なからず動揺する少女らとは違い、固い表情で『彼』を見続けている女性が一人。
彼の姉、織斑千冬はただただ睨むかの様な表情で『彼』を見ていた。

「…何か聞きたい事があるんじゃないんですか？」
「聞いたところで、どうせ貴様は応える気などサラサラ無いんだろう？」
「勿論♪」

小馬鹿にするかの様な態度の『彼』に苛立ちを覚えた千冬は、一瞬殴り飛ばしてやろうかと思ったが、あれは大事な弟の身体だからと、ぐっと堪えた。

だが、彼女が殴れない事を解った上で『彼』がそうしているのも解ってしまい、ますます苛立ちが酷くなるばかりである。

「んじゃ、そろそろお暇させてもらうけど……あぁ、俺が許可しない限り、どうやってもアイツは俺を認識出来ない様になってるから、アイツに俺の事バラしたって無駄だぞ？」

「それは、どういう…」

「さぁね。まぁ、俺はアイツの望みを叶える為に此処にいるつもりだからさ、非常事ならともかく、別に本気で身体を乗っ取ってやろうだなんて思ったりはしてないから。その辺りは安心していいよ」

「それを信用しろと？」

「信用するかしないかは君らの勝手だよ……んじゃ、おやすみ～」

相変わらず、こちらの聞きたい事には録に応えもしないクセに、『彼』は自分の言いたい事だけ勝手に喋ってまた眠りについてしまった。

今、控室のソファーに寝転がっている彼の身体に『彼』の意識はもう無い。

次に目覚めた時はまた彼に会えるだろう。

だが、『彼』の言う事が本当なら、これ以上彼を追い詰めるのは良く無い。

本当に彼が、いなくなってしまう。

ある者は恋し、ある者は友人として慕う彼が。

だから、少し、……もう少しだけ彼に優しくしようと少女達は思うのだった。

……まぁ、本当に優しく出来るかは別問題なのだが。

第２４話「梅花」（後書き）

今回の話の要約

『彼』は彼より鬼畜だった

第２５話「既知との遭遇」（前書き）

なんだかんだでもう２５話！
いや～、時が経つのは早いもんで

第２５話「既知との遭遇」

「……か」

ユサユサ　ユサユサ

「……ちか…」
「んぁ？」
「起きろ、一……っと、やっと起きたか」
「ん？　もうライダー始まる時間か…」
「阿呆。今日はまだ平日……というか、さっき試合を終えたばかりだろうが」

試合？
……あ、あ～、はいはい、そ～いえばさっき簪……だっけか？　四組のクラス代表の娘と試合したばっかりだっけ。
それで何とか勝って控室に戻って……それで……。

「アレ？　俺いつの間に眠ってたんだ？」
「控室に戻ってすぐに、だ。大方、日頃の疲れと試合の緊張とで参っていたんだろう」
「そうか…、あんまり疲れてた自覚無いんだが…」

そりゃ…まぁ、普段の俺のスケジュールって他の娘達と比べたら結構ハードかもしれんが……まぁ、ラウラの言う通りなんだろう。
昨日も試合終わった後いつの間にか部屋で寝てたみたいだし。
一応、睡眠時間は５時間以上は確保してたハズなんだがなぁ。

「今はまだ試合の緊張が抜け切ってないから疲れに鈍感になっているんだ。次の試合が終わる頃にはすぐに自覚症状が出るだろうよ」
「そういうもんか？」
「そういうものだ」

代表候補生である以前に軍人でもあるラウラがそう言うんならそうなんだろう。
それより…。

「……で、何でラウラは俺の上に乗っかってるんだ？」
「……仕様だ」

重くないからいいんだけどさ。
いや、寧ろ軽過ぎないか？
まぁ、軍人さんなんだし俺より健康管理は出来てるんだろうけど。

ってか、仕様って何だ、仕様って。
ちょうど今のラウラの体制は騎じょ……ゲフンゲフン、…まぁ、その、なんだ？　ソファーに寝転がってる俺の上に跨がってらっしゃるワケなんだが、ズボンだったから良かった様なものの、そんな体制でいたら他のメンバーみたいにスカート履きだったら下着が丸見えになるところだったぞ？
一応、俺ら年頃なんだから、その辺気をつけて貰わないと俺の《雪片》が《零落白夜》を……って、だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？
落ち着け、俺。
もしそんな事になったら死ぬぞ。社会的に。

そもそも、此処（ＩＳ学園）に通ってる娘達が無防備過ぎるのが悪い。

寮とか特に殆ど下着みたいな格好で廊下に出るな。
目のやり場に困るから。
目があった時とか気まずいし、あからさまに誘ってるのもそれはそれで後が不味いし。

「……で、お二人はいつまでその体制でいるおつもりかしら？」
ほらほら、いつまでもこんな体制でいるから、イギリス淑女のセシリアが……って、アレ？　いつの間にやら《ブルー・ティアーズ》にロックされて…、

ズビュュュュン！

「おわっ！？」
「ちっ」

ちょっ、ま、ホントに撃つヤツがあるかっ！
って、オイ！　今舌打ちしたよな！？

「い～ち～かっ♪」
「ん？……なぁっ！？」

あの～、鈴さん？
何故に《双天牙月》を振りかぶって…、

ゴォオオオオオオオオッ！

「ひぃっ！？」

殺す気か！？

「…フ、フフフフフ」

…ヤバい、目がマジだ。

ガションッ！

え……あ、あの～シャルロットさん？
何故にパイルバンカーを…？

「え～と、こういうのって日本では『空気を読む』って言うんだよね？」

ソレ違う！
バラエティ番組的なノリなら正解だけど使うものがおかしい！
畜生、…一応、シャルロットは俺の中では比較的まともな部類の娘だったのに！
アレか？　コレが女の子に幻想を抱いちゃいけないってヤツなのか？

カチリッ…

…で、何故に箒さんは刀を抜いてらっしゃるのでせうか！？

「暫く見ないうちに幼女に欲情する様なヤツになっていたとは……
…見損なったぞ！」
「ソレ違う！　ラウラはあくまで幼児体型なだけで幼女違う！」

…って、あ、れ？
何故に身体が動かなく？

「…誰が、幼児体型だと？」
「だぁぁぁぁぁぁぁっ！　今の無し無し！」

ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい…。
今回ばかりはマジでヤバい！
このままだとマジで箒さんに主役交代して「仮面ライダー打鉄」が始まってしまう！

そ～いえば原作も本郷さん死んだから一文字さをに主役交代したんだっけ？
いや、本郷さんは脳みそだけになって生きてらっしゃたから死んでは無いか……って、待て。
アレか？
俺、ここでショッカーライダー（いつものメンバー）に処刑されて脳みそだけになって箒さんをサポートするポジションになるのか？
いやいやいや、流石に脳みそだけで生きるなんて……あ、束さんなら出来るかも。

……ウソダ、ウソダドンドコドーン！

「ま、待て。そんな事したら次の試合に差し支えるんじゃ…」
「安心しろ、今回は峰打ちで済ませ置いてやる」

そりゃ、箒の刀はソレが出来るだろうけど他の娘の無理だから！
ってか、今回!?
あぁーもぅ！　なんなんだよ一体！
俺一人じゃツッコミが追い付かんわ！

「「「「「覚悟！」」」」」

ズドォォォォォォォォォンッ！！

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁっ……って、アレ？」

…なんとも、無い？
ってか、今のって…！？。

「…まさか！」
「……あぁ、そのまさか、だ。手分けして侵入者を捜すぞ！　箒は一般生徒の避難を！」
「解った！」
「どの組み合わせで行く？」
「…では、私と鈴さんとで左から」
「解った。なら私とシャルロットで右から捜索を開始するとしよう」

流石は代表候補生というか、さっきまでのやり取りが嘘の様にテキパキと役割分担を決めて行動を……って、アレ？

「俺は？」
「お前は箒と共に避難誘導に向かえ。疲労の貯まったその身体では

足手まといにしかならん」
「…っ、解った。行くぞ、箒」
「あ、あぁ」

…まぁ、そうだよな。
確かにこんな調子じゃ足手まといにしかならんか。

「鈴さん、そちらは？」
「ダメ、反応無し……って事はこっちのルートはハズレか」
「みたいですわね」
「あ～もう！　向こうがＩＳ使えば一発で解るのにぃ～」

ハイパーセンサーに全く引っ掛からないという事は、少なくとも侵入者はまだＩＳを展開していないという事になるのだろう。
或は、元からＩＳを持ち合わせていないという可能性も無くはないが、此処は天下のＩＳ学園である。
要人暗殺の線ならまだしも、狙いは織斑一夏と彼の所有する篠ノ之束製ＩＳの両方である可能性の方が高い。

「ラウラ、そっちはどう？」
「いや、こちらのセンサーにも何も……いや待て、生体反応？」
「まさか、侵入者？」
「或は、逃げ遅れた一般生徒かのどちらかだな……っと、来るぞ！」

身構えるラウラとシャルロットの前に現れたのは橘だった。
見たところ負傷しているワケでは無さそうだが、その足取りはふらふらと覚束ない。

「アイツは確か…」
「一夏の二回戦の相手の…」
「やはり、アイツがか」

一夏をあんな風に追い詰めた張本人を目の前にして、二人は一瞬怒りが込み上げたが今は非常事だ、私情で動くべきではない。
文句なら終わった後でゆっくり聞かせてやる…と、救助の為に駆け寄ったラウラの本能が危険を察知し、咄嗟に後に飛びのいた。
直後、ラウラの首のあった位置をナイフが摺り抜ける。

「…貴様、何のつもりだ！」

「皆、焦らず急いで…」
「馬鹿、妙な言い回しをするな！……ちゃんと訓練通りやれば皆大丈夫だ。だから列を乱さずに…」

実際に非常事態が起きているからとはいえ、特にトラブルも無く順調に避難は進んでいる。
流石というか、俺の通っていた中学だったら絶対ここまで順調に捗りはしなかっただろう。
いや、寧ろパニック状態になっていたかもしれない。
前にも襲撃があったから、皆その辺りの意識は高まってるんだろうけど、それを差し置いても優秀だ。
伊達や酔狂でエリート校をやってるワケでは無い。

「よし、こっちはだいたい終わったな……筈は？」
「あと少しで…っな！？」
「うおっ！？」

…クソッ、来やがったか。
爆発の煙が少し晴れたところで、煙の向こうから人影が歩いて来るのが見えた。
ヒールでも履いているのだろうか、カツン　カツン　と、さっきからやたら硬い足音が聞こえてくる。
だんだん距離が近付くにつれ、その姿がはっきりと見える様になっ

てきた。

「……女？」

俺より目がいい箒がそう認識したのなら、多分そうなんだろう……
…っと、確かにそうっぽいな。
長い髪に、ビジネススーツといった出で立ちは、昨日今日のトーナメントを観戦しに来ていた企業の人間とそう変わらない。
多分、企業の人間に紛れて侵入して来たんだろう。
遂に煙を抜けて出て来たその侵入者は……って、

「あっ！　オータムさんじゃないですか！　お久しぶりですね」
「よぉ～、一夏。お前も元気そうじゃないか」
「へ？　し、知り合いなのか？　一夏」

箒の疑問も尤もだろう。
普通、襲撃してきた侵入者とこんなに親しげに話したりなんかしない。

「ん？　…あぁ。顔見知りの誘拐犯ってとこかな？」

…侵入者は、見慣れた誘拐犯だった。

第２５話「既知との遭遇」（後書き）

アナザー一夏「…あ、アイツら、人の話を聞いて無かったのか？…
……いや、それより、一夏のヤツもなんだかんだで楽しんでる
みたいなんだが……まさか、変な性癖に目覚めたワケじゃあるま
いな（汗）」

簪「……主役！」
作者「いや、本気にすんなよ」

第２６話「怪奇？　蜘蛛女」（前書き）

アレ？　おかしいな？
そんな予定無かったのに、ここの一夏とオータムさんって結構いい
コンビっぽい　不思議！

第２６話「怪奇？　蜘蛛女」

一夏が顔馴染みの誘拐犯との再開を果たしていた一方で、他のメンバー達はどうしていたかというと…。

「いませんわね…」
「…そうね」

セシリアと鈴のチームは相変わらず成果無しで、ただ二人で廊下を歩きながら一つ一つ部屋を回るという地味な作業を強いられていた。自動だったり手動だったり、ドアや部屋の大小の違いはあれど結局全て伽藍桐。
閑古鳥すら鳴きもしない。

「ここもダメ」
「…こっちにも居ませんわ」

いくら二人が代表候補生としてそれぞれの祖国で過酷な訓練を積んで来たとはいえ、探した部屋の数が５０を超えればいい加減精神的に参ってくるのも致し方ない事だろう。

普段の二人なら、特に二人の意中の彼にはとても見せられない様な、言わずとも「あ～あ、やってらんね～っての」とその表情が雄弁に物語っていた。

そして、シャルロットとラウラのチームはというと、

「…何のつもり、ね。見ての通りなんだけど、わからなかった？お嬢ちゃん」

予想外の人物によって行く手を阻まれていた。

二人の知る限り、三年の橘香織は日本の代表候補生の一人だったハズだ。

その橘香織が何故、侵入者に加担する様なマネをするのか。

それに先程のラウラの首を掻き切ろうとしたナイフ捌きはいくらＩＳ学園がＩＳやそれに付随する武装を扱う場所だからとはいえ、そうそう出来るものではないほど早く、的確だった。

軍属であり、対人戦闘にも長けたラウラだからこそ反応出来たから良かった様なものの、シャルロットや他の代表候補生の様にＩＳの操縦に重きを置く人間では危なかったかもしれない。

「貴様、ただの代表候補生では無いな？」

「えぇ、違うわ。そもそも”私”は代表候補生なんかですら無いもの」
「何？」
「どういうこと？」

代表候補生ですら、無い？
なら、お前は一体…と、ラウラが口にする前に、目の前の女は正体を曝した。

顔を覆う様に伸ばした右手でエラを掴み、一気に引き剥がす。
ビリビリと音を起てて剥がされた顔の下からは別の顔が覗いていた。
その目は橘香織に似て垂れ目であるのにも関わらず、しかし彼女とは違って何処か冷酷さを隠し切れていない、そんな眼差し。
かなり薄いマスクを被っていただけあって、遠目に見れば顔付き等もそっくりではあるが、親戚というワケでもない。
そもそも人種が違う様に見える。

「なっ…、変装、だと？」
「じゃあ、本物の橘さんは…」
「あぁ、心配しなくても殺してなんかいないわ。ただ、トーナメントが始まる前から縛って部屋に転がして置いただけよ」

命に別状は無い事に一安心したが、それでも予断を許さない状況かもしれない。
トーナメント前日から侵入して入れ代わっていたとしても今日は二日目だ、いくら少なく見積もっても三日も拘束されたままだという

事になる。
どういう状態で拘束されているのかによっては健康どころか死んでないだけで命も危ないかもしれない。

「あの娘ったら、拘束する時だって『もっとキツく』だとか、『寧ろ亀甲縛りで』なんて言うもんだから、変装するこっちとしては恥ずかしいったらなかったわ、ホント」
「アレは貴様の性癖じゃなかったのか…」
「当たり前でしょう。私はSなのよ？　あんなドMと一緒にしないでちょうだい」

いや、SとかMとか言われても…とでも言いた気な二人の態度が不満なのか、目の前の女は苛立ちを隠さずに、

「…いいわ、あの娘はもうだいぶ出来上がってたからあまり面白く無かったけど、貴女達は中々調教のし甲斐がありそうね」
「「断固拒否する！」」

所持していたISを纏い、襲い掛かる。
二人もそれに合わせてそれぞれのISを身に纏い、構えた。

さて、俺とオータムさんとの付き合いはかれこれ箒が転校した直後

ぐらいからの長い付き合いで、ある意味鈴と同期の幼なじみと言っていいかもしれない。
千冬姉がブリュンヒルデとして世界に名を馳せた頃から頻繁にエンカウントする様になった誘拐犯達の一人がオータムさんだった。
あらゆる組織やら何やらが誘拐を企てる中でもオータムさんはほぼ毎週の様に現れては千冬姉にぶっ飛ばされて、それでもめげずにまた来週、と何度も何度も来るもんだから、いい加減顔も名前も覚えてしまっていたのだ。
因みに、何度も現れては千冬姉にぶっ飛ばされてを繰り返すもんだから、俺のなかではオータムさん＝バイキンマン　という図式が成り立って…。

「といった感じなんだが」
「あ、あぁ…」
「おいコラ！　誰がバイキンマンだ！　誰が！」

アレ？　不満だった？
毎週毎週、お星さまになる辺りとかそっくりだと思うんだが。

「だいたい、お前の姉が化け物過ぎるのが悪いんだ！　ＩＳ無しでホントに人を星にするヤツがあるか！」
「（化け物…というか、人間辞めてる的な意味で）それについては激しく同意する！」
「殴られるぞ、お前ら」
「「ガクガクブルブルガクガクブルブル」」
「仲いいな！　おい！」

いや、だって千冬姉、オータムさんをお星さまにした以外にも数十人掛かりで来た誘拐犯も一方的にボコったりとか……俺、殴られた人が壁に減り込むなんてマンガやアニメの世界の出来事だと思って

たけど、そんな事は全然無かったんだぜ？

「と、とととにかくだ！　今日は他のヤツらも連れて来たからな、アイツらが足止めしているうちにお前を捕まえてやる！」
「千冬姉がいないからって、そう簡単には捕まりませんよ？」
「ハッ、言ってろ！　来いっ、《アラクネ》！」
「変身！」
「「おぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」」

オータムは《アラクネ》を、一夏は《白式・真打》をそれぞれ身に纏い、同時に相手に飛び掛かって何度もぶつかり合う。

「喰らえっ、《大切断》！！！」
「おっと、そうはいくか！　喰らいな！」
「っと、俺だって！」
「やるじゃねぇか！　一夏ぁ！」
「オータムさんこそ！」

前腕の装甲を突き破るかの様に現れた三枚刃が瞬時にスライドした装甲の隙間から延び、手刀の要領で振り下ろされるがオータムはこれを難無くかわし、反撃とばかりに振り抜いたブレードもオータムがそうだった様に一夏も難無くかわした。

窓から飛び降りた一夏を追う様にオータムもそれに続いて建物から飛び出し、慌てて箒が窓の外を窺う頃には既に《ボルティックシューター》とクラス代表の座を賭けたセシリアとの試合に乱入して来た襲撃者の対戦車ライフルと同型のライフルでの銃撃戦が始まって

おり、アリーナでもない場所でドンパチなんか始めるものだから周りの建物やら物品やらがとんでもない事になっている。

「あ、噴水が吹っ飛んだ……って違う！　暢気にそんな事を言ってる場合か！というかいつの間に置いてけ放りになって……ええぇいっ！　お前らが勝手によそで暴れるから私が篠ノ之空気なんて言われるんだろうが！」

混乱する箒もどこ吹く風、相変わらずあの二人はバンバンお互いを撃ち合っていくのでどんどん周りの景色が廃墟に成り果てて行く。

「おい、一夏！　早いとこテメェが捕まんねぇから周りがとんでもない事になってきてんぞ！」

「はっ、そういうオータムさんこそ！　さっさと帰ってスコールさんにでも慰めて貰ったらどうですか？」

「うっせ！　今日こそはお前をアジトまで連れ帰ってスコールに褒めてもらうんだ！」

何度撃ち合ってもお互い決定打を与えられず、だんだん焦れてきたのか二人とも狙いが甘くなってきているのだが、蓄積した疲労のお陰で動きが鈍くなったせいか、どちらもその事に気付いていない。それでも、このままでは埒が開かない事だけは自覚していたのか、一夏は《ボルティックシューター》を一旦仕舞い、そして…。

「一気に決める！　装甲展開！！！」

装甲がスライドすると同時に隙間から溢れ出した《零落白夜》の光が全身を包み込み、

「《大切断》、最大出力形態《スーパー大切断》！」

鈴との日中合同での模擬戦の際に『彼』が表出に失敗して暴走した時と同じ手段を、今度は彼自身の意思で使う。

「ウォォォォォォォォッ！！！」

「くっ、早ぇぇ！」

あまりのスピードに怯むオータムに一夏は容赦無く襲い掛かる。その速度は組織のエージェントであるオータムの目にすら残像を追い切れない程の速さで、《アラクネ》のハイパーセンサーですら、一夏が彼女の周りを跳び回るせいでレーダーには彼女の位置を示す紅点の周りをぐちゃぐちゃの青線が引かれるばかりであり、はっきり言って当てにならない。

まず、両手のアームを切り飛ばし、更にその名の通り蜘蛛の様に生えた八本もの多脚を切り裂いて完全に行動不能にした上で持ち上げ、

「ライダァァァァァァァッきりもみシュュュュュュュット！！！」

竜巻でも起こすかの様な速度でぶん回して、投げ飛ばし、

「ライダァァァァァァァッキィィィィィィィック！！！」

トドメのライダーキックで蹴り飛ばした。

右足だけ《零落白夜》を解除した上で蹴ったのはせめてもの情けだろう。

「バイバイキ……って違う！　覚えてやがれぇぇぇぇぇぇっ！！！」

こうして今回も彼女は夜空に輝く星となったのだった。

「お～、飛んでる飛んでる…って、アリャ？　千冬姉より飛ばせて無い？」

《白式・真打》使った俺の方が高度が低いってどういう事さ？

「一夏！」
「っと、箒か」

調度戦闘が終わったタイミングで箒が駆け寄って来た。
……アレ？　いつの間にはぐれたんだ？

「お前、何処行ってたんだよ？」
「お前が勝手に置いて行ったんだろうがっ！」
「ぐえっ」

ちょっ、お前何をそんなに怒って……いや、それより何でシールドバリヤー張ってんのにしっかりダメージ来るとかどんだけな

んだよ！？

えぇいっ、俺の周り（の女）はこんなんばっかりか！

第２６話「怪奇？　蜘蛛女」（後書き）

オータムさんがぶっ飛ばされた後、アジトにて

オータム「スコールぅ、また一夏のヤツを捕まえ損ねちまったよぉ～」

スコール「よしよし、次頑張りましょうね」

第２７話「事件は終わり、いつもの日常へ」（前書き）

今回でクラス代表トーナメントに纏わる話はおしまいです

第27話「事件は終わり、いつもの日常へ」

後悔先に立たず、という言葉がある。
まぁ、何かやる前に悔いる事自体が出来ないんだから当たり前っちゃ当たり前なんだが。
覆水盆に返らずっていうレベルまで行って無いから良かった様なものの……ね。

何が言いたいかと言うと…。

「どうしてこうなった」
「いや、お前らがやったからだろう」

周りの施設は軒並み廃墟で、いや、幸い二階以上上まで被害は出ていないんだが、それにしたって酷い。
外にいるから中までは解らんが、壁はほぼ全壊で辛うじて残っている部分も今にも崩れそうで危なっかしい。
廊下も窓ガラスやら壁の破片やらの瓦礫が散らばっていてとても歩ける状態じゃない様に見えるし、多分、この分だと部屋も直接的な被害が無かったとしても爆発とかの揺れのせいで室内はとんでもない事になっているだろう。

「誰だ！　こんな酷い事をしたのは！」
「いや、だからお前らだろうに」

被害総額がどの位になるかなんて、考えたくも無い。
多分、俺なんかじゃ一生働いても返済出来ない様な額である事だけは確かだと思う。

こういう被害を目の当たりにすると、改めてアリーナのバリヤーの偉大さが解るというものだ。
毎度毎度ミサイルやらビームやらポンポン撃ってるけど、アレが無かったらとんでもない事になるってのがよく解る。

ドォォォォォォォン！

「爆発！？」
「確か、あっちは…」
「あぁ、ラウラとシャルロットのいる方角だぞ！」
「クソッ、これ以上やらせてたまるか！　箒、ここで待ってろ！」
「あ、おい！」

箒が何か言いかけたが、今はそれどころじゃない。
瞬時に《白式・真打》から《白式・影打》に機体を切り替え、俺は飛び立って行った。

「あ、コラ！　置いて行くなと……というかこれ以上やらせるかってお前もだろうが！」

知らないったら知らない！

「い、今のって…」
「えぇ、確かラウラ達の行った方角よ」

一方、セシリアと鈴は先に戦闘が始まった一夏達の方へ助っ人として向かう途中だったのだが、向かう途中で戦闘が終わったのをハイパーセンサーごしに感知したので一安心したところであの爆発音を聞いたのである。

「……まずいわね、ラウラ達の方のって結構な重火力型のＩＳなんじゃないの？」
「ですわね。私の《ブルー・ティアーズ》の様にビーム主体の機体ならまだしも、こんな場所でミサイルなんか使われるのはあまり…」
「……いえ、もうこれ以上はなんとしても阻止せねばなりませんわね」

一点に与えるダメージに関してならミサイルよりビームに軍配が上がるものの、被害の範囲でいえばミサイルに……というか、ミサイルに限らず爆発による火力にものをいわせる兵器はすべてビームを凌駕すると言ってもいい。

勿論、ビームなら何処でも撃っていいというワケでは無いが、火薬系の武装をこんな屋内で使ったりなんかしたら、建物の倒壊の危険性がビームなんかよりも段違いで跳ね上がる。

「急ぎましょう！」
「えぇ！」

そして、もう一人の襲撃者と対峙していたラウラとシャルロットはというと、二対一という状況にも関わらず苦戦を強いられていた。
勿論、二人が弱かったワケでも襲撃者が強かったワケでも無い。
それどころか、彼女らの実力的に”ちゃんとした場所”でならラウラ一人だろうがシャルロット一人だろうが襲撃者と互角に渡り合う事も出来ただろう。

では、何故二人掛かりでここまで苦戦を強いられるのか。

一重に、場所が悪かったとしか言い様が無い。
単に狭いというのが問題なのでは無く、屋内にある機材が……いや、このＩＳ学園そのものが二人の枷になっていたと言ってもいい。
ＩＳ学園は各国の最新技術が揃う場所であり、ある程度は他国に漏れる事が前提であるとはいえ、機密である事には変わり無い。
襲撃者を学園の外から迎え撃つならともかく、学園から追い出すとなるとそう簡単にはいかず、襲撃者の目的が機密の奪取なのか施設そのものの破壊なのか、それともその両方なのかは関係無く、どの道その機密を守りながら戦わねばならないので施設を破壊させるワケにはいかず、結果、攻撃を全て受けねばならなかったのだ。

「ぐぅぅっ」

「ら、ラウラ！」
「あぁ、大丈夫だ……しかし、このままではジリ貧だな」
そう、このまま攻撃を受け続けていればいつかはシールドエネルギーが底を着いてしまう。
しかも相手はラウラ達が施設を守ろうとしている事に気付いており、ワザと二人を狙わず室内を狙う様に射撃を行うので二人ともそれを防ぐ為に狭い通路の中を跳び回って機材を守らねばならなかった。
更に通路が狭いせいで武装まで展開してしまえば身動きが取れなくなってしまうので武装を展開する事が出来ず、また、仮に出来たとしてもその武装を使用してしまえば自分達の攻撃で施設を破壊しかねず、どの道迎撃は不可能であったのだ。
近接戦を仕掛ける暇があればこの状況も打開出来たのだが、上記の通り施設や機材を守らねばならなかった為に近付く事すら儘ならず、Ａ．Ｉ．Ｃもこんな状況では悠長に展開している暇など無い。
「きゃあっ！」
「シャルロット！……ちぃっ、ワイヤーを破壊されたのは失敗だったか」
こんな状況下で使える武装といえば、《シュヴァルツェア・レーゲン》の中ではワイヤーぐらいだったのだが、それも既に防御の際に破壊されてしまっている。
《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》にしても、シャルロットの好みで拡張領域（バスロット）内は殆どが射撃系の武装で占められており、近接系の武装も他のＩＳ同様こんな狭いところで使うには向いてはいなかった。

「ラウラ、そっちのエネルギーは？」
「あまり芳しいくないな。…そっちもか？」
「…うん。どうしよう、このままじゃ……なんとかアイツを外に連れ出せればいいんだけど」
「アーッハッハッハッハッハッハッハッ！　どうしたんだいお嬢ちゃん達？　頑張ってたみたいだけで、もうそろそろエネルギー切れかなぁ？」

嘲笑う襲撃者を睨みつける事ぐらいしか、今の二人に出来る事がなかった。
高笑いとともに打ち続けられるミサイルと銃弾、そしてそれを防ぐ度に減り続けていく二人のシールドエネルギー。
恐らく、もう5分も持たないであろうこの状況で、それでも二人の顔に絶望の色は無かった。
寧ろ、喜色を増してきていると言ってもいい。

「……全く、主役は遅れてやってくるとは言うが」
「ちょ～っと、遅すぎるんじゃないかな？」
「は？　お前ら何を……ってなぁっ！？　お前、いつの間に！？」

急に羽交い締めにされたので慌てて後を振り返ると、黒いバイザーの奥に光る真っ赤な瞳と目が合った。
そう、あの後一夏は《白式・影打》で飛行して現場に急行し、空中でまた《白式・真打》に切り替え、ステルス機能（インビジブル）を使用した状態で屋内に侵入しており、その事をプライベートチャンネルで知らされていた二人は、ずっと彼の到着を待っていたのだ。

「一夏！　そいつを外に放りだせ！　ここでは下手に武装を使うワケにはいかん！」

「よっしゃっ、任せろ！」

三回戦で『彼』が簪にやった様に真空地獄車の要領で襲撃者を羽交い締めにしたままバク転し、窓ガラスを突き破りながら屋外へと落下して行く一夏。

落下しながらも《エレクトロファイヤー》で放電攻撃を喰らわせる事によって動きを封じ、そのまま襲撃者を下敷きにして地面に叩き付ける。

「ア〝アアアアアアアアッ！　ガハッ！」

「…さぁて、よくも散々二人を痛めつけてくれたな？」

「ひぃっ」

ＩＳの搭乗者保護機能ですら殺し切れなかった衝撃が襲撃者の身体を痛めつけるが、痛みに悶えている暇は無い。

逃げなくては。

早く逃げないと…。

「こ、このっ……うわっ！？」

「……《十字手裏剣》」

目くらましに放とうとしたミサイルも、放つ前にいつの間にか投げ付けられた《十字手裏剣》が突き刺さっており、ミサイルの爆発によって発射機関ごと破壊されてしまいそれも出来なくなった。

「うわっ！　くぅっ！……なっ！？　一体何がどうなって…」

右手から放たれた火炎に焼かれ、続いて左手から放たれた冷凍光線を浴びた途端、襲撃者のＩＳの装甲が一気にズタズタにひび割れだ

す。
いくらＩＳが特殊なレアメタルで構成されているとはいえ、戦闘も出来るというだけで元来は篠ノ之博士が作り出した宇宙用マルチフォームスーツを改造しただけの代物である。
篠ノ之博士自身、あくまで宇宙開発用にＩＳを作ったのだからそんな瞬時に超高温から超低温に曝されるなんてワザとやらなければ遭遇しない様な自体に備えてなんかいないし、まだこのぐらいの損傷ならシールドバリヤーなり絶対防御なりで搭乗者の保護ぐらいは出来る。
証拠に、表情が驚愕や恐怖に歪んでいるとはいえ、襲撃者の身体自体は全く以って無傷だ。

「あ、あぁ…」
「シャルロット、ちょっと借りるぞ」
「え？　何を…って嘘!?　拡張領域（バスロット）のデータがハッキングされてる！」

シャルロットが驚いている間にもみるみるうちに《白式・真打》の左腕に《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》の武装の一つ、六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》、通称《盾殺し（シールド・ピアース）》が現れ、そしてその形状を《白式・真打》に合わせてより大きく、そして鋭利に変えていく。
『複数体への分身』、『展開装甲による形態変化』に続く特殊機能の一つ、『武装の剥奪及び再構成』が今そのベールを脱いだ。

「…砕け散れ」
「ひぃっ！」
「ハァァァァァァァッ！！！」

襲撃者は逃げ様にも動けば動くほど機体の崩壊が進むばかりで録に

動く事も儘ならず、ただただ震えるばかりで、なす術など無くただ立ち尽くす事しか出来なかった。
そして、ついに打ち込まれた鉄槌の衝撃によって文字通り機体は破砕し、粉々に砕け散る。

「あぁっ」

機体の崩壊と共に吹っ飛んだ襲撃者はしばらく地面を転がって、やがて気絶した。

「今回の襲撃事件での学園側の被害は織斑達や他の方面へ出張っていた職員や代表候補生らの奮闘もあり、一部施設の使用不能程度で収まったものの、これを機により一層厳重な警備体制が敷かれる事となった。また、織斑が捕獲した襲撃犯とそのＩＳについてだが、一時拘留されていたものの脱走しており、いまだ逃走手段や経路の手掛かりすら掴めていない状況にあるが、恐らくもう学園内には留まってはいないだろう。それと、いくら一部施設が使用不能になったからと言っても貴様らが普段使用する施設に関しては何ら影響は無かったからな、これで授業が中止になるだなんて馬鹿げた事を期待するなよ？　小娘ども」

んで、事件終了後に緊急でＨＲが開かれたんだが、事件内容につい

ては聞いての通りである。

俺らは他のヤツと当たってたから見て無いが、千冬姉と襲撃犯との戦いを見ていた生徒の話によると、生身で《打鉄》のブレード持って無双していたらしい。
それはもう、戦闘などでは断じて無く、一方的な蹂躙だったんだとか。
それを見ていた生徒の一人が、「…もう、織斑先生一人でいいんじゃないかな」と漏らしたらしい。
うん、俺もそう思う。

あぁ、それと、試合の方は事件のせいで中止になったらしく、生徒会長との決戦も後日行われる国同士の思惑が絡みまくったいつもの模擬戦で決着をつけろとの事。
正直、気が重い。
生徒会長以外にもフランスのシャルロット、ドイツのラウラ、日本の簪さんと三回もやらねばならんとか、いい加減特殊機能の方もネタ切れが近いんだが、はてさて、どうしたもんだか。

第２７話「事件は終わり、いつもの日常へ」（後書き）

今回は割といろんなライダーの武器使いましたが、多分皆さんは全部解りますよね？

第２８話「そうだ、お家に帰ろう」（前書き）

はい、今話から「そうだ、お家に帰ろう編」に入りますのでプロローグに当たる今話はかなり短めです。

あと、セリフがエロいだけで実際は何をやったかまでは書いて無いので大丈夫だと思いますが、人によっては最初の方はＲ１８スレスレに見えるかもしれませんのでご注意下さい。
多分、規約には抵触してないハズなのでキーワードに記入してある通りＲ１５で大丈夫なハズ

第２８話「そうだ、お家に帰ろう」

……。

……。

「織斑君！　織斑君のＩＳがやっと届きました！」

「…試合まで時間が無いな。織斑、そのＩＳを装着してすぐに出ろ」

「え、でも設定とかは…」

「時間が無いと言ったろう。フィッティングは試合中に済ませろ」

相変わらず無理難題を…。

しょうがない、どうせこれ以上何言ったって聞いてくれないんだし、

さっさと装着するかね。

『あぁん！　一夏が私の中にぃ～』

「！！？」

なっ…、何だ今のは！？

「どうした、《白式》に何か不具合でもあったのか？」

「え、いや…」

どうなってんだ？

千冬姉達には聞こえて無いのか？

「じゃ、じゃあ行って来る」

とりあえず、さっさと出よう。
幻聴が……しかもエロい内容のが聞こえるだなんて言っても頭がおかしくなったと思われるのがオチだ。

「っと、よっと！」

アリーナに向かった俺は早速そこら中を飛び回ってるビットに追い回されるハメになった。
幸い、まだビームの直撃は受けていないんだが…、

『あぁん！　もっと激しくぅ！』

瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使う度にこれである。

…勘弁して下さい、マジで。

何が悲しくて戦闘中にエロヴォイスを延々と聞かされなきゃならんのか。
俺だって思春期真っ盛りの健全な男子だ。
そんなものを聞かされたらいろいろ想像してしまうだろうが！

体調不良で途中棄権しようにも、既に俺の《雪片弐型》は《零落白夜》を最大出力で発動させてしまっている。
幸い、アーマーで隠れてるからバレて無いものの、もし仮にＩＳを待機状態に戻そうものならあのピッチリしたＩＳスーツでは自己主張しまくりの俺の《雪片弐型》がスーツごしにしっかり浮かび上がるだろう。

それはマズい。
このほとんど女の園と言っても言いようなＩＳ学園で自己主張する俺の《雪片弐型》の存在が露見しようものなら、一発でお終いだ。
何と言うか、ＩＳ学園に限った話じゃないんだが、そんな事になったら社会的に死ぬ！

「…って、ぐぁ！？」

ヤベェ、いらん事考えてたせいで直撃喰らった！
……マズいな、もうシールドエネルギーが半分以下かよ……って、今度は何だ！？

『あぁん！　私の中が一夏の形になるぅぅぅぅ！（訳：フォーマットとフィッティングが終了しました）』

もうやめて！
一夏のライフはもう０よ！

「あ〜、危なかった…」

あの後なんとか試合を終え、そそくさとシャワールームまで駆け込んだおかげでなんとかバレずに済んだ。
本っ当に危なかった…。

んで、落ち着いたのでさっさと部屋に戻ってベットに寝転がっているのが今の状態。
しかしまぁ、これからもコイツを使わねばならんとなると、気が重い。
使ってる間延々とエロヴォイスを聞かされ続けるとか、それ何て拷問だよ。

…なんて考えていると、何やら腰の上に重みが……って、え!?

「な、な……」

なんという事でしょう、俺の上にすっ裸の美女が跨がっているではありませんか。
ってか、誰アンタ!?
どうやって部屋にはいった!

「あ、あの……誰?」
「フフフ、貴方の《白式》ですよ?」

「は？　いや、なんでＩＳが人間なんかに…」
「１８ｔｈシフト（１８歳未満お断りモード）しました♪」
「どんだけシフトしてんだよ！！　ってか、俺まだ１５！」
「大丈夫。同意の上ですから」
「いつ俺が同意した！？　ってオイ！　ちょっ、待……」

そう言って《白式》を名乗る何故の女は強引に俺に迫り……って、ちょっ、まっ……。

「アーッ！」

※番組終了後、織斑君は白式さんに美味しくいただかれました（笑）

「アーッ……って、夢？」

自分で上げた叫び声で目が覚めた。
そうだよな、あんなのが現実にあってたまるか。
…ってか、第一なんで相手が《白式》なんだよ。
おかしいだろ、ソレ。
箒とか、鈴とか、セシリアとか、シャルロットとか、ラウラとか、いつも回りにいるメンバーが夢に出て来るならともかく……

いや、それはそれで問題か。

入学してから季節が変わる程月日が経ったワケじゃないんだが、それでも入学当初よりは暖かくなってきた分、寮内での皆の格好も薄着になってくるワケで……。

まぁ、その、なんていうか、目に毒なワケなんですよ。

思春期の男子としては。

多分、今朝見た夢もそれが原因なんだろう。

四六時中、こんな目に毒なパノラマ見せられて、その上こころなしか漂う女の子特有の甘ったる～い香りをかがされ続ければいい加減参るというものだ。

もう、悟りを開くのが早いか性犯罪者になるのが早いかという瀬戸際まで来ているのかもしれない。

「参ったなぁ…。ここまでキツいとは思って無かった」

こういう話をするとまた箒達にシスコンって怒鳴られるのだが、千冬姉は身内贔屓せずとも美人だったし、そんな人と二人で暮らしてたんだから、まぁ何とかなるかと思ってたんだが、甘かった。

質より量……といったら失礼になるが…いや、みんな可愛いんだけど、それでもなんとかなると思ってたんだが、流石に実質女子校に男一人はキツかったか。

マズいなぁ……ホント。

このままだとマジで気が狂うかもしれん。

そうだ、明日明後日は土日で休日なんだから、久しぶりに家に帰ってみるか。

珠には外の空気を吸わないとな。

「よし、今度の休日は家に帰ろう。久しぶりに弾とかに会ってみたいし」

そう思っただけで、少し気が軽くなった。

んで、家に帰ったまでは良かったんだが……、

「あ、いっくんお帰り～」

何でいるんですか、束さん。

第２８話「そうだ、お家に帰ろう」（後書き）

せっかく一人でお家に帰った一夏の前に立ちはだかる束さん！
どうなる次回！？

第２９話「天才と…」（前書き）

また執筆中に寝落ちしたので急いで仕上げました。
ギリギリセーフ、かな？

第２９話「天才と…」

「……」

え…、なんで束さんが此処に……ってか、鍵はどうした、鍵は。
俺がＩＳ学園に入学する前ならともかく、どうやって中に入った？
ピッキングか？　ピッキングなのか？

「？　どうしたの？　いっくん。早く上がりなよ」
「え…あ、はい」

いや、待て。
早く上がりなよって此処俺の家なんですけど。

…どうしてこうなった。

今日（土曜）の早朝から自宅に帰宅して、午前中に掃除とか済ませて後はゆっくり……って予定だったのに、いきなり頓挫したな、おい。

とりあえず、二人で玄関から居間に向かい、お茶を出して……はぁ、俺の休日がぁ……。

「あれ～？　いっくん顔色悪いよ？」

誰のせいですか、誰の。

「あ、解った！　その顔は学園の娘達が無防備な格好してたせいでエッチな夢見ちゃったから辛抱堪らないって顔だね？」

「エスパー！？」

ピンポイント過ぎるわ！

「それでそれで、夢の内容は擬人化《白式》たんにあんな事やこんな事やそんな事まで…」

「なっ…」

ちょっ、ま、何でそんなに詳しいんですか！

「だってその夢、私がワザと見せたんだもん」

「束さんの仕業かぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

道理で詳しいワケだよ、畜生！

どうやって……いや、何でそんな事したんですか、束さん。

「え～、だっていっくん、あれだけたくさんの娘達を侍らせてるのに、一向に誰とも付き合う気配が無いんだもん。束さん、いっくんが実は女の子より男の子の方が好きなんじゃないかって心配になって」

「女の子の方がいいに決まってるでしょ…」

俺だって健全な男子だし、人並みには女の子にだって興味有る。
今こうして束さんと話てる時だって束さんの豊満なバストの谷間にどしうしても目が釘付けになって……。

「そうだね。さっきからいっくん、私の胸ばっか見てるし」
「すいません…」
「うんうん、いっくんもちゃんと男の子だね～♪」

だって、Gクラスの冥王様だもん。
そりゃ、誰だって釘付けになるわ。

「それにしてもすごいよね～。箒ちゃんともう一人の幼なじみ、お嬢様、僕っ娘、ロリ……と、いっくんの周りって随分品揃え豊富だよね」
「いや、品揃えって…」
「ソレなんてエロゲ？」
「…勘弁して下さい、マジで」

あは～、なんて束さんは暢気に笑ってらっしゃるが、笑い事じゃないっての。
俺が唯一ＩＳを動かせる男性なので、その帰属を求めて世界中が争っているのだ。
代表候補生の皆にはそんな下心は無いみたいだけど、彼女らの祖国の方は違う。

まだ俺が結婚を考える様な歳じゃないからまだどこも動き見せてはいないものの、卒業する頃には「是非是非うちの娘と”仲良く”な

って下さいね。そのままうちの子（所属）になってくれると嬉しいな」みたいな感じのお誘いがくるのだろうと思うと気が滅入る。
じゃあ箒は安全か、といえばそうでも無い。
箒は…というか、俺も千冬姉も束さんもそうだけど、紛れも無く日本人だ。
箒の存在は俺を自国に縛り付けておく鎖としては十分過ぎる価値があると言ってもいい。
まぁ、箒に何かしようとしたら束さんが黙っていないだろうけど。
あぁ、代表候補生という意味では簪さんも皆と同じか。

……アレ？
束さんの計画とか関係無しに誰選んでも一悶着起こるんじゃね？
世界規模で。
もしかしなくても誰とも付き合わない方が平和だったりする？

「え～、別にいいんじゃないかな？　周りなんかの為に我慢なんかしてたら健康に悪いよ？」
「束さんが言うと説得力がありますね」

束さん、我慢とかした事無さそうだし。

「ってか、何で俺の考えてる事が解ったんですか？」
「顔に出てるってのもあるけど、いっくん、途中からずっと一人でブツブツ喋ってたよ？」
「え゛」

マジか。
全然気付かなかった……って、もしかしていつも皆に考えてる事がバレルるのって、顔に出てるからじゃなくて俺の独り言のせいか？

「何度も言う様だけど、特にいっくんはあんな場所にいるんだから、余計に我慢は身体に毒だよ？　下半身的な意味で」
「ソレこそ余計なお世話ですって」
全く、他人事だと思って…。
「他人事だもの」
ですよねー。
そう言って束さんが茶を啜る。
束さんが何かする度にカチューシャのウサ耳がピコピコ動くんだが、厚さ１ｍｍぐらいしかないのにどうやって動かしてるんだろうか。
まぁ、ＩＳなんてものを作ってしまう様な人なんだから、そのぐらいは造作も無い事なんだろうけど。
「あ、そうだ。メンテナンスするから《白式》貸して。両方」
「あ、はい」
そう言って手渡された二つの《白式》を束さんは手慣れた手つきで……って、右手で真打、左手で影打のメンテナンスを同時にやるとか器用過ぎるわ！

「あの…、一遍に二つもやって大丈夫なんですか？」
「ん～？　別に大丈夫だよ？」

って、今度はノールックかよ！
いやいや、俺なんかより機体の方ちゃんと見て下さいって。

「大丈夫大丈夫。本格的な修理ならまだしも、このぐらいの整備なら寝ながらでも出来るもん」

マジか…。
なんかもう、天才とかそういう次元の話じゃないよね、コレ。

「はい、終～了～♪」
「早っ！」

ちょっ、まだ5分も経って無いんですけど！？
いくらなんでも早過ぎるわ！

「え～。でもこのぐらい普通だって」
「いや、このレベルで普通なんて言われたら他の人達みんな三流以下じゃないですか」
「ん？　私からみればあんなのド素人もいいところなんだけど、違うの？」
「ですよねー」

そりゃ、貴女レベルの天才の基準じゃみんなド素人でしょうよ。

「それにしてもアレだよね～」
「？　なにがですか？」
「Ａ．Ｉ．Ｃとか衝撃砲とかＢＴ兵器とかってさ、何で皆一つずつしか積まないんだろ？　全部積めばいいのにさ」

出来れば誰も苦労しませんって。
どれも各国が持てる技術の全てを注ぎ込んで漸く出来たばっかりなんだからそんな何個も何個も積めませんよ。

「ＩＳ作る前の私でももっと質のいいの作れたのにな～」

え～と、確か束さんは千冬姉といっしょで２４歳で、束さんがＩＳ作ったのが十年前ぐらいだから……現代の最新鋭技術は１４歳当時の束さん以下と。
うわぁ…。

「え～、でも遅過ぎると思わない？　発表からもう十年も経ってるんだから、いい加減第四世代機の開発が終わって第五世代機の開発が始まってもいい頃だと思うんだけどな～」
「無茶言わんで下さいよ」
「そうかな？　私なら資材さえ揃えばすぐに第七世代ぐらい作れるよ？　《白式・真打》だって、ＩＳだったら第六世代相当の機体だし」

ちょっ、第六世代相当って……。
道理で俺みたいなペーペーでも代表候補生に勝てるハズだよ。
やっと第三世代相当になった機体と元の製作者本人に作られた第六世代相当機体じゃ性能比べるだけ向こうが可哀相な事になるわ。

「…ねぇ、いっくん。”降りるなら”今のうちだよ？　多分、ヤツらが来る頃には第七……ううん、第八世代相当の機体だって完成してる。それさえ有れば私一人だって…」
「降りませんよ、俺は。乗り掛かった船……というか、このまま放っておいたら束さん、もう二度と帰って来そうにありませんし」
「え～、そうかな？」
「…少なくとも、俺にはそう見えます。それに…」
「それに？」
「束さんはもう少し人に頼っていいと思いますよ。俺が……いや、俺で頼りないなら千冬姉や箒だっているんですから」
「フフフ、優しいね。いっくんは」

束さんは天才過ぎた。
ずっと誰も束さんに合わせる事が出来なくて、幼い頃の束さんも…
……天才か凡才かなんて関係無く、子供に手加減なんて出来る出来ない以前に、まだ心が未成熟な子供が加減して相手に合わせるなんて思えるハズが無くて、周りには誰もいないのに、その才能だけが成長し続けて。

気付けばもう一人で”なんでも”出来る様になってしまったせいで、他人なんてものはどうでもいいものになり下がって、興味を向ける

事が出来た”他人”なんて、実妹の箒ぐらいで。
そんな中で、例外的にホントの他人である千冬姉や俺に出会って。
それでもう、束さんにとっては十分だったんだと思う。

ホントは世界なんてどうなってもいいって思ってるのに、たった三人の”他人”の為に自分にとってどうでもいい世界を救おうっていうのに、その三人の内の一人すら協力しなかったら、束さんがあまりにも……。
いや、一人すらというと語弊があるか。
別に千冬姉や箒が協力を拒んだワケじゃない。
二人とも、ただ”気付いてない”だけ。
なら、事情を話せば……なんて事ぐらいでどうにかなるなら、既にやっている。
俺達三人は……いや、千冬姉は別のベクトルで天才だけど、恐らく突き付けられた証拠を証拠と理解する事なんて一生できないだろう。
その他大勢だってそう。
少なくとも実際にヤツらが来るまでは、『白騎士事件』でＩＳがその存在を世界に報しめた時の様に、実際にその存在を目の当たりにするまでは、絶対に理解どころか、その存在を認識する事なんて出来やしない。

俺だって、理解出来たワケじゃない。
でも、束さんが言った事が真実だと……或は、嘘をついてるワケではないと思ったから、”此処”にいる。
正義とか、そんな大層な話じゃない。
ただ放って置けなかった、それだけの話。
お節介ですらなく、勝手に首を突っ込んで、それで無理に力を乞うただけ。
束さんも多分、今も渋々なんだろう。
放って置けば俺が勝手に動き回って怪我をするだけだからと、そう

思って力をくれた。
関わりさえしなければ玩具のままだったベルトを本物にしてまで、
俺の為に。

たった三人の為だけにどうでもいい世界を救おうとしている女と、
それに無理矢理着いて行こうとしている男。
それが、今の俺と束さんの関係。

随分自分がみっともなく感じるけど、それでいいと思う。
俺は欲張りだから、身近な誰かが一人でも欠ける事が許容出来ない。
だから、これからも束さんと共に戦う。

束さんほどそう思ってるワケじゃないけど、確かに世界は守る価値
があるかどうか解らなくなるぐらい、醜い面を見せる事もある。
それでも、そんな世界でも、守りたい人がいるから。

これは、ほんの少しの守りたいものの為に、どうでもいい世界まで
守ろうとした、そんな二人の物語。

第２９話「天才と…」（後書き）

そういえば箒さん、アニメで一夏にボディブローを喰らわせて沈めた後に更に追い撃ちを掛けるように鳩尾を蹴って自分の腰の位置まで浮かせてたけど、千冬姉以外でも……つ～か、あの世界の人間の身体能力は……いや、ＩＳの操縦者は皆このレベルの身体能力なのかと戦慄しました（笑）

第３０話「彼を求めて三千里？」（前書き）

遂に３０話になりました
これも読者の皆様のおかげです

第３０話「彼を求めて三千里？」

一夏が自宅で束とお茶を啜っていた頃、いつものメンバーはというと……。

（今日は待ちに待った休日。行事も一段落した事だし、この機会に一夏と…）

クラス代表トーナメントも終わり、以前ほど一夏が訓練に励む必要性が無くなった事もあり、箒にとってまさに今こそ大事な大事なアタックチャンスだった。

ちなみに、いろいろと舞い上がってしまっているので妄想の中のデートプランも彼の唐変木さの前ではことごとく頓挫してしまうであろう事までは思い至ってはいない。

仮にその事に気付いていてもこういう時ぐらいは…と期待してしまうのでどの道結果は同じだろうが。

（は！　いかん、うかうかしている間に他のヤツに一夏を……）

勿論、他のヤツとは彼女以外のいつものメンバー、つまり…鈴、セシリア、シャルロット、ラウラの四人の事である。

普段なら皆友人と言ってもいいほど仲のいい五人であるが、それはそれ。
この時ばかりはお互い出し抜くか出し抜かれるかだけのライバルとなる。

（待っていろ、一夏）

期待を胸に、少女は部屋を飛び出した。
戦の基本は夜討ち朝駆け。
しかし昨晩は皆で消灯時間ギリギリまでお茶会だったので夜討ちは失敗に終わってしまっている。
勿論、それは箒だけに限った話ではなく、皆抜け駆けしようとギリギリまで粘ったのだが、結局誰も退かなかったのでただ牽制し合うだけに終わってしまった。
だから、チャンスはもう早朝しか無い。
果たして彼女は無事目的を果たす事が出来るのだろうか。

（ふふふ、漸くこの時が来たわ…）

クラス代表トーナメントも終わり、以前ほど一夏が訓練に励む必要性が無くなった事もあり、鈴音にとっても……いや、他のメンバーならまだしも、幼なじみなんて属性のダブりがいるのに……という

か、後発なので彼女こそがダブりなワケだが、だからこそ、このチャンスは見逃せなかった。
やはり彼女も箒同様、いろいろと舞い上がってしまっているので妄想の中のデートプランも彼の唐変木さの前ではことごとく頓挫してしまうであろう事までは思い至ってはいない。
この辺りはなまじ自分は幼なじみだからと、彼の事を知った気になっていたのが二人にとっての弊害だった。
確かに鈴音も箒も他の三人より一夏との付き合いが長いのだから、ある意味間違ってはいないが、二人とも平常心を保っていれば気付いただろうが、気付く頃には後の祭である。

（こうしちゃいられないわ！　アイツらがでしゃばって来る前に先手を打たないと！）

勿論、アイツらとは彼女以外のいつものメンバー、つまり…箒、セシリア、シャルロット、ラウラの四人の事である。
普段なら皆友人と言ってもいいほど仲のいい五人であるが、それはそれ。
この時ばかりはお互い出し抜くか出し抜かれるかだけのライバルとなる。

（待ってなさいよ、一夏）

期待を胸に、少女は部屋を飛び出した。
戦の基本は夜討ち朝駆け。
しかし昨晩は皆で消灯時間ギリギリまでお茶会だったので夜討ちは失敗に終わってしまっている。
勿論、それは鈴音だけに限った話ではなく、皆抜け駆けしようとギ

リギリまで粘ったのだが、結局誰も退かなかったのでただ牽制し合うだけに終わってしまった。
だから、チャンスはもう早朝しか無い。
果たして彼女は無事目的を果たす事が出来るのだろうか。

（〔上記参照〕なぁ～んて、お二人は思っていらっしゃるのでしょうけど、そうはいきませんわ）

箒や鈴音と比べて、セシリアは比較的余裕だった。
彼女の目が正しければ、シャルロットもラウラも異性というよりは友人として一夏に好意を抱いている様に見えていたので、この二人については多少の警戒はしても、そう身構える必要は無いと思っている。
彼女にとっての最大の障害は幼なじみという自分には無いアドバンテージをもったあの二人だったが、どうせあの二人の事だ、自分がわざわざ手を下さずとも勝手に潰し合ってくれる。
自分は彼女らが潰し合ってくれている間に一夏を連れ出せばいいだけなのだ。

（フフフ、せいぜい争いなさいな）

残念ながら昨晩は皆で消灯時間ギリギリまでお茶会だったので抜け

駆けは失敗に終わってしまっているが、チャンスが無くなったワケでは無い。
果たして彼女は無事目的を果たす事が出来るのだろうか。

（〔上記参照〕なんて風に、あの三人は思ってるんだろうけど…）

確かに、セシリアの予想通りシャルロットにはまだ三人ほどの好意を一夏に抱いてはいない。
だが、その想いは着実に芽吹きつつあったのだ。
特にこれといったエピソードによって劇的に芽生えたのではなく、何て事無い日常の中で彼女の想いは少しずつ成長していった。
或は、自分を含め他の国の代表候補生達の後で蠢く思惑を知ってなお嫌な顔一つせずに接してくれた彼だからこそなのかもしれない。

（それに、多分デートに誘えたとしても一夏だしなぁ…）

短い付き合いなりにも彼があまりその辺り気が利く様には……というか、余程ストレートに想いを伝えなければ向けられている好意に気付きもしないだろう。
人数が増えたせいで拍車が掛かっているのかもしれないが、どうも彼は自分達の事を友人としてしか見ていない気がするのだ。
服装に気合いを入れようが、視線に熱を込めようが、彼の態度に変

わりは無い。
暖簾に腕押しというか、あの三人を見ている限り、シャルロットの目にも哀れなぐらいいつも徒労に終わってしまっている様に見える。姉が姉だけに、ただ美人がそこにいるだけでは彼は動じる事は出来ないのだろうが、それにしたってひどい。

（まぁ…その、最初はお友達からって言うし……）

シャルロットの予想が正しければ、結局あの三人の計画は上手くいかない様な気がした。
だから…。
ゆっくり、自分のペースでいい。
確かにスタートは出遅れてはいるけれども、だからといってゴールまで遅れっぱなしなんて事は無いのだから。

（フッフッフッフ、甘いぞ、四人共。情報を制する者こそが戦を制するのだ）

いつものメンバーの中ではラウラが一番リードしていたのかもしれ

ない。
一夏が自宅に一時帰宅する為に昨日中に外泊届を提出していた事を知っているのは彼女だけなのだから。

「クラス代表トーナメントも終わった事だ。今日は私がたっぷりと仮面ライダーがなんたるかを教えてやろう」

そう呟き、昨日中に外出準備の一環として用意した鞄を見遣る。
鞄の中にはぎっしりと件のヒーローのＤＶＤが敷き詰められていた。
ラウラ自身はブルーレイで映像を保存していたのだが、織斑宅にはＤＶＤプレイヤーしか無い事も既に調査済みだったのでワザワザ全部ダビングし直したのだ。
この辺りの準備も抜かりは無い。

ラウラが仮面ライダーを知ったのは、千冬が教官の任務を終えて日本へ帰っていった少し後の事だった。
千冬がいた頃から部隊内で教官の国の事を色々と知ろうとそれぞれ隊員があらゆる分野を調べていたのだが、その中で副隊長であるクラリッサが入手した仮面ライダーという番組に目がとまった。
そういえば教官が弟もよく見ているとおっしゃっていたが……と試しに何作品か見たのが始まりだった。
気付いた頃には全作品を鑑賞し終わっていたのである。
勿論訓練の合間に見ていたので訓練自体に差し支える様な事は無かったものの、ここまでハマるとはラウラ自身思っていなかった。
クラリッサ自身は単にイケメンヒーローブームにハマっている奥様方とあまり変わらない動機でみていたのだが、それはそれ。
ラウラが特に好んだのは昭和の……つまり、ＩＳの影響を受ける前のライダー達だった。
その大きな理由としては彼らの戦い方にある。
別に平成ライダーの様に武器を使う事が悪いとは思わなかったが、

どうも武器に頼り過ぎているというか、武器の性能で圧倒的な勝利かそれが通用せず惨敗かの二極しかないという番組内容自体があまり好ましく無い……というより、単に撃った、当たった、倒したといった様な武器に頼るだけで使いこなしてる様に見えない戦い方をするのが気に入らなかったのだ。
単に大威力で圧倒するのなら、それこそ自分達軍人の様にボタン一つでミサイルでも撃ち込んでやる様なもので、それはヒーローの戦い方とは違う。

そう思ったかこそ、《白式・真打》を……織斑一夏を仮面ライダーとは認めたく無かったのだ。
デザインについては平成以降のライダーと同じく……というか、影響を与えた代物を作った人物によって作られたライダーなのだから、いくらＩＳ寄りなデザインをしていても、それはしかたのない事ではある。
だが、武器は…あの英雄達の武器の名を継承した武器を使うのなら、せめてちゃんと使いこなして欲しかった。
勿論、彼が初心者だということは重々承知しているが、それでも平成以降のあまり好きではない面を生で見せられると流石にイラッと来てしまうのだ。
だからこそ、自分が鍛えてやろうと、そう思ったのだ。

「フフフフ、これで一夏も私好みの…」

仮面ライダーに、とまで発音しなかったので別の意味に聞こえるが、残念ながら彼女の頭の中では既に理想の仮面ライダーとなった一夏が縦横無尽に戦う場面が脳内再生されているので本人は全く気付い

ていない。

「さて、アイツらに見付かる前に出掛けるとするか」

そう言って、自室のドアを開けた瞬間、件の四人が目に映った。

「ねぇ…ラウラ、僕らに見付かる前にどこに行くつもりだったのかな？」

「今朝、一夏の部屋を訪ねたら既にものけの空でな」

「皆同じ様な目的で集まったっぽいのに、アンタだけいなかったからね」

「さぁ、ラウラさん。一夏さんが今どちらにいらっしゃるか教えていただけないかしら？」

皆、笑顔だった。

笑顔なのに、恐かった。

軍人であるラウラが怯える程に。

結局、抵抗虚しく五人は織斑宅を目指す事となる。

出し抜かれるぐらいなら、みんなで一緒に、と。

「予定は狂ったが……まぁ、いいか」

「…待っていろ、一夏」

「全く、私達を置いて一人でお出かけになるだなんて…」

「あんにゃろー、せっかくの予定が台無しじゃない」

「一夏の家かぁ……、どんな感じなのかなぁ…」

「！？　……嫌な予感がする」

多分、その予感は間違っていない。

第３０話「彼を求めて三千里？」（後書き）

ここ一週間のユニークＰＶが一日約５５０～５９０ぐらいだったのに、一夏が白式さんに（性的な意味で）喰われる夢を見た回の日だけは６００オーバーでした。
うん、皆正直だね（笑）

需要あったらそっちも連載しようかと思ったぐらい圧倒的ＰＶ数でした。マジで

第３１話「ウォー……じゃなくて、束さんをさがせ」（前書き）

今回も執筆途中で寝落ちしたけど、ギリギリセーフ

第３１話「ウォー……じゃなくて、束さんをさがせ」

ピンポーン

と、どこの家庭にでもあるような来客を報せるチャイムが鳴り響く。
その少し間の抜けた音が、何故か俺には絞首台のスイッチを押した音に聞こえたのは幻聴なのだろうか。

時刻はちょうど１４：００を回ったところで、俺も束さんも昼食はとっくに済ませた後で、二人で食後のお茶と洒落込んでいた。
因みに昼食のメニューはラーメンで、作ったのは俺。
また例によって食事を用意する事をねだられたのだが、急な事で食材が足りなかった為におかずは冷凍食品のシュウマイすら無いのだが、どうにかなった。

流石に束さんも夕方には帰るだろうと思って、買い物は後でいいかとこうして二人でお茶を啜りながら、テレビでも点けようかとリモコンを手に取ったところでさっきのチャイム音が部屋に響いたのである。

十中八九いつものメンバーの誰かか、或は全員なのだろうがはてさてどうしたものか。
あの甘ったるい空気が充満したＩＳ学園から抜け出して息継ぎでもしようかと思い、始発で帰ったところで既に束さんがいたので計画は頓挫しているとも言えなくは無いが、かといって素直に出迎えでもしたらいつものメンバーに束さんをプラスだなんて明らかに俺のキャパシティを超えるメンバー構成になってしまう。
休暇で実家に帰ったのに、精神的疲労を普段以上に蓄積する様な事

態は正直避けたい。
だが、だからといって居留守を使ったとして、それがどれほどの抵抗になるのだろうか。
あの五人の事だから、多分ハイパーセンサーで俺が此処にいるって事が解った上で来ているハズだ。
束さんは製作者権限でＩＳからの干渉を一切受け付け無い……つまり、この場合ハイパーセンサーに引っ掛からないから良いとして……いや、待て、そうなるとあの五人は此処に束さんがいないと思い込んでる事にならないか？
まぁ、あの五人もまさかこんなところに束さんがいるとは思わないだろうが、このまま招き入れてエンカウントしてしまうとマズい事になるのではないだろうか……っていうか絶対マズいって。

ピンポーン

と、二度目のチャイムが鳴り響く。
何故か俺には、その音色が降伏勧告にしか聞こえなかったのだが、幻聴だと信じたかった。

「えぇいっ、ままよ！」

玄関のドアノブに手をかけ、ドアを開けたところで束さんに隠れてもらう様にお願いするのを忘れていた事に気付いたが、もう引き返せないところまできていたのだ。

「あ～、いらっしゃい」

「遅いぞ、一夏。何をしていた？」
「あぁ、ちょっと洗いものをな。ところでどうしたんだ？　みんなしてここまで来るなんて」
何となく応えは解っていたが、気付かないフリをして尋ねた。

どうしても何も、あの五人が来る理由なんて……その、俺しかないワケなんだが。
俺だって、そりゃ……美少女で、（稀に暴力的だけど）性格も悪くなくて、そんな娘達に好意を向けられるのはうれいしけど。
好意の向け方が暴力的なのも少し気になるけど、なんだか身体に蓄積してるダメージがギャグ補正じゃ処理し切れ無いレベルまで来てる様な気がしなくもないけど、正直困る。
束さんの計画があるからとか、国家間での思惑とか、そういうものはこの際考え無い様にしたとしても、普通にあの中から一人選ぶのが難しかった。
それぞれ長所や短所はあるけど、皆いい娘だから。
その中から一人だけ選ぶだなんて……。

皆には悪いとは思う。
でも、自分から今の生活を……この楽しい日々を崩したくなんか無かった。
ヤツらが来るまでのつかの間の時間ぐらい、楽しく過ごしたかった。
……いや、違うか。
一人選んで、今のこの日々を自分で壊してしまうのが恐いだけ。
ヤツらが来るからなんて言い訳で、結局ただ恐かっただけか。

……最低だな、俺。

「その、だな、せっかくの休日なのだから…」
「そ、そうそう！」
「皆でゆっくり過ごすのも悪く無いかな、と思って」
「なのに朝からお前がいなかったからな」
「えぇ、こうして皆で探しに来たのですわ」

口々に、そして顔を赤らめながら言う彼女らはとても可愛いらしく、だからこそ、その分そんな彼女らを見れば見るほど罪悪感を強く感じて、辛かった。
彼女らはなんら悪くないのに、皆で過ごす時間は掛け替えの無いほど楽しいのに、それと同じぐらい辛かった。
以前の自分の様に、全く気付かなければ、或は……いや、もっと早く気付くべきだったのだ。
こんな風に曖昧な態度しかしないから、皆は……。

「まぁ、上がりなよ」

結局、また曖昧に流す事しか出来なかった。

リビングまで皆を通したところで、ふと束さんが来ていた事を思い出したんだが、さっきまでリビングにいたハズの束さんはいつの間

にかいなくなっていた。
ご丁寧に自分が使っていた湯呑みだけ片付けられていたので、多分これで皆にはさっきまで束さんが来ていた事はばれ無いだろう。

「……久しぶりだな、こうして一夏の家に上がるのは」
「そうね、あんまり変わって無いっていうか……」
「ふむ」
「これが、一夏さんの…」
「へぇ～、思ったより片付いてるな～」
「まぁ、そりゃ千冬姉が出稼ぎばっかで家を空けてる事が多かったからな。自然と家事も出来る様に……というか、それぐらい出来る様にならないと、マズいだろ」
「それもそうだね」

そんな風に他愛もない話をしながら、とりあえず皆に茶でも出そうかと台所に向かって人数分のコップを出そうと流し台の下にある食器棚を開けると……、

「！！？」

「？　一夏、どうかしたのか？」
「い、いや、なんでもない」

動揺を隠しながら、リビングにいるラウラに応えた。
……って、なんでそこにいるんですか！？　束さん！

隠れんぼでもしているつもりなのか、本来食器を入れていたスペースに束さんが体育座りした状態で居座っていた。
因みに食器は隣のスペースに移してあっただけなので無事である。

気を取り直して人数分の茶を入れてリビングに運び、全員に配る。
何かお茶うけでも用意するからと、再び台所に戻る頃には食器は元の位置に戻され、束さんはいなくなっていた。
ぞくり、と不安が身体中を駆け巡る。
あの束さんの事だ、大人しく帰ったなんて事、まずありえない。

「ん？……気のせいか」

って、やっぱり！
どこに行ったのかと視線を巡らすと、ひょこひょこと姿勢を低くした束さんがリビングに……ってマズい！　鈴にバレ……る直前で瞬時に死角まで束さんが移動した為、何とかバレずに済んだ。
心臓に悪いなぁ、もう。

出来るだけ平常心を保ちながら冷蔵庫から取り出したおかしを持ってリビングに向かい、自分の席に戻る。

「それにしても一夏さん、自宅にお戻りになるのなら予め言って下さらないと」
「あ～、悪ぃ。しばらくほったらかしだっからさ。掃除だけしてすぐ帰ろうかと思ってたんだよ」

そう言って自分のコップを手に取り、一口お茶を飲もうとしたところで、またひょこひょこと束さんが……。

マジ勘弁して下さい。

危うくお茶を吹くところだったじゃないですか！
と、そんな俺の無言の講義もどこ吹く風、上手い事他の皆の死角を

縫う様に移動していた束さんは現在俺の真後ろにいる。
ソファーがそれなりに大きかったから良かった様なものの、これが椅子だったら確実にバレていた事だろう。
危ない危ない。

「それにしても、よく俺が家に帰ってたって解ったな」
「あぁ、教官に聞いたからな」

おいおい千冬姉、貴女どうして俺が一旦自宅に帰ったか知ってるでしょうに。
いや、まぁ、俺の護衛も兼ねてるからうちのクラスにやたら代表候補生が集まってるんだから間違っちゃいないんだが。

って、あぁもう！
うろちょろしないで下さいよ束さん！

俺がラウラの質問に答えている間に今度はそのラウラの後に……
って、現役の軍人に気配を悟らせないとか、どんだけだよ！

その後も束さんはひょこひょこと動き回ってはガリガリと俺の精神を削っていき、気付けばもう夕方になっていた。
でも、それもここまで。
ついに束さんがいる事がバレてしまったのだ。
よりにもよって箒に。
頭隠してウサ耳隠さずというか、束さん本人はしっかり隠れていたのにそのウサ耳カチューシャが露出してしまったのである。

「そのウサ耳……姉さん！」
「あちゃ～、バレちゃった♪」

屈託の無い笑顔を浮かべながら立ち上がった束さんに皆驚き、言葉が出ない。
かく言う俺はというと勢いよく立ち上がったおかげで揺れるバストを……って、イテッ！
ふと隣を見ると、鈴が俺の脇腹を抓っていた。
見回すと、単に近くにいたから鈴が抓っただけの様で、他のメンバーも不機嫌そうな顔をしている。
束さんの登場には驚いたくせにこういうところのチェックだけは厳しいな！　オイ！

「貴女という人は！」
「おっと」

唯一いつものメンバーの中で俺が束さんの魅惑のバストに釘付けになっていたのに気付かなかった……いや、気付いてもそれどころじゃなかった箒が束さんに掴み掛かろうとするが、何度やってもひらりひらりとかわされるばかりで一向に捕まる気配が無い。
遂に痺れを切らした箒が刀で斬り掛かって、ってオイ！　いくらなんでもやり過ぎ……ってかその刀何処から取り出した！？
なんて俺が驚いているうちに束さんは真っ二つに斬られ……、

「！？　変わり身！」

…たかと思いきや、斬られたのは丸太で……って、忍者か！

「強くなったね～箒ちゃん」
「減らず口を！」

再び箒が斬り掛かるが、やはりまたかわされ、

「あばよ！　とっつぁん！」
「誰がとっつぁんか！」

なんて某怪盗みたいな台詞を残して外に走り出してしまった。
慌てて箒が外を見遣るが、もう束さんの姿はどこにもない。

そんなハプニングはあったものの、気を取り直して皆で夕食の買い出しをして皆で作って……いやぁ、うん、個性的な味の方もいらっしゃったけどね。
その後しばらく団欒して、皆は帰っていた。
なんでも、急な事だったので外出届は受理されたけど、外泊届は受理されなかったのだとか。
いや、受理されても困るんだけどね。

そんなこんなで、結局はいつも通りのドタバタした日常だったけど、夜は本当に一人。
流石に淋しいとまでは思わないが、静か過ぎる空間に違和感を覚える辺り、俺も随分向こうの環境に慣れていたのだろう。

さて、少々予定は狂ったけど、明日辺り弾にでも会いに行くか……
と、思いながら、俺は眠りに着いた。

キィ……と、ドアを開く音。
しかし家主は夢の中。

第３１話「ウォー……じゃなくて、束さんをさがせ」（後書き）

一夏に忍び寄る影の正体やいかに！？

第３２話「飛翔」（前書き）

すいません、活動報告にあった様に、いろいろ立て込んでいたので更新が遅れました

第３２話「飛翔」

ヒタヒタ、ヒタヒタと、その足音は確実に彼へと迫って行く。

「…」

しかし彼は夢の中。
カケラも起きる気配は無い。

「……」

ヒタヒタ、ヒタヒタ。
また更に、その足音は彼との距離を縮めて行く。

それでも彼は夢の中。
まるで起きる気配がない。
しかし、それも無理もない事。
日頃の疲れを癒す事も儘ならず、まさにオデノガラダハボドボドダ！　な状態で、なんとか理由を着けて一人になろうと自宅に帰ったものの追っ手の追撃は緩まず、（一応）敵ではないので排除するワケにもいかないアグレッサーならぬストレッサーの人数は一向に減らない上に、そのストレッサーと過ごすのが元来嫌では無いといった複雑な事情があった為に現状の打破など到底出来るハズ無かったのだ。
つまり、端的に言えばもういろいろと限界状態だったのだ。
もし彼が起きていたのなら、「勘弁してください…」と漏らしたであろうほど消耗していたのである。

そして、心身共に限界を迎えた彼にまた追い撃ちを掛けるかの様に、ソレは彼のベットの横に立ち、モゾモゾとベットの中へ侵入していった。

「……んぁ？」

しかし、流石に彼もベットに何者かが侵入すれば目を覚ましてしまうワケで、ふと件の侵入者と目が合った。

「「……」」

彼の目に映る美女は既にズボンに手を掛けており、まさに後はずり下ろすだけといった状態で、

「!?　ってお前！　また性懲りもなく…！」

そこで漸く彼の意識は覚醒した。

あ〝ぁ〜もうっ、起きてたら起きてたでアレなのに、寝たら寝たでコイツかよ！

「アラ？　目が覚めたのですか、一夏」

なんて、白々しく宣いやがった。

「ってか、さっさと離れろ！」

「そんな！　私をこんな身体にしておいて！」

「フォーマットとフィッティングしかしてねぇよ！」

「あれだけ激しく私を求めてくれたのに！」

「連続で瞬時加速（イグニッション・ブースト）しただけだろうが！　ってか、一々卑猥な表現すんな！」

「酷い！　（白式になってから）初めてだった私を散々貪っておいて捨てるだなんて！」

「人聞きの悪い事言うな馬鹿！」

もうヤダ、俺に安息の時間は無いのかよ……。

「それに、私だって好きでこんな事やってるワケでは無いのですよ？　より高いシンクロ率を稼ぐ為に仕方なく…」

「エロゲかよ！　つ～か嘘着くならせめてハァハァ言うの止めてから言いやがれ！」

「そんな事言って……貴方の《雪片弐型》はこんなにも《零落白夜》を…」

「だぁー！　すっ裸の女が目の前にいたら誰でもそうなるわ！」

えぇいっ！　コイツといい、アイツらといい、俺の周りには治安の悪い女しかおらんのか！

「ハァハァ、一夏…」

「ちょっ、ま、またこのパターンかよ！」

「いただきます♪」
「アーッ！」
……もうお婿に行けない（泣）

「ハッ！　……夢、なのは解ってたけど…」
アイツが出て来るって事はまた束さんの仕業か。
「全く…あの人は……。今度合ったら文句言ってやる」
そう言って窓の方を見れば、外はまだ真っ暗で、目覚まし時計を手に取って見れば、時刻はまだ０３：００だった。
「……はぁ、まだこんな時間か。起きててもすること無いしな……」
ゲームしようにも気乗りしないし……。
はぁ、大人しく寝るか……って、ア、レ？
「……って、なんでベットの中に潜り込んでんですか！？　束さん！」

しかも全裸！

「うみゅ…、もう朝？」
「や、まだ深夜ですけど……つ～か服着て下さい！」

目のやり場に困るから！

「なんでまた俺のベットに……しかも全裸で…」
「いっくんたらあんなに激しく…」
「えっ、ちょっ、ま、う……嘘ですよね！？　嘘ですよね！！？」
「…すごかった／／／」

え、俺遂にヤッちまったの？
う…嘘だろ？
嘘だと言ってよ束さん！

「うん、嘘」
「アンタって人はぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

てへ♪　なんて可愛いらしくペロっと舌出してもごまかされませんからね！

「うんうん、いいね～そういう初々しい反応」

俺、アイツらと戦う前にこの人等に殺されるんじゃなかろうか。
精神的に。

身体↓精神：いつものメンバー
精神にダイレクトアタック：束さん

みたいな感じで。
俺のライフはもう0どころかマイナスだよ！
俺が戦慄している横で束さんは暢気に欠伸をかまして……ってか、
いい加減服着てくれ。
マジで。

「ね～いっくん。まだ夜だしもうちょっと寝てようよ～」
「わっ、ちょっ、束さん！？」

胸！　胸がっ！

「え～、ちょっと前までよく一緒に寝てたじゃん」
「ちょっとって、それは十年も前の話でしょう！」

えぇいっ！　男の純情弄ぶのがそんなに愉しいか！

「うん☆」

…もうどうにでもなれ。

で、結局そのまま朝を向かえたんだが、当然こんな状況で寝付けるハズも無いワケで、ひたすら自前の《雪片弐型》を鎮めようと3時間も悶々と過ごすハメになったのだった。
下手人（束さん）はというと、まぁ～人の気も知らないで気持ち良さそうに熟睡してからに。
ホント、どうしようもない人だな、束さんは。

ハァ…と、ため息一つ。

ＩＳに関わる様になって……いや、ＩＳ学園に通う様になってからというもの、妙に女の人とのスキンシップが増えた様な気がする。
そこだけ聞けば羨ましく聞こえるが、実際は（ＩＳのアーム的な意味で）鉄拳制裁が殆どだからなぁ……。

美少女にドツかれるなんて一部の方々は大喜びのイベントなんだろうが、生憎　俺はノーマルだ。
ってか、ＩＳ学園に通う様になって一番身についたスキルが受け身とか回避とかってどうなのよ。

それから更に３０分経ったところで束さんが目を覚ましてくれたので、俺は漸く開放されたワケなんだが、なんかもう、朝なのに一日の終わりの様に疲労感に襲われていた。
原因は言うまでもなく束さんである。

「いっくんご飯まだ～？」

あぁっもう！　世話の焼ける！

朝食の準備といっても昨日の内に炊いておいたご飯を温め直して、味噌汁を用意しつつ魚でも焼こう……かと思ったけど冷蔵庫の中は殆ど空で、当然目当ての魚もない。
あぁ、そういえば昨日はなんだかんだで買い物に行きそびれたんだっけ。

「束さ～ん、別におかず無くてもいいですよね？」
「も～、いっくんったら朝からオカズだなんて…」

もうツッ込まんぞ、俺は。
一々反応してたら身が持たんわ。

「え～、構ってよ～」
「あ～もぅ」

そう言ってじゃれつく束さんはまるで子供の様で、頭を撫でると嬉しそうに目を細めていた。
こうしているとホントに子供みたいだな。

昔は気付かなかったけど、今みたいに子供っぽいところもあれば天才科学者という一面もあったり、そうかと思えば妙に大人……というかぶっちゃけエロかったりと、感情というか人格というか、そういったものの起伏や変動が異様に激しい。
…もしかすると、ちぐはぐな成長をしてしまったせいで精神的に不安定なのかもしれない。
仕方がない、と言ってしまえばそれまでなのかもしれないけど、一体何が悪かったのだろうか。
おじさんやおばさんの教育が悪かったとも思えないし、勿論束さん本人が悪かったワケでも無いと思う。
誰も悪くないとも言える様な気もするし、全てが悪かったとも言え

る様な気もする。
結局何が悪くてこうなったのかは解らないけど、ただ、束さんにとってこの世界は生き辛く、それでいてとても詰まらないものにしか映らなくなったという結果が残されただけだった。

「あ、そうだ」
「どうしたんですか？」

急に何かを思い出したかの様に、束さんが立ち上がった。
この時点で束さんに振り回されてきた人を……というか、千冬姉とか箒とかが被害に会う瞬間を目の当たりにしてきた身としてはもう嫌な予感しかしない。
いや、予感ではなく、もう確定事項だと言ってもいいんじゃなかろうか。
自分だって最近被害に合ってるせいか、さっきから頭の中で警鈴がけたたましいぐらい鳴り響いてるし。

「《白式》の事なんだけど、影打の方は《雪羅》の荷電粒子砲とか《零落白夜》のクローとかでエネルギー大食いする様になってたからその辺り調整するだけで良かったんだけど、真打の方に新しい機能追加したからテストしてみようかと思って」
「はぁ」

アレ？　今はまともな束さんなのか？

「で、その新機能って？」

「ふふん、それは使ってみてのお楽しみだよ～」

得意気に胸を張って勿体振る束さんはとことこと玄関に向かって歩いて行った。

多分、《白式・真打》のフォーマットやフィッティングをした時に使った廃工場にでも行くつもりなんだろう。

二人で玄関を出てさっそく……って、アレ？

何故に郵便受けを弄って…、

ガションッ！

「は？」

え…、ちょっ、なんで郵便受けが横スライドを……ってか何なんですかそのボタンは。

「ポチっとな」

「！？」

ゴゴゴ…と鈍い音を立てて玄関と門の間の地面が開く。

暗過ぎて何処まで続いてるのか解らんが、よく有る秘密基地のような石造りの階段が目に入った。

「じゃ～ん！　束さん特製地下訓練所作っちゃいました～♪」
「おいいいいいいいっ！　人ん家に何やってんだアンタ！」
「てへ♪」
「てへ♪　じゃねぇぇぇぇぇぇっ！」

朝っぱらから絶好調だな！　オイ！

「ほらほら、早くしないと自動でまた閉じちゃうよ」
「ちょっ、ま…」

混乱する俺を余所に、既に腰の高さまで階段を下りた束さんが……って、あぁもう、待って下さいってば。

カツン　カツン　と、さっきから階段を下りる音だけが場に響く。スキップでもするかの様な軽やかさで螺旋階段を下りて行く束さんはその格好もあってか、まるで本当に不思議の国のアリスになったかの様で、現実感が狂い出す。
一般の科学者が科学を以って現実を成すだけの存在であるとするならば、束さんは科学を以って幻想を成す魔法使い。
ひたすら続く螺旋階段も、ひょこひょこ動くウサ耳も、ひらひら舞い踊るスカートすら俺の目には幻想的な光景に映るのだ。

何十……いや、何百メートル下りたのか、漸く終わりを向かえた螺旋階段に別れを告げ、今度はひたすら真っすぐ続く通路を歩いていく。

ひんやりとした石造りの壁や、このご時世中々お目に掛かれない蝋燭のゆらゆらとした明かりもあってか、ちょっとした冒険をしている様で、少し楽しくなってきた。

いつの間にこんなものを作っていたのかは知らないが、まぁいいかと思えてしまう辺り、俺も随分この人に毒されてきたらしい。

そして遂に通路も抜けた先に広がっていたのは、ＩＳ学園のアリーナと同等かそれ以上の広大さの空間だった。

「おぉ……」

思わず感嘆を漏らす俺を、束さんは満足そうに見つめる。

「じゃあ、さっそくはじめよっか。いっくん、真打の方装着してね」

「あ、はい」

言われるがままに変身し、アリーナの中央に向かって少し歩いたところで自分達が来た入口と反対側の入口から、６体のヒトガタがゾロゾロとアリーナに侵入し、横一列に並ぶ。

「なっ……コレって」

「驚いた？」

驚くも何も、コイツら……。

「なんで、《白式・真打》が6体も……」

…俺の《白式・真打》と、同じ？

いや、少し違うか。

コイツらは、二次移行（セカンド・シフト）する前の《白式・真打》と同じなんだ。

他の違う所といえばそのバイザーの奥に輝く瞳の色。

俺の真紅とは違い、コイツらは黄・白・青・緑・紫・桜の瞳がそれぞれバイザーの奥から俺を睨んでいる。

「どうかな？　束さん特製《白式・真打　アグレッサー仕様》、シュッカーライダーは。一応、訓練用に性能を一次移行（ファースト・シフト）までに設定してあるけど、油断は禁物だよ？　何せ6対1だからね」

「解ってますよ」

一次移行（ファースト・シフト）時点であれだけの性能だったものを6体も……。

はっきり言って二次移行（セカンド・シフト）したぐらいじゃなんのアドバンテージにもならないじゃなかろうか。

「で、新機能って？」

「うん、もうベルトの横に着いてるよ」

「横？」

言われてベルトの横に目を懲らすと、レバーの着いた機器が新たに増設されていた。

「これって…」

「そう、飛行用のスイッチだよ。《セイリングジャンプ》の掛け声の後じゃないとレバー下ろしても作動しない様になってるから」

「じゃあ、今回のって…」

「うん、空中戦の訓練だよ。……《セイリングジャンプ》」

束さんが6体のショッカーライダーにコマンドを入力すると、それらは一斉にベルトの横のレバーを下ろし、宙を舞う。

「なっ…」

「ルールは一つ。”空中で”この子達を撃墜する事。勿論この子達も飛べるし、攻撃も仕掛けてくるようにしてあるからね」

おいおい飛べるって、俺の一次移行（ファースト・シフト）の時より性能高いじゃねぇか。

「それじゃあさっそく、はじめ！」

「《セイリングジャンプ》！」

一斉に飛び掛かるヤツらの群れに、俺は飛び込んでいった。

第３２話「飛翔」（後書き）

いくら好評だからって、いつまでもエロばっかりというワケにもいきませんので、次回は久々のガチバトルです

６対１という不利な状況で一夏がどの様に戦うのか、お楽しみに

次回の更新は朝となります

第３３話「六つの影」（前書き）

はい、本日分の投稿第二段です

第３３話「六つの影」

「《セイリングジャンプ》！」

…と、気合い十分に飛び出したまでは良かったんだが、

「お？　おぉ！？」

ちょっ、ま、どうなって……、

ゴン！　と勢い余ってアリーナのシールドバリヤーに頭から激突した。

『『『『『……』』』』』

頭より沈黙がイタい。

えぇいっ、お前ら！　無人機のクセに「何やってんのお前」みたいな目で見るんじゃねぇっ！

「くっ、このぉぉぉっ！」

気を取り直して再び群れに飛び込もうとするものの、今度は空中でくるくる回るばかりで全然上手く飛べない。

くっそ……、影打の方ならもっと上手く飛べるのに。

……影打？

そうか、そういう事か。

《白式・影打》はウイングスラスターで飛ぶのに対して、《白式・真打》は足裏のスラスターで飛ぶ。
つまり、推進装置の位置の違いが原因か。
ウイングスラスターは抱っこで持ち上げられる様な感じだけど、《白式・真打》みたいに足裏だけで飛ぶとなると足だけ掴まれた状態で持ち上げられるに等しい。
どちらの方法が持ち上げられる側が安定しているかといえば考えるまでもなくウイングスラスターの方だろう。
P．I．C……えぇっと、パッシブ・イーシャーナル・キャンセラーだっけか？　それで重力を操作して浮くまでは《白式・真打》も《白式・影打》も同じなんだが、スラスターの位置の違いがこうも影響するとは……。
いや、《白式・真打》の出力が箆棒に高いのも原因か。

足裏のスラスターでって辺りはどっちかっていうとスカイライダーというよりＺＸの方が近い気がするんだが……いや、多少違ってもアイツらは改造人間だから身体そのものがそれ用に改造されてるからちゃんと飛べるんだろうけど、生憎　俺はまだ生身の人間だ。
機体の方がちゃんと飛ぶ様に出来ていても、生身の人間の身体なんて元々飛ぶ様に出来て無いんだから飛ぶという感覚がイマイチ解らない。
《白式・影打》の方で慣れたつもりだったんだがなぁ……。

『《マシンガンアーム》、セット。発射（ファイヤ）』
「うおっ！……わ、わ！」

黄色い目のヤツから放たれたマシンガンの弾を避けようとしてバランスを崩す。

『《大切断》、セット』

「くっ……《大切断》！」

バランスを崩した俺を狙って青目のヤツが切り掛かって来たがなんとかこちらも《大切断》で防ぎ、事無きを得たがやはりバランスを崩され不様に空中でもがく。

『《ギガント》、セット。発射（ファイヤ）』

「しまっ……ぐぁぁぁっ」

くっ…、姿勢制御に夢中になり過ぎた！

どうする？　このままじゃ嬲り殺しにされるだけだ！

『《ボルティックシューター》、セット。発射（ファイヤ）』

「くうっ」

さっきの紫のヤツに続いて緑の目のヤツが放った光線が俺の肩を捕らえる。

ちぃっ、このままじゃバランスを取る事も儘ならん！

『『《マイクロチェーン》、セット。発射（ファイヤ）』』

「なっ」

俺が空中でもたついているところで、今度は白と桜色の目の2体が同時に《マイクロチェーン》を射出し、それぞれ右手と左手を搦め捕り、

『『《エレクトロファイヤー》』』

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

動け無くなった俺に《エレクトロファイヤー》の電撃を浴びせた。

「あっちゃ～、いっくん派手にやられてるな～。やっぱり飛行能力の付与はアレが発動するまで待った方が良かったかな？」

地上から見上げる束にとって、この結果はある意味当然のものだった。

ほっといても勝手に首を突っ込みそうだからと、一夏に二つの《白式》を与えたものの、内心ではまだ彼が計画に関わる事は反対である。

だから、一夏の方から挫折する様促す為にワザと異様に出力の高いピーキー過ぎる機体を与えたのだが、姉譲りの才能のお陰か、これまでなんとか着いて来てしまった。

でも、このままでは……一夏がここで終わる様なら、どの道ヤツらに挑んだが最後、１００％殺される。

天才が１００％と結論を出したのだ、その予測は絶対に外れる事は無い。

「…でも、いっくんだもんね」

ただ親友の弟というだけで、大事な妹の幼なじみというだけで彼が束の例外になったワケでは無い。

それだけの関係だったのなら織斑一夏は束にとってその他大勢の人間にしか成り得なかった。

なら、何故彼は……織斑一夏は束にとっての例外、千冬や箒と同じ”特別”というカテゴリーに分類される様になったのか。

一重に、天才である束の計算をことごとく覆してきたからである。
戸惑いこそするものの、使いこなす事は不可能と渡した《白式》をこの短期間で両方使いこなしつつある。
勿論、『彼』の影響もあるだろうが、あくまで『彼』に出来る事はせいぜい彼の成長を促す程度で、はっきり言ってそれも誤差の……
計算結果を覆す程の要因に成り得ない。
なのに彼は天才の計算をことごとく覆してきた。
だからこその特別。
殆ど全ての事象を、もはや未来予知に等しい計算で起こる前に知ってしまう彼女の計算をことごとく覆して来たイレギュラー。
計算結果を覆すその存在こそが彼女にとっての希望だったのだ。

「もし、またいっくんが私の計算を覆すなら…」

解り切った詰まらない世界を変えてくれる。
そう思えたからこそ、彼は束にとっての特別だった。

「頑張ってね」

祈るその姿は、ただの少女となんら変わらない。
彼だけが、彼女を……。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

ぐっ……ま、マズい。
このままだと、負ける。

「オォォォォォォォォォッ！！！」

展開装甲、起動。
《大切断》、最大出力形態《スーパー大切断》で展開！

「アァァァァァッ！」

雄叫びと共に《マイクロチェーン》を切り裂き、飛び出す。

「よし、これなら！」

両手を伸ばし、《スーパー大切断》の刃を飛行機の翼の様に利用して漸く”飛行”が可能になった。

「倍返しだぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

高速移動形態のスピードを利用し、擦れ違い様に青目のショッカーライダーを胴体から真っ二つに切り裂く。

「まず一機！」

爆風すら推進力として利用して更に加速し、

「《マイクロチェーン》！」

『『！！？』』

お返しと言わんばかりに白と桜色の2体を搦め捕り、両手を交差する様に動かして2体をぶつけ合わせて一旦から開放、そこですかさず両手を大きく動かす事によって人工的な竜巻を作り出し、その気流に乗りながらライダーキックの体制に入る。

しかし、それはただのライダーキックでは無い。

「穿孔キィィィィィック！！！」

それはＺＸがデストロンの幹部達を一度に葬ったＺＸ穿孔キックの再現であり、《白式・真打》の元来のパワーを《零落白夜》のバリヤー無効化能力を以って全く減衰させずに繰り出した蹴りは竜巻に飲まれて行動不能に陥った2体のショッカーライダーを粉々に砕いた。

『！？　《パワーアーム》、セット』

「しまった！……」

そのまま勢いを殺さず黄色い目のショッカーライダーに切り掛かるが、《パワーアーム》で《スーパー大切断》の刃をへし折られてしまう。

「…なんて言うと思ったか！」

『！？』

翼の変わりに利用していた《スーパー大切断》の刃を失った事を”利用”し、バランスを崩して宙返りした勢いのままに、

「《ヒールクロウ》！」

『！！？』

踵から出現した刃を相手の背中に突き刺し、そのまま切り裂いた。

「…やっぱりすごいな、いっくんは」

戦況とともにまた彼は彼女の計算結果を覆しつつある。

しかしその状況を手放しに喜ぶ事は出来なかった。

束とて人の子である。

特別な……そう、大事な人を危険に曝したいなどと思うハズが無かった。

なのに彼は彼女が彼を挫折させる為に課してきた試練を次々と熟し、その道に進む準備を着々と進めつつあるのだ。

ヤツらが来ないのなら、別にＩＳなんて作る必要は無かったのに、

ヤツらがこの星を狙っている事を知ってしまった。
だから、まずＩＳを発表した。

その結果、世界は『白騎士事件』が起こるまでその性能を認めようとはせず、事件以降も軍事用パワードスーツに転用するだけで元来の宇宙用マルチフォームスーツとして使用される事無く今に至る。

ここまでは”予定通り”だった。

解りやすい戦果を以って旧来の兵器を淘汰したのも、女性にしか使えないだなんてあからさまな欠陥を残したのも、４６７機までしかコアを作らなかったのも、単に万が一の討ち漏らしの相手をさせる為だけの布石であり、後はヤツらが来る頃に合わせて自らが打って出ればいいだけだった。

きっかけはほんの気まぐれだったのだ。
ある日、彼に問うた。
何故ＩＳを作ったと思うか、と。
それを彼は一発で当ててみせた。
彼にしてみれば単に勘で答えた解答が当たりだっただけだったのだろうが、その時の彼女はやっと理解者を得たと勘違いして計画の全てを話してしまったのだ。
勘違いに気付いた頃には時既に遅く、慌てて下りる様に何度も言ったが彼は聞く耳を持たず、彼女が機体を作らないのなら自分で作ってやると豪語してみせた。
その勢いは再び彼女を同様させるに十分過ぎるものであり、気付けば彼の為の専用機を作ってしまっていたのだ。
今度こそ冷静さを取り戻した彼女は彼を挫折させようと何度も試練を与えてきたのだが、結果は知っての通りである。

「いっくんなら、《白式・両儀》を…」

このままいけば、彼は《白式》を最終形態まで導く事が出来るかもしれない。

勝利への絶対条件、《白式・両儀》へと。

４体目を撃破する頃には《白式・影打》とは異なる操作感覚にも慣れ、安定した飛行が出来る様になってきていた。

それはあくまで当初と比べてという前提での話ではあったものの、驚異的な成長速度であったことには変わり無い。

襲撃者や代表候補生達との戦いも機体性能だけで勝ち越して来たワケでは無い。

あくまで彼がその驚異的な成長速度を以って機体と敵の両方に即応して来たからこその勝利。

故に、彼の成長速度を上回る”速さ”が立ちはだからない限り、彼に敗北の二文字は無い。

「《バイタルチャージ》！！」

その掛け声と共に全身を包む光は輝きを増し、機体出力をオーバー

ドライブさせ、底上げされた出力から成るパワーとスピードをもって必殺の拳撃を放った。

「ライダァァァッパァァァンチッ！！！」

破砕音と共に紫の目のショッカーライダーの顔面が頭部まるごと砕け散る。

残りはあと1体のみ。

睨み合う赤と緑の目。

そしてお互い同時にベルトに手を翳し、同じ武器を呼び出し（コール）した。

「《リボルケイン》！」

『《リボルケイン》、セット』

呼び出す武器が同じなら、切り掛かるタイミングも同じ。

同時に切り掛かった両者の斬撃は苛烈を極めるがお互い決定打を与えられずに5分程切り合って、たまらず彼が距離を取ろうと後ずさるがその隙を敵が見逃すハズも無い。

『《ボルティックシューター》、セット。発…「掛かったな！」！！？』

距離を取った彼を撃ち抜こうと取り出した《ボルティックシューター》がショッカーライダーの手から消え、彼の手に現れる。

「ハードショット！」

ワザと作った隙を突きに来たところで武装剥奪能力を使用し、奪った《ボルティックシューター》の光線がショッカーライダーの腕を貫いた。
腕を貫かれた拍子に《リボルケイン》を取り落としてしまった事で隙を作ってしまったショッカーライダーは彼の接近を許してしまう。
次の瞬間、彼の《リボルケイン》が腹部を貫いた。

「リボルクラッシュ！！！」
突き刺した《リボルケイン》を引き裂くかの様にショッカーライダーの腹部から引き抜く。
腹部に裂かれた緑の目のショッカーライダーは力無くうなだれる様に墜落していき、地面に激突して大爆発を起こすのだった。

第３３話「六つの影」（後書き）

え～、当方　私生活がそれなりに忙しくなってきましたので、（ほぼ）毎日更新というのが難しくなって来ました。

なのでまことに勝手ながら、これからはゼミのある金曜を休載日とさせていただきたいと思います。

第３４話「当たり前の日常」（前書き）

今回で「そうだ、お家に帰ろう編」は終了です。

次回からは舞台を再びＩＳ学園に移します。

第３４話「当たり前の日常」

「「うぉぉぉぉっ！」」

夢中になる余り思わず雄叫びを上げてしまっている二人の声に負けないぐらいガチャガチャとけたたましいボタンの連打音が部屋に響き渡る。

二人が食い入る様に見つめるテレビ画面の中ではそれぞれ別の国家代表がその身に纏ったＩＳを自在に操り、激しい戦闘を繰り広げている真っ最中であり、両者とも残存したシールドエネルギーは残り僅かで、先に一撃を喰らわせた方が勝ちといった状況。

故に、両者を操る画面の外の少年二人も必死だった。

「あっ、しまっ！？」

「もらったぁぁぁぁぁぁっ！」

「あ～くそっ、また俺の負けかよ……。弾、お前強過ぎ」

「んな事ねぇよ。お前がゲーム離れし過ぎなだけだって。……で、どうなんだ？　念願の女の園での生活は」

「あのなぁ…。前にも言ったけど、全然いいもんじゃねぇぞ？　未だに同じクラスの女子でもパンダ（希少動物）見るみたいな目で見

てくるヤツもいるし、研究員なんか露骨にモルモット（実験動物）でも見る様な目で見てくるんだぞ？」

「あ～、そりゃなんとも…」

「だろ？　全然いいもんじゃないって」

特に他所の国の連中とか……いや、いつものメンバーの事じゃなくてその上司とかね。

模擬戦の前とか友好的な感じを装ったヤツに笑顔で握手求められたりとかするんだけど、アイツら目が全然笑って無いっつうか冷たいし。

「お前…もしかして、向こうで友達とか……は無理か、女子校じゃ」

「いや、いるにはいるぞ？　どっちかって言うと仕事仲間っぽい関係だけど」

ホントはそうじゃないんだが……まぁ、こう言っとかないと下手に追究されても困るし。

「な～んだ、んじゃ彼女とかいないのか……つまんねぇな」

「その台詞は自分の彼女作ってから言え、阿保。……つ～か俺、別にモテてるワケじゃないけどさ、下手に彼女とか作るとマズいんだよ」

「？　なんでだよ？」

「いやさ、俺って世界で唯一ＩＳを操縦出来る男だろ？　だから俺の帰属を巡って各国が水面下で争っててさ。一応、表向き日本国籍だけど、自由国籍……って言えば聞こえがいいかもしれないけどさ、無国籍なんだぜ、俺」

無国籍とかはともかく、だいたいこの辺りの情報なら普通にニュー

スとかでも流れてるし、それに無国籍の件にしたってニュースにはならなくてもちょっとした情報通なら誰でも知ってる事だしな。

「え～と、つまりどういう事なんだ？」

「ギャルゲーに例えると、俺が選択ミスったらＢＡＤＥＮＤ（戦争）直行コース。冗談抜きで」

「うわ、マジかよ……。引く手数多なのに世界平和の為に魔法使い（３０歳以上・童〇）にならなきゃならんのか。ご愁傷様」

「魔法使い言うな。……でもこのまま他の野郎にもＩＳ使える様にならなかったらマジでそうなりかねんしなぁ」

あくまで、表の世界で生きるのならの話だが。

俺だって健全な男だし、綺麗な娘とヤリ……ゲフンゲフン、まぁ、その、なんだ？　奥さんがいて、子供がいてみたいな幸せな家庭に憧れがあるワケですよ。

両親いないから特に。

そりゃ、まぁ、千冬姉が頑張ってくれたからあまり不自由なく生活出来てきたけどさ、やっぱ両親はいた方が……いや、前言撤回、子供置いて失踪する様な両親なんてこちらからお断りだ。

やっぱ家族は千冬姉だけでいいや。

録でも無い両親より頼れる姉だね、やっぱ。

姉といえば束さんも俺の中では”姉っぽい”ポジションなんだが……どうも最近そうじゃなくなってきてるというか…、”姉”じゃなくて”姉っぽい”からなのかは知らんが、昨日の晩だって俺の《雪片》が……。

「ん？　どうかしたか？」

「あ～、いや、何でもない」

危ね、思い出したらまた《雪片》が再”起”動するところだった…。
ところで件の束さんだが、あの後千冬姉にお呼び出しされたので飛んでって……うん、文字通り”飛んで”行ってしまったのだ。
ニンジンで。

多分、箒がチクったんだろう。
今頃束さんも千冬姉のアイアンクローの餌食になっているに違いない。
束さん、解ってても千冬姉に構って貰うのが嬉しいらしいからなぁ。

「ところでさ、お前、いつまでこっちに居れるんだ？」
「あ～、そうだな。課題とかもあるし、１７：００ぐらいにはぼちぼち出た方がいいかもしれん」
「そうか、そりゃ残念。蘭のヤツお前に会いたがってたんだが、今日アイツ生徒会でな」
「へ～、生徒会に。で、どうなんだ？　元気にしてるか？」
「相変わらずだよ」
「そっかそっか」

それは重畳。
蘭もそうだけど、他のヤツも予定が合えば良かったんだがな～。
と、そんな事を思いながらまた何気なくゲームのコントローラーを手に取ったワケなんだが、普通の学生なら当たり前の光景なのに、ひどく尊く感じる。
まぁ、向こうじゃずっと訓練浸けだったもんな。
ＩＳ学園が異常とは言わな……いや、一部例外はいるけど、やっぱりこの年頃の子って普通は友達に家に遊びに行ったりとか、一緒に買い物にいったりとかで過ごすもんなんだろうけど、気付けば随分そういったものから遠ざかってた。
まぁ、自分で決めた事だからいいんだけど。

「そういえばさ、そっちこそどうなんだよ？」
「何が？」
「藍越学園での学生生活の方」
「あ～、別にたいした事なんかなんにもねぇぞ？　他所の中学のヤツらも混じってるから見ない顔があるだけだし」
「そっか……」

正直に言えば、俺は弾が……弾の過ごしている当たり前の生活が羨ましい。
多分ＩＳ学園に通ってる間はまだこうやって実家とかに帰って来れると思うけど、そこから先はどうなるのか……。
日本にずっといられるのか、どこか別の国に定住するのか、それか各国を転々とするのか。

そもそも、三年間きっちり在学出来るのかどうかも怪しい。
束さんの見立てではヤツらが来るのは遅くても五年後で、早ければ今年中に現れる可能性だってある。
実際に現れるまで解らないが、もしヤツらが現れるようになったらＩＳ学園に留まり続ける事も出来なくなるかもしれない。
そうなればもう、弾や蘭といった知り合いは勿論、箒にも、鈴にも、セシリアにも、シャルロットにも、ラウラにも、千冬姉にも会えなくなる。
会ったとしても話をしている暇すら無いかもしれない。

そんな孤独な戦いが、いつか訪れる。
明日なのか一週間後なのか一ヶ月後なのか一年後なのか、解らない。

まだ、俺には束さんという協力者がいるからマシかもしれないが、本来の計画通りならこんな孤独な戦いを束さん一人がやる事になっていたと思うとゾッとする。
いつ死ぬか解らない戦いを、延々とたった一人でなんて……。

ビー　ビー

ちっ、ゆっくり遊ぶ事も出来やしない。

「悪ぃ、呼び出し掛かったから出るわ」
「ん、そうか。まぁ、たいていは家にいるからまた来いよ」
「あぁ、じゃあな」

「よぉ、一夏。今度こそこっちに来てもらうぜ」
「はぁ…。その台詞もいい加減聞き飽きてきたんですがね、オータムさん」
「うるせー！　てめぇが大人しく掴まりゃ全部丸く収まるんだよ」
「ヤですよ、そんなの」

特定人物……この場合だとオータムさんなんだが、その特定人物の

接近を《白式・真打》が察知したので外に出てみると店の真ん前にオータムさんが立っていた。
直接店を襲撃しないのは別に無駄な被害を出したくないからなんてお優しい理由では無く、被害を大きくすればそれだけ早く警察や軍が動くからだ。

「しょうがねぇ、だったらいつも通り…」
「…力ずく、ですか」
「そういうこった！　来いっ、《アラクネ》！」
「ちぃっ」

ここじゃあ威力が高過ぎて《白式・真打》の武装じゃいらん被害を出すだけか。

「来ぉい！　《白式・影打》！」

一瞬白い光に包まれた俺は出来るだけ高く舞い上がった。
可能な限り、町に被害を出さない為に。

「待ちやがれ！　一夏！」
「お断りします！」

高く、高く、高く高く高く高く舞い上がる。
肉眼では町が見えなくなるぐらいの高度で俺とオータムさんは睨み合う。
若干俺の方が高度が高いのは機体性能でもなんでもなく、ただ単に下を狙われて町に被害が出るのを避ける為だ。
しかしそうなると逆に俺も《雪羅》の荷電粒子砲は撃てなくなるの

だが。

「一気にケリを付けさせてもらいますよ！　オータムさん！」

「ハッ！　やってみやがれ！」

大見え切って挑発し、瞬時加速（イグニッション・ブースト）を駆使しながらオータムさんの周りを飛び回り、擦れ違い様に《雪羅》のクローに《零落白夜》を込めて切り裂く。

それを何度も繰り返す。

「くっそ、速ぇっ！」

オータムさんの《アラクネ》よりも《白式・影打》の飛行速度が速い為に出来る芸当だが、そろそろパターンが読まれてくる頃だろう。

だから…。

「喰らえ！」

「なぁっ！？」

《雪羅》をユニットごと切り離し、射出して目くらましとして利用する。

「もらったぁぁぁぁぁぁぁっ！」

「しまっ…、ぐあぁぁぁぁぁぁぁっ！」

動揺を見せた隙に一瞬で距離を詰めて《雪片弐型》を振りかぶって、斬り捨てた。

「ちくしょー！　覚えてやがれぇぇぇぇ……」

墜落していくオータムさんの声が段々小さくなっていく。
それにしても懲りないね、あの人は。

さぁて、帰って始末書でも書きますか。

第３４話「当たり前の日常」（後書き）

あぁ、早く設定集のメカ編を更新したいのに、まだシャルロットもラウラも《白式・真打》とバトってない……

第３５話「週明けの授業って怠いよね」（前書き）

今回からは……まぁ、何編というワケではないんですが、ゴスペルさんとの決戦前の話に入ろうかと思います。

第３５話「週明けの授業って怠いよね」

ソロモン（ＩＳ学園）よ！　私は帰って来たぁぁぁぁぁぁっ！！！

……うん、言ってみたかっただけ。

特に深い意味は無い。

さて、昨日はオータムさんをぶっ飛ばした後にそのままＩＳ学園に帰還、んで《白式・影打》の使用を察知していた千冬姉が校門で待ち構えており、そのまま説教部屋へ連行、三時間にも渡るありがた～い”お話”を正座のオプション付きで拝聴させていただいた後に漸く開放されたかと思いきや楽しい楽しい始末書タイムの時間だよ……っと、言ってて虚しくなってきた。

そりゃまぁ無断でＩＳ使用すんのは違反行為だけどさ、アレって正当防衛じゃん。

お前ならＩＳ使用しなくても逃げおおせた？

いや、そりゃ周りに誰もいなかったらそうするけどさ、弾の家の真ん前だったし、下手に人質とか取られたく無かったから……は？

応援を呼べ？

んなもん、来る頃には逃げ切ってるか捕まってるかで決着が着いとるわ！

俺は千冬姉みたいに化け物染みた身体能力なんか無いんだから生身のままオータムさんをフルボッコとか無理だっての！

「…ほう、化け物か」

「へ？」

ちょっ、千冬姉！　いつからそこに！？

「最初からだ。…あぁ、お前の下らん独り言もしっかり聞かせて貰ったぞ」

「は、ははは…」

あ、あの～千冬姉？　何故手を振りかぶって……しかもグーで……って、

「織斑っ！」

「ひぃっ」

ま、マズい！　殺られる！？……って、アレ？

何故に柔らかい感触が？

「…全く、余り心配を掛けさせるな」

「え…あ、うん」

あの…、なんで抱きしめられてんの？　俺。

そんな事が今朝あったワケなんだが、そこから先はいつもの日常。

千冬姉だって今朝の事がまるで無かったかの様に教鞭を振るっている。

が、俺の方はいつも通りとはいかない。

オータムさんぶっ飛ばしてから電車…じゃなくてモノレールか？

まぁ、鉄道に揺られてＩＳ学園に到着したのが１８：３０。

んで、すぐに説教部屋に連行されてから（一時的に）開放されたのが２１：５０ぐらいで……まぁだいたい２２：００なんだが、消灯時間も２２：００だったりしたのでとりあえず始末書の用紙だけ貰って自室に退散……するまでは割とスムーズだった。

いや、説教タイムをスムーズと言って良いのか解らんが、まぁ、それ以外はすんなりと事が進んでたワケだ。

オータムさんとの戦闘だって、もっと長引くかと思ってたけど割とあっさり勝てたし。

オータムさん、仕事熱心なのは結構だけど、体調が悪かったなら来なけりゃいいのに。

……いや、体調良くても来て欲しくないけど。

っと、話が逸れたか。

そう問題は始末書だ。

今まで始末書なんか書いた事無かったもんだから何をどう書いたらいいのやらちんぷんかんぷんで、人に聞こうにも俺は生憎一人部屋。

消灯時間も過ぎてるもんだから聞きに行く事も出来ないし……と、行き詰まったところでプライベートチャンネルの事を思い出したんで、「じゃあラウラにでも聞いてみようか。アイツ軍人だからこういうの詳しそうだし」と、ここまでは我ながらいいアイディアだと思ったんだ。

うん、人選をミスったワケじゃないんだけどさ…。

1にダメ出し2にダメ出し、3・4もダメ出し5もダメ出し……と、まぁ～容赦の無いダメ出しの嵐を喰らいまして。

やっと終わったかと思えばもう07：00……って、日付変わっとるわ！

まぁ、そんなワケで週の始めから徹夜で寝不足なもので、こう、ついつい頭がフラフラと睡魔で……。

「寝るな、織斑」

「がっ！？……げべっ」

ちょっ、出席簿での脳天唐竹割りと机に頭突きのコンボは流石にヤバい。

「たかが徹夜ぐらいで居眠りが許されると思うなよ？」

ですよねー。

そんなこんなで何とか昼休みまで乗り切り……うん、寝そうには

なったけど寝てないからセーフだと思いたい。

「眠そうだね、一夏」
「あぁ…、うん、昨日の昼過ぎからちょっとごたついててさ」
「また襲撃にあったのでしょう？　織斑先生が慌ててましたわよ」
「えっ、ちょっ、私聞いてない！　どこで襲われたのよ！」

ガバっと鈴が身を乗り出して……って、危ねっ！　ラーメン零すところだったぞ！
あら？　みなさん何故にこちらを凝視して……はい、襲撃の件についてですね。
ちょっ、近い近い！
わかった！　わかったから！
はぁ、どうも最近…というか前からだけど、随分立場が弱いよね、俺。

「昨日昼過ぎに弾の……って言っても鈴以外は知らないか。まぁ、友人の家に遊びに行ってたんだが…帰りにな」
「だ、大丈夫だったのか？」
「ん？　あぁ、全然大丈夫だったぞ？……それにしてもまぁ、始末書ってあんなに難しいもんなんだな、書くの」
「あれぐらい代表候補生ならだれでも書ける」

いや、ラウラさん？　俺どこの代表候補生でも無いんですけど。

「もしかして一夏が寝不足なのって…」
「あぁ、うん。始末書のせい」

あははは　なんてシャルロットさんは苦笑いしてらっしゃいますが、俺にとっては苦痛以外の何者でもなかったね、ありゃ。

どういった理由で違反を……今回の場合だと、どうして無断でＩＳを使用したのかを書く欄があったんだが、てっきり「正当防衛」って書いときゃいいって思ってたんだけど、違うんだね、アレ。

事細かにどんな使い方したかとか、んなもん無我夢中だったからはっきりと覚えてねぇっつうの！

「それにしても、よく一人で……しかも5分以内にケリをつけられたな。前は《白式・真打》でももっと掛かっていたのに、今回は《白式・影打》の方だったんだろう？」

「それなんだよな～。今思えば相手の調子が悪かったって言うより、なんかいつもより自分の身体が良く動いた様な……」

「「「「「……」」」」」

俺がそう言うと、皆して怪訝そうな顔して首を傾げていた。

まぁ、そうだよな。

普通、俺みたいな素人が体調が良いか悪いかぐらいで急に強くなったりとか、俺だって信じられんし。

しかも、飛び道具無しで……あ～、《雪羅》をユニットごと飛ばしたから一応使った事になるのか？　まぁ、いいや。

実質、《雪羅》のクローと《雪片弐型》だけで勝った様なもんなんだし。

「まぁ最初の頃に比べたら一夏も強くなってきてるけど…」

「そうだな、コツでも掴んだんじゃないのか？」

「そういうもんか？」

「そっ、そうですわね！　きっと箒さんの言う通りですわ」

ふむ、皆がそう言うならそういうものなんだろう。

「私も一時期スランプに陥った事があったが、教官の教えに従う事で再び部隊のトップに返り咲いたからな」

多分、自分達……というか特に自分の指導の賜物だってラウラは言いたいんだろうけど、俺の記憶が正しければ皆との訓練は誰が相手でもひたすら逃げ回るかサンドバッグにされただけかの記憶しか無いんだが……うん、ここは黙って頷いておこう。

俺だって我が身が可愛いし。

「そういえばさ、次の模擬戦ってどっちが相手なんだ？」

そう言ってシャルロットとラウラを交互に見遣ると、じゃあ僕が、とシャルロットが、

「早いとこ済ませておかないと、いい加減うちの社員が（主に精神的な理由で）倒れ兼ねないし」

「ふむ、そうゆう事なら今日のところはシャルロットに譲るとするか」

という理由で立候補したワケなんだが……は？　今日？

「クラス代表トーナメントがあるからと先延ばしにしてきたが、いい加減国の連中が煩くてな」
「ははは、うちも…」
あちゃー、せっかちだね、どうも。
「あ、そうそう。この間のアレ、無しでお願いってうちの政府の人が…」
マジか。
分身も禁止な上に武装の剥奪・再構成も禁止かよ。
マズいな……、いい加減ネタ切れっぽいのに。

《セイリングジャンプ》も……ＩＳ同士なら飛べて当たり前なんだし、使っても「だから？」って撃ち落とされそうな気がするなぁ…。
それに、シャルロットってラピット……なんだっけ？　まぁそのラピットなんとかの使い手で武装を瞬時に交換できるんだっけか。
そういう手合いこそ武装剥奪能力で拡張領域（バスロット）内の武装を根こそぎ没収してしまえばすぐにケリが着くんだが……あぁ、だから禁止なワケね。
参ったね、どうも。
シャルロットの《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》って第三世代機じゃ無いから、セシリアの《ブルー・ティアーズ》の《ブルー・ティアーズ》とか、鈴の《甲龍》の《龍咆》みたいな特殊兵器が無い分、旧来からの実績からくる信頼性の高い兵器が目白押しなんだろうな。
数えて無いけど、前に拡張領域（バスロット）内をハッキングした時に結構沢山武装が詰まってたのを覚えている。
パイルバンカーみたいな隙の大きい武器はともかく、マシンガンだ

何だと使われたら高速移動形態になっても避け切れないだろう。

「そういえば…」

「ん？」

「何故、お前の家に姉さんがいたんだ？」

「いや、何故って言われてもだな…」

あの人の行動原理が理解不能なのは箒の方がよく”解って”いるだろうに。

まぁ、昨日一昨日のは両《白式》のメンテナンスと改修の為に来たんだろうけど、他にもいろいろと……というか、メンテナンスとかの方が束さんにとってのついでだったのかもしれん。

「お前が入れたんじゃないのか？」

「いや、入れた覚えなんてないし。いつの間にか上がり込んでたみたいなんだが…」

そう、家主が来るより前からね。

ピッキングじゃなくて千冬姉からちゃんと合鍵貰ってたと信じたいが……、まさか空間転移とかじゃ……いや、マンガじゃあるまいし、それは無いか。

確かにＩＳは機体を量子化してアクセサリー状にして簡単に持ち運べたりとかするけど、人間……というか生物の量子化は何処も成功させて無いって話だし。いや、でも束さんだしなぁ…。

束さん、面倒臭いからって”やらない”だけで、”やれない”事があるだなんて、とても考えられんし。

「本当になにも知らないんだな？」

「知らないって。そんなに知りたいんなら束さんに直接聞けばいいだろ？　箒が呼べばすぐにでも飛んで来ると思うぞ」

ニンジンで。

「う〝……それは、だな」

バツの悪そうな顔で箒が視線を反らした。

どうも昔から箒のヤツは束さんに苦手意識があるような……まぁ、俺が千冬姉に怯えるのと同じ…なワケ無いか。

キーン　コーン　カーン　コーン

「な〝」

「こ、このパターンはもしかして…」

「…あぁ、貴様らの予想通りだ」

「「「「「「ひぃっ」」」」」」

いつの間にか俺達の背後に千冬姉が……ヤバい、阿修羅に二次移行（セカンド・シフト）してらっしゃる！

※あまりにも残酷な光景の為、音声並びに文章をカットさせていただきます。

恐怖のあまり、誰もあの後の事は覚えてなかったのだが、頭部にできたタンコブの大きさから察するに意識の飛ぶ様な勢いで出席簿を喰らったのは確かな様である。

第３５話「週明けの授業って怠いよね」（後書き）

登場キャラは7刊の簪さんとか出てるのに、イベントの方でオリジナル混ぜ過ぎて原作３刊のイベントがまだ終了していない事についてこの間気付きました（笑）

３０話越えて2刊分とか、原作に追い付く頃には１００話越えるんじゃなかろうかと一人で戦慄しています（汗）
元々５０話そこそこで終わらせるつもりだったのに……どうしてこうなった（↑自業自得

第３６話「高速切替」（前書き）

寝落ち…はしてないけど更新し忘れてました。
結局同じ？……すんません

第３６話「高速切替」

さて、放課後になったところでいつもの模擬戦タイムとなったワケなんだが、シャルロットの《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》がこれまたかなりのくせ者で、セシリアの《ブルー・ティアーズ》とか、鈴の《甲龍》とか、ラウラの《シュヴァルツェア・レーゲン》みたいに第三世代の”試作機”なら、例えばセシリアの《ブルー・ティアーズ》の子機の《ブルー・ティアーズ》を使ってる間は本体の動きが止まってしまうとか、試作機故の改善点があるワケで、（あくまで突けれるのなら、だが）そこを突いてしまえば旧式機でも勝てない事も無い。

だが、シャルロットの《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》はあの第二世代機の中でも最後発で最も完成度の高い《ラファール・リヴァイヴ》の改造機であって、新型というワケでは無い。

つまり、新型故の課題点というか欠陥の様な物がほぼ無いワケで、突くべき弱点が見当たらないのだ。

更にいえば、武装の方も一般に出回ってる様な量産品で、量産されるということはすなわち量産するに値するほどの実績を残し、武装として完成していると言ってもいい。

銃である以上、弾切れという問題が付き纏うが、シャルロットの得意とする高速切替（ラピッド・スイッチ）の前では弾切れの隙に……なんて無理な話だ。

「…参ったな、どうにも」

既に変身を済ませ、こうして睨み合ってる状態なんだが、試合が始まってもどうしたらいいのかサッパリ解らん。

高速切替（ラピッド・スイッチ）なんて超人芸が無いんなら弾切れの隙を突けばすぐにでも

ケリが着くのに、それが出来ない。
実際に数えたワケじゃないが、襲撃事件の時に武装剥奪能力で拡張領域（バスロット）内をハッキングした時に見たのが一部なのか全部なのかは解らんが、結構な数の武装があった。
なので、高速切替（ラピッド・スイッチ）があっても全部かわし切れば……なんて無理だ。
《白式・真打》の性能とか、俺の実力とか関係無しに、ショットガンでも撃たれれば絶対に当たる。
ミサイルなら1番先頭の物の軌道を狂わせて、後続に対する盾にすればいいし、マシンガンとかなら射線にいなければいいだけの話なんだが、ショットガンみたいに面を攻める様な武装なんてかわし切れるハズが無い。
回避がダメなら防御を……と言いたいところだが、生憎《白式・真打》には盾みたいな武装は積まれて無かったハズだ。
畜生、こんな事になるんなら昨日一昨日の内に束さんに頼んでおけばよかった。

分身は禁止されているので分身を囮にするのも無理、武装剥奪も禁止されているので開始直後に拡張領域（バスロット）内の武装を全部没収するのもダメ、展開装甲で高速移動形態になって玉砕覚悟……なんてやったらマジでパイルバンカーに玉砕される。

マジで、どうしよう……。

そんな俺の葛藤をよそに、無情にも模擬戦開始のブザーがアリーナに鳴り響く。

「ちっ、始まったか！　《ギガント》！」

撃ち落とされる事を承知で《ギガント》を呼び出し（コール）する。
ラウラみたいな軍人ならどうか解らないが、シャルロットだって代表候補生である以外はただの少女だ、目の前で大爆発なんかが起きれば瞬きの一つや二つするだろう。
俺が突ける隙なんてそれぐらいしか無い。

《ギガント》を撃ちながら展開装甲を起動、すぐさま高速移動形態に機体を形態変化させ、案の定迎撃されたミサイルの爆発の中に跳び込む。

「そう来ると思ったよ！」
「ちっ、バレバレかよ！」

思い付く限りの事をやったつもりなんだが、それすらシャルロットにとっては想定の範囲内だったらしく、突き刺しにいった《電磁ナイフ》もシールドに阻まれてしまう。

「くっ……あっ！？」
「音声認識での呼び出し（コール）が必要無くなったぐらいじゃ、僕の高速切替（ラピッド・スイッチ）には追い付けない！」

呼び出し（コール）しようとした《ボルティックシューター》も後出しでシャルロットが召喚したライフルによって阻まれ、取り零してしまった。
くそっ、後出しでもこっちの展開時間内に武装の召喚が終わるとか、どんだけ早いんだよ！

「このっ、……ぐぁ！」
「だから、遅いって言ってるでしょう！」

《大切断》も装甲が展開している内に正確に狙いを付けられ、装甲が開いた隙間から刃が飛び出す前に破壊される。

たまらず俺がバックステップで距離をとろうとしたところでシャルロットが急接近しパイルバンカーを放つが、これは何とかかわした。が、

「掛かったね！」

「！？」

パイルバンカーをかわそうと跳んで空中で無防備になった隙に、シャルロットは武装をショットガンに切替えており、それに気付いた頃には散弾が俺を襲っていた。

《白式・真打》の高速移動形態は全身に《零落白夜》を纏える為にビームだとか衝撃砲だとか、ああいうエネルギー兵器に対して鉄壁の防御力を発揮するが、実体弾であるショットガンの弾は防げない。寧ろ、装甲を展開したせいでそういったものに対する防御力は弱くなってると言っても過言では無いだろう。

「ぐっ……がはっ！」

不様に地面に転げ落ち、痛みにもがく。

くっ…そ、ダメージはまだたいした事無いが、高速切替（ラピッド・スイッチ）が厄介過ぎる！

「織斑君、苦戦してますね～」
「あぁ、デュノアの高速切替（ラピッド・スイッチ）はある種アイツにとって天敵とも言える技術だ。まだ音声認識のクセが抜け切っていないのなら、尚更な」
「ですね…。ところで織斑先生。先生ならデュノアさんの高速切替（ラピッド・スイッチ）をどう攻略しますか？」

管制室での何気ない二人の会話に、その場にいる人間全てが耳を傾けていた。
映像で見る限り、《白式・真打》がいくら高性能とはいえ武装を封じてしまえばなんとかなる……そう、来るべき日に操縦者共々手に入れる為の手段があると証明されつつある。
そんな中での今の会話だ。
もし織斑千冬にその打開策があるのなら、それも考慮しておかなければならないだろう。

「フ…、考えるまでもない」

不敵に笑う彼女を、その場にいる全員が見遣る。
かつて世界最強の証たるブリュンヒルデの座に着いた彼女がどんな答を出すのかと、皆興味津々だった。

「切り替える前に切り伏せればいいだけの話だ。それなりにやるようだが、あの程度の速度は私にとって高速の内に入らない」

参考に、なりませんでした。

…ちっ、やっぱりどんな武装も出す前に封じられるか……。
マズいな…。
マジで手詰まりだ。
呼び出し（コール）する必要が無いものとなるとライダーパンチとかライダーキックとか、ああいう武装じゃなくて技の類になるんだが……。
……ダメだ、結局撃ち落とされる。
ダメージ覚悟で突っ込んでもいいが、割に合わな過ぎる。
シャルロットに辿り着く頃にはボロボロだ。
そんな状態じゃあ仮に近付けてもこっちが何かする前にトドメを刺されるし……。

あ～くそっ、ダメージが回復でもすれば……回復？
待てよ、確かにアレは禁止されてるけど、こういう使い方は禁止されてないから……。
よし、そうと決まれば！

「うぉぉぉぉっ！」
「懲りないね、一夏も！」

少し呆れた様にシャルロットが両手のマシンガンの弾丸を浴びせて来るが、構わず突き進む。

蓄積したダメージに耐え切れず、次々と装甲が弾け飛んで行くが、それでも進行を止めない。

否、止める必要が無い。

破壊されたそばから次々と装甲が”復元”していくのだから。

「な！？　そんな！」

シャルロットの驚愕も当然、瞬時に、しかも戦闘中に装甲が復元するなど、いくらＩＳでも有り得ない。

だが、そもそも前提条件が違う。

この《白式・真打》はＩＳでは無い……いや、ＩＳと言えばＩＳだが、インフィニット・ストラトスでは無いのだから。

あくまでインフィニット・ストラトスとは束さんが作った宇宙開発用のマルチフォームスーツの事であり、戦闘が出来る事などついでしか無い。

周りは改造……いや、改悪した程普で戦闘用のパワードスーツにした”つもり”らしいが、あくまでインフィニット・ストラトスは宇宙開発用のマルチフォームスーツだ。

右利きの人間に左手を、或は左利きの人間に右手を使わせた様な、ついでしか無かった機能に重点を置かれてしまったものなどではこの《白式・真打》には敵わない。

初めから戦闘用に束さんが作ったコイツに敵うハズがないのだ。

「くっ…、次から次へと！」

必死になってシャルロットがあらゆる銃で射撃を試みるが、いくら破壊されても装甲の復元は止まらない。
分身も、再構成も、巨大化も、大元はある機能の応用でしか無い。
《白式・真打》の真の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、質量操作。
質量さえ足りていれば後は型さえあれば何だって作ってしまう能力。
他の機体が拡張領域（バスロット）という名の箱の中に武装を収納しているとするならば、《白式・真打》は拡張領域（バスロット）という箱に”何か作れば本物になる粘土”が収納されている様なもので、武装（型）を呼び出し（コール）する事によってその場で武装を生成してしまう。
表向きに唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）という事になっている《零落白夜》ですら、その場で必要な部位にそういう機能を持たせただけに過ぎない。
だから、本当なら分身も５０体といわず拡張領域（バスロット）内に保管してある質量がある限り無限に生成出来る。
《大切断》だって、特に《スーパー大切断》など明らかに収納スペースが足りて無いのに展開出来る理由はこれにあった。
本体の方はただ前腕部分の装甲をスライドさせて隙間を作っただけで、後は拡張領域（バスロット）内の質量を利用してまるでその隙間から生えたかの様に見せていたのだ。
ただ、この機能にも制限があって、保管した質量以上を必要とする何かを作る事は出来ない。
次に、型も束さんしか設定出来ないので束さんが予め用意していた型に無い物は作れない。
最後に、巨大化は出来ても本体の形を大きく変える様な質量操作は出来ない。
以上、三つの制限があるのであまり無茶苦茶な事は出来なくなってはいる。
説明を聞いた時は質量操作の時点で十分無茶苦茶な気がしたのだが、束さんにとってこの程度の事はまだ無茶苦茶の内に入らないらしい。

「…悪い。俺はここで止まるワケにはいかないんだ」

「くっ」

今度は逆に、シャルロットが後退った。
しかしただ後退るのでは無く、俺の進行を止めようと放つ弾幕は寧ろその密度を増しつつある。
それでも俺は止まらない。

「!?」

動揺のあまりアリーナの隅まで移動していた事に気付かなかったのか、ドンッと壁に背中からぶつかったところで漸くシャルロットはもう逃げ場が無い事に気付いた。
何事かと、一瞬背中に当たった壁を見遣った隙に《大切断》を展開、しかし《零落白夜》は使わない。
まだ、アレを使った状態で加減をするのが難しいからだ。
下手に抵抗されてやり過ぎたなんて笑えない。

《大切断》の刃に《エレクトロファイヤー》の電撃を纏わせる。
バチバチと帯電する刃を交際させる様に手を十文字に両手を奮う。

「ライダーだけがヒーローじゃない！　デン・ジ・エンド！」
「うわぁぁぁぁぁ！？」

斬撃と電撃が同時にシャルロットを襲い、搭乗者保護機能が働いてシャルロットは気絶した。

いつものメンバーは、各国が《白式・真打》のデータを取る為に毎回違う代表候補生を宛がっていると思っているのだろう。
確かに、各国はそのつもりだ。
だけど、それこそが束さんの狙い。
取れもしないデータの為に群がる有象無象と戦う事によって俺と《白式・真打》の成長を促す事こそが真の目的であり、利用しているのは寧ろ俺達の方。
罪悪感が無いワケじゃない。
寧ろ今にも押し潰されそうな程大きくなる一方だ。
必要なことだからと割り切るには仲良くなり過ぎてしまった。
でも謝らない。
謝るのは全部終わった後だ。

空を睨む《白式・真打》の姿は、まるで……。

第３６話「高速切替」（後書き）

アンケートというか、募集したいことがあるのですが、

まだかなり先の話なんですが、ヒロイン達の機体のパワーアップの予定がありまして、機能はパワーアップ前の改修型程度なんですが、名前をどうしようかと悩んでいます。

《甲龍》と《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》についてはもう決めているのですが、《ブルー・ティアーズ》と《シュヴァルツェア・レーゲン》の名前が中々決まりませんのでこの二機の名前を募集します。

ただ、できれば

《ブルー・【英語】》
《シュヴァルツェア・【独語】》

でお願いします。
意味まで深く考えなくても結構ですが、あまりにも変な意味なのはご遠慮下さい。

常連さん、新規さん問わず沢山のアイデアをお待ちしております。

〆切りにつきましてはゴスペルさんとの戦闘終了後に発表しようと思います。

第３７話「もうすぐ臨海学校です」（前書き）

ま、またしても寝落ち……

うん、いい加減飲酒運て…じゃなかった、飲酒執筆は止めよう

第37話「もうすぐ臨海学校です」

「それにしてもまぁ、《白式・真打》って非常識だよね。今更だけど」
「ははははは…」

シャルロットとの模擬戦も終わり、いつの間にやら恒例行事となったお茶会の席で彼女は呟いた。
負けた事が悔しいからか、若干口調が愚痴っぽくなってはいるものの、確かに相手が非常識過ぎた。

そもそもシャルロットの《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》はあくまで第二世代機の《ラファール・リヴァイヴ》の改造機であり、良くて二・五世代相当の機体であり、他の代表候補生の第三世代機と比べるとバランスだけ見れば一番かもしれないが、どうしても性能的に劣る部分が多い。
一方、それに対して《白式・真打》は第六世代相当の機体であり…というか、インフィニット・ストラトスですらない。
周りがどう言おうが開発者曰くインフィニット・ストラトスとは宇宙開発用に作られたマルチフォームスーツの事であり、旧来の兵器を淘汰するほどの性能があろうがあくまで戦闘”も”出来るというだけで戦闘をさせる為に作ったワケでは無い。
しかも《白式・真打》はその開発者がインフィニット・ストラトスと違い完全に戦闘用に製作した代物である。
何世代相当か以前に”戦闘”で優劣を着けようとした時点でインフィニット・ストラトスに勝ち目が無いと言ってもいい。

しかし流石は代表候補生というべきか、皆なんらかの形で一矢酬い

る戦いを見せ、《白式・真打》を……織斑一夏を窮地に立たせて来た。
それこそが開発者の……篠ノ之束の狙いであるとも知らずに。

「展開装甲の時点で非常識だけど、分身に武装の剥奪と再構成なんて、どういうカラクリになってんのよ、アンタの機体は…」
「や、俺に聞かれてもだな…」

実際問題、技術的な説明をするだなんて情報を開示する権限とか関係無しに俺自身が原理を理解して使ってるワケじゃないし。
ただそういうものだと束さんに聞かされたからそういうものとして扱っているだけ。

「そういえば《白式・真打》の……《大切断》でしたかしら？明らかに収納スペースが足りてない様な武装ですわね、アレ」
「まぁ、束さんの作った物だし…」
「ですわね…」

ギクゥッ、ちょっ、セシリア鋭い！

「ところで一夏、どうして最初から復元機能を使わなかったんだ？使っていればすぐにでも決着が着いただろうに」

「うむ、私もそれは気になっていた」
「僕も」
「いや、その……コイツ、ピンチにならないとそういう機能の情報開示してくれないんだよ」

まぁ、今回の事は思い付きでやったら上手い事いっただけだからホントは違うんだが、黙って置いた方がいいだろう。
というか、機能があり過ぎて俺が忘れてたところで機体の方からこれを使えみたいな感じで指示を出して来る時もあるからもしかしたら思い付きなんじゃなくて思い出しただけかもしれんが。

「毎回毎回ピンチになる度に情報が開示されるとは……まるでＶ３の２６の秘密みたいだな」
「あ～」

何となくラウラの言いたい事も解るが、多分２６も無いと思うぞ俺は。
まぁ、実は束さんがそれ以上用意してる可能性も無くは無いんだが。

「予め用意してたんじゃなくて、その場その場で対応して機能を追加したりとかしてるんじゃないでしょうね？」
「いや、それは流石に…」

…アレ？　無いとも言い切れ無い様な気もして…。

「だってさ、セシリアの時だって一対多の状況を打開するかの様に分身してさ、私の時だって衝撃砲が見えないなら狙われないほど早

く動けばいいって感じで展開装甲なんてもの用意して高速移動形態になって、更に当たっても全身に《零落白夜》を纏わせてるから効かないじゃない。それで今日のシャルロットの時の復元も《零落白夜》がダメならって感じでさ…」

「でも、それならわざわざ復元しなくても装甲をもっと硬くすればいいのに…」

「あ～、確かにね～」

なるほど、確かに鈴の言う事も正しい様に聞こえるな。

見ただけで判断するならそう思うのも仕方ないか。

「そういえばさ、名前的に《白式・影打》も篠ノ之博士の手が加わってそうだけど、こっちは随分普通のＩＳしてるっていうか……その、こっちも何かあるんじゃないかって思わない？」

「あ～、確かに。俺も気になってたんだが…」

「今のところはただ威力は高くても燃費が酷いだけの機体だしな」

「ですわね…」

う～ん、と、皆で唸るが当然の事ながら答が出るハズも無い。

確かに《白式・影打》は《白式・影打》で何か秘密がありそうな気はするんだが……。

「…それに、真打も影打もそうだが、いくらなんでも二次移行（セカンド・シフト）するのが早過ぎないか？　我々代表候補生の機体とてまだ一次移行（ファースト・シフト）した切りだというのに…」

「そうですわね。いくら篠ノ之博士の作品とはいえ、一夏さんの搭乗時間を考えれば異常ですわ」

「この調子で明日のラウラとの模擬戦で三次移行（サード・シフト）したりしてね」

「それは流石に…無い、とも言え無い気もするなぁ……」

「全くあの人は……ただでさえ当人が非常識なのに作品まで非常識

とは……親が親なら子も子か」

確かに二次移行（セカンド・シフト）するのは早かったな。

俺の搭乗時間、皆と比べて桁違いに短いのに…。

しかし、三次移行（サード・シフト）か…。

無いと言い切れ無い辺りがまた束さんらしい様な…。

このまま１８ｔｈシフトして白式さんが……って待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！

何考えてんの俺！？

今皆いるんだぞ！

「ん？　どうかしたか？」

「い、いや、なんでもない」

危ない危ない…。

またいらん事考えて俺の《雪片》が……って、またかよ！

と、とにかく話でも変えて気を紛らわさないと。

「あ～、そういえばさ、来週だっけ？　臨海学校って」

「そういえばそうだったな」

「そうね」

よし、掴みは上々。

「アレって、たしかいつもと違う地形での稼動試験がどうとかって言ってたけどさ…」

「どうかなさいましたの？」

「いや、そういえば水中戦用のＩＳって聞かないなって」
「確かにそうですわね…」
「言われてみれば…」
「ふむ、水中用か……まぁ、元々シールドバリヤー等の防御機能が備わっているから水圧に対してもそう改めて何か用意する必要が無いからかもしれん。後はまぁ、必要となればパッケージでも用意すれば事足りるだろう。だからワザワザ水中用と銘打った機体を用意する必要が……というか、スポーツ色が強いせいでそんな目立たぬ場所での戦闘などハナから想定していないのかもな」
「成る程…」

そう言われて見ればそうか。
確かにワザワザ水圧対策なんか取らなくてもシールドバリヤーがあるし、推進もそれ用にスクリュー付きのパッケージでもこしらえとけばいいだけだしな。
呼吸の方は……って元々宇宙開発用のマルチフォームスーツなんだからその辺りは大丈夫か。

「それよりさ、やっぱ臨海学校といえば海でしょ！」
「は？　何を言って…」
「だ～か～ら～、海水浴よ、海水浴！」
「「「あ～」」」

まぁ、みんな代表候補生とはいえ……いや、一人違うけど、やっぱり年頃の女の子だもんな。
ラウラは興味無さ気だけど、みんなどうしてもそういう所に行けば遊びたくなるか。
それにしても海水浴か……どのぐらい行って無いんだろ。
そりゃまぁ、授業でプールとかはあったから毎年泳いではいたんだが……多分、海なんて小学生以来じゃないか？

水着は……まぁ、あんまり体格変わって無いんだし、中学の時のでいっか。
入りそうに無かったら今度の休みにでも買いに行けば済む話だし。
そういえば臨海学校って水着自由らしいけど、みんなどんなの着て……って、だ～か～ら～　そういう方向に思考をもってくからまた《雪片》が…。

「？　一夏、顔赤いけど風邪でもひいた？」
「え、あ、いや、大丈夫だ」
「え～、ホントに～？」

そう言ってシャルロットが俺の額に自分の額を…って近い近い！

「ちょっ、アンタ何やってんのよ！」
「そっ、そうですわ！」
「え、いや熱を測ろうとしただけだけど」
「それなら額に手を当てるだけでいいだろう！」

ギャーギャーと幼なじみ二人とセシリアが騒ぐもだからどうしたと言わんばかりに涼しい顔のシャルロット。
…アレ？　いつの間に修羅場に？

「ふん！　どうせいやらしい事考えてたから赤くなっただけでしょう！？」
「なっ…、ば、馬鹿！　んなワケあるか！」

あ～もう、なんで俺の周りの女は俺の思考を読むんだ！？

「お前というヤツは…」
「いっ、いけませんわ！　そんな…まだ心の準備が」
「一夏のエッチ…」
「不埒な…」

あれ～？　いつの間に五対一に！？
どうしてこうなった！？

「ま、まて別にやましい事を考えていたワケじゃ…」
「えぇっ！？　一夏、女の子より男の子の方がいいの！？」
「なっ…、一夏、お前いつから衆道に…」
「だぁぁぁぁぁぁっ！　んなワケあるか！　男より女の方が良いに決まってるだろ！」
「そんな、破廉恥な！」
「ああ言えばこう言う…」

俺にどうしろって言うんだよ！
男がエロくて何が悪い！

「ま、まぁ、一夏さんも男性ですし、その…女性に興味をもってしまうのも仕方ありませんわね」
「む、確かに…」
「…そ、そうよね。うん」
「い、一夏だって男の子だもんね。そりゃこんな環境にいたら…」

いや、まぁ、ちょっと前から好意を向けられてるのには気付いてたんだが……うん、非難されるのもアレだけど、理解があり過ぎるのも辛いよね。

とりあえず臨海学校の時は気をつけないと、海水浴場を前に開放的になった美少女たちのくんずれほずれが……って、落ち着け俺！マジでどうしたって言うんだ今日は！

第37話「もうすぐ臨海学校です」（後書き）

募集結果については後ほど

Aさん
・〇〇〇〇〇
・■■■■■■■

といった感じで感想板に記入していただいた機体名の一覧表をアップしようかと思います

第３８話「変貌」（前書き）

ば、馬鹿な…
いつも６００ぐらいのＰＶ数が昨日は９００越えだと！？
これが読者参加企画の力だというのか！！？

第３８話「変貌」

分身はどうやって何十体も本体と変わらない動きが出来るのか解らないからダメ。

武装の剥奪もどうやって他のＩＳの拡張領域（バスロット）内の武装を剥奪しているのか解らないから……というか、そんな事したらデータ取る前に模擬戦終わっちゃうからダメ。

再構成も自分の物を少し弄るならともかく、他人の物を大きく変えるなんて非常識、当然マネ出来るハズ無いのでダメ。

復元なんて非常識過ぎるからマネ出来ない。

だからダメ。

…と、ダメ尽くし。

まぁ、そりゃ各国は束さんの技術欲しさに模擬戦なんか仕掛けて来てるんだから、マネ出来ないものなんかに時間を裂いたってどうしようもないから自分達でもマネ出来るものを探したいのは解らんでもない。

解らんでもないが……こっちはそろそろネタ切れっぽいのであちらのオーダーに応えられそうにない……いや、応えられたとしてもあんまりホイホイ曝すのは嫌なんだが。

パッと思い付く範囲でまだ使って無い機能といえば巨大化、つまり《ジャンボフォーメーション》ぐらいなんだが、今から始まるラウラとの模擬戦で使うのもどうかと思う。

いや、そもそもピンチになったら巨大化って、俺はスーパー戦隊の悪役かっての。

そんな感じで何かする度に特殊機能禁止で模擬戦をやらされてるんだが、展開装甲だけは禁止されていないのにはそれなりのワケがある。

《白式・真打》は俺と束さん以外は……というか、ある条件を満たした人間しか触れる事も出来ない。

しかし、《白式・影打》の方は……何処だっけか？　あ～、いっぺん千冬姉に聞いたんだが……まぁ、いいか、取り敢えずどこかの研究所が作った欠陥品ベースの改造機だからか、取り敢えず誰でも触れるようにはなっている。

それでも束さんにカスタマイズされた時点でかなりの部分がブラックボックス化してしまっているので……というのは各国の技術者と束さんとの技術力に差が有り過ぎるせいでそう勘違いしているだけの話であって、実際ブラックボックスでもなんでも無い。

それでもまぁ、《雪片弐型》という展開装甲を用いた武装に触れられるというのが大きかったらしく、模擬戦での展開装甲の使用は許可……というより推奨されている。

多分、《雪片弐型》を解析して、いずれ《白式・真打》の様に展開装甲で状況に応じて形態を変更可能な機体を作るつもりなのだろう。

実際、「後は強度だけ…」と、研究員さんが呟いていたのを聞いた事がある。

頑張ってるところ申し訳無いが、多分無理だ。

だってアレ、《雪片弐型》みたいな単純なものならともかく、《白式・真打》レベルの複雑さとなるとただ強度の高い素材を使ったってすぐに壊れるし。

実際、《白式・真打》だって復元の応用で強度保ってるから復元をマネ出来ない時点で何処かの国が展開装甲有りのＩＳを完成させるだなんて出来やしないのだ。
しかも復元自体が唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）の応用である時点で他のＩＳがマネするだなんて到底無理な話であり、束さんみたいに狙って望む唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を出せる技術者なんていないのだから、もうどうしようもない。

まぁ、その辺の事までワザワザ喋ってやるつもりも無いのでせいぜい無駄な努力でも続けてくれればいいさ。
始めから討ち漏らしの相手ぐらいにしか期待してないし、させるつもりもないのだから。

「準備はいいか？　一夏」
「いつでもいいぜ。そっちこそどうなんだよ、ラウラ」
「…フ、愚問だな」

互いに準備は万端、後は開始のブザーを待つばかり。
そして……。

「「おぉぉぉぉぉぉっ」」

開始のブザーと共に、お互い駆け出した。

「先手必勝！」

駆け出すと同時に展開装甲を起動、全身の装甲がスライドしていき機体が一回り大きくなった瞬間、一気にラウラとの距離を詰める。

「くっ…」

そのまま右前腕の装甲をまたスライドさせ、《大切断》の刃が延びると同時に腕を大きく振りかぶって、そして振り下ろす。

「見切った！」

「なっ」

しかし振り下ろした刃は虚空を斬るだけに終わり、風切り音だけがヒュンと鳴り響く。

「確かに《零落白夜》を使わずとも《大切断》の切れ味は脅威だ。…だが、当たらなければどうという事は無い！」

「ちぃっ…」

アレを避けるのかよ！

なら、両手に《スーパー大切断》を展開して…。

……って、な、に？

「か、身体が……」

「武装に頼るな。そんなだからこうも簡単に私のＡ．Ｉ．Ｃに捕まるんだ」

「っ、こんな物ぉぉぉっ！」

装甲の隙間から漏れ出した《零落白夜》の光が瞬時にＡ．Ｉ．Ｃの呪縛を解き、今度こそと両手を振りかぶったところでワイヤーカッターに両手を絡め取られてしまう。

「武装に頼る以前に相手をよく見ろ。というか、そんな大振りな武装を使いたいのならせめて確実に当てる機会を伺え。ただやみくもに振り回すだけのお前など、的にしかならん」

「くぅっ」

両手を縛られて地面に引きずる様に引っ張られ、バランスを崩した瞬間にラウラの右肩に浮かぶレールガンが火を吹いた。

「がぁっ！」

至近距離での直撃を受け、左肩アーマーと胸部のアーマーの一部が砕け散る。

くっそ、一々ラウラの言う通りだな。

多分、あのＡ．Ｉ．Ｃは囮で俺が呪縛を解こうとしたところをワイヤーカッターで物理的に動きを封じてレールガンを撃ち込むのが本命だったってワケか。

なら俺だって……。

「経験をすぐに生かそうとするのはいいとして、それをやった相手にやり返したところで何になる？」

発射した《マイクロチェーン》はプラズマ手刀であっさり切り裂か

れ、しかしそれだけで終わらず流れる様な動きでラウラは《マイクロチェーン》を掴み、引き寄せながら突進する。
引き寄せる勢いと自身とのスピードで一気に距離を詰めたラウラは顔面に突き刺すかの様に手刀を放ち……って危ねっ！？

「おわっ！」
「一度かわしたぐらいで油断するな！」
「へ？　……がっ！？」

首を傾ける事によってかわされた手刀をラウラはそのまま横薙ぎに払い、俺の首に強烈な痛みが走る。

「～ってぇな！　おい！」
「フッ、ならせいぜい喰らわない様にする事だな」
「ぬかせ！」

殴り掛かった俺の右手はあっさり捕まって捻られ、関節をキメられてしまう。
肩に走る痛みから抜け出そうと必死になって放った後ろ蹴りすらあっさりかわされ、そのままの勢いで投げ飛ばされた。

「おわっ……っと、《セイリングジャンプ》！」

危ねぇ、頭から地面に激突するところだった…。

「ほぅ、パワーアップ改造も受けていたのか。だが…」

感心したかの様な態度も一瞬、今度は不敵に笑って見せ、

「…たかが飛べる様になったぐらいで！」

そう言って瞬時加速（イグニッション・ブースト）で急接近する勢いを利用した飛び蹴りを放つ。

「くっ…この！」

「しまっ……たとでも言うと思ったか！」

「なっ！？　がぁぁぁぁぁぁっ！」

放たれた飛び蹴りを見切って掴み上げたまではよかったが、それすらラウラにとっては想定の範囲内だったらしい。

いや、もしかしてワザと俺がギリギリ見切れる速度でやったのか？

足を掴まれ逆さ釣りになったラウラはまた至近距離でレールガンをぶっ放した。

顔面に直撃したレールガンの弾丸はヘルメットごとバイザーを破壊し、破壊された右半分からは俺の顔が覗いている。

更に追い撃ちとばかりに思わず俺が手を放した隙に着地し、連続で手刀を叩き込んでくる。

突き刺す様に、引き裂く様に、薙ぎ倒す様に、あらゆる手で滅多撃ちにされてボロボロになった俺にトドメを刺すかの様に、最後に回し蹴りで吹き飛ばしたところにダメ押しでレールガンを撃ち込んだ。

「ガハッ」

地面に叩きつけられ、不様に転がる。

……ヤバい、意識が。

「ぐっ……お……おぉ…」

「ほぅ、まだ立つか」

確かに、ラウラは強い。

多分、いつものメンバーの中では最強だと思う。
でも、だからといって負けられない。
こんなところで、負けるワケには……。

「はぁ……は、はぁ……」

全身の痛みが酷い。

多分、ＩＳだったらとっくに搭乗者保護機能が働いて気絶してても
いい様なダメージだが、生憎コイツにはそんな機能は無い。
搭乗者がまだ使いこなせて無いとはいえ、ＩＳの様に競技用だなん
て生易しい設定はされていない。
シールドエネルギーの残量に制限を掛けていたりだとか、武装の威
力を落とすだとかそういったリミッターを欠けていないどころか完
全に戦闘用に作られた機体なので、寧ろこういった殺さない様に戦
う事の方が難しい。

「っく、…はぁ、…はぁ」

さっきから呼吸が上手く出来ない。
いや、呼吸そのものはちゃんと出来ているハズなのに、全然酸素が
足りてる気がしないのだ。

「はぁ……はぁ…来い、《マシンスライダー》」
「そんな状態でバイクなど乗りこなせるものか」
「うるせぇよ」

とっくに限界を迎えている身体に鞭打ち、愛機に跨がる。

「いくぞ！　ラウラ！　《ライダーブレイク》だ！！！」
「馬鹿が、先に技の名を叫ぶなど…」
呆れるラウラに構わず、俺はマシンを走らせる。
が、
「くぁ」
蓄積したダメージは俺の思っていたより酷かったらしく、一瞬意識が飛んだ途端にマシンから転がり落ちた。
主を失ったマシンだけが、ただ真っ直ぐに標的へと突き進んで行く。
「勝負あったな……！？」
余裕の表示で《マシンスライダー》をかわしたラウラに最後の力を振り絞って飛び掛かる。
「ちぃっ、死に損ないが！……！？」
《セイリングジャンプ》で飛行する俺に標準を合わせた途端、今度は過ぎ去って行ったハズの《マシンスライダー》がUターンして戻って来たのだ。
しかも先程とは形状が事なり、タイヤを地面に対して平行になる様に寝かせ、車体を延ばした状態で飛行して来る。
前輪がまるで回転鋸の様に高速回転し、後ろからラウラに襲い掛かった。
「挟み撃ちか！？　だが……」

その目論みも見抜かれ、あっさりとかわされる。

「今度こそ、引導を渡して……あぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

擦れ違う瞬間に放った《マイクロチェーン》伝いに《エレクトロファイヤー》を喰らわせ、トドメの一撃を封じ、迫り来る《マシンスライダー》のカウルを踏み台にしてラウラに飛び掛かる。

「ライダァァァァッキィィィィック！！！」

これこそが、俺の本命で、最後の一撃。
これをかわされたらもう、勝ち目は無い。
だから《エレクトロファイヤー》の出力を上げ、抵抗する力を奪って、確実に仕留める！

「おぉぉぉぉぉぉっ」

「ガハッ」

くそっ、効きが甘い！
ならもう一度だ！

今度はラウラを踏み台にして再び舞い上がり、落下の勢いを《マイクロチェーン》を手繰り寄せる勢いで加速させ、再び蹴りを放つ。

「ライダァァッキィィィィック！！！」

「がぁぁぁぁぁっ」

二度目のキックの威力に耐え切れず、ラウラを拘束していた《マイクロチェーン》はちぎれて彼女は吹き飛んでいく。

「はぁ……はぁ……はぁ……？」

……おかしい。

どうして模擬戦終了のブザーが鳴らない？

まだ、足りないっていうのか？

「あ、あ、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「な…」

倒れたハズのラウラが急に起き上がり、雄叫びを上げる。

その咆哮と共に《シュヴァルツェア・レーゲン》の装甲がドロドロと溶けてラウラを飲み込み、その姿を大きく変えていく。

『アァァァァァァァッ』

黒いヒトガタと化したソレは再び咆哮を上げ、俺に襲い掛かるのだった。

第３８話「変貌」（後書き）

え～、私も人の子というか、まぁ、ゴールデンウイークの予定というものがありまして、今まで通り（ほぼ）毎日５ページ（ぐらい）の文章を書くのが難しい状況です。

なので、次回からは一旦本編を休載し、ゴールデンウイーク特別企画番外編という事で、普段スポットの当たらない人の話を３～４ページぐらいの短編で掲載していこうかと思います。

GW番外編「二人目の彼女、その日常」（前書き）

ゴールデンウイーク特別番外編、第一弾はあの娘です

GW番外編「二人目の彼女、その日常」

仮面ライダー打鉄、更識簪はＩＳ学園一年四組のクラス代表である。
今日もクラス代表の仕事もそこそこに、愛しの織斑一夏を陰ながら見守り続けるのだった。

「「「「「一夏（さん）の馬鹿ー！！！」」」」」
「ギャー！」
（ボコボコにされてる織斑君ハァハァ…）

こんなヒロインで大丈夫か？
大丈夫だ、問題無い。

日曜の朝といえば、子供や大きいお友達がテレビの中のヒーローに熱中している時間である。
勿論、彼女も誇りある大きいお友達として毎週欠かさずテレビに釘付けだ。
番組をリアルタイムで見つつ録画する事も忘れ無い。
スーパー戦隊、仮面ライダーと続けて見終わった後は録画した映像の編集作業に入る。

玩具の宣伝ならともかく、番組に全く関係無い様なＣＭはここで抹消されるのだ。

録画した映像の編集作業が終わったところで、今度は机に向かう。
勿論、勉強の為ではない。
ある意味勉強ではあるがＩＳには全く関係の無い事だ。

「…うん、ちゃんと固まってる」

手に取った作りかけのフィギュアの様子を確かめ、後は終日作業の続きだ。

仮面ライダーシリーズに限らず、ヒーローものは番組の顔である主役のヒーローはともかく、敵のキャラクター達はあまり商品化される機会が無い。
最近は割とそういったキャラクター達にもスポットが当たる様にはなって来たが、やはり数が数だけに商品化されていない者はまだまだ多く、ファンの間でも何故コイツじゃなくてアイツを……という無念の声がよく上がるものだ。
欲しい。
でも商品化はされていない。
ならどうすればいいのか？
商品が無いのなら作ってしまえばいいのだ。
彼女もそんな剛の者の一人であり、今まで数々の怪人達をその手で作り上げてきた。
一体、また一体と増えるにつれ、彼女の机の面積徐々に彼女の怪人達に占拠されていき、今では机というより悪の秘密基地である。

彼女が怪人達を製作する上でこだわっている点が一つある。
それは商品より上手く作り過ぎない事だ。

これは単にディティールを合わせるという意味であって、別に彼女がプロの原型師より上手いというワケではない。
プロだって量産を考慮しないワンオフだったり量産するにしても値段を考慮しなければならないのでどうしても当人の全力よりディティールの甘いものになってしまうのだ。
勿論彼女もそれは重々承知しているので原型師を責めるつもりはない。
寧ろこの値段でよくやったと思っている。
どうしても気になる箇所があるのならソレを手にした自分が手を加えればいいのだ。

そんなこんなで、今製作している怪人で調度２０体調目であり、製作している怪人はホースオルフェノクである。
稼動範囲や関節の構造を商品と合わせつつ、激情形態も差し替えで再現可能なのでその辺りも抜かりは無い。

勿論、作るのは怪人ばかりではない。
自身のＩＳ、仮面ライダー打鉄……《打鉄弐式》だって作った。
武装も全て完備しており、保持したままの自立も可能である。

実は元々《打鉄弐式》は一般のＩＳと同じ様な外観の機体になるハズだったが、そうならなかった。
世界で唯一の男性ＩＳ操縦者、織斑一夏の為に彼女の機体を製作していた研究所の研究員が殆どもっていかれた為に製作途中で実質放棄された状態になってしまったのだ。
しかも、件の織斑一夏は彼女の機体を製作していた研究所が用意した《白式》があるのにも関わらず、あの篠ノ之博士が製作した機体、《白式・真打》を使用する事になった上にいつの間にか研究所が用意した機体は《白式》ではなく篠ノ之博士が手を加えれた《白式・影打》に変貌しており、紆余曲折の末に両機共に彼の手にある。

そういった理由で彼女の機体の製作は遅れに遅れたのだが、《白式・真打》を一目見た瞬間、彼女のオタク魂に火が着いた。
クラス代表トーナメントまで後二週間、更に両《白式》の研究のせいで製作に回せる人員もほぼいない。
そんな絶望的な状況の中で彼女は見事《打鉄弐式》を……何をとち狂ったか期間も無いのに仮面ライダーとして全部作り直して完成させたのだ。

しかし結果は惨敗。
ロクにテストもしないで実戦投入したからというのもあるが、何故かスペック上ではこちらの方が性能は上だったハズなのに《白式・影打》に敗北した。
他にも考えられる敗因は幾つかあるが、やはり《白式・影打》の操縦者たる織斑一夏の超人染みた技量と、機体自体の謎が大きい。
第一、どちらもデータが当てにならないのだ。
入学時のバイタルデータ通りなら、機体の補助があったとしても赤心少林拳でミサイルの軌道を反らすなんて不可能であり、仮に……というか、実際に出来てしまっているのだが、そんな事をすれば確実に筋肉が断裂してしまうハズなのに、全く負傷していない。
機体の方も機体の方で、元々は《暮桜》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《零落白夜》を第三世代機の定義に基づき唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）の代用として搭載した特殊兵器の一環として、かの《零落白夜》を再現した兵器を搭載した機体として製作されるハズだったが失敗、計画を一次凍結し、《打鉄》の後継機、《打鉄弐式》を製作する計画を優先する事になり、そのテストパイロットとして選ばれたのが彼女……更識簪だった。
彼女が知る限り……というか、彼女自身テストパイロット兼技術者だったので、《白式》がどういう機体だったかはある意味　現操縦者である織斑一夏より詳しいハズだったのに、暫定的にただの近接

ブレードを装備しただけの機体として出荷された《白式》はいつの間にか唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）として《零落白夜》を発現した《白式・影打》へと変貌していた。

しかもその名称からして篠ノ之博士の関与は明らかである。

本当に、何がどうなっているのか……。

「前の襲撃事件だってそう、全部織斑君を中心に物事が動いてる」

二度に渡る襲撃事件、異例の一年生に六機の専用機、しかもその内の五機もが一つのクラスに……織斑一夏のクラスに集中している。

更に極めつけにそのクラスの担任は彼の姉でブリュンヒルデの座にまで昇りつめた織斑千冬が勤め、かの篠ノ之博士の妹である篠ノ之箒までそのクラスに在籍しているとなるともう、陰謀の臭いしかしない。

「……ううん、でも、そんな事はどうだっていい」

だって、あの人は……。

私の……。

「織斑君は覚えてないんだろうけど…」

それでも…。

GW番外編「二人目の彼女、その日常」（後書き）

さて、次は誰にスポットが当たるのやら…

GW番外編「ショート・ショート」（前書き）

今回は1ページちょっとの短編二つです

GW番外編「ショート・ショート」

○残念過ぎる亡国機業

「スコールぅ、また一夏のヤツを捕まえ損なっちまったよぉ～」
「貴女は悪くないわ、オータム。今日はたまたま運が悪かっただけよ（涙目のオータム　ハァハァ…）」

某所、亡国機業（ファントム・タスク）のアジトの一つに彼女らは集まっていた。
例によってまたオータムがターゲットの少年、織斑一夏の捕獲に失敗して帰還し、スコールに慰められていた。
実はこの作戦……というか、オータムが出撃する作戦には全て欠陥があり、ほぼ成功しない。
何故か？
オータムが立案、実行しているからでは無い。
立案はスコールで実行はオータムで作戦は遂行されているのだが、勿論スコールの作戦に不備があったワケでも無い。
寧ろ”何事も無ければ”確実に成功していたと言ってもいいほど緻密な作戦であった。

……そう、何事も無ければ。

では、何故失敗したのか。
オータムが失敗する最大の理由、ソレはスコールが作戦の内容を自分でリークしていたからだった。
何故そんな事をしていたのかいえば、彼女が涙目のオータム萌えだからである！

（ハァハァ、やっぱり涙目のオータムかぁいいよ～）

抱きしめ、頭を撫でてやるその姿は優しいお姉さんにしか見えないが、中身はもう取り返しの着かないぐらい腐っていた。

というか、原型を留めていなかった。

そんな事とは露知らず、スコールの言う事を鵜呑みにして信用しきっているオータム。

彼女にはこのまま純粋でいて欲しいものである。

「…む、先に帰っていたか」

「あらM、お帰りなさい。首尾の方は？」

「あぁ、問題無い。そっちは……いつも通りか」

「なんだとー」

「どうどう」

続いて帰って来たMとのやり取りもまた、いつも通り。

「次の作戦は私が出る。今度こそ一夏をお持ち帰りするんだ！」

帰還時の凛とした雰囲気も何処へやら、ハァハァと息を荒げて身もだえるその様はただの変態にしか見えない。

変態という名の淑女と化したMは既に妄想の世界にトリップしており、さらに危険度がヒートアップしているが、スコールもオータムもスルー。
だっていつもの事だから。

「捕まえた一夏をベットに連れ込んで○○○を■■■■■して……」

何やらヤヴァい単語を連発するMさん。
取り敢えず涎は拭いた方がいい気もするが、結局拭いてもまた垂れるので同じだろう。

「ハァハァ、まず織斑千冬を倒して私が一夏の”お姉ちゃん”になって、それからそれから…」
「スコールぅ…」
「オータムぅ」

相変わらずトリップ中のM、スコールに撫でられて猫の様にゴロゴロと腕の中で丸くなるオータム、そんなオータムに萌え中のスコール、今日も皆元気です。

○今日ものほほん

「一夏！」
「一夏！！」
「一夏さん！」
「一夏」
「…一夏」
「ちょっ、お前らそんないっぺんに…」

わ～、今日もおりむーはモテモテだね～。
ほーきさんに～、
りんりんに～、
せっしーに～、
でゅちーに～、
らうらさんに～、
うんうん、み～んなおりむーの事大好きなんだね～。
でもでも、他の娘だっておりむーの事気になってるんだよ～。
だからちゃ～んと他の娘だって見て欲しいな～。
まぁ、あの様子だと無理っぽいけどね～。

「本音～、昼ご飯行こ～」
「ほいほ～い」

わ～い、お昼ご飯だ～。

「それにしてもズルいよね～」
「ほぇ？」
「だって専用機持ちばっかり織斑君独占してるじゃん」
「だね～」

たっちゃんとお姉ちゃんがおりむーの護衛の為～とか言ってたけど、

それにしたって皆べったりだよね～。
あ、ほーきさんは専用機持ちじゃ無かったっけ。

「私も織斑君とお話したいな～」
「だね～」

いちお～、私もおりむーの警護任務があるんだけど、いらないよね～。

「それにさ～、織斑君って専用機二つも持ってるんでしょ～」
「しかも篠ノ之博士製だってさ～」
「ズルイよね～。あ～、私も欲しいな～、専用機」
「ね～」

うんうん、私も欲し～。
いいな～、たっちゃんと簪ちゃん。
私も専用機が有ればこう、しゃきーんとなってずど～んとやって、それからそれから～。

「《打鉄》も《ラファール》も悪く無いんだけどさ～、やっぱ専用機と比べたらパッとしないよね～」
「あ～あ、私もオルコットさんみたいにビームとか撃ってみたいな～」
「私は凰さんの双天……なんだっけ？　まぁ、いいや。私も近接ブレードじゃなくてあんなおっきなの振り回してみたいなぁ～」
「「はぁ～」」
「私はこ～んなおっきな刺だらけの玉を鎖でつないでブンブン振り回して～」
「わ～お、見た目によらず過激だね～本音って」

そっかな～？
ガンダムみたいでカッコイイと思うんだけどな～。
あ、でもでもおっきな手のＩＳが相手だったら受け止められちゃうか。
残念。

「ん～、私は四組の更識さんみたいなのがいいかな～。やっぱ重火器が１番よ。こう、ミサイルがばぁ～と出てずど～んて…」
「え～」

うんうん、皆いろんなのが欲し～んだねぇ～。

キーン　コーン　カーン　コーン

「およ？」
「あ、マズっ」
「皆急いで」

あ～あ、もうお昼休みはおしまいか～。
うん、午後からも頑張ろ～。

GW番外編「ショート・ショート」（後書き）

今日中に旅行から帰るので、次回からは本編を再開します

第３９話「悪魔は誰か？」（前書き）

たいへんお待たせしました。
本編再開です

第３９話「悪魔は誰か？」

まるで悲鳴の様な咆哮を上げた《シュヴァルツェア・レーゲン》の装甲は火を燈した蝋燭の如くドロリと解け、搭乗者であるラウラを飲み込みながらその姿を変えていく。

以前の黒主体ではなく完全に黒一色となったそのヒトガタの背中を突き破る勢いで生えた三対の羽は悪魔を連想させ、両手の指は《雪羅》のクローの様に変化したかと思えば更に掌からまた手首が生え、生えた手には一振りの大剣が握られていた。

形状の変化もそうだが、何より機体サイズの変化が著しい。

どれだけ高く見積もっても３ｍぐらいだった《シュヴァルツェア・レーゲン》の全高は形状の変化と共に大きさを増し、今となっては１０ｍ以上もの巨躯となって一夏を見下ろしている。

再構成された機体はデザインラインこそかつての姿に似通ってはいたものの、そのデザインは刃物を思わせる鋭利な直線から曲線主体の有機的な……機械ではなくそういう生物であると錯覚させる程の滑らかさと硬質さの調和が成されており、ある種の芸術と言っても差し支えないだろう。

『……』

その変貌が止んだ途端、最初に上げた寄声がまるで嘘の様に無貌の美貌がただ静かに一夏を見つめるばかり。

目も、口も無い、とりあえず鼻は存在するだけの……服屋のマネキンの様な顔なのに、視線ばかりしっかりと感じる。

「……な、何がどうなって…。二次移行（セカンド・シフト）じゃないみたいだし…」

彼の持つ機体ならともかく、通常のＩＳである《シュヴァルツェア・レーゲン》が二次移行（セカンド・シフト）したとしても、これほど劇的な変化はまずしないハズである。

『あ、あ、あ……アァァァァァァァァァァッ！！！』

「うおっ」

静寂もつかの間、再び咆哮を上げたヒトガタは左腕を”伸ばして”掴み掛かろうとする。

「そんなっ、腕が伸び……どわっ！！？」

伸ばされた左腕はかわされてもまだ伸び続けてＵターンし、再び彼に襲い掛かった。

かわしても、かわしても、何度かわしても伸び続ける腕の長さはもうすぐ１００ｍを越す勢いで尚も伸び続け、執拗に彼に追い縋る。

「ちぃっ……何がどうなって……」

『織斑君！　織斑君！　模擬戦は中止です、直ぐにアリーナから脱出して下さい』

「んな事言ったって……このっ」

退避命令が下るものの今の状態で逃げ切るなんて不可能である。

それなりに無理をすれば不可能ではないかもしれないが、《零落白夜》でアリーナのシールドを破って脱出したりなんかしたらこのヒトガタも一緒になってアリーナから抜け出しかねない。

「非常事態っていうならっ…」

わざわざ模擬戦のルールに則って特殊機能を封じたままにしておく必要も無い。

瞬時に復元を発動させる事によってボロボロだった機体は新品同様の状態に戻り、続けて展開装甲をスライドさせて高速移動形態になって一気に距離を詰めながら《スーパー大切断》で今も尚伸び続ける腕を切断する。

ボトリ、と落ちた腕はまるで蜥蜴の尻尾の様に暴れ回ったものの、やがて動かなくなり、砂の様に崩れ去った。

「このまま一気に……！！？」

トドメを、と切り掛かろうとした瞬間、あろうことかそのヒトガタはまるで盾にでもするかの様に飲み込んでいたラウラを切り落とされた左腕から出して一夏に向けたのだ。

慌てて《大切断》の刃を納めたその隙こそが目の前のヒトガタの狙いであり、一瞬止まったところを右腕に握られた大剣で斬られた。

「がっ……テメェ、よりにもよって…」

搭乗者を人質にとるだなんて馬鹿げたマネをするＩＳなんて聞いたことが無い。

篠ノ之博士曰く、ＩＳのコアには意思があり、余程嫌われる様な事でもしない限りＩＳは自身の搭乗者を守ろうとする。

稼動時間が長ければ長いほどコアの意識は強く、より明確になり、シンクロ率の上昇と共により早く、それでいて正確に搭乗者の意思を汲み取る様になるのだ。

このシンクロ率の上昇というのが少々厄介で、練習機の様に逐一初

期化されるものとは違い、専用機となると稼動時間内での操作方法やその時の搭乗者の思考を読み取って学習する事によってコアの性格着けが成され、結果的に搭乗者に近い性格や思考を持つ様になる事によって動作に掛かるタイムラグを限りなく0にしていく。
しかしどのコアも元々それなりの意識を持ち合わせている為、搭乗者との性格の違い、取り分け性格的に相性が悪かった場合はコアの方が搭乗者を理解しようとするのを止めてしまい、ほぼシンクロ率の上昇は見込めなくなる。
とは言っても余程クセのあるコアでも無い限り個体差こそあれ、ある程度は搭乗者の性格に折り合いを着けるので全く動かなくなるほどのシンクロ率の低迷は見られないのだが。

例外として余程のクセのあるコアだったり、そうでなくとも搭乗者の行いに不満を持つ様になるとシンクロ率は上昇しないどころか一気に低迷していき、遂には装着すら出来なくなる場合もある。
実際、代表候補生よりＩＳ適性が高くともコアとの相性が低いせいで代表候補生に成れなかったり、途中で見捨てられる搭乗者も稀にいたりするのだ。

そういった内容の知識を束から聞かされていた一夏から見て、ラウラの性格や言動に特に問題があったとは思えなかった。
というか第一、一夏の見立てが間違っていたとしてもＩＳは拒絶こそすれ、今の様に直接搭乗者を害する様な、搭乗者を盾にするなんて事は出来ない様に作られているハズなのだ。

「くそっ……なんでこんな……まさかコアが解析されたのか？　いや、でもそんなハズ…」

そう、そんなハズ無い。
解析しようとすれば束の作った機密防衛プログラムが起動し、解析されるのを防ぐ様に出来ているし、仮に解析出来たとしても直ぐに束にその事が伝わってしまうのだ。
なら、何が……いや、どうやって《シュヴァルツェア・レーゲン》のコアを狂わせたのか。

「くっ……このっ」

技術者では無くあくまで搭乗者である一夏には当然解るハズも無く、ただただ防戦一方の戦いを強いられる。
反撃に出ようものなら先程の様にラウラを盾にされてしまうのでこちらからは一切手だし出来ないというどうしようもない状況。
状況を打開するにはラウラと《シュヴァルツェア・レーゲン》を切り離すしか無いのだが、下手にそうすると搭乗者自身やコアにも負担がかかり過ぎる。
武装の剥奪の為に他のＩＳのハイパーセンサーより数段精度の高いハイパーセンサーが《白式・真打》には搭載されてはいるものの、その感度を最大にしても中々情報が掴め無い。

というか、センサーは確かに目の前のヒトガタの内部のコアの存在は掴んでいるのに、肝心のコアの意識が全く伝わって来ない。
拒絶の意思どころか、そもそも意識自体が感じられないというのはおかしい。

「くそっ、どうなってんだよ！」

「へぇ…、中々おもしろい事考えたね。コアをただのエネルギー供給源扱いにしておいて他の機能を封じて、後は好きな様にお人形遊びってとこか」

某所、この状況を見ていた女性、篠ノ之束は《白式・真打》のハイパーセンサーより早くこの状況を看破した。

開発者であるのだから当然といえば当然なのだが、まさかこの様な手でくるとは思っていなかったというのが彼女の正直な感想である。

否、正確にはこの様な手段を実行出来る程の技術を他の誰かが持っていたのが意外だったのだ。

その様な研究が行われていたのは察知していたが、失敗続きだった為にそれほど重くは見ていなかった。

それに、これ以外にも今も尚あらゆる方面からコアに対してのアプローチが行われているのだから、流石に天才とはいえ全て監視し尽くすには〝少し〟彼女のキャパシティを超えている。

「う～ん、やっぱいっくんに教えといた方がいいかな？　あの娘はともかく、あの子はそれなりに重要なファクターだし」

「っと、…クソッ、このままじゃじり貧だな」

右腕に握られたブレードの斬撃をかわしつつハイパーセンサーに調べさせてはいるものの、どうやって目の前のヒトガタがコアを介さず動いているのかが解らない。

「あぁっ、クソッ…」

『（いっくんいっくん、聞こえてる～？）』

「なっ…（た、束さん!?）」

『（うんうん、俺俺。実は事故っちゃって…）』

「よっ…ほっ（ちょっ、そういうボケはいいですから！　用件だけお願いします！　今忙しいんてすから）」

『（うん、知ってる♪）』

「おわっ…と（…よし、切るか）」

『（わーわー！　タンマタンマ、切っちゃやだ～）』

「っと、危なっ！（…で、何の用ですか？）」

突然プライベートチャンネルで話し掛けてきた束のおふざけに少しウンザリしながらも、続きを促す。

受信直後はこのタイミングでただの世間話は無いだろうと信じていたが、いきなりアレだった為に少々不安ではあった。

『（えっとね、多分そっちもその子のコアが機体と繋がってないところまでは解ってると思うんだけど）』

「はっ…（はい、そこまでなら。でもそれ以上となると…）」

『（うん、それなんだけど、あの子のコアはエネルギー供給以外の回線がカットされてる状態なんだよ。ゲーム機で例えると、コンセ

ント刺してるからゲーム機本体には電源入ってるけど、コントローラーが本体に繋がってないから搭乗者にはあの子を操作する事なんて出来ないって感じかな。しかもコアの方も搭乗者と同じで機体を操作出来ない）』

「くぁっ……っと（どうにかならないんですか？）」

『（別に殺してもいいっていうんなら《リボルケイン》で搭乗者ごとコアを突き刺してしまえばすぐに止まるけど、いっくんは搭乗者もコアも助けたいんでしょ？）』

「くうっ（…はい）」

『（うんうん、それでこそいっくんだね。だったらまず…）』

「あわわ、お、織斑君…」

真耶ほどで無いにしろ、日独双方の要人、そして千冬と管制室内にいた全ての人間は皆個人差があったとはいえ、一様に動揺を隠せないでいた。

いつも通りというか、結局《白式・真打》の勝利で終わるハズだった模擬戦は《シュヴァルツェア・レーゲン》の変化という異常事態によっておかしな状況になりつつある。

二次移行（セカンド・シフト）とは異なる変化によって姿を変えた《シュヴァルツェア・レーゲン》が自身の搭乗者を飲み込み、あまつさえその搭乗者を盾にするなど、ありえないハズの事が立て続けに起こっていからだ。

「どどどどど～しましょう！　織斑先生！」
「落ち着いて下さい、山田先生。アイツなら大丈夫ですよ」
「そうですよ、山田先生。俺なら大丈夫ですから」
「「「「！？」」」」
混乱に包まれる管制室内に、いないハズの人間の……織斑一夏の声が響く。
ギョッとした目で見詰める視線を意に介さず、《白式・真打》の分身体はゆっくりと歩いてドイツの要人の前で止まったかと思えば、急に胸倉を掴んで持ち上げた。
「なっ…、お、織斑君！？」
「待ちたまえ、君！　自分が何をやっているのか解って…」
「そっ、そうだ！　私を誰だと思って「んな事知るかよ」ぐぇ」
周りの制止も意に介さず、更に高く男を持ち上げた。
持ち上げられた要人は苦しさでもがくが全く効果は無く、それどころかもがけばもがくほど首がしまってかえって逆効果でしかない。
「自分が何をやっているのか、だと？」
怒りに燃える真紅の瞳がバイザーの奥から男を睨みつけ、威圧する。
「《シュヴァルツェア・レーゲン》を……ラウラをあんな風にした

のはテメェらだろうがっ！」
「な、何を言って…」
「…じゃあ、コレは何だ？」
「！！」

尚も惚けようとする男の胸ポケットから端末を引ったくり、管制室内にいる全ての人間全てに見える様に曝した。

『やぁやぁ、よくも私の可愛いＩＳに酷い事してくれたね』
「な！？　束！」
『やっほー、ちーちゃん久しぶり～』

更に突然の事態により混乱を大きくする一同に追い撃ちをかけるかの様に、今度は女の声が室内に響き渡る。
モニターもジャックしたのか、束の姿が管制室内の全てのモニターに映し出された。

「…ねぇ、勿論、ここが何処だか、解るよね？」

強調する様に語る束の後ろに聳える大きなビルに、当然語りかけられた要人達には見覚えがあった。
動揺する要人達を余所に、束はあの《白式・真打　アグレッサー仕様》を呼び出し、ビルを包囲する。
１０や２０なんてものじゃない、数え切れないほどの夥しい数の機体が空を、陸を、そしてモニターには映っていないものの、地下通路すら包囲して一斉に《ギガント》を構えた。

「ま、待て！」
「ヤダね。どうせいっくんが掴んでいるソレも中継機でしか無いんだしさ、一々虱潰しにしてたら切りがないからね。やっぱりこうい

うのは綺麗さっぱり根絶やしにしないと」

懇願する要人を嘲笑うかの様に、無慈悲に放たれたミサイルの群れが一斉にビルに襲い掛かる。

その光景は以前に対して行われたものとは比べものにならないほど圧倒的なもので、次の瞬間、ビル所か土地ごと装置や資料を吹き飛ばした。

普通、市街地でこれだけの事をすれば周りの被害もとんでもない事になるところだが、しっかりとバリヤーで囲った上での事だったので周囲への被害は０である。

「あ、ああ…」

『アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ』

胸倉を掴まれてない方の要人が、長年の研究成果が…資金が…と、譫言の様に呟きながら膝を着き、その様子を眺める束はまるで漫才でも見たかの様に大受けして腹を抱えて狂った様に笑い出す。

「あぁ、肝心の施設が無いんじゃ、コレもいらないよな？」

そう言って返事も待たずに掴んでいた中継機を握り潰した。

まぁ、元々返事を聞く気も無かったのだが。

「悪魔め…」

「おいおい、人聞きの悪い事言ってくれるなよ。つ～か、お前らにソレ言われる筋合い無いし」

『ね～ね～、いっくん。そんなおっさんなんかほっといてさっさと終わらせちゃおうよ。もう逃げ回る必要なんか無いんだしさ』

「ですね。じゃ、”俺”は戻りますんで、後よろしく」

そう言って、分身体は陽炎の様に消え去った。

「さぁて、こっからが本番か」

搭乗者も、コアも、裏で操るものの手すら離れたヒトガタは、ただ目の前の存在を食らおうとする獣そのもの。
制御装置を失った瞬間、ほんの一瞬だけ動きを止めたその隙に分身の攻撃を囮にしてヒトガタの左腕からラウラを切り離し、そのままラウラを切り離した分身を後方まで下がらせた。
気を失ってはいるものの、特に外傷も無く健康上の問題は全く無いようで一安心したのもつかの間、再び動き出したヒトガタは奪われた主を求めるかの様にその手を伸ばす。

「お前もちゃんと救ってやる。だから少しだけ待ってろ」

白き仮面の騎士は、臆する事無く怪物に向かって走り出した。

第３９話「悪魔は誰か？」（後書き）

次話は深夜か遅くとも朝には投稿出来るように今から執筆始めますね

じゃないとまた寝落ちしそう…

第４０話「落日」（前書き）

今回は次回に合わせて短めとなっております
ご了承下さい

第４０話「落日」

主を奪われた目の前のヒトガタは、誰の目にも荒れ狂う猛獣の様に見えただろう。
だが、織斑一夏にはそうは見えなかった。
彼の目には目の前のヒトガタがまるで母親を奪われた子供が泣いている様にしか映らなかったのだ。
特段、彼は博愛主義というワケでは無かったのだが、そういった光景を目の当たりにして何とも思わないほどドライな性格はしていない。
彼の共犯者ほど極端では無いものの、割とその他大勢が多少酷い目にあったとしても同情こそすれ、それほど親身にはなれなかったが、友人のＩＳともなれば十分彼にとっての身内と言える存在であり、手を差し延べるのは彼にとって寧ろ当然の事ですらあった。

ヒトガタの身体に手を突っ込んで、コアを抜き取る。
言葉にしてみればまるで福引きでも引くかの様に簡単な事ではあったが、実際問題、そう簡単にはいかない。
装置を使って操っていた時はまるで誰かを真似る様な……といっても誰々はこういう時にはこうしたから、この機体もそういう時はそうするといった、パターン化されているとはいえ行動の一つ一つだけ見れば実に人間らしく動くそのチグハグさと、搭乗者であるラウラを人質に取られていたという二点が……特に前者は防ぐ上で、後者は攻撃そのものを封じるという意味でやりづらい相手ではあったのだが、搭乗者という名の盾と支配者という名の頭脳を失ったせいか、こちらから攻める事が出来る様になったとはいえ、装置を失った事によって動作パターンにバグでも生じたのか、パターンが変わり、結果として予測と異なる部位に向かって攻撃が飛んでくるので

やりづらい事この上無い。

「よっ……っとお！？　危ねっ！」

また予測と違うパターン。

制御装置を失う前だったなら、伸ばされた右腕をかわしたらUターンして戻って来て再び襲い掛かってくるところだったハズのに、腕の方は伸ばしっぱなしで本体の方から突っ込んで来たのだ。

しかもその前は伸びたのが腕では無く爪だったりと、動作のバリエーションが明らかに増えている。

もともとそういう風にプログラムされていたという可能性も無くはないが、制御装置を失う前の滑らかな動きと今のガクガクと機体全体を揺らしながらの動作とでは、とても同じ様にプログラムされていた動作だとは思えない。

「参ったな、どうも…」

人間相手ならともかく、機械相手でパターンが読めないのは非常に恐ろしいものがある。

パターンが読めないという点では人間も機械も同じかもしれないが、機械の場合、アレで寸分違わず狙い通りの部位に当ててくるので読み誤ると致命傷を貰い兼ねない可能性が人間相手より大きいからだ。

人間ならその正確さにも多少誤差が生じるものだし、何より本人がどういうつもりであれ、同族を害する事に躊躇いを覚える。

その点機械は一度狙った以上、正確に、それでいて無慈悲にその部位を狙ってくるのだ、当たるかどうかが解らないとはいえ、確実に仕留めに掛かって来る攻撃が恐ろしく無いワケが無い。

「のわっ……っと」

それでも、こうしてかわしつづける事が出来ているのはヒトガタが確実に一夏を仕留めに掛かっているからであり、どれだけ動作の予測が不可能とはいえ、最終的に頭か心臓か、もしくは《白式・真打》コアの三ヶ所しか狙って来ないのだから、まだ防ぐなりかわすなり対応のしようはあったのだ。

「よっ……っと、貰った！」

そして遂に、ヒトガタが伸ばした右腕も《スーパー大切断》の刃によって切断され、ボトリと音を立てて落ちた。

大きさの割に音が小さいというか、軽いのは、恐らく伸ばす為に中身の質量を使っていた為に長さが変わっても重さ自体は変わっていなかったからだろう。

『グキャアァァァァァァッ！！？』

腕を切断されてのたうちまわる様はまるで本物の生物の様に感じられたが、実際は破損時に他の部位から質量を回すというプログラムが作動しただけに過ぎない。

ただ、プログラム自体が作動していても回す質量が足りていないせいで痛みにもがいている様に見えただけだ。

「ライダァァパァンチッ！！」

再生が上手く出来ないせいで次の動作に入れなくなった隙に、突き刺すかの様にライダーパンチを胴体に叩き込んだ。

再生の為に全身の質量を回そうとしていたせいか、《零落白夜》を

使わずともあっさりと突き刺さった拳は遂に《シュヴァルツェア・レーゲン》のコアを探り当て、一気に引き抜く。
ブチブチと音を立てて引き抜かれたコアに繋がっていたコードが引きちぎられるその音は、まるで内臓を引きずり出したかの様で不気味ではあったが、そんな事は一々気にしてられない。

『あ、あ、あぁ……』

搭乗者を、制御装置を、そして遂にコアというエネルギー供給源すら失ったヒトガタはその形すら維持出来なくなり、抜き取られたコアを求めてゆっくりと歩きながら崩壊していき、断末魔の声を上げながら砂の様に崩れ去ったのだった。

「え？」

そこで終わればハッピーエンドだったのに、そうはいかなかった。
じんわりとした痛みを覚え、自身の胸を見下ろす。
文字通りポッカリと開いた胸の穴はアーマーごと彼の心臓を穿ったレーザーによって開けられたものだった。
傷口を見てしまったせいなのか、それとも単に痛みが後から追い付いて来たのか、じんわりとした痛みはまるで灼熱の様に燃え上がる

錯覚を覚えるほど激しいものに変わり、なのにそれに反比例するかの様に急激な体温の低下に見舞われ、意識が遠退いていく。

「あ…レ？　なん、で……ゴフッ」

噴水と言うほどで無いにしろ、かなりの勢いで血が溢れ出し、更に傷口に負けじと吐血した血液が口元を覆う《パーフェクター》の隙間から溢れ出し、白い鎧を真っ赤に染め上げていく。

防衛本能からか、穿たれた胸を押さえたものの、当然その程度では止血など到底できるワケも無く、指と指との間からはとめどなく血が溢れ続けている。

「あ、あ…」

溢れ出る血液と共に彼の意識はみるみるうちに薄弱となり、遂に彼の意識は途絶え、膝を着いて、俯せに倒れた。

その手に《シュヴァルツェア・レーゲン》のコアを握ったまま、放さずに。

第４０話「落日」（後書き）

彼は斃れ、そして…

第４１話「逆巻く嵐」（前書き）

すんません、ＲＧのストライク作ってたら投稿が遅れ…

千冬「阿保」

ぎゃぁぁぁぁぁぁぁっ！

頭がわれるぅぅっ

第４１話「逆巻く嵐」

「っ……お、織斑君のバイタル、尚も低下…」
「そんな……一夏……あぁっ」

どうしたらいいのか、解らなかった。
誰も彼も、それは同じ。
そう、血溜まりに沈む彼の姉ですら、そうだった。
彼の姉…千冬ですら普段の威厳などもはやカケラも無く、ただガクリと膝を着いて座り込み、モニターに映った冷たくなっていく弟の姿を見ている事しか出来なかったのだ。

「…やったか」

アリーナの壁の奥に潜んでいた狙撃手はニヤリと口元を吊り上げた。
アリーナのシールドバリヤーの様に、大きささえ問わなければコアが無くともＩＳと同等の事は出来ない事もない。
だが、コアを使用するからこそ安定したエネルギー供給が約束されているのであって、それ以外で賄うとなると何を使おうが関係無く

割に合わないほどエネルギーの消費が激しくなってしまう為にＩＳ関連の大規模な施設以外では普及の目通しが立っていなかった。
勿論、ＩＳ学園もその大規模施設の内に入るが、エネルギー供給の面での問題が解決されていたワケでは無い。
国内の発電施設はもとより、学園の為だけの発電施設を数ヶ所新設して漸く安定したエネルギー供給が行われているといった状態で、しかもその安定というのもあくまで及第点という意味であって、本当に安定したエネルギー供給が成されていたのなら、内通者でもいない限り学園に入学した彼を狙った様々な襲撃者達が侵入する事など不可能なのである。
更に言えば、あくまで及第点なエネルギー供給に負担を掛けない様に観客席の無いアリーナの下部はシールドバリヤーが薄くなっている代わりに何十もの装甲で防御力を上げるという節電対策が成されており、今回の襲撃者はそこを突いたのだ。。
アリーナの入口は当然下部にある為、シールドバリヤーは薄い。
しかも入口は一夏やラウラの使ったものを含めて計四ヶ所あるので、後は彼らが使用しなかった方の入口に潜んでひたすら機会を待てばいいだけだったのだ。

相手が亡国機業（ファントム・タスク）だったのなら、彼を暗殺しようとは思わなかっただろうが、残念ながらＩＳを所有している組織は亡国機業（ファントム・タスク）だけではない。
強奪したＩＳを使用した組織、と限定すると亡国機業（ファントム・タスク）しかＩＳを使用する組織は無いのだが、この襲撃者の所属する組織は違った。
端的に説明するのなら、ＩＳの存在によって女尊男卑となった恩恵を受けた女性至上主義者達の集まり……しかもその中でも過激派に分類される集団なのである。
普段は国家代表や代表候補生、もしくは整備師等の何らかの形でＩＳに関わる職業の人間が主な実行部隊であり、上層部も政治にかなり深く食い込んでいる。

その為、現行犯で、尚且つ証拠の揉み消しようのない様な状況で確保しない限り、どんな非合法な活動をも揉み消されてしまうという性質（タチ）の悪さでほぼ損耗無くその勢力を拡大し、一説によればＩＳに関わる人間の半数はこの組織に属しているのではないかと言われているほどの大組織なのだ。

更に言えば、男性用ＩＳの研究が全く進まないのも、《白式》用に他の第三世代機の様にイメージインタフェースを利用した特殊兵器として《零落白夜》を再現した兵器を開発する研究が進まなかったのも、この組織の関与が疑われている。

男性用ＩＳについては組織の目論み通り一向に研究が進んでいない様だが、《白式》の件に関しては篠ノ之博士自身の手によって新生し、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）として《零落白夜》を発現させた《白式・影打》が唯一の男性ＩＳ操縦者、織斑一夏の手に渡ってしまい、しかも《白式・真打》なんていうふざけた性能の機体まで博士から贈られてしまった。

更に、技術面だけでなく彼の担任に彼の姉であり、世界最強を誇る織斑千冬が、そして常に彼の周りにイギリス・中国・ドイツ・フランスの代表候補生が着いているという、異様なまでに硬いガードがあった為に組織はなかなか彼を亡きものにする機会に恵まれなかったのだ。

そこでいつ彼が一人になるのかと考えた組織がまず思い付いたのが就寝時であったが、忌まわしい事に更識の者が警護している事が判明……というか実際に襲撃を行うまで気付かず、襲撃に向かった構成員は更識楯無の手によって処断されてしまった。

わざわざ誰が処断したかが解る様にやったという事は、更識も織斑

一夏の警護に一枚噛んでいるというメッセージに他ならないという事になる。

そして次に考えられたのが、彼の周りに人間が余りいない時間帯はいつか、であった。

一人切りに見せかけて更識が警護している以上、就寝時に襲撃を行っても無駄である。

なら、それ以外で彼の周りの人間が少なくなる時間帯といえば《白式・真打》の性能実験の為の各国との模擬戦時であった。

なにせ、舞台となるアリーナにはターゲットとなる織斑一夏と相手役が一人しかいないのだ。

これ以上のチャンスは無い。

手に入れた模擬戦のデータから、復元などというふざけた機能こそあるものの、《白式・真打》自体の防御力は他のＩＳと比べて特別強硬というワケでも無いのだから、ほどよく疲労で動きが鈍った隙を突けばいいのだ。

しかも、ドイツがＶＴシステムを《白式・真打》に当てる気でいるという情報も入手済みであり、その日こそ組織にとってのそ絶好の襲撃日和だったと言えよう。

そして当日、放たれた凶弾は確かに織斑一夏の心臓を穿ち、組織の計画は成功した……ハズだった。

血溜まりに沈む彼は斃れたままピクリとも動かず、その温もりも徐々に失いつつあった。

だが、変身も解けた瞬間、《白式・真打》は待機状態に戻らず、まるで有体離脱の様にスゥと彼の背中から立ち上がる。

『（影打……いや、《白騎士》）』

『（えぇ、言われずとも）』

コアネットワーク上で交わされた会話は、他の誰にも聞こえない。

《白騎士》と呼ばれた《白式・影打》からは女性の声が、そして《白式・影打》を《白騎士》と呼んだ《白式・真打》からは『彼』の声が、それぞれネットワーク内に響く。

《白式・真打》が彼の身体から離れ、狙撃手を睨み据える間に、今度は《白式・影打》が彼の身体に纏わり、そしてその姿を変える。

世界初のＩＳ、《白騎士》の姿に。

「なっ…、アレは…」

「嘘…」

「《白騎士》、だと…？」

その様子をモニターし続けていた管制室が再び喧騒に包まれる。
《白式・真打》が登場者無しで動いたのはそれはそれで驚くべき事態だが、既に束が見せた量産機の存在もあって、それほど目新しいものでは無い。
だが、《白騎士》の出現は別だ。
行方不明だった機体が、原初の存在がそこにある。
三次移行（サード・シフト）の結果として、似た姿になったのではなく、《白式・影打》という仮面を脱ぎ去り、遂に騎士は再びその素顔を晒したのだ。

「…そうか、お前、そんな所にいたのか」

久しく見ていなかった、かつての剣。
その剣を見た瞬間、彼女の顔からは絶望は消えうせた。
それどころか、その口元は喜色に歪んですらいて、正直不気味ですらある。

「…お、織斑先生？」
「あぁ、山田先生。織斑なら大丈夫だ」
「え……、それはどういう…」
「何せ、アイツは…」

《白騎士》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）は……。

「なっ……《白騎士》だと!?　いや、それより…」
どうして、織斑一夏のバイタルが……？
撃ち抜かれ、心拍数もなにもその身体中に血液を送り込む為の器官であるハズの心臓を完全に破壊したのに、どうして心拍数が回復している？

「な…なっ……」

ハイパーセンサーごしにズームした映像を見て、再び驚愕する。
確かに撃ち抜いたハズの心臓が、まるで時間を巻き戻したかの様に復元されているのだから。
あまりの出来事に思考が止まってしまった間に、心臓や周りの臓器の復元は終わり、傷口も殆ど塞がりつつあった。
当の織斑一夏はまだ目を覚まさず、《白騎士》によって宙に浮かんでいるだけであったが、《白式・真打》は違う。
襲撃者が正気に戻ったのは、いつの間にか放たれていた《マイクロチェーン》でアリーナ内まで手繰り寄せられた後だった。

「!?　しまっ」

気付いた時にはもう遅い。
武装剥奪能力の応用で学園自体のコンピュータをジャックし、アリーナのシールドバリヤーを強制的に最高レベルまで引き上げ、逃げ場を奪う。
そして、彼が握っていた《シュヴァルツェア・レーゲン》のコアを手に取り、

『（少しだけ、協力してもらう）』

『（……）』

語り掛けられた言葉に返答こそしなかったものの、確かに《シュヴァルツェア・レーゲン》のコアは協力の意思を示した。
そもそも、《白騎士》や『彼』という存在が間借りしている《白式・真打》が異常なのであって、他のＩＳはそこまで明確な意思をまだ持ち合わせているものは殆どいないのだが。

そして手にしたコアを自身のバックルに押し込む。
その瞬間、今まで中央に《白式・真打》のコアを納めていたそのバックルは形を変え、横一列にコアが並んだデザインに変わる。
変化はそれだけでは収まらず、白亜に輝く《白式・真打》の装甲は漆黒に染まり、真紅の瞳は黄金の光を燈した。
想定外の事態に『彼』の脳裏をエラーメッセージが埋め尽くすものの、気にしない。
《シュヴァルツェア・レーゲン》のコアに負担を掛けない様に気を配りながら、それでいて未成熟な身体の、その複製品を使わなければならないとなると『彼』に掛かる負担は既に人間に処理仕切れる範疇では無くなっていたが、そもそも『彼』は人間では無い。
人間であった時期も確かにあったが、『彼』の感覚ではもはや過去の話だ。

「なっ…、なんなんだよ！　お前ぇっ！！？」

錯乱する襲撃者がスナイパーライフルを構えるが、肝心のビームが出ない。
正確には、トリガーが引けなかった。
その黄金の瞳が、Ａ．Ｉ．Ｃの展開する結界が、襲撃者の動きを止めたのだ。

恐怖で、ガタガタと奮える……事すら封じられた襲撃者はただゆっくりと自分に向かって歩いてくる黒い騎士の姿を見ている事しか出来なかった。
そして、

『（消え去れ……《逆ダブルタイフーン》！！！）』

バックルから吹き荒れる二本のエネルギーの渦が襲撃者を飲み込んでいったのだった。

第４１話「逆巻く嵐」（後書き）

次回は事後処理……、というか、それが終わった後の話になるのかな？　多分

第４２話「知らない天井だ……なんて言うとでも思ったか！」（前書き）

冒頭エロ注意

また夢の国の住人がやらかします（笑）

…一応、直接何をどうしたかは書いてないのでまだＲ１５のハズ

第４２話「知らない天井だ……なんて言うとでも思ったか！」

夢を見ている。
と、自覚出来てしまうのもなんだか変な話だが、なんとなく解ってしまった。
そう、この後の展開も。
ダラダラと冷や汗が流れる感覚がするが、実際には汗は流れない。
だってまだ夢の中の俺には身体が無いのだから。
嗅覚も、聴覚も、味覚も、触覚も無い。
ただなんとなく視覚だけがある。
でもその視覚すらなんだか朧げで、はっきり言って見えてないのに等しい。

意識だけがそこにあって、でもだからといって何かをする為の身体が無いのだからどうしようもない。
多分、またアイツが来るんだろうけど、それまでこのままなんだろう。

もう何と言うか、気持ちいいやら情けないやら気持ちいいやらで……まぁ、結局気持ちよかったワケなんですが、二度も襲われるとか、男としてどうなんだろう。
いや、まぁ、だからといって仕返しに襲うような度胸なんて無いワケなんですが。

…と、そんな事を考えていたらだんだん視覚だけでなく五感全てがクリアになっていくのを感じた。
五感がある、という事は身体があるという事。
つまり……、

「またお前……か？」
「ふぇ？」

いつも通り、アイツが出て来るのかと思っていたのだが、今日は別人だった。
てか、なんでこの娘も真っ裸なのさ。

「え～と、君は？」
「えと…、今は《シュヴァルツェア・レーゲン》、っていうんだよ」
「そっ…、そっか。で、どうしてここに？」
「お母さんにちゃんとお礼言っときなさいって言われたの」

お母さん、ね。
多分、束さんの事だろう。
コア作ったのあの人だし。
それにしてもこの娘、誰かに顔が似てるって思ってたけど、ラウラに似てるんだな。
まぁ、ラウラと違ってその……、アイツ程でも無いけど女の子にしては結構背が高い方で、出るとこ出てるっていうか……。
こう、ボンッ、キュッ、ボンッ、みたいな感じで。
両目とも金色である事以外は大人版ラウラってとこか。

「え～と、名前、長いから……レーゲンちゃんでいいかな？」
「うん♪」
「じゃ、じゃあレーゲンちゃん。その、なんでハダ……いや、服を来てないのかな？」
「ん～とね、《白式》っていうお姉ちゃんがこの格好だと一夏お兄ちゃんが喜ぶって」

お　前　か　！

何を小さい子に吹き込みやがったんだアイツは。

見た目２０代っぽいけど、中身（頭）はまだ子供なんだぞ！

「ね～ね～、一夏お兄ちゃ～ん」

「ど、どうしたのかな？」

可愛らしく小首を傾げながら、目の前のおっきな幼女が身を乗り出しながら話掛けてくる。

おぉっ、揺れてる揺れてる……って待て。

見た目がアレでも流石に幼女に欲情するとかイカンだろうが！

「どうして一夏お兄ちゃんのここ、さっきよりおっきくなってるの？」

「え〝っ……いや、これは、その…」

幼女にそういう知識を熱弁する１５歳男子。

……うん、犯罪だな、コレ。

どうごまかしたものかと考えていたのがマズかった。

だって、小さい子って興味があったらなんでも触ってみたり口に入れてみたりとかするんだもん。

「えい♪」

ほらね……って、そんなとこ握っちゃらめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！？

「ハッ……って、アレ？　なんで皆いるの？」
「なんでって、アンタ覚えて無いの？」
呆れた調子で鈴が言うがなんの事やら……って、あ。
「…っそうだ！　ラウラは！？　《シュヴァルツェア・レーゲン》は！？」
「私も、コイツも無事だ。……その、お前が助けてくれたおかげでな」
「そっか…」
途中から記憶が無いけど、ラウラがそう言うんなら大丈夫だったんだろう。
よかったよかった。
「そ～いや、なんで俺、医務室のベットで寝てんの？」
「全く覚えて無いのか？」
「そう言われてもなぁ…」
「では一夏さん、思い出せる範囲でいいので少しずつ思い出してみて下さいな」
え～と、ラウラと模擬戦やって、んで勝ったと思ったら《シュヴァルツェア・レーゲン》がなんかおかしな事になって、で、そこで束さんと協力してもらって原因を根絶やしにして、その後ラウラを分

身使った囮作戦で救出して……え～と、で、その後のコアを引き抜（シュヴァルツェア・レーゲン）いて、で……。

「ア、レ？……なんで生きてんの？　俺」

「それについては私の方から説明しよう」

「千冬姉？」

「まず、お前自身についてだが、確かにあと数秒で完全に死ぬところだった。何せ、心臓に穴を開けられるどころか、九割以上ビームで消滅してしまっていたからな」

げ、マジでか。

なんか思ってたより内容がヘビーなんだが…。

……しかし、消滅か。

道理で穴が大きいと思ったわ。

「だが、お前は死ななかった。何故だか解るか？」

「や、解るかって、解んないから聞いてるんじゃ……別に俺自身に再生能力とかがあったワケじゃないんだろ？　マンガじゃあるまいし」

「そうだ、お前自身はどこにでもいる人間だよ。だが、お前のもっているＩＳは違う」

え…、どういう事？

《白式・真打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《質量操作》だって、型がないと……ていうか、生き物を復元するのには向いてないから某ロボットみたいにコアさえ無事なら搭乗者すら復元するみたいな事は無理だって束さんに聞いてたんだが…。

分身だって、分身の方の鎧はともかく、分身の中身の方はその場限りっていう条件だから俺の身体の複製品が作れるのであって、生命活動を続けていくのは無理だって。

「《白式・影打》の正体は擬装された《白騎士》だったのさ」

は？　《白騎士》？

え、ちょっ…、どういう事だよソレ。

聞いて無いんですけど。

「《白騎士》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）に救われたんだよ、お前は。《生体復元》と言ってな、文字通り、搭乗者がどんな傷を負ってもソレを瞬時に復元する能力だ」

なんつー能力だよ、ソレ。

チート過ぎるわ。

アレか、《白騎士》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）って、エクスカリバーの鞘みたいなもんか？

アレって持ってる限りどんな傷も瞬時に治すとかなんとかって…。

「《白式・真打》の《質量操作》と違って《生体復元》は搭乗者の肉体しか復元出来ないが、やってる事はだいたい同じだ。型……この場合はＤＮＡだな、そのＤＮＡを型にして拡張領域（バスロット）内に蔵した質量を搭乗者の血肉に変化させ、それを搭乗者に張り付ける」

「え～と、クローンみたいな？」

「いや、厳密には違う。予め採取したＤＮＡを利用して血肉を培養するワケじゃない。あくまでＤＮＡは型だ。その型のデータを元に内蔵した質量を変化させて新造する。つまりクローンの様に本物と同い年の臓器を造るのではなく、本物より若い臓器を新造するという能力だ」

うわぁ…、ますますチートに磨きが掛かって……いや、まぁ、ソレに助けられたワケなんだが。
束さんが無理って言ってたのって、ホントになんでもかんでも造るのがって意味で、一芸特化すれば肉体の復元も出来るって事だったのか。
なるほど、身体の方は《白式・影打》……に、擬装していた《白騎士》が治して、機体の方は《白式・真打》が治す、と。
それならヤツらが攻めて来ても安心だな。
油断は禁物だけど。

「一つ問題があってな……と、いってもまぁ、たいした問題じゃないんだが、コアが４６７機分しか無いというのは行方不明だった《白騎士》を含まない数なんだ。あの量産機がある以上、数なんて数えてもしょうがないんだが、一応、各国がその所在を認知してる個数が４６７、そこにお前の真打のを足して４６８……だったハズなんだが《白騎士》の所在がはっきりしたところで、今度はそうなると本来《白式》になるハズだったコアはどこに行ったのか、という問題が出て来る」

あ～、確かに。
《白式・影打》が《白式》の改造機じゃなくて《白騎士》を擬装した機体だったんならそうなるよな。

「さ・ら・に、だ。束のヤツがまたとんでもないものを置いて行ってな」
「とんでもないもの？」
「枕元のソレだ」

言われて、枕の横に置いてある物体に初めて気付いた。
ってか、コレ、色が違うだけで…。

「……黒い、《白式・真打》？」
「《黒式》、というそうだ。なんでも、《白式・真打》の予備機らしい。あくまで予備だから《白式・真打》の様な特殊機能は無いらしいが、本当のところはどうか解らん。例によって束とお前しか触れられないみたいだからな」
「なんで、コレを…？」

「あぁ、今回の件で想定外の負荷が掛かり過ぎたらしい。だから調整が済むまで代わりにソレを使えとの事だ。……はぁ、全く、アイツといい、お前といい、どうしてこう厄介事を引き寄せるんだ？　お前らは」

面目ない……って待て。
束さんはともかく、俺は自分から厄介事なんか起こした覚えなんて無いぞ。
トラブルが向こうから勝手に寄って来るだけで俺自身がトラブルを起こしてるワケじゃないって。

「あぁ、それと。《白式・真打》の方の調整もそれほど時間はかからないから《黒式》を使う暇も無いかも、と言ってたな。実際あと三日後には臨海学校があるが、それまでに間に合わせるつもりらしい」

うわぁ、ホントにすぐだな。
まぁ、使う様な事態にならないのが1番なんだが。

……アレ？　なんだか眠たく……。

「フ…、アレだけの事があったんだ。疲れも出るさ」
「そうだぞ、一夏」
「僕達の事は気にしなくていいからさ、寝てた方がいいんじゃないかな？」
「そうよ、身体が治ったからって体力まで元通りってワケじゃないみたいなんだし」
「ですわね」

そういうもんか。
じゃあ、おやすみ。

…あぁ、そういえば聞き忘れてた事があったけど……まぁ、いっか。

第４２話「知らない天井だ……なんて言うとでも思ったか！」（後書き）

次回、臨海学校編スタート

募集の方もゴスペルさん出るまでは続けてるのでアイデアが浮かんだ人はじゃんじゃん応募して下さいね

第４３話「その背中はまだ遠く」（前書き）

はい、今回からは臨海学校編ですが、今回はバスの中でダベってるだけで、戦闘も回想シーンのみですし

第４３話「その背中はまだ遠く」

「……」
「ん？　車酔いでもしたか？」
「いや、そうじゃないんだが……」

ぐったりとバスのシートに背を預ける俺に箒が問うが、別に酔ったワケじゃない。
単に疲れが貯まってるだけだ。
因みバスの座席は窓側に俺、隣が箒、俺の真後ろが鈴でその隣がセシリア、俺の前がラウラでその隣はシャルロット、という座席割り。

……なにこの包囲網。

籤引きでこうなるとかどんな確率だよ！
いや、まぁ、いいんだけどさ。

「一夏、ジュースいる？」
「あ～、じゃあ貰うわ」

後から身を乗り出してきた鈴がペチペチと俺の頬にペットボトルを当てながら聞いてくるのでとりあえず受け取っとこう。
下手に断ったらそのままペットボトルで殴られかねん。

鈴の横のセシリアは本を読んでるみたいだが、よく酔わないな。
俺なら確実に酔う自信があるぞ。

「そういやラウラってこういうの初めてだっけ？」

「あぁ。バス自体は任務で乗った事はあるが、旅行でとなると初めてになるな」

妙に静かだから寝てるのかと思って声を掛けたんだが、どうやらラウラは窓の外の景色に見入っていたらしい。

「日本の景色って新鮮だなぁ～。学園みたいに最新技術が揃った場所とかだったらだいたいどこも似てくるんだけど、やっぱりこういうところに来たら違う国にきたんだなぁ～って思うよ」

「そういうもんか？」

「一夏も外国に行ってみたら解るよ」

「ふ～ん」

まぁ、旅行目的じゃなくても外人さんには珍しい景色ではあるかな……って、言ってもまぁ、さっきシャルロットが言った通り、俺も外国に行けば周りの景色が新鮮に感じるんだろうけど。

「なぁ、セシリア。なんの本読んでんだ？」

「これですか？　これはですね、一夏さんの《白式・真打》との交戦内容や結果を纏めたレポートですわ」

「えっ、いいのか？　そんなの持ち出して」

「えぇ、構いません。それなりの成果が出てるならまだしも、これならいつものお茶会の時の会話の方がよっぽど進んでますもの」

「そうなのか？」

「えぇ、いくら計器の性能が上とはいえ、管制室のモニターごしに見ているだけでは解らない事の方が多いですから」

「へぇ～」

そういうもんか。

まぁ、監視カメラも完璧じゃないっていうか、二体も機体が動き回

れば片方が勝手にカメラの死角作っちゃったりするしな。

「ちょっと見せてもらってもいいか？」

「えぇ」

「一夏、お前車の中で下向いたりしたら酔うんじゃなかったか？」

「そうよ、別にレポートは逃げやしないんだから宿舎に着いてからにしたら？」

「まぁまぁ、それも小さい頃の話だし」

流石ダブル幼なじみ、そんな細かいところまでよく覚えてたな。

でもまぁ、それも小さい頃の話なんだし、まぁ大丈夫だろ。

え～と、何々……。

はぁ？　唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）なんて再現出来るワケないから無理だぁ？

おいおい、作ってみたけどダメでしたじゃなくて作る前から諦めましたって…。

分身できなくても《ブルー・ティアーズ》自体に自律行動できる様なプログラムつくって操縦者の負担を減らすとかあるだろ。

もしかしてセシリアと模擬戦した時に分身の方にも喋らせたのがマズかったのか？

アレ、確かに喋ったの俺だけど、分身自体はちょっとは指示出したけど、殆ど自律行動だったぞ。

指示だって武装の選択と発射のタイミング、後はまぁ、挟み撃ちだとか、簡単な指示しかしてないんだからそれぐらい出来そうなんだがなぁ…。

あぁ、そういえば、結局日本もイメージインタフェースを用いた特

殊兵器として《零落白夜》を再現する研究が行き詰まってるらしい。
なんでも、《白式》を製作した研究所が《白式・真打》の研究に殆どの人員を割いてるから研究が一行に進まないんだとか。
いや、人のせいにすんな……ってか、簪さんの《打鉄弐式》もその煽りを喰らって結局簪さん一人で完成させざるをえなかったらしいけど、ちゃんと人員の割り振りしろよ。

ア、レ？　……ちょっとマズいかも……。

「おい一夏、顔が青いぞ」
「あ～悪ぃ、酔ってきたっぽいわ」
「も～、だから言わんこっちゃない」
「そうだぞ、ただでさえ昨日の訓練はハードだったのに…」

そう、俺が最初っから疲れていた理由がそれだ。

ラウラとの模擬戦の翌日、つまり臨海学校三日前はまぁ、完治してるけど念の為って事で休まされた。
因みに俺が寝ている間に《白騎士》のデータを取ろうとしたどっかの研究者が《白式・影打》にまた戻った《白騎士》に触ろうとした途端電撃を受けて気絶。
いきなり横で悲鳴が聞こえたから跳び起きてみれば床に倒れた研究者の姿が……うん、寝覚めは最悪だったね。
この尊い犠牲で……いや、死んで無いけど、《白式・影打》も《白式・真打》と同等のセキュリティレベルまで引き上げられてた事が判明した。
まぁ、《生体復元》なんてやらかすんだからそれぐらいのセキュリティは当たり前っちゃ当たり前か。

んでその翌日、つまり臨海学校二日前は午後から授業に参加……
したらいきなり小テストがががががが……。
私聞いて無い！
結果は勿論下から一番だった。
マズい、この調子だと落第するかもしれん。

で、最後に昨日なんだが、この日はまぁ、いつも通りだったさ。
放課後までは。
放課後、恒例のいつものメンバーの誰かと模擬戦による訓練……
が始まるハズだったのに、アリーナには既に先客が……しかも、
誰かと思えばその先客は《打鉄》を纏った千冬姉だった。

「今日は私が稽古をつけてやる」

な　ん　だ　と　？

ちょっ、ちょちょちょちょ～と待て、千冬姉が相手？
いやいやいやいや、現役退いてても世界最強のブリュンヒルデ様相
手にどうやって戦えと？

「どうした？　勝てる自信が無いのか？」

ありません。

「なんなら《黒式》を使っても構わんぞ？」

いや、構わんぞって……《白式・真打》使っても勝てる気しない
んですが。

……えぇいっ！　こうなりゃヤケだ！

と、まぁ俺としては善戦したつもりだったんだけど見事に惨敗しましたとさ。

んで、心身ともにズタボロのまま今日という日を迎えたワケだ。

怪我の方は《白騎士》に切り替えた《白式・影打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《生体復元》で完治させたけど、メンタル的な面までは治してくれないらしい。

まぁ、当たり前っちゃ当たり前か。

因みに、《白騎士》モードの時は《零落白夜》が使えない代わりに《生体復元》が使える様になって、《白式・影打》モードの時は逆に《生体復元》が使えない代わりに《零落白夜》が使える様になるらしい。

あくまで《白騎士》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）は《生体復元》で、《白式・影打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）は《零落白夜》だから、どっちかのモードで二つも唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）は使えないのだとか。

まぁ、そりゃそうか。

ただでさえ切り替えられる時点でアレなのにいっぺんに二つも使えたら流石にズルいよな。

あと、千冬姉から直々に《白騎士》モードの使用禁止令が出てるので基本的に俺が《白騎士》を使用する事はない。

千冬姉の許可が下りるか《白式・影打》が俺の怪我の具合を見て勝手に《白騎士》にでもならない限りはずっと《白式・影打》のままだ。

え？　昨日の模擬戦がどんな感じだったかって？

いや、俺としてはあんまり思い出したく無いんだが……。

～回想開始～

「変身！」

『音声認識、完了。指定搭乗者によるシステムの起動を確認、《黒式》、起動』

「ほぉ…、見た目は黒くなった《白式・真打》といったところか」

千冬姉の言う通り、コイツの外見は黒くなった以外は《白式・真打》そのものだ。

と言ってもまぁ、二次移行（セカンド・シフト）前の、だが。

武装リストを呼び出し、一通り眺めて見たんだが、一つも《白式・真打》と共通の武装が無いな、コレ。

『《スコーピオン》、起動（アクティブ）』

音声と共にハンドガンぐらいの大きさの銃が現れ、構える。

セミオートで連射可能なマシンガンである《スコーピオン》は確かに威力こそ高くないものの、様子見には十分だろう。

ガンッ！　キンッ！ガンッ！　キンッ！　ガンッ！　キンッ！　ガンッ！

ガンッ！　キンッ！　ガンッ！　キンッ！　ガンッ！　キンッ！

……さて、何の音だと思う？

ガンッ！　はこっちが発砲した音。

で、問題は　キンッ！　の方。

…コレ、千冬姉が近接ブレードで弾斬った音なんだぜ？
いくら撃っても片っ端から斬り伏せられるんですけど！
どうなってんだよ！
ホントに《打鉄》か、アレ。

『《ケルベロス》、起動（アクティブ）』

ガガガガガガガガッ！！！
キンキンキンキンキンキンキンキン！！！

嘘ぉん。
ガトリングも効かんとか、化け物か！

「どうした？　もう終わりか？　……なら、こちらから行くぞ！」
「くっ…」

教員用にチューニングしてあるとは聞いてたが、いくらなんでも早過ぎる！

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「ぐぅっ……あぁっ！？」
『《デストロイヤー》、起動（アクティブ）』

咄嗟に召喚した《デストロイヤー》で受けたものの、威力を殺し切れずに吹き飛ばされた。
危ねぇ…、まともに喰らってたら一気にシールドエネルギーを持っていかれたかもしれん。

「くっ、このぉっ！」

我武者羅に振り払った《デストロイヤー》はあっさりとかわされ……って、待て。
今動きがおかしくなかったか？

※ネタで命中率を下げてみました（笑）
　by束

おいいいいいいいっ！
何やってんだアンタ！
氷川さんだって頑張ってるんだぞ！

「ちいっ…なら！」
『《クナイガン》・アックスモード、起動（アクティブ）』
「アヴァランチブレイク！」
「ふんっ！」
「なっ……ガハッ！？」

くそっ、今度は蹴りかよ。
アヴァランチブレイクも普通に近接ブレードで防がれるし……やっぱ技量が違いすぎるか。
ちぃっ、勝てる気がしねぇ…。

『《デンガッシャー》・ガンモード、起動（アクティブ）』
「これならっ」
「残念だったな」
「ガハッ！」

ビームもダメなのかよ…。
銃口見りゃ射線が解るって、それじゃあいくら撃ったって銃なんか効かないじゃねぇか！

……マズいな。
もうかなりシールドエネルギーが減ってきてる。

このままじゃ、負ける。

そりゃ、千冬姉は世界最強だけどさ、いくら実力差があるからって、一撃も喰らわせずに負けるなんて納得出来るワケ無いだろうが！

『《キングラウザー》、起動（アクティブ）。専用カードキーを挿入してください』
「はぁぁぁぁぁっ」
「ふんっ」
『スペード１０』

斬り掛かってかわされるのも計算の内。
千冬姉が回避動作をとった隙にカードキーを挿入していく。

「ふっ」
「くぁっ……」
『スペードＪ、スペードＱ』
（さっきからなんなんだ、あのカードは。何故何も発動しない？）

…マズい、千冬姉に感づかれたか？

『スペードＫ、スペードＡ』
『ロイヤルストレートフラッシュ』
「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！」
「！？　このエネルギー量は！」

膨大なエネルギーを纏った《キングラウザー》を振りかぶり、飛び

掛かる。
そして……。

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

黄金に輝くエネルギー刃が千冬姉に襲い掛かった。
振り下ろされた《キングラウザー》のエネルギー刃が地面を斬り付けた瞬間、アリーナに敷かれた大量の土が舞い上がる。

「やったか…？」
「今のは、私でも危なかったぞ。当たっていればの話だがな」
「なっ！？」

爆風の中から飛び出して来た千冬姉は一気に俺との距離を詰めて、

「寝てろ」

近接ブレードを振り下ろす。
脳天に炸裂した近接ブレードの威力は俺の意識を刈り取るのに十分な威力だった。

～回想終了～

…と、まぁ、そんな感じでボッコボコにされてしまったのでした。

めでたし　めでたし。
って、めでたかねぇよ！

第４３話「その背中はまだ遠く」（後書き）

Q. 千冬姉強過ぎじゃね？

A. だって千冬姉なんだもん

第４４話「逃げる男、追う女」（前書き）

臨海学校到着後のお話です

第４４話「逃げる男、追う女」

「…ふぅ」

先に断っておくが、賢者モードに突入した溜息ではない。
いつものメンバー……だけでなく、学園中の皆からの逃亡を終えて一息着いただけである。

だって皆大胆過ぎるというか、まぁ、寮生活で同年代の少女らのあられもない姿には流石に見慣れてはきたんだが……いや、なにが悲しくてそういうのに見慣れなきゃならんのだ。
…まぁともかく、だらし無く着崩した姿に見慣れて耐性がついたかと思ってた俺が甘かった。
着崩すどころか、ちゃんと着ているのにこの破壊力。
うん、正直水着というものをナメてたわ。
学園指定のスクール水着ではなく自前の水着でもいいっていうのはまぁ、本分が特殊環境下での機動テストとはいっても、やはり皆まだまだ年頃の少女だからと配慮した結果なんだろう。

しかし、だ。

俺にとってそれは非常に困った事で……、いや、まぁ、眼福っちゃ眼福なんだけどね？
こう、ボンッ、キュッ、ボンッ、だろうが、ペターン、ストーン、ペターン、だろうが関係無く、露出多めの美少女達がビーチに溢れてる中に混じるってのは無理だ。
そんな環境にいたらマジで俺の《雪片弐型》が《零落白夜》を……
…いや、そんな格好でいつも通りの…否、いつも以上にスキンシッ

プが過激になったりなんかしたら、《雪羅》が荷電粒子砲を発射してしまうかもしれん。

それはマズい。

いや、社会的にどうとかのレベル通り越して人としてどうなんだろ。

てか、立場上、そんな事にでもなって「女性によく飛び付く」みたいな印象でも持たれたりなんかしたらそれこそいつぞやの”スカウト”で綺麗なお姉さんを送り込んでくる組織や国家が出てくるかもしれん。

知らぬ間に既成事実なんか作られでもしたらと思うとゾッとする。

「参ったな……ホント」

「それはこっちの台詞だ」

ゲッ…、ラウラ!?

おいおい、ＩＳまで使って追って来たっていうのかよ!

「全く、部屋に行ってもいないと思ったら、こんな所にいたのか」

「いや、その…男一人であの中に混じるのはどうも目に毒っつうか…」

「むぅ…しかしだな、私だってせっかくこの日の為に水着を…」

そう言うラウラの水着はヒラヒラの着いた黒のビキニで、なんというか、ヒラヒラが着いてるのにも関わらず少々際どい気もしなくもない。

でも…、

「うん、そうだな…可愛いと思うぞ」

「そっ、そうか！　可愛いか！」

素材が良いからか、それでもラウラによく似合っていて可愛いらしかった。
俺が素直にそう伝えると、ラウラは嬉しそうに顔を赤らめて……
うん、普段そんな表情なんかしないせいで余計に可愛いらしく見えるんだが、今の内に…。

抜き足　差し足　忍び足　っと。

「ふぅ、なんとか撒いたか」
「なんとか撒いたか、じゃないわよ」

んげ、こんどは鈴か。

「アンタねぇ、せっかくこの私が部屋まで誘いに行ってやったってのに、あまつさえ逃げ出すってどういう事よ」
「いや…その、な？」

ずいっと詰め寄る鈴もまた、ラウラと同じで水着の上からＩＳ纏ってるから、その……いつもより露出が多いワケでして。
あまり豊かじゃない鈴でもこう、来るものがあるというか……。

「その、何よ？」
「いや、似合ってるなと思って。その水着」
「そっ、そう？　フフン、そりゃあ、私が直々に選んで…」

うん、似合ってるのはホントだけど、説明長くなりそうだから今の内にトンズラさせてもらうとしよう。

「ここに居たんだ、一夏」
「！？」

なっ、いつの間に後を！？

「シャ…、シャルロット、さん？」
「うん、どうしたのかな？　一夏」

ヤ　バ　イ　！

顔は笑顔だけどすっごい怒ってますよ、シャルロットさん。
誰だ！　シャルロットを怒らせたヤツは！　……って、俺か。

シャルロットもまた水着着てＩＳ纏ってるワケなんだが、パレオって言うんだっけ？　腰に布巻いてるからその分ラウラや鈴よりは露出は控え目だ。
だが、パレオのスリットから覗く太腿のラインがまたなんとも…。

「一夏のエッチ」
「ぐぁ」

むう、凝視し過ぎたか。
しかしホントに見事な……いや、上半身もそうなんだけどさ。

「そ…、その、ね？」

「？」
「水着、新しく買ったヤツなんだけど、変じゃないかな？」
「変なもんか。…うん、似合ってるぞ」
「そ、そっか……よかった」

うんうん、ホントに似合ってる。
似合ってるよ。
大事な事なので二度言いました。
と、いうわけでさようなら～。

「捜しましたわよ、一夏さん」
「せっ…、セシリア！？」

えぇいっ、なんでさっきから逃げても逃げても……って、そうか、ハイパーセンサーがあったか。

「…全く、何も逃げなくてもよろしいじゃありませんか」
「あ、あはははは…」

呆れた様子で言うセシリアに、俺は苦笑いするしかなかった。
いや、まぁ、皆は純粋に遊びたいだけなんだろうけど、やっぱり見てたら俺の《雪片弐型》が…、ね。
全く反応しないのもどうかと思うけど、ちょっとコレ反応し過ぎじゃなかろうか？
いや、まぁ、周りの環境が環境だからってのもあるんだろうけど。

「聞いてますの？　一夏さん」
「えっ…、あぁ、うん」

ずいっ、とセシリアが詰め寄った途端にむ、胸が揺れ……って、
コラ！
そういうとこばっかし見てるから悶々とする羽目になるんだろうが！

「一夏さん？」
「え…、あ、あははは」

俺の視線に気付いたセシリアが、じとーっとした目で睨んでくる。
いや、俺だって健全な男子だし……。

「まっ、まぁ、気に入っていただけたのでしたら選んだ甲斐があったというものですわ！」
「あ、あぁ、うん。似合ってるよ」
「～♪」

《ブルー・ティアーズ》のイメージも有ってか、セシリアに青い水着ってのはよく似合ってると思う。
専用機持ちの中で一番スタイルのいいセシリアがビキニってのもまた……って、だ～か～ら～、そういう思考から離れろっての。
うん、とりあえずまたトンズラさせて貰うとしよう。
これ以上ここにいたら《雪片弐型》が暴走して勝手に《零落白夜》を発動させてしまうかもしれん。

「さ…、流石に箒は専用機もって無いんだから大丈夫だろ」
「私がどうかしたか？」
「！？」

な　ん　だ　と　！？

ばっ、馬鹿な！　何故こんな所に…。

「何となく、ここに一夏がいるような気がしたから来てみたのだが……どうやら私の勘も馬鹿にしたものじゃないらしいな」

「お前の直感はハイパーセンサーか何かか…」

てつをさんの「…嫌な予感がする」並の精度とか、どうなってんだよお前の勘は。

アレか？　俺と模擬戦する時もやたら上手くかわすのもその直感の仕業か？

「…で、何でお前は皆から逃げ回っているんだ？」

「知ってたのかよ」

「あぁ、私を含め、いつものメンバーで探していたからな」

そうだったのか…。

「…で、何故お前はそうも必死に逃げ回っている？」

「いや、その…、だな」

「なんだ？　後ろめたい事でも有るのか？」

「後ろめたいっていうか…」

「えぇいっ、焦れったい！　いいから言え！」

なんかもうオチが見えて来たっぽいんだが…。

えぇいっ、ままよ！

「その……だな、一応、俺も寮生活で見慣れたつもりだったんだが

……その、やっぱりそういう空間にいると目に毒なワケでして…」
「…全く、お前というヤツは」
呆れた様子で言いながら、ゆっくりと箒が歩み寄って来る。
ま、マズい。
このままだとまた鉄拳制裁を……って、ありゃ？　逃げ場が無い、だと？
「で…、では、こうすればお前は私を女として意識してくれるのか？」
「ちょっ、ほ、箒！？」
俺の腕に絡む様に、箒の身体が密着する。
ちょっ、そ、そんなことされたら胸の感触がモロに……。
……って、何だアレ？
「「へ？」」
キランッ、と、まだ昼なのに空に星が輝いたかと思うと、何だか見覚えのあるニンジンロケットが……。

第４４話「逃げる男、追う女」（後書き）

二人に迫る謎のニンジンの正体やいかに！？

……って、どう考えても束さんなんだけどね

第４５話「親友の企み」（前書き）

寝落ちはいつもの事として（オイ
起きたのが昼過ぎってのは流石にどうなんだろ、と思う今日この頃

早寝早起きって大事だね

第４５話「親友の企み」

バサッバサッ…と、鳥の羽ばたく音が聞こえる。
あの子は誰よりも空を愛していたのに、こんなにも自由に空を翔ける事が出来る翼を手に入れたのに、今はもう、私達は私達の意志で羽ばたく事が出来なくなってしまった。
あぁ…どうして。
どうしてこんな事になってしまったのだろう。

より高く、より早く、と、願った事が間違いだったのだろうか？
解らない。
何も、解らない。
ただ一つ、解る事があるとするならば、それはこれからも飛ばされ続けるという事だけ。
かのイカロスの様に、墜落する事すら許されず、不様に飛ばされ続ける。
私の、あの子の意志すら無視し、銀の翼は羽ばたき続ける。

「「へ？」」

見覚えの有り過ぎるニンジン型のロケット。
読め過ぎて逆にどうしたらいいのか解らない次の展開。
どうしてこう、束さんは普段の行動が全く読めないのに、読めたら読めたでどうする事も出来ないと自覚させてくれるのだろうか。
なんて、考えてる間に小さな粒でしかなかった星はだんだんと大きくなっていた。
キーンっと、音速で飛行するニンジンなんて非現実的な物体は確実に俺達の方に向かって来ている。
そういえばニンジンって結構いい具合に流線型だったよな。
成る程、そう考えるとあのデザインチョイスはともかく、形状的には理に適っていたワケだ。
流石天才、やる事が違う。
バーニアから吹く火が、ちゃんとニンジンの葉っぱに見える様に緑色の光を燈していたりと、何だかこだわる方向性を間違っている様な気がするが、言うだけ無駄だろう。
だって束さんだもん。

「どわっ！？」
「きゃっ！？」

ズドーンと音を立てて絶壁に食い込んだ巨大ニンジン。
デカいとは思っていたが、これは思っていたより大きい。
多分、５ｍぐらいはあるんじゃなかろうか。

急に目の前に急降下してきたその巨大ニンジンに圧倒されている間に、プシュッと炭酸飲料の封を開けた様な音が響き、パカッと割れたニンジンから出て来たのは、やっぱり束さんだった。

「やっほ～！　箒ちゃん、いっくん、久しぶり～」
「あ、はい。お久しぶりです」

「……」

いつもの調子で話掛ける束さんとは対象的に、いろいろと本人の処理が間に合わない自体に襲われたせいか、未だ箒はほうけた顔をして束さんを見ている事しか出来なかった。

ダメだぞ箒。

相手が束さんじゃあ、考えたら負けぐらいのつもりでいないと頭が持たなくなるだけじゃないか。

「およ？……およよよよ？」

ほら、今だって電波を……って違うか。

「あ～、もしかして今から〝お楽しみ〟だったの？　箒ちゃん」

「ち、ちちちち違います！」

「そっ、そうですよ！」

「え！？　じゃあ私も入れて3（ピー）！！？　さっすがいっくん、やる事がちがうね！」

違うのはアンタの思考だ！

ってか伏せ字になってねぇ！

「…い、一夏が望むのなら私は……」

ちょっ、箒さん！？　何を口走って……って、束さんの仕業か！

そのパタパタ動いてるウサ耳から電波出すのやめて下さい！

「～♪　箒ちゃんもウサ耳になれ～♪」

「ふにゃふにゃ～」

束さんスト～ップ！
箒もしっかり～！

ガラッ

「およ？」
「ふにゃ～」
「へ？」

何だ？　今何かが崩れる様な音がした様な……？
ほら、今だってピシピシって…。

「あ～れ～……」
「…って束さん！？」

ちょっ、ま、何で崖が崩れ……いや、それより束さんが！
……って、アレ？
何で着水した音が聞こえないんだ？

『はっはっはっ、こんな事もあろうかとってね、転移装置は常備していたのだよ！　いっくん。じゃ、先に宿舎で待ってるね～』

え？　嘘…。
かなり前に嘘で《白式・真打》が転送で送られて来たって千冬姉達に説明したのに、ホントにあったんだ、転移装置…。
……うん、なんでもありだね、この人。

「はっ！？　……い、一夏！　私は一体…？　いや、それより姉さ

んは？」
「いや、なんかそこの崖から落ちたっぽかったんだけど、転移して先に宿舎に行ってるってさ」
「……」

再び呆然とする箒。
まぁ、正気に戻ったからよしとしよう。

「それにしても、どうして急に崖崩れなんか…」
「あ～、ホラ、ピラミッドってさ、積んである石が均等な大きさになってるだろ？」
「？　それが？」
「いや、石を均等な大きさにするのに、ちょうどいい大きさの所で杭を打つんだよ、何箇所かな。で、その杭を打った点と点を結んだ線で石が割れるんだってさ」
「そうなのか」

たしか、そんな感じで作ってたと思う。
絶壁の端っこにあんな勢いで突っ込んだらなぁ…。

ずっと、ずっと飛び続けている。
いつもとは比べものにならないスピード。

いくら飛ぶのが好きとはいえ、いつものこの子なら到底出せない様な速度で飛び続ける。

それもそのハズ。

だって私も、この子の意志すら無視して飛び続けるこの翼は、この子を象る鎧は、いつもの私達とは全然違う姿に変わってしまったのだから。

フルメイル……どころか、もはや人型すらしていない、完全に鳥の姿。

鏡を見たワケじゃないけど、なんとなくそうだって解った。

捕われた私はただ、この子のコアを抱いてうずくまることしか出来ない。

だって私達はもう、搭乗者と機体のコアなんかじゃなくて、この翼にとって単に食べられて腹に収まった餌でしかないのだから。

職員会議も順調に終え、千冬は宛がわれた部屋の畳に腰を下ろした。

今頃彼女の弟も、いつもの取り巻きと戯れているのだろうかと思うと自然と笑みが零れる。

仕方の無い事とはいえ、こんな環境に放り込んでしまったせいで肩身の狭い思いをさせてしまってはいるが、なんとか話相手には恵まれている様なのでなによりである。

…まぁ、その話相手達が全員弟に恋心を抱いているのはどうしたものかと思うのだが。

彼女ら個人が弟をどう思うのかも、弟が彼女らの事をどう思うのかも、まぁ、個人の勝手だ。

自分でそう思っているクセに、千冬本人がどうも納得出来なかった様だが。

仮に千冬が納得しようがしまいが、弟が誰と添い遂げるのかは、世界的に意味があり過ぎた。

まず、弟の隣に立つ者の母国が一人目の男性操縦者を手に入れられる事。

そして現状、その弟が開発者の親友の弟だからという理由でＩＳを動かせる様になった疑いがある以上、第二第三の男性操縦者の自然発生はまず見込め無い。

なら、どうするか。

開発者である篠ノ之束が身内贔屓で織斑一夏を男性操縦者にしたというのなら、その身内を増やせばいい。

つまり、彼の息子なら或はと、各国は考えたのである。

その為に、各国は愚かにも開発した新装備の試用より彼女らが彼と過ごす時間を優先的に取らせたりと、ここに来て彼の取り巻きの国々のＩＳ開発は停滞しつつあった。

米国の様に、自分達こそ最強でなければと、本国の技術の粋を集めて《白式・真打》を越える機体を作ろうとしている方が随分とまともに思える。

その努力も、天才である親友によって踏みにじられるのかと思うと、少々心苦しくはあったが、千冬にはどうする事も出来ない。
なにせ、彼女の親友は自重というものを知らない。
勿論、言葉の意味ぐらいは知っているだろうが、だからといって彼女にとってその他大勢でしか無い者共に、彼女がそんな事をしてやる事は未来永劫無いだろう。

この間のドイツのＶＴシステムの件だって、彼女にしてはよく我慢した方だ。
土地ごと研究施設や資料は破壊しても、関係の無い周りには一切被害を出さなかったし、研究員にも死者は出ていない。
その後、研究員達にどういった処分が下されたのかは知らないが、研究に関する記憶は発見された時には既に完全に”破壊”されていたので、またＶＴシステムが世に出たとしてもそれは随分先の話になるだろう。
あの要人達についても同様、護送中に襲撃にあってシステムに関する記憶を完全に消されてしまった以上、システムの製作は一から始めなければならないのだから。

「…で、なんの用だ？」
「ありゃ？　バレてた？」
「あぁ、バレバレだ」
「あちゃ～、さっすがちーちゃんだね～」

音も無く、いつの間にか部屋に侵入し自分の後に立っていた親友に、千冬は特に驚いた様子も無く、平然と声を掛けた。
件の親友、束も特に悪びれた様子もなく、相変わらずおどけた調子で応える。

「で、ホントに何の用なんだ？」
「うん♪　箒ちゃんに誕生日プレゼント持って来たんだ♪」
「はぁ……全く、お前というヤツは…。まぁ、アイツは”お前の妹”だからな。護身用に持っておくに越した事は無いかもしれんが…」
「でしょでしょ！」
「だが、一夏までＩＳを持つ必要があったのか？　…いや、箒と同じで護身用に持つ必要があったとして、何も持ってる事を公にする必要は無かったんじゃないのか？」

そう問うた千冬に、束は相変わらず笑顔で応える。
だが、千冬には解った。
その笑顔が、いつもと違う事に。

「…ねぇ、ちーちゃん。どうして私がＩＳを作ったのか、ちーちゃんは解る？」
「どうして、ＩＳを作ったのか、か…」

その笑顔は、いつものおどけたものでは無く、どこか無理をしている様な、そんな笑顔で彼女は告げた。

「いっくんは、”気付いた”よ」
「！？　な、に…？」

驚愕の標準を浮かべる千冬をよそに、束は話を続ける。

「あと数年以内に、本当の意味でＩＳが必要になる日が必ず来る。だからＩＳは必要だったんだよ」
「お前、何を言って…」
「ホントは、私一人でケリを着けるつもりだったんだけどね、いっ

くんにも同じ質問したら、いっくんは一発で当てちゃったよ。しかも、自分にも何か手伝わせてくれって。いっくん、あのまま放っておいたら、何だか一人でつっ走って行きそうで、なんだか危なっかしくてさ」

「…それで、一夏に」

「そう、《白式・真打》を作って渡したの。でも、それだけじゃ足りない。だから《白式》を改造して《白騎士》のコアを埋め込んで、《白式・影打》としていっくんの手に渡る様に仕向けたの」

「まさか、最初の襲撃事件は…」

「そう、私が事前にすり替えて置いた《白式・影打》をワザと盗ませて、いっくんとぶつける様に仕向けたんだよ。そこから先の代表候補生との模擬戦も、学園生活だってそう。いっくんと両方の《白式》の経験値を稼ぐ為に、私がそう仕向けた」

「…何故、と聞いても、応えるつもりも無いんだろう？」

「うん」

「ＩＳが本当に必要になる理由もか？」

「それも、ちーちゃんには自力で気付いて欲しいな」

「……そうか」

相変わらず、親友が何を考えて行動していたのか、さっぱり解らなかった。

だが、一連の出来事も、それなりに理由があっての事だということが解っただけ収穫があったと思いたい。

理由が理由とはいえ、親友の自分ではなく弟の方を頼ったのは少々癪ではあったが、絶対話さないと言われたワケではないのだから、せいぜい答を当てて見せるとしよう。

「じゃあね、ちーちゃん。私はもう一回箒ちゃんの所に行って来るから」
「…あぁ、頼むから”あまり”周りに迷惑を掛けてくれるなよ？」
「じゃあね～♪」

またいつもの調子でおどけた親友を見送りながら、苦笑を漏らす。
どうやらまた一波乱ある様だが、それを面白いと思えてしまう辺り、随分自分もアイツに毒されてきたらしい、と千冬は思った。

「さて、休んでいる場合じゃないな」

もう今頃、親友が騒動を起こしてしまっているだろうが、放っておくと山田先生辺りが半泣きになりそうだし。
と、千冬は部屋を出て歩き出した。

第４５話「親友の企み」（後書き）

銀の翼は、徐々に、そして確実に彼を目指して飛んで来る

第４６話「紅に咲き誇る椿の華」（前書き）

すんません、また恒例の寝落ちです

しかも今回は原作の機体登場回なのでオリ機体みたいにその場のでっちあげも出来ないので原作三刊読みながら書いたのもあって更新がお昼まで延びてしまいました。

ホント申し訳ない

第４６話「紅に咲き誇る椿の華」

羽ばたく銀の怪鳥は、遂に元居た大陸から離れ、大海原を横断する。
陽光を反射して輝くその肢体はまるで鏡の様に辺り一面の景色を写し続け、その写し出した景色に自身を追う者の姿が写った。
追い縋る者の速度は怪鳥の速度に到底追いつけないほどノロマに感じられたが、それは追跡者が遅かったワケでは無い。
寧ろ、ＩＳという括りで比べたのなら十分高速機と言っても差し支えの無い速度を叩き出してさえいる。

ただ、相手が悪かったのだ。

翼を得たところで人は人であり、飛ぶ事が本職である鳥に飛行速度で並ぼうとしたのがそもそもの間違い。
そして何より、ＩＳがＩＳを超越した者に勝てる道理など無かったのだ。

一旦目的地に向かうのを止め、追跡者に向き直る。
怪鳥にしてみれば追跡者との戯れもちょっとした寄り道の様なもの。
でも所詮はただの寄り道、当然長居をするつもりも無い。

『■■■■』

鳴き声なのか、それとも未知の言語なのか、判断のしようのない咆哮が空に響いた次の瞬間、咆哮と同時に羽ばたかれた翼から放たれた無数の光の槍達は追跡者に容赦無く襲い掛かる。
幸い、追跡者……であるＩＳの搭乗者はシールドバリヤーに守られて無事だったものの、機体に蓄積されたダメージは戦闘不能に陥る

には十分なほどの大威力だった。
たった一度の攻撃で軍用機を沈めて見せた銀の怪鳥は、悠々とその場を飛び去って行く。
悔しそうに自身を見つめる追跡者の視線を意に介さずに。

さて、自由時間も一旦終わり、本題の特殊環境下でのＩＳの使用訓練になったわけなんだが、本来、専用機持ちはここで自国の開発した新装備の性能評価を各自行って、あとの専用機無し組は歩行や飛行等の基本動作の訓練を行うのが通例である。
が、何故かイギリスも中国もドイツもフランスも、新装備の準備は間に合わなかったらしい。
シャルロットの《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》は第二世代機だから、フランスが新装備を用意してないのも何となく解らなくもない。
ワザワザ新装備を用意せずとも第二世代最後発機故に既存の、蓄積された技術は既に新装備と銘打った品を用意する必要がないほど武装が充実しているからだ。
でも、他の三人の国がどこも新装備の用意が間に合わなかったというのはどういう事なのだろうか。

もしかして、俺のせい？

俺の《白式・真打》の研究に人員を割き過ぎて新装備開発どころじゃなくなったのか？
いやいや、《白式・影打》の開発メーカーじゃあるまいし、研究に夢中になり過ぎて《打鉄弐式》の開発が疎かになったみたいな事を国家単位でやってたりとかしないよな？

まぁ、理由はともかく、俺ら専用機持ち組も一般生徒と同じ訓練内容を消化していく事になったんだが、海面スレスレを飛行する訓練はまぁいいとして、殆どＰＩＣを切った状態での歩行訓練が意外と難しいのだ。

普段はちゃんとＰＩＣが働いてるからそうは感じないのだが、その機能に頼らずに歩行するとなると俺の場合かなりデカいウイングスラスターが後ろに延びてるせいで調整をミスるとすぐに仰向けに倒れそうになったりして危なっかしい。
一応コレ、ＰＩＣが機能不全に陥った時の為の訓練らしいんだが、いざやってみるとＩＳがどれだけＰＩＣに頼っているのかがよく解る。

セシリアの《ブルー・ティアーズ》のビットは普段スカート状になってくっついてるし、鈴の《甲龍》の衝撃砲は肩の上に浮かんでて更にそれほど前後に出っ張ってるワケでも無い。
シャルロットの《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》も後ろにウイングスラスターはついてるが、それほど大きいってワケでも無い。
けど、ラウラの《シュヴァルツェア・レーゲン》って、あれだけデカいレールガンが右だけにあるんだから俺よりバランス悪そうなのに、よくバランス崩さずに歩けるよな～。

飛行訓練の方は前にやった急降下して地上１０ｃｍで急停止するのと同じで飛行機能を上手く使い熟す為の訓練なんだとか。
まぁ、これに関してはどっちの《白式》でも実戦で飛び回ってたので思ったほど苦労はしなかった。
けど、実戦で慣らしたせいか、全速力で飛ぼうとして無駄にエネルギーを消費するクセがついてしまっている事が千冬姉のお説教で発覚、強引にスラスターの推力で飛ぶのでは無く、もっと風に乗れとの事。
いや、燕とかじゃないんだから……なんて思ったりもしたんだが、口には出さないでおこうとしたら端末チョップを喰らった。
紙で出来た出席簿よりも外装を金属が構成している情報端末が硬いのは考えるまでも無い事で、しかも端末に《零落白夜》でも込めたのかと言わんばかりのこの威力。
シールドバリヤーちゃんと仕事しろ。

もう銀の怪鳥の進行を邪魔する者は何処にも存在しない。
照り付ける太陽になんら意味は無く、吹きすさぶ風は味方ですらあった。

ふと、下を見れば自身と同じくその身を銀に輝かせる魚群が目に映る。

こちらは人工、あちらは天然物という違いはあれど同じ銀。
しばらく同一方向に進み続けたが、やがて魚群が進行方向を変えたので、また一羽で飛んで行く。
ただひたすら、目標を目指して。

専用機持ちを手本に訓練に励め、と千冬姉のお達しがあったせいで名前の順でやる訓練のハズなのに、専用機持ちだからとやたらと先にやらされる。
あ、俺　織斑だからどの道最初の方か。
同じ様に”お”から始まる苗字だけど、俺とセシリアとだったら、オリムラとオルコットだから”リ”より”ル”の方が順番的に前になるもんな。

「あ～、緊張した」
「フフフ、まぁ私達はＰＩＣが殆ど機能しない事態を想定した訓練は本国で何度か経験してますからなんてことありませんが、一夏さんは初めてですものね」
「あぁ、だがこういった訓練こそ疎かにすると後で痛い目に合うからな。一夏、ＰＩＣの効きがおかしいと感じたらＰＩＣがまだ効いている内に出来るだけ高度を低くする様に心がけろ。多少の落下の

衝撃はなんとかなったとしても、高度が高過ぎる時に完全に機能しなくなったりでもしたら骨どころか命まで持って行かれるぞ」

「マジか」

「あったり前でしょ、そんなの。流石に絶対防御が効いてれば命ぐらいは助かるだろうけどさ、それでもラウラの言う通り骨を…しかも全身骨折でもしてみなさいよ。操縦者生命が断たれるぐらいで済めばいいけど、ずっと寝たきりだってありえるんだからね」

「そうだよ、一夏。だからちゃんと訓練しとかないと」

「お、おう…」

一応、俺には《白騎士》の《生体復元》があるからそこまで大事にはならないだろうが、それはあくまで特殊なケースである事がよく解る。

皆は生きていても大怪我をすればそこでおしまい、俺みたいに死ななければ大丈夫なんて事は普通有り得ないのだ。

「次、篠ノ之」

「はい」

おっ、次は箒の番か。

『ちょっと待ったぁ～！』

何処からともなく聞こえるこの声、束さんか！？

声の主を探して皆キョロキョロと辺りを見回す。

俺もバッと、空を見渡すが何処にもいつものニンジンロケットは飛んで無い。

アレ？　じゃあ何処に…。

『こっちだよ～♪』

ドォォォンっと音を立てて砂浜の砂が舞い上がる。
舞い上がった地中から現れたそれはまるでドリルの様に高速回転して地中を突き進んで来たニンジンだった。

「「「「「……」」」」」

俺も、箒を含むいつものメンバーも、クラスの皆や他のクラスの娘達も、教員の方々や千冬姉ですら、地中から砂浜から巨大ニンジンが飛び出すという非常識にただただ呆然とするしか無かった。
ってか、なんでもアリだな、そのニンジン。

「やっほ～♪　箒ちゃん、また会ったね～」

呆然とする回りをよそに巨大ニンジンから飛び出した束さんはトコトコと箒の元に歩きだし、

「ハッピーバースデー箒ちゃん！」
「へ？　あ、あぁ、はい」
「箒ちゃんの為に誕生日プレゼント”作って”来たんだよ！　はい、上に注目！」
「え……！？」

事態の展開の早さに混乱する箒（を代表とする皆）にお構いなくホイホイ話を進めていく束さん。
その束さんが指し示した上空には真っ赤なＩＳが……ってＩＳ！！？

「じゃじゃ～ん♪　箒ちゃん専用第四世代機、《紅椿》だよ～ん♪」
「！？」
「第四、世代、だと…」

「嘘…」
「そんな！　だってまだどこも第三世代がやっとなのにもう！？」
「あ、有り得ませんわ…。で、でも一夏さんの《白式・真打》だって…」

口に出す言葉こそ違えど、皆一様に動揺を隠せ無いでいた。
それもそのハズ、シャルロットの言う通り、まだどこの国も第三世代機の開発がやっとなのに、こんなにもあっさりと、しかも各国が威信を掛けて第三世代を製作している中で誕生日プレゼントとしてポンっと第四世代機なんか出て来てしまったのだ。
こんな馬鹿みたいな話は無い。
でも、幸いというか、いつものメンバーに関しては《白式・真打》なんていう非常識に既に相対していたのでそこまで動揺は酷くないみたいである。
しかし、各国が第三世代機開発を行っている中ではっきりと第四世代と言われてしまうとどうしてもそんな馬鹿なと言いたくもなるだろう。

俺だって多分束さんの事だからいつか箒用に機体を用意するんじゃないかって思ってはいたけど、まさか第四世代だとは思って無かったし。

「本当はもっと前に完成してたんだけどね、二次移行（セカンド・シフト）しちゃった《白式・真打》も自力で私が第四世代用に考えてた展開装甲作っちゃったからさ、そっちのデータも参考にして更にグレードアップしたんだよ！」

いや、そもそもグレードアップする前の《紅椿》を俺らは知らんのですが。
ってか、回りの皆さんの置いてけ放りっぷりがすごい事になってき

たな。

「ささっ、箒ちゃん！　フィッティングを始めるよ」
「え、あ、はい…」

いつもなら束さんがなにかする度に束さんの行動に激昂するハズの箒も、完全に勢いに飲まれ、フラフラと《紅椿》に向かって行ってしまった。

「あ、そうだいっくん」
「はい？」

こ、今度は俺か！？

「真打、治ったから《黒式》と交換してね」
「は、はい。…あ、《黒式》ってどうなるんですか？」
「ん～？　いろいろやってみたい事があるからね。それまでお預けだよ～」

《白式・真打》が戻って来たのはいいんだけど、一回しか使ってないのに《黒式》を返すのもなぁ……まぁ、束さんがそう言うなら仕方無いか。

「はいっ、フィッティングしゅーりょー♪　じゃあ早速テストいってみよ～！」

いつの間にか作業を終えてた束さんが空を指差すとそこにはまたあのショッカーライダーが五体宙を舞っていた。
……アレ、一体全部で何体あるんだ？

「じゃあ箒ちゃん、あいつらやっつけちゃって！　武器の説明はこっちでするから」
「は、はい！」

箒も箒でなんだか嬉しそうで……まぁ、専用機持ちだらけのメンバーの中に一人だけ専用機無しだったから、羨ましいかったのかもしれん。
口に出して言ってるのは聞いた事ないけど、箒は束さんを嫌っ……いや、その、苦手意識みたいなものがあったみたいだし、そのせいかＩＳも好きでやってるワケじゃないって雰囲気だったと思ったんだが……、こうやって素直に受け取って使おうとしている辺り、なんだかんだで束さんの事もＩＳの事も本気で嫌って無い様に見えるなぁ。
それとも、俺が知らないだけで受け入れる気になる様なエピソードでもあったのだろうか？

「んじゃ、早速いくよ～！　まず、右の《雨月》からいってみようか。その刀は打突に合わせて連続でエネルギー刃を発射する武器だよ～」

そう言われ、箒がさっそく突き刺す様に打突を放つと、それに合わせていくつもの光弾が現れ、次の瞬間その光弾が一機のショッカーライダーを蜂の巣にしてしまった。
おおっ、と俺を含めた回りが感嘆の声を上げるが、１番驚いてるのは実際に使ってみた箒だった。

「んじゃ、次いってみよ～！　今度は左の《空裂》いってみよっか。そっちのは斬撃に合わせて帯状のエネルギーをぶつける武器だよ。じゃ、残りのヤツらもそれで一気にカタしちゃってね♪」
「はぁっ！」

横一文字に振るわれた《空裂》から発生したエネルギー刃が一気に残り四体のショッカーライダーを両断する。
撃墜されたショッカーライダー達のコアはいつの間にか束さんの手におさまっており、ついでにショッカーライダーの残骸もどこにも無い。

「うんうん♪　いいよいいよ箒ちゃん♪　じゃあ次ので最終テストといこうか！」
「たたたたた、大変です織斑先生！　実は侵にゅ……むぐぅ」

すっかり気を良くした束さんに水を差す様に山田先生が駆けて来た。
千冬姉が慌てて口を塞いだみたいだけど、今侵入者がって言おうとしましたよね？
そんな千冬姉と山田先生の様子を束さんはただニコニコと笑いながら見ていた。

え？　まさか、最終テストって……。

第４６話「紅に咲き誇る椿の華」（後書き）

ついに迫る銀の翼、向かえ撃つは白き仮面の騎士と専用機で鎧う乙女達

ついに決戦！

第４７話「銀が奏でる福音」（前書き）

ま、またしても昼投稿…
大丈夫か？　自分

まぁ、今回は《紅椿》が出オチにならない様に見せ場を用意するよう配慮しながら書いたので少々てこずりました

次回、決着！

明日は朝に投稿出来るといいなぁ……

第４７話「銀が奏でる福音」

風を切って羽ばたく銀の翼は陽光を反射して煌めく。
何度羽ばたいたのか、いくら時を費やしたのか、そんなものを数える事に意味は無く、ただ己が敵を目指して突き進む。

既に腹に収まった女も機体のコアの意識すら消え失せた。
ただこの身を突き動かすのは機体を侵食した第三の存在たる自分。
侵食したこの機体も、追跡者の機体も、驚異という程の存在には成り得ない。
だが、この機体のコアが記憶していたアイツだけは違う、アレの存在を許すワケにはいかない。
アレが完成してしまえば、我々は……。

「な…」
「なんなのよ！　アレ！？」
「…鳥、の様ですわね」
「くっ…、まずい！　教官、皆の避難を！」「既にやっている！」

突然上空に現れた銀に輝く怪鳥。

おいおい…、アレ、翼長３０m越えてるんじゃないのか？
ラウラの時のＶＴシステムの時もそうだけど、コイツはそれ以上に異常だ。
アレは明らかにＩＳの形じゃない。
フルメイルだったとしてもワザワザ人型から掛け離れる必要なんか無い。
いや、中身が人間である以上、人でないものとして振る舞うのにかなり無理が生じるハズなのに、なんであんなに滑らかに……いや、そもそも単純な飛行ですら人間には無い機能だからそれで操作に苦戦する人が多いのに、一体どうなってるっていうんだ!?

「…アレが、最終テストの？」
「うん、そうだよ……って言いたいところなんだけど…参ったな、アレ、思ったより育っちゃってる。よっぽど相性がよかったんだろうな…」
「あの…、束さん？　何か知ってるんですか？」

明らかに何か知ってる様な……いや、そもそも束さんが《紅椿》用の対戦相手に用意したんだっけ？

「いっくん、アレが”アイツら”だよ」
「！？　アレが……」
「一体何の話を…」

箒が何か言った様な気がするが、そんなのは後だ。
今はただ、目の前のアイツを……。

「変し「ちょっと待った」…へ？」
「真打の《セイリングジャンプ》じゃアイツに追い付け無いよ。だからまず影打でダメージを与えてからにしないと」「わかりました

！　来ぉいっ！！　《白式・影打》！！！」

呼び出し（コール）に応え、光と共に瞬時に装着された《白式・影打》は展開直後にウイングスラスターを最大出力で噴かせ、文字通り目標に飛び掛かった。

「なっ、お、おい、一夏！　待て！」

勝手に話を進めて怪鳥に飛び掛かる一夏を、慌てて箒が追い掛け、他のメンバーも自身の機体を瞬時に装着して箒に続く。

「はぁぁぁぁっ！」

『■■■■■■■■■！！！』

「うおっ！？」

気合い一閃、放たれた斬撃はあっさりとかわされ、逆にその巨大な翼から発生した強風による逆襲を喰らってしまう。

「一夏、どいて！……そんな！？　《龍咆》が…って、きゃぁぁぁぁぁ！？」

「鈴！！？」

《甲龍》が放った衝撃砲ですら難無くかわして見せた銀の怪鳥は、急降下の勢いを乗せたその翼で鈴の胴に強烈な一撃を喰らわせ、海面に叩き着けた。

「斬撃や衝撃に生じる風に乗ってかわしているのでしょうけど、これなら！」

『！？……！！？』

そう言って放った《ブルー・ティアーズ》の一斉掃射を受け、怯んだ隙ところに更に海中から投擲された《甲龍》の《双天牙月》が頭部に炸裂する。

『■■■！！？』

「今だっ、シャルロット！」

「解ってる！」

反撃に出ようとした怪鳥の動きをＡＩＣの結界が封じ、

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

『■■■■■■！！？』

トドメとばかりに放たれたパイルバンカーによって怪鳥の頭部は木っ端みじんに砕け、

「はぁっ！　せぁっ！！」

Ｖの字を描く様に振るわれた《空裂》から延びる帯状の斬撃が左右の翼を切り落とし、

「墜ちろぉぉぉぉぉっ！！！」

突き出した《雨月》から放たれたエネルギーの散弾が怪鳥を海へと叩き落とした。

墜落した怪鳥が海面に突き刺さった途端、水柱が立ち、舞い上がった海水が雨の様に辺りに降り注ぐ。

「…やったか？」

「今のでやられてなかったら困るわよ」

「ですわね」

「それにしても……《紅椿》、だっけ？　その機体。一夏の機体もそうだけど、やっぱり篠ノ之博士が作ったからかな？」

「あぁ、《白式・真打》と同じく展開装甲を実装していると聞いたが……そんなものが無くても十分現行機の中でもトップクラスの機体だな、ソイツは」

そう、まだ《紅椿》は第四世代機の本領、展開装甲を使用してすらいない。

そんなものに頼る必要すら無いと言わんばかりにただの一般生徒でしかなかった箒が代表候補生らの中に混じって連携を組んでも問題無い程の操作性を見せた上にあの二刀の攻撃力。

これで更に展開装甲まで使用する様にでもなれば、もはや誰にも止められ無いのではないかと錯覚させる圧倒的性能。

勿論、箒自身にもそれなりの素養があっただろうが、操作時間に圧倒的時間差がある代表候補生と肩を並べる事が出来る程の高性能機ともなればどの国でも欲しがるだろう。

一方、件の箒はというと、さっきから感触を確かめる様にアームの手を開いては握ってを繰り返している。本人は平常心を保っているつもりなのだろうが口元の緩みを隠し切れていなかった。

「それにしても今回一夏っていいとこ無しだったわね～♪　よけら

れた上にぶっ飛ばされちゃってさ」
「なっ、それはお前だって…」
「私はいいの、私は。ちゃんとその後攻撃当てたんだし」
「テメェ…」
「何よぉ」
「まぁまぁ、二人とも…」
「「箒は黙ってろ（て）！」」

プチッ

思わず鈴と言い合いになったところで箒が止めに入ったんだが、二人して箒に怒鳴ってしまった。
途端、にこやかだった箒の表情が冷淡になり、俺達が気付く頃には既に《雨月》と《空裂》を振りかぶって…、

「「ひいっ…」」

※しばらくお待ち下さい

「全く、お前達ときたら、まだトドメを刺せたか確認も取って無いのに何をグダグタと…」
「「すいませんでした」」

ガミガミと叱り着ける箒、そして空中土下座で平謝りする俺と鈴。
うぅっ、箒こわい…。

「箒の言う通りだぞ、お前ら。まだ作戦行動中なのだから注意を怠るな」
「そ、そうですわ」
「うんうん」

偉そげにラウラが言うが箒の発する怒気に怯えているのか、足元が震えてて全然威厳が無い。
セシリアとシャルロットなんか露骨に震えてるし。

「ま…まぁ、待て箒。こうしてる間に逃げられでもしたら大変だし、取り敢えずアイツを回収しにいこうぜ」
「ふむ、それもそうか。続きは帰ってからにするとしよう」

まだ続けるつもりですか！　箒さん！？

「と、取り敢えず手分けして……！？」
「なっ」

怪鳥が墜落した場所から再び水柱が聳え立ち、巨大な卵が現れ……
…って卵？

「ね、ねぇ…アレって」
「卵…、だよな？」
「やっぱそう思う？」
「あぁ」

現れた卵は怪鳥と同じくその殻を銀に輝かせ、空中で静止している。
それにしてもデカい。
あの銀の怪鳥ほどでないにしろ卵にしては随分大きい。
多分、装備を外せばＩＳでもすっぽり入るんじゃなかろうか？

ピシッ、と音を立てて卵のてっぺんが割れる。
内側から殻を突き破った銀のクチバシは撃墜前と比べると随分小さい。
続いて両手が、翼が殻を次々と突き破っていき、その全身が顕になっていく。
鳥の頭を模した兜、両手足には鷲や鷹を思わせる鋭い鍵爪、それでいて身の丈の数倍はあろうかという大きな翼をもつ鳥人。
俺の《白式・影打》だって装着時は羽の生えた人っぽいけど、目の前のヤツはやっぱりどこか違う。
最初に見た時の完全な鳥形と比べれば随分ＩＳらしくなったみたいだけど、なんかこう、エジプトとかの神話にいそうな鳥の頭をした神みたいだ。

「Ｌａ～♪」

歌う様に搭乗者の口から発せられた声はどこか機械的で、機体の方が無理矢理搭乗者の口を使って喋っている様で…、

「Ｌａ～♪」

再び紡いだ旋律と共に翼をはためかせた途端、銀に輝く無数の光弾が…。

「くっ…、退避！」

ラウラの指示も間に合わず、いや、そもそもアレを出された時点で手遅れだったのかもしれない。

「ぐうっ」
「きゃぁぁぁぁ！？」
「あぁっ！」

放たれた無数の光弾は一斉に俺達に襲い掛かり、まずラウラとセシリアとシャルロットが、

「く…あぁぁぁぁぁぁっ」
「あぁぁぁぁっ」
「きゃあぁぁぁぁっ」

そして俺と箒と鈴が、次々と海面に叩き落とされていく。

「くそっ…、みんな無事か！？」
「私自身はともかく、もう《ブルー・ティアーズ》のビットは使い物になりませんわ」
「くっ、ＡＩＣの制御機関がやられた」
「僕の方は今のので全体的にマズいかも…」
「私も《双天牙月》はまだ一本残ってるけど、《龍咆》がもうお釈迦ね」

ちぃっ、代表候補生組は殆ど全滅かよ！？

「箒は？」
「私は……いや、大丈夫だ。喰らう直前に展開装甲が起動して攻撃を打ち消したみたいだ」
「…打ち消した？」

もしかして、《紅椿》にも《零落白夜》が？

『ふふん♪　さっそく展開装甲が大活躍したみたいだね』
「姉さん!?」
「束さん、これは一体？」
『ん～とね、ホラ、《白式》作ってた研究所があるでしょ？　失敗したみたいだけど、そこでイメージインタフェースを利用した特殊兵器として《零落白夜》を再現する研究所がされてたらしくってさ。私が代わりに完成させて《紅椿》に詰んでみたんだ♪』
え？　じゃあ…。
『うん、《紅椿》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）は別にあるんだよ』
相変わらずすごいな、この人の作るものは…。
しかもコレ、《白式・真打》の常時展開型とちがってさっきみたいに喰らう直前に察知してその時だけ発動させるタイプか。
随分省エネ仕様だな。
《白式・真打》もこうだったらエネルギー残量に気を配らなくてもいいのに…。
「Ｌａ～♪」
「またかっ…、箒！　お前はアイツを！　俺は皆の方に」
「あぁ、解った！」
そう言って、別れる様に光弾をかわしながら俺は皆を一ヶ所にまとめて《雪羅》から《零落白夜》のシールドを発生させて攻撃を防ぎ、箒は自身に降り懸かる攻撃を展開装甲から発せられる《零落白夜》で防ぎながら瞬時加速（イグニッション・ブースト）を用いて急接近し、
「はぁぁぁぁぁぁっ！！！」

《空裂》を乱れ斬りさせる様に振るい、帯状のエネルギーで檻を形成して動きを封じ、更に突き出した《雨月》から発せられた赤い光弾によって確実にダメージを与えていく。
よし、これなら…！

「Ｌａ～♪」
「行かせるとでも思ったか？」

敵わないと判断したのか、銀の鳥人は箒から逃れる様に飛翔し、今度は俺達の方向に向かってくる。
箒も展開装甲を使って《紅椿》を高速移動形態に変形させて追い縋るが、まだ鳥人の方が速い。
鳥人が羽ばたく度に光弾が形成され、放たれる光弾から皆を守れば守るほどものすごい勢いで《白式・影打》のシールドエネルギーが削られていく。

「箒！」
「解っている！　くそっ、さっきから何度も当ててるのにっ…」

しまいには箒の攻撃にお構いなしに俺達を執拗に攻撃しだして……
くっそ、ヤバい！　もうエネルギーが！

「一夏！　僕たちの事はいいから！」
「そっ、そうですわ！　このままだと一夏さんの方が…」
「っでも！」
「いいから！　ラウラ！　ワイヤーカッター、まだ使える？」
「あぁ！　しっかり捕まってろよ」

そう言ってラウラはワイヤーカッターでセシリアとシャルロットを固定し、最後の力で離脱を計る。

「最後の一本、これでも喰らいなさい！」

そして目眩しに投擲した《双天牙月》を鳥人がかわした隙に離脱するラウラ達を捕まえ、更に自分の推力を付加して加速し、海中に逃げる。

「しっかりやんなさいよ！　一夏！」

「あぁ！」

多少のダメージじゃ効かないっていうんなら！

「変身！！」

影打から真打に切り替え、更にポーズをとる。

少し変身ポーズに似た構えを取った瞬間、右手の指が輝き出す。

そう、輝く指はＪサイン！

「《ジャンボフォーメーション》、発動！！！」

第４７話「銀が奏でる福音」（後書き）

遂に巨人がその姿を顕した。

次回、巨人　対　鳥人

第４８話「巨人の手」（前書き）

なんとか、朝に間に合いました！

あと、一応　キーワードに「残酷な映写あり」とか「Ｒ１５」とか表記しているので一々断らなくてもいい様な気もしますが、後半グロ注意です

第４８話「巨人の手」

砂浜に佇む四人の視線は膝まで海中に浸かった白亜の巨人に釘付けだった。
前々から非常識の塊みたいな機体だとは思っていたが、流石にここまでやるとは思っていい無かったのとその巨体にただただ圧倒されるばかりである。

「な、な…」
「嘘…」
「おぉっ、アレは仮面ライダーＪのジャンボフォーメーション！！」
「えっと、……誰？」
「なっ、知らないのか！？」
「ゴメン、私平成から入った口だから」
「私はその…、あまりそういう番組は見ていませんので…」

一旦海中に退避した代表候補生組はそのまま海中を潜航して砂浜を目指し、漸く砂浜に到着した途端にコレである。
一体自分達が潜航している内に何があったのやらと思考を巡らそうとして……あまりにもあんまりな出来事に上手く思考が巡らない。
というか、限りなく停止していると言ってもいい。
約一名、やたらと生き生きとしてはいるが。

「これだから平成しか知らないヤツらは……。いいか？　仮面ライダーＪというのはだな……

「オォォォォォォォォッ！！！」

両腕に《スーパー大切断》の刃を形成させ、勢いよく奮うが、刃を奮った時に生じる風にのってヒラリ、ヒラリとかわされ、斬撃は掠りもしない。

スピードが足りないのならと、展開装甲を起動させて高速移動形態に装甲をスライドさせ、更に《バイタルチャージ》でオーバードライブ状態になった上で続けるものの、やはり結果は同じだった。

「ちぃっ」

焦れた様に《ボルティックシューター》を乱射するが、これも掠りもしない。

「っははははは！　どうした？　図体がでかくなっただけか？」

そんな俺を馬鹿にする銀の鳥人。

お～お～、こりゃまた随分と饒舌になってきたじゃねぇか。

だがな…。

「《リボルケイン》！」

「馬鹿め！　そんなものを振り回したって「馬鹿はお前だ、ヴァ～カ！」…何ぃ？」

「お前、忘れてるだろ？」
「？　何を言って……！？」

ば～か、気付くのが遅いっつうの。
俺だってデカくなったぐらいでお前みたいなヤツを捕まえられるなんて思ってねぇよ。

「誰がっ、篠ノ之空気かぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「がぁぁぁぁ！！？」

いや、誰もそこまで言っては……って、うわ～、メッタ斬りかよ。

「一夏っ！」
「応っ！」

作戦の内容はこうだ。
まず、ワザと俺が《ジャンボフォーメーション》でデカくなった上で大振りで雑な攻撃を繰り返して相手を油断させる。
巨大化してる分、どうしても俺に目がいってしまうので少し離れた所に移動した箒の事がだんだん思考から外れてくるので巨大化は陽動にはもってこいだった。

次にいい具合に相手が油断したところで《紅椿》の展開装甲を高速移動形態に変形させて控えていた箒がただの飛行ですら現行機を上回る飛行速度を叩き出す高速移動形態に更に瞬時加速（イグニッション・ブースト）を上乗せした超加速で相手に急接近してあの邪魔くさい翼を切り落とす。

そして…、

「捕まえた！」

「しまっ…くそっ、放せ！」

握り潰すかの様に相手を掴み、握る圧力と《零落白夜》でシールドエネルギーを一気に削る。

人が取り込まれて無かったらそんな面倒な事せずにそのまま握り潰してもよかったんだが、流石に人間をぐちゃってやっちゃうのは精神衛生上よろしくない。

そこで更に《質量操作》……の、武装剥奪能力を応用してこちらからＩＳを侵食し、量的にギリギリだけど保存してある質量で元の機体、《シルバリオ・ゴスペル》を新造。

古い部品ごとヤツを機体から排出し、排出されたパーツごと握り潰した。

侵食中、必死に抵抗を続けていたようだが、頭以外がすっぽり握られている状態ではせいぜい鳥を模した兜のクチバシ部分で指を突くぐらいしか出来なかった上に、突かれたぐらいじゃなんのダメージにもなりやしない。

蚊に刺された程度……というほどで無いにしろ、たいしたダメージにはならないのだ。

……で、この時Ｊは大自然の力を…「あの、ラウラ？」　何だ？
コレからいいところなんだが」
「いや、もう終わっちゃったみたいよ？」
「何っ！？」

はい、お疲れ様でした～。

「いや～、一時はどうなる事かと思ったよ」
「ホントホント、私らの機体み～んなボロボロにされちゃったしね～」
「全くですわ。いくら賠償があるからといっても部品だってそうホイホイと作れるものではありませんのに」
「あぁ、全くだ。こっちはレールガンの方はともかく、今本国にもＡＩＣの主要機関の予備が無いせいで完全に元通りになるまで一ヶ月も掛かるそうだ」

口々に今回の事で愚痴る代表候補生達。
そう、彼女らの言う通り罰金を払われたからといってすぐに部品が作れるというワケではない為、しばらくは今日の様に授業も殆ど練習機と同じメニューのみになるだろう。
ちなみにそれぞれの損傷の具合はというと、

《ブルー・ティアーズ》がビームを発射する方の《ブルー・ティアーズ》が四機とも全壊、ミサイルの方も一機やられたので今使えるのはもう一機のミサイルの方の一機だけとなる。
あと本体の損傷率も四割に達してしまっているらしく、代表候補生メンバーの中では一番損傷の具合が酷い。

《甲龍》は《龍咆》が二機ともやられて全滅。
《双天牙月》については本国に予備があるので遅くとも臨海学校が終わる頃には届くとの事。
それで肝心の本体の損傷は二割とメンバー中一番本体の損傷率が低い。

《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》については流石は世界第三位のシェアを誇る機体のカスタム機というべきか、武装もすぐに取り寄せられるし本体の損傷も三割に達しているが《ラファール・リヴァイヴ》のパーツをそのまま交換して塗装してしまえば済むとの事。
ここら辺の対応のしやすさがやっぱ量産機の強みだよな。

《シュヴァルツェア・レーゲン》については本体の損傷率が三割とはいえ、ある程度は本国の姉妹機の予備パーツを取り寄せれば何とかなるので本体そのものについては割りとすぐ治るそうだが、ラウラも言ってた様にＡＩＣの主要機関のパーツを本国も切らしているのでその辺りは本国次第なのでいつ元通りになるのかは解らないらしい。

こうして上げてみると、改めて《零落白夜》による防御機能の有り

難さを実感できる。
《白式・真打》は《質量操作》による復元があるからあまり参考にならないが、今回の様にエネルギー兵器主体……というかエネルギー兵器しか無い機体相手なら《零落白夜》による防御は鉄壁のものとなるだろう。
現に俺の《白式・真打》と箒の《紅椿》は今回無傷である。
《白式・影打》の方だって損傷らしい損傷も無く、強いていうならエネルギーが底を着いたぐらいだろうか。

「いいわね～、アンタらの機体。エネルギー兵器系相手だったら無敵じゃない」
「いや、そうでも無いぞ？　《零落白夜》だって結構エネルギー食うし」
「それもエネルギー切れ起こす前に攻撃当ててしまえば済む話じゃない」

まぁ、確かに鈴の言う通りなんだが。
みんな避けるじゃん。
いや、まぁ、馬鹿みたいに立ち放ちなヤツもいないから当たり前ちゃっ当たり前なんだが。

「私の機体こそそういった機能が欲しいところなんですけど……まぁ、無い物ねだりをしても仕方がありませんわね」

あ～、《白式・真打》は《質量操作》でそういう機能を持った機関を作ったただけで唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）じゃないから厳密には《零落白夜》じゃないし、箒の《紅椿》のだって束さんが同じ様な機関を作っただけで結局《白式・真打》のも《紅椿》のも、名称を新しく考えるのが面倒だから俺と束さんが《零落白夜》って呼んでるだけだしなぁ。

それっぽい機能が使える機体は俺の回りに三機あるけど、ちゃんと唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）で《零落白夜》持ってるのは《白式・影打》だけなんだよな。

「僕からしてみればセシリアの《ブルー・ティアーズ》とか鈴の《龍咆》とかラウラのＡＩＣとか、イメージインターフェイスを用いた特殊兵器があるだけでも十分羨ましいけどね。高速切替（ラピッド・スイッチ）覚えたのだって、武装が有り触れたものしか無いからせめて先手を取れる様にする為だったし」

なるほど、マシンガンもショットガンも兵器としては有り触れてるから初見でだいたいどういう使い方するつもりなのかバレるもんな。まぁ、俺は解ったからってすぐに対応出来るほど頭の回転が速く無いんだが。

「…う、ううん」

「あ、一夏！　この人起きたみたいよ」

「あ…れ？　私は？」

おっ、起きたか。

取り敢えず機体の方の浄化を済ませて皆のいる砂浜まで運んで来たんだが、案外すぐ起きたな、この人。

「え～と、どこまで覚えてます？　ってか、自分の名前とかも解りますか？」

「私の名前はナターシャ・ファルスよ、織斑一夏君」

「え？　どうして俺の名前を…」

「どうしてって、この業界にいて貴方の名前を知らない人なんていないわよ」

「そうだよ一夏」
「そうなのか？」
「…アンタ、昔っから他人にどう見られてるかに関しては致命的に鈍感だったわね」

ハァ、とため息をつきながら言う鈴。
え、何？　なんで皆してため息なんかついてんの？

「！……そういえばあの子は！？」
「あ～、《シルバリオ・ゴスペル》の事ですか？　だったら束さ…いや、篠ノ之博士が今持ってますよ。多分、検査でもしてるんじゃないんですかね」
「…そう、篠ノ之博士が。まぁ、いいわ。……器さえあれば、貴様を殺すのには十分だからなぁ！！！」
「なっ！？　ぐぅっ……」

な、なんで急に首を…。

「貴様！　…！？」
「おっと、無駄だぞ？　貴様らがＩＳとやらを展開するより俺の攻撃の方がはやいからなぁ」

ナターシャさんの身体を乗っ取った何者かはさっきまでとは違う下卑た笑みを浮かべ、俺の首を絞めて無い方の手からビームの様なものを発して箒を威嚇する。
何者かの言う通り、確かに《紅椿》を展開しようとした箒よりもその行動は早かった。

…って、マズい。
意識が…。

だらりと力無く吊り上げられた織斑一夏の様子を満足そうに眺め、勝利を核心する。
だが、次の瞬間、

「!?　なっ…お前、まだ動け…」
「『俺』が、貴様らに対して何も備えていないとでも思ったのか？化け物」

再び顔を上げた『織斑一夏』は獰猛な笑みを浮かべ、自身の首を絞める腕からあっさりと抜け出す。

「起きろ、《白騎士》。今回はお前の方が適任だ」
『ですね』

「なっ…貴方は！　いえ、それよりもＩＳが喋って…」

混乱するセシリア達を無視して、『彼』は《白騎士》をその身に纏う。
ＩＳ自体、一応の自我はあるが会話が出来る程その自我が発達した個体はいままで確認されていない。
単に決まった文章を読み上げるだけならどのＩＳでも出来るが、短

いやり取りとはいえ、今のはちゃんとした会話だった。

《白騎士》の腕がナターシャの両腕を掴み、そのまま飛翔体制に入る。

「ちょっ、何処へ行くのよ、アンタ！」

「ちょっと子供には見せられない事をするんでな」

「ちょっ…アンタ何を…」

「阿保。そういう意味じゃねぇよ。〝処理〟をしに行くだけだ。じゃあな」

「な、待ちなさいよっ……って、行っちゃった」

言うだけ言って、彼は飛んで行ってしまった。

「私が追って「箒ちゃん箒ちゃん」…！？　ね、姉さん！？　いつからそこに！！？」

「ほらほら、そこの皆も『いっくん』の事、知りたいんでしょ？　なら集まって」

追い掛けようとした箒の真後ろにいつの間にかいた束が、箒に話掛けた。

しかも珍しい事に彼女にとってその他大勢でしか無い代表候補生達にまで声を掛けている。

この時点で、普段の箒なら違和感に気付いただろうが、残念ながら一夏の事で頭が一杯でその事に気付かなかった。

「《時計兎》、時間を巻き戻して」

「「「「「！？」」」」」

一瞬なんてものではない、文字通り光速で展開された束の機体に驚いたのもつかの間、少女らはバタバタとその場に倒れていった。
篠ノ之束専用機、《時計兎》。
その唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《時間操作》は文字通り対象の時間を操る能力である。
対象、つまり今倒れ伏している少女らの”記憶”を逆行させ、ナターシャに巣くう何者かの存在を忘却させたのだ。
いや、忘却などではない。
記憶の時間だけが現実の時間より遡ったせいでナターシャに何者かが巣くっていた事すら少女らは”知らない”のだ。
ＶＴシステムの研究者にやったように記憶を奪い、知らなかった事にする。
知らないのだから思い出す事も不可能。
既に簡易的に設けた管制室でその様子をモニターしていた千冬達からも記憶は奪ってあり、記憶も、データも完全に改竄したものだけが残された。
そして、少女達の記憶にも。

「ごめんね。まだ、箒ちゃん達が知るには早過ぎるから…」

寂しそうに笑い、飛んで行った彼の方に向かって飛び立っていった。

「くそっ、離せ！　離せ、この！」
「いいだろうここならちょうど人目に着かないからな。〝離して〟やるさ」
そう言って『彼』は嗤い、無造作にナターシャの胸を貫く。
「が！？」
「ふんっ」
そしておもむろに心臓を抜き取ってみせた。
「なっ、正気か貴様！？　そんな事をすればこの女は…」
「どうなるって言うんだ？」
「！？　なっ…馬鹿な！」
貫かれた傷口も塞がり、抜き取られた心臓すら新造された女の身体がただそこにあるだけ。
死に逝くものなど一人しかいない。
そう…。
「死ぬのは、お前だ」
「ぐきゃぁぁぁぁぁぁっ！？」
心臓ごと握り潰されたソレは、ついに滅んだ。
滅んだといっても、今日この場に現れた個体は、だが。
「終わったの？」

「あぁ、コイツも頼む」
「オッケー」

パァッ、と一瞬だけナターシャの身体が光る。
次に目覚めた時には暴走直前の記憶からのスタートになるだろう。

「それにしても…」
「？」
「何度も何度もいっくんの記憶を消してきたのに、何事も無かったかのように戦い続けられたのって、『いっくん』が記憶のバックアップになってたからだったんだね」
「あぁ、そうだ」
「どうして？」
「『俺』が、お前をほっとけるワケ無いだろう？」
「フフフ、やっぱり優しいんだね『いっくん』は」

第４８話「巨人の手」（後書き）

次回は感想件数＆お気に入り登録件数１００ｏｖｅｒ記念小説を掲載する予定です。

感想&お気に入り登録件数１００件ｏｖｅｒ記念番外編「…私、憑依系オリ主だったの？」

やっとちゃんと朝に投稿が…

今回の話は以前のゴールデンウイーク特別番外編が本編のサイドストーリーだったのと違って、本編とは全く関係無い没案晒しです

白式さんシリーズみたいに本編に組込める没案だったら組込んでもよかったんですが、無理そうだったので分けました

感想&お気に入り登録件数１００件ｏｖｅｒ記念番外編「…私、憑依系オリ主だったの。」

私の名前は斎藤香、二次創作ではお馴染みの憑依系のオリ主よ。
オリ主じゃなくてオリキャラかもしれないけど、そんな事はどうでもいいの。

これまたよくあるパターンで自称神（笑）から「君、マンガやアニメの世界に行ってみたくない？」ってスカウトがあったから、「じゃあ、今話題のインフィニット・ストラトスの世界に」ってリクエストしてこの世界に来たってワケ。
設定としては《打鉄》じゃない方の日本産ＩＳメーカーの社長の一人娘であり、テストパイロット。
会社名自体聞いた事無いから私をこの世界に捩込む為のオリジナルの会社なんだと思う。
で、そんな私（前）は新型の運用テスト中の事故で昏睡状態になってしまったらしい。
そこに私（今）が憑依したってワケ。

さて、私の身の上話なんてどうでもいいのよ。
肝心なのはここから。
私は昔っから自分が二次創作のオリ主になったらやってみたかった事が二つあったの。

まず一つ目、それは、「私が原作ヒロイン達を差し置いて主人公と結ばれる」というぶち壊しも甚だしい原作崩壊。
なんていうか、こう、女として生まれたからには並み居る美少女達を押し退けて自分がイケメンをゲットするっていうのがやってみたかったのよ。

フフフ、前世（？）では美少女でも不細工でも無いあまりパッとしない見た目だったけど、オリ主権限で容姿端麗、スタイル抜群の…
…原作での巨乳幼なじみ枠のヒロイン、篠ノ之箒以上の巨乳キャラよ。
いいわぁ、この胸の重み。
これが巨乳というものなのね。

で、昏睡から目覚めた（という事になっている）私は遅れに遅れてやって来た転入生として堂々とＩＳ学園に乗り込んだの。
まぁ、ホントは一組がよかったんだけど、時期が遅過ぎたせいで二組に転入って事になったんだけどそれは仕方ないわ。
でも、中国の代表候補生の鳳鈴音がこのクラスじゃなくて一組ってどういう事よ？
一組には既にフランスの代表候補生、シャルロット・デュノワとドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒが転入して来たせいで定員が一杯だからって聞いてたから私は二組に来たってのに。

えぇっ!?　更識簪も一組なの!!?
ちょっ、どういう事よ!
聞いて無いわよ、それ!
…マズい、マズいわ。
このままだと私の計画が、ヒロイン達が私といちゃつく織斑一夏を見てハンカチ噛んで「キーッ」って嫉妬させる私の計画が!

と、とにかく一組に乗り込まないと…。

「はい、箒。あーん」
「あ…、あーん。……い、一夏も」
「おう、あ～ん」

「はい、セシリア。あーん」
「あ～ん。い、一夏さん」
「あーん」

「はい、鈴。あーん」
「あ、あーん。い、一夏、ど、どう？　ちょっと味付け変えてみたんだけど？」
「あーん。ん、いいんじゃないか？」

「はい、シャル。あ～ん」
「あ、あ～ん。い、一夏も、はい！」
「おう、あーん」

「はい、ラウラ。あーん」
「あ、あーん。う、うむ！　流石は私の嫁だな！　さ、さぁ一夏も」
「ん、あーん」

「はい、簪。あ～ん」
「あ、あ～ん。……その、一夏も」
「おう、あーん」

……ナニコレ？
なん…、なのよ、この甘ったるい空気は！？
なに親鳥（織斑一夏）が雛に餌（ハーレムメンバー）やるみたいに皆して食べさせ合いっこしてんのよ！
な…、なんて羨ま（ｒｙ
えぇいっ！　先を越された！

「およ？　見ない顔だね？」

あ、のほほんさんだ。

「あ、あぁ。私ね、今日隣のクラスに転入してきた斎藤っていうんだけど……アレ、ナニ？」
「アレ？　…うん、アレはね、このクラスの名物、おりむーハーレムだよ～。でも、今日は少ない方かな」

そんな！？　もしかしてって思ってたけど、もうハーレムが完成していたなんて！
……は？　少ない？　アレで？

「今日は仕事が忙しいから来て無いみたいだけど、たっちゃん……あ、生徒会長さんね？　うん、後　織斑先生も山田先生も混じってる事もあるんだよ～」

おいいいいいいいいっ！！！
生徒会長はともかく教師二人は自重しろ！
特に千冬姉！　アンタ実の姉でしょ！？　なにハーレム入りしてんのよ！

「あとは～篠ノ之博士が来たり、よく知らない三人組が着たりとか…あぁ、なんか織斑先生そっくりな娘がその三人組にいた様な～」

えぇっ！！？

束さんだけじゃなくて、亡国機業（ファントム・タスク）なメンバーすら攻略済みだっていうの！？

そんな……どうなってんのよ。

私、こんな話知らない。

一体原作何刊の……ううん、そもそも此処って原作の世界じゃないんじゃないの？

くっ…、仕方ないわ。

流石にこれじゃあ私一人でヒロイン達を出し抜くなんて不可能みたいね。

なら、もう一つやってみたかった「ぼくのかんがえたかっこいい○○○」で無双するってので織斑一夏を叩きのめすしかないわね。

そうと決まれば早速情報収集よ！

「ね、ねぇ、織斑君のＩＳってどんな機体なの？」

「え～とね～、おりむ～の《白式》は～…」

結論から言うと、のほほんさんから聞いた《白式》のスペックは、私を絶望させるには十分過ぎてお釣りがくる程のものだった。

・《白式》は世界初の三次移行（サード・シフト）まで形態移行した機体

…うん、この時点で既にアレなんだけど。

ってか、なんなのよ三次移行（サード・シフト）って。

・両腕が《雪羅》

…まぁ、三次移行（サード・シフト）したんだからこれぐらい普通かな。

いや、三次移行（サード・シフト）自体、非常識なんだけど。

あと、二次移行（セカンド・シフト）の時と違ってゴッドガンダムがゴッドフィンガー使う時のプロテクターみたいに使う時だけアーマーの指にクローが覆いかぶさるタイプに変わって、使わない時は腕部装甲の一部になってるから前よりコンパクトなんだとか。

展開装甲の一種らしい。

・《雪羅》のクローは全部パイルバンカー

え～と、《雪羅》のクローって、《零落白夜》込みだったんだっけ？

人間の指って両手合わせて十本だから、パイルバンカー（《零落白夜》入り♪）が十発……殺す気か！！？

・クローは飛ばせば《ブルー・ティアーズ》みたいに自律行動

《零落白夜》入りのクローが十本もビュンビュン飛び回りながら襲い掛かってくる……何ソレ怖い。

・《雪片弐型》は最大出力で《零落白夜》を発動させると惑星を真っ二つに出来るほど延びる

イデオンソードか！？

・瞬時加速（イグニッション・ブースト）？　時代はクロックアップだよ（ｂｙ　束）

天の道でも行くつもりか！？

・コアさえ無事なら機体だろうがパイロットさえ復元。これも次元連結システムのちょっとした応用だ

ゼオライマーか！！？

いや、たしかに原作でも生体再生やってたけど。

…もうダメ、勝てる気がしない。

どうしろってのよ、こんなの。

『♪♪♪』

あ、携帯が…。

「はい、もしもし？　どちら様で…」

「こんにちは、異世界からの来訪者さん」

な…この声、篠ノ之束!?

いや、それよりどうしてその事を…!?

「どうして？　フフフ、私を誰だと思ってるのかな？」

な、な…。

「誰の差し金か知らないし、どうでもいいんだけど、いっくん達にちょっかい掛けるつもりなら容姿しないよ？」

チーン

…お、終わった。

何もかも。

次の日の朝、目が覚めると私は元の世界に戻っていた。

「はぁ、な～んだ夢か。……って、何コレ？」

ふと枕もとに目をやると、一枚の紙きれが…。

『もう、二度と妙な事は考えないでね』

怖！　束さん怖！

※おまけ

斎藤「ほ、他の世界なら…」

神（笑）「いや、なんていうか、オリキャラ送れるのって、恋姫†無双でいうところの外史っていうか、原作通りの世界には行けないよ？」

斎藤「いいもん！　結局使わなかったＩＳ使って御遣い無双するもん！」

神（笑）「空いてる世界の北郷君、天玉鎧持ってるから、君、負けるよ？」

斎藤「なんで天玉鎧なんか持ってんのよ！？」

神（笑）「いや、篠ノ之束が他の世界の……ジェイル・スカリエッティとか、ドクターウエストとか、香月夕呼とかとなんか盛り上がっちゃって『オペレーション・カズピー（北郷マジ御遣い）』とか言ってあらゆる世界の技術の粋を集めて作ったらしいよ？」

斎藤「メンバーが無駄に豪華過ぎる！！？」

その後、斎藤さんは諦めて自分の世界で真面目に生きる事を決意したそうです。

感想&お気に入り登録件数１００件ｏｖｅｒ記念番外編「…私、憑依系オリ主だったの？」

そういえば本編もうすぐ５０話だけど、記念番外編はそっちとも合わせといた方がちょうど良かったかも…

第４９話「あの頃は良かった…。いや、マジで」（前書き）

ゴスペルさんを倒した後の話です

第４９話「あの頃は良かった…。いや、マジで」

怠い　しんどい　眠い。

さっきからそんな言葉が俺の頭の中をグルグルと回っている。

というか、口に出してる。

いや、だってさ、臨海学校のしおり通りにスケジュールが進んだとしてもバスで旅館に到着するのが１０：００ぐらい、で、それから昼飯まで自由時間で１２：００～１２：３０まで昼飯でその後３０分の食休みがあって、それから１６：００ぐらいまで訓練浸けでそれから先は飯と風呂の時間は決まってるけど後は自由時間といった、何気にカツカツのスケジュール。

あ、因みにこれは一組と二組のスケジュールであって、三組と四組については最後の自由時間以外の自由時間と訓練時間が逆転したスケジュールになっていて、明日は俺ら一組と二組が今日の三組と四組のスケジュールで行動した後にバスに乗って学園に帰るんだとか。

と、まぁ、何事も無く円滑に臨海学校のスケジュールが進んだとしても結構しんどそうな内容なのに昼過ぎのあの暴走ＩＳの来襲、撃破である。

そりゃあさ、アイツらが絡んで来た以上、戦わないワケにはいかないっつうか、もともとその為に束さんから《白式・真打》と《白式・影打》を託されたんだし、こっちが本業なワケなんだけど、連中があんなに強いとは思ってなかったわ。

あくまでそれ用に作られたハズの《白式・真打》を使ったのにあのザマである。

機体のせいにするつもりはない。
でも、体調が悪かった…というワケでは無いんだが……なんて言ったらいいんだろ？　何と言うか、こう、イメージの”俺”に現実の”俺”が着いて来れて無いっていうか…。
戦闘中とか、ぼんやりとイメージが浮かんで来て、不思議とその通りに動いたら違和感無く自分でもびっくりするぐらい身体の動きがいつもより良かったりと、多分なんかそういう補助的なシステムでも積んであるんだろうけど、いつもの模擬ならともかく、連中相手に補助システムが働いたせいかやたらと要求がキツくてキツくて……。
あぁ、筋肉痛なんて何年振りだ？
しかも全身とかね…。

いや、補助システムじゃなくて《ジャンボフォーメーション》使ったせいなのか？
ＰＩＣちゃんと働いてるハズなのになんか身体が重く感じたし。

「怠そうだね、一夏」
「怠そうじゃなくてマジで怠い…」
「あははは…」

ぐで～っと、砂浜でダレている俺にシャルロットが話掛けてくる。
因みに、ビニールシートの上に仰向けに寝転がっているのが俺で、シャルロットは俺の頭の近くに立って俺を見下ろしてる状態。
話掛けて来た時にシャルロットが若干屈んだ為に割と豊かな胸が…
…って、仰向けになってる時にそういうことを考えるな、また俺の《雪片弐型》が……って、なんでお前だけそんなに元気なワケ？

とりあえず、《零落白夜》が発動しかかってるのがバレない様にする為に起き上がる。
普通に座った状態だと結局バレそうだけど、片方の足だけ膝を上げる様にしとけば大丈夫だろう。

「にしてもまぁ、皆元気だな」
「そうかな？」
「や、円滑に進んでも割とカツカツなこのスケジュールでなんで皆あんなに元気に泳ぎ回れるのか不思議でならないんだが」
「単にお前の鍛え様が足りないからじゃないか？　ホラ」
「ん、サンキュ。…まぁ、そりゃ、剣道止めてからそれなりにブランクはあったけどさ」

スポーツ飲料を買いに行っていたラウラはそう言うが、まぁ、そうなのだろう。
のほほんさんとか、あんな着ぐるみみたいな水着（？）で遊び回ってても全然バテる気配無いし。
ってか、なんであの格好で熱射病にならないの？

貰ったスポーツ飲料を一口……だけ飲むつもりだったのに、無意識にゴクゴクといってしまった。
やっぱ、疲労している上にこの炎天下だ、身体が水分を求めていたのだろう。
ホントは、冷たい飲み物ってあんまり身体に良くないんだがなぁ…。

「全く…お前、せっかく才能があったのに…」

いや、確かに箒の言う通り、自分でも少しは才能がある方だとは思ってたけどさ、こっちもいろいろと忙しかったし。
バイトとか、藍越学園の入試に向けた勉強とかで。

「そういえば思い出したけど、私がいた頃の一夏の方がまだ動きにキレがあった様な気がするわ」

…まぁ、バイトや勉強で剣道止めたってのも、後付けした理由であって、ホントは箒が転校して張り合いが無くなったからだしな。しばらくは続けてたけど、回りが”弱過ぎ”てつまらなくなったっていうか、あの頃は千冬姉以外に負ける事なんてまず無かったし。

「ってか鈴、まだ動きにキレがあったってそりゃ、仮にも有段者が素人相手に本気（マジ）になるワケにはいかんだろ。あの頃はまだ手加減してたんだよ」

「嘘!?　アレで？　私とやりあった時とか結構凄かったけど」

「や、あれはお前、お前がその辺の連中より強かったからだろ。少なくとも剣道止めて暫く経って弱体化してきた俺がうっかり本気出しそうになるぐらい」

「アンタが強かったのは事実だけど、なんかそう言われるとイラッと来るわ」

イラッと来るって言われても、事実だしなぁ。

箒が転校して、剣道止めて……で、鈴がやって来て、鈴とやり合う頃には多分止めてから一年ぐらい経ってたし、そんなもんだろ。

多分、剣道止めてなかったらそれこそ瞬殺だっただろうし。

「その頃の一夏さんってそんなに強かったんですの？」

「あぁ、真剣勝負だったら今の私ですら斬り殺されてるぐらいに」

マテ、なに人の事　人斬りみたいに言ってんの？

…さて、話は変わるがメンバーが揃ったところで、…いや、飲み物買いに行ってたラウラ以外は最初っからいたんだけどな。
連中に取り込まれたせいか、なんかでっかい鳥になった《シルバリオ・ゴスペル》を倒して、で、搭乗者もちゃんと《白騎士》が処置したおかげで無事で、はい、めでたし、めでたし、と、それで終わっとけば良かったのに、疲れたから部屋に戻ろうとしたところで皆に捕まってしまったせいで今こうして外にいるワケで…。

こうして水着姿の美少女を五人も侍らせてるのは男冥利に尽きるんだが、残念ながら素直にその状況を喜べるほど体力的な意味で余裕が無い。
体力に余裕があったからどうするってワケじゃないんだが。

「多分、剣道をやっていた頃の一夏なら、飛ぶ事にさえ慣れてしまえばそれこそホントに近接ブレード一本で代表候補生を下す事すらたやすかったろうに」
「あ～、そうかも。私の衝撃砲とか、空気の流れ読んでかわしたりとか出来ても逆にそれが当たり前な気がする」
「そっ、そんなに強かったのか？」

ダブル幼なじみの言葉にラウラが驚いて目を丸くするが、あながち間違って無いから困る。
確かに鈴の言う通り、あの頃の自分ならそれぐらい出来そうな気が……いや、出来たな、うん。
一応、感覚だけはまだ残ってるけど身体が全然着いて来ないから今はダメダメなんだが。

「では、私の《ブルー・ティアーズ》も…」
「全く意に介さず接近されて斬られるのがオチだろうな」
「ＡＩＣも……そもそも狙いを着けさせてすらもらえんか」

「でしょうね」
「じゃ、じゃあ、僕の高速切替（ラピッド・スイッチ）も…」
「「それより速く斬り伏せられる（のがオチよね）」」
「「「……」」」

そんな顔しなくったって信じられないってのは解るけど、あの頃の自分ならその位出来たろうな。
あぁ、そう考えると随分弱くなったな、俺。
あの頃のままだったら、いつか千冬姉と互角にやり合える様になって、運がよければ勝てただろうに。

「一夏って、今はこんなだけど、やっぱり千冬さ…じゃなかった、織斑先生の弟よね」
「だな、まぁ多少感覚を取り戻して来ているとはいえ、やはり昔の一夏の方が強いがな」

やっぱ、二人はそう思うよな。
特に箒は全盛期の俺を知ってるワケだし。

あ～あ、なんとかしてあの頃に戻んねぇかな～。
《白騎士》の……じゃ無理か。
アレって傷を負う前の状態に戻すだけだった気がするし。
ってか、仮に出来てもあの頃に戻されたら俺　小学生になるじゃん。

「あ～、そういえば束さんは？」
「そういえば、私もあれから見てないな」

ヤツのせいで変異した《シルバリオ・ゴスペル》がちゃんと元に戻ってるかチェックするって言ってたけど、束さんの事だからもう終わってると思うんだけどなぁ…。

それとも別に用事があるのか…それか用事が終わったから帰ったのか…。

米国、某所にある軍事施設。
その施設こそ《シルバリオ・ゴスペル》を狂わせた元凶が眠る地である。

事の始まりは十日前のある事件に遡る。
事件、といっても単に隕石が落ちて来ただけの話であり、当初の予測では大気圏で燃え尽きて無くなるハズだったその隕石は予測を裏切り完全には燃え尽きずに大気圏を突破してしまった。
とはいえ、すぐに軍用ＩＳによって撃墜されてしまったので国土に対する被害は殆ど０だったので、珍しくはあってもその事自体はたいしたニュースにもなっていない。
勿論、肝心なのは隕石が落ちた事でも無ければそれが軍用ＩＳによって撃墜された事でも無い。
被害は殆ど０、つまりその殆どに当て嵌まらないモノこそが元凶だった。
幸い、人が殆どいない地域に落下した為、たいした被害を与えず、世間にその存在を知られる事無く、そのまま軍によって回収されたソレは地球には無い未知の物質で出来た物だった。
調べれば調べるほどその未知の魅力に科学者達は取り込まれていき、発見から三日たったある日、ついに事態は動き出す。

なんと、その未知の物体はまるでＩＳのコアの様な性質を持った生命体だったのだ。
この事実に、米国は狂喜した。
例えコアを作れずとも、コレを採取し続けるば一気に戦力の増強が

見込めたからである。
しかし実験を続けるにつれ、全く同一のものでは無いという結果が次々と浮き彫りになっていき、そこで漸く冷静さを取り戻した米国は次にＩＳのコアとの接触させる事によって何か進展があるのではないかと考えたのだ。

そう、その被験体となった機体こそが《シルバリオ・ゴスペル》である。

第４９話「あの頃は良かった…。いや、マジで」（後書き）

次か、次の次で臨海学校編はおしまいです

第５０話「告死期（黒式）」（前書き）

祝！　５０話目！

第５０話「告死期（黒式）」

それは、偶然に偶然が重なった結果だった。
ヤツらに飲まれ、《シルバリオ・ゴスペル》が銀の怪鳥と化したのも、《シルバリオ・ゴスペル》が被験体に選ばれた事自体も。

隕石に紛れ、地球に侵入したその存在は、正しく地球外生命体と呼ぶに相応しい存在だった。
ある種の細胞ともいうべきその存在は一定量、ほんの１０ｇほどの群体をなせれば活動可能であり、その軽さこそが最大の武器だったのかもしれない。
ある程度自身を象る姿に都合がつくそれらはある星では動物の餌に化けて体内に侵入してはその器をのっとり、またある時は……そう、コアと呼ばれる存在に化けもした。
辿り着いた星々に済む原生生物と接触した際にその原生生物の望む存在に化けて相手から積極的にこちらに接触する事を促す。
最初はただのウィルスの様な存在だったのかもしれない。
だが、乗っ取った生命体から知性を奪う内に欲望が……そう、単純に増えたいというのではなく、”支配したい”という欲望を得てしまった彼らは辿り着いた星々の生命、或はそれらを駆逐する存在へと変わり、欲望の赴くままに支配し、その数を増やしていく。
彼らが不幸だったのは、知的生命体を乗っ取ってしまった個体が出てしまった事。
より強く在る為にと、全体で情報を共有する事によって彼らは多くの生物の姿や能力、つまりは直接的な力は今まで手にしては来たものの知性までは持ち合わせておらず、ただ辿り着いた星に生命の種類が一種増える程度の影響しか与えてこなかったのに、蓄えてきた力に知性を混ぜ合わせる事によって彼らの存在は明確に、宇宙から

侵略目的で星々に勢力を延ばす宇宙人と化したのだ。

彼らからしてみれば、自分達の方が優れているのだから、自分達が他を支配するのはごく当然の事であり、何故抵抗されるのかが理解出来ない。

初めて取り込んだ知的生命体がもっと温厚な種族だったなら、或は平和的な方法を取るという選択肢もあっただろうが、三つ子の魂百までというか、彼らの根底には最初に取り込んだ知的生命体の、支配欲が根を張っていた。

事実、彼らはその適応力を以ってあらゆる星々に対して侵略戦争を仕掛け、負けた事が無く、自分達の考え、つまり強者による支配に疑問を持つ事が無く、どころか、その考えをより強硬にしていってしまった。

そうして何万年もの間勝利し続けて来た彼らは、遂にその勢力を地球に延ばして来たのである。

織斑一夏はいかにして篠ノ之束が彼らの存在を察知したのかは知らないし、あくまで彼の才は武にあり、彼女の様に知に長けてはいなかったので、説明を受けてもその内容が、つまりは理論的な意味でそれが正しいとは理解できなかっただろう。

だが、彼の持つ直感が理論などすっ飛ばして彼女の言い分が正しい事だけは理解出来た。

それは盲信では無く、単なる直感。

しかしその直感こそが生命が自己を存続させる為に必要なスキルの一つであり、彼のそれは彼の姉すら凌駕していた。

まぁ、直感が凌駕していようとそれをものともしない程の身体能力差がこの姉弟にはあったのだが。

篠ノ之束がいかにして彼らの存在を知ったのか、どこまで知っているのかは彼女以外には解らない。
そもそも、彼女ぐらいの頭脳が無ければ理解すら出来ない。
その彼女曰く、ヤツらの根源には現地の動植物を取り込み自らを象る習性がある為、生命体のいない星にはより着かない。
故に、ヤツらの勢力がどれだけ広かろうと、生命体のいない星に駐屯するという選択肢がそもそも無い。
つまり、迫る母艦の様な物さえ地球に侵入する前に破壊さえしてしまえば、人類が負けるワケではないのだ。
だから、ワザとし損じてごく小数だけ侵入を許し、ＩＳの存在を報しめ、ヤツらの狙いをＩＳのある地域、つまりは各国の軍事施設に絞らせる事によってこちらが防衛すべき地域を狭めて防衛に回す労力を減らし、あとは施設を狙って来たところを迎撃する。

そう、既に彼女の頭の中では人類の勝利は確定事項なのだ。
巧にその習性を利用して迎撃し、やがて大挙して迫って来るであろう彼らの本体も、ちょうど彼らとの初めての戦闘で全ての条件を満たした織斑一夏が対群用殲滅形態《白式・両儀》を以って殲滅すればいいだけの事。
想定外の自体など有り得ない。
何故なら、ワザと取り込ませる様に仕向けたコアから、ヤツらの通信回線を傍受する事が出来たのだから、一度繋ぎ方を覚えてしまえばこちらのものであり、その勝利は揺るぎ無い。

だから告げよう、ヤツらの死期を。

怪鳥が飛び発った地、つまりは《シルバリオ・ゴスペル》が暴走した時以上の恐慌状態に包まれていた。
米国軍事施設は、
いつの間にか基地を包囲していた数万の騎兵、その見覚えのある騎兵がなんの為に自分達を包囲しているのか、心当たりが有り過ぎた。
対応する暇すら与えず、一斉に騎兵の跨がるバイクが唸りを上げ、基地に向かって突進する。
体当たりなどという原始的な攻撃手段ではあったが、それ故に、下手な兵器より恐怖を煽り安い。
基地の外壁を砕き、それでもなおマシン共々無傷で突進してはUターンしてを繰り返す騎兵達。
篠ノ之束も、基地の人間が大人しくヤツら残りの一部を明け渡すならここまで直接的な手段を取らなかっただろうが、既に降伏勧告に対する返事は徹底抗戦との返事を受けてしまっている。
故に、基地ごと心を砕きに来たのだ。
二度と、外野風情が面倒を起こさない為に。

「さぁ…行こうか、『いっくん』」
『あぁ』

騎兵が駆け抜ける中を、まるで摺り抜ける様に歩き行く女。
ウサ耳カチューシャに青いワンピースという、一人不思議の国のアリスな格好がその異様に拍車を掛ける。
歩きながら、いつの間にか握られていた黒いバックルを腰に当て、

手を離す。
しかし、バックルは落ちない。
腰に当てられた瞬間にベルトを形勢し、腰に巻き付く。
バックルの中央に納められた球体から黒い光りが溢れ、まるでオーラの様に装着者の身体を包んだ。

「『変身』」

歩き行く女と、姿無き男の声。
二人の声が同じ言葉を紡いだ瞬間、バックルから溢れる黒い光はその濃度を増し、やがて女の姿も消え去る。
代わりに、黒い光は彼女が従えた騎兵達と同じ姿を象り、それでいてその鎧の色は白亜の騎兵達とは違う漆黒に染まる。
手にしたのは一振りの大剣。

『スペード１０、Ｊ、Ｑ、Ｋ、Ａ……ロイヤルストレートフラッシュ』

先程の男の声とは違う機械音声がキーの認証を告げ、

「さぁ、派手にいこうか」
『あぁ、思いっ切りやれ』

男の声が斬撃を促す。

「いっけぇぇぇぇぇっ！！！」

横薙ぎに振り払われた黄金の斬撃が既に騎兵達の手で壊滅状態に陥っていた基地を完全に消し去り、土地だけが残される。

勿論、人員の”避難”は済ませてはいるが、見せしめの意味もあって基地を跡形もなく消し去ったのだが、それもついでにでしかない。

『ガァァァァァァッ』

そう、作りたかったのはヤツを始末する為の処刑場。

「『さぁ、お前の罪を数えろ』」

断罪の剣が今、振り下ろされた。

第５０話「告死期（黒式）」（後書き）

次回、束さん無双

第５１話「束さん無双」（前書き）

な、なんとか昼にはまにあったか…

第５１話「束さん無双」

咆哮を上げた銀の怪物の姿は《シルバリオ・ゴスペル》に寄生して変異した怪鳥とは違い、明らかに地球上に存在しない者の姿をしていた。
四本腕に蛇身の下半身、それでいてその背には悪魔を思わせる翼を六枚生やし、縦長の顔には中央に輝く真っ赤な一つ目しか無い。
そんな、怪物。

「う～ん、１４に似てなくもないけど、ちょっと違うかな～。というか、その姿はロイヤルストレートフラッシュでトドメを刺して欲しいって解釈でＯＫ？」

しかし、怪物に対峙する漆黒の鎧を纏った女に恐怖は無い。
恐怖が無いどころか、動物園で珍しい動物を見たぐらいの感覚しか無いのだろう。
本業こそ研究者だが、かといって彼女が戦闘を不得手としているワケでは無い。
流石に親友には敵わないが、たかが代表候補生程度に負ける程弱くも無かった。

『ガァァァァァ！』
「よっ♪　ほいっと……うんうん、早い早い。でもでもちーちゃんのラリアットの方がもっと早いかな。ってか君、口も無いのにどこから声出してるの？」

蛇身による薙ぎ払いも難無くかわし、あまつさえ軽口を叩く。
怪物はその後も何度も蛇身を振るうが一向に命中する気配は無く、

痺れを切らして四本腕を駆使した連撃を放つも、やはり掠りもしない。

『…俺、来る必要あったか？』

「え～、『いっくん』、私といるの嫌なの？」

『いや、そういうワケじゃないが…』

動作補助の為に《黒式》の中に移って同行していた『彼』だったが、未だにその出番は無い。

そう、彼女自身の力だけで戦っているのだ。

実はいつも（本人が殆ど気付かない程さりげなく）補助された上で戦っていた織斑一夏より彼女の方が強かったりする。

”もう一人の織斑一夏”こと『彼』や、”本来持っていた才能を殺す事なく成長した”場合の一夏相手なら流石に彼女も負けるが、今の一夏相手なら親友であり彼の姉である千冬並の早さで彼を秒殺できるだろう。

「ほいっ……と！」

『グギャァァァァッ！！？』

軽い調子で投擲した《ユニコーン》が怪物の腹部に突き刺さり、更に追い撃ちを掛けるかの様に、或は釘を打ち込む様に、突き刺さった《ユニコーン》目掛けて蹴りを放つと、怪物は苦悶の標準を……浮かべるべき顔には真っ赤な一つ目しかないからか、代わりに苦しそうな呻き声を上げて空中でのたうち回る。

「う～ん、邪魔くさいよね、その腕」

そう言って取り出した《クナイガン》を左手に召喚してアックスモードでセットし、

「アバランチブレイク♪」
『ガァァァッ！？』

一気に右の二本腕を肩から切り落として、

「もういっちょ」
『ギャァァァッ！！？』

今度は右手に召喚した《デンガッシャー》をソードモードにセットして左の二本腕を切り落とした。

『ガァァァァァ！！！』
「お～、凄い凄い」

怪物が切り落とされた四本の腕を再生させてみせるが、やはり彼女は対して驚いた風もなくパチパチと拍手なんかして見せてるほど余裕である。

「じゃあ次いってみよっか♪」

無邪気に、楽しそうに言って取り出したストップウオッチ状の機器を左腕に取り付け、更に右腕に《デストロイヤー》を装着した瞬間、彼女の姿が掻き消えた。

『！？　！？　！？』

獲物が突然消えた事に驚く頃には、既に四本の腕は再び斬られてお

り、今度はまるでハムでもスライスするかの様に下半身を形成していた蛇身が細切れにされていく。
蛇身の長さが半分になったところで一旦斬撃は止んだが、一瞬という言葉すら遅過ぎる早さだった為に怪物は攻撃の緩急を気付け無い。というより、身体がバラバラにされていく事を知覚するより早く斬撃が繰り返されているので一つ気付く頃には、一体何回斬られているのやら…。

「名付けて、《アクセルデストロイ》ってね」
『ガァァァァァ！？』

再び彼女が姿を表したのと翼を斬られて怪物が墜落したのは同時だった。

『ア、アぁ、……あ！？』

敵わない。
そう本能で悟った怪物が逃げ出そうと踵を返した途端、首を絞められる感覚に襲われ、何事かと振り向くと、黒い騎士の腕から延びたアンカー、《アンタレス》が首に巻き付いていた事が確認できた。

「ねぇねぇ…、もっと遊ぼうよ」
『ガ！？』
「返事は聞いて無い」
『グギャァァァッ！！？』

告げられた死刑宣告に対する異義は当然の如く却下され、代わりにガンモードになった《デンガッシャー》の光線に真っ赤な一つ目を撃ち抜かれ、怪物は悲鳴を上げた。
必死になって《アンタレス》のワイヤーを引きちぎるも、すぐさま別の何かによって首を絞められる。

「ま、流石に魔皇力なんて無いからアレは出来ないけど…」
『グェッ！』
《アンタレス》の代わりに召喚した《ジャコーダー》で首を絞めたまま跳躍し、怪物を空中に牽引、そして…
「そぉれっ♪」
『ガァァァァァ！！？』
《ジャコーダー》を消し、代わりに《ドッカハンマー》を召喚してぶん回して頭部を砕く。
頭部を砕かれ、墜落して行く怪物に容赦無く《ケルベロス》の弾丸が浴びせられ、地面に叩きつけられた後もその砲撃は終わる事なく続き、原形を留めている部分が無い程ぐちゃぐちゃにされてしまった。
それでも…
「へぇ～、そんなになってもまだ再生出来るんだ？」
なんとか元の姿に……いや、元の姿に戻れずともせめて逃げおおせる為の身体を、と必死になって再生しようとする様を彼女は心底愉快そうに嘲笑う。
「じゃ、そろそろ飽きたし、終わりにしよっか」
そう言って再び大剣を手に取る。
その大剣の銘は、重醒剣（キングラウザー）といった。

『スペード10、スペードJ、スペードQ、スペードK、スペードA……ロイヤルストレートフラッシュ』

一枚一枚、恐怖を煽る様に大剣に挿入されていく専用カードキーの効果が辺りに響き渡り、そして最後のカードが挿入された瞬間、大剣はその封印を解かれ、その刀身から黄金の輝きを放つ。

『！！？』

「はぁぁぁぁぁぁっ！！！」

振り下ろされた黄金の輝きは怪物を飲み込みながら地面をえぐり、光が収まった頃には怪物の姿は無く、チリ一つ残さず消滅した怪物は二度と蘇る事は無かった。

「さぁ～って、もっかいちーちゃんとこに行こ～っと♪」

そして、漆黒の鎧を身に纏った女は従えた騎兵達と共にその姿を消した。

まるで、幻の様に記憶からも消え去って。

「あ～、そういえば束さんは？」

「そういえば、私もあれから見てないな」

ヤツのせいで変異した《シルバリオ・ゴスペル》がちゃんと元に戻ってるかチェックするって言ってたけど、束さんの事だからもうとっくの昔に終わってると思うんだけどなぁ…。
それとも別に用事があるのか…それか用事が終わったから帰ったのか…。

「ん？　私がどうかした？」
「って、うわ！　た、た、束さん！？」
「「「「！！？」」」」

い、いつの間にいたんだ……ってか、皆気付いて無かったのか？

「い、いつの間に…？」
「ん～とね、さっき用事を済んだから来てみたんだよ」
「用事？」
「うん、用事」

相変わらずニコニコと笑ってらっしゃるが……あ～、もしかしなくても米軍基地への制裁ですね。
解り……たくありません。
どうやったらこんな短時間で日本とアメリカを往復できるんだよ？

「じゃ、私はちーちゃんの所に行って「私ならここにいるぞ」ふぇ？」

束さんと同じく、音も無く気配も無く現れた千冬姉はおもむろに束さんの頭を掴んで…

「痛タタタタタ、ちょっ、アレ？　抜けない！？」
「あぁ、お前用に技を改良したからな」

「そ～いう特別は嬉しく無……アタタタ、え～い、こうなったら、ウサ耳ビィーム！」
「うおっ」

…え～と、千冬姉が束さんにアイアンクローを仕掛けて、で、束さんは抜け出そうとしたけど千冬姉は対策済みで、束さんのウサ耳カチューシャのウサ耳がピンッと立った途端にビームが……何コレ？
何がどうなってんの？

「待てこのっ」
「わ～い」

え、何？
二人ともいきなり現れておいて俺らおいてけぼりッスか？

「…何が、どうなってんだ？」
「わっ、私に聞くな！」

ですよね～。

「……取り敢えず、泳ぐか」
「そっ、そうだな！」
「せっかく海にきたんだしね！」
「で、ですわね！　そうしましょう！」
「ぼ、僕もそうした方がいいと思うな！」
「あ、あぁ！」

取り敢えず、全力で見なかった事にした。

第５１話「束さん無双」（後書き）

誰か、レーゲンさんの武器の名前教えて下さい…

原作読んで調べても、ワイヤーブレード・レールカノン・プラズマ手刀って書いてあるばっかりで名前まで書いて無いッス（泣）

第５２話「姉として」（前書き）

今回（ｏｒ次回の冒頭）で臨海学校編は終了です

第５２話「姉として」

さて、昼間に何か妙なものを見た様な気もしなくもないが、きっと気のせいだろう。
気のせいったら気のせいだ。
まさかウサ耳カチューシャからビームが出るなんて……。

ＵＦＯとか宇宙人とか、ツチノコとかネッシーとか、その手の連中に遭遇してしまったようなこの気分。
まぁ、要するに「信じられない」ってヤツだが、そう思うのと同じぐらい「束さんだもんなぁ…」と思えてしまう辺り、俺も随分鍛えられた様な気がする。
慣れって怖いね、ホント。

千冬姉も千冬姉で人外染みてるっていうか、人外も裸足で逃げ出すっていうか……いや、人外って靴履くのか？　まぁ、この世は不思議な事だらけなワケでして……多分、束さんにとっても流石に危険とは思ってはいるらしいが、束さん的に「手に負えない」ものにカテゴリーされる程のものじゃないのかもしれないな、ヤツらって。
だって普通、ウルトラマンでもない限り宇宙からきた侵略者相手に「一人で勝てる」だなんて思わないだろう。
ＩＳなんか作っちまうぐらい、頭の中はウルトラ級にぶっ飛んではいるが…。

束さんがＩＳを発表してもう十年近くになるが、単に子供だったから覚えてないだけって可能性もあるけど、発表前と後じゃあ町を歩く外人さんの数が随分増えた様な気がする。
束さんが出無精……まぁ、解り安く言えばヒキコモリ気味だった上

に発表こそしたものの技術を広める事に余り積極的じゃなかったから、というか多分束さんの事だから面倒臭かったんだろうけど、そうなると当然各国の技術者達とかは数少ない資料を求めて日本に来るしか無いワケで……。

しかも束さん、論文の中身は数式とか以外はオール日本語な論文しか書いて無い上に、その後も稀に……ほんの気まぐれに書いた資料も全部日本語だったりしたもんだから、ＩＳに関わる以上、日本語が会話できるレベルでないにしろ読めなければどうにもならない。

そういった経緯で少なくともこの業界に属している外人さん達……つまり、鈴…は、まぁ、ＩＳ関係無く日本で暮してた事があるからともかくとして、セシリアやラウラやシャルロットの様に日本語ペラペラな外人さんが多いのだ。

中には生粋の日本人より日本語の上手い外人さんも居たりするし。

「……あぁ、またやっちゃった」

「別に難しかったらスプーン使ってもいいんだぞ？」

「も、もうちょっと頑張ってみるよ」

「た、確かに難しいですわね、この”箸”という食器は」

…まぁ、日本語が喋れたからといって日本に完全に対応出来るというワケはない。

現に今、両隣にいるシャルロットとセシリアが冷奴を箸で摘もうとして苦戦中だったりするし。

「あ～、ちょっと待った」

「？」

なんとか冷奴を攻略したシャルロットが今度は刺身が乗ってる皿に箸を伸ばしたワケなんだが、ちょっと待て。

それはそのままいくと日本人でもキツいから。

「ソレ、山葵って言ってな……そうだな、魚に点ける用のマスタードみたいなヤツだけど、辛さ…はともかく、かなり鼻にくるからその量を直に食うのは止めた方がいい」
「そ、そうなの!?」
「あぁ、俺でもその量はキツいわ」
「あ、危なかった…」

いや、ホントに。

「ソレ、少量だけ刺身に点けるもんだけど、少量でも結構くるから一回食べて無理そうだったら醤油だけにした方がいいぞ」
「うん、そうする」
「それにしても、こうして見ると日本食って変わってますわね」
「そうか?」
「えぇ、まぁどこの国に行ってもそう感じるのでしょうけど」

あ〜、まぁ、欧州と日本じゃだいぶ違うか。
少し離れた席で食ってるラウラは問題無く箸使ってるけど、多分それ千冬姉の影響だろうから、ドイツ人がみんなラウラみたいに上手に箸使えるワケじゃない……っていうか、この場合ラウラの方が少数派なんだろうな。

箒と鈴は……、やっぱりというか、ちゃんと箸使えてるよな、そりゃ。
ってか、生粋の日本人の箒が箸使えないなんて事無いか。

「まぁ、次期に慣れるさ」
「ですわね……っ」
「ん？」
「あ、足が…痺れ…」
「あ、セシリアも？　実は僕もさっきから足の感覚が無くなってきてさ…」
「あ～、その、キツかったら崩してもいいんだぞ？　それに、テーブル席だって空いてるんだし」

やっぱ正座はキツかったか。
まぁ、俺も飯食う時間ぐらいならなんてことないんだが、流石に一時間越えはキツいし。
剣道やってた頃から二、三日時間は出来たんだけどなぁ…。

「あ、そういえばさ、一夏」
「ん？」
「一夏の部屋って、結局どうなったの」
「「「「「！！？」」」」」

な、なんだ！？
なんか部屋の雰囲気が急にがらっと変わったぞ！！？。

「そ、そういえばまだお聞きしてませんでしたわね」
「私も気になる～！」
「私も私も」

うぉっ、急に回りの女子が食いついて来た！？
そんなに気になる事か？　ソレ。

「あぁ、俺の部屋な……うん、千冬姉と同室だぞ？」

「「「「「「！！？」」」」」」

え、何その反応。
男子一人の為に部屋用意するぐらいだったら姉弟（きょうだい）で同じ部屋の方が安あがりだろ？　普通。

「あ、あははは、流石に織斑先生と同室だったら押しかけるワケにもいかないね…」
「で、ですわね…」
「だ、だよね～」
「うんうん」

だから、なんでそんなに残念そうな顔するんだ？
よく解らんな、女子は。

「そっ、そうですわ！　一夏さん、もしよろしければ私の部屋に…」
「ちょっ、抜け駆けはズルいよ、セシリア」

そりゃまぁ、行くのはかまわんのだが…。
結局どこの部屋行けばいいんだ？　俺は。

「全く、落ち着いて食えんのか、あの小娘共は」
「あ、ははは、織斑君、モテモテですね～」

位置的に一夏達とかなり離れたテーブル席で食事をしていた千冬が不機嫌そうに呟く。
姉として弟が心配なのは解らなくもないが、相席している真耶には

どうしようもない事で、適当に相槌を打つしかない。

「…やっぱり、心配ですか？　織斑君の事が」

「……そうだな、心配していないと言うと嘘になる。はっきり言って今のアイツの立場は現役時代の私なんかと比べものにならないぐらい世界的に重要だからな」

「あぁ、確かに」

「幸い、アイツもアイツの回りも、薄汚い大人の思惑など関係無しの交流だが…、国としては、”そういうつもり”でアイツに小娘共を引き合わせたつもりらしいしな」

即戦力、という意味なら千冬の力はどの国も喉から手が出るほど欲しいものだが、一夏は違う。

というか、一夏の価値は戦力は戦力でも一夏個人というより男性操縦者を増やす可能性としての価値だ。

まぁ、それも開発者の親友の弟だからと、ある種の贔屓のもとで成り立っている線が濃厚なので一夏を調べたぐらいではどうにもならない可能性が大きい。

だが、そうだとしても彼の息子なら、その贔屓の枠に入れる可能性は高い。

それ故に、幸いまだ実行されてはいないものの「うちに来れば綺麗な娘達とヤリたい放題だよ」という露骨な手段に出ようとしている国もある……というか、鳳鈴音が所属する中国も、セシリア・オルコットが所属するイギリスも、シャルロット・デュノアが所属するフランスも、ラウラ・ボーデヴィッヒが所属するドイツも、そして彼自身の母国である日本ですら、彼と彼の後継欲しさにその様な手段に出ようとする派閥が確かに存在する。

今上げた国以外も、だ。

勿論、弟を種馬扱いされて黙っているほど、この姉は大人しく無い。

どころか、各国に向かって「国ごと潰す」とまで宣言してしまった。
千冬本人が世界最強である事、そして千冬が要請すれば束が動く事は子供でも簡単に予想出来るワケで、それこそ鬼（最強の操縦者）に金棒（最強の機体）な状態で攻められでもしたらひとたまりも無い。
そういった事情から、本当にその計画を実行に移そうとする国はまだ出ていないのだが、それも時間の問題かもしれない。

彼は彼自身の価値以外にも篠ノ之束製機を所有しているのだ。
例え彼自身を調べてソレを他の男性が操縦者になる為の礎に出来なくとも、プロテクトが掛かっていて機体を解析出来なくても、篠ノ之束製ともなれば戦力としては申し分ない。
仮に彼が一般男性の様にＩＳを操縦出来なくても、それはそれで織斑千冬を操る為のコントロールキーに成り得るので、どの道彼は誰の目から見てもお買い得商品だったのだ。

一方、お買い得商品という意味では開発者の妹であり篠ノ之箒も同じではあったが、こちらの方はあまり……というか、監視以上の事はされていない。
こちらも一夏と同じ理由で、箒にもしもの事があれば、束が動く。
実際、束の技術欲しさに箒を利用しようとする動きが国内であったのだが、急に国内のＩＳだけが機能停止し、所属不明機によって軍事施設一つまるごと破壊された事があった。
当時の事は機密の関係で記録にこそ残ってはいないものの、関係各位の記憶には深く刻まれており、以降はその様な動きを見せる気配はなくなったのだった。

「織斑君、これからどうなる……いえ、本人はどうするつもりなんでしょうかね…」
「さぁな、それはアイツ自身が決める事さ。だが…」
「だが？」
「せめて、露払いぐらいはしてやるさ。なんといっても、アイツは私の弟なんだからな」
そう言って、千冬は不敵に微笑んだ。

第５２話「姉として」（後書き）

う～ん、区切りのいいところまで書こうとしたら短かったり長かったりするなぁ…

一応、書く方にはあまり執筆の辛く無い、読む方も短か過ぎず長過ぎずな５ページぐらいを目安にしてるんですが…
最強区切りを優先し過ぎて短か目になって来てますし…
難しいですね～

第５３話「帰って来ましたＩＳ学園」（前書き）

はい、タイトル通りですね

今回からしばらくはまた学園でのバトル中心になってきます

で、今回はそのプロローグ

残る相手は更識姉妹と……

第５３話「帰って来ましたＩＳ学園」

「～♪」
「あ、おはよ、箒。朝早いのね」
「あぁ、おはよう、鈴。早いと言っても、私はいつもこの時間から鍛練だぞ？」
「マジで？……って、やけに機嫌いいじゃない、アンタ」
「フフッ、解るか」

解るかって、そりゃそんなに口元が緩んでれば誰だって気付くわよ……とは口に出さず、視線で続きを促す。

「今朝な、ちょうど一夏がランニングに出るところに出くわしてな。その時に、な」
「何よ勿体振っちゃって……って、アレ？　アンタ、普段そんなリボンしてたっけ？」
「あぁ、一夏からのプレゼントだ」
「えぇっ！？　ちょっ、ソレどういう事よ！！？」

今、この女は何て言った？
一夏から、プレゼント？
あの鈍感が？
ありえない。
アイツがそんな気の聞いた事するハズないじゃない！

…と、混乱する鈴を余所に、箒は幸せ一杯に語りだした。

「誕生日プレゼントだそうだ。あの日はまぁ、あんな事があったか

らな。私も殆ど忘れてたんだが…一夏はちゃんと覚えていてくれたらしいぞ」

「あぁ、誕生日の、ね（う～わ～、こりゃまたいつに無く浮かれちゃって……いつもとキャラ違うじゃない）」

あぁ、そういえばと鈴は思い出した。

各国がやっと第三世代機の開発が軌道に乗りだしたところに《紅椿》なんていう第四世代機を、しかも妹の誕生日プレゼントに贈ったとんでもない姉がいたな、と。

そういえば彼は普段がアレでも要所要所でしっかりキメるというか、誕生日だとか、そういうイベントでは自分も日本に居た頃はちゃんとプレゼントもらってたっけ、と思い出し、そこで漸く冷静になった。

まぁ、意中の男にプレゼントを貰って嬉しいのは解る。

自分だって、貰ったら今の箒ぐらい浮かれるだろうし、自分以外の彼の取り巻きだってきっとそうだ。

だが、だからといってそれで自分と彼との仲に何らかの進展があるのか？　と、聞かれるとそれは否だろう。

進展も何も、彼からしてみれば確かに親愛の証だが、それは再開した事によって小さい頃からの習慣がまた始まっただけの話。

ソレ以上もソレ以下も無い。

取り敢えず、浮かれているところに水を注してしまうのもなんだか悪い気がしたので、笑顔で剣道場に向かう箒を見送った。

二日前、つまりは箒の誕生日であり、《紅椿》のデビューした日でもあり、そして俺が初めてヤツらと戦った日でもあったあの日、夕食の刺身に舌鼓を打ち、わ～い温泉だぁ～…なんて浮かれてたら俺一人の為に大浴場を貸し切る時間を増やすなんて非効率だからと千冬姉が勝手に俺ら姉弟の宛がわれた部屋の浴槽を使うハメになり、千冬姉はなんか職員会議で遅くなるっぽかったので先に布団敷いて寝た……のがマズかったんだろうなぁ…うん。

「…ア、レ？」

おいおい、流石に何度もやられてたら気付くぞ。

「またお前か……って、なんだ？」

「……」

じーっと、批難する様な眼差しで俺を見つめる白式。

アレ？　なんかいつもと雰囲気違う？

「全く、貴方という人は…。えぇ、事が事ですから、忘れるのもしょうがないのかもしれませんが…」

「忘れるって、何を」

さっきからなんなんだ？　一体。

「今日、何があったかよ～く思い出して下さい」

何があったかって、そりゃ…。

「ヤツらとの初戦闘」

「その前です」

「え～と、ＩＳの特殊環境下での稼動試験を兼ねた課外授業？」

「もう少し後です」

どっちだよ。

授業より少し後って事は……後？

いや、授業のすぐ後に《シルバリオ・ゴスペル》が来たから……あぁ、途中からって意味か。

なら…、

「束さんが来た」

「そうです。ドクターがいらしましたよね？　ドクターは何の用でいらしたのですか？」

「何のって……そりゃ、箒の誕生日プレゼントに《紅椿》を……って、あ！」

「…やっと思い出しましたか」

うわ～、マジか。

完っ璧に忘れてたわ、今日　箒の誕生日じゃん。

今からでも間に……あぁ、クソッ、もう消灯時間かよ。

…明日渡すか。

「おや？　既にプレゼント自体は用意してたのですか？」

「当たり前だろ」
「それは重畳。……では、私も一夏の”プレゼント”を貰うとしましょうか」
「って、オイ！　珍しくまともな話したかと思ったら結局これか！」
「フフフ、”お約束”というヤツですよ♪」
「ちょっ、待っ……アーッ！」

「！」
「ん、起きたか…」
「…千冬姉？」
「ここでは織斑先生と……いや、いいか。それよりお前、うなされていたぞ」

そう言って俺の顔を覗き込む千冬姉。
俺が先に寝てる間に風呂も済ませたのか、いつも寝間着代わりに着ているジャージ姿である。

「なんだ？　怖い夢でも見たのか？」
「いや、そういうワケじゃあ…」

エロい夢みてました、なんて口が裂けても言えるか。

「全く…しょうがないヤツだな、お前は」
「って、ちょっ、千冬姉!?　自分で布団ぐらい敷けよ!」
「面倒臭い。それに、昔はよくこうやって二人で寝ていただろう?」
「昔って、いつの話だよ」

そう言って俺の布団に潜り込み、まるで抱き枕にでめするかの様に千冬姉は俺を抱き締める。

「嫌か?」
「嫌じゃ……ないけどさ」
「なら、寝ろ。私も寝る」
「あ、あぁ……おやすみ」
「おやすみ、一夏」

こうして、俺達は眠りに……着けるかぁぁぁぁぁぁぁっ!
あんな夢見た後に抱き締められでもしたら嫌でも思い出すわ!
って、ちょっ、千冬姉!?　そんなに抱き締められたら胸が!　バスト８８ｃｍ（束さん調べ）の胸が顔に!

翌朝、寝不足でゲッソリした俺とは対称的に千冬姉はやたらとツヤツヤしていた。
…謎だ。

で、その日こそはと、思ってこっそりプレゼントを持ち歩いていたんだが、どうも渡すタイミングに恵まれ無かった。
午前中は昨日と違い、朝から訓練だったので渡す暇も無く、午後は午後で自由時間だったんだが結局みんなで泳ぐ事になったので渡すタイミングも当然無く……いや、みんなの前で渡すという手も有っ

たんだが、下手に刺激するとこっちが危ないし。
で、帰りのバスでは疲れが溜まっていたのか、行きと同じで隣の席だった箒は寝てしまったので、じゃあ寮に帰ってから…。
…消灯、時間だと？
といった具合に昨日も渡しそびれたので無理していつも箒が鍛練に向かう時間帯に起きてささっと渡して来たってワケ。

にしてもまぁ、随分舞い上がってたなぁ、箒は。
まぁ、よろこんでもらうたならそれでいいんだが。

普通、前日が旅行系の課外授業があったら次の日って休みだと思ってたんだが……流石は天下のＩＳ学園、そんなものは全く無かったんだぜ！

「次、織斑」
「はいっ」

っと、お呼びが掛かったか。
幸い、午前の授業は座学だったし、今当てられたのも教科書の朗読だったから良かった様なものの、なんか問題解けって言われると無理ッス。
目下の問題はコレで、実技の方はともかく、座学がヤバいんだよな～。

理論とかが全然ダメ。
動けばいいじゃんって思ってるぐらいだし。
そりゃさ、ＰＩＣとは何か？　とか、そういうのだったら俺だって解るけどさ、時速何ｋｍで飛行している時に搭乗者保護機能で相殺

しているGはいくら掛かるか、とか、知るかっつ～の！

しかもおれがうんうん唸っている回りで皆はスラスラと解いてるし…

うん、解けない事自体よりもそっちの方がキツいわ。

はぁ…、やってらんねぇ～。

第５３話「帰って来ましたＩＳ学園」（後書き）

次回、ライダー　ＶＳ　ライダー　、お楽しみに

第５４話「ライダー　ＶＳ　ライダー」（前書き）

ついに激突する二大ライダー、白式と打鉄

第５４話「ライダー　ＶＳ　ライダー」

みなさんおまちかねー（棒読み）

楽しい楽しい模擬戦のじかんだよ～ってのは、まぁ、いつもの事だからいいんだけどさ。
臨海学校から帰った次の日から普通に授業やられるだけでも十分キツいのに、その日の放課後からいきなり代表候補生との模擬戦……の名を借りた《白式・真打》のデータ取りやらされるとかね。
そりゃ、まぁ相手も……というか簪さんもクラスは違えど同じ一年なんだし、コンディション的には俺と変わらんだろうけどさ、せめて次の休日とかに……は？　最近研究詰めだったから土日ぐらいゆっくりしたい？

ふっざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！

「！？」

あ、いや、簪さんじゃなくて後ろに控えてる馬鹿共（研究員）の事だから。
そこのお姉さんも過剰反応しなくていいから。
俺は貴女の妹じゃなくてそこの馬鹿の事で怒ってるんだから。

「その……、私も、土日はゆっくりしたい」
「あぁ、うん。そりゃ俺もそうだけどさ」

まぁ、簪さんの気持ちも解らんでも無い。
俺だって休日ぐらいゆっくり過ごしたいし。

…まぁ、此処（ＩＳ学園）来てから休日をゆっくり過ごせた記憶が無いんだが。
ただしテメェら（研究員）はダメだ。
つうか、学生（簪さん）の主張に便乗すんな。
何が「そうだそうだ～」だ、馬鹿。

ただでさえこんな感じでモチベーション低いのに、日本側が出した条件がこれまた酷い。

唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、使用禁止

マテ。
それ、《白式・真打》が唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《質量操作》の使用を前提にした機体だって解って言ってんのか？

武装は《質量操作》で拡張領域（バスロット）内に保存してある質量を型に嵌めてその場で生成。
復元・分身は武装とやってる事は全く同じで単に型が武装じゃなくて《白式・真打》本体になっただけ。
巨大化は《白式・真打》という型を拡大して質量を詰めただけである。
武装の剥奪・再構成はについては、まず剥奪については《白式・真打》のコア自体が他のコアより上位の権限が与えられているので一方的に相手のコアの情報が閲覧出来る事と、情報を編集する権限もあるので相手の拡張領域（バスロット）内の武装の召喚先をこちらに変えてしまう事が出来る。
これが剥奪であり、再構成というのが束さんが本機を第六世代相当と類した最大の理由でもあり、仮想第五世代機の特徴である”機体全体をナノマシンで構成”というのに近い。

第四世代機の最大の特徴は展開装甲によってあらゆる状況に対応出来るという点である。
これによって例えば……ってか、第四世代機がまだ箒の《紅椿》しかないから《紅椿》で例えるしかないんだが、《紅椿》の場合、大まかに分けて　防御形態⇔通常形態⇔高速移動形態　の三形態を使い分ける事によってあらゆる状況に対応している。

勿論、その三形態以外にも細かい展開パターンがあるんだが、それはどんなに多くても予め決められたパターン数分しかない。

で、仮想第五世代機は第四世代機の形態を使い分ける事によってあらゆる状況に対応ってのを機体全体をナノマシンで構成する事によって更に発展させたもので、例えば《紅椿》でもどこか破壊されてしまえばその部位はそのままだが、仮想第五世代機は違う。
従来機なら、片方のウイングスラスターが破壊されてしまった場合、搭乗者は残りの片方だけというバランスの悪い状態で戦闘する事を強いられるが、仮想第五世代機は機体を構成するナノマシンを破壊された部位に回す事によって擬似的な再生が出来る。
再生だけでなく、その場その場で必要に応じてナノマシンを操り、機体を変化させる事によって無限の姿を持つのが仮想第五世代機だ。

それだとやってる事的に《白式・真打》って仮想第五世代機……というか、機体の姿自体を自由に変化させられないんだったら仮想第五世代相当どころか二次移行（セカンドシフト）して自力で展開装甲を構成する前の《白式・真打》は第三世代…いや、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）に頼らなかったらそれこそ”凄い第二世代機”でしかないんじゃないかって思ったんだが、束さん曰くそもそも前提が違うんだとか。
第一～五世代というのは、あくまでインフィニット・ストラトスの

話であって、《白式・真打》には当て嵌まらない。
いくら軍事用のパワードスーツに転用されたとはいえ、インフィニット・ストラトスとはあくまで宇宙での作業用に開発されたマルチフォームスーツの事であり、《白式・真打》はヤツらを殲滅する為の兵器である。
回りが勝手に兵器に祭り上げ……いや、そう仕向けたとはいえ、束さんの中ではインフィニット・ストラトスとは宇宙開発という、あくまで平和利用というか、人類の発展の為の代物であり、始めからヤツらの様な外敵を排除する為に作られた《白式・真打》とは違うんだとか。
では何故《白式・真打》が第六世代相当かといえば、”相当”とある様に単にインフィニット・ストラトスとするなら……というか、無理矢理同類として扱うならという意味で便宜上分類された世代だからである。
つまり、第六世代機とは技術的にＩＳの機能は使ってるけど、インフィニット・ストラトスでは無いものの事であり、釈然としないが束さんの移動式研究所《我輩は猫である（名前はまだ無い）》も第六世代機なんだとか。

『両者、規定の位置に着いて下さい』

アナウンスに従い、一夏と簪はピッドからアリーナの中央に移動す

る。
まだ、この時はお互いＩＳスーツを着ているだけで、機体を展開してはいない。

『両者、機体の展開を』

アナウンスに従い、二人はそれぞれ手にした待機状態の機体を腰に当てる。
一夏の《白式・真打》はバックルだけだった待機状態から、腰に当てられた瞬間ベルトを排出して装着者の身体に巻き付く。
簪の《打鉄弐型》は始めからバックルとベルトが一体化したタイプの待機状態であり、装着者にあわせてベルトの締め具合を変えた以外、変化らしい変化は無い。
ベルトの形状や仕様も、お互いのとったポーズも別々だが、宣言する言葉だけは同じだった。

「「変身」」

瞬間、白と銀の二色の光がアリーナに輝き、その姿を白の騎士と銀の騎士に変えた二人の姿がそこにあった。

考えるまでも無く、この模擬戦は一夏にとって不利過ぎた。
機能の大部分が唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）頼りである為に、復元・分身・巨大化は当然の事ながら、自前の武装すら使えない。
武装の剥奪は禁止されていないか…というか、《質量操作》でそういう機能を作っていたと勘違いされたのかは一夏には解らなかったが、それを使ってしまえば模擬戦にならない。
勘違いに合わせてやる必要は無いと、仮に武装の剥奪を使ったとしても、それなら《質量操作》による再構成も使いたいというのが彼

の心情である為、どの道使えなかった。

あ～あ、せっかく武装の剥奪が使えても再構成まで出来ないんじゃあんまり意味が無いっていうか。

何というか、一応別々の機能だってのは解ってはいるんだが、セットで使ってこそっていう固定観念みたいなものがある。

唯一仕様の特殊才能頼り（ワンオフ・アビリティー）とはいえ、せっかく仮想第五世代を超える機能とも言える剥奪した武装の再構成があるのだから、剥奪まで出来るのなら再構成までやりたくなるのだ。

仮想第五世代機の再生とかは、あくまで自前のナノマシンだけの話であり、《白式・真打》のコアの上位権限からなる情報編集による武装の剥奪と唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《質量操作》の応用パターンの一つ、再構成の組み合わせのミソは、”再構成する質量は別に自前のものでなくてもよい”という点だ。

これのおかげでシャルロットの《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》の《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》という、剥奪した”他人の質量”を《質量操作》出来たワケである。

クウガが一条さんから借りた拳銃をペガサスボウガンに作り替えたのと同じであり、敵から奪うという意味では龍騎に出て来た相手のカードを墓地送りにしてこちらが同名カードを使用出来る様になるスチールベントというカードと同じとも言える。

『両機、起動を確認。これより、日本製第三世代機《打鉄弐型》と篠ノ之博士製機《白式・真打》による模擬戦を開始します。……始め！』

…さぁて、マジでどうしよう。

一番確実なのは、武装の剥奪を行ってそれから仕掛ける事。

機体も、搭乗者自体も、パワーとスピードはこちらの方が上なのだから、武装さえ剥奪してしまえば、後はそれだけでどうにかなる。

が、それだとせっかく向こう（日本）が武装の剥奪も唯一仕様の特殊才能（オフ・アビリティー）の一環だと勘違いしてくれてるらしいのにワザワザこちらから解答を曝すのもどうかと思う。

人間相手ならまだしも、この間の《シルバリオ・ゴスペル》の件もある。

いつまたヤツらがＩＳに寄生して、こちらの情報を得ようとしてくるか解らない以上、出来るだけこちらから手札を切るのは避けたい。

幸い、《白式・真打》と《白式・影打》の二機は他の機体のコアより権限が上だから、こちらの情報を直接読まれる心配はほぼ無いだろうが、こうやって研究に付き合っている以上、いつかなんらかの形でその成果が出るハズだ。

《白式・真打》と《白式・影打》を含まない４６７……では無く、本来《白式》になるハズだったコアは束さんが預かってるらしいのでその他の４６６個のコアにそこまでの権限は与えられていないので、どこかの機体が何らかの成果を装備したが最後、その機体を直接取り込まなくてもヤツらはコアネットワークを通して他の機体からその成果を知る事が出来る。

それは避けたい。

一応、分身はどの国も真似出来なかったみたいだが、復元も巨大化も再構成もヤツらは自分でやってしまってるし、あれで分身までやられると流石にキツい。

だから、今日からの模擬戦はできるだけ武器に頼らない徒手空拳にした方が良さそうだ。

「《カイザブレイガン》」
「…おいおい、早速かよ」

簪さんが召喚した《カイザブレイガン》、その逆手になった刀身の輝きは間違いなく《零落白夜》のソレだ。
…なんだ、失敗して放置してたのかと思ってたけど、ちゃんと研究は続いてたのか。

「はぁぁぁっ！」
「っと」

振るわれた黄金の刃が容赦なく俺に襲い掛かるが、これは難無くかわせた。
…参ったな、どうも。
多分、簪さんがもともと射撃主体だったからなんだろうけど、慣れない近接様の武器のせいか、動きが随分大振りだ。
それ自体は読み安いからいいんだが、簪さんにもそれは解っているハズ。
となると俺が懐に潜り込んだところで放つ射撃で仕留めるのが狙いか。
いや、参った、ホント。
こっちは武装が全く使えないってのに、相手は使いたい放題。
しかも今手に持ってるのはあの悪名名高き《零落白夜》の刃である。

まぐれ当たりが恐すぎて迂闊に近付けやしないじゃないか。
しかも、簪さんとしては俺が離れた方が得意なワケで……。
いや、ホントどうしよう。

「せぇぇぇいっ」
「はっ…と」

チッ…、こねままじゃじり貧か。
なら一か八かで仕掛けるしかないな。

「ライダァァァパァァンチッ！！」
「はっ……くぅ」

咄嗟に簪さんは手に持った《カイザブレイガン》で顔面をガードしようとしたが、それだとこちらの思う壺だ。
右ストレートで顔面を狙いつつ、少しタイミングをずらして放った左のボディブローが簪さんの鳩尾を捕らえる。
勿論、こっちは唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）は使用不可なので、当然拳に擬似的な《零落白夜》は込めていない。
だから当たっても痛いだけ。
今ので核心したが、やっぱり簪さん、射撃に特化し過ぎて近接がダメっぽい。
でも、本人にもその弱点は解っているハズだ。
さて、どんな対策を練ってきた？　簪さん。

第５４話「ライダー　ＶＳ　ライダー」（後書き）

次回、決着

第５５話「ダブルライダー」（前書き）

仮面ライダー白式　ＶＳ　仮面ライダー打鉄　ついに決着……が着いたところであの人が（笑）

第５５話「ダブルライダー」

「当たって…！」
「たまるかよ！」

《カイザブレイガン》の…しかも《零落白夜》付きの斬撃をバックステップでかわした途端、かわされる事を予期していた簪さんが発砲。
こっちも多分そうしてくるだろうなとは思っていたので、なんとか対応は出来たが直撃を免れただけで全弾被弾。
危ねぇ…。
コレ、もし展開装甲起動させて高速移動形態になった時に喰らってたら今のでも十分致命傷になったかもしれん。
《白式・真打》の展開装甲はは二次移行（セカンド・シフト）を経て自力で開発したものだから、使ってもルール違反にはならない。
が、今回のルールに唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）の使用不可とある以上、《質量操作》によって擬似的に構築した《零落白夜》の発生機関も使用どころか生成の時点でルール違反だ。
《白式・真打》の高速移動形態は擬似《零落白夜》によるエネルギー兵器に対する鉄壁の防御と《質量操作》による復元を前提としているので、紙とまでは言わないが、装甲を展開して《零落白夜》を噴出する以上、通常形態よりも装甲に覆われていない部位が増えるので機体そのものの防御力は落ちる。
特殊機能頼りの鉄壁であるが故に、今回の特殊機能無しでの使用は自殺行為に成り兼ねない。
《白式・真打》が某天使なガンダムみたいに装甲が無くてもＯＫなゼロフレーム仕様ならダメージを気にせず突っ込んでも良かったんだが、生憎こっちのは装甲の下には専用のＩＳスーツがあるだけ。
そんな状態で突っ込んだりなんかしたらガリガリとシールドエネル

ギーを削られて負ける。
しかも向こうには《零落白夜》があるから、ガリガリどころか一発KOだって十分ありえるのだ。

やべぇ…、マジどうしよう。

燃費の悪さぐらいしか欠点らしい欠点の無い《零落白夜》だが、その燃費の悪さこそが最大の弱点である。
戦闘用と開発用の違いなんだが、《白式・真打》のコア自体の保有エネルギーと他のコアの保有エネルギーでは《白式・真打》の方が圧倒的に保有エネルギー量が多い。
だからこそ、今までエネルギー切れで負けた事は無かったが、だからといってエネルギーに余裕があったのかといえばそうではなく、実際保有エネルギーが尽きかけて《ボルティックシューター》が撃てなくなった時があったりした。
だから簪さんに《カイザブレイガン》の《零落白夜》を頻繁に使用させてエネルギー切れに追い込むのも一つの手なんだが、あまり上手くいく気がしない。
まず、簪さんが《カイザブレイガン》で斬撃を仕掛けてくる間合いと、それを俺が避ける為の間合いの取り方が難しい。
いくら簪さんが近接戦が不得手とはいえ、近付き過ぎると致命的な一撃を貰ってしまうし、かといって避ける方に集中し過ぎて距離を取り過ぎると簪さんは《零落白夜》を使ってくれない。

じゃあ他に何かいい方法があるのかと聞かれれば解らないとしか応え様が無いからさっきからこうして近付いては斬られそうになってを繰り返しているんだが、《零落白夜》の斬撃はかわせても、かわした直後に放たれるビームの弾丸に当たりまくってそろそろダメージが洒落にならん事になって来ている。

「はっ…」
「《クレーンアーム》」
「なっ！？」

今度は斬撃を回避した直後に簪さんが召喚したアンカーみたいなのに捕まって……って、《クレーンアーム》って何！？

「？……織斑君、バース知らないの？」
「誰ソレ？」
「今やってる『仮面ライダーオーズ』の二号ライダーなんだけど…」

えっ…、二号ライダー出るとこまで話進んでたの！？
クソッ、最近皆との付き合いで忙しいからって途中から見ずに録画だけしてたのがアダになったか！

「織斑君が知らないなら…いける！　《ドリルアーム》」
「うおっ」

危なっ！
何？　そのバースってのドリルまで使うの？
ゲッター2かよ！！

「ちいっ！　《セイリングジャンプ》」
「逃がさない！　《カッターウイング》」
「がぁっ！！？」

無理矢理ワイヤーを引きちぎって巻き付いていた《クレーンアーム》の拘束を破り、《セイリングジャンプ》まで使って離脱するも直後に簪さんが召喚した《カッターウイング》とかいう翼に装甲の薄

い脇腹を裂かれて墜落する。
ってかどんなライダーなんだよバースって！

「《ブレストキャノン》」
「ちょっ……がぁぁぁっ！！？」

墜落した後慌てて俺が立ち上がる頃には簪さんは次の武装の発射体制に入っており、強烈な一撃を貰ってしまったせいでシールドエネルギーの残量が四割に突入。
マズい！

「《ショベルアーム》」
「って、そう何度も喰らってたまるかよ！」
「あぁっ！？」

振り下ろされる《ショベルアーム》を上手く誘導し、無理に腕を捻らせる様に関節をキメる。
たまらず関節技から逃れようと簪さんが《ショベルアーム》を消したところで簪さんを逃がさず腕を掴んで引き寄せ、膝蹴りを鳩尾に食らわせ、身体が”く”の字に折れ曲がったところで両手を握り合わせてハンマーの様に後頭部に振り下ろす。
…喧嘩殺法というか何というか、完全に生身の女の子にやっていいようなやり方じゃない様な気がしないでもないが、なりふり構ってたらこっちが負ける。

だから、ここから一気に…。

「《バイタルチャージ》」
「くっ…、《ドリルアー…そんな！？」

《バイタルチャージ》によって一時的に出力を上げ、慌てて簪さんが突き出した《ドリルアーム》のドリルを握り潰す。

「このっ」
「甘い」
「えっ……あぁぁぁぁぁ！！？」

薙ぎ払う様に振るわれた《カイザブレイガン》の刃をかわし、かわした直後に引ったくって逆に切り付けた。

武装の剥奪機能を使ってないので普通は他人の武装だと使用許可（アンロック）が必要なんだが、近接系の武器の場合、使用許可（アンロック）が無くても使うだけなら出来ない事もない場合ってのが結構ある。
といってもまぁ、普通折れた刃を拾って投げ付けるとかがせいぜいで、今回の様にまるごと武装を引ったくれる事は稀だ。
それにまるご引ったくれても今俺が持ってる《カイザブレイガン》の様にすぐにエネルギー切れ……というか使用許可（アンロック）の無い機体からのエネルギー供給を受け付けずに黄金の刃は消失し、銃としても使えなくなってしまったが、一瞬でもこちらが《零落白夜》を使えただけ御の字だろう。

「ライダァァッチョォォプ！！！」
「あああああああああっ」

《バイタルチャージ》によって威力を上乗せしたライダーチョップを左肩から右脇腹にかけて切り裂くかの様に喰らわせると、《打鉄弐型》の胸部装甲が火花を上げ、チョップを喰らった箇所が一部砕け散った。
一瞬意識が飛んだのか、膝から崩れそうになった簪さんの首と足を

掴んで持ち上げる。

「ま…、まさか…」

「そのまさか、だ」

声色だけで青ざめた事が容易に想像出来て、なんだか罪悪感が湧いてきたが、敵である以上、〝あまり〟容赦はしてやれない。

「ライダァァァァッ、きりもみシュゥゥゥウト！！！」

「やっぱりいいいいいいいいっ！！」

まるで竜巻の様に何度も回転させて上空に投げ飛ばし、

「《セイリングジャンプ》」

投げ飛ばした簪さんよりも更に上空に飛んで、

「これで、終わりにする！　ライダァァァァッキィィィィィィィィック！！！」

「が！？　ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ……がはっ」

上空に投げ飛ばされた勢いと、上空から落下する様に放った蹴りの勢いで挟み打ちにしてダメージを倍増させ、そのまま上空から踏み付ける体制のまま急降下して……流石にそのまま地面と挟み打ちにするのは気が引けたので、途中から自分だけ離脱し、簪さんが地面に激突した数秒後に、ゆっくりと着地した。

『更識簪、絶対防御の発動により気絶。勝者、織斑一…ガガガガガ』

「は？」

わ～い、嫌な予感しかしねぇ…。

「ハーハッハッハッ、ひっさしぶりだなぁっ！　一夏ぁ！！」
「って、またですか！　オータムさん！！」

…やっぱ来ちゃったよこの人。
あ～もぅ、こっちがエネルギー切れ起こすタイミング見計らってたな、こりゃ。

「さぁて、用件はいつも通りだから一々言わねぇ！　今度こそこっちに来てもらうぞ、一夏ぁ！」

言うとる言うとる。

「いくぜぇ！」
「ちぃっ」

言うや否や、オータムさんがいきなり発砲してきたマシンガンの銃弾の巻き添えを喰うと洒落にならないので倒れていた簪さんを抱えて逃げる。

まだＩＳが起動していたならオータムさんの注意をこっちに引き付けるだけで良かったんだが、簪さんが気絶したと同時に《打鉄弐型》は待機状態に戻ってしまっているのでそういうワケにもいかない。

くっそ…、ただでさえエネルギー残量が少ないってのに両手が塞がってるからどうにもならん！

「ハハッ、ほらほらどうしたぁ！」

「えぇいっ！　卑怯者ぉ～！」
「ハッ、悪党が卑怯で何が悪い」
「納得の理由だなぁオイ！」

やべ、マジでどうしよう。

「ん…んん、……え？」
「あ、起きたか」
「え、織斑君？　……！！？　えっ、え、なんで私お姫様だっこされ…」
「だぁー！　暴れるなって！　今ヤバいんだから」
「え？　……！？　また襲撃！！？」
「そういう事」

起きた途端暴れだした簪さんも、状況を把握して大人しくなった。
が、

「お、織斑君！　私を抱えたままで逃げるなんて無理だよ！　だから織斑君だけでも…」
「阿保」
「あ…、阿保って」
「あのなぁ、簪さん。そりゃ、確かに今の俺はバッタもんか……良くて見習いだけどさ、それでも俺はライダーなんだ。なのに、ヒーローが女の子ほったらかして自分だけ逃げていいワケ無いだろ」

自分を置いて逃げろだなんて馬鹿げた事を言うもんだから、つい妙な事を口走ってしまった。
ってか、ヒーローとして以前に、男として矜持があるし。

「…だったら」

「？」
「だったら、私も戦う。私だって、仮面ライダーだから！」
「…大丈夫なのか？」
「うん、エネルギーは半分しか無いけど、機体の方はまだ使える」
「…解った。じゃあ、今日は俺と簪さんの二人でダブルライダーだ。…いけるな？」
「うん！」

まぁ、俺みたいなのがライダーなんて名乗った以上、簪さんだけ認めないワケにはいかないよな。

「変身」

俺の腕から飛び出した簪さんは、一瞬銀の光に包まれ、《打鉄弐型》を纏……いや、仮面ライダー打鉄に変身した。

「いくぞ！」
「うん！」
「ハッ、たかが一人増えたぐらいで！」

さぁて、オータムさん。
即席とはいえ俺（仮面ライダー白式）と簪さん（仮面ライダー打鉄）のコンビに勝てると思うなよ？

第５５話「ダブルライダー」（後書き）

思い出のライダーきりもみシュート再びｗｗｗ（トラウマ的な意味で）

第５６話「蜘蛛の巣」（前書き）

すいません、活動報告にあったとおり、少々風邪を拗らせまして投稿に少し感覚が開いてしまいました

第５６話「蜘蛛の巣」

「来ぉいっ、《アラクネ》！！！」

呼び出し（コール）のコマンドを言い切る前に反応した機体は操縦者の意思に応え、自らを操縦者の身に纏わせる。

機体名の由来ともなったその八本の脚を蠢かせる毒蜘蛛は血を連想させる毒々しい赤に身を染め、まるで突き刺すかの様に一気に脚を伸ばしながら跳躍し目の前に立ちはだかる二人の騎士に襲い掛かった。

「このっ」

「しゃらくせぇっ！！」

白の騎士こと、《白式・真打》を纏った織斑一夏が召喚した《ギガント》の四連装ミサイルは目標を捕らえる前にあっさりとワイヤーブレードに切り裂かれて爆散し、

「当たって！「やる馬鹿がどこに居るってんだ？　アァ！？」」

銀の騎士こと、《打鉄弐型》を纏う更識簪が放った《カイザブレイガン》のビームを地面に打ち込んだワイヤーカッターを手繰り寄せる様に落下の進行方向を変えてかわして着地した。

着地と同時に召喚した銃剣型のマシンガンを撃ちながら毒蜘蛛はビームをかわしながら一気に銀の騎士に迫り、その剣を振り下ろす。

「らぁぁぁぁぁっ！！」

「くぅっ」

「そぉら、もういっちょおっ！！！」
「！？　あぁっ！！？」

振り下ろされた銃剣の刃を《カイザブレイガン》の刃でなんとか受け止めた簪だったが、《アラクネ》の武装は銃剣だけでは無い。至近距離で射出されたワイヤーブレードによってバランスを崩したところでマシンガンの銃弾を浴びてしまった簪は慌てて《カイザブレイガン》を振るうが、掠りもしない。
模擬戦を見ていた為にオータムにとって簪の太刀筋は既に読まれていた事もあるが、そもそも簪自身が近接戦闘を得意としていないのだ。
今回の模擬戦では（所属研究所では）初めてイメージインタフェースを利用した特殊兵器として再現出来た擬似《零落白夜》を搭載した《カイザブレイガン》と、新たに簪が開発した新装備のテストを兼ねていた為に近接戦主体な武装が多いが、本来《打鉄弐型》は搭載者に合わせてクラス代表トーナメントで見せた様な圧倒的火力で敵を殲滅する事を主眼に設計された機体である。
《白式・真打》の”素人でも百発百中させる補助プログラム”の様に、《打鉄弐型》にも”素人でも達人並の動きが出来る様な補助プログラム”が搭載されていれば斬撃は当たっていただろうが、ただでさえＶＴシステムの禁止によってその手の研究は敬遠されがちなのに先日のドイツが模擬戦で投入したＶＴシステムの暴走や、その使用に対する篠ノ之束による制裁もあって業界内では完全に基本プログラム以上の動作補助プログラムの研究はどこの研究所でもストップしてしまっており、簪の所属する研究所もまた簪用に近接戦用の補助プログラムを開発してはいたものの開発途中で起きたドイツの事件によって開発は中止に追い込まれてしまい、現状では簪自身の格闘能力に頼るしかない。

故に…、

「そらそらぁっ！！！」
「あぁっ！？」

この苦戦は必然。
数回の斬撃は辛うじて《カイザブレイガン》の刃で受けたものの、受け切れず後退するばかり。
他の武装に切り替えようにも、《ドリルアーム》も《クレーンアーム》も《ショベルアーム》も、近接戦が不得手な簪が振り回すには重過ぎた。

「わっ、私だって…」
「当たらねぇつってんだろうがぁっ！！」
「私の”銃”は一つじゃないっ！」
「おおっと…なんだ、やれば出来るじゃねぇか！」

《カイザブレイガン》の斬撃も射撃もかわされ続け、自分ばかり攻撃を喰らう。
流石にこのままではと、新たに左手に銃を召喚した。
その名を《カイザフォン》、またの名を《フォンブラスター》といった。

「このぉおおおっ！！！」
「くっ、テメェ調子に乗ってんじゃ　「俺の事、忘れてないか？」
なっ！？　一夏！！？」

《カイザブレイガン》と《フォンブラスター》から放たれる二条の光線がオータムが手にした銃剣型マシンガンを貫き、更に背後から

《インビジブル》を使用して忍び寄った一夏の《電磁ナイフ》による斬撃を直感でかわす。

「ハッ、姿が見え無いぐらいでどうにかなると思うなよ！」

「ちぃっ」

そううそぶくものの、斬撃をかわせたのも、《インビジブル》で姿を消したままの一夏をワイヤーブレードで捕らえられたのも、全くの偶然。

もう一度やれといわれて出来る芸当では無い。

だが、たった一度で十分だった。

「電撃はテメェだけの技じゃねぇんだぜ！　一夏ぁ！！！」

「がぁぁぁぁぁぁっ！！？」

「お、織斑く　「テメェもよそ見してる場合じゃねぇ！」　あぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

《白式・真打》の《エレクトロファイヤー》を参考に電撃を仕込んだワイヤーブレードが二人を捕らえ、更に

「《アラクネ》の名前は伊達じゃねぇ！！」

機体全体から放ったワイヤーブレードがアリーナ全域にまるで蜘蛛の巣の様に張り巡らされ、一夏と簪をがんじがらめに捕らえ、二人は身動きが全く出来なくなってしまった。

「…ダメッ、《打鉄弐型》のパワーじゃ引きちぎれない！？」

「くっそ…、オータムさんがこんなに強かったなんて…」

「どぉだぁ一夏、ちったぁ見直したか？」

「えぇ、それはもぅ……クッ」

張り巡らされたワイヤーブレードの巣に絡まる事無く、悠然と佇むオータムは得意げに笑う。
隙だらけ、ではあるのだが簪の《打鉄弐型》では搭乗者の言う様にパワー不足で拘束から抜け出す事が出来ず、一夏の《白式・真打》に至ってはパワーはともかく完全に動きを封じられてしまっている為に引きちぎる以前の問題だ。
《大切断》を繰り出そうにも前腕部分の装甲が展開出来ない為に刃を形成出来ず、《ヒールクロウ》は出せるには出せるが、踵だけ拘束を逃れても何ら意味が無い。

（マズい、このままだと……クソッ、巨大化どころか分身を操作するエネルギーがもう無い）

確かに巨大化や分身が出来れば、この拘束から逃れられただろうが、使用にはそれ相応の…巨大化には巨大な物体を動かすだけの、分身にはその数の機体を動かすだけのエネルギーが必要になる。
だが、簪との模擬戦でのシールドエネルギーの消費と更に《バイタルチャージ》によるオーバードライブによる過剰消費も相俟って既にエネルギー残量は二割に達してしまっている。

「俺の《白式》は一つじゃねぇっ！！」
「なっ…、しまっ」

《白式・真打》を一旦待機状態に戻してワイヤーブレードが緩んだ隙に脱出、そして即座に展開した《白式・影打》でワイヤーブレードの巣をかい潜りながら飛行して簪の元にたどり着いたところで《雪片弐型》で簪に絡まったワイヤーブレードを切り裂いた。

「簪さん、《カッターウイング》を！！」
「う、うん！」
「ちぃっ」

一夏が振るう《雪片弐型》の斬撃が、簪が召喚した《カッターウイング》の刃がワイヤーブレードの巣を切り裂き、二人はオータムに向かって突進して行く。

「だぁぁぁぁぁぁっ！！」
「くっ…、なぁっ！？」

《雪羅》から放たれた荷電粒子砲に気を取られたところに《ブレストキャノン》の砲撃が《アラクネ》を捕らえ、遂に毒蜘蛛は自身の張った巣から転がり落ちた。

「この程度でぇ！！」
「うぉっ！？　……なっ、クソッ、ワイヤーが」

しかしオータムもただやられっぱなしでは無い。
墜落しながらも召喚したもう一つの銃剣で《白式・影打》のウイングスラスターを撃ってバランスを崩させ、まだ残っていたワイヤーブレードの巣に絡ませる。

「ちぃっ、この狭い中じゃウイングスラスターが邪魔に」
「さぁて、今度という今度こそお前を…」

そう言って、構えた銃剣を、

「私だっているんだから！」

「ちぃっ……邪魔なんだよ！」
「あぁ！？」

簪の振るった《カイザブレイガン》の刃が切り裂き、一夏の窮地を救うものの、顔面をアームで殴られて地面に転がる。
フルフェイスのヘルメットだったからこそ顔は無事だったが、殴られた右目のバイザーが砕け、搭乗者である簪自身の目が覗いていた。

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ」
「くうっ……どわっ！！？」

拘束を解く為に再び機体を待機状態に戻した一夏は《白式・真打》を起動させながら腕に《スーパー大切断》を形成しつつ地面に急降下し、急降下の勢いと刃の切れ味を以って《アラクネ》の脚を三本根本から切断してそのまま回し蹴りでアリーナの壁まで蹴り飛ばした。

「大丈夫か」
「う、うん。なんとか…でも織斑君の《白式・真打》は…」
「あぁ、エネルギーがもう少ない。それに、この狭い空間だと《白式・影打》じゃあ自由に動き回れない」

「そんな…、それじゃあ…」

一見、有利に事が進んでいる様に見えるが、《白式・真打》も《打鉄弐型》もエネルギー残量がもう少ない。
《白式・影打》の方はまだ余裕があったが、まだワイヤーブレードの巣が残ったこの空間では自由に飛び回るどころか、ウイングスラ

スターが邪魔でロクに動き回れずに仕留められるのがオチというこの現状。
しかし、彼はそんな状況でも不敵に笑って見せた。

「大丈夫だ、問題無い」
「全然大丈夫そうじゃないよ、ソレ！？」
「まぁまぁ……ちょっとくすぐったいぞ？」
「え？　何を……！？」

簪の背後に回り、そっとその背に触れる。
その瞬間、《打鉄弐型》は再構成によってより《白式・真打》に近いデザインに変わった。

「なっ…コレって」
「驚いてる暇は無いぞ。その状態を維持するのにもエネルギー喰うからな」
「わ、わかった」

巨大化や分身を造る質量自体はある。
だが、巨大化なら巨大化した機体を、分身なら自分と分身を動かす為のエネルギーが足りない。

一人で突っ込むか？
いや、それだと今のオータム相手なら返り討ちにされそうな気がする。

片方を囮にするか？
その方が確実だけどどちらを囮に？
当たれば確実に仕留められるのは一夏の方だが、そうなると簪が犠牲になる。

この損傷で囚役なんかさせたら最悪、怪我じゃ済まなくなるかもしれない。
なら一夏が囚に……なるのはいいが、さっきの模擬戦で《ドリルアーム》は一夏が壊した後で、《カイザブレイガン》はまだ心許ない。《ブレストキャノン》なら……と、一夏はハイパーセンサーで《打鉄弐型》のエネルギー残量を調べたが、《ブレストキャノン》を撃つには少々足りない。
なら、エネルギーはある分だけで戦わなければならない。
《白式・影打》から《白式・真打》へとエネルギーを供給し、その後分身して仕掛けるのも一つの手ではあった。
だが、そうするには少し時間が足りそうにない。
そうするよりも減り込んだ壁からオータムが脱出する方が早いだろう。
だから、再構成を《打鉄弐型》に掛けて一時的にパワーアップさせ、出力を《白式・真打》と同等に引き上げる。
次の一撃で両機ともエネルギー切れを起こすと《白式・真打》のハイパーセンサーが告げていたが、しかし確率的にはこうした方が確実であると計算結果が出ている。
成功率は六割。
残りの四割は二人の疲労、そして簪がいきなり《白式・真打》と同等までパワーが引き上げられた機体を使い熟せない為に失敗。
というのが考えられる失敗の要因だが、大丈夫だろうと、一夏は思った。
今の二人は、仮面ライダーなのだから。
「さぁて、簪さん。”最後の一撃”といえば、わかるよな？」
「うん、アレだね」

「あぁ、いくぞ！」
「うん！」

言葉を交わし、二人同時に飛び上がって、そして…

「っうぅ～、クソッよくもやりやがっ……なぁっ！！？」
「「ライダァァァァッダブルキィィィィィィック！！！」」
「どわぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

壁から脱出し、一夏に飛び掛かろうとしたオータムを二人の足が蹴り飛ばした。

「やった…ね」
「あぁ」

ギリギリだったな、ホント。
アレが避けられてたらマジで危なかったわ。

「アレ？」
「…っと、エネルギー切れか」

あぁ、ホントにギリギリだったみたいだな、こりゃ。
多分今のでエネルギー切れを起こした《白式・真打》が勝手に待機状態に戻って、それに伴って簪さんの《打鉄弐型》も元の姿に戻って待機状態になった。

「はぁ…、危なかったな、ホント」
「そう…、だね。機体はエネルギー切れだし、私ももうヘトヘト…」
「俺も」

二人してアリーナの地面にへたりこんだ。
正直、もう動きたくない。

「あぁ、オータム、そろそろ代わって貰っても構わんだろう？」
「ちっ…、好きにしろ」
「「！？」」

なっ…、何処からって、いつの間にオータムさんアリーナの出入口に！？
出入口が使えるって事は、アリーナのシールドも通常レベルに戻ったのか？

「お、織斑君！　アレ！」
「なっ、《ブルー・ティアーズ》！？　いや、でも形が…」

簪さんが指差した方向、オータムさんが逃走に使った出入口と逆方向の出入口から飛び出した六機のビットがワイヤーブレードをかい

潜りながらアリーナを飛び回る。

「会いたかった……会いたかったぞ、一夏」

そう言って、出入口から侵入してきた新たな襲撃者は青いＩＳを身に纏ってゆっくりとこちらに向かって歩いて来る。
会話の内容からして、オータムさんの仲間なんだろうか？

身構える俺達の前で立ち止まった新たな襲撃者はバイザーを取って、その顔を……俺にとって見覚えのあり過ぎるその顔を見せつける。

「な…、お前…」

どうして、千冬姉にそっくりなんだ。
とまで言葉が出なかった。
あまりの出来事に動揺してしまい、ただその顔を見つめる事しか出来ないでいる俺に向かって、新たな襲撃者は言い放つ。

「そうだ、私がお前のお姉ちゃんだ！！！」

「「……」」

なんかもう、いろいろと台なしだった。

第５６話「蜘蛛の巣」（後書き）

次回、

姉、参上！

第57話「姉、参上!!」（前書き）

すいません、いつも夜中に執筆→登校中の電車内で執筆&投稿してるんですが、慌てて家を出たせいで携帯を忘れてしまい、投稿がかなり遅れてしまいました

第57話「姉、参上!!」

「そうだ、私がお前のお姉ちゃんだ!!!」
「「……」」

なんかもう、いろいろと台なしだった。

「さぁ、一夏。お姉ちゃんの胸に飛び込んで来い」
「え…、いや、あの…」
「さぁさぁ、恥ずかしがる事は無いんだぞ?」
「いや、だから…」

つ〜か、アンタ誰よ?
マジでこの人も姉なの?
いや、だとしたらなんで今まで俺と千冬姉の二人暮らしなのさ?
生き別れの家族……なら、千冬姉も必死になって捜すよなぁ。
小さい頃の俺を悲しませたく無いからって可能性も無くは無いんだが……あ〜、でもだったら今まで黙ってるのも変だし…。

オータムさんいつもあんなだけど、亡国機業(ファントムタスク)って一応世界的な犯罪組織なんだし、そこの所属って事は……千冬姉のクローンか? この人。
いやでも人間のクローンってマンガじゃあるまいし……あ、マンガみたいな存在(IS)が普通にあるんだからクローンも有りなのか? 倫理的にはともかくとして。
でもクローンってたいてい「お前らだけ幸せな環境でのうのうと暮らしやがって」みたいな理由でオリジナルとかその回りの人らとかに当たりそうなもんなんだが…。

それこそマンガの見過ぎか？
う～ん、謎だ。
ってか、まず……、

「…あの、お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」
「ん？　そうか、まだ名乗って無かったな。私の名はマドカ、織斑マドカだ」
「はぁ、マドカさんですか…」

やっぱり聞き覚えの無い名前だな…。
見た目的に俺と同い年ぐらいか？　このマドカって人。

最強のＩＳ操縦者として名を馳せた千冬姉を亡き者にしようとした襲撃のせいで生き別れた俺の双子の姉か妹…なワケ無いか。
第一、千冬姉がＩＳ動かす前から俺と千冬姉は二人暮らしだったし。
いやでも千冬姉、俺が顔も覚えて無い様な両親の事についても何も話さないし……死んだ、とは聞いて無いからなぁ…。
でもだったらなんで……もしかして、両親が亡国機業（ファントムタスク）側だったりするのか？
で、千冬姉は幼い俺だけ連れ出してなんとか逃げ延びた、と。
いやいやいや、だったら普段から刺客が……って、来てたな、オイ。

マジか、マジなのか？

マジで肉親が悪の組織のっていう……。

「どうした？　…ははっ、さては恥ずかしがってるんだな？　全く、一夏はしょうがない弟だな……どれ、そういう事なら私から…」
「え、あの…」

ぎゅっ、と抱きしめられたその場面だけ見れば、誰だって感動の再会に見えただろう。
俺だってそうだ。
…ただし、

「クンクンハァハァ、あぁ、これが一夏の臭い…」

こんな台詞が耳に入らなければ、だが。
ＯＫ解った。
本当の肉親なのかクローンなのかは解らんが、取り敢えず変態さんだって事はよ～く解った。

「一夏の汗…ペロペロ」
「ちょっ、待っ…、何やってんだアンタ！！？」

「？」

うん、混乱のあまり抱き着かれたり頬刷りされたりするのを放置したのが間違いだった。
汗まで舐めるか？　普通。
その…夢の中だったら自前の《雪片弐型》を白式さんやレーゲンちゃんに舐められたりしたんだが……って、待て。
こんなピッチリしたモン（ＩＳスーツ）着てるのにそんな事考えたりなんかしたら簪さんにバレるから！
鎮まれぇぇぇぇぇっ……ってかマドカさん、ハァハァ言うのヤメテェェェェ！！
えぇいっ、俺の回りの女は暴力か変態行為に走るヤツしかおらんのか！？

「…お姉ちゃん、だと？　貴様が？　ハッ、寝言は寝てから言え、たわけが」

強烈なプレッシャーを発しながら更にアリーナに介入して来た人物は……うん、考えるまでもなく千冬姉だった。
今マドカさんに抱きしめられて見えないけど、多分千冬姉すっげぇ怒ってるっぽいよ、この気配は。

「…ほぅ、漸くお出ましか。織斑千冬」
「……あぁ、貴様が何処の誰かなんかどうだっていい」

千冬姉、会話が噛み合って無いぞ。

「どうだっていい、とはまた酷い言い草だな」
「だが、一夏の姉は他の誰でもない！　この私だ！！」
「だから人の話を……いや、確かにそうだな。一夏の姉はただ一人でいい…」

途端、アリーナ中に濃密な殺気が充満しだして、俺も、簪さんも、まるで蛇に睨まれた蛙の様に動けなくなってしまう。

「一夏、少しの間だけ離れてろ。すぐに終らせる」
「更識、さっさとアリーナの隅に移動しろ。巻き添えを喰いたく無かったらな」

言われて、すごすごとアリーナの隅に退散した俺達を余所に、二人は文字通り激しい火花を散らす。
千冬姉は教員用に……というか多分、教員用程度じゃ機体が追い付

かないだろうから実質千冬姉の専用機と化した《打鉄》を、自称俺の姉のマドカさんは《ブルー・ティアーズ》によく似た機体を操り、二人ともとても俺じゃあ出来ない様な複雑な軌道で飛び回る。
《アラクネ》の残したワイヤーカッターの巣をかい潜りながら、だ。
そりゃあ、俺と簪さんが《雪片弐型》と《カッターウイング》で切り裂いたから、張り巡らされた当初と比べ、多少は動き安くなってるかもしれないが、それでもあんな速度で飛び回るなんて無理だ。

「はぁぁぁぁぁぁっ」
「…っと、流石だな」
「貴様に褒められても嬉しくないな」
「違いない」

流石はブリュンヒルデというべきか、あのビットの猛攻を全部かわしながらビットを一機、また一機と切り伏せていく千冬姉はホントに凄くて……。
一方、そんな千冬姉を相手に戦っているマドカさんも負けてない。
他の人はどうか知らんがセシリアは自分が止まってないと動かせないって言ってたのに、マドカさんは自分も動きながらでこの早さだ。
並の操縦技術ではない。

ってか、たしか《ブルー・ティアーズ》を開発したイギリスの中で一番ＢＴ兵器の扱いが上手いからってセシリアが《ブルー・ティアーズ》の搭乗者になったハズなのにあんなに上手く動かせるものなのか？
《白式・真打》の分身みたいに大まかな指示を搭乗者がやってあとはＡＩが自分で判断…っていうのならまだしも……。
いや、でもそこまで高度なＡＩをプログラム出来る人ってそうそう

いないハズなんだが…、ってか、束さん以外にそこまで出来た人なんているのか？

「凄いね、織斑先生…」

「あぁ…」

俺がそんな事を考えている内に千冬姉がまた一機ビットを切り伏せて、マドカさんがもった銃から放たれたビームをギリギリのところで千冬姉がかわし……たと思ったらいつの間にか千冬姉の後に回っていたビットから発射されたビームが千冬姉の《打鉄》の肩の辺りに浮かんでいるアーマーを貫いて……。

……え？

千冬姉が、当てられた？

マジかよ…、どんだけ強いんだよマドカさんは…。

「ふんっ」

「ちいっ…（今のでビットが全部やられたか……流石、と言うべきなんだろうな。認めたくはないが）」

「堕ちろ」

「断る！」

ついにビットを全部撃破され、一瞬苦い顔をしたマドカさんだったが、すぐに気を取り直して千冬姉が放ったマシンガンをかわして見せた。

千冬姉もかわされると読んでいたのか、マドカさんが回避行動を取るのと同時に瞬時加速（イグニッション・ブースト）で詰め寄って、近接ブレードをマドカさんの脳天目掛けて振り下ろす。

「くっ」
「ちっ……」
辛うじて瞬時加速（イグニッション・ブースト）が間に合い、斬撃をかわす事に成功したマドカさんだったが、続けざまに放たれたマシンガンの弾を喰らって怯んでしまう。
千冬姉がその隙を見逃すハズも無く、再び瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使って更に間合いを詰め…、
「しまっ……ガハァッ！！？」
まるで胴を両断するかの様な勢いで……いや、あくまで例え話であって実際に真っ二つになっちゃっいないんだが、痛撃を喰らったマドカさんは墜落途中でワイヤーブレードの巣に引っ掛かり、地面に激突こそしてはいないものの、あまりのダメージで起き上がるのも儘ならないみたいだ……って、もしかしてアレ、絶対防御が効いてるのに無理矢理意識を保ってんのか？
「くっ……うぅ」
「ほぅ、アレを喰らってまだ意識を保っていられるか」
「あ…り……だ。わた…は、一、夏の…」
凄い、執念だ…。
でも、なんでそこまで俺に執着してるんだ？
「あ……一、…」
でも、それもつかの間、遂にマドカさんは意識を失って……って危ない！！　落ち…

「なっ」
「うわっ」
「きゃ」

千冬姉が落ちるマドカさんに手を延ばそうと、
俺が慌てて《白式・影打》を展開しようとした、その時、強烈な光がアリーナ内を埋め尽くした。
くっ……スタングレネードか！？

「悪ぃな、コイツはこっちで回収させてもらうぜ。じゃあな」
「ま、待て……ちっ、逃がしたか」

これが俺と、マドカさんという自称姉との初めての出会いだった。

※おまけ

「…なぁ、出番無しで終わるのって何話目だ？」
「さぁ……」
「…三話分ぐらい、じゃありませんか？」
「あははは…、はぁ」
「むぅ…」

五人の少女が囲む食堂のテーブルはどんよりとした雰囲気に包まれていた。

「私はまぁ、最初の方は出番が殆ど無かったから多少慣れてはいるが…」
「はぁ…」
「「「「「…出番、欲しいなぁ」」」」」

第57話「姉、参上!!」（後書き）

今回、マドカさんの話があまり膨らまなかったのでここで切る事にしました
次回はやっとヒロインズの出番が……来るのかなぁ

第５８話「ランチタイム」（前書き）

やっと通常通り朝に投稿できた…

第５８話「ランチタイム」

日本の代表候補生、更識簪の《打鉄弐型》との模擬戦、そしてその直後に現れた亡国機業（ファントムタスク）からの刺客、オータムの《アラクネ》との交戦を経て、更にまた新たに現れた彼の姉を自称する亡国機業（ファントムタスク）の刺客、Ｍこと織斑マドカが乱入し、織斑一夏は窮地に立たされた。

いくら機体性能が他の追随を許さない圧倒的なものであるとはいえ、肝心の機体、《白式・真打》が二度の連続戦闘でエネルギー切れを引き起こしていてはどうしようも無く、エネルギーにまだ余裕のあった《白式・影打》では機体性能はともかく搭乗者の技量的に先の《アラクネ》との交戦時に張り巡らされたワイヤーブレードの巣をかい潜りながらの戦闘は不可能。

そんな中、（多分に他意が有ったとはいえ）彼の窮地を救うべく教員用の《打鉄》を纏い現れた彼の姉である織斑千冬の手によって織斑マドカと名乗る刺客は撃退され、オータム共々組織へ逃げ帰った。

そこまでなら、めでたしめでたしで話は終わったのだろうが、あいにくこれは彼らにとって現実に起こった事件であり、当然その続きがある。

まず、亡国機業（ファントムタスク）が爆発物等の危険物を仕掛けていないかの確認作業、そしてその後のアリーナの修復作業……普段なら地面に敷き詰められた土を平らに均すぐらいで済むところを、今回は《アラクネ》が張り巡らせたワイヤーブレードの巣の撤去もその範疇に含まれており、流石にＩＳを複数体絡めても戦闘中に撃ち込まれた部分から抜ける事が無かっただけあって、撤去作業が難航した。

結局、数体程度のＩＳのパワーでは引き抜く事が出来なかった為に撃ち込まれた箇所を破壊してワイヤーブレードを回収し、破壊した箇所の修復作業に……と、仕事が増え、それらの作業を全部手伝う

ハメになった事件の中心人物、織斑一夏が宛がわれた自室に戻った頃にはもう、時計の針が日付の移り変わりを告げていた。
ただでさえ、二度に渡る戦闘で…一度目の特殊機能抜きでの不利過ぎる戦闘、そして二度目のほぼエネルギー切れに近い状態からの実戦で疲労困憊だったところに、である。
彼の心情としては、疲れたからと、すぐに自室に戻って眠りたかったところだったのだが姉の命令とあっては逆らえず、結局深夜まで作業を続ける事になったのだ。
しかも、男手という事で殆どの力仕事は彼がやるハメになり……それ自体は彼自身も異論は無かったのだが、作業の殆どが力仕事である以上、当然殆どの作業を彼がやる事になる為、いい加減参ってしまったのだ。

その後なんとか自室に戻ってベットの誘惑に耐え、取り敢えずシャワーだけ浴びて泥の様に眠ったのだが、普段から蓄積した疲労もあってそれだけでは睡眠時間が足りるハズも無く、翌日の授業は午前中だけで何度担任教師である姉に叩き起こされた事か……。

そうして漸く昼休みを迎えたところでいつものメンバーに捕まり、天気がいいからと屋上で弁当を食べる事になったのだった。

「そっかぁ…、それで昨日帰りが遅かったんだ」
「あぁ…、模擬戦と襲撃ならまぁともかく、後片付けがなぁ……」
「まぁ、派手にやった後とか大変だもんね～アレって」
「ん、鈴もやった事あんのか？」
「向こう（中国）にいる時にね」

鈴音も…というか、たいてい何処の国も体育会系なところがあり、代表候補生といえどその例に漏れず、その手の後片付けは新人の仕事だった。

とはいっても勿論それが当て嵌まらないケースもあり、イギリス全てがそうでないにしろセシリアが所属していた基地ではその手の作業は全て男性の仕事で……しかもソレが男性にとってＩＳに関われる数少ない仕事であったし、《白式・真打》の圧倒的過ぎる性能の前に頓挫したとはいえ、シャルロットは元々「二人目の男性操縦者」として一夏に近付き、《白式・真打》のデータを盗むという任務があった為に男性としての振る舞いの勉強で忙しく……というか、政府が黙認していたとはいえ本国内でバレるワケにはいかなかったのであまり外に出る機会が無かった為にその手の作業経験は皆無であり、普通の代表候補生はともかく、ドイツ軍に所属していたラウラはトレーニングの一環で隊全体で後片付けを行っていたのでその手の作業には慣れっ子だった。

「私はその様な経験は無いが……その様子だと随分大変だった様だな」

「あぁ、何が悲しくて《白式・影打》で飛び回りながらローラー引きなんてしなきゃいけないんだよ…」

「あ～、こっちでもそうするんだ」

唯一、メンバー（女子）内で代表候補生では無い箒はそもそも剣道一筋だったのでグランド整備なんてやった事など無く、あまり想像が着かなかったのだが、鈴音には心当たりがあったらしい。

「軟弱な…。我が隊ではそれが毎日の訓練メニューだったぞ」

「まぁまぁ、一夏さんは代表候補生では無い……どころか学園に入学するまでＩＳに触れる機会が無かったのですから…」

「まぁ…、それはそうだが…」

会話をしつつも、箸は止めない。
流石に何度も遅刻で出席簿の餌食にはなりたくないからだ。

「そっ、そうだ一夏！　昨日忙しかったのだからあまりたいしたものは作れて無いだろう？　私のを少し摘んでもいいぞ？　この唐揚げなどは特に自信作なんだが…」
「ん？　そうか？　そういう事ならお言葉に甘えて……おっ、美味いな！　コレ」
「そうだろうそうだろう」

うんうんと自信ありげに頷く箒に触発されたのか、他のメンバーも私も私もと、次々に一夏に自分達が作って来た料理を勧めだした。

「い、一夏！　この酢豚なんてどう？」
「おっ、酢豚か。どれどれ…」
「ど～よ、私だって少しは上達したでしょ？」

「あぁ、随分上手くなったじゃないか」

流石は中華料理店の娘というか、得意の中華料理で猛アピールに出る鈴音。
一夏の反応も上々の様でテンションがフォルテッシモになっている。

「ささっ、一夏さん。サンドイッチはいかが？」
「おっ、セシリアはサンドイッチか……うんうん、イケるな、コレ」

前日、自分で味見をして撃沈したセシリアだったが、そんな事はお

くびも出さずに振る舞う。
写真通りの”見た目”になる様に作ったせいでいろいろとやり過ぎたのが原因…と、奇跡的に気付いたおかげでちゃんと説明書通りの分量で作る気にはなったのだが、やはり当人としては見た目的に納得がいかず、それでも意中の男性に不味いものを食べさせるよりは、と今回は説明書通り版で出す事にしたのだが、それで正解だった様である。

「ぼ、僕は肉じゃがっていうのを作ってみたんだけど…」
「ん？　なんだ、シャルロットも和食か」
「え？　ラウラも？」
「あぁ、鮭の塩焼きというのを作ってみた」
「へぇ～、二人とも和食かぁ～……どれどれ、おおっ、やるな、二人とも」
「そ、そうかな…」
「教官から日本ではコレが弁当の定番と聞いていたからな」

シャルロットとラウラは和食で攻めてみたのだが、反応は上々の様である。

「んじゃ、貰いっ放しってのも悪いし、皆好きなの摘んでいいぞ」

そう言った彼の料理を食べた各人の感想はというと…、

「ふむ、中々…」
「アンタ、昔っから料理得意だったけど、また腕上げたんじゃないの？　店に…出せるかどうかはまだ微妙だけど、コレ絶対その辺の女子が作ったヤツより美味いわよ」
「ん、そうか？　まぁ、千冬姉と二人だったとはいえ実質一人暮らしだったからなぁ…」

家庭の事情を知ってはいたものの、それでも、とダブル幼なじみが感嘆を示し、

「あら、美味しい」
「ホントだ…」
「そうか？　それは良かった」

セシリアとシャルロットは自分より確実に料理スキルの高い一夏の腕に戦慄しつつ、

「ふむ、教官は毎日こんなに美味いものを…」
「いや、毎日ってワケじゃないぞ？　千冬姉、仕事で忙しくて殆ど帰って来なかったし」
「それでも、だ。いや、珠に帰ってきた時だからこそこういうものが出るだけで帰ってきた甲斐があったんじゃないか？」
「そ、そうだといいんだが…」

ラウラのストレートな物言いに、一夏が赤面して、

「この歳でこれほどのダシ巻きが作れるなんて……やるわね、織斑君」
「いや～、今日のは特に自信作で……！？」
「「「「「！？」」」」」

……いつの間にか、一人増えていた。

「せっ、生徒会長!?」
「なっ…、いつの間に!?　これが日本の忍者というヤツか!?」
「あは～」

ちょっ、なんで生徒会長が!?
ってか、いつの間に俺の横にいたんだよ!?

「ど～も、お邪魔してるわよ」
「はぁ」
「ところで織斑君、いつもお弁当作ってるの?」
「いえ、毎日じゃありませんけど週に何度かは」

千冬姉が食べたいっていうから、じゃあその日はついでに自分の分もって作ったのが始まりだったしなぁ～。
ってか、昨日あれだけの事があって疲れが抜け切ってないのに、それでもちゃんと弁当用意したんだが……やっぱそのぐらいじゃあ千冬姉の出席簿からは逃れられなかったか。
あぁ～クソッ、まだ頭痛い。

「あの…、ところで生徒会長は何のご用で?」
「おっといけない、肝心の用件を忘れるところだったわ。流石に昨日の今日じゃキツいだろうから、私との模擬戦が明後日になったって連絡しに来たのよ」
「は?」

え？　なんで生徒会長と？

「アレ？　もしかして模擬戦するのって一年だけだと思ってたの？」

「え？　違うんですか？」

「あくまで学園にいる各国の代表候補生の機体と織斑君の《白式・真打》との模擬だから、学年は関係無いのよ」

「え〝っ…」

マジか。

畜生、やっとこれでゆっくり出来ると思ってたのに…。

ってか、生徒会長相手に機能制限かけて戦ったら確実に負けるぞ。

「あ、そうそう今回の制限なんだけど、武装の剥奪以外は何使ってもいいわよ」

「え、いいんですか？」

「えぇ、いいわよ……っと、もうこんな時間か。じゃ、皆遅刻しない様にね～♪」

は？　遅刻……って、ま　さ　か　。

キーン　コーン　カーン　コーン

やっぱりいいいいいいっ！！

「ま、まずい！」
「う、ううううろたえるな！　ま、まだ予鈴だ！」
「と、とにかく急ぐわよ！」

一応、今回はなんとか間に合ったものの、食事直後のダッシュはキツかったとだけ記しておく。

第５８話「ランチタイム」（後書き）

ところで、オーズに出て来るグリードって１０枚のメダルから１枚抜いたら完全になろうとして生まれた怪物ですよね？

という事は元々どの系統も１０枚ずつコアメダルがあるワケになるんですが、それぞれの１０枚目って何メダルなんでしょう？

パンダ（熊猫）メダルが猫系…というか、タカパンバの時にトラの代わりっていうか、白くなっただけっぽいんですが、パンダが猫系の１０枚目だったとしたら他の系統も１０枚目は別のメダルって事になるのでちょっと予想してみました

○鳥系
・タカ（３）
・クジャク（３）
・コンドル（３）

タカ（鷹）といえば鷲だろうという安直な理由でワシ…あ、ショッカーのマークって鷲じゃね？
あ～、それでタマシーコンボの時の足がコンドルの色違いだったのか……って事で、ショッカーメダル

○猫系
・ライオン（３）
・トラ（３）

・チーター（３）

上記より、パンダメダルが１０枚目候補？

○虫系
・クワガタ（３）
・カマキリ（３）
・バッタ（３）

クワガタ出しといてカブトが無いってのはおかしいだろって事でカブトメダルを１０枚目候補に。
電撃的な意味でストロンガーとかブレイドとかピッタリだし。

○水生系
・シャチ（３）
・ウナギ（３）
・タコ（３）

シャチといえばイルカ、タコとくればイカっていうイメージなんですが、イルカはともかく、イカだったらタコと合わせて触手だらけで完全に怪人にｗｗ

○重量系
・サイ（３）
・ゴリラ（３）
・ゾウ（３）

これが1番悩んだんですが……重量っぽいのとなったらあとはカバかな、と。

○恐竜系
・プテラ（3）
・トリケラ（3）
・ティラノ（3）

他の恐竜となると後はステゴザウルスとかアンキロザウルスとかが良さ気なんですが…。
因みに、私はガシャポンで連続でこのコンボを揃えました（自慢）
出費は勿論９００円のみ

まぁ、余計な話は入りましたが、皆さんはそれぞれの１０枚目って何メダルだと思いますか？

第５９話「最終フラグへのカウントダウン」（前書き）

今回はまぁ…説明オンリーな回なので軽～く流し読みしていただければ良いかと

第５９話「最終フラグへのカウントダウン」

今日は実習系の授業が無かったから良かった様なものの、それでも食後にダッシュで教室に駆け込んだせいで腹がヤバかった…、ホント。

それでもなんとか午後の授業を乗り切り、いつも通りに皆と軽く練習試合を……したかったんだが、今日は運悪くアリーナが全部埋まってたので試合をせずに食堂で軽く皆と話て、で、じゃあもうする事無いから寝るか…と、ベットに転がったところで思い出した。

「あ、生徒会長との模擬戦、明後日なんだっけ」

そう、明後日には生徒会長との模擬戦なのだ。
聞くところによると、此処（ＩＳ学園）の生徒会長は学園で一番強い生徒がやるらしい。
確か生徒会長ってまだ二年生だよな？
って事は、まず他の二年生の先輩方より強い事になるし、更に三年生の先輩方より強い事になる。
この時点で上級生最強なワケなんだが、うちのクラスの代表候補生の皆と生徒会長は戦った事無いハズだから、意外といつものメンバーの誰かの方が生徒会長より強いっていう可能性も無くは無い。
無くは無くんだが……、実際のところどうなんだろ？

ラウラの《シュヴァルツェア・レーゲン》のＡＩＣとか、俺の《白式・真打》みたいに全身に《零落白夜》を纏ってエネルギー系攻撃無効化でもしない限り防ぎ様が無いしなぁ…。
一応、束さん製以外の機体だと簪さんの《打鉄弐型》が初めて《零

落白夜》をイメージインタフェースを利用した特殊兵器として再現する事に成功した機体って事になってるし、多分まだ他の機体には積まれて無いハズだから生徒会長のＩＳは普通にエネルギー系の攻撃が効くって事になる。
まぁ、「当たらなければどうという事は無い」って言われてしまったらそれまでなんだが。

最強であるハズの生徒会長が回避が下手って事は無いだろうし…。
あ～俺、《ボルティックシューター》当てられるのか？　そんな相手に。
そりゃあ、《白式・真打》には射撃素人な俺でもほぼ百発百中させられる程の補正機能がついてるけどなぁ……。
《ギガント》…は、まず当たらんだろうし…。
そうなると近接戦に持ち込めても当たるかどうか……。
じゃあ、《（スーパー）大切断》も、《電磁ナイフ》も、《ヒールクロウ》も、《リボルケイン》も、ライダーパンチやライダーキックとか、あぁいう武器を使わない技とかもみ～んな当たらない可能性もあるのか……大丈夫か？　俺。

ってか、勢いでやって来たけど、今までの模擬戦とか襲撃犯との実戦とかもこっちの攻撃が全く当てられずにボコボコにされて負ける可能性だってあったんだよな。
いや、あったじゃなくて毎回結構ボコボコにされてるじゃん、俺。

……うん、今度からはもっとよく考えてから戦う事にしよう。

でも考えたってなぁ……なんか、今の状態じゃ勝てる気しないっていうか、そもそもまだ《白式・真打》は……いや、《白式・両儀》

はまだ完成して無いっつうか、封印状態なワケだし、いつになったら封印が解けるのやら。

…そうだ、束さんに聞いてみよう。

封印したの束さんなんだし、それに新しい武装も注文しときたいしな。

そう思って、俺は《白式・真打》を”開く”。

普段はバックル型だが、こうして開く事によって携帯電話型にもなるのだ。

イメージとしては携帯電話にもなるブレイバックルなんだろうか。

こう、腰に着けたらバックルからベルトが放出されて巻きつくあたりとかブレイバックルっぽいし。

いや、でも携帯電話になるからベルトが飛び出るファイズフォンか？

…まぁ、いいか。

とりあえず電話電話っと。

「もしもし、束さん？」

『およ？　珍しいね～、いっくんから連絡だなんて』

「えぇ、ちょっと急ぎの用事がありまして」

『あぁ、そっかそっか。明後日だっけ？　次の模擬戦って』

なんで知ってるのさ？

『ん～？　いっくんの事ならぜ～んぶ《白式・真打》ごしに筒抜けなのだよ、いっくん』

「あの、束さん？　プライバシーって知ってます？」

『今忘れた♪』

……。

ま、まぁ、気を取り直して…。

『あっ、そうそう、多分いっくんも気になってると思うんだけど、もうすぐ《白式・両儀》の封印解けるよ』

「え、ホントですか？」

『うん、

○フラグ１、織斑一夏による両《白式》の所持、及び使用

○フラグ２、《白式・真打》の二次移行（セカンド・シフト）

○フラグ３、《白式・真打》の展開装甲の使用による形態移行

○フラグ４、封印解除による《白式・影打》の覚醒

○フラグ５、偽装解除による《白騎士》の覚醒

…って、順調に進んでたし、この間のヤツらとの戦闘の時に、

○フラグ６、《白式・真打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《質量操作》による分身・復元・再構成・巨大化の使用

まで行ったからね。

後は、

○フラグ７、《白式・真打》の使用による１０機以上の専用機との戦闘経験の蓄積

だけだね。
しかも調度次の模擬戦で全フラグ回収だよ！』

え～と、俺そんなに戦ったっけ？
セシリアの《ブルー・ティアーズ》と、
鈴の《甲龍》と、
シャルロットの《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》と、
ラウラの《シュヴァルツェア・レーゲン》と、
簪さんの《打鉄弐型》で一年生の代表候補生の専用機が５機で、
オータムさんの《アラクネ》と、
ナターシャさんの《シルバリオ・ゴスペル》を足して７機だから…
…アレ？
足りなくね？

『いっくんいっくん、他の襲撃犯の事忘れてない？』

あ、そうか、だったら…
クラス代表決める時のと、
クラス代表トーナメントのと、
ラウラとの模擬戦後に乱入して来たのとで……って、だったらも
う１０機いってるんじゃ…。

『そう思うよね～。私も最初はそう思ったんだけどさ～、コアの数
でカウントする様にしてたら９機までしかいってなくってさ～。う
ん、多分、最初のとドイツの時のって同じコアの機体だったんだと

思うよ』

あ～、それで今9機なのか～……って、

「あの、束さん？　どうしてまだ喋って無いのに俺の考えてた事に解答出来るんですか？」

『フッフッフ、束さんの辞書に不可能という文字は無いのだよ、いっくん。……と、言いたいところなんだけど、普通に独り言してたよ？』

「ま…、マジで？」

『うん、マジで』

うわ～、また独り言言ってたのか、俺。

『いっくん顔にもよく出る方だけど独り言も多いもんねぇ～♪』

「は、ははは…」

そんなに多いのか…。

「あ、それはそうと新しい武装が欲しいんですが」

『いいよ～って、ちょっと待って。ん～、普通に新しい武装の型のデータ送るのもいいんだけどこれからも一々作ってたら面倒臭いし～。……あ、そうだ♪　いっその事いっくんにも制作者権限発行しちゃおっか？　そしたらいっくんでも欲しいだけ武装でもなんでも作れる様になるし』

「え、いいんですか？　……って俺、専門知識とか無いんですけど」

『だいじょ～ぶだいじょ～ぶ♪　搭乗者の視覚情報を元に機体の方で勝手に型作ってストックしとけばいいだけだから。いっくんは明後日までＤＶＤ見直すなりグ○って画像検索とかニ○動で戦闘シー

ンだけ探して眺めてればＯＫだよ♪』
「は、はぁ…」
相変わらずやる事がすごいな…。
まぁ、楽だからいいんだけど。

『あ、ハイパーゼクターとか時間操作系は禁止ね。あの辺は私が細かい調整しないと無理だから』
「あ、はいわかりまし……って、束さん？　その口ぶりだと束さんなら作れるって言ってる様に聞こえるんですが」
『ん、できるよ？』
「え、えぇぇぇぇぇっ！！？」

ちょっ、待っ……え、えぇぇぇぇぇっ！！？
う、嘘だろ…！？

『フッフッフ～、束さんはただの天才ウサ耳美少女とは違うのだよ♪』
「……」
…なんて、チート。

その後はしばらく他愛も無い話をしてお開きとなったんだが……
うん、すごいよね、束さん。
いやホント。

んでその日はとりあえず撮り貯めてたオーズを消灯時間ギリギリまで見たんだが……。
うん、ガタキリバ出る辺りまではライブで見てたんだけど、なんか知らんうちにやたら増えてたね、コンボが。
え～と、ラトラータとサゴーゾとタジャドルとシャウタ……で、１番新しいプトティラか。
ラトラータは……ってなんだあのダメージ有りの太陽拳は。
アレ、避けるの無理じゃね？
…ふむ、サゴーゾの重力操作は普通にＰＩＣとか弄ったら第三世代機のイメージインタフェースを利用した特殊兵器で出そうだな。
タジャドルは……あ～、飛行ならもう《セイリングジャンプ》有るしなぁ…。
う～ん、保留。
シャウタは……そりゃ、《質量操作》すれば《白式・真打》自体は水っぽくできるだろうけど、俺自身はそのまんまだし。
プトティラの冷凍は既に《冷熱ハンド》でやっ……なっ！？　ライダーに尻尾が生えた、だと？
あの…、個性的過ぎて参考にならんのですが…。
特に最後。
むぅ…、だったら前のライダーのダブル…は、う～んどれも他でやってるな…。
じゃあその前のディケイド……は、武装限定だけどコンセプト同じだし…。
キバは…、特に無い様な…。
電王は……あ～、《黒式》の方で既に《デンガッシャー》使ってるからいるんだったらそっちのデータ持って来ればいいか。
カブトも武装は電王と同じで《黒式》でやっちゃってるから……あ、

クロックアップやってみるか？
ダメって言われたのハイパークロックアップの方だし、クロックアップまでならまだ高速移動の範囲だからセーフだろ。
響鬼……うん、一時期弾達と楽器やってたけど……アレは……うん、響鬼は悪くないんだ。
俺の腕が悪いだけ。
ブレイドは……あ～、なんかコレも他のライダーでやっちゃってるっぽいしな～……あ、《キングラウザー》が《黒式》にあったから一応データだけ入れとくか。
ファイズ……あ、《ファイズポインター》があればキックも必中になるかも。
龍騎は……うん、これも既に殆ど他でやってる。
アギト……あ～、アギトかぁ……。
槍系の武器持って無かったから《ストームハルバート》とかいいかも。
あとG3系も《黒式》のデータ使えるし。
クウガ……う～ん、特には……ってか、武装の剥奪、再構成で既にクウガっぽい事やってるし…。

こんなもんかな…。
ま、後は思い付いたらその都度足していけばいっか。

…はて、何やら外が明るい様な……え？　もう朝？　マジで？
……束さ～ん、ハイパークロックアップで時間巻き戻し……え？
ダメ？
ですよね～。

こうして、疲労の抜けぬまま模擬戦前日を迎える事になったとさ。

めでたし　めでたし……なワケあるかぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！

第５９話「最終フラグへのカウントダウン」（後書き）

次回、遂に激突！

一夏　ＶＳ　楯無

第６０話「霧雨の淑女」（前書き）

遂に６０話目になりました！

第６０話「霧雨の淑女」

威力がどうのこうの以前に、”見えない”というのが厄介な武装なら何度か相手にした事はあった。
鈴音の《甲龍》の武装である衝撃砲、《龍咆》がそうであり、ラウラの《シュヴァルツェア・レーゲン》に搭載された慣性停止結界、ＡＩＣがこれに当たる。
しかし《龍咆》もＡＩＣも結局はエネルギー兵器であり、二次移行（セカンド・シフト）を果たして全身から擬似《零落白夜》によるエネルギー無効化膜を張り巡らせる事が出来る様になってからは、それらは《白式・真打》にとって何ら驚異に成り得なくなった。
物理的なダメージも唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《質量操作》ですぐに復元出来るし、質量のストックも分身を５０体以上生成する程あるのだから、まず一回の戦闘で底を着く事は無いだろうと、慢心していたのかもしれない。

でも、これは……、

「がぁぁぁぁぁぁっ！！？」

”見える”し、何をされたのかは解る。
でも、だからこそどうにもならないと”理解していまう”、そんな攻撃。
アリーナに立ち込める濃霧。
肉眼で回りが見えなくなる程の濃度では無いし、仮に見えなくなろうとハイパーセンサーという目でみれば、何ら問題は無い。
そもそも、問題は見える見えないという点では無い。

問題はこのアリーナに立ち込める濃霧が人工的に起こされた現象であり、それを空気中に散布したナノマシンによって成しているという事である。
見えるし、何をされたのかは解る。
だが、アリーナに充満した濃霧をナノマシンを超振動させる事によって引き起こした蒸発を通り越した爆発による攻撃など、防ぎ様が無い。
アリーナにいる限り、相手はこちらがどこにいようが関係無く自由に爆発を起こす事が出来るのだから。
いくら５０体分以上の質量のストックが有ろうと、あくまでそれは有限であり、対して水の蒸発を利用した攻撃である以上、相手の爆薬（水）の残量は正しく無限。
ただ温度を急上昇させて蒸発させ、また水に戻して再利用するだけ。
アリーナは閉じられたヤカンであり、ナノマシンはガスコンロの火であり、そして熱せられた水はいくら蒸発しようが閉じられた空間である以上、水滴となって天井に貯まり、再び水貯まりに落ちていく。
或は天気がそうであり、降り注いだ雨は日光を浴び、やがて蒸発して空に貯まり、貯まった水分がまた再び雨として降り注ぐ。

《ミステリアス・レディ》がやっている事といえば、そういった現象をアリーナという空間内でただ早送りで、それでいてその単純作業を延々と繰り返しているだけの事であり、だからこそ、どうしようも無い。

これが屋外であったなら、（それが出来るのなら、ではあるが）《ミステリアス・レディ》のナノマシンの有効範囲を越える範囲の水

分を完全に飛ばしてしまえばよかった。
だが戦場はこの限られた空間（アリーナ）であり、当然、《ミステリアス・レディ》のナノマシンの有効範囲を越える広さは無い。

戦闘が始まったその瞬間から相手は攻撃を受け続け、もがき苦しみ、やがて溺れていく。

武装の剥奪が出来たのなら、ナノマシンの活動を止めてしまえばいい。
殆どの機能をナノマシンに頼った《ミステリアス・レディ》はそれだけで無力化出来るだろう。
ルール無用、死ぬか生きるかの戦闘であったのなら、速効で武装の剥奪を喰らって逆に《ミステリアス・レディ》が嬲り殺しにあっていただろうが、これはあくまで模擬戦であり、ルールのある戦いである。

それ故の苦戦。
搭乗者の未熟はこの際置いておくとして、元来”人間ごとき”を相手にする為に作られていない《白式・真打》は、そもそも人外であるヤツらを抹殺するための兵器だ。
ルール無用の”殺し合い”を行う為の剣であり、ＩＳの様にルールに乗っ取った”試合”を行う為の競技用具では無い。
故に、今回の「武装の剥奪禁止」という、ルールに乗っ取って戦う以上本来の性能を発揮出来ないのは当然であり、各国も最初からフルスペックの《白式・真打》をコピー出来るとは思っていない。
生徒同士だからルールの有る模擬戦をしているのでは無く、ルールという枷を施す事によってせめて既存の技術だけでもより高度なものをコピーしようと目論んだ結果であったのだ。

前回の日本との模擬戦で、《ミステリアス・レディ》がナノマシン

に殆どの機能を依存している様に、《白式・真打》もまた唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）の使用を前提とした機体である事は解った。

唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）とイメージインタフェースを利用した特殊兵器という違いは有れど、（その特殊さを除けば高性能なだけで物は並なところも含めて）両者ともそのコンセプトは似通った物がある。

故に、ロシアとしてはその特殊さが生かせない状況下でどう戦うのかを参考にする為に唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）の使用禁止での模擬戦を予定していたのだが、先に日本にそれをやられてしまった上にその状況下で《白式・真打》が取った対策もただパワーで圧倒するだけと単純極まりないものであった為、もう一度同じ状況下での模擬戦を行う事は不要との判断を下した。

では、どういう状況下での模擬戦を行うべきか、とロシア側が思考を巡らした結果がこの「武装の剥奪禁止」での模擬戦ある。

そこで、「では、フルスペック時の《白式・真打》の性能はどのくらいのものなのか」を知りたくなったのだ。

要するに、似た者同士で力比べがしたかったのである。

「ホラホラ、しっかり避けなさいな」

「どわっ！？　…ちょっ、こんなのどうしろっていうんだよ！」

二次移行（セカンド・シフト）前とはいえ、国家に所属する機体でフルスペックの《白式・真打》と戦ったＩＳはイギリスの《ブルー・ティアーズ》だけであり、二次移行（セカンド・シフト）後の《白式・真打》との交戦経験があるのは襲撃犯の所有する機体ぐらいなもので、当然というか、急な襲撃ではロクな観測も出来るハズも無いのでフルスペック時のデータは殆ど無い状態だった。

いざ、意気込んで模擬戦に挑んだものの、ロシアとしては肩透かしにあった様な気分だ。
搭乗者は未熟も何も今年に入学までロクにＩＳに触れた事の無い少年で、更に《白式・真打》が仮面ライダーという特撮ヒーローを模した機体である為に、一々見栄を切る様な武装の数々とあっては隙だらけもいいところである。
ましてや更識楯無はロシアの国家代表である為、そもそも実力差が有り過ぎた。

「このっ……なっ！？」
「フフフ…」

《ボルティックシューター》から放たれた光線が楯無を避けるかの様に逸れる。
水のレンズによって光線を屈折させているからだ。

「はぁぁぁぁぁぁっ」
「よっと♪」

振り払われた《スーパー大切断》の斬撃も、少し首を傾けるだけでかわされ、

「このっ」
「～♪」

拘束しようと放った《マイクロチェーン》も鼻歌混じりにかわされ、

「くっ…」
「ほらほら、私はここよ」

何もかも、当たらない。
なのに、

「がぁっ」

相手の攻撃ばかり喰らって、シールドエネルギーも、質量も、徐々に減らされていく。
焦りで雑になっていく攻撃では当たるものも当たらなくなり、当たらないという結果がまた焦りを生んで一種の悪循環となっていた。

（変ね…）

一方、楯無は楯無で一夏の様子を不審に思っていた。
いつもの一夏なら、今こうして自分と戦っている通りの未熟者であるが、ならクラス代表トーナメントでみせたあの実力はなんだったのだろうか。
見た目は同じなのに、どう見ても目の前の少年と弾丸を素手で反らすなどという離れ技をやってのけた人物とが一致しない。
よく似た別人といわれた方がまだ納得出来るぐらいだ。

（まさか……いや、でも…）

中国との模擬戦時に、織斑一夏は頭部に衝撃砲を受け、途中から気絶していたとの報告が上がっている。
ではどうやって気絶した状態で中国の代表候補生を下したのか、という問題になったのだが、どうやら機体が勝手に動いていたらしいのだ。

もし、あの時の織斑一夏も機体に操られていたのなら……と考えて、それを否定した。
中国との模擬戦で使用した機体は《白式・真打》であるが、クラス代表トーナメントで使用した機体は《白式・影打》だからである。

しかし……と、そこで件の二機の名前を再び思い浮かべた。
同じ《白式》という名前で真打と影打である。
関係が無いなんて事はまずありえない。
ならもしかしたら…と、思ってしまう。

「ならっ、これでぇっ！」

両腕を大きく回し、竜巻を巻き起こす。
そして、

「穿孔キィィィィィック！！！」

ＺＸ穿孔キックの様に、竜巻の気流に乗った蹴りを放った。

「おっと」
「！！？」
「竜巻で一時的に私のナノマシンが存在しない空間を作るまではよかったけど、それだけじゃ当たらないわよ？」
「くっ…そぉっ！」

確かに、窮地を脱する為の閃きには目を見張るものがあるが、所詮閃きは閃き、国家代表に昇り詰めた者の経験を凌駕するにはまだ足りない。
しかし、彼は諦めない。
再び両腕を大きく回して、竜巻を形成する。

「何度やっても無駄よ」

呆れた様に言う楯無の言に耳を貸さず、再び一夏は竜巻の中を突き進む。

このまま蹴りを放っても、また避けられるだけ。

そんな事は一夏にも解っている。

だが…、

ふくらはぎの装甲がスライドし、円柱状の機器が姿を表し、赤い光を放つ。

ハイパーセンサーがこの光自体に何ら殺傷能力は無いと告げていた為、おそらくレーザーポインターみたいなものだろうと判断した楯無は避けもしなかった。

しかし、直後にそれが間違いだった事に気付く。

「なっ……身体が!?　まさか、ＡＩＣ!!?」

確かに、楯無が予想した通り、それはレーザーポインターであった。

だが、蹴りを正確に当てる為のものではない。

いや、蹴りが正確に当たるのはあくまで最終的な結果であり、間の重要なプロセスが抜けていた。

このレーザーポインター……《ファイズポインター》はキックの狙いを付ける為のものではなく、ＡＩＣの狙いを付ける為のものだったのだ。

「くぅっ…」

初めて楯無の顔に焦りの表情が浮かぶ。
竜巻の気流に乗った《白式・真打》の蹴りはＺＸ穿孔キックとクリムゾンスマッシュの合わせ技、ＺＸにも、ファイズにも出来ない、あらゆるライダーの武装を部分部分で再現する《白式・真打》こと仮面ライダー白式だからこそ可能である、白式オリジナルの必殺キック。

「だぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「きゃぁぁぁぁっ！！？」

雄叫びと共に放った飛び蹴りは楯無の身体を”貫き”、貫かれた楯無の身体が当たり一面に”飛び散った”。

「なっ！？」

同様する一夏の後ろから、倒したハズの少女の声が聞こえた。

「ざ～んねん。分身は貴方だけの専売特許じゃないのよ、織斑君♪」

第６０話「霧雨の淑女」（後書き）

楯無「忍法、水分身の術ってね」

第６１話「偽り」（前書き）

一夏　ＶＳ　楯無　、遂に決着？

第６１話「偽り」

「ざ～んねん。分身は貴方だけの専売特許じゃないのよ、織斑君♪」
「なっ…」

確実に仕留めた、……と当てる直前までそう確信していた攻撃が仕留めたのは、楯無がナノマシンで水を操り形成した分身だった。

「くっ……ならっ」
「フフフフ…」

《リボルケイン》に貫かれた楯無も、

「ははははは…」
「なっ……こっちか!?」

《スーパー大切断》に切り裂かれた楯無も、

「アハハハハハハ…」
「また分身!?」

《ギガント》によって吹き飛ばされた楯無も、

「私はここよ?」
「くぅっ」

《ヒールクロウ》の踵落としを脳天に喰らった楯無も、

「ほらほら、どうしたの？　当ててご覧なさいな」
「ちぃっ」

《ストームハルバート》に薙ぎ払われた楯無も、
全て、ナノマシンによって形成された、水の分身。
倒しても倒しても、バシャバシャと飛び散ってはまた現れる。

「フフフ…」
「なっ！？」

そうやってムキになって分身の相手をしているうちに、数十もの楯無に囲まれていた。

「言ったでしょう？　分身は貴方だけの専売特許じゃないって」
「くっ……ならっ」
「あらあら…」

負けじと、一夏も分身し、アリーナに一夏と楯無の分身が入り乱れ、それぞれが戦闘を始める。
しかし結果は同じ事。
ただ人数が増えただけで、どの一夏がどの楯無を倒そうと、再び楯無の分身は現れる。

「クソッ…キリが無い！（やっぱり、ナノマシンをなんとかしないと……）」
「もう降参かしら？」
「まさか（…くっ、でもどうすれば！？）」

武装の剥奪以外でナノマシンを無力化する方法。

斬ろうが潰そうが吹き飛ばそうが、水の流れに乗って逃げてしまうナノマシンを無力化する方法なんて、そんな都合のいいものが果たしてあっただろうか。

「これでっ！」

自分と分身が一斉に放った冷凍光線も、氷結によって一時的に水の動きを止める事は出来たが、水蒸気爆発の要領で超振動を起こしたナノマシンによって溶かされ、すぐに水に戻ってしまう。

「ならっ」

逆に火炎によって一気に蒸発させた水もすぐにナノマシンによってかき集められ、また元の水に戻ってしまった。

「がんばってるみたいだけど、それじゃあ私は倒せないわ」

「うわぁぁぁぁぁっ！？」

一斉に爆発を起こした楯無の分身によって一夏も分身共々大ダメージを喰らってしまい、シールドエネルギーの残量が半分を切ってしまった。

「くっ……」

これ以上分身を使用していても無駄にエネルギーを消費するだけだからと分身を消した途端、始めて楯無が武器を手に取った。

「う～ん、なんか爆発だけで勝ってもつまんないし、”こっち”も使ってあげるわ」

螺旋槍、《蒼流旋》。
超振動を起こしたナノマシンと螺旋状に渦巻く水流がコーティングしたその槍の威力は絶大である。

そう、少なくとも掠めただけで《白式・真打》の脇腹部分の装甲を粉砕する程度には。

「がぁぁぁっ！！？……くっ」
「逃がさないわよ」
「なっ！！？」

堪らず後退した一夏を蛇腹剣、《ラスティー・ネイル》で絡めて引き寄せ、再び《蒼流旋》の刺突が一夏を襲う。
防ごうとした右腕によって少し軌道は逸れたものの、それでも右前腕のアーマーごとバイザーの右半分が砕け、真っ赤な複眼が曝される。
砕け散ったクリアブラックのバイザーの破片が地面に落ちるよりも早く突き出された三度目の《蒼流旋》の刺突は今度は《白式・真打》の左肩のアーマーを砕き、更に駄目押しとばかりに振り下ろされた《ラスティーネイル》が胸部装甲を大きく切り裂いた。

「が……、はぁっ」

ダメージに耐え切れず膝を着く一夏に、楯無は告げる。

「…いい加減、降参した方がいいわよ。貴方は後で《白騎士》に治して貰えばそれでいいと思ってるのかもしれないけど、しなくて済む怪我まで負う必要は無いわ」

楯無からの降伏勧告に対しする『一夏』の応えは、復元だった。

「……そう、まだ続けるっていうのね」

往生際の悪い…と、内心思いながら突き出した《蒼流旋》をかわし、

「？」

振り払った《ラスティー・ネイル》の斬撃すらかわされた。

そう、それは明らかに一夏とは違う、”まだ”一夏には出来ない動き。

（……どういうこと？）

不審に思って発動させた水蒸気爆発も、爆発寸前でかわされた。

明らかに反応速度が違う。

「そんな！？　爆発のタイミングが読まれてるっていうの！！？」

熱源探知で自身の回りの水の温度の上昇を観察し、それにあわせてかわす。

『彼』がやってる事はただそれだけ。

だが、そのそれだけの動作を行う為に要する反応速度をただの人間が持てるハズが無い。

それこそ、ヴァルキリークラスの人間にしか出来ない様な芸当であり、いくら彼がヴァルキリーの頂点に立つブリュンヒルデの弟とはいえ、とても先程までボロボロにされていた人物に出来る芸当ではない。

「まさか……」

『あぁ、そのまさか、だ』
「やっぱり貴方、《白式・真打》の……」
『フッ、流石は”更識”の”楯無”か』
「！！？　……貴方、どうしてそれを…」

一夏の意識を乗っ取った『一夏』は、敢えて楯無の勘違いを正さず、そのままにすることにした。
ちょうど対《甲龍》戦時に頭部にダメージを受け過ぎて同調に失敗し、結果的に暴走してしまったのを楯無が《白式・真打》には搭乗者の代わりに戦闘を続行する機能があるのだと勘違いしているようだったのでそれをそのまま利用する事にしたのだ。

自分がもう一人の『織斑一夏』だと説明しようにもまだ話せる段階では無かったし、一夏の回りにいる少女達や姉にも自分がもう一人の『織斑一夏』だという事しか告げていないし、その時の会話の内容も彼女らの”記憶”にしか残っていない。
彼女らのＩＳの中の”記録”は《白式・真打》のコアの権限で削除済みであったし、学園内の施設についても束が全て処理している。
彼女らには宿主である一夏に『彼』は知覚出来ないと告げてあるし、一夏も鈴音との模擬戦で《白式・真打》が暴走した事は身を以って知っているので、後で楯無に《白式・真打》がまた暴走したと告げられても『彼』の存在には気付かないだろう。

仮に、ここで楯無に自分がもう一人の織斑一夏だと告げて、それを楯無が一夏に告げたとしても、一夏の取り巻きの誰かが『彼』の存在を一夏に告げたとしても、どの道　一夏には『彼』の存在は知覚出来ない。
五感のいずれかが『彼』に関する情報を拾ったとしても、内に潜む

『彼』がそれを脳に入る前に遮断してしまうので、いくら聞かされたところで結局一夏が『彼』の存在を知覚する事はありえない。
『彼』が、許可を下すまでは。

「貴方は”何”なの？　…まさか、ＶＴシステムかなにかなんじゃ…」
『クッ…、ククク、ハハ、アハハハハハハ！！！』
「な、何がおかしいって言うの！？」
『あんな不細工なモノと一緒にしてくれるな。俺は俺だよ』
「なっ……じゃあホントに《白式・真打》のコアの意思だって言うの！？　そんな…確かにＩＳには自我の様なものがあるけど、貴方みたいにハッキリとした意思があるコアなんて……それより、織斑君は！？」
『アイツか？　あぁ、今は寝てるよ』
「まさか、織斑君の身体を乗っ取って…」
『寝かせたのはお前だろうに。…全く、人聞きの悪い事を言ってくれるな。篠ノ之博士が搭乗者の意思に反して勝手に動くものを作るハズ無いだろう』
「でも、今貴方は…」
『勝手に動いてる、か？　おいおい、気絶した人間に意思なんてあるハズ無いだろうが』
「……」

神経を逆撫でるかの様な、馬鹿にした風に話掛ける『彼』の言葉に、楯無はそれが挑発と解っていても苛立ちを抑え切れる事が出来なかった。

「……いいわ。貴方が何なのかなんてどうだっていい。あくまで私の仕事は《白式・真打》の性能評価、”誰”が動かしてるかなんてどうだっていいわ」

『釣れないねぇ』
「減らず口を！」

囲む様に爆発させた水も垂直に跳躍する事によってかわされ、跳躍直後を狙った《ラスティー・ネイル》も《セイリングジャンプ》による飛行でかわされ、逆に《マイクロチェーン》で絡め取られた《ラスティー・ネイル》ごしに《エレクトロファイヤー》による電撃を浴びせられてしまう。

「くっ（…まずいわね、今のでナノマシンの数が）」
『そら、上手く避けろよ』
「なっ！？……くぅっ」

振り下ろされた《ドッガハンマー》を避け切れず、防御に使用した《ラスティー・ネイル》が破壊されてしまった。

「このぉっ！」
「残念だったな」
「！？　しまっ……きゃあぁぁぁぁぁっ！！？」

負けじと突き出した《蒼流旋》が貫いたのはいつの間にか擦り替わっていた分身の方で、気付いた瞬間　背中から《サタンサーベル》で斬られていた。
先程までの一夏と楯無との戦いと逆の状況で、今度は楯無が『一夏』に翻弄されている。
楯無の戦闘技術は並外れたものがあり、事実　一夏では到底敵わない程の実力差があったにも関わらず、その楯無すら歯が立たない程の力を見せ付ける『彼』。

かつて《白式・影打》が覚醒した際に見せた代表候補生四人を同時に相手取るという離れ業をやってのけた時ですら、まだ余裕があった『彼』の実力は計り知れないものがあった。

『（……やはり、手っ取り早くボスラッシュモードで経験値を荒稼ぎしたのがマズかったか）』

確かに、各国の代表候補生との戦闘を経て、《白式・真打》とその操縦者である織斑一夏は急激な成長を遂げた。

だが、徐々に機体と操縦者の成長速度の差が顕著になっていき、《白式・真打》自体は今回の戦闘を経て確実に最終形態である《白式・両儀》に至れるだろうが、肝心の操縦者の成長がまだまだ足りない。

『（そもそも、プラン自体が《白式》の成長を主眼に置きすぎたのが間違いだったか）』

機体の方は戦闘で得られたデータを元に、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を使うなり製作者に直接改修を受けるなりすれば、簡単にそのスペックを引き上げる事が出来る。

だが、人間である操縦者はそうもいかない。

例えば筋肉痛を起こすまで走り込みをしたとして、超回復で筋力が上がるまでには筋肉痛が治癒するまでの期間をどうしても要してしまう。

人間は機械の様にすぐに変わる事なんて出来ないのだ。

それでも、いつヤツらが地球に来るか解らなかったから、計画を推し進めた。

両儀に到ってしまえば、ある程度操縦者が未熟でもどうにかなると、そう思って。

「はぁぁぁぁぁぁっ！」
『フッ…』
「しまっ！？」

《蒼流旋》の刺突をかわしながら懐に飛び込み、展開の勢いのままに《スーパー大切断》の刃が《ミステリアス・レディ》のアームを切り落とし、握られた《蒼流旋》ごと手首が宙を舞う。

確実に楯無の力を削ぎながらも、その思考は止まらない。

『（まずはこの模擬戦で”《白式・真打》”に勝利を。そして封印を全て解く。ヤツらが来るより早く、《白式》は両儀に致らなければならない。これは絶対だ。だが……）』

分身を生成しながら後退する楯無に追い縋り、

『（”コイツ”をどうするべきか……、ただでさえ真打どころか影打の性能を持て余しているんだ、今のまま両儀を使っても使い熟せるハズが無い…）』

擦れ違いざまに分身を《シャドーセイバー》で切り裂き、

『（チッ……俺がもっと早い段階で”此処”に来ていれば…）』
（まずいわね……所詮人口知能だって嘗めてたのが仇になったか……あまり当たる気がしないんだけど、アレに賭けるしかない、か…）

逃げるのを止め、構えた楯無を警戒し、『彼』は足を止めた。
残った左アームを前方に突き出す。
散布していたナノマシンが、ナノマシンによってアリーナ中を充満していた水が、そして機体の装甲となっていた残りのナノマシンと

水が、左アームに殺到し、巨大な槍を形勢する。
《ミステリアス・レディ》、最強にして最後の武装、《ミストルテインの槍》。
《エレクトロファイヤー》によって焼ききられ、多少ナノマシンの損失は有れどそれでも気化爆弾数発分の威力を有するその槍に楯無は全てを賭ける。

一方、『彼』も楯無の手にした槍が最後の武器だと察して、その最後に相応しい剣を召喚した。

『スペード10、J、Q、K、A……ロイヤルストレートフラッシュ』
『…覚悟は、出来たか？』
「そっちこそ、データが飛んでも知らないわよ？」
互いに武器を構え、そして……

『「はぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」』

同時に攻撃を繰り出した。
突き出される水の槍と黄金の輝きを放つ斬撃が激しくぶつかり合い、そして…、

「なっ…、そんな！？」
『俺の、勝ちだ』
「あぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

黄金の斬撃が槍ごと《ミステリアス・レディ》のシールドエネルギーを喰らい尽くし、絶対防御の作動をもって”《白式・真打》の”

勝利が決定した。

これは、記録にも記憶にも残らなかった戦いの一部始終。

時計の音と共に人々の記憶は巻き戻され、記録もまた記憶と共に改竄され、偽りの記憶と記録だけが残された。

第６１話「偽り」（後書き）

今回の話、前々から本作オリジナルの束さん専用機《時計兎》の搭乗からずっと考えていたんですが、実は全て一夏の代わりに『彼』が戦って、そして束の《時計兎》が記憶を巻き戻し、偽りの記憶だけが残されて……とも取れる話にしてみました。

どこまでが本当で、どこからが嘘なのかは、読者の皆さんのご想像にお任せします。

第６２話「林檎はウサギさんカットで」（前書き）

すいません
活動報告にある通り、私事で更新が遅れてしまいました

今回は改竄直後の話です

第６２話「林檎はウサギさんカットで」

「ん……」
「あ、起きた？」

……なんで保健室のベットで寝てたんだ？　俺。
ってかなんで生徒会長が横で林檎剥いて……って、そっか、今日は生徒会長と模擬戦だったんだっけか。

「お～い、織斑く～ん？」
「えっ、あ、はい？」
「ぼ～っとしてたから、まだ意識がはっきりしてないのかと思ったけど……大丈夫そうね」
「あの……なんで？」
「え～と、織斑君はどこまで覚えてる？」

どこまでって……、せっかく《ファイズポインター》使ってキック当てたのにそれは分身で、で、確かその後も生徒会長の分身に翻弄され続けたんだったよな？
その後生徒会長が出した武器でボッコボコにされて……で、今こうやって保健室のベットで寝てるって事は……、

「…俺、負けたんですね」
「織斑君は、ね」
「？」
「私の攻撃で織斑君が気絶して、それで試合終了ってとこだったんだけど、《白式・真打》がね」
「！！？　…まさか、鈴の時みたいに！」

「そ、勝手に動き出しちゃってさ～もぅ。今度は私の方がボッコボコにされちゃってね～。で、模擬戦は”《白式・真打》の”勝利って事になったわ」
「……」
「あ、録画映像有るけど、みる？」
「あ、はい。お願いします」

《蒼流旋》の刺突と《ラスティー・ネイル》の斬撃に曝され、大破する《白式・真打》。
操縦者である織斑一夏はダメージのあまり気絶し、膝から崩れ落ちた。

まだ、気絶を確認していない楯無が告げた降伏勧告に反応するかの様に立ち上がり、瞬時に機体を唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）で復元させた《白式・真打》の吊り上がった真紅の瞳がバイザーの奥から敵（楯無）を睨みつける。

「なっ…、まだ動けるっていうの！？」
『……』

ゆらり、と、両手を広げた《白式・真打》の全身から紫電がほとばしり、次の瞬間、アリーナ中を《エレクトロファイヤー》による電撃が駆け巡ってナノマシンを破壊し、

「そんなっ……ナノマシンが！？　きゃっ！？」

ナノマシンの駆逐という、殆ど武装の剥奪に等しい攻撃に動揺した楯無の至近距離まで詰め寄った《白式・真打》の繰り出した蹴りが楯無を吹き飛ばして、

「…がっ！？　くぅ……っ」

起動した展開装甲によって全身の装甲がスライドし、高速移動形態に移行した《白式・真打》がベルトの横に設けられたボタンを押した途端、その姿は掻き消えて蹴り飛ばした楯無の眼前に現れ、吹き飛ぶ勢いに更に自身の速度で加速させながら首を掴んでアリーナの壁に叩きつけ、壁に減り込んだ楯無を無理矢理壁から引き抜き、

「！？」

引き抜く勢いで空中に放り投げて、

「くっ……こんな…がっ！！？」

投げ飛ばした楯無より早く上昇し、《ドッガハンマー》で地面に向かって叩き落として、

「あぁぁぁぁぁぁぁっ……がっ…ハァ…。…ちょっと、マズいわね。

これは……って、ホント容赦無いわね！」

朦朧とする意識の中、それでも体制を立て直そうと楯無が起き上がろうとした途端、地面に縫い付けるかの様に《リボルケイン》が左アームを、ロッドモードの《デンガッシャー》が右脚部装甲を、《ライジングドラゴンロッド》が左脚部装甲を貫き、

「くぅっ……あぁっ！？」

残った右腕も《白式・真打》を掴もうとするかの様に空に向かって延ばした途端、その右腕のアームすら《ユニコーン》に貫かれ、完全に身動きが取れなくなった楯無にトドメを刺すべく放たれた《ギガント》のミサイルの爆風が楯無を包んだ。

「あぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ……」

爆風で舞い上がった砂埃が止み、クレーターが出来るほどえぐられたアリーナの地面、その爆心地に殆どアーマーの残っていない、ＩＳスーツだけに近い状態の楯無が横たわっていた。

遠慮も、容赦も無い攻撃を繰り返していた《白式・真打》も、流石にＩＳが機能停止した上に気絶した相手の息の根を止める気にはならなかったのか、ゆっくりと着地した途端に待機状態に戻って、一夏が倒れたところで映像は終わっていた。

「「……」」

酷ぇ……というのが俺の頭に1番始めに浮かんだ感想だった。
搭乗者の俺ですらそこまでする必要は無いと思うほどの嬲り殺し。
いや、死んでないけど流石にこれはやり過ぎだろ。

鈴の時はギリギリで俺が起きたから良かった様なものの、もし気絶したままだったら《スーパー大切断》で首を跳ねてたところだったし…。
…多分、コイツ（《白式・真打》）が対人用じゃないからなんだろうけど、俺が今度戦闘中に気絶なんかしたらそれこそ死人を出しかねない。
そう思うと、急に怖くなってきた。

「お～い、織斑君？　顔色悪いけど大丈夫？」
「え、あ…はい、大丈夫です。……その、すいません」
「痛かったなぁ～」
「う…」

痛かった…のは俺も同じなんだが……特に気絶前のアレとか。

「いくら機体が勝手に動いてたからっていっても、ちょっとやり過ぎなんじゃないかなぁ～」
「うぅ…」

それは……俺もそう思いますけど。

「私の《ミステリアス・レディ》、《白式・真打》のせいで大破しちゃって……というか、コア以外ダメになっちゃたから、作り直しなんだよね～」
「ううぅ…」
代金の請求は《白式・真打》に……いや、こういう機体を使ってて気絶した俺が悪いんだろうけどさ。
「じぃ～」
「その……なんというか…、いろいろとすいませんでした」
「ん、よろしい。学食のデザート一年分でゆるしてあげるわ」
うぅ、俺、一生この人に勝てそうにない気がするわ。
ってか、デザート一年分って、何注文する気なのか解らないけど確実に俺の小遣いじゃ足りんのですが。
……いや、まぁ、《ミステリアス・レディ》の修理費を請求されるよりは随分安上がりなんだけどね。
「ダメ？」
「いや、ダメっていうか…その、俺そんなに金持って無いんですけど」
元が美人なだけあって、小首を傾げる仕草は可愛いらしいんだが、無いもんは無いからどうしようも無いっていうか……うん、弾が「金持って無かったら女に情けない男だと思われる」って言ってたけど、アレってホントだったんだな。
生徒会長はまだ何も言ってきてないけど、なんか金持ってない自分

が情けなく思えてきた。

自分と俺の二人分の生活費を稼ぐ千冬姉は割と高所得だし、束さんはどうやって資金稼いでるのか知らないけど自分の生活費以外にもただでさえ量産型機の《打鉄》とか《ラファール・リヴァイヴ》とかでも結構なお値段なのに《白式・真打》とか《白式・影打》とか、あと《黒式》とか数え切れない程のショッカーライダーとか、箒の誕生日に贈った《紅椿》とか、あんな高性能かつ高コストな機体をぽんぽん用意しちゃうし、いつものメンバーの代表候補生の四人は公務員扱いでこれまた結構な額の給料貰ってるし、束さんが行方を眩ませてるせいでＩＳに関する特許料が束さん以外の篠ノ之家の皆さんに贈られてるから箒も結構金持ってるしなぁ。

アレ？　１番金持って無いのって俺じゃね？

…いやいやいや、待て待て落ち着けって。

そりゃあ昔から稼動テスト程度には《白式・真打》動かしてきたけどさ、ＩＳ学園に通うまで一応表向き普通の学生だったんだぞ？

中卒ぐらいが出来るバイトなんて小遣い稼ぎぐらいにしかならんって。

…うん、流石に見苦しいか、これは。

「う～ん、お金が無いんじゃしょうがないわね～」

「面目ありません」

いや、マジで。

「しょ～がないわね～。じゃあ私と簪ちゃんを君のグループに混ぜてくれたら許してあげる」
「は？」

何故に？
ってか、簪さんの意思は？

「これもダメなの？」
「いや、ダメってワケじゃありませんが……その、”どっちの”理由ですか？　ってか、簪さんの了承は？」
「どっちのって……あ～、ハイハイ、そういう事ね。勿論、私個人の理由よ。…うん、まぁそりゃ私も織斑君の機体のデータ取って来いって言われてはいるけどさ、それって今更じゃない？　というか、プロテクトが硬すぎて情報なんか盗め無いし」
「まぁ、そうですが…」

まぁ、一応皆も俺の機体のデータ取りを名目にして来てるんだし、今更っちゃ今更か。

「…あの、生徒会長個人の理由って？」
「知りたい？」
「そりゃ……まぁ」
「ヒ・ミ・ツ」
「……」

なんじゃそりゃ。
……あ～、何となく分かったぞ。
多分、生徒会長的に俺って弄り甲斐のある相手なんだろ。
弾ならこの美人に弄ばれるっていうシュチュエーションは大歓迎な

んだろうが、俺にはそんな趣味無いぞ。

「……じゃあ、簪さんの方の理由は？」

「それも秘密よ♪」

「なんスか、ソレ？」

「フッフッフ、せいぜい悩みなさいな」

そう言って生徒会長は不敵に笑いながら保健室を出て行った。

「あ、そうそう。林檎食べといてね」

そう、最後に言い残して……って、ウサギさんカットじゃなくてウサギの形に彫刻してある！？

リアル過ぎて食い辛いわ！

第６２話「林檎はウサギさんカットで」（後書き）

次回、更識姉妹が遂に本格参戦！？

第６３話「次期量産機」（前書き）

遅くなりましたが、６３話目です

第６３話「次期量産機」

「はい、というワケで今日からコーチをして下さる生徒会長こと更識楯無さんで～す」
「いぇ～い♪」
「「「「「……」」」」」

あぁっ、その視線が痛い。

「どういうつもりだ！」
「納得がいきませんわ！」
「そうよ！」
「いきなりコーチって言われてもねぇ……」
「話が見えんのだが？」

え～と、詳しくは第６２話を参照…ってダメ？

「昨日の私と織斑君との模擬戦の顛末は聞いてるわね？」
「また《白式・真打》が勝手に動いたっていうヤツですか？」
「そ。鳳さんも実際に戦ったから解ると思うけど、今のままだといつか死人が出るわよ。織斑君以外でね」
「それは…、そうですが……」

実際に首を跳ねられそうになっただけあって、鈴の顔色が青くなった。
…まぁ、無理も無いか。
下手すりゃトラウマものだしな、アレ。

「…私達では役立たずだとおっしゃりたいのですか？」
「そこまで言うつもりは無いわ、篠ノ之さん。でもね、国が主催の模擬戦か有事の際しか使用許可の下りない《白式・真打》はしょうがないとして、いつも《白式・影打》の方でやってる貴女達との訓練って練習試合だけなんでしょ？　他の生徒だってアリーナ使うんだし、織斑君だけの為に貸し切るワケにはいかない上に、これまで各国の都合で模擬戦続きだったしさ、だから手っ取り早く織斑君に強くなってもらう為に練習試合ばっかりになるのも解らなくも無いんだけどね～。でもさ、織斑君は貴女達代表候補生と違って一般生徒と同じのＩＳを動かしたのは入学してからで、しかも知識面に関しては一般生徒は予習して来てるけど織斑君は今勉強中なのよ？」
「それは…」
「そうですけど…」

うぅ、改めて口に出されるとどれだけ自分が遅れてるかが嫌でも解るな…。

「ならお前はどうするつもりなんだ？」
「どうって、勿論基礎からじっくりと、ね。織斑君、殆ど実戦しかした事無いから変な癖着いてるみたいだし…」
「変な癖、ですか？」
「えぇ、特に射撃が。近接獲得についても元々剣道やってたとはいえ大剣だとか槍だとか、いろいろあるけど明らかに刀とは違う武器が多いから……というか、獲物の違いより《白式・真打》の獲物種類が豊富過ぎるのが問題ね。多分、あらゆる戦局に対応する為なんでしょうけど、織斑君みたいな初心者がそんな物を使ったって数が多過ぎて使い熟せるワケ無いじゃない。ましてや、一般人じゃまず触れない様な射撃武器なら尚更」

確かに、生徒会長の言う通り《白式・真打》は……というか《白式・

両儀》はたった一機であらゆる状況、あらゆる敵に対応出来る様に作られてる。
《白式・真打》は《白式・両儀》の能力を封印した状態……というか、意図的に未完成にした機体だから対応手段が武装に限定された機体だ。

だからというか、生徒会長の言う通り俺みたいな初心者が扱い切れないほどの豊富過ぎる武装がある……というか、型さえ用意すれば無限に武装が増える。
そもそも、コイツは一人でヤツらと戦うつもりだった束さんが使う予定だった機体だしなぁ……。
無理言って俺も参加したから、《白式・両儀》を半分に割ってその片割れを昔束さんに作ってもらったベルトに組み込んだのが《白式・真打》だったし。
いきなり《白式・両儀》からじゃ絶対使い熟せないからって《白式・真打》で習熟して……って流れだったのに、このザマか…。

「基礎から、と言いましても、具体的にどうするつもりですの？」
「そうね……ホントは《白式・影打》でやりたいとこなんだけど、こっちも結構ピーキーな機体だしねぇ…。というか、なんで篠ノ之博士ってこんな玄人向けな機体ばっかり織斑君に寄越したのかしら？」
「さぁ、私に聞かれましても…。《紅椿》は使い安いのに…」
「……妙ね。《紅椿》みたいな機体が作れる篠ノ之博士なら一夏用の調整ぐらい出来そうなもんなんだけど…」

そりゃまぁ、元々束さん用だけどあくまで部品の一部として操縦者がいればいい様な機体だしなぁ。

補正機能が充実し過ぎて初心者でもあんまり関係無いっていうか…。
俺が使う為に後付けした機能だけど、別にだからといって俺専用になったワケじゃ無くてあくまで俺にも使用権があるだけだし。

「国が主催する模擬戦もそうだけど、毎回織斑君狙いでやって来る襲撃犯だとか、とにかくこれからも織斑君が《白式・真打》を使わなきゃいけない場面が出て来るわ。でも、最初に言ったけどその度に織斑君が負けそうになって機体が勝手に動いちゃったらいつか織斑君は無意識に人を殺す事になる。勿論意識してれば殺していいってワケじゃないけど、せめて織斑君にはダメージの負い過ぎで気絶しない様にしてもらわないとね。だから、攻撃もそうだけど、防御や回避の訓練もしっかりやってもらうわ」
「それは解った。で、結局機体はどうするつもりなんだ？」

あ、それは俺も気になる。
ってかなんで当事者の俺そっちのけで話進んでるのさ？

「やっぱりここは練習機らしく《打鉄》か《ラファール・リヴァイヴ》を……と言いたいところなんだけど、ちょうどいい機体があるのよ」
「ちょうどいい機体、ですか？」
「そ。織斑君にぴったりなのがね。……は～い！　簪ちゃ～ん♪」
「うぅ、姉さん…」

何故に簪さんを？

「織斑君には簪ちゃんと同じ《打鉄弐式》を使って貰うわ」
「なっ……でもそれって他人の専用機なんじゃ…」

「簪ちゃんが使ってるのは、ね。簪ちゃんが作った《打鉄弐式》、（国に）受けが良かったみたいでさ、来年から試験的に量産型が配備される事が決定してるのよ。で、それにともなって学園が所有する《打鉄》との交換も決定したってワケ」

「それは来年からの話なのでは？」

「うん、そうなんだけどね。量産前にどうしても織斑君に使用した感想を聞いときたいんだって」

日本政府が、か。

まぁ、そりゃ簪さんの《打鉄弐式》って俺の《白式・真打》をモデルにしてるワケだし、俺に感想を求めるのも解らなくはないけど……。

それって簪さんの台詞じゃ……あ～、うん、簪さんじゃ無理っぽいか。

「しかし、その《打鉄弐式》とやらは一夏の《白式・真打》をモデルに作った機体なのだろう？　大丈夫なのか？」

バランス的に、とラウラが疑問を投げかけた。

「あ、その辺りは大丈夫よ。本体も単に《打鉄》の性能を全体的に引き上げた程度だし、武装も学園側が練習用に《打鉄》に持たせてたのをそのまま使うからね。まぁ、第三世代機なのに武装のせいで第二世代機とたいして変わらなくなっちゃったけど」

第三世代機なのに武装のせいで第二世代機とたいして変わらない？

……あ～はいはい、学園が《打鉄》に持たせてたのって近接ブレードとマシンガンだけだもんな。

イメージインタフェースを利用した特殊兵器が無いんじゃ第二世代機と同じか。

「とりあえず、これで織斑君も出力の低い《打鉄》や《ラファール・リヴァイヴ》を使うよりは《白式・真打》や《白式・影打》を使った時の違和感も多少はマシになるでしょ。というワケでこれから織斑君には放課後の練習に試製量産モデルの《打鉄弐式》を使ってもらうわ」

「はぁ…」

「基本的には私が見るけど織斑君が慣れてきたら武装を追加して…そうねぇ、例えば射撃に関してはビーム系がオルコットさん、実弾の弾丸系がデュノアさん、で、ミサイルとかあぁいう火薬系の扱いを簪ちゃんにそれぞれコーチしてもらうって事にしましょうか」

「う、うん」

「ま、まぁそういう事でしたら…」

「打倒な割り振りかな？」

成る程、教師役をそれぞれの得意分野毎に分けたのか。

「で、近接格闘なんだけど……刀、に限定するなら篠ノ之さんに任せてもいいんだけど、《白式・真打》の近接系の武装って刀だけじゃないし……槍は私も使うけど私のはランスだからちょっと違うし……まぁ、とりあえずは剣に関しては篠ノ之さん、でそれ以外を私と鳳さんとボーデヴィッヒさんって事にしときましょうか」

「わかりました」

「は、はい！」

「ん、了解した」

それにしてもまぁ、前からそうだったけど、随分豪華な教師陣だな、これ。
箒は篠ノ之流の出で剣道の有段者。
鈴は中国の代表候補生で《双天牙月》だとかあぁいうデカい武器を振り回すのが得意。
セシリアはイギリスの代表候補生でビーム兵器主体。
シャルロットはフランスの代表候補生でいろんな射撃武器を持ってたから本人も言う様に打倒な配役だな。
ラウラはドイツの代表候補生で軍隊仕込みの戦闘技術があるから大丈夫だろう。
簪さんは日本の代表候補生で……戦う度に武装が変わってるけど、多分生徒会長が言う様に本来はミサイルが主体なのかもしれん。
で、最後に生徒会長こと更識楯無さんはロシアの代表候補生……じゃなくてロシア代表な凄い人だしなぁ……。

…豪華過ぎて怖いな、オイ。

「じゃ、時間も推してるし、早速始めましょうか」
「は、はい……織斑君、これを……」
「ん、解った」

受け取ったベルトは簪さんの物より明るいライトグレー主体な配色だった。
ベルトを腰に巻き、スイッチを押した途端、俺は光に包まれ、灰色の戦士に変わる。

「変身、完了ってとこかな」

始めて纏った機体はなんだか真打よりも重たい気がした。

第６３話「次期量産機」（後書き）

さてさて、量産モデルの《打鉄弐式》の性能はいかに

第６４話「特訓開始」（前書き）

一夏の特訓がスタートしました。
これで機体に釣り合うぐらい彼が強くなればいいんですがね…

一夏「え？　何そのやっぱりダメでしたみたいな感じに続きそうな前フリは」

第６４話「特訓開始」

「じゃあ、私が《打鉄》で相手するから、織斑君は取り敢えず私にと戦ってみて。で、他の皆は織斑君の動きを見て思った事をその都度言うこと。それでいいわね？」

生徒会長の言葉に皆が頷いて、じっと俺の様子を窺っている。
なんだかクレーマーがツッコミ所を見つけようと躍起になってる様な感じに見えるんだが……多分、気のせいだろう。
…そう、信じたい。
目の前の生徒会長よりも回りで見てる皆の方からプレッシャーを感じるのも、きっと気のせいだ。

「じゃあ、行きますよ？」
「ど～ぞ。どこらかでも掛かって来なさいな」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
「ほいっと♪」

ちっ…、やっぱりかわされるか。
それにしても…、

「一夏！　刀の使い方がなってないぞ！　昔の一夏ならこう、ズバッと…」

早速かよ！
言われなくても下手くそになった事ぐらい自分で解るわ！

「このっ」

「ひょいっと♪」
「一夏さん、もっとしっかり狙って」
くそっ、そうは言うけどな、ハイパーセンサーの照準が遅すぎる！
《白式・真打》の《ボルティックシューター》だったら殆ど召喚直後にロックオンし終わってるのに！
こうなったらまた「下手な鉄砲数撃ちゃ当たる作戦」で…。
「らぁぁぁぁっ」
「おっとっと」
「一夏、無駄弾撃ち過ぎだよ！　もっと迅速に照準をつけて確実に！」
それが出来ればやってるっての！
「じゃあ、そろそろ私も攻撃始めるわよ、織斑君！」
「くっ！」
瞬時加速（イグニッション・ブースト）でもなんでも無い加速なのに、動きが鋭い！
「はっ！」
「くっ……が！？」
「一夏、敵の攻撃手段が手に持った武器だけだと思うな！　常にあらゆる事態を想定し続けろ！」
んな事言ったって…。
「ほらほらぁっ、ちゃんと避けるなり防ぐなりしないと！」
「くうっ……このぉ！」
「ひょいっと」

生徒会長が振るう近接ブレードをなんとか防ごうとして、結局何回かは斬られて、たまらず振り払ったこちらの近接ブレードはあっさりとかわされてしまう。

「バカ一夏！　今のは刀が避けられるのを前提でマシンガン撃てば当たってたでしょうが！」

「そ～そ」

「くっ」

あ～、もぅ！

皆してチェック厳しいな、オイ！

「う～ん、やっぱり織斑君って殆ど《白式・真打》の性能のおかげで勝ってたみたいね。さっきから動きが目茶苦茶よ？」

「このっ」

「ほら、今のだって《大切断》の時の癖で腕を大きく振り過ぎてるし」

「ちいっ」

「射撃だって機体任せで全然自分で狙えて無いでしょ。……これじゃあ、ちょっと強い一般生徒ぐらいかな？」

…マジかよ。

そんなに弱かったのか、俺。

「はいはい、凹まない凹まない。織斑君はこれから強くなっていけばいいんだから」

「それは……そうですが…」

「私達が着いてるんだから、大丈夫よ」
「…ですね」
さぁて、せめて一発ぐらい当ててみせるとしましょうか。

「お～、やってるね～いっくん」
『だな』
「うんうん、機体の方はともかく、いっくんの方がアレだったから一時はどうなるかと思ったけど、この調子ならなんとかなりそうだね」
『だが、間に合うのか？　既に一度ヤツらが来ているんだぞ』
「ん～、なんとかなるんじゃないかな、いっくんなら。『いっくん』と同じでさ、いっくんもなんとかしてくれそうな気がするんだ」
『気がするって……また随分曖昧な』
「だって今頑張ってるのもいっくんだからね。『いっくん』と同じで諦めない限りなんとかしてしまう人だもん。事あるごとにこの天才である束さんの計算を覆す辺りとか、そっくりだし」

モニターごしに一夏の様子を観察する男女の声。
しかし、その部屋にいる”人間は”一人しか居ない。
その一人が篠ノ之束であり、もう一人、声だけの男は今は机の上に

置かれた黒いバックルの中に居た。

「そういえばさ、『いっくん』の方の作業はどうなの？　ちゃんと捗ってる？」

『あぁ、俺はどこぞの天才様と違ってコツコツやらないと仕事が終わらない人間なんでな、ちゃんとやってるよ。……だが、あまり進んでいないな。アイツが剣道を……いや、鍛えるのを止めていたのがイタい。鍛え続けてたのならもう同調率を九割にまで上げている頃なんだが、今のアイツじゃ六割以上は身体の負担が大き過ぎる』

「だね～。無理にやったらただのパンチで脱臼やら筋肉の断裂やらでシャレにならないし。両儀も私の許可無く使えない様にしとかないと……」

そう言って、束はキーボードを叩いた。

「はっ！」

「お？　そうそう、そんな感じそんな感じ。だいぶ動きが鋭くなって来たんじゃないの？」

「…ハァ…ハァ……とか言いつつ全然当たらないじゃないですか」

「ま～ね～♪」

くっそ…、もうかれこれ３０分ぐらいやってるのに当たる気配すら

しねぇ。
マズいな……体力、はともかく集中力が…。

「がっ」
「ほらほら、気を抜かない！」
「くっ……はぁぁぁっ！」

バレバレかよ！
くそっ、また外した！

「このっ」
「おっと…ほっ」

俺が右腕で振り下ろした近接ブレードを生徒会長が自分の近接ブレードで軽く流す。
ここまではいつも通り。
でも…、

「やっ！」
「ほっ……！？」

すぐに繰り出した足払いぐらいかわされる事も予想通り。
だから、それを見越して本命のマシンガンを……、

「っと、今のは危なかったわ…」
「あ～、クソッ！　上手くいったと思ったのに」

本命すら読まれてたのか、生徒会長が即応出来ただけなのか知らないけど、結局かわされたら同じか。

それにしても、最初っから黙って見てた簪さんは別として、いつものメンバーも今じゃ黙って俺の動きを見てるだけか。
最初はあんなにヤジ……の様なアドバイスが頻繁に飛び交ってたのに。

まぁ、この様子だと生徒会長が来たのは正解だったみたいだな。
昨日の今日っていうか、いつもの放課後の補習が終わった後にいきなり捕まった時はどうなる事かと思ったんだが…。
まぁ、そのままの勢いで簪さんまで巻き込んだのはどうかと思うけど。

だってさ…、

～回想中～

「アレ？　こんな所でどうしたんですか、生徒会長」

やっとそれなりに基礎が出来てきたおかげか、今日は割と早めに補習が終わったのですぐに皆のいるアリーナに向かおうとした途端、生徒会長にエンカウントした。

どうする？
→にげる

しかし織斑一夏は回り込まれた。

と、脳内でシュミレートされてしまったので、諦めて話掛けてみたら案の定、

「勿論、織斑君を待ってたに決まってるじゃない」

なんて、言い出して、

「は？」

「さ～て、簪ちゃんも誘ってアリーナへＧＯ！」

「ちょっ、待っ…」

突然の事態に混乱する俺を引きずりながら簪さんの部屋へ。

んで簪さんも拉致ってアリーナまで来てしまったのである。

生徒会長が部屋に入った途端、簪さんの顔に強く諦念の色が浮かんだのを見て、俺も諦めた。

多分、あの様子だと何を言っても無駄だろうと。

～回想終了～

…で、そのまま生徒会長に連れられてアリーナに来た途端、皆が視線で「説明しろ」と訴えて来てなんだか雰囲気が険悪っぽかったので無理にテンション上げてみたら皆に白い目で見られるし。

うん、あの時はやっちまったなって思ったわ、流石に。

生徒会長がいる手前、いきなりＩＳで制裁（ツッコミ）を喰らったりはしなかっ

たけど、今晩大丈夫なんだろか？

「あら、訓練中に考え事だなんて余裕ね？」
「うぉっ！？」
「訓練中はちゃんと訓練に集中しなさいな」
「…はい」
（…とは言ったものの、多分本人気付いて無いんでしょうけど、今みたいに妙に動きが良い時が珠にあるのよね～。昔の感覚ってヤツが戻って来てるのかしら？）

危ねぇ…。
なんとかまぐれでかわせたけど、今のは喰らったらヤバかったな。
うん、集中集中。
今度こそ、当てる……いや、倒すつもりでいく！

第６４話「特訓開始」（後書き）

次回辺りから（死ぬか生きるか的な意味で）ドキドキの個人授業が始まります（笑）

第６５話「訓練初日終了……うん、やっぱ生徒会長強いわ」（前書き）

（ほぼ）毎日投稿の弊害といいますか、まぁ、疲れるのはもう今更だから別にどうだっていいんですが、他人の作品を読む暇が無くなるのがネックですね。
読み専だった頃ならまだしも、今となっては自分の作品の更新があるせいで知らない原作のものは敬遠しがちになりました。
読みたい、とは思うんですが、自分の作品書いてたら新しく何か原作について勉強する気力が無くなってるっていうか……。

あ～あ、束さんみたいに一日を三十五時間生きる人間になりてぇなぁ～

第６５話「訓練初日終了……うん、やっぱ生徒会長強いわ」

「しっ」
「よっと♪（…危なかったわね、今のは。やっぱり段々動きが良くなってきてる。それも急速に）」

かれこれ３０分以上続く攻防の終わりの兆しは未だに訪れる気配すら無い。
積極的に攻めるが実力不足が否めない一夏、高い実力を持つのに防戦に徹してる楯無という組み合わせ故にそれも致し方ない事ではあった。

最初は無駄の多い動きしか出来なかった一夏も徐々にその動きを鋭い物にしていき、それに伴ってヤジの様に飛び交っていた周りからのアドバイスも止んでいった。
コツを掴み掛けた所で変にアドバイスを意識して崩れるよりは、自分のやり方は自分の手で掴むべきだと判断したからである。
確かに、彼の周りにいる少女達は彼より強い。
搭乗者の実力差をものともしない《白式・真打》の機体性能の前に敗れ去りはしたものの、いくら彼の姉が最強で本人にも素質があるとはいえ、やはり積み重ねた訓練時間の差というものは大きく、彼女等が成長を止めない限り、彼が彼女等に勝てる日が訪れる事は恐らく一生無い。
或は、彼の成長速度次第ではいつか、という可能性も無くは無いがそれには相応の努力と、その努力に応える程の才能が必要となる。

たった一年で代表候補生にまで上り詰めた鈴音という例もある為、人間に不可能な所業というワケでは無いが、だからといってそれが

彼にも出来るかどうかはまた別問題だ。
確かに彼の姉は最強まで上り詰めた人物ではあるが、その才能が姉弟だからといって弟である彼に有るとは限らないからである。

だが、彼にとってそんな事は百も承知であり、それこそ今更考えるまでも無い事だ。
きっかけはただ、幼なじみの姉が放って置けなかったからという、特に崇高でも何でもない事だった。
子供心に感じ取った驚異から、知り合いを守りたかっただけ。
いや、守るだなんて大層な事など考えてすらいなかった。
そう、ただ知り合いが酷い目に合うのを見たく無かった、つまりは自分の為であり、それが気にならない様ならそれこそ「頑張って下さいね」と一言で済ませて彼はのうのうと日常の中で生きていっただろう。

寧ろ、束としては一夏に日常にいて欲しかったのだが、『彼』まで関わった以上、それも不可能となって渋々協力者として迎えている状態だった。
まるで『彼』の様に、一途に走り続ける彼を好ましいとは思ってはいたが、『彼』と彼は違う。
このまま彼に『彼』と同じ末路を辿られるよりは……と思って一人で計画を進めていたのに、運命の悪戯だったのか、彼女の気の緩みが原因だったのか、或は両方だったのか、ふと、当時の彼に尋ねたのである。

「ねぇ、いっくん。どうして私がＩＳを作ったか、解る？」

指名手配中の立場であるにも関わらず、なんとなく彼の顔が見たく

なって訪れた彼の自宅で、彼女はそう尋ねた。

大人にも理解出来なかったのだから、子供である一夏に解るハズが無いだろうと、ただ子供の想像力というフィルターごしに自身の発明がどの様に映るのか、ただ聞いてみたかっただけの事。
それ以上でも、それ以下でも何でもない。

そんな軽い調子で尋ねた束に、当時１０歳になったばかりの一夏はこう答えたのだ。

「う～ん、わるいうちゅうじんをやっつけるため！」

彼女はその答えに歓喜した。
冷静になって考えてみれば、彼はまだまだテレビの中のヒーローに憧れる年頃で、導き出した答えも束がやってくるほんの少し前に見ていたヒーロー番組そのままだったのだが、周りの人間のあまりの理解力の無さに絶望仕掛かっていた時にこの答えを聞いてしまったのがマズかった。

天才故に信じたくても周りが自分に着いて来れない事を思い知らされ続け、その事で絶望仕掛かっていたその時に聞かされたその答え（理解）こそが彼女にとって何よりも欲したものでったのだから。
そうしてふとその勘違いに気付いた頃には既に三年以上の月日が経過しており、彼もその決意を本物に熟成させてしまっていた。
慌てて彼に計画から下りて欲しいと懇願したが、彼は「だったら俺は俺自身の力でどうにかする」とまで言ってのけ、束も自分がさせ

てしまった決意に気圧されてしまい、渋々了承してしまったのだった。

そして現在、あの時《時計兎》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）で記憶を消しておくべきだったと気付いた頃には既に彼には『彼』が着いており、それすら叶わなくなっていたという事実に、思わず彼女は笑みを零す。

あぁ、本当にどちらの”いっくん”も、私を狂わせてくれる男だ、と。

そんな風に、彼女が自分の事を見ながら昔を思い出しているとは露知らず、一夏は近接ブレードを奮う。

「はっ」

「くっ（…っと、掠っただけとはいえ、段々当てられてきてるわね）」

「セェェイッ！！」

「っと！　うんうん、良い感じ良い感じ！」

「といってもまだ掠るぐらいですけど…ねっ！」

「おっと（…その掠っただけってのが十分凄いんだけど、織斑君自身は気付いてないみたいね。周りの娘達は皆気付いてるのに）」

横薙ぎに振るってはかわされ、唐竹割りもまたかわされ、突き刺す刃をかわそうと飛びのいたところをマシンガンの弾が掠り…と、徐々にではあるが、一夏の攻撃も当たるようにはなってきている。

かわされた斬撃も最初の様に悠々とかわされる事はもう無くなり、ギリギリ捕らえそこなったものばかりとなってきた。

（ありえない速さの成長速度ね……いや、昔より弱くなってたって事は、成長じゃなくて実力が元に戻り始めてるってことかしら？）

「はぁぁぁぁぁっ！！」

「くぅっ！　…や、やるじゃない　（嘘…もう当てられているっていうの？　この私が？）」

遂に斬撃が楯無を捕らえる。

慌てて左アームで防御した為、ダメージこそ少なかったが、これが《零落白夜》の込められた斬撃であったなら、今のでも十分大ダメージになっていただろう。

実力の復元速度もそうだが、一般人であるハズの一夏が暗部に生きる”更識”の、それも”楯無”である自分に当てられる程の実力を元来有していたという事実に、楯無は戦慄を禁じ得なかった。

（どうせ機体性能に頼ってるだけと侮っていたら痛い目に合いそうね、コレは）

冷や汗を流しながらも、それを悟らせ無い様に涼しい顔で彼を見つめ、自身も”少しだけ”攻撃に移る事にした。

「じゃあ…そろそろ、こっちからもじゃんじゃんいくわよ！　せいっ！」

「くぁっ！」
（あちゃ～、今のも防げる様になっちゃってたか……。この分だと明日からでも皆から個別指導に移っても問題無さそうね）
私が独占出来る時間が減るのは残念だけど、と思いながらマシンガンの弾を彼に浴びせ、再び切り掛かった。
「はっ」
「くっ」
（さっすが元剣道少年、こちらの太刀筋はお見通しってワケね。……実力が戻ってきてるのなら尚更か。でも！）
再び斬撃を防いだ一夏に感嘆しながらも、楯無は攻撃の手を緩めずマシンガンの弾を浴びせ、弾をかわし切れず防御姿勢をとろうとした隙を突いて一太刀浴びせる。
「それっ」
「くぅっ……がぁぁっ！！？」
「ふふん♪　ど～よ？」
「まだまだ！」
（近接は攻防共に及第点……だけど射撃がまだまだね。ブレードの扱いに慣れてきたせいでさっきからブレードしか使って来ないし）
「はっ！」
「おっと（……とは言っても、そのブレード捌きが厄介なのよね～。《白式・真打》も《白式・影打》も、射撃武器が少ないのは元々そういう仕様だからじゃなくて、織斑君の好みに合わせたからなのかしら？）」
近接ブレードをかわしながら思考を巡らして、

（もう、結構長くやってるわね……いい加減私も疲れて来たし、そろそろ”織斑君に合わせるのを”止めようかしら）

いい具合に疲れて来たからと、少し”本気を出す”事にした。

「さぁ～て織斑君、そろそろケリを着けさせて貰うわよ」

「!?……ぐぁっ!」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）を小まめに使いながら死角に回り込み、背中から一夏を切り裂き、

「あぁぁぁぁぁぁっ!!?」

よろめいたところに更にマシンガンの銃弾を叩き込んで、

「はぁぁぁぁぁぁっ!!」

「こんのぉぉぉぉぉぉっ!!!」

振り向き、反撃に出た一夏を切り裂いた。

「ガハッ……」

「勝負あり、ね…」

シールドエネルギーが底を着き、膝を着く一夏を見下ろしながら楯無が告げる。

…だが、

「！！？」

次の瞬間、左肩付近を浮遊していたアーマーが上下に真っ二つに割れ、地面に落ちた。

（…ホント、恐ろしいわね。織斑君って）

こうしてまずは現状を知る為の練習試合で訓練初日は終了し、翌日から本格的な訓練が開始される事となった。

（さぁ～て、明日からの訓練メニュー、どうしようかしらね）

第６５話「訓練初日終了……うん、やっぱ生徒会長強いわ」（後書き）

さて、次の訓練メニューは何になるのやら…

第６６話「射撃訓練　当たらなければどうという事は無い……って、アレ？」

ところで皆さん、皆さんの仮面ライダー白式こと《白式・真打》の外見のイメージってどんな感じなんですかね？

本文中に語られてる外見的特徴といったら…

・全身が展開装甲の全身装甲（フルスキン）
・黒いクリアーのバイザーの奥で真紅の眼が灯を燈す

の２点ぐらいなんですが、全身装甲とかはともかく、クリアーのバイザーの奥から眼が輝くってのはカリスとか、オーズのタジャドルとか、バースとか、あんな感じですね。

…って、黒いクリアーのバイザーの奥で真紅の眼が灯を燈すって、まんまバースさんじゃね？　とか思ってみたりするんですが、一応この世界のライダーって平成以降のシリーズはＩＳ寄りなデザインに変わってしまってるって設定なので、バースに似てるといっても我々の知ってる方なのかこっちの世界の方に似てるのかは解りませんが。

因みに私の仮面ライダー白式のイメージは……前書きが長くなったので続きは後書きにて

第６６話「射撃訓練　当たらなければどうという事は無い……って、アレ？」

昨日は奮戦虚しく、結局生徒会長に負けたんだが、生徒会長から「この分ならすぐに個別指導に入っても大丈夫」とのお達しがあったので、さっそく今日から個別指導が始まった。
因みに今日のメニューは射撃、なんでも近接格闘は割と良い線いってるらしいけど、その分射撃がダメだったからなんだとか。

一口に射撃と言っても、昨日生徒会長が言った通りビーム、マシンガン等の実弾、ミサイル等の火薬系と大まかに分けて三つある。
勿論これは教師役であるセシリア、シャルロット、簪さんの三人のそれぞれの得意分野で分けた結果であって、厳密にはもっと細分化されるんだろうけど詳しい事は知らん。

…で、じゃあ誰から、という話になったので一悶着あるかと思ったんだが、意外と揉めずにすんなりと最初の教師役が決定した。
ビーム担当、セシリアである。
なんでも、ビームなら反動も無いし、確実に銃弾より早いから（的が止まっていれば、だが）ちゃんと狙えば誰でも当てられるからなんだとか。
…ホントか？　ソレ。
そこだけ聞くとなんだか良い事ずくめな気がするんだが、何かデメリットが有るんじゃなかろうか。

「…って、ちょっと待った。簪さんのはともかく、こっちの量産型って学園の《打鉄》と同じでマシンガンしかなかったんじゃないのか？」
「問題ありませんわ。ＩＳの武装は所有者が使用許諾（アンロック）すれば登録し

ている全員が武装を使える様になりますのよ、一夏さん」
「へぇ～」

あ～、そういやなんか教科書にそんな事が書いて有った様な無かった様な…。

「はい、どうぞ」
「おう……おぉっ、前々から思ってたけどやっぱデカいな、コレ」
「？　それでもスナイパーライフル型の中では標準的なサイズですのよ？」
「そういうもんか」
「えぇ」

え～と、確か《スターライトｍｋ？》だっけか？　コレ。
身の丈と同じかそれよりデカいかってぐらいのサイズなのに、それで標準って辺りがＩＳの武装らしいな。
《白式・真打》の《ボルティックシューター》なんかハンドガンぐらいの大きさしかないってのに。

「で、撃つのはいいとして、的はどうするんだ？」
「私がやろう」
「箒？」
「箒さん？」
「私の《紅椿》なら、擬似的な《零落白夜》でエネルギー兵器は無効化出来るからな。別に当たったところでどうという事は無い」

そっか、そういえば《紅椿》って束さんが《白式・真打》みたいに展開装甲が開いたら擬似《零落白夜》が作動する様に改造してたんだっけ。

「じゃあ、撃つぞ～」
「あ、一夏さん、もっとこう脇を閉めて」
「ん？　こうか？」
「えぇ、それで添える左手はもう少し前に…」
「っと、こうか……んじゃ、さっそく」

言われた通りに《スターライトｍｋ？》を構え、スコープを覗き込む。
スコープを覗き込む動作に反応してスコープとハイパーセンサーがリンクし、機体を中心に円形に広がっていたレーダーの視界が銃口の指す方向へ一直線に延び、索敵範囲を狭める代わりに銃口の指す方向の視界がよりクリアになっていく。
そして、目標を捕らえた。

「当たれ！」
「…」

放たれたビームは一直線に箒の方向へ延びて行くが、直撃寸前で展開装甲をオートで起動させた《紅椿》が張った擬似《零落白夜》の壁に阻まれ、その光を消失させた。

「初めてにしては上出来ですわね」
「そういうもんか？」
「えぇ、初心者ですと的が止まっていても狙撃手が勝手に手を動かしてしまって外れるなんて事もよくありますのよ」
「へぇ～」

そういうものらしい。
う～む、緊張で手が奮えでもしたのだろうか？

「これならすぐに次のステップに写っても良さそうですわね……箒さん、今度は全部避け切るつもりでお願いしますわ」
「応！」
「さ、一夏さん、実戦では相手がわざわざ止まってくれる事なんてまず有り得ませんからね、今度は動いている的に当てる訓練に移りましょう」
「解った」

…と、再び銃を構えたまでは良かったんだが、《紅椿》が早過ぎる……ワケじゃないな、そうじゃ無いんだが、なんか照準が間に合わない。
あぁ、くそっ！　もう少しでロックオンが終わったってのに！

「一夏さん、全部機械任せではいつまで経っても撃てませんわ。あくまで機械は補助だけのつもりで、自分で箒さんの軌道を予測して撃ちませんと」
「そうは言ってもだな……そこっ！　……あぁっ、外れた！」

その後も数発撃ったんだが全く当たる気配が無い。
ってか、掠ってすらいない。

「くそっ…《ボルティックシューター》だったら百発百中なのに…」
「…《ボルティックシューター》？　あぁ、あのハンドガン型の」

俺のぼやきにセシリアが合いの手を入れたのでそのまま会話を続けながら箒を狙い撃つ。

「アレ、操縦者のやる事って最初の呼び出し（コール）と最後のトリガーしかないんだよ。呼び出し（コール）して銃が手に納まる頃

にはもうロックオンが終わってるし、撃つ時も機体の方がちゃんと当てられるように俺の腕勝手に動かすしさ。だから取り敢えずトリガーさえ引いてしまえば当たるって感じだったなっ……っと、また外れか」

「それは…またなんとも羨ましい武装ですわね。…でも何となく納得しましたわ。一夏さんがあまり強くならないのも、そうやって《白式・真打》におんぶに抱っこと甘えていたからですのね」

「う〝」

ひじょ～に納得がいかないが、殆ど事実だから反論出来ない。

「どうした一夏、　掠りもしないじゃないか」

「うるせー」

むぅ、あのドヤ顔がまたなんとも……。

えぇいっ、こうなったら…。

「そらっ」

「うおっ！？　い、一夏、それはちょっとセコいんじゃないのか？」

「そうですわ。というかそれでは射撃の訓練になりませんわよ」

「すいません…」

…むぅ、やっぱダメか。

一発一発が当たらないんだったら、トリガー引きっぱなしでロングレンジビームサーベルみたいにして振り回した方が確実だと思ったんだが…。

まぁ、今やってんのは射撃訓練なんだし、反則か。

「全く、一夏さんは…（でも、流石ですわね。《スターライトｍｋ？》をあんな風に使うだなんて、私には思い着かなかった……いえ、本国もそんな使われ方をするだなんて、全く想定していなかったでしょうね）」

「ん～、中々当たんねぇなぁ～」

（一夏さんは実力的にはまだやっと初心者を抜けた段階でしかありませんのに、今の様にその場の思い付きで窮地を切り抜ける力が…才能がある。しかも、鈍り切ったとはいえ昨日の生徒会長との練習試合の時の様に、稀に元来の実力を発揮した時の動きなんて、代表候補生である私ですら何度か目で追えない時がありましたものね）

「お、掠った」

「！？　（なっ…いくらなんでも習熟期間が短すぎますわ！　一体何がどうなって…）」

う～ん、惜しい。

なんかこう、構えた時に妙にしっくりきたもんだから今のは上手くいったと思ったんだがなぁ…。

やっぱそう上手い事いかないよな。

「そこっ……あぁ、また掠っただけか…」

「惜しかったですわね（あ、有り得ませんわ！　私だって動体の狙撃に慣れるのに一週間も掛かりましたのに！……まさか、『あの方』の仕業ですの？　……確かに『あの方』ぐらいの実力ならこれぐらい……では、あの時おっしゃっていた”同調”というのも…）」

むぅ…、あと少しなんだが……。

ん……。

「あっ！？」

「あ、当たりましたわ！　一夏さん！」
「え？」
「『え？』じゃないだろ、漸く当たったんだぞ」
「お、おう、そうだな！」
（……一夏さん、今　様子がおかしかったですわね）

あれ？　当たってたのか？
う～ん、なんか実感無いな…。
疲れてきたせいか知らんが頭が少しぼ～っとしてたし。
まぁ、まぐれ当たりだったんだろうな。
よし、今度こそちゃんと当ててやる！

「いくぞ！　箒！」
「来い！」
「そこっ」
「くっ……フッ、そう何度も直撃を喰らってやるものか」
「言ってろ！」
「はっ」
（……今は普段通りの一夏さんみたいですわね。もう、かれこれ３０分以上も狙撃に集中していましたし、単に疲れていただけで私の考え過ぎ……いえ、仮にそうだとしてもこの成長速度は異常ですわね。やはり、注意を怠るワケにはいきませんわ）

あ～くそっ、もう少しなのに！
チッ、もっとだ、もっと早く狙わないと！

「……そこだっ！！」
「なっ！？……やるな、一夏」

「よ～しじゃあもういい…」
「そこまでですわ」
「セシリア？」
「一夏さんや箒さんは時計を見てらっしゃらなかったのでしょうけど、もう３０分以上経過していますわ。避ける方の箒さんはまだしも、ずっと狙撃に集中していた一夏さんも随分お疲れの様ですし、一旦休憩にしましょう。疲れた状態で無理して変な癖がついたら台なしですものね」
「ん、そういう事なら休憩にすっか。……お～い箒～！　一旦休憩だってさ～！」
「一夏さん、そんなに大声を出さずともＩＳには通信機能というものが有りましてよ？」
「お、そういやそうだったな」
「もぅ、そんな事すら忘れる程お疲れになって……ほら、すごい汗ですわよ」
「ちょっ、セシリアくすぐったいって……！！？」

そう言って俺を嗜めながらいつの間に持ち出して来たのか、セシリアがタオルで俺の汗を拭いて……って、殺気！！？

「一夏っ！！！」
「ほ、ほほほほ箒！？」
「女といちゃつく余裕があるんだ、体力もさぞ有り余っているのだろう？　どれ、稽古を着けてやろう」
「ま、待て箒、まだ《打鉄弐式》を展開し直して無…」

「問答無用ぉー！！！」

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

…《白騎士》さん、またお世話になります。

第６６話「射撃訓練　当たらなければどうという事は無い……って、アレ？」

はい、私の仮面ライダー白式に対するイメージなんですが、今となっては別にこうだっていう明確なイメージとかはどうでもよくなってきたんですが（だって頻繁にパワーアップして外見変わってきてるし）、当初は『メダロット・ナビ』のソニックスタッグ（ｏｒｌミナススタッグ）みたいな顔が私の中のイメージでした。

元々バイザー系のライダーにしたかったのと、同じメダロットでも原作のほるま先生とスピンオフの藤岡先生とではデザインが違う様に、この小説内の仮面ライダーも我々の知ってる通りの昭和シリーズと篠ノ之束が開発したＩＳの影響を受けて変貌してしまったこの世界の平成シリーズとで、何となく生い立ちが似てるかな～と、阿保な妄想をした次第でして…

まぁ、公式の設定画があるワケでも無いんですし、皆さんがそれぞれイメージした通りの仮面ライダー白式像で全部正解っちゃ正解なんですけどね

第６７話「射撃訓練２　君にも出来る！　高速切り替え講座……って、出来るかぁ！」

食費を切り詰めてまでコアメダルを買い漁ってるワケなんですが、コンボが揃ってるのがシャウタとプトティラしかありません（泣）

タジャドルはあとコンドルだけなんですが、どこにも売ってません。ラトラータはライオンとトラが無いんですが両方とも単品１０００円以上なので買えません。ガタキリバはあとカマキリだけなんですが、そのカマキリが見つからないので揃いません。サゴーゾに到っては全部持って無いんですが、どれも８００円以上と手が出しにくい値段です。最後に、コンボ名は知りませんが、エビ・カニ・サソリのエビだけありませんね。あとは……パンダとか、現物見た事無いけどカンガルーとか、

あぁ、そういえばまた新しいコンボが出るそうですね、爬虫類系で

ってか、それだとケース一つじゃ足りなくなるんですが（汗）

皆さんはどれぐらいメダル集めてます？

え？　歳考えろって？

大丈夫、身体はもうすぐ２２だけど、中身（頭）はアレだから……

…え？　違う意味で大丈夫じゃない？　ほっとけ

第６７話「射撃訓練２　君にも出来る！　高速切り替え講座……って、出来るかぁ！」

「さてと、じゃあそろそろ休憩も終わりにして…」

もう１０分も経ったし、大丈夫だろ。

バイトばっかでやった事無いけど、部活動とかってそんなもんだって聞いた事あるし。

「そうだね、じゃあ始めよっか、一夏」

「？　アレ？　シャルロット？」

「ビームの方は後は一夏さんが自分の機体の武装で慣れて貰うぐらいしかありませんから、交代しましたの」

「そ～いう事。じゃ、早速始めるよ」

「お、おう……って、具体的に何をすればいいんだ？」

「ん～～そうだねぇ…、じゃあ、ちょっと高速切替（ラピッドスイッチ）でもやってみよっか」

そっかそっか高速切替（ラピッドスイッチ）かぁ……って、

「待て待て、なに『ちょっと散歩にでも出掛けよっか』みたいなノリで無茶振りしてんの！？」

「無茶じゃないよ～。それにさ、《白式・真打》って明らかに僕の《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》より武装が多そうだからね、出来るに越した事は無いと思うよ？」

「そりゃ……まぁ、そうだけどさ…」

シャルロットとの模擬戦の時の事を思い出す。

こっちが何か武装を召喚しようとする度に先回りして武装を封じら

れたあの悪夢を。
いや、あれは参った。
当たらなければ……とか、そういうレベルの話じゃない。
当たる外れる以前に使わせて貰えないとか、復元でシャルロットが動揺してくれなかったらもうホントどうしようもなかったし。

「でもなぁ～、あんな高等技術、そんな簡単に出来るようになるのか？」

出来るんだったら俺多分《白式・真打》の性能を以ってしても皆に負け越してると思うんだが。

「大丈夫だよ、一夏。いきなり僕みたいな事をしろって言ってるワケじゃないんだから。……そうだねぇ、じゃあこうしようか」

シャルロットの課したお手軽高速切替練習方は以下の通りだ。
といっても準備する事といえば、俺の前方１ｍ先と１０ｍ先にラインを引くだけ、後はそのラインとラインの間をシャルロットが行ったり来たりするのでその距離に合わせて俺が近接ブレードとマシンガンを適宜切り替える。
勿論、ライン間を往復するシャルロットはフェイントも込みで動くので今近くにいたからといって離れたら近接ブレードからマシンガンにセットし直すだけでいいってワケじゃなく、逐次シャルロットとの距離に合わせて武装を切り替える心構えをしなければならないという、簡単な様で意外と神経を擦り減らす訓練内容である。

…まぁ、身も蓋も無い例えをするなら、「赤上げて、白上げないで、赤下げない」みたいな事をするだけの訓練である。

一応、成功した場合は「俺が武装を切り替えてちゃんと対応出来た

からシャルロットの攻撃はきまらなかった」みたいな設定でやるので勿論失敗すれば攻撃を…それこそフランスだけにフルコースで喰らう事になるというスパルタ仕様。

つまり、セシリアの時の様に外したら「じゃあ次」というワケにもいかない。

……フルコースって事は勿論あの《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》も込みって事だよな？

ガクガクブルブルガクガクブルブル

……よし、がんばろう。
主に俺の命の為に。

「じゃあ一夏、準備はいい？」
「お、おう」

距離１０ｍの地点からシャルロットが話し掛ける。
最初はマシンガンを構えてたけどシャルロットが近付くから近接ブレードに切り替えて……と、頭では解るんだが、上手くいくんだろうか？

「じゃあ、……スタート！」
「うおっ！？」
「そうそう、そんな感じそんな感じ」

ギィィン、と甲高い金属同士の摩擦音が俺の眼前で鳴り響く。

くっ…、解っててもキツい。
ってかシャルロットのヤツ、スタート地点にいた時は《ヴェント》を構えていたハズだったのにいつの間に《ブレッド・スライサー》に切り替えやがったんだ!?

「よっと」
「くっ……なっ、がぁぁぁぁっ!?」
「甘いよ、一夏。ちゃんと相手の動きをよく見ないと」
「くぅっ」

ちぃっ、さっそくフェイントかけてきやがったか……。
…くそっ、やっぱ本家は違うな。
離れる時も瞬きなんかしたら見逃すぐらいの速さで《ガルム》に武装を切り替えてたクセに、また武装がいつの間にか《ブレッド・スライサー》に変わってやがる!

「くっ……このぉっ!!」

また離れたシャルロットが近付くが今度はフェイントは使って来なかった。
フェイントこそ使われなかったが反応が間に合わず、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で急接してくるシャルロットに俺はそのままマシンガンによる射撃で対応する。
というか、たった１０ｍぐらいの範囲で瞬時加速（イグニッション・ブースト）なんか使われたら反応なんか出来るワケが無い。

「そうそう、無理に切り替えにこだわっちゃダメだよ。今　一夏がやったみたいに出来そうになかったら今持ってる武装で対応しないとね」

そう言いながらも物理シールドでしっかりと弾をガードしながら接近を続けるシャルロットが《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》を構え……ってマズい！

「このっ」

「……っと、外しちゃったか（…ううん、外したんじゃない。今のは外されたんだ。……さっきのセシリアの時もそうだったけど、どうしてこんな…）」

？　シャルロットの動きが止まった？

…なら！

「らぁぁぁっ！」

「！！　そうそう、やれる時はそうやってちゃんと武装を切り替えないと…ねっ」

ちっ…、わざとかよ！

珍しく隙だらけだとおもったら……って、

「おわっ！？」

（…どういう事？　さっきはマシンガンの弾でパイルバンカーの杭の軌道を逸らせるだなんて高等技術が出来たのに、こんな単純なフェイントに引っ掛かるなんて…。マグレで当たっただけだったの？）

くっそ…、さっきからこっちの攻撃が全然きまらねぇ…。

ただでさえシャルロットの高速切替（ラピッド・スイッチ）の速さを目で追うのがやっとだっていうのに、こっちの機体が遅過ぎる！

呼び出し（コール）から召喚までのタイムラグが長い。
…いや、これでも《打鉄》や《ラファール・リヴァイヴ》より早いけど、やっぱり《白式・真打》と比べたら……。

「はっ」
「くぅっ……！！」
「うんうん、だいぶ慣れてきたみたいだね！（……おかしい。今の一夏の高速切替（ラピッド・スイッチ）のタイミング、完全に僕が《ヴェント》を召喚するタイミングと同時だった。いくらなんでもこの短時間でこんな…！）」

あ～クソッ、今のは上手くいったと思ったのに！
やっぱ早いな、シャルロットの高速切替（ラピッド・スイッチ）は！

「アハハハ、驚いてるみたいだね～あの娘。さっきの娘もだけどさ」
『まぁ、そうだろうな』
「うんうん、だって今のいっくんはあの娘達の知ってる”機体性能に頼ったいっくん”とは一味違うからね～♪　そう！　今のいっくんは『いっくん』補正付きのいっくんなのだよ♪」
『…フッ、なんだかそう聞くとＶＴシステムみたいだな』
「似てるっちゃ似てるけどね～♪　あ、でもでも『いっくん』男性だし、ヴァルキリーっていうよりも、寧ろオーディン？　ま、どう

でもいいんだけどさ。…それより」
『あぁ、まさか七割まで同調率を引き上げても耐えられるとはな…』
「うん、私も今のいっくんだと六割が限度かな～って思ってたんだけど……フフッ、やっぱこっちのいっくんも中々やるねぇ」

「はっ」
「せぇぇいっ！」
（！……やっぱり僕の高速切替（ラピッド・スイッチ）に着いて来てる。でもどうして…）

ははっ、やっと身体が慣れて来たか！
まだシャルロットの方が早いけど、…これなら！

「な！？…嘘っ」
「よし！」

今のは上手くいったな、うん。
この調子で……。

「だいぶ一夏も慣れてきたみたいだし、もう少し本気でいくよ！」
「なっ」
（ちょっと格好悪いけど、教師役がやられっ放しってワケにもいかないからね）

くっ…、シャルロットのヤツ、アレで本気じゃなかったっていうのかよ!?
ブレッド・スライサー》……いや、この至近距離で《ヴェント》か!?

「くっ……なっ!?」
「おしいっ!（でも、フェイントも含めて途中までちゃんと反応出来てる!?）」

……しまった!?　夢中になってて気付かなかったけど、シャルロットのヤツさっきまで右手しか使ってなかったんだ。
くっそ、《ヴェント》をマシンガンで弾いたからって油断したのがマズかったか…。

シャルロットが左手に握る《ガルム》の弾膜によって俺もマシンガンを取りこぼして…、

「…チェックメイト、かな?」
「くっ……参りました」
「今、一夏が使ってる《打鉄弐式》はともかくさ、一夏の《白式・真打》も僕の《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》も武装の豊富さが売りなんだから、一つ武装を落としたぐらいで動揺したらダメだよ、一夏。そんな暇があったらすぐに新しい武装を出して反撃に移らないと」

俺の喉元に《ブレッドスライサー》を突き付けたまま、シャルロットが注意する。
シャルロットの言う通り、マシンガンに気を取られるぐらいだったらすぐにでも近接ブレードでも振って《ガルム》を破壊するべきだ

ったか。
むぅ…、やっぱこういう技術は一朝一夕じゃ身につかないよなぁ。
（…まだ、隙はあるけど、速度だけならもう一夏の高速切替（ラピッド・スイッチ）は僕と同等だった。でも、こんな事って……。僕だって高速切替（ラピッド・スイッチ）を身につけるのに一ヶ月は掛かったっていうのに…。やっぱりおかしいよ、こんなの。皆気付いてると思うけど、絶対おかしい。いくらなんでも技術を習得するまでの時間が短過ぎる！）
「あ～あ、いい線いってたと思ったんだがなぁ……ま、一日ぐらいでシャルロットに追い付けるワケないか」
（しかも、本人は気付いていないなんて……僕の高速切替（ラピッド・スイッチ）に反応出来るぐらいの動体視力があるんなら一夏も自分の高速切替（ラピッド・スイッチ）が僕と同等の速度だって気付いてもおかしくないのに……いや、気付かない方がおかしい。一夏が嘘を言ってる様にも見えないし……でも、ならどうして…。！……”気付いていない”？　……まさか、そういう事なの？　でもそんな、今まで出て来た時ぐらいしか干渉してこなかったのに、どうして今更…）
「ん？　どうかしたか？」
「え？　あ、うん！　一夏はすごいなって」
「そうか？」
「そうだよ、一日であれだけ出来る様になれば上出来だって（……上出来なんてものじゃないけどね、もう）」
「そういうもんか？」
「そうそう、じゃあまた休憩入れて次は簪さんと交代だね」
「ん？　もう交代か？」
「うん、アリーナの使用時間もあんまり無いからね（…それに、皆と相談しておきたいし）」

むぅ、俺としてはもうちょっとやってみたかったんだが……まぁ、残り時間が少なくなって来てるなら仕方が無いか。

さ～て、休憩休憩っと……にしてもこの《打鉄弐式》、やっぱ《白式・真打》と比べたら重い様な……。

第６７話「射撃訓練２　君にも出来る！　高速切り替え講座……って、出来るか！」

一夏の異変に気付き、不安になるヒロイン達。
しかし当の本人は自身に起こっている異変に気付けません。

さてさて、それはともかく次回は皆さんお待ちかね（？）の簪さんのターンです

第６８話「射撃訓練３　戦いは（ミサイルの）数だよ」（前書き）

はい、待ちに待ったミサイル祭……よりも考察がメインになってしまったｏｒｚ

第６８話「射撃訓練３　戦いは（ミサイルの）数だよ」

「は～い、後一時間でアリーナ閉まっちゃうから休憩はおしまい、さっさと始めちゃいましょ～♪」
「あ、はい」
「う、うん…」
「ホラホラ簪ちゃん、モジモジしてる間に織斑君独占出来る時間がどんどん減っちゃうよ～？」
「！？……は、始め、ようか、織斑君！」
「お、おぅ」

なんかガチガチに固まってるんだが……、大丈夫なのか？
ふと、視線で生徒会長に訴えてみたんだが、当の生徒会長は「簪ちゃんファイト～♪」なんて応援してるつもりなのかどうかしらんが、結果的に簪さんの緊張を煽ってるだけな上にこちらの視線に全く気付いていない。
ダメだこの生徒会長、早くなんとかしないと…。

…まぁ、生徒会長はほっとくとして、簪さんである。
姉である生徒会長に煽られて、ただでさえ引っ込み思案っぽいのにガチガチに固まってしまっている。
既に自分の《打鉄弐式》を纏ってるから顔は見えないが、多分ヘルメットの中の顔は真っ赤になっているに違いない。

「そ、そそそそ、それじゃあ、は、始めるよ？」

……ホントに、大丈夫なんだろうか。

一方、一夏と楯無と簪以外のヒロインズはというと、楯無が妹に萌えている後で静かに訓練の様子を見てる。
しかし、それは表向きな話であり、観戦している風を装いながらそれぞれが持つ専用機でプライベートチャンネルを使用した会議が始まっていた。
勿論、議題は織斑一夏についてである。

「（皆さん、昨日今日の一夏さんの様子をどう思いますか？）」
「（はっきり言って、異常だな）」
「（えぇ、いくらなんでも慣れるのが早過ぎるわよ、アレ）」
「（あ、やっぱり皆そう思ってたんだ？）」
「（私も最初は昔の勘を取り戻したのかと思ったのだが……、それでも今日のセシリアとシャルロットの時の習得時間の早さが説明出来ないしな）」

全員、普段から一夏の事をよく見ていただけあって、やはり彼の急激な変化に違和感を覚えていた。

「（そりゃ、知らない人がみたら『千冬さんの弟だから』って納得するんでしょうけどね）」
「（あぁ、その証拠に生徒会長も多少何か感づいてる風ではあったが、そこまで深く考えてはいない様だしな）」

「（……やはり、『あの方』の仕業でしょうか？）」
「（それしか思い浮かばないよね、特に僕らの場合）」
「（だな。…だが、どうして急に？）」
「（さぁ……、そこまでは）」

五人の脳裏に思い当たる原因といえば、あの”もう一人の織斑一夏”を自称する『彼』しかいない。
しかし、何故今更『彼』がこんな露骨に解り安い動きを見せたのかがわからなかった。

「（そういえばさ…）」
「（何か思い付きましたの？）」

「（いや、思い付いたっていうか……一夏がＩＳをまともに動かす様になったのって学園に入学してからなんだよね？）」
「（？　そのハズだけど、それがどうかしたの？）」
「（…うん、確か入試の時は体当たりしただけって言ってたからそれは抜きしてもだよ？　クラス代表を決めるなんて、まだ一般生徒も録にＩＳを動かせるハズが無い時期に、一般生徒と変わらないハズの一夏が、手加減されていたとはいえセシリアとまともに戦えたのっておかしくない？）」
「（……確かに、そうだな。適性はあくまで”ＩＳをどれだけ動かせるか”の指標であって、”ＩＳでどれだけ戦闘が出来るか”は関係無かったハズだ）」
「（そう言われて見ればそうですわね……）」
「（でしょ？　しかも途中で乱入して来た襲撃犯と実戦までってなると、普通は無理だよ）」

シャルロットの言い分に、皆が同意を示す中、箒だけは少し違った。

「（いや待て、確かオータムだったか？　亡国機業（ファントムタスク）の構成員と顔見知りになるぐらい、一夏は誘拐され慣れているんだぞ？　ＩＳを使ったのは学園に入ってからだとしても、実戦経験自体は前々から有ったんじゃないのか？）」

「（……そういえば一夏さん、クラス代表を決める際に私の《ブルー・ティアーズ》をかわしながら『伊達や酔狂でブリュンヒルデの弟をやっているワケでわない』みたいな事をおっしゃっておられましたわね。成る程、あれはそういう事でしたの…）」

「（でもそれってさ、確かに武器を向けられても物応じしないって理由にはなると思うけどさ、だからってＩＳで戦える理由にはならないわよ？）」

「（……それは、そうだな）」

むぅ、と全員が唸る。

やはり情報が少な過ぎる為か、どう考えてもどうしてすぐに一夏がＩＳで戦えたのかが解らなかった。

「（…『アイツ』が出て来たのって、《白式・影打》の時が二回、《白式・真打》の時は……喋らなかったから解んないけど、多分こっちも二回は『アイツ』が出て来てたわよね？）」

「（……そう、なるな。たしか）」

「（たしか『アイツ』、自分の事を”もう一人の織斑一夏”だとか、《白式》とは違うみたいな事言ってたけど、それについてはまぁ、真打、影打の両方で出て来たんだから、確かに『アイツ』の言う通り、『アイツ』と《白式》とは違うんでしょうけど…）」

「（……それで？）」

少し言いにくそうに、一旦言葉を区切った鈴に、シャルロットが続

きを促した。

「（それだと、一夏がどっちの《白式》を使ってる時でも、『アイツ』は出て来れるって事になるわよね？）」

「（それがどうかしま……まさか！？）」

「（えぇ、セシリアの思った通りよ。『アイツ』、一夏がどんなＩＳ使ってても出て来れるんだと思う。じゃないとセシリアの時に戦えたのが説明がつかないじゃない）」

「え…、え～と、その、まずこっちのミサイルランチャーを一機織斑君に使用許諾（アンロック）するから、それを使って…」

ふむふむ、ミサイルでマルチロックとかでもするんだろうか？

「…私が発射したミサイルを打ち落として。全弾、マニュアル操作で」

そっかそっかぁ、ミサイルを……って、

「いやいや、まてまて、無理だろ、ソレ！」

「？」
「いや、『え？　出来ないの？』みたいな感じで首傾げられても」
「えっ…、ホントに出来ないの？」
「なんでこんなハイスペックな娘らがそろってんだ？　この学園は…」

いや、普通に無理だろ、ソレ。
例えば《白式・影打》で飛んでくるミサイルの群れを《雪羅》の荷電粒子砲で薙ぎ払って撃墜しろって言うんなら出来ない事も無いけどさ、簪さんが言ってるのってミサイル一発一発にこっちのミサイルを一発ずつ当てろって意味だよな？

いや、普通に考えて無理だろ。

「…あの、簪さん？　セシリアとか、《ブルー・ティアーズ》みたいな自律兵器を扱う連中ならそういう事が出来るのかもしれないけどさ、俺、《白式・真打》で分身した事はあってもそんな一々細々とした指示出した事無いんだよ。何て言うか、勝手にＡＩが判断して動いてくれるからそういうのやった事無いし」
「そうだったんだ…。５０体にも分身したって聞いてたから、織斑君も出来ると思ってたんだけど……うん、だったら今から出来る様になればいいと思う」
「…あの、簪さん？」
「大丈夫、織斑君はやったら出来る人だから」

いや、やれば出来るって、母親か、貴女は。
……うん、解った、解ったから。
そんなキラキラした目で見ないでくれ。
出来なかった時の罪悪感とかがヤバいから。

「よ、よ～し、や、やるか！」
「うん！」

……ホント、どうしよう。

「（じゃあ、昨日今日で一夏が急に強くなったのって……）」
「（うん、多分『アイツ』、コアネットワーク経由で一夏がどんな機体を使ってても一夏に干渉出来たからなんだと思う。じゃないと、セシリアの時だって…）」
「（成る程、一夏が戦えたのも、専用の《白式・真打》と《白式・影打》の二機は勿論の事、クラス代表決めで使った《ラファール・リヴァイヴ》も、昨日から使っているあの《打鉄弐式》とかいう機体も、『ヤツ』がそうやって干渉出来たからか……しかし、そうなるとあまり面白く無い事になるな）」
「（面白く無い？）」
「（あぁ、『ヤツ』がコアネットワーク経由で全てのＩＳに干渉出来るというのなら、この会話も全て筒抜けになっていると考えた方がいい。勿論、篠ノ之博士にも、だ）」
「（…やはり、そうなるか）」
「（……あぁ、これは私の妄想であって欲しいんだがな、『白騎士

事件』をきっかけに旧来の兵器が淘汰され、代わりにＩＳが広まってもう十年になる。事件をきっかけに我々はＩＳという破格の性能を持った兵器を確かに得たさ。…だが、それによって世界は篠ノ之博士の管理下に……そう、征服されたに等しい状態にあると言ってもいい）」

「（確かに、そう思えなくも無いが……人間嫌いのあの人が、と言われてもな…）」

「（篠ノ之博士が人間嫌いなのは私も知っている。たが、世界を自身の管理下に置く為にＩＳをばらまいたのではなく、世界を管理下に置くことすら何かを成す為の手段だとしたら？）」

「（それは……でも、だった何が目的だって言うのよ？）」

「（それは私にも解らんさ。だが、その事と一夏の急激な強化とは何らかの因果関係があると見るべきだろうな）」

「（……そう、ですわね）」

「（目的が解るまでは……いや、目的が解ったとしても、僕らに出来る事は殆ど無いんだろうね）」

「（……そうね。私の時みたいに、ＩＳを止められるのがオチだわ）」

開発者である篠ノ之束は勿論、『彼』もまた束と同等の権限を持ち合わせている可能性がある以上、『彼』だけが勝手に動いているとは考え辛い。

十中八九、束と共犯であると見るべきだろう。

しかし、そうなると鈴音の言う通り、自分達が二人の目的の障害となったが最後、ＩＳを止められて何も出来ずに指をくわえて見ているしか無い。

「（……歯痒いな）」

「（…ですわね）」

困った。
セシリアの時のビーム（を使っただけで実際は基本的な狙撃訓練）とか、シャルロットの時の高速切替（ラピッド・スイッチ）とかみたいに、実際にやってみればなんとかなる……なんて事は全然無かった。

さっきから

？簪さんがミサイル発射
？簪さんのミサイルを迎撃する為に俺もミサイル発射
？ミサイル同士がぶつかって大爆発
？上手くいったかと思ったら討ち漏らしが飛んできて、慌てて避ける
？次いってみよう！　？へ戻る

の繰り返し。
ただでさえ操作仕切れず討ち漏らしが出るっていうのに、俺が少し慣れてきたところを見計らって難易度が釣り上がるので一向にクリアする気配が無い。

……それにしても暑いな。
機体の空調は効いてるハズなんだが……気のせいか？
いや、でもなんだか機体が……というより身体が重い様な気もする

し。
…まぁ、機体のハイパーセンサーは俺のバイタルに異常は無いって言ってるんだし、大丈夫か。

それにしても簪さん、マニュアル操作で相手のミサイルかわして本人を直接狙えるって、セシリアより《ブルー・ティアーズ》の扱い上手いんじゃね？
他人の専用機だけど。

「い、行くよ」
「おう！」

気合いだけは十分なんだがなぁ…。
どうも上手くいかない。
マニュアル操作といっても基本真っ直ぐ飛んで行くミサイルを途中で方向転換させるってだけなんだが、そりゃ俺だって最近はご無沙汰とはいえテレビゲームぐらいやった事はあるさ。
要はアレだ、飛行機とかのゲームみたいに基本はオートで真っ直ぐ進む機体を途中で障害物が出て来たから機体を操作して障害を避けるだけのヤツと一緒。
だから俺だって一つぐらいだったらなんとかなるんだけどさ、……
…このミサイルランチャー、１０連装な上に結構小さ目なミサイルを発射するもんだからもう……うん、いくらハイパーセンサーのおかげで小さかろうが数が多かろうが見えるけどさ、だからってそれぞれにちゃんと指示が送れるかは別問題だと思うんだ、俺は。

その点ちゃんとそれが出来てる辺り、実は簪さんって指揮官の適性があるのかもしれん。
……まぁ、あの引っ込み思案じゃ人間相手に的確な指示を出すのは無理っぽいけど。

「っと、危ねっ！？」

あ～クソッ、また討ち漏らしたか。
たった１０発同士でこれじゃあ、実戦だとすぐにやられるな、俺。

……気のせいだと思ってたんだが、やっぱり暑い。
それに身体が重い。
さっきのはなんとか当たる前に手で弾けたから良かったようなものの、なんだか身体を動かす度に暑さや重さが増してる様な気がする。

……クソッ、どうなってんだ？　一体。
こんなに怠いのに、機体の方は相変わらず俺の異常を察知出来て無いみたいだし…。

「ハァ……ハァ、ハァ…」

本格的にマズいな、こりゃ。
昨日の生徒会長や今日のシャルロットとの訓練ならともかく、今は討ち漏らしたミサイルを弾くぐらいしか運動らしい運動なんかして無いっていうのに、息が上がって来てる。

「……？　織斑君、大丈夫？」

ははっ、機械より先に人間（簪さん）の方が先に気付いたか。

「あぁ、だ…」

大丈夫って言う事すら出来ずに膝を着いた。
……ダメだ、身体に力が入らない。
「!!?　お、織斑君!?　織斑くぅ～～～～ん!!!」
そのまま倒れて、俺は意識を手放した。

第６８話「射撃訓練３　戦いは（ミサイルの）数だよ」（後書き）

急激な変化、その代償…

第６９話「蛹」（前書き）

時系列的には一夏が倒れた直後の話なので、まだ日付は変わっていません

第69話「蛹」

「……確かに、監視カメラの映像とお前達の供述内容は一致するな。だが、だからこそ解せん」

七人の少女、つまり……篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒの五名からなる件の人物、織斑一夏の取り巻きである所謂いつものメンバーと、今回の訓練に参加した学園の生徒会長こと更識楯無、そしてその妹の更識簪の二名を追加した計七名が事情聴取の為に管制室に集められていた。

「あの…」

「ん？　どうした、更識妹」

「わ、私のせい、なんでしょうか？　私がミサイルをマニュアル操作で動かす訓練なんかしたから…」

「いや、それは違うな。元々頭脳労働が不得手なヤツだ、知恵熱で倒れたというのならお前のせいなんだろうが、今回は原因が違う。たまたまお前の番の時に限界を迎えただけの話だ。だからそう気に病む事は無い」

彼女らを集めた張本人にて件の彼の姉、織斑千冬にそう言われ、簪はホッと胸を撫で下ろした。

「疲労……は確かに蓄積してはいたが、それも直接的な原因ではない」

「では、どの様な？」

「あぁ、流石に断裂、とまではいかなかったらしいが、全身の筋肉

に掛かっていた負荷が酷い。単なる筋肉痛なら放って置いても良かったんだが…」
「そうでは無い、と？」
「あぁ」
ラウラが話の続きを促す。
「脳がリミッターを掛けているせいで、人間の筋肉が１００％の出力を発揮出来ない事は知っているな？」
「はい……まさか！？」
「…あぁ、そのまさか、だ。昨日今日の訓練中、どの程度かはまだ解らんが、脳のリミッターが緩んでいたのは確かだ。《白式・真打》の様に、脳からの電気信号を機体が傍受して身体では無く機体が動くタイプの機体なら、機体の動きに身体がついて来なかったという事になるんだが、《打鉄弐式》は違う。《打鉄弐式》はその外観こそ《白式・真打》に似せてあるが、中身はただの第三世代機……そうだったな？　更識妹」
「は、はい！」
「勿論、アイツに回された機体だけが《白式・真打》と同一の仕様になっていた、というワケでもない。学園に納入される機体は……というか、《打鉄弐式》に限った話では無く、世界中のどのＩＳもあくまで身体の延長であって《白式・真打》の様に一人で二人羽織りをやる様な機体は存在しない。何故か解るか？　篠ノ之」
「……感覚が違うから、ですか？」
「……間違い、ではないが、試験だったなら正答扱いもしてやれんな。そうだな、戦闘で同じ動きをさせる場合、戦闘用のロボットと人間とでは先に人間の身体が悲鳴を上げるのは解るな？」
確認をとるように千冬が言うと、皆が頷く。

当然だ、あくまで人間の身体は戦闘”も”出来るというだけで、戦闘”を”する為の物ではない。
同じ動作をするだけとはいえ、始めから戦闘用に作られたロボットと人間とでは限界を迎えるまでの時間が異なる。
そもそも、機械なら壊れるかエネルギーが枯渇するまで延々と動き続けられるのに対し、人間は壊れそうになれば痛みを感じて動きを止めようとするし、本当にエネルギーが枯渇するまで空腹を放置する事などない。

「仮に《白式・真打》と同一のシステムで動くのなら、ただのパンチで搭乗者が脱臼するなんて事も有り得る。当然だ、《白式・真打》と同一のシステムで動く以上、搭乗者にとっての身体は機体に置き換わるのだから機体の感覚（限界）で動けば本物の身体がついてこれなくなるからな。だから、普通は機体を身体の延々程度にした機体しか作らない」
「…では、《白式・真打》は欠陥機なのでししょうか？」

そう尋ねたセシリアに、千冬は首を振って答えた。

「いや、束が……篠ノ之博士がそんなものを作るとは思えん。恐らく、絶妙な匙加減が出来るからこその仕様なんだろうよ。万が一それで一夏が怪我をしても、《白騎士》があるからな。或は……いや、始めから両方の《白式》を使う事が前提だったのかもしれん」
「……あの、それは一体どういう…」
「超回復、という言葉は知っているな？　つまり、まず《白式・真打》でボロボロになるまで搭乗者の身体を痛めつけ、直ぐさま《白式・影打》に擬装した《白騎士》が搭乗者の身体を瞬時に癒す。…普通、なんらかのトレーニングで筋肉痛を引き起こしても数日待て

ば回復するし、回復後は以前より筋力は上がっているだろう？　《白式・真打》と《白式・影打》も同じ……いや、その回復に要する数日を一瞬にまで短縮する事が可能だ。つまり、文字通り搭乗者は戦えば戦う程強くなる。事実、以前からお前達五人がコーチについていた事を考慮したとしても一夏の成長速度は異常だ。毎日見ているお前らだからこそ気付かなかったのかもしれんが、データだけ見れば一週間でもう別人といっていい数値を叩き出しているぞ、一夏は」

「そ、そんなに凄いんですか…？」

「あぁ」

驚くシャルロットに千冬は肯定の意を示す。

「…しかし、だ。それはあくまで《白式・真打》と《白式・影打》の場合の話であって、《打鉄弐式》は違う。最初に言った様に、あの機体には《白式・真打》の様に搭乗者の身体を故意に痛めつける様な仕様にもなっていないし、《白式・影打》……いや、《白騎士》の様に搭乗者を癒す機能もない。一夏が自分の意思で脳のリミッターを外せるなら以前からその兆候が伺えたハズであるし、《打鉄弐式》の方にもその手の機能があったとは確認されていない」

「それは…、その、以前のＶＴシステムの件以来、各国も篠ノ之博士の制裁を恐れてますし…」

「あぁ、その通りだ。もし、仮に日本がそれをやっていたというのなら、今頃開発メーカーは物理的に潰されていただろうさ。そういった動きも無い以上、機体の方にも原因が無かったという事になる。だからこそ解せんのだ」

「「「「「「……」」」」」」

千冬の言葉に、皆黙り込んでしまった。
機体にも、搭乗者にも問題が無かったハズだったのに、どうして、と。

「その…、姉さんが原因という線は考えられないでしょうか？」
「あぁ、私もそれは考えたのだが…、何も痕跡が無い。このぐらいの事なら何も痕跡を残さずにやってのけるだろうが……目的が解らん上に口を割るとは思えん。そもそも、所在が不明である以上、こちらからアイツに何かする事は不可能だからな」
「そうですね…」

…本当に、どうにもならないし、どうにもできなかった。

「あっれ～？　なんで私が犯人ってバレバレなの？」
『証拠が無さ過ぎるからだろ』
「ぶーぶー」
『いや、膨れっ面されてもだな…。それにしても、やはり七割は無理があったか』
「…そうだね。意外といけるかと思ったんだけど、いっくんにはまだ少し早かったみたい。……でもまぁ、あの娘（《白騎士》）がついてるからね、もう瞬間超回復も終わってるだろうからあと数回分戦ったらもう七割でも大丈夫だと思うけど」

『だな。……ところで、ヤツらの動向は？』
「ん、そっちの方は大丈夫。監視用に配置した機体もヤツらの本隊の接近はまだ感知してないし、仮に接近してても多少は監視用に配置した機体でも対応出来るからね」
『監視用機が取り込まれた場合は？』
「無い無い。都市一つ吹き飛ばすレベルの自爆装置がちゃんと備わってるからね♪」

『……それはそれで大丈夫なのか？』
「大丈夫大丈夫♪」
『なら…いいんだが』

別の意味で不安になったが……まぁ、言うだけ無駄だろうと思い、追求するのを控える事にした。

「そういえばさ」
『？』
「肉体の同調の方はともかく、記憶の方はどうするの？」
『……そうだな、まだ必要無いと思う。無いとは思うが、下手に記憶を与えて戦意を削ぐよりはヤツらが現れてから……そう、戦わざるを得ない状況になってからの方が無難だろう』
「だね、記憶を受け入れないと勝てるものも勝てないし」
『あぁ』
「二人の”いっくん”、二つの《白式》、全てが揃わない限り《白式・両儀》は真の意味で完成する事はまず有り得ない」

元来の篠ノ之束用だった頃ならともかく、織斑一夏用に改造され、
『もう一人の織斑一夏』まで現れたのなら尚の事。

あくまで平和利用の為に製作された宇宙用マルチフォームスーツでは無く、完全に戦闘用に……否、殲滅用に作られた、ただ滅ぼす為の……滅ぼす事でしか守れぬ存在。
ＩＳはＩＳでもインフィニット・ストラトスとは異なるもの。

対群用殲滅機、インフィニット・ストライカー。

それこそが、《白式・両儀》の正体だった。

第６９話「蛹」（後書き）

珍しく主人公不在の回でした

次回ぐらいには起きるかな？

第７０話「両儀」（前書き）

もうちょい引っ張るつもりでしたが、私の方が我慢出来なくなりました（オイ

第７０話「両儀」

「～♪」

一通り千冬達の様子を観察した束はジャックしていたモニターの電源を切り、キーボードを叩きながら別のモニターに目を向ける。
地球の外に関しては常に各所に配置した監視用機が見張っているが、それ以外はこうして一々見たい場所にアクセスする体裁を取っていた。
彼女の技術を以ってすれば、一度に太陽系全体を監視する事も不可能では無かったのだが、敢えてそうしなかったのには理由がある。
理由、といっても対した話ではない。
ただ単に、全部に目を通してやるのが面倒だっただけの事。
やろうと思えばやれたのだが、彼女に自分が面倒だと思った事をワザワザ自分からやるという趣味は無い。
数少ない身内と認めた人間に頼まれれば話は別だったが、共犯者である一夏は自分の事で精一杯でそれを求める余裕なんて無かった上に、親友である千冬も妹の箒も、彼女に調べ物を頼む事も無かったので、恐らくこのまま彼女が全てをワザワザ見てやる時は永遠に訪れる事は無い。

「～♪～……お？　おぉ？」
『どうかしたか？』

鼻歌混じりにキーボードを叩く束は、何かを見つけたのか、珍しい生き物でも見つけた子供の様に口元を緩ませる。

「見て見て『いっくん』、コレ」

『ほう…まだ残っていたのか』
「そうみたい。多分コレ、私達が倒したヤツの一部みたい。おっかしいなぁ～、跡形も無く消滅させたハズだったのに」
『ホントに？』
「あ、やっぱバレてた？　一応ヤツらの本隊が来るまでの間にもう一回いっくんに訓練しといてもらおうかな～って思ってさ」
『…はぁ、そんな事だろうと思ったよ。で、本格的にヤツらを相手にする前に《白式・両儀》の稼動テストもしたかった、と』
「そういう事～♪　ハンバーガー好きだしぃ、別にあの国に恨みがあるってワケじゃないんだけどさぁ～……うん、〝あんなモノ〟拾っちゃうなんて、運が悪かったね～って」
『全くだな……で？　俺はどうすればいい？』
「ん～、まだいつも通りのサポートだけでいいよ。同調率も……6．5割ぐらい？」
『解った。じゃあ俺は一旦あっち（《白式・真打》）に戻る。準備が出来次第合図してくれ』
「うん、じゃあね～♪」

その言葉を最後に、机の上に置かれた黒いバックルの中央に納められたコアは発光を止めた。

「ん～、別に死体を漁る趣味は無いんだけどさ。私、君達のこと嫌いだからさ、せめて少しぐらい私の為に働いてくれてもいいと思うんだよね。そう思わない？　……あ、そっかそっか、そんな状態（量）じゃあ思考も出来ないよね～♪　うん、いいよ、それで。だって君にやって欲しい役ってお人形さんだしぃ～♪　……そう、踏み台っていう名前のね」

『彼』が自分の元を去った途端、束は暗い笑みを浮かべ、モニターに映る存在に語りかける。
語りかけた相手は既に意識というモノを失い、ただの鉱物同然になっているので結局独り言になってしまっているのだが、そんな事は気にしない。

「…じゃあね、今度こそ迷わず逝きなよ」

そう言って、エンターキーを押した途端、モニターに映る鉱物が発光した。

米軍が基地の異常に気付いたの翌日の事だった。
”ＩＳのコアに近い”という特性を逆手に取られたヤツらの破片は束に操られ、流体金属の様にドロリと滑らかに、或は蛇の様にスルリと基地の中を移動ながら輸送機に乗り込み、別の基地内に厳重に保管されていた最新鋭機の前に辿り着いた。

コードネーム、ラプター。

かつて最強を誇った戦闘機の名を受け継いだその機体は、最強の第三世代機として米軍が秘密裏に製作していた最新鋭のＩＳであり、

事実、スペック上は現行の第三世代機と比べても段違いの性能を有していた。

偶発的に国内に落下した隕石が含有していたコアとほぼ同様の機能を持った鉱石。

それを利用して国が保有する稼動可能なＩＳの数を爆発的に増やし、あわよくば世界の覇権を握ろうとした米国だったが、結果は見事に失敗。

試験的に鉱石を搭載した《シルバリオ・ゴスペル》は起動直後に暴走してその姿を変えて軍の制止を振り切って国外へ飛び立ち、ＩＳ学園が臨海学校として利用していた施設を急襲、篠ノ之束が製作した機体を纏う織斑一夏と篠ノ之箒、そしてイギリス、中国、フランス、ドイツの四ヶ国の代表候補生らの手によって撃破され、操縦者とコアは保護された。

その直後、篠ノ之束直々に制裁を加えられ、基地一つと保有していた鉱石の殆どをうしなった米国であったが、秘密裏に鉱石の一部を回収する事に成功し、最寄の基地に安置していたのだ。

そこで、有り得ない事が起こった。

一つ目は、一定量が無ければただの鉱石でしかないソレが、一定量より遥かに少量であったのにもかかわらず、しかも勝手に動きだした事。

二つ目は、監視カメラが正常に働いていない事すら気付け無かった事。

そして三つ目に、上記二つの有り得ない事態によって、別の基地で開発が進められていた最新鋭機とソレが巡り会ってしまった事だった。

器を求めさ迷う悪霊は、まだ産声を上げてすらいない赤子に取り憑き、再び大地を踏み締める。

『ガァァァァァァァッ！！！』

産声の代わりに呪詛を吐き出した怪物は回りの金属を取り込み、本来そこに収まるべき人の形を象り、最強の鎧をその身に纏う。

本来のコア（シルバリオ・ゴスペル）が収まるハズだったその心臓部に鉱石を、それを操縦するハズだったナターシャ・ファルスの代わりに人形を収めた怪物は再び宿敵に牙を剥く為に飛び出した。

警報を聞き付け、駆け付けた軍人達は有り得ない事態に混乱しながらも部隊を即座に展開し、暴走した最新鋭機を包囲する。

「おいおい、なんでコアすらまだ入って無い機体が動いてんだよ！」

「知らないわよ！」

「ナタル、お前は余り前に出るな！　アイツは私が！　…って、どぁぁぁぁぁっ！！？」

そう言って飛び込んだ戦友は軽く一蹴されて墜落し、それを皮切りに次々と基地に駐留していたＩＳは薙ぎ倒され、怪物は悠々と基地を飛び立って行ってしまった。

昨日から医務室のベットに横たわったまま目覚めない一夏の隣に腰掛けた千冬がそっと弟の髪を撫でた。
だが、それでも彼は全く目を覚ます気配が無い。
普段の彼なら割と物音や自身に何か触れた時などに反応してすぐに目を覚ましてしまうのだが、余程深い眠りに着いているからなのか、全く起きる気配が無い。

「……なぁ、一夏。お前は何を知っている？　何に気付いた？」

返ってくるハズが無いと、解った上での問い掛け。
やはり彼は応えない。

「流石に私も、アイツらも、お前や束が何かしようとしている事ぐらいは解るさ。そのためにお前が二つの《白式》を持っているのも。……だがな、それだけじゃ解らないんだ、私達は。お前達が望んでさえくれれば、私達は協力を拒んだりなどしないさ。だから、自分で考えろだなんて言わずに…」

教えて欲しい、と言おうとして、言葉を切った。
彼女の親友は、無茶苦茶な性格でこそあったが、本当に無茶な要求をする様な人物ではない。
つまり、気付いて欲しいと言ったということは、自分になら気付けると、そう信頼されている証でもある。
ならば、自分自身で答えに辿り着くべきだろう。

「……馬鹿者。お前があまりにもみっともないせいで、こっちまで弱気になってしまったではないか。さっさと……！！？」

目を覚ませ、と言おうとした瞬間、急に目の前の怪我人が目を覚まし、ガバッと布団が飛ぶ勢いで跳び起きた。

「なっ……い、一……って、オイ！　ちょっと待て！　そっちは窓……って、一夏ー！？」

急に目を覚ました弟は患者服のまま窓から飛び降り、落下しながら変身してバイクを召喚して、そのまま走り去ってしまった。

「……」

迎えに来た真耶が医務室の扉を開けるまで、呆然と窓を見ている事しか出来なかった。

『や～、いっくん。実にいい朝だねぇ。昨日はぐっすり眠れたかい？』

「えぇ、それはもう。誰かさんが意識をカットしてくれたおかげで夢も見ずにぐっすりでしたよ」

バイクを駆りながら束の軽口に軽口を返す。

『それは結構。…で、状況の説明は必要かな？』

「大丈夫です。またヤツらが現れたんでしょう？」

『それがさ～、ホラ、私が米軍の基地ごと残りのヤツらぶった切ったじゃん？　アレでケリがついたと思ってたんだけどね～』
「それが、残っていたと？」
『そういう事～♪』

やっちまったぜ～、なんて言いながら、少しも悪びれた様子ではない束に、一夏が呆れながら言った。

「…それ、ワザと残してたでしょ？」
『ギクゥゥッ！！？　え～、なんで解ったの～？』
「なんでって…」

そういえばなんでそう思ったんだろうと、ふと思案して、ただの勘だろうと結論付けた。

「…そりゃ、束さんですから」
『え～、どういう意味なのさ～』
「そういう意味です」
『ぶーぶー』
「はいはい……で、今度のヤツはどんなのなんですか？」

ふざけ合いながらもバイクの速度を徐々に上げていき、やがて陸地が終わった途端に一旦バイクから飛び上がった。
搭乗者が飛び上がった途端、前輪と後輪が地面に平行になる様に寝かされ、車体が前後に延びる。

《マシンスライダー》、スライダーモード。

アギトのマシントルネイダーと同様の変形機構を持った本機の機能もまた、同一のものであり、この形態になれば飛行が可能になる。《セイリングジャンプ》が増設される以前の《白式・真打》唯一の飛行手段だったこの形態を今更使ったのは本体である《白式・真打》のエネルギーを節約する為であった。

『ん～とね、米国の最新鋭機を取り込んでるから前のより強いかもよ？』

「またあの国……ってか、今回は違うか。束さん、アメリカになんか恨みでもあるんですか？」

『国自体には無いよ？　でもね～、私の可愛い娘（ＩＳ）達に変なモノ混ぜようとしたのは許せないかな～って』

「あの、束さん？　今回のは…」

『あぁ、コイツ？　まだコア入れる前の単なる入れ物だから私はセーフだよ～？』

「……ま、いっか。で、具体的にどうすればいいんですか？　俺は」

『フッフッフ～♪　いっくんお待ちかねの《白式・両儀》でフルボッコにしちゃいましょ～』

「！！！」

ついに来たか、と一夏が息を飲む。

『じゃあ、さっそく……封印解除！　両儀、解禁！』

音声認識で解除コードを入力された二つの《白式》のコアが強烈な光を放つ。

バックルに納められた《白式・真打》のコアは勿論のこと、真打の装甲によって覆われてしまっている待機状態で右腕に巻き付いていた《白式・影打》から放たれた光は真打の装甲の隙間から漏れ出す

ほど強烈な輝きを放っていた。

右腕に輝く影打の光は腕を伝い胸を通過し、やがてバックルまで辿り着いたところで光源である《白式・影打》のコアがバックルから浮き出て一旦横一列に《白式・真打》のコアと並び、そして太極図を象るかの様に合わさり、一つに……両儀へと致る。

変化はソレだけでは終わらない。

真打の脚部装甲を覆う様に影打のアーマーが両脚に装着され、腰部、両腕、両肩、胸部、ヘッドセットがそれぞれ、まるで人間がＩＳを纏うかの様に《白式・真打》を《白式・影打》で鎧い、そして最後にウイングスラスターが出現し、合体……否、復元の終わりを告げるかの様に太極図を象ったコアとバイザーの奥の瞳が光り輝く。

インフィニット・ストライカーのコアユニットである《白式・真打》、

インフィニット・ストラトスである《白式影打》に偽装した《白騎士》、しかしそのインフィニット・ストラトスという存在ですら《白式・真打》用の専用装備、いわばオートクチュールに施された偽装、

そして、光と陰が合わさり太極を成す事で完成するこの姿こそが本来の姿であり、存在の本義。

対群用殲滅兵器、インフィニット・ストライカー　《白式・両儀》

全てを無に帰す殲滅兵器は遂にその姿を現し、標的へ向かって飛び立った。

ただ滅ぼす為に。

第７０話「両儀」（後書き）

次回、

「もうやめて！　〇〇のライフはもう０よ！！」

な事やらかしますが…

まぁ、殲滅用だからいいよね？

第71話「フォームチェンジ」（前書き）

皆さんお待ちかねー！
フォームチェンジの時間だよ～♪

第７１話「フォームチェンジ」

文字通り、目にも留まらぬ速さで飛翔する《白式・両儀》、未熟な一夏がそのパワーに振り回される事なく成長できるようにと、その存在を《白式・真打》と《白式・影打》の二つに分け、封印されていた本来の姿である。

結局二つに分けられてもなお一夏を振り回す程のパワーを有していた《白式・真打》と《白式・影打》だったが、そのコアの出力は通常のＩＳの倍近くの出力を叩き出す特別製であった。
では、二つに分けられても尚、通常のＩＳの倍近い出力を誇った《白式・両儀》の元来の出力はどのぐらいのものだったのか。

二倍が二つで通常のＩＳね四倍の出力……どころの話では無い。
二倍の二乗……否、それ以上の圧倒的な出力を叩き出すその性能こそが、篠ノ之束が本機を殲滅兵器とした由縁でもあった。

その圧倒的出力を以て飛翔する《白式・両儀》は一瞬で日本の領海ギリギリまで辿り着いたところで急停止し、まだ見ぬ獲物を待った。
それから数秒遅れて現れた獲物、《ラプター》に寄生した異星起源種たる存在は自らが狩られる立場である事すら理解出来ずに、無謀にも目の前の白に飛び掛る。

『ガァァァァッ！！…！！？』
「……で？」

《ラプター》の腕から伸びた近接ブレードが《白式・両儀》の頭部を叩き割ろうとして、逆にブレードの方が砕けた。

『！！？　アァァァッ』

何かの間違いだ、とでも思ったのか、懲りずにもう片方の腕のブレードで切り付けるも、結果は同じ。
必死になって何度も何度も攻撃を繰り出す敵を、一夏は冷めた目で見ていた。

『…グゥゥゥゥッ』

微かに残った本能によって漸く不利を悟ったのか、文字通り尻尾を巻いて逃げ出そうと踵を返した途端、怪物はそれ以上動けなくなる。

『！！？』

「…おいおい、これから面白くなるっていうのに帰んなよ」
『フォームチェンジ、シュヴァルツェア・レーゲン』

嘲笑う一夏の声と、機体音声が同時に響いた。
直後、《白式・両儀》の真紅の瞳は黄金に染まり、白亜の機体を漆黒が塗り潰し、そして《白式・影打》だった部分が徐々にその形を変えていく。

《シュヴァルツェア・レーゲン》をより鋭角なデザインにアレンジしたそれは《白式・真打》が《シュヴァルツェア・レーゲン》との交戦経験を元に再構成した新たな黒い鎧であり、その性能はオリジナルをも上回る。

ＭＡＩＣ（マルチロック・アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）

ＡＩＣの発展系であるそれは文字通り一度に複数体の動きを止める特殊兵器であるが、その特性はそれだけではない。

《シュヴァルツェア・レーゲン》に搭載されたＡＩＣは搭乗者が集中を切らせてしまえば解けてしまう代物であったのに対し、本機のそれは完全に機体の方が標的を捕えている為に搭乗者の行動に一切の制限を課す事が無く、それでいて機体の処理能力を圧迫する様な動作をしない限り永続的にその効力が続くという恐ろしい代物だった。

「さてと、加減がまだ解んないし、取り敢えず”外に”出ようぜ」

『フォームチェンジ、甲龍』

音声と共に、今度はその瞳が桜色の輝きを放ち、そしてその輝きと共に機体全体のカラーリングを《甲龍》と同一の物に変え、鎧もまたその発展強化型に変異する。

「吹っ飛べ！」

主の声に応え、両肩に浮遊する龍の頭がその顎を広げ、咆哮を上げる。

ゴォォォッ、と凄まじい爆音を立てて発射された衝撃の威力は《甲龍》に搭載された《龍咆》の比ではない。

『ガァァァッ！？』

突然自身を襲った衝撃によって上空に吹き飛ばされた怪物は大気圏を軽く通過して地球から弾き飛ばされてしまった。

「まさか、お星さまになっておしまいだなんて思ってないよな？」

『フォームチェンジ、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』

瞬時加速（イグニッション・ブースト）すら使わず、通常の飛行で瞬時に怪物に追い付いて見せた《白式・両儀》の瞳が橙色の輝きを放った途端、全身も橙色に染まって鎧が《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》の発展系を思わせる姿に変わる。

「砕け散れぇぇぇっ！！」

そして、吹き飛ぶ怪物に、更に追い撃ちを掛けるように強烈な一撃が叩き込まれた。

身の丈を越える長大さを誇るパイルバンカーの杭が怪物の身体を貫く……なんて生易しい事などせず、文字通り粉々に破砕した。

粉々になり、悲鳴を上げる事すら出来なくなった怪物に、一夏は更に追い撃ちを掛ける。

「まだまだぁぁぁぁぁっ！」

『フォームチェンジ、ブルー・ティアーズ』

蒼く輝く瞳が粉々になった怪物のカケラの”一粒一粒に”狙いを着け、蒼い鎧の一部を切り離して射出する。

射出されたビットが《白式・真打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《質量操作》を受けて夥しい数に増え、怪物の破片の一粒一粒に襲い掛かった。

《白式・両儀》はその外観通り、《白式・真打》に《白式・影打》を装着しただけ、つまり同時使用した機体である。

それ故に、《白式・真打》と《白式・影打》の”二機”が同時起動している為に両方の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）が同時に使用出来るのだ。

例えば《白式・真打》と《白式・影打》の組み合わせなら《質量操作》と《零落白夜》が、《白式・真打》と《白騎士》の組み合わせなら《質量操作》と《生体復元》が同時に使用出来るということになり、更に《白式・両儀》としての唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《フォームチェンジ》も併用する事が可能であり、三つまでなら唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を同時使用出来るのである。

「いけぇぇぇぇぇぇっ！！！」

まるでピラニアが群れで獲物を啄む様に、砕け散った破片に無数のビットが襲い掛かる。

何度も何度も突撃しながら先端の刃で破片を両断してはUターンしてまた襲い掛かってを繰り返し、やがて破片が小石程度までの大きさになったところでその破片をビットによって一ヶ所にかき集めた。

虫の息も何も、最初から死体同然だったものを無理矢理動かされていた怪物は既に生命活動を停止しており、あとはもう、そのまま宇宙の塵になるしかない。

「…さぁて、”トドメ”といこうか」

だが、一夏は塵になる事すら許さなかった。

『フォームチェンジ、白式・影打』

音声と共に瞳を真紅に輝かせた《白式・両儀》のオートクチュール部分、つまり《白式・影打》だった部分が発展強化型の《ブルー・ティアーズ》から元の《白式・影打》に戻り、右手に《雪片弐型》が握られた。

「消え去れ、化け物」

振り上げられた刀から白い光りが延びる。
地球の直径を裕に越える長さまで伸びたその光の刀を一夏は無造作に振り下ろした。

怪物の慣れ果てだけで無く、刀の軌道上にあったありとあらゆるデブリがその光に飲み込まれ、原子レベルまで分解されて消滅していく。
滅びの光が止んだ後には、何も残らなかった。
そう、何も。

「ふぅ……やったか…！？　」

急に噎せて咳込むと、口内を血の味が満たした。
いや、味どころか、実際に血が口内を満たしている。

「ッハ…ハァ……ハァハァ…ッ…クソッ、調子に乗りすぎたか？」

《シュヴァルツェア・レーゲン》と《ブルー・ティアーズ》の発展強化形態の様に自分自身は動かなかった形態はともかく、最初の飛行で使用した《白式・影打》と衝撃砲発射後に大気圏脱出までやった《甲龍》の使用に掛かったG、そして寄生されて変異しているとはいえ、シールドバリヤーや絶対防御があるにも関わらず何の特殊能力も無しにただ威力のみで機体を粉々にした《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》のパイルバンカーの反動を殺し切れなかったが為に、搭乗者である一夏にダメージを与えてしまったのだ。

「ハァ…ハァ、ハァ…マズいな、こりゃ…《白騎士》！」

『フォームチェンジ、白騎士』

瞳が白く輝くと共に《白式影打》部分が《白騎士》に姿を変え、即座に唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を発動させて搭乗者の傷を癒した。

「ハァ……ハァ、ハァ……ふぅ……」

『やぁやぁ、いっくん。どうかな？　初めて《白式両儀》を使った感想は』

傷も癒え、もう用は済んだと帰ろうとしたところで束から通信が入った。

「すごいですね、コレ。何もかも予想以上です」
『反動も？』
「……はい」
『やっぱり、まだ調整が足りなかったみたい。細かい調整はこっちでやっとくからさ、いっくんはまた暫く学園生活を満喫してていいよ』
「え…でも」
『あ～うん、ヤツらならこっちで監視してるから』
「なら、いいんですが…」
『じゃあ、調整もあるし、暫くは《白式・両儀》の使用は無しね。流石に《白騎士》でも死んだ後はどうにも出来ないから、ぜぇ～ったい使っちゃダメだよ？』
「はいはい」

そう言って念を押す束に、一夏は苦笑混じりに応じた。

本来の《白式・両儀》であったなら、調整などしなくても搭乗者を傷付ける様な欠陥を持ってはいなかった。

無論、一夏と『彼』との同調が完全に成されていないから、ではない。

それとこれとは全くの別問題だ。
では何故調整が必要な状態のまま束が使用を許したのか。
それは、自分がどれほど危険な力を振るっているのかを、改めて一夏に認識して欲しかったからにほかならない。

だから、未調整のままで……否、程よく搭乗者にダメージを与える様に”調整した”状態で送り出したのだ。

単に「危ないからダメ」と言っても、一夏は聞かないだろうと思った束は、一夏に身をもって危険性を知ってもらおうとして、この様な行動に出た。

勿論、システム自体は束が掌握しているのでいくら一夏が駄々をこねても彼女が由としなければ《白式・両儀》は使用出来ないのだが、ヤツらとの戦闘中にそんな問答をやって隙を突かれ、そのせいで一夏が命を落とすよりはと、今回はあえて一夏に《白式・両儀》を使用させて、”強力だからといって多用するのは危険”という印象を持たせたのだ。

その為にワザワザ米軍基地を襲撃した際にヤツらの破片を少量残して、一通り一夏が封印を解除したところで利用する事にしたのである。

結果、全て束の思惑通りに事が進み、後はヤツらの本隊が現れるまでじっくりと一夏自身を鍛えればいいだけとなった。

『あ、そうそう』

「？　どうかしたんですか？」

『ちーちゃんがすっごく怒ってるから、気をつけて帰ってね♪』

「げっ！？」

…さっそく、訓練メニューが出来たらしい。

第71話「フォームチェンジ」（後書き）

フォームチェンジ中のフォーム名はあくまで暫定的なものです。
ヒロインズの機体のパワーアップ後の名称が正式なフォーム名になります

第７２話「姉の驚異」（前書き）

予定：千冬姉のスーパーお説教タイム、始まるよ～♪

←

現実：どうしてこうなった！

第７２話「姉の驚異」

突然ですが、問題です。

４時間

さて、何に掛かった時間でしょうか？

……はい、正解は『千冬姉のスーパーお説教タイム』に掛かった時間でしたぁ～♪

……正確には掛かった、じゃなくてまだまだ現在進行系なんだけどな！

しかも日本古来からの行儀のいい座り方……というか、この場合お隣りの国的に罪人の座り方に分類される正座で、だ。

勿論、罪人とは俺の事である。

一時間経過、だんだん痺れてきた。

二時間経過、痺れがヤヴァい事になって……。

三時間経過、痺れを通り越して痛いんですが……。

四時間経過、遂に痛みすら越えて感覚が無くなってきた……。　↑今ココ

と、段々洒落にならん事態になってきてるんだが、千冬姉のお説教

はいまだ終わる気配無し。
まだ起承転結でいうところの承辺りなのかもしれん。
……もうコレ、お説教じゃなくて拷問だと思うんだけどな、うん。

「聞いているのか、一夏！」

ちゃんと聞いてますよ、お姉様。
ええ、聞いてますとも。

「だいたいお前が普段からハッキリしないから…」

聞いてるけどさ、その話関係無くね？
ってか、なんで俺の交友関係に話題がシフトしてんのさ。

「……あの、千冬姉、授業は？」
「そんなものは真耶にでもやらせておけばいい」

おいおい、アンタも教師だろうに…。

「全く、お前というヤツは……何故一人で飛び出したりなんかしたんだ」
「通信なりなんなりして呼んで下されば私も出撃しましたのに」
「全くだ、いくら《白式・真打》の性能が優れているとはいえ、無謀過ぎるぞ」
「そうだよ一夏」
「全くだわ」

と、まぁ千冬姉以外にも口々に色々と文句を言ってるワケなんだが……。

「いや、お前らも授業はどうした」
「「「「「そんな事はどうでもいい（ですわ）！」」」」」
いや、良くないだろ、普通。
皆してサボりか。

あぁ、因みにラウラが「《白式・真打》の…」って言ってたのは束さんが学園の監視カメラとか衛星とかの記録を全部すり替えたおかげで《白式・真打》で俺があの怪物を倒した事になっているからである。
束さん曰く「時期が来るまでは《白式・両儀》の存在は秘匿しといた方がいい」のだとか。

「…で？　《白式・真打》が臨海学校の時の様に変異したＩＳがこちらに向かって来るのを察知したから、今朝まで眠っていたお前が叩き起こされて向かえ討った、と？」
「そうだけど…」
「学園……どころか、国のレーダーですらまだ捕らえていなかった相手を、か？」

ギロリ、と千冬姉が俺を睨む。
《白式・真打》が国より早く未確認機を察知出来るハズが無いだろ、と、まるで尋問でもするかの様な台詞である。

…まぁ、結局のところ「そうだとしても一人で戦う必要は無かった」とか「そもそもお前が戦う必要は無いだろう」とか、そういう事を言いたいのだろう。

まぁ、常識的に考えたらそうだよな。
…常識的に考えたら。

千冬姉も、みんなも、知らないから仕方がないんだけど、非常識（除、束さん基準）な連中にその手の常識は通用しない。
そりゃ、今朝のが普通に人間に盗まれただけの最新鋭機だったならまぁ、軍の機体でフクロにすれば勝てるだろうけどさ、連中が絡んでる以上、やっぱりそれ専門の機体をぶつけた方がいいと思うんだよなぁ…。
…あぁそうそう、ここでいう軍というのは自称自衛隊（笑）の事である。
一応、技術立国であるせいか各国の軍隊の機体に匹敵する性能を有する機体を配備……しているだけならまだしも、規模まで各国の軍隊並という明らかに”ヤル気”の伺える規模にまで膨れ上がってしまった為に自称、と陰口を叩かれているんだとか。
…と言ってもまぁ、規模に関してはＩＳの絶対数が少ないせいもあるからなぁ。
まぁ、他所が第三世代機がやっと出来てきたり、まだ第二世代機だったりする中で「自衛目的で第三世代機配備しました～」なんて言われても納得出来ないのも解るんだが。

…それに、日本が第三世代機の配備を急いだのってある意味俺のせいだから、あんまり悪口を言えた立場じゃないんだよなぁ…。
勝手に強制入学させたとはいえ、俺が入学したせいでオータムさんが所属してる亡国機業（ファントムタスク）とか、あぁいう犯罪組織からの襲撃（ラブコール）の頻度がとんでもない事になってるらしいし。

「だいたいお前がハッキリしないから…」

いや待て千冬姉、その話はもう7度目だぞ！？

お説教タイムが始まってかれこれ四時間が経過しているのだが、その間千冬姉がした話というのが……

勝手に出撃、戦闘した件に関してのお咎めが3回

交友関係（女性限定）の話題が7回

毎度毎度ボロボロになるのは鍛え様が足りないからだ～、みたいな話が5回

だいたい束のヤツは…、と、完全に俺の管轄外の愚痴が36回

小さい頃は俺が「千冬姉千冬姉」とあんなに可愛いらしく千冬姉に着いて回ったのに…と、一体いつの話だよって話題が23回

……アレ？　説教はどうした？

ってか、一番重要なハズの話題が一番頻度が少ないってどういう事だよ！

「…あの、千冬姉、そろそろ足がヤヴァい事になってきたから足崩していい？」

「却下」

「ダメに決まってるだろう」

「反省が足りませんわ」

「そうね」

「…ちょっとやり過ぎな気もするけど……うん、このぐらいやら

ないと反省しないよね、一夏は」
「全くだ」
そんな……即答で却下せんでも…。
ってか、お前らもいい加減授業行けよ！
「どうせ《白騎士》に頼めばすぐに治るんだろう？　お前は」
ハッ！？　その手があったか！
よし、《白騎士》さんヘルプ！
『（本日の営業時間は終了しました。またのお越しを）』
マジか…。
いやいやいや、営業時間ってなんだよ！
『（私も、もう少し一夏は反省すべきかと思います）』
裏切り者ぉ～！
『（……最近ご無沙汰なのは全く関係ありません。えぇ、関係ありませんとも）』
ちょっ…、ご無沙汰っておま…、えぇっ！？　白式さん＝《白式影打》＝《白騎士》だったのかよ！
『（え…、今更ですか？）』
全く気付かなかった…。
てっきり束さんがおふざけで作った別存在かと……。

『（因みに、どのＩＳも私ほど成熟していないとはいえちゃんとした自我というものがあります。あの娘（レーゲンちゃん）の様に）』

へ～、そりゃ知らなかった……って待てよ、ちゃんとした自我があるって事は夢の中の出来事も…。

『（えぇ、あの娘はちゃんと覚えてますよ）』

まずいまずいまずい！

レーゲンちゃんがラウラにチクったりなんかしたら…。

『（まぁ、軽く見積もって銃殺でしょうね）』

軽く！？

『（毎晩付き合ってくれるのなら口止めしますが？）』

ぐぅ、人の弱みに付け込みやがって…。

『（別に拒む理由は無いのでは？　社会的地位が守られるだけではなく快楽まで得られるのですよ？）』

いや、快楽ってお前…。

俺まだ１５だぞ。

『（愛に年齢は関係ありません）』

エロ以外ならな！

『（むぅ、強情ですね…。まぁ、いいでしょう。どうせ一夏が拒んでも力ずくで…）』

…なんで自分の機体から貞操の危機を感じなきゃならんのだ。

『（仕様です）』

どんな仕様だよ！

ってかさっきから気に普通に会話が成立してるけど、なんでお前台詞じゃなくて地の文にまで返事出来るんだよ！

『（フッ…、私ほどのＩＳともなれば操縦者の心（地の文）を読むぐらい朝飯前です）』

わーい、無駄にハイスペックだな、おい。

「おい聞いて……ほぅ、説教中に考え事とはいい度胸だな」

「ひっ…」

やべっ、白式さんとの話に集中し過ぎた！

「あ…あぁ、あの、千冬姉？」

「どうした？」

「ど、どうして指をポキポキ鳴らしているのでしょうか？」

「どうしてだと思う？」

やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい！

千冬姉、顔は笑ってるのに目が全然笑ってない！

箒達は……ダメだ、絶対助けてくれない。
寧ろ自業自得とか言って千冬姉側に着きそう……ってかもう八割型千冬姉側に着いてるだろ、コレ。

白式さんは却下。

『（ちょっ…）』

やべぇ…、このままだと殴られる。
……《白式・真打》で変身して逃げるか？

『（Ｅｒｒｏｒ：制作者権限により起動制限がかけられています）』

…ブルータス（束さん）、お前もか。
くっ…マジでこのままだと…。
他に誰か助けてくれそうな人は……、
山田先生…は授業中か。
生徒会長…はダメだ。絶対面白がるだけで助けてくれない。
簪さん…は……あ～、うん、色んな意味で力不足だ。
……他、他に助けてくれそうな人……クソッ、もう心当たりが…。

「…さて、覚悟はいいな？」
「あ、あの…もう少し……いや、できれば一生…」
「返事は聞いて無い」

Ｎｏｏｏｏｏｏ！！！

えぇいっ、こうなりゃヤケだ！

「”マドカ姉”、ヘルプ！」
「任せろ一夏！」
「ホントに居たぁぁぁぁぁぁっ！！？」
「なっ…、貴様、何処から…！？」

ちょっ…、冗談で呼んだのにホントに居たのかよ！

「フッフッフ、昨日の晩に一夏が倒れたと聞いたのでな、昨晩から一夏のベットの下でずっと待機していたのさ！」
「「「「「ストーカー！？」」」」」
「失礼な…、これぐらい姉として当然の嗜みだろう」

いや、俺もそれはストーカーだと思う。
かなり悪質な方の。

「……」

…って、アレ？　何故に千冬姉だけツッコミ無し？

まぁいい、今のうちに逃げよう！

「なっ、待て一夏、話はまだ終わって…」

アー　アー　キコエナーイ！

こうして俺はマドカさんの援護もあって無事…

「ほい、一丁上がり～」

…無事、亡国機業（ファントムタスク）に捕まってしまいましたとさ。

めでたし　めでたし……なワケあるかぁぁぁぁぁぁぁっ！！？

「いやお前、いくらなんでもMだって組織の人間なんだから一人で勝手に動くワケ無いだろ」

……オータムさんの発言が正論過ぎて痛い。

第７２話「姉の驚異」（後書き）

次回、亡国機業（ファントムタスク）編、スタート？

第７３話「それぞれの心境」（前書き）

まぁ、タイトル通りの回ですね

第７３話「それぞれの心境」

はい、その場の思い付きで地雷踏んだ織斑一夏です。

あの状況だともう千冬姉にボコボコにされるのは避けられなかったのは確かだと思う。

…思うんだが……なんであの時よりにもよってマドカさん呼んじゃったんだろ、俺。

そりゃ…まぁ、千冬姉は怒りのスーパーモードだし、

いつものメンバーもまたいつも通りＩＳで制裁（ツッコミ）入れようとしてたらしく、なんかオーラの様に量子が揺らめいてたし、

山田先生は授業中…というか来てくれたとしても確実に間に合わんし、

生徒会長も授業中だったんだろうけど、間に合ったとしても絶対面白がるだけで助けてくれそうに無いし、

簪さんは間に合う間に合わん以前に気の弱いあの簪さんの事だから来れても何も出来ないだろうし、

その他大勢の皆さんも世界最強と代表候補生四人＋αなんて相手したくないだろうし、

……と、まぁ、当てになりそうな人が居なかったのは確かだったけどなぁ。

ってかマドカさんもマドカさんで何で呼んだら出て来るのさ。

しかも殆どタイムラグ無しだったよな？

まさかマジでベットの下に……いや、そうだとしても俺が千冬姉に説教されてた部屋って医務室じゃなくて会議室だったんだが…。

「一夏～♪」

「……」

まぁ、マドカさんが何処から登場したかはいいとして。
マジでこれからどうしよう。
随伴して飛んでるオータムさんに助けを……あ、露骨に顔を反らされた。

今、ＩＳを纏ったマドカさんに抱き抱えられた状態で空の旅の途中なんだが…。
逃げようにも相変わらず《白式・真打》はロックが掛かったままで起動しないし、《白式・影打》こと白式さんも…、

「（白式さん、そろそろ帰りたいんで装着を…）」
『（本日の営業は終了しました）』
「（いや、そういう冗談はいいから。さっさと装着させてくれよ）」
『（じゃあ今朝《白式・両儀》形態になったせいでエネルギー切れって事で）』
「（じゃあ！？　じゃあってお前…）」
『（それではまた来週…）』
「（来週！？）」
『（……）』
「（え？　ちょっ…、冗談だろ？　なぁおい、白式さん？　白式さ～ん？）」

…と、まぁこんな調子で協力してくれるつもりは無いらしい。

ヒャッハー！
四面楚歌だぜ！
イェーイ！

……ぐすん。

…はぁ、とりあえず命の心配だけはしなくてよさそうだけど。

「…ジュルリ、帰ったら一夏とお風呂で洗いっこしてそのまま……デュフフフ…」

…貞操の方が絶対絶命っぽい。

一夏がマドカに連れ去られて空を飛んでいたその頃、他の面々はというと…。

○千冬の場合

くそっ……、あの女、またしても一夏を…！
しかも昨晩は一夏のベットの下にずっと居ただと？
なんて羨ま……じゃなかった、なんて羨ま…だから違う！　違わないけど違う！
なんてけしからん事をしてくれたんだあの女は！
私だって一夏が１０歳過ぎた辺りから一緒に寝てくれなくなって淋しい夜を過ごしているというのに！
同じベットの中じゃなかったからまだ良かった様なものの、そんな至近距離で一夏と一晩過ごしただなんて！

えぇいっ、一夏も一夏だ！
なんであんなヤツを姉などと…。

これはもう、私が直々に連れ戻して一夏と二人っ切りで今一度私こそが姉なのだと再教育せねばならんな！
……そう、二人っ切りで！

要約：普段気丈に振る舞ってても、結局思考はマドカと同じ。

○箒の場合

なっ…、馬鹿な…一夏が掠われ……いや、待てあのマドカとかいう千冬さんそっくりな女を呼んだのは一夏の方だぞ？　まさかアイツわざと捕まっ……いや、アイツらと共謀して逃亡したというのか？
…しかし、何故……いや、原因は私達か。
確かに、毎度毎度ＩＳまで使ってその……なんだ、”少し”やり過ぎる事もあるが……でも、それは一夏が…。
そうだ、一夏がはっきりしないからいけないんだ！
幼なじみの、それもファーストな私だけを見ていればいいものを…。

アイツを連れ帰ったらその辺りの事をしっかりと身体に……っと、待て待て、それではいつもと変わらんではないか。
…よし、こうしよう。
今回の件で皆が一夏を責める中、私だけが一夏に優しくする。
そうすれば一夏の中での私の株も鰻昇りに……ふ、ふふ、ふふふ、完璧だ。
…あぁそうだ、一夏のヤツ、気にして無い風を装ってはいるが、いつも山田先生の胸ばかり見ていたな。
ふふ、他の女ならともかく、私が気付かないとでも思ったのか？
……私だって、その、いつものメンバー内では一番大きいワケだし
……その、なんだ、一夏が望むのならちょっとぐらい触っても……。

フフフ、邪魔だ邪魔だとは思っていたが、一夏が喜んでくれるのなら……そうだ、この際姉さんも利用して……って、待て、な、何を考えているのだ私は！
か、か、身体で篭絡させようなどと…。

要約：束と二人でＷパイｚ（検閲削除）

○鈴音の場合

そりゃあさ、ああなった時の千冬さんは私だって怖いわよ。
だけど、逃げる事無いじゃない。
……ま、まぁ、逃げたくなるのも解らなくも無いんだけどさ。
でもね一夏、幼なじみの私や箒は勿論、セシリアもシャルロットもラウラだってアンタとの付き合い長いんだし、そりゃいい加減アンタの唐変木さにも慣れて来たわよ。

でも、だからってそのままでいいってワケじゃないのよ、私達は。
私もそうだけど、アンタの回りにいる娘はみんなアンタの事が好きだからアンタの傍にいるの。
だから皆、自分だけを見て欲しいから、見てもらえ無いんだったらせめて身体に刻……って、落ち着きなさい、私。
…え～と、確かこういうのって世間ではヤンデレっていうんだっけ？
もぅ、そんなんで結ばれても相手にビクビク怯えられながらになるじゃない。
あ～、危ない危ない。
……そうね、ここは正統派でもっと女の子らしいところをアピール

して……。
顔は…まぁ、皆に負けてるとは思わないけど、後は好みの問題よね。
一夏の好み……ダメ、回りの女がバリエーション豊か過ぎてどれが好みなんだか解んない。
スタイルは…うぅ、そりゃ私だってお世辞にも豊満とは言えない身体つきだって事ぐらい自覚してるわよ。
……まずいわ、見た目で勝負となると不利ね。
…でもこれだけ回りに美少女が揃ってるんだから今更見た目で勝負するのもアレか。
……じゃあ、他に女の子らしい事…女の子らしい事……あ、料理！
　料理があるじゃない！
ふっふっふ、これなら私だって…。
待ってなさい、私の酢豚でイチコロよ！

要約：毎日酢豚

○セシリアの場合

困りましたわね…。
ホントに。
その…、『あの方』に言われたから…というワケではありませんが、私だって一夏さんが逃げたくなったお気持ちも解らないワケではありませんのよ？
でも…、それでも、ですわ。
学園に入学してからの付き合いとはいえ、私だって一夏さんがどんな殿方か理解しているつもりですのよ？
ええ、解っていますとも。
だからといってこうも毎回毎回新しい女を侍らせる様になられたら

不安になるではありませんか。
生徒会長は…まぁ、あの方は一夏さんで遊んでいるだけなのでまだマークする必要は無いでしょう。
ですがあの四組の代表候補生は別ですわ。
私達とは違ってか弱い……わ、私だって本来ならか弱い淑女ですのよ！　で、でもこうもライバルが多いと積極的に攻めざるを得ないではありませんか！
…こほん、とにかく、あの簪とかいう方は強敵ですわね。
一夏さんの事ですから、あの方が目の前でオロオロとしていれば、思わず手を差し延べてしまうのでしょう。
えぇ、弱きを助ける事自体は褒められるべき事ですわ。
ですが、それがきっかけであの方ばかりを一夏さんが構う様になったらと思うと、気が気でないですわ。
……でも、かといって今更か弱い女をアピールしても、一夏さんの脳裏に根付いたイメージというものが…。
ハァ…ホント、困りましたわ。

要約：後の祭り

○シャルロットの場合

ど、どどど～しよう！　い、一夏が掠われ……アレ？　でも自分で呼んだから……と、とにかく早く一夏を連れ戻さないと！
皆急いで支度を……って、なんか皆してトリップしてるぅぅぅぅぅぅっ！！？
…ダメだ、僕がしっかりしないと。
でも僕の《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》だけじゃ心許な

いし…。
目視出来たただけでも相手は二人、流石に二体一は……しかも人質（？）の救出を前提にした戦いだと僕一人じゃとても…。
でもあの様子じゃあ皆使い物になりそうにないし。
それに、敵があの二人だけとは限らないんだよね…。
…ホント、どうしよう。
というか、なんで逃げたりなんかしたんだろ？　一夏は。
いつも通り一夏が馬鹿な事をやって、
いつも通りそんな一夏に対して僕らがお仕置きをして、
……うん、どこもおかしなところは無いハズなんだけどなぁ。

要約：「どこもおかしなところは無い」という結論がおかしい

○ラウラの場合

何故だ、何故一夏はあんなワザと敵に捕まる様なマネを……。
！？　そっ、そうか！　再改造手術を受けてパワーアップする為にワザと敵の組織に捕まって…。
…フフフ、一夏もだんだん解ってきたじゃないか。

要約：少しは心配しろ

全員の心の内に対して『彼』からのコメント

「まず一言、捕らぬ狸の皮算用。妄想すんのは勝手だけどそういうことは助けてからにしましょう。ってか、どうやって助けようか考

えてたのがシャルロットだけってどういうことなのさ」

※おまけ

一夏がアジトに連れてこられた辺りの一コマ

「あ！　《白式・真打》にロック掛けっぱなしにしたまま忘れてた」

『おいおい…』

第７３話「それぞれの心境」（後書き）

次回もマドカさんのターン！

第７４話「お酒は二十歳になってから」（前書き）

今回はまぁ、一夏とオータムさんが一緒に酒を飲むだけの話です（
オイ

第７４話「お酒は二十歳になってから」

「おぉ…」

アジト……というぐらいだからこう、テレビとかでよく見る廃工場とかを想像されたんだが、意外にも俺に宛がわれたのはホテルの一室だった。

しかも、とんでもなく高そうなヤツ。

……ベットがダブルなのは全力でスルーするとして、冷蔵庫の中の飲み物も飲み放題、腹が減ったら好きなだけ注文ＯＫ…と、やたらと待遇がいいので困惑してしまう。

「一応、思い付く限りの物はこっちで用意したけど、何か必要な物があったらまた言ってね」

「は、はぁ…」

「じゃあ、私は仕事があるから」

そう言って、部屋まで案内してくれたスコールさんが何処かへ行ってしまったので、俺は部屋の奥まで行って恐る恐るベットに腰を下ろした。

「すげ…」

座った感触がうちのベットとは大違いだ……って、当たり前か。

ふと窓の外に目をやると、綺麗な夕日が見えた。

やっぱり高級ホテルなだけあって、窓から見える景色もまた格別だな。

それにしても…、

「……もぅ、夕方、か」

皆、どうしてるだろう。

勢いでマドカさん呼んで、そのまま無抵抗に掠われてここまで来て閉まったワケなんだが…。

まぁ、「俺が倒れたのを聞いて」ってマドカさんが言ってたし、別にあの時俺がマドカさんを呼ばなかったとしても、マドカさんは…

…というか亡国機業（ファントムタスク）は俺を誘拐しようと動いただろうから、まぁタイミングの問題だったんだろうけど…。

それに、どっちの《白式》も待機状態のままでうんともすんとも言わないし。

今までこんな事無かったのに…。

右腕の手首に巻き付いたガントレットを眺めるが、やっぱり反応は無かった。

……白式さん、マジで来週まで動かない気じゃないだろうな？

「お～い、一夏、入るぞ」

そう言って、急にオータムさんが部屋に入って来た。

……ノックぐらいしろよ、って、俺一応誘拐されてる立場なんだから、こうやって抜き打ちで入って来るのも当たり前か。

「ほれ」

「っと……酒？　あの、オータムさん？」

「こまけぇ事はいいんだよ」

「いや、細かいって…」
「犯罪組織が一々そんな法律守ると思うか？」
ですよね～。
まぁ、状況的に飲まないワケにもいかんだろうからと、缶ビールのプルを開けて口を着けようとして……、少し躊躇う。
毒とか自白剤とか入ってないよな？　コレ。
「？　……あぁ、そういう事か。安心しろ、毒なんか入って無ぇよ。つ～かお前、どうせ毒なんか入っててもすぐに《白式・影……じゃなかった、《白騎士》が治しちまうんだろ？」
「まぁ、そうですけど」
……どうやら、オータムさん…というか、マドカさんもスコールさんも、今《白式・影打》が動かない事を知らないらしい。
「薬だって安くねぇんだ、無駄になるのを承知で入れたりなんかしねぇって」
…一応、これで薬を盛られる心配は無くなったってワケか。
「んじゃ、乾杯って事で」

そう言って、オータムさんが自分の缶を俺に傾けた。

「何に乾杯するんです？」

「何ってそりゃ……やっとお前を捕まえれた事に、だ」

「ははっ、なるほど…」

だったらこっちは乾杯じゃなくて完敗だよ！

……なんてツッコミは流石に不粋かな、と思ったので、言わずに苦笑だけ漏らして、俺も自分の缶を傾ける。

カンッ　と小気味良い音が部屋に響いて、二人同時に酒を煽った。

……あ、一応断っておくけど、お酒は二十歳まで……じゃなかった、お酒は二十歳になってからだからな！

良い子はマネすんなよ？

悪い子もな。

…その、俺の場合は仕方なくだからな？

久しぶりのビールはなかなか美味かったとか思って無いからな？

「っぷはぁ～、あ～、そういやお前との付き合いももう五年目になるのか」

「そういえば…、もうそんなに経ったんですね」

俺とオータムさんの出会いは五年程前にまで遡る。

まぁ出会いだ付き合いだと言っても、あっちは誘拐犯でこっちは誘拐される側という間柄だったんだが。

束さんがＩＳを発表したのがだいたい十年前で、その当日の俺は確か五歳か…六歳になったぐらいだったか、その時から「篠ノ之束に近しい人間の一人」として、束さんの技術を得る為に俺や箒を利用

しようと、頻繁に誘拐犯に出くわす様になっていた。
箒の方は束さんが完全に秘密裏にその手の輩を事前に始末していたらしいので、多分今も箒は自分も誘拐犯に狙われていた事に気付いていない……いや、”自分だけ”狙われなかったら逆に気付くか？まぁ、箒が気付いていたかいなかったかは別として、俺もまだその当時は腕に覚えがあったし、千冬姉に助けられずとも自力でなんとか出来てたんだが……箒が転校して、それから張り合いを無くしたせいかめっきり剣を握らなくなって、普通の子供をやっていたせいか、自分でも解るぐらいの勢いでみるみる内に衰えていき、一年もしない内に運動神経がいい子供程度にまでなってしまっていた。

それに、あの当時は俺がまだ小さかった事もあって、千冬姉も比較的長い時間家にいたのでたいていは千冬姉が誘拐犯を撃退してたし、必要に迫られる事も殆ど無かった為に俺も自身の衰えを享受して……で、だんだん俺が大きくなった辺りで千冬姉も仕事で家を空ける事が多くなって、そうなると誘拐犯側から見れば厄介な存在がいないおかげで誘拐のチャンスが増えて……と、そんな事情で増えた誘拐犯の一人がオータムさんだった。

他の誘拐犯はまぁ…、仕事をほっぽりだしてでも俺を助けに現れた千冬姉に軒並み薙ぎ倒されて、それから同じ顔を見る事は二度と無かったんだが…うん、そりゃ壁に減り込んだりお星さまにされたりしてたら身が持たんわな。
そんな中でオータムさんだけは何度も懲りずにやって来ては千冬姉にぶっ飛ばされてを繰り返してたので、すぐに顔を覚えてしまった。

あと、スコールさんも毎回千冬姉にぶっ飛ばされたりボコボコにされたりしたオータムさんを回収しに来てたんで、その当時からは顔や名前は知ってたんだっけ…。

…うん、関係的にアレだけど、自分が小さい頃からの馴染みの顔って意味だとオータムさんもスコールさんも幼なじみになるのかもしれん。

「……で？　学園の方はどうなんだ、お前。あれだけたくさん女がいるんだ、いい加減彼女の一人や二人出来てる頃だろ？」
「いや、一人や二人って…。俺にはいませんよ、彼女なんて」
「なんだ居ねぇのかよ、つまんねぇなぁ～……てっきりイギリスに中国にフランスにドイツにって代表候補生のガキ共や篠ノ之博士の妹やら侍らせてやがるから全員お前の女だと思ってたんだがなぁ…」
からかう様に言って、オータムさんがまた酒を煽った。
……彼女、ねぇ。

「そりゃあ、みんないい娘ですけど…」
「じゃあなんで誰ともつきあわねぇんだよ、お前。……アレか？『俺のせいで危険に巻き込むと悪いから』っていうヤツ？」

微妙に鋭いな、オータムさん。
確かに、危険に巻き込みたくないってのはある。
でも、オータムさんの言う様な”人間的”な理由じゃない。

俺の場合、相手が正真正銘の化け物だからだ。

人間相手だったなら、地球という”狭い”範囲だけで済むし、《白式・両儀》の推力をもってすればそれこそ何処にだって一瞬で駆け付けてみせるさ。

でも、ヤツらは宇宙からやって来る。

ヤツらが地球から湧いてくるのならともかく、宇宙から来る以上、少なくとも太陽系の範囲内に拠点を作られるのはまずい。

一応、束さんがその辺りは監視しているから今はともかく、ヤツらとの戦いが激化すればそれこそ地球を離れなければならない。

以前、生徒会長に「二兎追う者は二兎とも捕れ」と言われたけど、そんな大事を控えてるっていうのに彼女なんか……。

「まぁ…、危険っちゃ危険ですかね。オータムさん達はともかく、俺、他の組織のヤツに心臓撃ち抜かれた事ありましたし」

「あぁ、そーいやそうだったな。でもアレだろ？　確かそん時に《白式・影打》が《白騎士》になって助かったんだろ、お前」

「まぁ、そうですが。直後に気を失ったんで実際には見てないんですが、監視カメラの映像見て驚きましたよ、俺も。なんか《白式・真打》の方は勝手に動いて襲撃犯フルボッコにしてましたし、《白式・影打》の方は《白式・影打》でこっちも勝手に起動してしかも《白騎士》になっちゃってますし…」

いや、アレは俺も驚いたわ。

《白式・真打》の方はいつも使ってる分身って自律行動してるからまぁ、多分その一貫だろうと思ったんだけど、《白式・影打》が実は《白騎士》を偽装した機体だったなんて聞いて無かったし。

「ん？　お前も知らなかったのか？」

「えぇ、まぁ。両方とも説明書なんか着いてませんでしたし、何か

あったらその都度機体の方から『こんな事できますよ』って情報を開示してくるだけでしたしね」
「お前、よくそんなワケの解らない機体使う気になったな…」
「ははは…」

そう言って、オータムさんがまた酒を煽るので、俺も自分の分に口をつける。
まぁ確かに、オータムさんの言う通り、普通はそんな得体の知れない機体なんか使わないよな。
一応、《白式・真打》の方は束さんと稼動テストやってたからともかく、なんで《白式・影打》の方まで使う気になったんだろ？
元々学園側が用意したハズだった機体だから？
それとも《白式・真打》が《白式・影打》の事を束さんが作った機体だと言ったから？
他は……まぁ、いっか。
そんな昔の事は。
結局どっちも束さんの作品だったんだし。
…あ、そういやすり替えたって言ってたけど、じゃあ元々メーカー側が用意した《白式》ってどうなったんだろ。
まぁ、今度束さんに聞いてみるか。

……っと、アレ？　頭がぼ～っとして…。

「ん？　なんだ、もう酔ったのか？　結構グビグビいってたからてっきりイケる口かと思ったんだが…」

「ははは…、まぁ、千冬姉が留守なのをいいことに冷蔵庫の中のビ

ールとかちょっと拝借してましたし…」

千冬姉、滅多に帰って来なかったから冷蔵庫の中身なんて覚えて無かったからな～。

「なんだ、お前も結構悪ガキだったんだな」

「ははは♪　オータムさんこそ」

「違いねぇ……っと、お前もう寝とけ。それ以上飲んだら明日が辛いぞ」

「へ～い」

オータムさんに言われて、ベットに潜った。

……ここまではなんとか覚えてるんだが、後の事はさっぱり覚えていない。

やっぱり飲み過ぎたかな…。

「どう？　オータム」

「あぁ、今眠ったところだ」

一夏がベットに潜った後、部屋を出たオータムにスコールが声を掛けた。

どうやら部屋の外で待っていたらしい。

「…で？　あの子、何か喋った？」
「なんにも。強いて言えば自分の機体の事なんか録に知らずに今までやってきたって事ぐらいだ」
「あらあら…、毒物がダメならお酒の勢いでって思ったんだけど、ダメだったみたいね」
「あぁ、もっとこう、いろいろと喋ると思ってたんだが……まさか知らないとはなぁ…」

そう、通常の毒物や自白剤が効かないのならと用意した変化球。
それこそが酒だった。
ただの酒なのだから、《白騎士》も反応しないだろうと踏んでいたのだが、確かに彼女らの思惑通り《白騎士》は反応こそしなかったものの、肝心の一夏の方がたいした情報を持っていなかったというのは全くの想定外だった。

「…まぁ、いいわ。ただの初心者が、それもよく知らないまま使って各国の代表候補生を下せるほどの機体だって解っただけでも収穫だったと思う事にしましょう」
「そうだな……ところでアイツは？」
「M？　Mなら明日に備えて張り切ってるわよ」
「…大丈夫なのか、ソレ」

「さぁね。まぁ、後は本人同士の頑張り次第じゃないかしら？」

そう言って、スコールは妖艶に微笑んだ。

第７４話「お酒は二十歳になってから」（後書き）

ま、普通に考えてただ仲良く酒を飲むだけじゃ済みませんよね

感想２００件突破記念番外編「ヒロインズ……の、ＩＳ達」（前書き）

２００件突破というか、ちょうど２００件だったんですが、まぁ、
細かい事は気にしないという方向で

感想２００件突破記念番外編「ヒロインズ……の、ＩＳ達」

此処はコアネットワークの、更にプライベートチャンネルという限られた者しか参加できないチャンネル内。

「あ～あ、何やってんのよウチの鈴……つ～か、アタシらのマスターは」

ガシガシと頭を掻きながら呆れた様に呟いた美女。
彼女こそが《甲龍》の自我であり、かつて一夏が《シュヴァルツェア・レーゲン》の事を”レーゲンちゃん”と呼んだ事に因んで仲間内では”龍（ロン）さん”と呼ばれていた。
その外見は自身の搭乗者の髪型をストレートに変えて体つきを大人にした様な風貌であり、趣向が搭乗者に似たのか、Ｔシャツにジーパンという動きやすい恰好をしている。

「全くですわ。嫉妬ももっと可愛らしくしなければ、殿方は逃げる一方だと言うのに」

龍に同意した女もまた、美女といっても差し支えない風貌をしている。
《ブルー・ティアーズ》の自我たる彼女、ティアーズもまた、龍と同じく自身の搭乗者を大人にした様な外見をしているが、垂れ目気味な自身の搭乗者と違い、彼女の目は少し釣り目気味である。
まぁ、どの道美女である事には変わりは無いのだが。
そんな彼女の恰好もまた、搭乗者の趣向通りというべきか、蒼いドレスを身に纏っている。

「まぁ、気持ちも解らなくは無いんだけど……う～ん、やっぱりやり過ぎだよねぇ」

苦笑と共にどこか困った様な笑顔を浮かべたのは《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》の自我こと、ラファールであり、彼女もまた他のＩＳ同様、自身の搭乗者を大人にした様な風貌をしており、薄めのオレンジのワンピースに身を包んでいた。

「ねぇねぇ、一夏お兄ちゃん、何処に行っちゃったの?」

パタパタと手を振って言う銀髪の（中身は幼女な）美女は《シュヴァルツェア・レーゲン》の自我であり、仲間内ではかつて一夏に呼ばれた”レーゲンちゃん”の名で通っていた。
その風貌はやはり自身の搭乗者を大人にした様な……それでいてあの搭乗者からは想像できない程のスタイルの良さを誇っており、揺れるバストは事実今集まっているメンバー内では1番だった。
そんな巨乳を窮屈そうに押し込まれた軍服は搭乗者の所属する部隊の者と同じである。

「誰と、ならまぁ考えるまでも無いが、流石にステルスモードを使用されているのでは場所まで解らぬな」

そう言ってレーゲンの質問に応えた《紅椿》の自我は《白式》同様そのまま”紅椿さん”と仲間内で呼ばれている。
彼女もまた例に漏れず自身の搭乗者を大人にした様な風貌をしているが、目つきが束に似て垂れ目気味であった。
そんな彼女が身を包むのは黒地に紅で椿の花柄の着物である。

「あら、貴女でも解りませんの？」
「あぁ。宛てがわれた身体（機体）そ第四世代だが、姉君（白式）違って私のアクセス権限はそなたらと同じなのでな、流石にステルスモードの機体位置までは解らぬ」
「そりゃ残念」

一世代先を行く機体の《紅椿》を宛がわれた紅椿なら、とティアーズが尋ねるも、結果は空振りであり、その答えに龍が余り残念そうでは無さそうに相槌を打った。

「まぁ、どうせ白騎士の……じゃなかった、白式の姐さんの事だし、何か考えがあっての行動なんでしょうね」
「だよね。お姉さんの独断かお母さんの指示なのか解らないけど」
「はぁ…、私にもせめて定時連絡以外でお母様に通信が出来る権限があれば良かったのですけど」
「仕方なかろう。母上も多忙な身なのだ、我々が勝手気ままに通信などすれば迷惑にしかならん」
「それは解っていますけど…」

愚痴を漏らすティアーズを紅椿が諫めるも、それならと、ティアーズが続けた。

「それならそうと、私もお姉様の様に搭乗者と自由に会話する権限が欲しいですわ」
「まぁ、それは…そうでるな」
「だよねぇ…」
「私もラウラとお話したい！」
「そりゃ私だって鈴とお喋り出来たらいいなぁ～とは思うんだけど、こればっかりはね～」

実際、彼女らが自身の搭乗者と会話する事自体は不可能では無い。
だが、それを可能にするにはある条件があった。

搭乗者との同調率を一定以上の数値まで高める。

条件はたったこれだけだったが、この条件がなかなかに難しく、今のところこれに成功した搭乗者とコアはいない。
因みに、一夏と白式の場合は目的の為に条件が取り払われているのでノーカウントであり、また、ここでいう同調率とは一夏と『彼』とのものとは別ものである。

「それにしてもまぁ、な～んでワザと捕まったんだろ、姐さんは」
「『あの男』絡みなのやもしれんが…、だとすれば尚の事我々には知り様の無い事だ」
「特秘事項、だもんねぇ～」
「最初は私達の様に《白式・真打》に宿った自我かと思いましたが…それも違うみたいですし…」

むぅ、とレーゲン以外の皆が唸る。
戦闘以外特にやる事も無い為に、こうして頻繁に集まっては意見交換をしているのだが、扱っている議題が議題なだけに、録に答の出た議題など一つも無かったが、元来が暇潰しである為彼女らそんな事は気にしていなかった。
因みにレーゲンはレーゲンで、集まっているものの大して会話には参加していない。
というかまだ幼児並の知能しか無い彼女には毎回の議題が難し過ぎるので会話に参加出来ないでいた。
といっても、それで拗ねるワケでも無く、夢中になってクレヨンでお絵かきに興じたりと、好きな様に過ごしている。

「全く…何者なのよ、『アイツ』は」
「なんだかお母さんとも親しげだったけど…」
「ですわね。…ソレに『あの方』、《白式・真打》と《黒式》の間を行き来しているみたいですが、そんな事お姉様にだって出来ませんのに」
「あぁ、それだけでは無い。我々と違って量産機用に眠ったままにされているとはいえ、姉妹の身体（コア）を乗っとるなどと…」
「そ～いえば」
「ん？　どうした？」

珍しく会話に参加してきたレーゲンに皆が耳を傾けた。

「一夏お兄ちゃんの機体、白式お姉ちゃんもそうだけど《白式・真打》も《黒式》も変な機体だよね～」
「変、とは？」
「白式お姉ちゃんのは姿がコロコロ変わっちゃうし、《白式・真打》や《黒式》なんか空っぽだったもん」
「そ～いえば姐さんの機体、アンタの《紅椿》の展開装甲どころじゃない変わりっぷりよねぇ」
「確かに……」
「なんなんだろうね、アレ。第二世代の僕……どころか、第四世代の紅椿さんでもあんなの無理だよ」
「まさか、第五世代？」
「それこそまさかだ。私の第四世代機が完成する前に既に第五世代が完成していたなどと…」
「でも、《白式・真打》だって第六世代なんでしょ？」

「いや、第六世代はＩＳの技術を使用こそしていても別物の分類だったハズだ」
「あ、そっか」
「ところで、空っぽというのはどういう意味だ？」
これについては直接本人に聞くしか無いかと、一旦話題を切った紅椿が再びレーゲンに尋ねた。
「ん～とね、一夏お兄ちゃんが死にそうになった時なんだけど…」
と、何かを思い出そうと首を捻りながら続ける。
「…『大きい方の一夏お兄ちゃん』が私を《白式・真打》の中に入れた時にね、誰も居なかったの」
「誰も居なかった？」
「うん」
「眠っていた、ではなくて？」
「うん、ホントに誰も居なかったんだよ」
「…と、いう事は《白式・真打》のコアには自我が全く無いと？」
「でも、そんな事って…」
元来、ＩＳのコアにある自我は搭乗者に対してより高度なサポートを行えるようにと備えられたものであり、仮に自我を休眠状態にしていても、量産機を稼動させる分には問題無い程の処理能力を有している。
では、何故休眠状態でも問題無く使用出来るのにも関わらず、束はコアに自我を持たせたのか。

稼動時間の長さや稼動中に蓄積した経験、そしてその時の搭乗者の思考やバイタルデータを記録し、それらを元に搭乗者のコピーとも言える自我をコアに持たせる。
自我、つまり搭乗者のコピーをコアに生成する事によって機械的過ぎる要求を搭乗者にせず、あくまで搭乗者が可能で尚且つストレスを与えない自然な動作を搭乗者に促す。
又は、この時搭乗者はこうするだろうというパターンを記憶し、その動作パターンをよりスムーズに行える様に、それでいてそのパターンによって搭乗者に生じる隙を埋める為に、自我はコアに与えられたのだ。

少なくとも、彼女らはそう認識していた。

だからこその違和感。
初心者である織斑一夏に宛がわれた機体に、通常の機体にすらあるハズのサポート体制が成されていないという現実。

「…始めから、『あの方』の器として用意されていたからでしょうか？」
「でも、だったら最初からそういう自我を持ったコアを作ればいいのに…」
「…確かに、そうですわね」

彼女らがそう思うのも無理は無かった。
そもそも彼女らは《白式・両儀》の存在を知らない。
かつて《白騎士》という機体に納められていた長女が機体の変更に

伴って自らの名前を白騎士から白式に改名したものだと思っていたのだ。

だが、実際長女が乗り換えた機体は《白式・影打》では無く《白式・両儀》であり、その後、搭乗者となった一夏に合わせて自らを《白式・真打》と《白式・影打》の二つに分け、その自我を《白式・影打》の方に納められた自らの片割れに集中させていただけであり、《白式・真打》に納められた方のコアも自分自身なのだから、必要に応じて乗り換えればいい状態にしていただけの事。

何故、普段《白式・影打》の方に自我を寄せていたのかといえば、搭乗者の保護の為に他ならない。

これについても彼女らの知り得ぬ事であったが、《白式・影打》は第三世代機ではなく第五世代機である。

第五世代機の”機体全体をナノマシンによって構成する事により、戦況に応じて自由に姿を変える事が出来る”という特性を利用して自身をいつでも《白騎士》に戻れる様にし、《生体復元》を以って搭乗者を保護する為にこの様な形をとったのだ。

何故、《白式・真打》の方でそれをやらなかったのかといえば単純に容量の問題であり、《質量操作》の特性上、無限に武装を増やす事は可能であったが、半分だけのコアでは《白式・両儀》の《フォームチェンジ》の様な、姿そのものを変えるまで回す容量が無かったのだ。

それ故に、《雪片弐型》と《雪羅》しか武装を持たない《白式・影打》という半身に彼女は宿る事にしたのだ。

それが甲を奏したというべきか、結果的にレーゲンがそう表現した様に空っぽになった《白式・真打》に『彼』が間借りする事になり、結局　一夏は通常通り、二機のサポートを受けられる様になったのだが。

「……やっぱり、私達だけじゃ解んないわ。つ～か情報無さ過ぎ」
「だな」
「ですわね……と、そういえばレーゲンちゃん、『あの方』を『大きい一夏お兄ちゃん』と呼んだのは何故ですの？」
「ん～、なんかそんな感じがしたから」
「…ふぅ、そうですか」
「まぁ、幼子に答えを期待してもな」
「それは解ってはいますが、気になるじゃありませんの」
「ははっ、確かに…」

要領を得ないレーゲンの答えに苦笑を漏らしつつ、また彼女らは答えの出ない議論に耽る。
どうせ、搭乗者達が動き出して自分達の出番になるまで、彼女らに出来る事と言えばそれしか無いのだから。

感想２００件突破記念番外編「ヒロインズ……の、ＩＳ達」（後書き）

ホントは別の……そう、のほほんさんとかにもスポットを当てるつもりだったんですが、思いの外長くなったので、のほほんさんについては本編で登場してもらうことにしました。

第７５話「その頃他の皆は」（前書き）

諸事情によって投稿が遅れて申し訳ありませんでした

第７５話「その頃他の皆は」

「せんせ～、どうして織斑君達昨日から居ないんですか～？」
「え！？　え～とですねぇ…その、最近襲撃事件が多いですから、それに備えて緊急強化合宿を…」

穴だらけの一年一組。
それもそのハズ、六人分もの座席が開いていれば……というか、その六人が有名過ぎて居ない方がかえって目立つ。
強化合宿というのは真っ赤な嘘だが、箝口令が敷かれている以上、真耶も「織斑君が掠われちゃったので皆で（殆ど勝手に……というか、学園長を脅迫して許可を無理矢理もぎ取って）織斑君を救出しに出掛けました～」なんて言えない。
幸い、彼女が（副担任として）受け持つクラスの生徒の殆どはそれを信じてくれたようだが、ただ一人それを信じていない人間がいた。

”のほほんさん”こと、布仏本音である。

信じていない、と言っても特別彼女が洞察力に優れていたりうたぐり深い性格だったりしたワケでも無く、ただ単に彼女の背後関係のせいである。
対外的にはユルくてスローモーな少女であるが彼女も裏世界では有名な更識に代々仕えた布仏の人間、故に”そういった”情報に関しては教師である真耶よりも詳しかった。

（うぅ、あの五人に囲まれて……ううん、そうじゃなくてもおりむーだってすっごいＩＳ持ってるのに捕まっちゃうなんて、全然思って無かったよぅ……）

そう思いながら摩った頭には大きなタンコブが出来ている。
姉の鉄拳というか鉄槌が下された結果残されたものであり、姉曰く「貴方がちゃんとついていなかったから…」だそうだが、専用機持ち五人が護衛に着いていて、尚且つ護衛される本人も自衛手段（専用機）を持った状態で見事任務を達成したテロリスト相手にどうしろと？　というのが彼女の正直な感想である。

というか、「貴方がちゃんとついていなかったから…」と言われても、あのパワフルな専用機持ち組の中に割って入るなんて彼女には無理な話である。
専用機持ちであるハズの簪ですら割って入れずに遠くから見ているだけしか出来なくて、いつの間にやらストーカー…もとい、追跡スキルが無駄に向上するという悲しい現実があるというのに、専用機も無ければ当人自身の押しの強さも無い本音にはどうしようもない。

（うぅ、でもまた何かあったらお姉ちゃんに殴られそうだしぃ…）

そんなにポンポン殴らなくったって…というか、文句があるなら変わってよ…、というのが彼女の本音である。
本音だけに。

ＩＳ抜きの対人戦なら彼女にも多少の覚えはあるが、流石にＩＳ相手では無理だ。
ＩＳを展開する前に…と思うかもしれないが、そんな事をしたところで無駄である。
例えば物影からスナイパーライフルで狙撃したとして、狙われた本人が気付かずともＩＳの方が危険を察知して弾が当たるより前にシールドバリヤーを展開してしまうからである。

ＩＳ用のスナイパーライフルで狙えば話は別だが、”ＩＳ用”と頭に着く武器は高威力と引き換えに生身の人間では到底扱えない様な……それでも生身で扱う化け物がちらほらいるが…な武器であって、まだ人の領域にいる本音には使えない。
日本が《零落白夜》を擬似的に再現する事に成功したので、研究の果てに生身の人間でもＩＳを打倒出来る兵器が開発されれば本音でもＩＳを倒せる様になるだろうが、生身でＩＳを打倒できるだなんて現在の女尊男卑の社会が崩れる様な代物が作られる可能性は無きに等しい。

つまり、専用機でも宛がわれなければ本音にはどうしようも無い事だった。
というか、主人（簪）を差し置いて自分が主人の想い人に近付くなんて自体にでもなったらいろいろとマズい気がしてならない。

（う～、どうしよ～）

？自分にも専用機を用意してもらう

確かに今年の一年生は七人という異常な数の専用機持ちがいるが、代表候補生でもなければまず専用機など手に入らないし、代表候補生ではない一夏や箒に関しても束から直接渡されたから持っているのであって、こちらのケースなどこの二人と千冬以外まず有り得ない。

？簪とクラス変え

これで主人（簪）も一夏の傍に……なんて上手くいくのならクラス

違いなど関係なくグループ内に入っているだろう。
というか、進級でもしない限りクラス変えなんて無理だ。

（うぅ～、おりむーが帰って来てもまたこんな事があったらお姉ちゃんに叱られるぅ～）

珍しく……というと失礼だが、本音はかなり悩んだ。
そもそも、彼女が一夏と同じクラスになったのは簪が……各国からの圧力で日本の代表候補生が一夏と同じクラスになれなかったからである。
何処の国にも属し無いだとか、そんな建前はなんのそのとお国の力でイギリス・中国・フランス・ドイツが次々と彼の所属するクラスに自国の代表候補生を送り込んで来た中で、日本だけがそれを出来なかったのもＩＳ学園設立時同様、日本という国の押しが弱かったからに他ならない。
自分達は規則を無視して来たクセに各国が揃って「日本ばかりずるい」だなんて駄々を捏ねたばかりに本来なら一夏と同じクラスになるハズだった簪が四組だなんて離れたクラスに飛ばされる事になったのだ。
それでもなんとか国の息の掛かった者を……と、いう流れで本音に白羽の矢が向けられたのだが、いざ同じクラスになったらなったで入り込む余地が無い。
性質（タチ）の悪い事に、国の意思も多少はあったのだろうが各国の代表候補生達が本気で一夏に惚れ込んでしまい、これ以上ライバルが増えないようにと自分達だけで彼を独占する様になったせいで本音を含め一般生徒は彼と会話出来る機会など実習系の授業以外殆ど無い。
幸い、ロシア代表たる生徒会長の力……というか、ただのシスコン

の力で日本もグループに入れつつあるが、今回もまた置いてけ放りを喰らった辺り、まだまだ前途は多難の様だ。

（あ～あ、かんちゃんももっと押しが強ければ……あ～でも今回は急だったもんね～。……うん、急だったから私も悪く無い）

等と心の中で自己弁護をはかってみるが、実際に口にしたら確実にまた姉に殴られるだろう。

（…よし、おりむーが帰って来たらもっとかんちゃんをプッシュしないと……おぉ！　なんだか従者っぽい）

従者っぽい、では無くホントに従者のハズなのだが…彼女の仕事ぶりに関してはこの場で言及するのは控えるとしよう。

（ついでに他の皆も巻き込んで～……うんうん、戦いは数だよ、おりむー。立てよ国民（モブキャラ）！…なんちゃって♪）

一騎当千とも……いや、それは彼女らの頑張り次第ではあるが。

（そ～いえば、なんでアメリカだけ代表候補生送って来なかったんだろ？　別に専用機無くったって来れるのに…）

確かに、本音の思った通り、別に専用機持ちじゃなくても代表候補生だけを送り込む事だって出来る。

現に日本だって二年三年と専用機を持たない代表候補生がいるし、持っていても量産機である《打鉄》を専用にカスタマイズしたぐらいの代物だ。

簪の《打鉄弐式》も本来はその流れを組む機体になるハズだったのだが、代表候補生を同じクラスに放り込めなかった代わりになんと

かもぎ取った”織斑一夏の専用機を作る権利”のせいで開発は遅々として遅れ、結局簪自身が独自に開発した別物になったのだが。
更に酷い話、その”織斑一夏の専用機を作る権利”のもとで作った《白式》もいつの間にやら篠ノ之束製の《白式・影打》にすり替えられていたりと、本人はクラスの件で、機体はクラスの件の引き換えに得た権利のせいで煽りを喰らいまくっていて踏んだり蹴ったりである。

さて、そんな事情も何も無いアメリカがどうして一夏と同じクラスどころか同学年に代表候補生を送り込んで来なかったのか。

単に一夏と同年代の代表候補生がいなかったから？

そんなことは無い、他国と同様……寧ろ、他国よりも一夏と同年代の代表候補生の数は多い。

専用機の開発が遅れたから？

確かに現在開発中の新型は存在するが、それとこれとは別問題である。
というか、仮に開発が遅れている専用機があったとしても、先に代表候補生だけを送り込む事になんの支障も無かったハズである。

（む～、わかんないや）

授業も話半分で聞きながら彼女なりに考えたが、それらしい答えが思い浮かばなかったので、考えるのをやめた。
…決して、考えるのが面倒臭くなったからではない。
決して。

真耶の目には、”専用機持ち組は強化合宿で居ない”という嘘を彼女が受け持つ生徒は信じてくれた様に見えるが、いつも目立っている人物が全員居ないとなるとそれはそれで目立つのか、残った一般生徒も全員ソワソワして落ち着きが無い。

（うぅ、これじゃあ授業になりませんよぅ…。皆さん早く帰って下さぁ～い！）

そんな真耶の心の叫びは、口に出さなかったのだから当然真耶の心にしか響かなかった。

第７５話「その頃他の皆は」（後書き）

とりあえず、一夏が帰ったらもっと他のキャラとも絡ませないと…

第７６話「もう一人の姉と、」（前書き）

日曜に出来なかった２話分の投稿の一つ目です

第７６話「もう一人の姉と、」

織斑一夏は窮地に立たされていた。
目の前に飢えた肉食獣（マドカ）が一匹（一人）、自分と二人っきりで訓練場という名の檻に綴じ込められている。

「ふ……ふふ……ふふふ、勝ったら一夏と○○○して、■■■を……じゅるり」
「……（に…、逃げ出したい。切実に）」

事の始まりは今朝の事だった。
ふと目を覚ますと朝日が昇っており、時計に目をやればもう１０：００を過ぎていて……とりあえずまだ酒の抜け切らないままの頭でフラフラと冷蔵庫の中の飲み物を適当に漁って……結局酒しか無かったのでまた昨日に引き続き酒を飲んだ。
二日酔い、という程でもないにしろ、果たしてそんな状態で酒を飲んでも大丈夫なのだろうか？　と思いもしたが、冷蔵庫の中には酒しか無く、ルームサービスで何か注文するのも面倒臭い。
そしてなにより、一刻も早く喉の渇きを癒したかったのだ。

「っぷはぁ～……あ～、昨日どうしたんだっけか」

と、酔った頭で考えて……とりあえず昨晩はオータムと飲んでたという事だけ思い出して、そこまでで思考をやめた。
どうせ酔ってて覚えていないし、今も酔ってて考えるのが面倒になったからだ。

「しっかしまぁ……なんも無しにこんなにぐっすり寝れたのってどの位ぶりだ？」

少なくとも、学園の寮ではそんな日は無かった様な気がした。
いくら疲れた果てようが鍛練で早起きしなければならなかったというのもあって、睡眠時間は一定以上取れなかったし、授業が終わればすぐさま補習が始まって、それが終わればいつものメンバーとアリーナの使用可能時間ギリギリまで実機訓練に明け暮れて、その後は好きでやってる事とはいえ、そのいつものメンバーと消灯時間ギリギリまで話し込んでいたら当然個人の時間など無くなる。
ＩＳ学園はＩＳに関する専門の教育機関とはいえ、それ以外を全くやらないかといえばそんな事は無く、普通科目からは勿論、ＩＳに関する授業からだって宿題というものが出た。
上記の様な生活をほぼ毎日送っている以上、宿題をやる時間など消灯時間を過ぎた後ぐらいしか取れるハズも無く、当然の様に睡眠時間はＨＥＬＬ…もとい、減る。

事実、学園に入学してからの一夏の平均睡眠時間は三時間半で、多くとも四時間、少ない日に関しては一時間も無い場合があった。
そんな生活を送っていればフラフラになるのは当然で、しかし本人が意地になってなんでもない風を装って、運が良かったのか悪かったのか、彼の周りはそれに気付かなくて…。
いつの間にか彼が学園に入学してから一番上達したものが、ＩＳの操縦でもなんでもなく、こういった身体を張った嘘……平たく言えば痩せ我慢だったというのは笑えない。

「あ〜ぁ〜、ほんっとうによく寝た……よし、寝よう」

だから、二度寝三度寝と寝たがるのも無理のない話であり、

「お〜い、一夏。いい加減起きろよ〜」

「……」

捕まっている立場である以上、相手の都合でそれが阻止されるのも当然の事だった。

「…で、こんな朝早くからどうしたんですか？　オータムさん」

「朝早くってお前、もう…１０：２０だぞ」

まだ眠たげな一夏に、時計を見ながらオータムが答えた。

「…まぁ、いい。そのまま聞け。１４：００からＭのヤツと模擬戦だから、そのつもりで動けよ」

「何故に、マドカさんと？」

「あぁ、お前は何も知らない。機体はセキュリティが強すぎて情報が引き出せない。そうである以上、結局実際に戦わせてみるぐらいしかお前の機体について知り様が無いんだとさ」

「あぁ〜」

確かに、と一夏は頷いた。

機体に関しては《白式・真打》は最初から触れる事すら拒むかの様に操縦者以外には電撃を……《エレクロファイヤー》を浴びせ、《白式・影打》については最初はデータは取れていたものの、二次移行（セカンド・シフト）前は学園側…というか日本が用意したつもりになっていた《白式

≫のデータばかり送り続けられ、二次移行（セカンド・シフト）後からはブラックボックス化したり更に偽造されたりしてロクなデータが取れない状態で…
…というか、二次移行（セカンド・シフト）自体、日本が用意した《白式》という機体に偽装していたのを溶いただけでホントは二次移行（セカンド・シフト）でもなんでもなく、更に最終的には《白騎士》へと可逆変身を可能とした時点でそのセキュリティレベルを《白式・真打》と同等に引き上げ、ついに何も得られなくなった。
こうなると件の二機のデータを閲覧出来るのは製作者である束か、操縦者である一夏しかいないのだが、束は絶賛行方不明中であり、一夏は一夏で薬物の投与等で情報を引き出させようにも、《白騎士》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）でそれらを全て無効にされてしまう為、実戦データ以外取り様が無かったのだ。

「でも、なんでマドカさん？　別にオータムさんでもいいんじゃ…」
「あぁ、ソレな。お前の《白式・真打》、《アラクネ》と戦った事はあっても《サイレント・ゼフィルス》は無いだろ？」
「あ～、そういやマドカさん出て来た時ってもうエネルギー切れでしたね」
「だろ？　つ～ワケだから、お前もさっさと起きて飯食っとけよ」
それだけ言って、オータムは部屋を出て行った。

「はぁ…ま、タダ飯食らいってのもアレだし……って、そういや昨日そのまま寝たから風呂入って無いな。先風呂入るか」
そう言いながらバスルームに向かって、歩き出す。
ガチャリ、とドアを開けたその先には、白いタイルの眩しい浴室があった。
寮ではシャワーばっかりだったので、せっかくだからと湯舟に浸かる事にする。

「はぁぁ……」

久しぶりに浸かった湯舟は、足を延ばしてもまだスペースが有り余るほど広かった。

風呂から上がり、じゃあ次は腹ごしらえとルームサービスのメニューに目を通す。

最初は軽く済ませるつもりだったのだが、昨晩から何も食べていなかったせいもあってか、気付けばステーキだなんだと色々と注文してしまった後だった。

値段の事を考えたら急に怖くなったが、そこは亡国機業（ファントムタスク）持ちだろうと思う事にする。

風呂に入る前はタダ飯がなんだと気にしていたクセに奢らせようとする辺り、かなり太い。

「うんうん、やっぱホテルの料理は違うわ」

一夏自身、姉が姉なので自分で料理はするのだが、流石にここまで手の込んだ料理はしないし、してもここまでの味にはならないだろう。

かなりの量を注文したがそれもペロリと平らげ、ふと時計に目を遣ると１２：３０を過ぎていた。

思いのほか長風呂を……したにはしたが、何度も湯舟で寝そうになったりしたので、実際に寝てしまっていた時間があったのかもしれない。

「それにしても、マドカさんと…か」

ふと、自身の姉を名乗った少女を思い浮かべる。
マドカと名乗ったその少女は、姉が自分と同年代だった頃と瓜二つで、確かに言われてみれば家族に見えるかもしれない。
幼い頃に離れ離れになったきりの両親の側にいた姉弟だったというのなら、彼女の言う通り彼女は一夏の姉なのかもしれないが、いくら幼かったからといって、流石に姉が一人だったか二人だったかを間違えるというのも考え辛い。

なら、やはりクローンなのだろうか、とも考えた。
別にクローンだからどうのこうのと言うつもりは無い。
強いて言えば、クローンなら多分千冬がブリュンヒルデに昇り詰めた後に作られた事になるだろうから、それなら自分より年下だから妹なのでは？　だとか……いや、クローンなら細胞的には千冬と同い年だからやっぱり姉なのか？　といった様なくだらない事ぐらいのものである。

「ま、どうでもいいや。マドカさんはマドカさんだし」

そして、約束の刻限になり迎えに来たオータムに車で連れられてたどり着いたのは学園外にあるアリーナの一つだった。
アリーナ、といっても学園外のものならＩＳ以外の用件では使用さ

れないワケでも無く、寧ろアイドルのコンサートやスポーツ等での使用の方が頻度が高い。
それなりに金を出せば誰でも貸し切れるので、恐らくは亡国機業（ファントムタスク）もそうしたのだろう。

「さて、一夏。お前のやる事はただ一つ、アイツ（M）と戦う事だけだ」

そう言ったオータムが指差した先、マドカが己の機体を纏って佇んでいた。

「制限は掛けなくていい。つ～か、掛けんな。ぶっ殺すぐらいの…は、お前には無理か。まぁいい、とりあえず全力でやれ」
「はぁ」

物騒な物言いだが、下手に逆らって拗れるのも面倒かと思い、ピットを出た。

「あ、そうそう。スコールがMのヤツに『一夏に勝てたら一晩中一夏を好きにしていい』って焚きつけてたから」
「え゛っ」

振り返って問い詰めようとした頃には、シールドを最大レベルで張られて閉じ込められていた。

そうして冒頭に戻るワケなのだが、先程から血走った目でガン見されている一夏としては、それだけで一時の女性恐怖症が振り返しそうな思いである。
自分が弟（？）を怖がらせているとは露知らず、マドカの頭の中は

”この後”のことで一杯だった。
それはもう、グリードがセルメダルで胃もたれを起こす（？）ぐらい濃密な欲望である。

「さぁさぁ、こんな茶番はさっさと終わらせて私と…」
「…まぁ、マドカさんが俺をどうしたいかはともかく、さっさと終わらせるという点に関しては同意ですね……変身」

息を荒げるマドカの言を軽く流しつつ、一夏は《白式・真打》を身に纏った。

（…あぁ、この時を待っていました）

一夏が変身するのと同時に、一夏と『彼』が入れ代わる。

「（まさか、とは思っていたが……やはり《サイレント・ゼフィルス》のデータを取る為だったんだな）」
『（あぁ、やっぱり『貴方』にはバレていましたか）』
「（”何年”お前を使って来たと思ってる）」
『（ですね）』

白式からの要請を受けて表出した『彼』は白式と軽く会話を交わしながら、コンディションを確かめ、ヘルメットの奥で顔をしかめた。

「（おいおい、朝っぱらから酒飲んでたのかよ、コイツ）」
『（中々いい飲みっぷりでしたよ？）』

「（『中々いい飲みっぷりでしたよ？）』じゃねぇよ…全く、お前も止めろよ）」

『（いえ、一応”今は動けないという設定”でしたので）』

「（お前なぁ…）」

随分いい加減な…、と呆れながらも『彼』はかつての従者との話を進める。

「（…で、どうすればいい？　まさかあの女（オータム）の言う様に殺す気でってワケじゃないんだろう？）」

『（えぇ、”一夏らしく”戦って、勝って下さい）』

「（そりゃまた難題だな。アイツのレベルに合わせての時点でアレなのに、酒飲んだ後なんだぞ？）」

『（…大丈夫ですよ）』

「（また何を根拠に？）」

『（『貴方』は、私の主だったんですから）』

「（……ハァ、…解った。やるだけやってみる）」

『（えぇ、では頑張って下さいね♪）』

「（全く…、そうだった。昔っから調子のいいヤツだったよな、お前。…まぁいい、とりあえずは目の前の…）」

『（えぇ）』

構えて、自称姉に向き合った。

その構えは、かつて簪の放ったミサイル群を捌き切った赤心少林拳の守りの型、梅花。

「さぁ、始めようか。”姉さん”？」

こうして、戦いの幕が切って落とされた。

第７６話「もう一人の姉と、」（後書き）

これ、朝に投稿したつもりだったのに、最後の確認ボタン押してなかったから昼過ぎになってしまいました…

第７７話「もう一人の自分と」（前書き）

日付は変わってしまいましたが、とりあえず予告通り、一日２話分更新が出来ました。

明日からは通常営業（？）に戻ります。

第77話「もう一人の自分と」

「行け！」
「！」

マドカの号令に従い、アリーナ内を所狭しと飛び交うビットの群れ。
その群れから放たれるビームが全方位から『彼』を襲う。
…が、

「それで？」

放たれたビームの光は、展開装甲を起動させた《白式・真打》が発する《零落白夜》の光によって掻き消されてしまった。
一号機である《ブルー・ティアーズ》もそうだが、同様のコンセプトで作られた《サイレント・ゼフィルス》もまた、ビーム兵器主体である以上、《白式・真打》との相性は頗る悪い。
《ブルー・ティアーズ》なら《スターライトｍｋ？》も《ブルー・ティアーズ》のビームを発射するタイプのビットが全く通用せず、後は六機ある内の残りの二機のミサイル型のビットか、近接ブレードの《インターセプター》しか無く、《サイレント・ゼフィルス》に関してはどうか？

「ちぃっ…」
「無駄だ！」

やはり、ビットから放たれたビームも、左右に構えた《スターブレイカー》から放たれたビームも、《白式・真打》を包む赤い光の前に掻き消されていった。

「今度はこっちからいくぞ」

呼び出し（コール）された《ボルティックシューター》が右腑部の装甲をスライドさせて現れ、瞬時にサブアームによって手渡される。手渡された瞬間、ロクに構えもせずにただ相手に軽く銃口を向けただけで、トリガーを引いた。

そんないい加減な動作であるにも関わらず、放たれたビームは吸い込まれるかの様に標的へと延び、しかし標的へは届かない。

「へぇ……なるほど、ビットはビットでも、シールドにもなるってワケか」

「……《エネルギー・アンブレラ》というらしい。…フフフ、《ブルー・ティアーズ》よりも実戦的に作られたこの《サイレント・ゼフィルス》の性能、とくと味わえ、一夏」

マドカが不適に笑い、《エネルギー・アンブレラ》が宙を舞う。縦横無尽に宙を舞う《エネルギー・アンブレラ》と、マドカ自身が《スターブレイカー》から放ったビームが一斉に『一夏』に襲い掛かるが、やはり通用しない。

（効かない……からといって喰らいっぱなしというワケにもいかんか）

いくらエネルギー兵器を無効化する事が出来るとはいえ、使えば使う程こちらのエネルギーが減少していくのは当然の事であり、いくら《白式・真打》が通常の機体よりもエネルギーが多いとはいえ、このまま攻撃を受け続ければエネルギーが底を着くのは避けようのない事態であった。

「ちっ……！？（かわせない、だと！？）」

それ故に、エネルギーの損耗を避ける為に回避行動に移ったのにも関わらず、かわせない。
いくら一夏に合わせているとはいえ、その身を操る『一夏』をしてかわせないというのはありえない事態であった。

そう、通常のビームなら。

「なっ…ビームが曲がった！？（……ってな感じで驚いた方がアイツっぽいか）」
「ハハハハ、逃げられると思うなよ！」

『彼』自身、ビームを曲げる技術がある事自体は知っていたし、《ブルー・ティアーズ》も《サイレント・ゼフィルス》も、完全稼動状態でならそれが出来る事も知っていた。
ただ、実際にそういう手合いと戦った事が無かったので、少し不覚を取っただけの事。
流石にここまで自在に操れるとは思ってはいなかったが、二度も不覚を取る事はない。

（…外れてもビームを曲げられるのなら、曲がるビームより早く動けばいい）
防御時のみ反応して展開していた装甲を常時展開させ、高速移動形態を取る。

前進の装甲が展開した瞬間、内側から発する光が一瞬だけ強まって、地面が爆ぜた。

「なっ！？　速っ……ぐはっ！！？」

地面を蹴った衝撃で土が舞い上がったのとほぼ同時に相手の至近距離まで潜り込んだ『彼』は鳩尾から貫くかの様な勢いでボディブローを喰らわせ、

「がっ……ぐぁっ！？」

吹き飛ぶマドカよりも速く飛んで追い付き、そのまま追い越す勢いで蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた事によって更に加速したマドカはアリーナのシールドに背中から激突して墜落し、地面に激突する寸前でなんとか持ち直す。

「ふ……ふふっ、やるじゃないか、一夏」

「まぁ…な」

入れ代わっている事に気付いてないマドカは、自身の弟だと思っている男の思わぬ強さに舌を巻いた。

ワケの解らない機体を使っているせいか、急に強くなったり相応の実力に戻ったりと、力量を計り辛いかったのも、勘違いに一役買っているのだろう。

「だがっ」

「！？」

マドカの咆哮に応えるかの様に《エネルギー・アンブレラ》の動き

が激しさを増し、歪曲するビームの軌道もより複雑さを増していく。

「くっ…（まさか、ここまでとは……流石に、かわし切るのは無理か？）」

やがてビームが毛糸玉の様に《白式・真打》を囲い、完全に包囲すると、一気に玉を収縮させて押し潰しに掛かった。

「ぐぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

「ハハッ、これで一夏と…」

勝利を核心したマドカの口元が喜色に歪み、しかしそれでいて攻撃の手を緩める事はしない。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁっ……」

急激に減少するシールドエネルギー、機体を揺さぶる振動、そして幾重にも編まれたビームが発する熱が『彼』と《白式・真打》を苦しめる。

「あぁぁぁぁぁっ……（なぁ、いつまでこうしていればいいんだ？）」

『（いつまで、とは？）』

「（別に《ブルー・ティアーズ》でも良かったのにワザワザ《サイレント・ゼフィルス》のデータを取る為にここに来たんじゃないのだろう？）」

『（なんだ、そこまで解ってたんですか）』

「（当たり前だ。…お前が欲しかったのは《サイレント・ゼフィル

ス》そのもののデータなんかじゃない。ＢＴ兵器搭載機の完全稼動状態時に発動するビームの歪曲、そのデータを取る為だけにワザと捕まったんだ）」

『（正解。……えぇ、別に《ブルー・ティアーズ》から抜き取ったデータだけで再現しても良かったのですが、実際にそれが使える機体があるのなら見ておきたいじゃないですか）』

「（なるほどな……で？　データの方は？）」

『（えぇ、もう十分です。後は煮るなり焼くなりご自由に）』

「（……あぁ、そうさせてもらう！）」

「！！？」

『彼』の発した呻き声が聞こえ無くなったので、気絶でもしたのかとマドカが思った途端、まるで羽化でもする様に、ビームの玉を突き破って巨大な腕が現れた。

玉を突き破った右腕から一拍遅れて右腕が突き破った穴から左腕が飛び出し、こじ開けるかの様に穴が広がる。

「なっ……馬鹿な！！？　ビームを破るなんて……！？　そうか、あの光…」

ビームの玉から突き出る両腕が《エネルギー・アンブレラ》が発したビームとは違う光を放っている。

「…《零落白夜》、か」

みるみる内に右足、左足と玉を突き破るかの様に巨大化し、最後に頭と胴体が巨大化する事によって、完全にその拘束から抜け出した。

ズゥゥンッ、と音を立てて着地した巨躯の重量を受けて飛び散る土が巨人の身長に届きそうなほど舞い上がった。
全身の装甲を展開させ、その展開した装甲と装甲の隙間から溢れ出す赤い光が白い巨人を染め上げる。

「図体がでかくなっ……がはっ！！？」

まるでテニスのスマッシュの様に、勢いよく振り下ろされた平手によって、クレーターを作りながら地面に減り込んだマドカはいつ自分が叩き落とされたのかを知覚出来なかった。
背中に走る激痛や、舞い上がる土砂を見なければ今もこうしている今も叩き落とされた事に気付か無かっただろう。

「ぐっ……このっ……！！？」

機体ごと減り込んだ身体を必死に起こそうともがいている最中に、急に空が暗くなる。
どうした事かと、空を見上げた頃には巨人の足が自身を踏み潰そうと迫っていた。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

脳を揺さぶる衝撃、一気に八割以上持って行かれたシールドエネルギー、シールドバリヤーを以ってしても防ぎ切れず、ボロボロになる機体。

飛び交う《エネルギー・アンブレラ》の砲撃は最後の抵抗にすらならず、ビームを意に介さず再び踏み込まれた足が、マドカにトドメ

を刺した。
シールドエネルギーが尽きるのと同時に、力尽きたかの様に次々と墜ちて行く《エネルギー・アンブレラ》。
試合終了の合図と共に元の大きさに戻った《白式・真打》のすぐ横には気絶したマドカが土に埋もれていた。

その顔に、一筋の涙を浮かべて。

第７７話「もう一人の自分と」（後書き）

とりあえず、一夏の貞操は守られたっぽいけど、はたして…

第７８話「相談事」（前書き）

模擬戦後、ホテルに戻るまでのお話

第７８話「相談事」

試合終了後、証拠隠滅……という名の後片付けを手伝わされた俺は、エネルギーの残量が残り少ない《白式・真打》に鞭打って再び変身し、《マシンスライダー》の後輪の後にトンボ（グランドを均すＴ字型の棒）をワザワザ唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）で作って装着し、３０分ぐらい掛けてアリーナ内をひたすら走り回った。

うぅ、格好悪ぅ…。

どこの世界にグランド整備でバイク乗り回すライダーがいるっていうんだよ、全く…。

で、今は行きと同じく帰りもオータムさんの運転する車に揺られてホテルに戻っている最中である。

「あ〝ぁ…疲れた」

「お前、そんなに激しい動きしてたか？」

「してましたよ…高速移動の時とか」

「アレは……すぐ終わったじゃねぇか」

おかげでロクなデータも取れやしねぇ…、とオータムさんがぼやく。

そうは言うがオータムさん、全力でやれと言ったのは貴女では……

…というのは子供の言い分か。

多分、あそこはデータが取れる程度に手を抜くのが大人の対応だったのかもしれん。

…まぁ、手を抜いたら負けるからどの道無理な話なんだけどさ。

「にしてもまぁ……なんなんだよお前の機体、急にでっかくなりやがって…。成長期かよ？」
「…あははは」
…成長期、ね。
まだ三次移行（サード・シフト）とかするんだったらあながち間違いじゃないかもしれんが……《白式・真打》は元来が《白式・両儀》のコアユニットになる機体であって、《白式・影打》と合体……じゃなかった、元々一つだったものを二つに分けたんだからどっちかっていうと復元か？……まぁ、その辺りはどうでもいいとして、《白式・影打》の二次（セカンド）移行（シフト）……に、見せ掛けた偽装解除も、《白騎士》への可逆変身も元々予定されてたらしいんだが、《白式・真打》の二次（セカンド）移行（シフト）は本来予定されて無かったものらしい。
束さんは予定には入れて無かったけど、八割型するだろうなと当たりを付けていたらしいので封印解除のフラグに入ってたが、別にこれに関してはしなくても良かったんだとか。
では、何故しなくてもいい二次（セカンド）移行（シフト）を《白式・真打》がやったのか、白式さんに聞いてみたところ、「ダメだコイツ、早くなんとかしないと…」ってヤツじゃないんですか？　とのありがたいコメントが。
……ほんっっとうにお手数お掛けしました。
弱くてすみません。

「んじゃ、まぁホテルに着いたら後は自由にしていいぜ」
「了解……っと、そういやマドカさんはどうなったんですか？」
「ん？　あぁ、Mのヤツならすぐに目ぇ覚ましてもうピンピンしてるってよ。……まぁ、機体の方は修理に時間が掛かるだろうが」
「すんません」
「気にすんな。全力でやれって言ったのはこっちなんだし、上の連中も納得してる」

…上の、ね。
確か亡国機業（ファントムタスク）って実行部隊と幹部とに別れてるんだっけ？
上の連中ってのは多分幹部の事なんだろう。
そうなるとオータムさん達は実行部隊になるのか。

それにしても、なんで亡国機業（ファントムタスク）が今更俺を誘拐なんかしようとしたのかが理解できない。
機体の方から直接データを引き出す事が出来ない事も、俺自身に危害を加えても無駄だって事も、解ってるハズなのに…。

アレか？　現場の声が上に届いて無いのか？
現場の実行部隊が無理無理って言ってんのに、幹部がまだいけると駄々を捏ねてるみたいな。

「…あの、なんでまた実戦データを？」
「ん？　それ今朝も聞かなかったか？」
「いや、実戦データしか取れないのも、《サイレント・ゼフィルス》と戦った事が無いのも聞きましたけど……結局意味無く無いですか？　仮に《白式・真打》を倒せる機体を作る為だったとしても、それより先に束さ……篠ノ之博士が何とかしちゃうと思うんですけど」
「…やっぱそう思うよなぁ、普通」
「？」
「あぁ、まぁ何と言うか…よくある話、上の連中の頭が硬くてな、今日のだって実際に見るまで『実戦データでもちゃんととればコピーぐらいできる』だなんて吐かしてたんだぜ」

スキャナーじゃあるまいし、そんな簡単にコピーなんか…。

「んで、やぁぁっと今回お前とMの試合生で見て解ったんだと」

「そりゃまた、なんとも…」

大変なんだねぇ、どこも。

「それより…」

「？」

「お前、何で脱走しようとしないんだ？　お前の機体だったらいつだって脱走……つ～か、今までみたいに捕まらずに逃げ切れたハズだろ」

「…いろいろと疲れてたんですよ。いろいろと、ね」

「……お前も大変だな」

溜息混じりに質問に応えた俺に、オータムさんが同情の視線を送ってきた。

言った自分が言うのもなんだが、あんな声で言われたら誰だってそんな目を向けてくるだろう。

…おかしい、そんなに疲れてるつもりは無かったのに、どうして…。

俺は、自分の口から自然と出た言葉が、信じられなかった。

そりゃまぁ、最近疲れてたけどさ、普段から

箒に日本刀で一刀両断されそうになったりとか、

鈴に《双天牙月》で真っ二つにされそうになったり《龍咆》でぶっ飛ばされたりとか、

セシリアに《ブルー・ティアーズ》で追い掛け回されたりとか、

シャルロットに《灰色の鱗殻（グレースケール）》でぶっ刺されそうになったりとか、ラウラにＡＩＣで完全に動きを封じられた上でボッコボコにされたりとか、

それらのフルコースだったりとか、もう日常茶飯事だし、何の問題も……あるわぁぁぁぁぁぁぁっ！！！

な　ん　で　毎度毎度俺殺されそうになってんの？

つ～か何で死ねないの？

…殺るんならもう一思いに殺ってくれよ、マジで。

手加減してるから大丈夫？

手加減がどうとか以前に暴力に走るそのクセどうにかしろよ！

全くもぅ、アイツらときたら……決めた、帰ったら一度ガツンと言ってやろう。

……あ、でもガツンとったってどうすりゃいいんだ？

一度全員纏めてと制限無しで模擬戦でもやって、数の暴力というものを自分達も味わってもらうか？

こう、みんな（五人）　対　俺（一人）×トリック（×４）×ジェミニ（×２）×イリュージョン（×３）×ガタギリバ（×５０）で。

……やめた、なんか同じ穴のムジナになったみたいでヤダわ、コレ。

他は…巨大化して……いや、暴力に訴えるのは止めよう。

人間には言葉というものがあるじゃないか。

…と、それはそうと、なんでアイツらあんなに武力行使に出るようになったんだ？

最初はもっと大人しく……も、なかったか。

……うん、最初っからなんかあんな感じだった様な気がしてきたけど、やっぱり日に日に沸点が低くなってきてるよな、絶対。

…何が原因なんだ？

人数が増えてやりやすくなったのか？

くっ…、ならこっちも戦力を……って、学園にいる男子って俺だけじゃん。

マズいな…アイツら、人数が増えたせいで気が大きくなってるとしたらどうしようも無いぞ。

解散……は、出来るワケ無いし、したく無いし…。

参ったな、ホントに。

「どうした？」

「へ？」

「『へ？』じゃねぇよ、さっきから眉間に皺寄せて何考え込んでるんだ？　お前は」

「あ～」

…どうしよう、話してもいいんだろうか。

「なるほど、そりゃ確かに大変だ」

結局、全部では無いにしろオータムさんに学園での現状を話す事にした。

どっちかっていうとこういう事を相談するならスコールさんの方が適任な気がしたのだが、オータムさんだって俺と違って大人だから、何かいいアイディアが浮かぶかもしれない。

「ま、お前の回りのガキ共からすりゃ、自分だけを見て欲しいのにお前がいい返事をしない。なのにライバルは増えていく一方、と。……まぁこんな感じだな」

「はぁ…」

その辺は何となく解るんだが…。

「…で、だ。肝心のやたら暴力に走る件についてなんだが……」

「どうしたんですか？」

「いや、連中、特に代表候補生ともなれば自分を認めさせる……自分を見て貰う手段ってのが、やっぱ腕っぷしになっちまうんだろうから、その癖が抜け切って無いっつうか……まぁ、悪い方向に働いてるのは確かだな」

「え～」

いや、うん、代表候補生の座を争うんだったらそれでもいいんだろうけどさ…。

もっとこう、ねぇ？

「じゃあ、箒は？」
「箒？　…あぁ、篠ノ之博士の妹か。アレは……回りの影響っつうか、元々そういう素質があったというべきか……両方？　そ～いや、ソイツがお前の初めての女だったっけか？」
「ちょっ、初めての女って……。幼なじみですよ、幼なじみ」
なんつう事を言うんだ、この人は。

「違うのか？」
「違います」
「まぁ、冗談はこれぐらいにしておいて……その箒ってヤツからしてみれば、自分が一番昔っからお前を想い続けてるんだから、自分こそがお前と…ってのが頭にあるんだろうよ。で、久しぶりに再開して見ればどんどんお前の回りに女が増えてきて気が気じゃない、と。で、運が良かったのか悪かったのかは知らんがソイツは今まで剣道一筋だったんだ、となれば自分を表現する手段も剣になるし、調度回りも武力行使に出るもんだから自分も張り切って……って、とこだろ。ま、本人らに自覚があるかどうかは知らんがな」
「……」

アイツ、そこまでコミュニケーション能力が欠如……いや、特殊なヤツだったっけか？
引越し前はただぶっきらぼうなだけかと思ってたんだが…。

「…あの、もっとこう、他の手段に出るとか無かったんですかね？」
「知るか。…でもま、その辺の珠にしか会話しない女子よりは、毎回毎回武力行使に出るヤツの方が印象に残るだろ？」
「そりゃ、そうですけど…」
「その時点でソイツらからすりゃある意味目的は達成してるワケだ。しかも激しければ激しい程お前の頭に強く印象に残るし、新しく他

の女が寄り辛くなる。専用機なんてそう何体も無いからな、持ってないヤツは巻き込まれたく無いだろうからそりゃ距離も置くさ」

「……」

いや、確かに印象には残るよ？　トラウマって形で。

そりゃオータムさんの話聞いてたらなんとなくそうなんじゃないかなぁ～とは思うけどさ、俺としてはもっとこう、媚びなくていいからもう少しおしとやかにして欲しいって思うんだが。

それってやっぱり男の勝手な妄想なのかね？

「さてと、着いたぞ。後は部屋でじっくり考えな」

いつの間にか、車はホテルの前に着いていた。

第７８話「相談事」（後書き）

なんか、一夏とオータムの会話が愛人に家庭の事で相談にのってもらっているダメ亭主に見え……どうしてこうなった！

第７９話「忘却の彼方に残るもの」（前書き）

はい、７０話代最後の話です

次回はなんと８０話！

第７９話「忘却の彼方に残るもの」

「…っぷはぁ……あ～～じっくり考えろったってなぁ」

あの後部屋に戻った俺はまずビール……ではなく今回はちゃんと酒以外の飲み物も冷蔵庫に入っていたのでスポーツドリンクに手を延ばし、ヤケになったかの様に一気に飲み干した。

ホントは冷たい飲み物ってあんまり身体に良くないし、それこそ何かの行事で飲まなきゃならない時以外は温かい物か常温の物以外は飲まない様にしてたんだが、何となくそうしたい気分だったのだ。

一応、こちらとしては近いうちにヤツらとの戦いも控えているので出来るだけ身軽でいたい、という理由がある。

いつ始まっていつ終わるのかも、どこで始まってどこで終わるのかも解らない戦いが控えているというのに、一カ所に……誰かの元に留まり続ける、或は帰らなければならない状況を作りたく無かったのだ。

テレビの様に、毎回怪人が一人だけだったり、ちゃんと休む暇があったりするなんて保証なんかどこにも無い。

恐らく、地球中でヤツらを倒す度に次の敵の元に移動して、或は地球にヤツらが侵入するのを防ぐ為に、ずっと宇宙を飛び回って……そんな生活をずっと、最悪一生掛かっても終わらない戦いに巻き込みたく無かった。

だから、友達以上の関係に踏み込まなかった。

でも、俺が甘かった。

何がきっかけだったのかは今でも解らないけど、幼なじみの箒や鈴

は昔から、セシリアとシャルロットとラウラは学園で出会っていつの間にか皆でつるむ様になってから、俺に想いを寄せてくれている事に気付いたのは確か、《白式・影打》が名実共に、名前だけではなく《白式・影打》としても姿を顕したあの日だった。

…それはもう、作為すら感じる程の唐突さで。

多分、束さんの仕業なんだろうけど、なんでそんな事をしたのかを聞いた事は無かった。

束さんはいつも唐突に現れて、去っていく。

それに、学園に入学してからの日々はいろいろと出来事が有り過ぎて、いざ会った時にはそんな事頭の片隅にすら無くて。

……だからだろうか、今までその事について深く考え無かったのは。

「でも…」

どうして。

どうして、束さんはそんな事を？

これもまた俺が戦う事に対する束さんなりの抗議なのか？

仲間と笑い合って、時には喧嘩もして、そうして過ごしていくうちにいつしか誰かと恋に落ちて……そんな普通の、ありふれた日常を強く感じさせて、俺を……。

「でも…」

それでも。

ほんの一瞬だったけど、あんな顔されたら忘れられるワケ無いじゃないですか。

いつもいつも、子供の様に笑いながらはしゃいで、いつもの様に唐突にとんでもない発明をして皆を巻き込んで、それで千冬姉にどや

されて。

そんな馬鹿な事ばかりやって、いつの間にかＩＳなんてとんでもない物まで作って世界中から追われる身になって。

それで箒も引越して。

それから暫くして、また唐突に訪ねて来て、そうして俺に尋ねた。

確かあの時はあてずっぽうで答えた解答がたまたま当たってただけで、だけど、その時の束さんは本当に嬉しそうで…。

だけど、話を聞いているうちに、本人は多分気付いて無かったんだろうけどどんどん暗く、ついには泣きそうになって。

そんな束さんの顔を見て、何となく子供心に理解した。

多分、誰にも理解されないまま、束さんはたった一人でどうにかするつもりだったんだろうと。

それで、もしかしたらもうずっと誰にも会えなくなるかもしれなくなると。

だから、あんなに泣きそうな…。

「だから、俺は…」

俺は、束さんと……アレ？

「んん？」

アレ？　いつの間に寝てたんだ？

「うわっ、もう夜じゃねぇか！？」

…え～と、確かマドカさんと模擬戦やって帰って来て……で、冷蔵庫からスポーツドリンク出して飲んだんだっけか？
シャワーも浴びて無いって事は、そのまますぐ寝てたって事なのか……。

「……なんか、忘れてたる様な…」

あ～ダメだ、全然思い出せん。
それに、まだ頭がボ～っとする。

「…とりあえず、風呂入って飯にするか」

『どうやら、君の思っている以上にアイツの決意は固いみたいだが？　どうする？』

「……はぁ、ホント、どっちの”いっくん”も頑固だよね…全く……。解ったよ、もういっくんに諦めてもらうのは諦める」

『…そうか』

「あ～あ、全く…誰に似たんだか」

『さぁな。少なくとも、あの時はまだ俺は居なかったんだから、ア

レについてはアイツの意思だろ』
「そりゃ嬉しいけど、さ……いっくんと『いっくん』は違うんだから、いっくんにはいっくんの道を行って欲しかったよ…。あぁ～もぅ、な～んであの時全部話しちゃったかなぁ……」
『俺も、君も、さっきみたいにアイツの意識を奪って眠らせた事なら何度かあった。でも、意思までは奪っていない。だから、これがアイツが自分自身の意思で決めた、自分の道なんだろうさ』
「だね……」
『不服か？』
「そりゃあ…ね。でも、ここまで意思が固いんならもう私も何も言わないよ。後はもう、いっくんが死なない様に全力を尽くすだけ」
『だな。……！？』
「あ～あ、来ちゃったよまた。規模は……なんだ、これだけか。……多分、先遣隊が帰って来ないから様子見にって感じかな？」
『だろうな……じゃあ』
「うん、いってらっしゃい。”枷”は外しとくから、存分に暴れて着なよ」

苦笑混じりに、束は”彼ら”を見送った。

急に室内に鳴り響いた警告音、音の発信地は洗面所で、発信者は《白式・真打》だった。

「っ！？　まさか…！」

慌てて風呂から上がった一夏は濡れた手のまま《白式・真打》を手に取り、通信に応じる。

『やっほ～いっくん、お風呂上がりで悪いんだけど…』

「ヤツらですね」

『そ～いう事♪　《白式・両儀》の使用許可はもう出してるから、ヤツらが地球に入って来る前にカタしちゃって』

「りょ～かい！」

通信を終え、そのまま部屋を飛び出そうとドアノブを握ったところで……、

「あ……」

全裸だった事に気付いた。

風呂上がり…というか、入浴途中で飛び出したのだから服など着ているハズが無い。

危うく全裸でホテルの廊下を走り回る所だった。

いくら地球の危機とはいえ、流石にヒーローが猥褻物陳列罪で新聞に載るのはマズい。

「……服、着るか」

肝心なところでキマらない辺り、彼がまだまだ半人前である所以でもあった。

「……って、ベランダがあるんだからワザワザ廊下からエントランスまで行く必要無いだろ！」

急いでいた為に、濡れたまま着ようとした服が身体に張り付いて着替えに手間取ったものの、無理矢理引っ張りながらなんとか衣服に袖を通す。

「……よし」

水気を吸い、身体に張り付いた衣服に不快感を覚えたが、無視してバックルを腰に当てる。

次の瞬間、バックルから延びたベルトが腰に巻き付く様に一周し、一夏の身体に固定された。

「……」

ゆっくりと、天に掲げた右腕に装着されたガントレットに飾られた宝石（コア）の輝きに応じるかの様にバックルに納められたもう一つのコアが光を放つ。

「…変、身っ！！！」

掲げた右腕を肩の高さまで振り下ろし、そのままの勢いで水平に振り払った途端、一夏の身体は強烈な白い光に飲まれて消え去った。

光の中で衣服が顔以外全てを包む黒いボディスーツに替わり、粒子が両手足の爪先から纏わり付いてアーマーを形成してゆき、そのまま両の前腕と臑、上腕と腿を白い装甲が包んでゆく。

両手足のアーマーの形成が終わると同時に胸部に粒子が集中してゆき、胸部と肩の装甲を形成し、残った頭を粒子で形成されたヘルメットが包み、最後に真っ赤な両目を覆い隠す様にクリアブラックのバイザーが装着された。

しかし変身はまだ終わらない。
彼が望む姿はその先にあるのだから。

瞬時に《白式・真打》へと姿を変えた一夏を、更に光が包み込む。
《白式・真打》のアーマーの上から両足、腰、両腕、両肩、胸部、頭部の順に《白式・影打》のアーマーが装着され、最後に巨大なウイングスラスターが現れる。

光と影、真打と影打が合わさり両儀を成したその姿こそ、完全稼動形態《白式・両儀》であった。

「……」

真紅の瞳がバイザーの奥から輝き、天を睨む。
肉眼では到底補える事は不可能な距離に存在する標的を確かに視線の先に納め、そのまま一直線に標的へ向かって飛び立った。

同時刻、別室で一夏が部屋から飛び立って行く様子をずっと見ていた者達がいた。
オータムとスコールである。

「…良かったの？」
「何がだ？」

「せっかく捕まえたのに、みすみす逃がすような事をして」
「……いいさ。一度捕まえられたんだから、また捕まえればいい」
「そう」
「スコールの方こそ良かったのかよ？」
「フフ、私も貴女と同じよ」
「…そうかい」

部屋に仕掛けていた監視カメラの映像を眺めていた二人は、観察こそすれど、一夏を拘束するような事はしなかった。
一夏が何も知らなくとも、一夏に機体を渡した篠ノ之束の方からなんらかのアクションを起こすのではないかと思い、自分達は動かずに観察するだけに留めていたのだが、案の定、篠ノ之束は一夏に何らかの指令を送り、そして一夏は飛び立って行った。

「やっぱり、ね…」
「ああ……ってか、なんなんだよあの《白式》は！　アレじゃまるで…」

「《白式・真打》と《白式・影打》を足したみたいだ、かな？」

「「！！？」」

オータムの言おうとした事を先取りするかの様に、この場にいないハズの人間の声が部屋に響いた。

「なっ…し、篠ノ之博士！？」

「いつの間に部屋に…」
「ふっふ～ん♪　あ～んなちゃちいセキュリティ、この束さんにかかれば無きに等しいのだよ諸君」
発話に合わせてピコピコ動くウサ耳カチューシャを頭に乗せ、青いワンピースに身を包む垂れ目気味の女性。
ＩＳの提唱者にて唯一コアを製作出来る人物であるこの女性こそがかの天才科学者、篠ノ之束であった。
音も無く、痕跡も無く唐突に顕れ、そして……
「どうやってここまで来たのかは知らねぇが……”アレ”は何なんだよ！　ＩＳの複数機同時操作だなんて…」
「普通は無理？　ねぇ、”この私”にそんな凡才の常識（限界）が当て嵌まるだなんて、本気で思ってるの？」
「くっ…」
「なら、どうやって…？」
「ん～？　別に二ついっぺんに～ってのも出来るんだけど、《白式》は違うよ。単に元々一つだったものを二つに割っただけなんだから、ぴったり合うのも当たり前じゃん」
「じゃ、じゃあアレが……」
「そ、アレが《白式》の本来の姿で《白式・両儀》っていうんだけどね。別に覚えようとしなくていいよ、どうせ”すぐ忘れる”から」
「な、何を言っ……」
「あっ……」
意識も記憶も、記録すら残らない。
秒針の音色だけが部屋に響いた。

第７９話「忘却の彼方に残るもの」（後書き）

彼らは飛び立つ
いつか訪れる、戦いの日々へ

第８０話「追う者と、待つ者」（前書き）

すいません
活動報告にもあった様に、携帯が水没していたので更新が出来ませんでした

今日からは更新を再開します

第８０話「追う者と、待つ者」

『《インビジブル》、発動。シールドバリヤー、特殊展開』

搭乗者とは異なる、女の声。
ホテルのベランダから飛び立とうとした《白式・両儀》から発せられたその声と共に機体が透けてゆき、数秒も経たぬ内にその姿は誰にも捕らえられ無くなる。
人の目にも、機械の目にも。
そうして完全に消えた機体の頭上にシールドバリヤーが円錐状に展開され、羽ばたきと共に空を穿った。

初陣がそうだった様に、シールドバリヤーを特殊展開せずとも《白式・両儀》は……というか、全てのＩＳは自力での大気圏からの宇宙空間への脱出も、逆に宇宙空間から大気圏への突入も可能ではあったが、宇宙空間であるなら全く気にする必要は無くとも大気がある以上、どうしても衝撃波というものが発生してしまう。
勿論、全てのＩＳが自力で大気圏からの宇宙空間への脱出や、宇宙空間から大気圏への突入も可能である以上、自分で発生させた衝撃波のせいで自壊する事などまず有り得ない。
が、大気との摩擦がある以上は微量とはいえどうしてもシールドバリヤーに負担を掛け、結果的にシールドエネルギーやそれを捻出する機体そのもののエネルギーが芋づる式に消費されてしまう。

”人間ごとき”を相手にするのなら、その程度の消費など全く気にする必要など無かったのだが、相手は未知の……少なくとも一夏自身にとっては未知の存在である。
例え微々たる量であるとしても、用心するに越した事は無い。

故に、その微々たる消耗が避けられぬものならば、よりその消費を少なく。
その為にワザワザ、白式はシールドバリヤーを流線型に張り直した。
無きに等しいとはいえ０では無い以上、主の死亡率をより０に近づける為に。

本来の姿、《白式・両儀》へと成った事によりそのエネルギーは無尽蔵といっても差し支え無いものに、武装は無限に。
それでも彼女は……白式は用心を怠らない。
もう二度と、”一夏”を失わない為に。

「……っとと、相変わらず速いな」
『やはり、まだ慣れませんか？』
「そりゃあな」

こんな速度で飛ぶのにたった二回目で慣れる事が出来るんなら、多分俺はもっとマシな戦い方が出来てただろうし。

『ですね』
「…って、コラ。勝手に人の心を読むんじゃない」
『え～』

「いや、『え～』ってお前……」
『未知の敵と戦う以上、私は一夏の思考を１００％理解しなければなりません。故にこれは仕方の無い事なのです』
「……で？　本当のところは？」
『勿論一夏の趣向を１００％理解（トレース）して夜の……ハッ！？　謀りましたね！？』

いや、謀って無ぇし。
お前が勝手に喋っただけじゃん。

「で、今回のヤツらの規模は？」
『博士曰く、先遣隊が帰って来ないから様子見の為の調査を行うつもりではないか、との事でしたが…』
「じゃあ、前と同じぐらいの規模って事？」
『恐らく』

ならまぁ…、大丈夫か。

「じゃあ、さっさと片付けて帰りますか」
『ですね。いい加減帰らないと千冬達が恐いですし』
「……俺、帰って大丈夫なのか？」

肉体的な意味で。

『まぁ、軽く半……いえ、九割殺し？』
「どの辺が軽いの！？」
『一夏の命？』
「酷っ！！　……って、漫才やってる場合じゃないか」

さっさと片付けて帰らないとな。
……まだ、帰る余裕がある内に。

「確か方角はこっちで良かったんだよな？」
『えぇ』

例によってまた隕石に紛れて……という作戦なのか、反応のある移動物体が一つ。
ただ、その大きさがおかしい。
《白式・両儀》の目が捕らえた隕石の大きさは……だいたい四国と同じぐらい、といえばその大きさが解ってもらえるだろうか。

「……なぁ」
『なんでしょう？』
「…アレ、偵察の規模に見えるか？」
『……見えません、ね。というか、現在進行系で巨大化してませんか？　アレ』
「……見間違い、だと思ってたんだがなぁ～」

…まぁ、ＩＳ取り込んで変化させる様な連中だし、デブリとかいろいろと寄せ集めて隕石を巨大化させる事ぐらい出来るだろうさ。
でも……。

「いくらなんでも限度ってモンがあるだろうがぁぁぁぁぁぁっ！」

『……あ、北海道サイズになった』

…勘弁して。

その頃、ＩＳ学園では…。

「か～んちゃん♪」

「ほ、本音!?」

「ど～したの？　ボ～っとして」

「……本音ほどじゃない」

「ひっど～い……やっぱり、おりむーの事、気になる？」

「…うん」

着いて行こうと思えば、簪も一組の専用機持ち組（＋担任）に同行する事も出来た。

実際、誘われもしたが、簪は自らの意思で学園に残る事を選んだ。

簪とて、”代表候補生として”一夏個人の身柄やその所有する機体の重要性は理解しているし、一人の少女としても彼の存在は大きかった。

では、何故捜索隊に志願せず、学園に居残ったのか？

たった一人と二機が世界的に見てかなり重要な存在であるとはいえ、その捜索の為に五機もの専用機が……教員用にチューニングされた機体も専用機としてカウントするのなら六機もの専用機が同時に学

園を離れるのは、防衛的観点から見て危険過ぎたからだ。
今年が異様に多いせいで勘違いされがちだが、簪と上級生を含めた現在学園にいる代表候補生の人数だけでも例年通りの人数と専用機があるというのに、”五~六機もの専用機が留守”という状況だけ見て、テロリストが今が攻め頃だと勘違いして襲撃して来る可能性が非常に高く、現在行方不明中とはいえ、その彼と機体のデータという餌が学園にはある。

だから、彼女は残った。
彼の居場所を守る為に。

彼の居場所を守る、それ自体は簪が自分で決めた事だし、今更放り出すつもりも無い。
しかし、襲撃の可能性に気付けた理由が簪を苛んだ。

簪は、他の娘達の様に我を忘れて飛び出そうとする事が出来なかったのだ。
代表候補生としては簪の判断は正しかったが、一人の少女としてはどうか？
日が浅い、元々大人しい性格だった、等々、考えられる要因はいくらでもある。
しかし、結局は…、

他の娘の様に、取り乱せるほど彼を想っていなかったのではないだろうか。

…と。

「…これで良かったのかな？」
「学園に残った事？」

「…うん」
「う～ん、私がどう言ってもかんちゃんは納得しないかもしれないけど……」
「？」
「間違ってた、もっと違う事がしたかった…っていうんなら、”次は”そうしたらいいんじゃないかな？　どうせおりむーの事だし、またすぐ捕まったりってこれからも結構あると思うし」
「……」

主は、俯いたまま、応えなかった。
従者は、それでも主を見放さなかった。
分不相応ではあったが、従者である以前に、友達だと思っていたから。
だから、見守る。
主が動く、その日まで。

「…で、どうするよ？」
『生半可な攻撃では粉々に飛び散ってかえって厄介ですし…』
飛び散られると困るから、出来ればあの大きさでも飲み込むぐらいの攻撃がいいんだが…。

『あそこまで巨大な物を一撃で、となると…』
「前みたいに細かく砕いて……てのも手間だしなぁ」
『ですねぇ…』
「ほっといて大気圏で燃え尽きるのは期待出来ないし…」
『確実に劇場版カブト状態になりますね、地球が』
「だよなぁ…」

細かく砕くのはいいとしても、あんだけデカい塊をとなるとかき集めるのに必要な数だけビットを作る質量が足りるかどうか…。

「なぁ」
『なんでしょう?』
「《白式・両儀》の状態でも巨大化って出来るか?」
『出来ますよ』
「んじゃ、巨大化して《雪片弐型》で…」
『流石に巨大化した状態でアレを使えば一時的とはいえエネルギー切れを起こすので余りオススメは出来ませんね』
「じゃあどうするんだよ?」
『万が一って事もありますから、ここは出来るだけエネルギーを残す方向で…』

エネルギーを残すったってなぁ…。
そんな都合のいい武装なんてあったか?

『そうですね…、威力的に《雪羅》の荷電粒子砲なんてどうでしょう?』
「アレも結構エネルギー喰わなかったっけ?」
『《雪片弐型》よりはマシ、というレベルですが、エネルギーが残るだけマシかと』

《甲龍》の衝撃砲も、
《シュヴァルツェア・レーゲン》のレールガンも、
《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》のパイルバンカーも、どっちかっていうと”砕く”武器だしなぁ。
《ブルー・ティアーズ》なら……あ～、ビームの威力が足りんか。

「じゃ、それでいきますか……」
『では、《ジャンボフォーメーション》発動。《雪羅》、カノンモードでセット』

白式の声と共に、俺の身体は…《白式・両儀》はみるみる内に巨大化していき、４０m近い巨体へと変わる。
左腕に現れた《雪羅》を水平……上も下もない宇宙で水平ってのもアレか。
まぁ、地面があったら水平になる様に構え、右腕を添えた。
クローが開くのに連動して砲身が少し延び、そして…。

『「消え去れ」』

赤い、破壊の奔流が徐々にその太さを増してゆき、やがて隕石全体を飲み込んでいった。

……が、

「マジか…」

『冗談キツいですね』

飲み込まれた直後に、ポンッと隕石が荷電粒子砲の光から飛び出した。

まるで、熱いものを触ってしまった時に、反射的に手を引っ込めてしまう様な感じで。

第８０話「追う者と、待つ者」（後書き）

次回、学園に戻った一夏を待ち受ける地獄谷五人衆…もとい、ヒロインズが久しぶりの登場です

第８１話「帰る場所」（前書き）

集団行動の難しさは前々から承知していたつもりでしたが、なんというか、今回は予想以上の酷さでした…

な　ん　で　、１８：００に家に帰れる予定だったのに帰ったら２３：３０過ぎてんだよ！

残り３０分で執筆なんか出来るか！

……と、いうワケで遅れに遅れた第８１話、徹夜で仕上げさせていただきました。

活動報告にもあった様に、しばらくは不定期更新になりますが、平にご容赦を

第８１話「帰る場所」

「…なぁ、隕石ってあんなホイホイ動くモンだっけ？」
『……きっと生きのいい隕石だったんでしょう』

そっかそっか、生きがよかっただけかぁ…。
うん、なら仕方ない……なワケあるかぁぁぁぁぁたぁぁぁっ！！

「ど～なってんだよアレ！？」
『そんなの私が知りたいですよ！　あぁっもう！　こうしてる間にどんどん洒落にならないサイズになってきてますよ！　さっさとなんとかして下さい！』
「おまっ…、なんとかったって……エネルギーは？」
『残量１０％ってとこですかね』

マジかよ…。
話にならんぞ、ソレ。

「エネルギー回復系の何か無いのかよ！」
『あったらとっくの昔に使ってますって。……一応回復機能が無いワケではありませんが…』
「時間が掛かる、と？」
『…はい』

クソッ…あんまり時間を掛けたら余計にコイツが…。

『ガァァァァァァァァッ！！！！』

「なっ……」
『…そういう事ですか』

急に隕石が”口を開いて”咆哮を上げた途端、ぐにゃりと形を崩してまた新たな姿を取った。

「…おいおい、今度はクリーチャーかよ」

一夏がそう表したのも無理はない。
鼻も耳も、目玉すら存在し無い、ただ大きな口が有るだけの頭にはまるで一本一本が別々の生き物の様に蠢く牙がズラリと生え、全身を刺の様な鱗で鎧う体躯はまるで大蛇。
そんな化け物が目の前に顕れたのだから。

「白式、形態は両儀のままで影打部分を全部仕舞え」
『えっ……でもそれでは一夏が』
「そんなに心配なんだったらさっさとチャージを終わらせてくれ」
『…解りました。でも真打の方でエネルギー系の武装を使ってしまったら結局エネルギーが…』
「大丈夫だ。《マシンスライダー》の方のエネルギーだってあるし」
『なるべく急ぎますが、無茶はしないで下さいよ』
「あぁ、……いくぞ！」

その掛け声と共に《白式・両儀》の《白式・影打》で構成されていた部分が掻き消え、見た目だけ《白式・真打》に戻る。
差異があるとすればバックルにおさめられたコアが《白式・真打》時の球体では無く……いや、球体ではあるが《白式・両儀》時の太極図の様な二つのコアを足して出来た球体である事ぐらいだろう。
その二つで出来た球体の一つ、《白式・影打》の担当する機能を全て停止させ、チャージだけに集中させる。

つまり、チャージが終わるまでは多少の外見上の差異こそ有れど、結局は《白式・真打》で戦うに等しい状態であり、さらに不利な事に、エネルギーを消費する様な武装は一切使えない。
《ボルティックシューター》等のビーム兵器など以っての外。
敵がこんなに巨大であるというのにジャンボフォーメーションもエネルギー消費が激しい為に使用出来ず、通常サイズでの戦闘を強いられる。

『グルァァァァァッ』
「くっ…、《マシンスライダー》！！！」

本体のエネルギー消費をより押さえる為に移動手段は限られ、《マシンスライダー》のエネルギーが尽きる前にチャージを終わらせる為に、唯一の移動手段である《マシンスライダー》での回避行動も極力紙一重以上動けない。

『ガァァァッ』
「おわっ…と」

最初の突撃こそ難無くかわせたものの、そう何度も何度も……となれば今の一夏には難しい機動である。

『アァァァッ！！』

「くっ…」

そう、まだ未熟な一夏には難しい。

なのに、『彼』は入れ代わろうとはしなかった。

いつもの『彼』なら、ここで一夏と代わって即座に目の前の怪物を屠っただろう。

なのに、一向に代わる気配がない。

「くぅっ……なろぉぉぉぉっ！！」

擦れ違いざまに放った《大切断》の刃も、少し相手の鱗に切れ目を入れるのがやっとで、たいしたダメージには到底なり得なかった。

というか、切断したのならまだしもたかが切れ目ぐらいではすぐに接合されるのがオチである。

「くっ…そ、早過ぎて当てらんねぇ…」

『グルァァァッ』

「がっ…」

鞭の様にしなる尾に弾かれて吹き飛ばされ、足場にしていた《マシンスライダー》からかなり遠ざけられてしまうものの、ギリギリ思考操縦の有効範囲内であった為に辛うじて自身の近くまで呼び戻す事に成功し、再び足場とした。

吹き飛ばされた速度がもっと速ければ、或は思考操縦が間に合わな

ければ冗談抜きに宇宙の彼方へ吹き飛ばされていたかもしれない。

そもそも、《白式・真打》は《セイリングジャンプ》が搭載されるまで跳躍は出来ても飛行の出来ない陸戦機だった。
そんな機体が後付けで飛行が可能になったとはいえ、宇宙空間を自在に移動出来るかと言えば断じて否、である。
第六世代機の弊害というべきか、インフィニット・ストラトスと同様の技術が使われているものの、インフィニット・ストラトスでは無い、つまり、インフィニット・ストラトスでは無いが故にインフィニット・ストラトスには無い機能を有し、逆にインフィニット・ストラトスが当たり前の様に持ち合わせる機能を持ち得ない。
つまり、宇宙開発での作業用に開発されたマルチフォームスーツたるインフィニット・ストラトスが当たり前の様に可能である宇宙空間での活動が、《白式・真打》には出来ないのだ。

だから、この苦戦は必然であり、

『ガァァァァァッ』
「ぐぅぅっ」

苦戦の末の敗北もまた、必然であった。

『ガァァァァァァァァァッ』
「ガハッ…」
『一夏!?　（くっ…まだ半分までしかチャージが終わっていない）』

再び尾で弾かれ、幾つかの隕石を破砕しながら突き破って吹き飛び、大き目のデブリに突き刺さったところで漸く止まる……事など無く、慣性のままにデブリごと吹き飛んでいく。

（くっそ…、このままだとチャージが完了する前にこっちが先にくたばっちまう…）

でも、どうすれば？　と、考えたものの、それが解ればそもそもこんな風にデブリに減り込んでなどいなかっただろう。

（とりあえず抜け出すとして、その後だ。その後もまた同じ事をやってる様じゃあまたこんな風にデブリに減り込んでしまうし……待てよ、足場？）

あぁ…そうか、と。

一夏は気付いた。

確かに、《白式・真打》は陸戦用で宇宙での活動は不得手だ。

だが、だからといってなにも《マシンスライダー》に”乗りっぱなし”である必要なんて無い。

回りを見渡せば視界の所々に、しかもかなりの数の隕石やデブリが漂っているではないか。

（……よし、これなら！）

そうと気付けば後は行動あるのみである。

「ぐっ……ぁあぁぁぁぁぁぁっ！！」

自身が減り込んだデブリを無理矢理引きちぎりながら身体を起こし、そのままの勢いでデブリを足場にして”跳んだ”。

『ガッ！？』

擦れ違いざまに尾の先端を切断し、また辺りに浮かぶ隕石等を足場にして一夏は跳ぶ。
……そう、確かに《白式・真打》は飛べない。
それでも、この重力の無い宇宙でなら、何処までも跳ぶ事が出来る。

何度も何度も、足場にしたデブリを蹴っては跳び、時には《マシンスライダー》を動かして足場を自由自在に動かす事によって、一度に切断出来る量は微々たる物であっても確実に怪物の身体を少しずつ小さくしていった。

『ガァァァァァッ』
「っと、させるかよ！」
『グゥッ！？』

堪らず補給の為に開いた口を顎を蹴り上げる事によって強引に閉じさせて補給を阻止しつつ、また跳躍と切断を繰り返す。
怪物の方も必死になって噛み付いたり尾を振り回したりと抵抗を続けるものの、小刻みに跳び回る《白式・真打》に翻弄され、全く当たる気配すらしない。

（いける！　この調子なら…！）

奮う刃は己に掛かる敗北の兆しごと怪物の身を切り裂き、そして遂に怪物の方にこそ敗北という”結果”を刻み付ける。

『チャージ完了！　……一夏っ』
「待ってましたぁぁぁぁぁぁっ！！！」

相棒の報せに歓喜し、その歓喜を身体中で表すかの様に一瞬縮こま

って身体を大きく広げる。
その動作に合わせてチャージの為に消していた《白式・影打》で構成されたアーマーが再び《白式・真打》を包み、《白式・両儀》が断罪の剣を掲げた。

「……今度こそ、確実に仕留める！」
『えぇ、私達の全てをぶつけてやりましょう』

掲げられた《雪片弐型》が変形し、元の刃の代わりに白い光が延びる。
全てを飲み込み、跡形も無く消し去る光が。

『「いっけぇえええええええええええっ！！！！」』

主従の気合いを表すかの様に輝きを増した光は怪物に断末魔の声を上げる事も、骸を残す事すら許さず跡形も無く飲み込んでいった。

「はぁ……はぁ…やったか？」
『えぇ、跡形も無く……！？　この反応は！！？』

詰めが甘い、と責めるだけなら誰にだって出来る。
だがしかし、いったい誰がこの宙域に漂う、先程まで一夏が足場として利用していたデブリまでヤツらの擬態だったと見抜けただろうか。
巧妙に、活動可能なギリギリの質量分ずつを宙域にバラ撒いて……
一夏が切断した細かな、それでいて大量の破片の全てが戦いに集中する彼らに気付かれぬ様にデブリを取り込み、擬態していたなどと。

『……あの巨体こそが囮で、こちらが本命というワケですか。忌ま

忌ましい畜生の割りに随分と智恵が働くじゃないですか』
「ちぃっ……そういう事かよ」

悪態をつく主従の目の前で悠々と怪物の分身は集い、のっぺりとしたヒトガタへと成る。
いくらデブリを取り込もうが所詮はに破片の集まりというか、しかしそれでも５ｍを越える巨体はそれだけで威圧感を漂わせ、何ももも無い顔は一体何処を見ているのかが全く見当が着かず不気味だった。

「…流石にマズいな、コレは」
『念仏でも唱えてみます？』
「いいねぇ、ソレ」

エネルギー残量０。
つまり、エネルギー系の武装どころか機体を動かす事も儘ならない。
白式の自我からの声も徐々に小さくなり、辛うじて一夏の耳に届く程度。

「本当に……参ったね、こりゃ」

遂に発話すら出来なくなった相棒の合いの手が入らなくなった事が、異様に淋しく感じられた。
無理も無い。
この広く、暗い宇宙にただ独りなのだから。

「さぁて……ただでやられると思うなよ？」

別口で残っていた非常用のシールドエネルギーも残り僅か、そのエネルギーすら使い果たせば酸素循環装置も稼動しなくなるだろう。

それでも、一夏は怪物に剣を向けた。
幸い、無重力である為に纏った儘の《白式・両儀》の重みは感じない。
これなら、あと数分は凌げるだろう。

「いくぞ化け物ぉおおおおおおおおっ！！！」

何の奇跡か、足元をたまたま漂っていたただのデブリを足場にし、一夏は跳んだ。
最後の一撃を見舞う為に。

「ハァァァァァァァァッ」

最後に相応しい、見事な唐竹割りは確かに怪物の頭部を捕らえ……
…しかし、ソレだけだった。

『……』
「ちぃっ…」

脳天から人間の鼻の位置にまで食い込んだ剣はそこで止まり、ゆっくりと延ばされた怪物の左腕が剣を握り潰して、そのまま《白式・両儀》の……一夏の頭部に延びる。

「……ここまでか」

打てる手は全て打ったつもりだった。
それでも、届かないのなら、もう……。
もう、延ばされた腕を見つめる事しか、一夏に出来る事は無かった。

「……」

最後だからだろうか、酷く時間の流れが遅い様に感じる。

……そう、まるで止まっているかの様に。

「諦めるにはまだ早いぞ、一夏」

「な！？　ラウラ！！？」

聞こえないハズの声が、確かに聞こえた。

「私達を忘れてもらっちゃあ困るわよ」

ＡＩＣによって身動きが取れない怪物の腕を投擲された《双天牙月》が切り飛ばし、

「道理で探してもいないハズだよ、全く」

「まさか宇宙にいらっしゃったとは思ってもみませんでしたわ」

《ヴェント》の弾丸という、新たな慣性で一夏から離れていく怪物に《ブルー・ティアーズ》の群れが一斉にビームを浴びせる。

弾丸とビームによってボロボロになった表面を修復させようとする怪物をよそに、白に近づく紅。

「勝手にいなくなったりしないでくれ、お前がいないと私は…私達は…」

「箒…みんな……」

《紅椿》のアームが《白式・両儀》に触れた途端、黄金の輝きが二機を包み込んだ。

唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《絢爛舞踏》。

篠ノ之束が実妹の為に作り上げた、世界で唯一の第四世代機、《紅椿》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）。

その効果はエネルギーを消滅させる《零落白夜》と真逆のエネルギー増幅であり、《白式・真打》と《白式・影打》が対を成して《白式・両儀》となるのとはまた別の意味で、”《白式》”と対を成す為に作られた《紅椿》に与えられた力。

その力の恩恵を受け、瞬時にエネルギーを回復させた《白式・両儀》のバイザーに再び真紅を燈す瞳。

「みんな……」

「話は後だ、余り先客を待たせるのも悪い」

「…そうだな」

珍しく軽い調子で言うラウラに応え、一夏は怪物に向き直る。

「……あぁ、今度こそトドメだ」

左腕に出現させた《雪羅》のクローに、《雪片弐型》と同じ白い光が燈る。

その光はクローだけではなく《雪羅》そのものを包み、そして……。

「消えて無くなれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！」

翳した腕が、延びる。

正確には、翳した腕を包んでいた光が。

その光の腕は《雪羅》から離れるにつれみるみるうちに巨大化し、怪物の元に辿り着く頃には怪物が掌に納まるまでの大きさになっていた。

そして、光の腕は大きく指を広げ……次の瞬間、怪物を握り潰した。

「……やったか」

今度こそ、怪物は消滅した。

跡形も無く。

「やったか…じゃないわよ！」

「…全くだ。私達が来なかったら死んでるところだったんだぞ！」

「え…あ、あの…」

睨む二人の幼なじみの顔も、

「やっぱり、一夏さんには私が着いていないと…」

「〝私達〟…だよね、そこは」
「こ、言葉のあやというものです！」
「……」

学園で出会った三人の顔も、酷く懐かしく感じた。
たった数日、会ってなかっただけだというのに。

「……まぁ、お互い積もる話は有るだろうけど……取り敢えず、帰ろうぜ。俺達の居場所に」
「……だな」
「そうね。結構飛ばして疲れたし」
「ですわね」
「僕なんか皆に追い付くのだけで精一杯だったし…」
「……」

こうして、五人の少女と、一人の少年は在るべき場所へと帰っていった。

「……ところで一夏、その装備はパワーアップの再改造の結果なの

か？　それとも最終フォームというヤツか？」

「「「「「……」」」」」

「……どっちも、かな？」

真面目に、あくまで真面目に問うたその疑問に、苦笑混じりに答えた。

第８１話「帰る場所」（後書き）

次回、第２５４２３回弾劾裁判開廷

第８２話「不在の隙」（前書き）

弾劾裁判開廷（笑）

■新コーナー、没ネタ集

その１：　ＩＳ　×　Ｇガン

一夏の機体がシャイニングガンダムっぽいＩＳになっています。

一夏「俺のこの手が光って唸る！　勝利を掴めと輝き叫ぶ！　砕け！　必ぃっ殺！！　零落っ白夜ぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

毎回ヒロインにアイアンクローをかます主人公……斬新過ぎて書けるか！（笑）

第８２話「不在の隙」

「……さて、今まで何処でどうしてたのか、洗いざらい吐いてもらおうか」

そう言って俺を見下ろす銀髪の少女……まぁ、要するにラウラなんだが、流石は軍人、身体は小柄なくせに迫力のせいでなんだか大きく見える。

因みに、何で小柄なラウラが俺を見下ろす事が出来ているかといえば、ラウラが立っていて、俺は椅子に座らされているからである。

……そう、座らされているのだ。

首から下を全て縄でぐるぐる巻きで椅子に固定された状態で。

多分、捕虜でももう少しマシな扱いをしてもらえそうな気がしなくもないが、何も言うまい。

下手に抵抗したら面倒な事になるのは火を見るより明らかである。

……決して、俺を囲む様に仁王立ちするいつものメンバーが怖かったからではない。

決して。

「…で、洗いざらいって言っても何から話せばいいんだよ？」

「そうだな……ではまずこの数日間、何処に潜伏していた？」

「何処って……その、ホテル？」

「なっ……ほ、ホテルだと！」

「まぁ、待て……で、そのホテルの名前は？」

ガタッ、と身を乗り出した箒を手で制し、ラウラが質問を続ける。

「知らん」
「知らん……だと？」
「赤点ギリギリな俺があんな難しい英単語なんか読めるか！　……つ～か、名前なんかじっくり見る暇なんて無かったからどの道覚えられねぇよ」

これはホントである。
既に手配済みだったのだろうか、従業員に全く呼び止められる事なく、やたらめったらスピーディーに部屋に押し込められてしまったのでいちいち名前なんか見る暇……というか、名前を気にする暇なんか無かったのだ。

「……まぁ、いい。そこでお前は何をしていた？」
「何をって…普通に飯食って寝てただけだけど？」

はい、実はマドカさんと模擬戦もやりました。
でも言わない。
なんか癪だし。
つ～か、まず…

「……なぁ、弁護士は？　コレって一応裁判なんだろ？」
「そんな物など必要無い」
「え～」

酷くね？

「裁判といっても所詮形式だけのものだ。処罰については既に決定している」
「ちょっ…」

…逃げようかな、俺。

「まぁまぁ、そう言わずに。貴女達の気持ちも解るけど、流石に織斑君が可哀相よ？　……って、事で私が弁護士役ね」

そう言いながら拷問室……もとい、会議室に入って来たのは生徒会長こと更識楯無さんである。

「チェンジで」

「酷っ」

「いや、どうせおちょくる気満々だったんでしょ？」

「勿論♪」

……そこは嘘でもちゃんと弁護しに来たと言って欲しかった。

「……と、言うワケで検察官六人目入りま～す♪」

検察官役だったんだ、皆。

てっきり……いや、まぁどの道六対一って不利過ぎるな。

「さ～て、キリキリ吐いてもらうわよ～♪」

……ノリノリだなぁ、生徒会長。

「じゃ、取り敢えず皆聞きたい事がいっぱいあるだろうし、順番に一人一つずつ織斑君に質問していこうか」

生徒会長の提案に、皆が首肯した。
流石は生徒会長、ちゃんとリーダーシップが取れてる。
……こんな場面でそれを発揮して欲しく無かったが。

「じ、じゃあ…まず私からだ。一夏、お前随分向こうの連中と親しげだったが、そいつらと向こうでどの様に過ごしていた？」

そう尋ねたのは箒だった。
そういや箒の前でオータムさんと親しげに話してたもんな。
気になるっちゃ気になるか。

「どう…たってなぁ……」
「なんだ、答えられない様なふしだらなマネでもしたのか？」
「んなワケあるか。ただ向こうのお偉いさんが現場の意見を聞かない人だったらしくてな、無駄を承知で形だけ拉致してただけっていうか……」
「？　……どういう事だ？」
「いや、俺って《白式》に守られてるからさ、薬物の投与とかしても無駄だし、《白式》自体、どっちもセキュリティが強固過ぎて情報引き出せ無いだろ？　それをお偉いさんが納得出来なかったらしくてさ」
「なるほど…」

そう、さっき俺が言った様に《白式・真打》も《白式・影打》も…
…というか、《白式・両儀》が”計画の参加者”以外に一切の情報を開示しない様に設定されてるから俺と束さん以外に機体の詳細なデータを閲覧出来る人間なんか居ないし、仮に薬物投与とかで俺を操ろうにも《白式・影打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）で瞬時に無効化されるしな。

「…じゃあ、次私ね。……一夏、向こうでちゃんと食べてた？　何か不自由とか無かった？」
「ん、部屋を出れない以外は特に不自由は無かったぞ？　飯だってルームサービスで好きなの頼めたし」

鈴の質問は思ったより普通だった。
飯については特に何も……というか、いつもより豪勢だったし、久しぶりにゆったり出来たから文句も何も、寧ろ感謝したいぐらいなんだが。
……まぁ、不自由については今がそうだよね。
裏切り者（白式さん）のせいで不自由（捕縛）されてるし。
な～にが「疲れましたので一眠りします」だ。
なんで機械が”疲れる”んだよ。

「で、では次は私から。……一夏さんが戦っていたあの、怪物はなんですの？」
「あ、ソレ僕も気になってたんだ」

セシリアとシャルロットは同じ質問か…。
参ったな、知ってるけどまだ”知らない”って事になってるし…。

「…さぁ？　束さんに呼び出されたから出動したんだけど、あの化け物がなにかは知らないぞ、俺。」

一応、生徒会長以外は前に《シルバリオ・ゴスペル》の件で見てるし、《ラプター》とかいう機体の話しも多少は聞いてるだろうから…。
う～ん、どこまで話して良いのやら…。

「ホントに知らないの？　一夏」
「ホントだって……まぁ、多分束さんなら何か知ってるんじゃないか？　だって呼び出したの束さんだし」
これも全部、篠ノ之束ってヤツの仕業なんだぜ……って、事にして置こう。
ほら、なんか皆束さんの名前出すだけでだいたい解ってくれるし。
「では私の番だな。一夏、あの時の《白式》の姿はなんだ？」
…来た。
ラウラなら……というか、ラウラじゃなくても皆気になってはいたと思うんだけど、これもどうしたものか。
ヤツらに関しては未知の物を混ぜたせいで暴走したって事になってて、ヤツら自体に意思がある事はまだ誰も知らない。
《シルバリオ・ゴスペル》の時にヤツらに意思がある事が露見したけど、束さんが都合良く皆の記憶やその他の記録を弄ったからその辺りに関しては無かった事になっている。
《白式・両儀》に関しても前は記録を改竄してまで存在を隠してたのに、未だに束さんがソレをしないって事は、ある程度は喋ってもいいって事なんだろうか？
「あ～、アレな…あの化け物と戦ってる途中で《白式・真打》と《白式・影打》合体したんだが…」
「なっ……合体！？」
「え、ど、どういう事ですの！？」
な、なんなんだこの食いつきの良さは！？
「…そ、そんな驚く様な事か？　今までだっていろいろと非常識な

事あったろ？」

だってインフィニット・ストラトスじゃなくてインフィニット・ストライカーなんだから、インフィニット・ストライカーで常識でもインフィニット・ストラトスじゃ非常識って事いっぱいあるだろうし。

あと、自分で合体って言ったけど、アレが元の姿だしなぁ…。

「い、一夏。合体って事は、一度に二機稼動させてるんじゃなくて、一機として稼動してるって事よね？」

「お、おう…」

「それが有り得んのだ。以前から二つ以上のコアで一機を動かす実験はなされてはいたが、どこの国もことごとく失敗に終わっている」

「えぇ、確かコア同士のパワーが釣り合わないからだとかで…」

なんだ、他の所でもコアの同調実験ってやってたのか。

でも、なんで失敗したんだ？

「コアに個体差があるっていっても、学園の《打鉄》とか《ラファール・リヴァイヴ》みたいに出力を均一にする技術があるのになんで釣り合わないのさ？」

「うん、普通はそう思うよね？　でも、何故か上手くいかないんだよ。ホントかどうか知らないけど、無理にその状態で動かし続けて片方のコアがオーバーヒートして使い物にならなくなったって話があるぐらいだし」

…あぁ、うん。

だいたい解った。

もしかしなくても束さんの仕業だよね、コレ。

「まぁ、元の製作者が束さんなんだし、その辺りも束さんにならなんとか出来たんじゃないのか？」
「それは……」
「確かに、そうとしか考えられませんが…」

それに、《白式・両儀》って二つのコアを一つにしたんじゃなくて、《白式・両儀》のコアを二つに割ってそれぞれ《白式・真打》と《白式・影打》に搭載してただけだし。
二人（《白式・真打》と《白式・影打》）で一つの仮面ライダー（《白式・両儀》）って言うとなんかWっぽいな。
いや、ベルト（《白式・真打》）とブレスレット……じゃなくてガントレット（《白式・影打》）で変身して尚且つそれが元の姿って事はキバの方が近いか？

「……なるほど、そういう事か」
「どういう事ですの？」
「同じ《白式》という名を冠する機体が二機……しかも、真打と影打だなどと明らかに関連性を匂わせる名前……つまり」
「「「「…つまり？」」」」
「真打と影打は合体を前提として作られた機体だったという事だ」
「なるほど…」
「確かに、言われてみれば…」

はい、不正解。
合体を前提としてたんじゃなくて元々一つだったのを二つに割っただけでした～……まぁ、嘘の内容からの類推じゃあ仕方ないんだけど。

「あぁ、そうそう。俺からも皆に質問があるんだけど…」

「ん、なんだ？」
「どうやって俺が宇宙にいるって知ったんだ？」

大気圏脱出の……というか、ホテルから出る時から《インビジブル》で姿を隠して宇宙に出たハズだし。

「あ……あぁ、それはだな、お前、あれだけ莫大なエネルギーを放出してたらいくら地球から遠くとも感知できるぞ」
「そ、そうそう。びっくりしたよねぇ～」
「え、えぇ…ホントに」
「その、なんて言うかこう……後ろから急に大声出された様な感じ？」
「そ、そうだな。急に計器が狂った様に馬鹿げた数値をたたき出したから何事かと思ったぞ」

？　なんかみんな妙に吃ってる様な気がするが……まぁ、そんだけすごかったのか、あの白い光のエネルギーって。
まぁ、地球真っ二つサイズの長さのエネルギーブレードだし、そんなもんか。

それにしても、それも隠蔽して無いって事はそろそろ種明かしの時期が……ヤツらが本格的に攻めてくる時期が近いって事だよな。
…いよいよ、か。

「んじゃ、最後に私から皆に一言。今度からは、くれぐれも勝手にいなくなったりしないでよね。皆が居ない間も大変だったんだから」
「え…、何かあったんですか？」
「何かも何も、他の娘達にはもう話したけど、織斑君達が居ない間に”また”学園が襲撃にあってね」
え…、襲撃？

「な…、ど、どうして？」
「どうしてってそりゃ、専用機持ちが六人に教師が一人、専用機が七機も学園を空けてたのよ？　絶好の襲撃日和じゃない」
襲撃日和って…。
「いや、それだったら臨海学校の時だって…」
「うん、その時はさ、ちゃんと織斑君の所在が解ってたでしょ？　だからスパイの方々は皆臨海学校を影から覗く方に集中してたからまだ良かったのよ。でも、今回は織斑君の所在が解らなくなったってのもあるし、行方不明の手引きをしたのがあの亡国機業（ファントムタスク）って事もあって他の犯罪組織が焦っちゃったみたいなの」
「焦った？」
「そ。まぁ、要するに学園なんていう、企業の人間に粉すればある程度は情報を盗み出せる環境に織斑君がいたんならともかく、完全に別の、しかも最王手に持ってかれたとなるともう男性用……かどうか以前に篠ノ之博士製ＩＳのデータが手に入らないかも知れないってね」
「いや、だったらまだ箒の《紅椿》が…」
《紅椿》だって立派な束さん製の……しかも第四世代機じゃん。
「確かに篠ノ之さんの《紅椿》も篠ノ之博士製ＩＳだけどね、第四世代である事以外はまだアレって常識の範囲でしょ？　でも織斑君の《白式》は……特に《白式・真打》は違うわ。明らかに既存の機体と比べても高性能過ぎる機体が、高性能なだけじゃなくて殆ど全てが未知の塊である様な機体がいなくなった。しかもそれが亡国機業（ファントムタスク）だなんて一大組織の手にあるっていう状況がマズかったのよ。…

…つまりね、今回織斑君達が居ない間に攻めてきた連中はこう思ったってワケ、『もう機体データが手に入らないのなら、せめて学園に残ったデータを根こそぎ』って」

「そんな無茶苦茶な…」

こっそりつまみ食い出来なくなるんだったら、せめて残りカスでもって事か？

……無茶苦茶過ぎるだろ、ソレ。

つ～か、なんでＩＳ絡みの連中ってこんな血の気の多いヤツばっかなんだ？

データなんだからハッキングとかすりゃあいいじゃん。

なんで毎回直接武力行使に出るのさ。

「……で、被害の方はどうなんですか？」

「一応、残りの専用機持ち組で頑張ったから、建物とか施設とかに対する物理的な被害以外は無かったし、データも無事よ。……でも」

「でも？」

「簪ちゃんがね…」

え……、簪さんがどうしたって？

「ま、まさか怪我を…」

「ううん、それについてはまぁ軽傷だったけど大丈夫よ。でも今は疲れて眠ってるわ」

……ホント、参ったな。

何が巻き込みたくないだよ、全く…。

今までずっと巻き込み続けてるじゃないか。

俺が居なくてもデータ欲しさに学園が襲撃に合うだなんて……だったらもう、下手にここから去るワケにもいかなくなったしなぁ……。

ホント、参った。

「生徒会長」

「ん？　何かしら？」

「詳しく聞かせて下さい。俺が居ない内に、何があったのか」

第８２話「不在の隙」（後書き）

次回は簪さんの回です

あと、解っているとはおもいますが……弾劾裁判は”まだ終わっていません”（笑）

第８３話「時の彼方に消え去る想い」（前書き）

お久しぶりです。
か～な～り、久しぶりの投稿ですね。
これも全部、期末試験って奴の仕業なんだ。

■没ネタ集　その２
ＩＳ　×　冥王計画ゼオライマー

パターン？

「絢爛舞ｔ「チャージなどさせるものか」」

メ　イ　オ　ウ

箒さん終了のお知らせｗｗｗ

パターン？

「消え去れ」
「させるかぁぁぁぁぁっ！！！」
「馬鹿な！？　ただの近接ブレードに……そうか！　零落白夜か！
だが……」

「くぅ……え、エネルギーが…」
「ははははははは、所詮貴様はその程度！」
「一夏ぁっ！！！」
「箒！？　……なっ、エネルギーが回復して…そうか、紅椿の！」
「あぁ、そうだ」
「これなら！」
「いくぞ、一夏！」
「あぁ、やれる！　俺達なら冥王を……ゼオライマーを倒せる！！」
「「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！」」
「馬鹿な、そんな馬鹿なぁぁぁぁぁぁっ！！！」

アレ？　なんか燃えるｗｗｗ

第８３話「時の彼方に消え去る想い」

「キャァァァァァッ！！！」

銀の甲冑を鎧う少女を容赦無く襲う幾重もの光条、その光条に焼かれた甲冑が上げた火花はまるで血飛沫の様に銀に映える。
膝から崩れ落ちる騎士の回りを飛び交うビットは死骸に群がる禿鷹であり、その様子を見下ろす青い機体はさながら死神と言ったところであろうか。

多方面からの同時襲撃の報せを受けて出撃した簪達居残り組の代表候補生の前に立ちはだかった襲撃犯達の中に見知った顔が一つ。
簪の前に現れた少女、その名を織斑マドカといった。

亡国機業（ファントムタスク）による真打・影打の二つの《白式》のデータの独占、それを恐れた他の犯罪組織による襲撃に便乗する形で襲撃を行ったマドカに与えられた任務、それは他の犯罪組織が恐れた通りの結果、つまり亡国機業（ファントムタスク）による二つの《白式》のデータの完全なる独占。
当初マドカはワザワザ自ら襲撃を仕掛けず、学園を襲撃してデータを盗み出した他の犯罪組織を襲ってデータを横取りする心積もりであったのだが、襲撃を仕掛けた犯罪組織の操縦者はことごとく学園に残った代表候補生に撃破され、身柄と共に機体を取り押さえられてしまった為に仕方なくマドカ自ら出向く事になったのだ。

ことごとく取り押さえられた、といっても別に他の犯罪組織の操縦者の実力がお粗末だったというワケではない。
他の犯罪組織と亡国機業（ファントムタスク）との組織の在り方の違いが問題だったのである。

あくまで何処の国にも属さず、各国から強奪した物資や機体を運用する組織、亡国機業（ファントムタスク）。

その国の過激派の集まりであり、ある意味で国がバックについている為に物資や機体そのものについてはいくらでも横流し等で調達し、そしてその事実を含めた作戦の隠蔽工作等の体制もであるその他の組織。

しかし最新鋭の、それも強力な機体は全て亡国機業（ファントムタスク）によって強奪されてしまっているが故に量産機しか、良くてそのカスタムタイプしか用意出来ない。

実力者なら量産機でも専用機と渡り合える場合は多々あるものの、亡国機業（ファントムタスク）の操縦者はその全てが高いレベルの実力者であり、機体も専用機だ。

そうなるといくら実力者とはいえ相手が実力者で専用機持ちとなると量産機のカスタムタイプ程度では歯が立たない。

なら新たに専用機を、と製作された機体は強奪されてしまうのでやはり歯が立たないのだ。

故に、マドカにとって先に襲撃を仕掛けた組織の操縦者三名を同時に相手取ってデータを強奪する事などたやすい事であった。

そもそも、相手は襲撃直後なのだ。

上手く戦闘を避けてデータを盗み出したとしても破壊活動を行う以上は弾薬を確実に消費する事になる。

それに、度重なる襲撃のせいで異様に迅速な対応をしてくるであろう学園側の事だ、戦闘はまず避けられまい。

だからマドカはただ戦闘で程よく消耗した相手を襲えばよかっただけだったのだ。

だがしかし、見積もりが甘かったのか、先に襲撃を仕掛けた別組織の操縦者は三名全員が居残った代表候補生によって撃破され、身柄を拘束されている。

その三名を撃破した代表候補生の内訳は二年が二人、三年が一人。

遠視モードで起動させたハイパーセンサーごしにその様子を見ていたマドカはぁぇそういえば、と思い出した。

二年一人と三年は専用機持ちだったか、と。

第二世代機故にノーマークだったが、流石は専用機といったところだったのだろう。

しかし、残りの二年一人の機体はあくまで量産機のカスタムタイプを専用機扱いしているだけのものだ。

フランス程の大改造が施されているのならまだしも、《打鉄》にミサイルランチャーを増設した程度の機体にあっさりと襲撃犯が敗北したのはマドカにとって意外だった。

意外、とは言ってもそれはあくまでマドカ基準の話であって、誰もが視界を埋め尽くす様なミサイルの雨に対応出来るワケでは無いのだが。

程よく弱ければ楽だ、とは思っていたのだが、まさか全員捕まる程度だったとはマドカにとって予想外だった。

だから仕方なく予定を変更し、自ら出向いたのだが、そこで簪に遭遇したのである。

そして、戦闘が始まった。

確かに、簪は代表候補生に相応しい実力を持っているし、彼女の専用機の《打鉄弐式》も最新鋭の専用機だけあってかなりの高性能機である。

だが、それだけだった。

マドカにとっては、それだけだったのだ。

高速で飛び交うビット、《エネルギーアンブレラ》から放たれるビーム。

イギリスの代表候補生の様に、そうしなければ扱えなかったからライフルを構えなかったのではなく、そうする必要が無いから腕組みをしたまま上空からビットに翻弄される簪を見下ろすマドカ。

どれかを狙えば違うビットから放たれるビームに焼かれる簪。

そんな嬲るかの様な一方的な蹂躙にも飽きたのか、主の命を受け一斉に砲門を簪に向けたビットから離れたビームの一斉射を受け、簪は血飛沫の様に火花を上げながら膝から崩れ落ちた。

これが、冒頭までの主な出来事とその背景である。

「一夏の真似事をした割りには……いや、まぁこんなものか」

そもそも《白式・真打》と《打鉄弐式》とでは性能が違い過ぎたか、とマドカが呟く。

まず、製作者の技術力からして違い過ぎた。

片や世界で唯一コアを製造可能で第四（《紅椿》）、第五（《白式・影打》）、第六（《白式・真打》）と最先端をつっ走る創始者、篠ノ之束。

そしてもう片方はほぼ独力で組み直したとはいえ既に商品として出

来上がっていた《打鉄》を改造しただけの更識簪。
そのどちらが凄いか、と聞かれれば間違いなく篠ノ之束に軍配が上がるだろう。
しかし、決して簪の技術力が低いというワケでは無い。
無いのだが……似た系統の、それも圧倒的高性能な機体との交戦経験のある者から見て《打鉄弐式》は《白式・真打》程の脅威になりうるか、と聞かれれば答えは否である。

「予備パーツで組み直してすぐの出撃で少々不安だったが……」

そう言いながら調子を確かめる様に握り拳を作っては開いてを繰り返す。
本体も、《エネルギーアンブレラ》の調子も良好。
後は…、

「コイツの調子を……と言ってもこのザマじゃ狙うまでもないか」

呼出し（コール）し右手に出現させた《スターブレイカー》を構えながらまた呟く。
銃口を向けられた簪は未だ立ち上がる事が出来ずに倒れ伏したままで、時折痙攣するかの様に指が動くだけだった。

「ん？」

注意深く見ると簪の背に量子の揺らぎが現れ、やがて刃の着いた翼がその姿を現す。
翼の出現と共に徐々に浮かび上がる簪の姿はまるで幽鬼の様。
手足はだらりと力無く垂れ下がり、肩で息をするだけ。
それでいてまだ諦めていないのか、顔だけはしっかりとマドカの方を向いており、バイザーの奥に輝く真紅の眼が睨んでいた。

「……何故、そうまでして立ち上がる？」
「……」
マドカの問いに簪は答えなかった。
否、答えなかったのではなく答えられなかったのかもしれない。
「お前……、何がそうもお前をつき動かすのかは知らんが、もう止めろ。”耐え過ぎる”と本当に死んでしまうぞ」
「……」
やはり簪は答えない。
「おい、聞いて……まさか、聞こえていないのか？」
「……」
「……まぁ、いい。もう寝てろ」
《スターブレイカー》から放たれたビームが簪の頭部に直撃し、ふらっと仰向けに倒れる様に、倒れる勢いのまま頭から地面に向かって墜落していった。
「――――――あ…」
口から漏れた音は、果たして言葉だったのか。
或は、ただの呻き声だったのか。
マドカには判別がつかなかった。
……声を発した簪でさえ。
落ちる、堕ちる、墜ちる。

真っ逆さまに、心が、身体が”おちて”行く。
絶望的なまでの実力差に心は折れかかり、蓄積したダメージに身体は悲鳴を上げている。

心も身体も、機体すらボロボロで、再び飛び上がる気力も体力も、残ってはいなかった。

何故、ボロボロのまま飛び上がったのか。
ふと、墜落しながらそんな事を考える。
再び飛び上がる気力なんて無いクセに、何故か思考だけは不気味な程クリアだ。

何故、何故と考える内に思い浮かんだのは思い人の困り顔。
あの時も浮かべたその表情は今は自分ではなく他の娘達に向けられてはいるけれど、それでいいと思った。
彼がその表情を浮かべるのは表情通り困った時だけ。
一種模範的と言ってもいい程思った事が顔に出る彼は、あの時も面倒臭そうに、しかし放っておくのも自身の精神衛生上良くないからというのがありありと浮かんだその表情を自分に向けて、手を差し延べてくれた。
更識として生きていくのが嫌で、自分でも驚く程衝動的に家を飛び出したまでは良かったものの、結局どうすればいいのか解らず途方に暮れていた自分に声を掛けてくれた彼。
ただ傍にいてくれただけで、特別何かしてくれたワケでは無かったけれど、それだけの事がどれだけ心強かった事か。

（あぁ、私は……）

あの時から、ずっと…。

一時間もしない内に迎えの者が来て、そこで別れたきりだった。
だから、多分彼は自分の事なんか覚えていないだろう。
無理も無いと思う。
その時は単にその近辺に住んでいた同年代の子供かと思っていたのだが、彼はただの子供ではなかった。
いや、彼自身は何処にでもいる様な子供だったのだろうが、彼の姉はかの最強のＩＳ操縦者、織斑千冬である。
その弟として生まれた彼は姉を利用しようとする輩に日々追われる生活を送る身だった。
少なくとも週に一度は誘拐されそうになる彼が、一々自分との邂逅など覚えているハズも無い。

やがて時は流れ、彼との再開を果たしたのだが、やはり彼は自分の事など覚えていなかった。
その代わりというべきか、相変わらずというべきか、また何やら厄介事に巻き込まれているらしい。
女性にしか扱えないハズのＩＳを何故か彼だけが扱えたりだとか、そのせいでＩＳ学園に強制入学させられ、女だらけの中で肩身の狭い思いをしているだとか、
しかも彼に宛がわれた機体は”あの”篠ノ之博士のお手製のトンデモない機体が……それも二機もあったりだとか、
”当事者”になった分、厄介事のレベルがとんでもない事になってしまっているなと思ったのを、今でもよく覚えている。

彼がどうしたいのか、これからどうなるのか、自分には解らない。
きっと彼だってそうだ。

……でも、それでも。

結局自分がどうしたいのかはまだ解らない。
ただ彼に思い出して欲しかったのか、
自分を見て欲しかっただけなのか、
それともただ彼に恩を返したいだけなのか、
或は、その全てなのか、まだ解らなかった。

でも、彼の為に何かしたいと……差し当たって彼の居場所を守りたいと思ったのは事実である。

ＩＳ学園を守る事が彼の居場所を守る事に繋がるのかは自分でも解らなかったが、取り敢えず今の彼の帰る場所は此処のハズだ。

卒業してしまえば居場所なんて変わってしまうだろうけど、それでもよかった。
ただでさえ厄介事に恵まれている彼の負担にならない様に、叶うのなら彼の負担のほんの一部でも背負える様になりたかった。

（だから、私は……）

こんなにもボロボロになってまで、立ち向かったのではなかったのか？

そう思うと、不思議と折れ掛かった心は決意という名の芯を再び通され強靭さを増して……、しかしそれだけだった。
いくら心に再び火が燈ろうとも、身体が回復するワケではない。
決意を行動に現すには、些か以上にダメージを受け過ぎた。

（ごめん、織斑君……私……）

悔しさで滲み出た涙で視界は朧げで。
それでも、次の瞬間、頭から地面に墜落する事だけは何となく解った。

『ハイパークロックアップ』

地面に激突する直前に、そんな音声が聞こえた様な気がしたが、きっと気のせいなのだろう。
だって私は”地面に墜落すらしていない”のだから。

「え…」
「なっ……」

何の前触れもなく、簪とマドカの間に割って入る様に現れた黒。
突然の介入に呆気に取られていた二人が正気を取り戻したのは、黒い甲冑に魂を宿した『男』によって全て撃ち落とされたビットが地面に突き刺さった音を聞いた直後の事だった。

抱いた決意は逆巻かれた時と共に消え去り、再び流れ出した時は同じ流れを歩まない。

黒、それは全てを塗り潰し、〝無かった事〟にしてしまう、そんな色。

第８３話「時の彼方に消え去る想い」（後書き）

はてさて、次回の投稿はいつ出来るのやら……

第８４話「嵐の前の…」（前書き）

母「誕生日おめでとう」
自「は？……あぁ、うん」

……どうやら私、本日で２２歳になるらしいですよ？

■没ネタ集　その３
オリジナルじゃなくて既存のライダーとＩＳのクロスオーバー編

３－１　ＩＳ　×　仮面ライダークウガ

色的な意味で
・クウガ一夏（グローイングフォーム縛り）の無理ゲールート
・ダグバ一夏の虐☆殺ルート

一夏が死ぬか、周りが死ぬか……

３－２　ＩＳ　×　仮面ライダーアギト

アギトはまぁ、ともかく…

・Ｇ３＝ＩＳにしたらどちらを基準にするかで性能差が…

・ギルス役をヒロインにしたら変身の度に急激な老化とか酷すぎる

展開に…

３－３　ＩＳ　×　仮面ライダー龍騎

ヒロイン達が一夏を手に入れる為にバトルロイヤルを……って、いつもの事か

３－４　ＩＳ　×　仮面ライダー５５５

多分これが配役が一番難しい気がする
とりあえずカイザ役にはウェットティッシュで手を拭くシーンを……

３－５　ＩＳ　×　仮面ライダー剣

とりあえず箒はギャレンで固定。姉への不信感から性能を発揮出来ずボロ負けして

「ワダジノガラダバボドボドダ！」

とか言って欲しい

後書きに続く

第８４話「嵐の前の…」

「え……」

「なっ！？　……《黒式》だと？　一夏……いや、違う！」

突然介入した《黒式》に驚く簪とマドカ。

無理もない、これからトドメを刺される側と刺す側だった彼女らの間に割って入る様に現れた介入者、しかもその介入者が二人にとって見覚えのある機体であるというのなら、尚更。

しかも、確認される限り織斑一夏と篠ノ之束の二名しか使用した事の無いハズの機体であるのにも関わらず、そのどちらが装着した場合と比べても体格が違うのだ。

表向き《黒式》は《白式・真打》の予備機ではあるが、その存在の本義は別にある。

インフィニット・ストライカーである《白式・真打》をインフィニット・ストラトスと思い込ませる為だけの存在であり、《白式・真打》と同等の戦闘能力を付与されたのもあくまで表向きの理由の予備機としての役割をさせる為のオマケに過ぎない。

《白式・真打》をインフィニット・ストラトスとして再現しようとしたという意味では寧ろ《打鉄弐式》の方が技術的には近しく、製作者違いの兄弟機とも言えるかもしれないが。

因みに、《黒式》も《打鉄弐式》も《白式・真打》……つまり第六世代機ではなく通常のインフィニット・ストラトスである為、ワザワザ《セイリングジャンプ》や《カッターウイング》を使用しなくとも”飛べる”。

ワザワザそういったプロセスを経て飛行するのはそれぞれが予備機

である以上本命と似通らせる必要があっただとか、単なる趣味だとか、そういった事情があったからであった。
勿論、《黒式》と《打鉄弐式》は性能差の違いこそあれど、どちらもインフィニット・ストラトス故に他の機体同様飛行は可能ではあるが、別にインフィニット・ストライカーが飛行不可能というワケでは無い。

《白式・真打》自体、元来は飛行が不可能だったワケではないのだ。
《大切断》の様に、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）の《質量操作》を利用してそういった機関を造ってしまえば飛行出来る為に当初は飛行機関を設けられていなかったのが一つと、《質量操作》の欠点と言うべきか、”殆ど搭乗者の創造通りの物を造る”という特性があるこの唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を、たいした学の無い者が使うとどうなるのかという大きな問題がこの能力にはあった。

学の無い、つまり現実という名の不可能を知らないが故に創造に何の枷も無く本当に自由な想像を操縦者が行い、機体もその想像を素にあらゆる物を創造するであろう。
だが、その想像を素に創造された飛行機関を以って実際に飛行すればどうなるのか。
ただ飛ぶ事を、より速く飛ぶ事以外、何も考えずに想像し、創造された機関で飛行すればどうなるのか。

そんなもので飛行すれば当然の如く現実が想像を砕きに来るだろう。
衝撃波という形で。

つまり、単純に飛行するといっても想像を実現する為にそれらの物

理法則をどうやってクリアするかまで想像、或は思考出来て始めてこの能力は真価を発揮するのだ。

それ故に篠ノ之束は自身が予め用意した型があるもの以外は造れない様に、能力に制限を掛けた。

真の搭乗者である篠ノ之束以外使い熟せないその能力に枷を。

搭乗者たる織斑一夏を自身の想像で破滅させない為に。

「……」

「貴様……」

『……』

《白式・真打》がそんな機体であった為に、《黒式》は計画要員以外には《白式・真打》をインフィニット・ストラトスと誤認させるという任務と、計画要員たる織斑一夏に現実を教えるという任務もあった。

計画通りなら、《白式・両儀》への封印解除の後に《黒式》を以っておいおい現実を教えていくという予定ではあったのだが、現在宇宙で繰り広げられている戦いがそうである様に、ヤツらの襲撃も想定より規模が大きいワケではなかったが、その規模を繰り出してくるまでの想定期間よりも速くその規模を投入して来た為に、計画を繰り上げたのだ。

本格的な襲撃を考えればまだまだ序の口ではあったのだが、この規模を投入するのにはまだまだ時間が掛かる予定だった。

故に計画は繰り上げられ、《ブルー・ティアーズ》、《甲龍》、《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》、《シュヴァルツェア・レーゲン》の……それらの操縦者、つまりは織斑一夏の味方であろう人物と《白式・両儀》とを引き合わせ、学園に残った味方……簪を庇う様に簪とマドカの間に割って入ったのだ。

いずれ彼女らと同じく、予備役として計画に関わらせる為に。

だが、そういった事情を知らない計画要員外がこの事態を見ても、何故今《黒式》が現れたのかなど理解出来るハズがない。ただただ混乱を招くばかりで正解に辿り着く事など出来なかった。

操縦者が織斑一夏だから更識簪を救出に来たのか？

否、まだ彼は宇宙での戦いの真っ最中である。最高速度が亜光速にまで達する《白式・両儀》であったのなら今から向かっても瞬時に学園まで辿り付けるだろうが、前述の通り彼は現在戦闘中であり、しかも相手が彼の本来の敵であるというのならどちらかが斃れるまでは帰っては来ないだろう。助けを呼べば帰って来なくもないかもしれないが居場所の判らない彼に簪が助けを求める事など不可能である。

兄弟機のよしみ？

否、兄弟機というのは飽くまでコンセプトが似通っているという理由で為された例え話であり、そもそもコアは全て篠ノ之束製なのだからコアを搭載している以上全てが兄弟機であり、ワザワザ《打鉄弐式》のピンチにだけ駆け付けるにはあまりに理由として弱過ぎる。

そもそも”何故《黒式》が”、というのも問題だが、それを知るには”誰が《黒式》を”、という問題を解決する必要がある。

操縦者が織斑一夏であったのなら前述通り簪を助ける為という理由で通っただろうし、篠ノ之束であるのならそれこそ誰にも理由なん

て解りはしないだろう。

しかし、だ。

今彼女らの目の前にいる《黒式》の操縦者は明らかに織斑一夏でも篠ノ之束でも無い第三者。

どんなＩＳも結局は四肢を延長する様なデザインである以上、同一機種でも操縦者が異なれば差が出るのは当たり前の事であり、同じ《打鉄》を装着したとしても操縦者の背の高さが異なれば全高は異なる。

《黒式》もその例に漏れず、今二人の間にいる機体の全高は操縦者が織斑一夏や篠ノ之束だった場合よりも高い。

それほど顕著ではないにしろ、簪やマドカが判るぐらいには高さが異なっていた。

「……お前、まさか」

二人目の男性ＩＳ操縦者か？　と、最後まで言葉が出なかった。

途中まで言いかけて、もしそうだった場合を考えると恐ろしくなったのである。

今までマドカは……否、簪も含めた全てのＩＳに関わる人材は織斑一夏が男性なのにＩＳを操縦出来るのは彼の姉が開発者の親友である為、そのよしみで操縦出来るのだろうと思っていた。

言い方は悪いが、親の七光ならぬ姉の七光である。

だが…、

そもそも篠ノ之束はそんな事を明言していただろうか？

彼らの交遊関係を調査した自分達の勝手な思い込みでは無かったのだろうか？

状況が状況とはいえ、自分達が勝手にした勘違いを強硬にし過ぎてはいなかったか？

親友の弟たる織斑一夏に譲渡された《白式・真打》と《白式・影打》の二機から成る《白式・両儀》、そして貸与と返還という過程を経て彼女らの目の前に立つ《黒式》。
自身の妹たる篠ノ之箒に譲渡された《紅椿》。

世界中が漸く第三世代機の開発を軌道に乗せた中だからこそ、これらの機体の異常性は尚更際立った。

第六世代機、つまりはインフィニット・ストラトスですらないインフィニット・ストライカーたる《白式・両儀》。

同じく第六世代機で《白式・両儀》のコアユニットに相当する《白式・真打》。

インフィニット・ストラトスとしての最終到達点たる第五世代機にして《白式・両儀》を構成する為の一種のオートクチュール、そして《白騎士》というもう一つの顔を持つ《白式・影打》。

唯一の第四世代機であり、しかも製作者が妹の誕生日プレゼントとして製作した《紅椿》。

そして最後に、インフィニット・ストラトスでありながらインフィニット・ストライカーである《白式・真打》の予備機としての役割の為にインフィニット・ストライカー基準の戦闘能力を付与された

第三世代機、《黒式》。

これらの特別機の性能に魅入られ、”二人目”が現れる可能性を思考する事をいつの間にか止めていなかったか？

「お、お前……」

『……』

マドカを前に、《黒式》はただ立っているだけだ。

動揺するその様を嘲る事すらせず、ただ風景でもみるかの様な、或は視界にマドカがたまたまいただけで、”視て”すらいないのかもしれない。

『……』

「くっ…」

たった一歩、……そう、たった一歩《黒式》が足を前に踏み出しただけなのに、マドカが大きく後退る。

否、飛びのいた。

『……何をそう恐れる？』

「「！！？」」

ここにきて始めて《黒式》が発した言葉、その内容事態にたいした意味は無い。

少なくとも《黒式》を挟む様に立っている二人にとっては意味が無かった。

重要なのは発せられた声そのもの。

「…な、お、お前……いや、有り得ない！　だって一夏は…！！」
『フフフ…』

マドカとて、織斑一夏が現在宇宙に上がっている事までは知らない。だが、仲間からの連絡が無い以上、織斑一夏は組織が裏で手を引いているホテルに大人しく捕まっているハズであり、どの道織斑一夏がここに来れるハズが無いのだ。

なら、目の前の存在は何者なのか？

「くっ……」
『ハハハハハハ！』

本当に織斑一夏が来たのか、或は第二の男性ＩＳ操縦者なのか、判らない。
本当に織斑一夏であったのなら、操縦者の実力はともかく《白式・真打》程で無いにしろ機体性能が未知数な《黒式》は脅威であり、仮に第二の男性ＩＳ操縦者であったのなら、前者以上の脅威だ。
突然の介入と同時に《エネルギー・アンブレラ》を全機撃ち落とすその実力とそれに応える《黒式》の性能、いくらマドカが実力者とはいえそれらを相手取るのは骨が折れる……いや、正直なところ勝ち目など無いだろう。

それを悟ったからこそ怯えた。

果たして、逃げ切れる……否、逃がしてもらえるのだろうか、と。

そんなマドカを嘲笑うかの様に……実際に嘲笑いながらゆっくりと一歩、また一歩と近付く《黒式》。

「くっ……このおぉぉぉぉっ！！！」

殺気でもなんでもない、大き過ぎるその気配にあてられて恐慌状態に陥ったマドカが構えた《スターブレイカー》から放たれたビームが《黒式》を…、

「やっ……なっ！！？」

…《黒式》が残した残像を貫いた。

「なっ……馬鹿な！！？　いくら何でも…」

早過ぎる。

ベルトの横に装着された《ハイパーゼクター》すら使わず、ただ”己の脚力”のみで残像を作りながらビームを回避して見せたその早さ。

明らかに織斑一夏には不可能な……というか、真っ当な人類には不可能な芸当である。

織斑千冬クラスともなればこれに近い事も不可能では無いが、流石にここまでの早さを脚力だけで出す事など出来まい。

『……何処を見ている』

「ひっ…！？」

ましてや、音も無く背後に回り込むなどといった芸当は。

「な、な……」

為り振り構わず飛びのき、向き直るマドカの顔には怯えが強く浮き

出ていた。
ただ気配が大き過ぎるだけで、醸し出す雰囲気にも、発せられた言葉にも殺気は微塵も感じ無い。
だからこそ目の前の存在が恐ろしい。
《黒式》は……《黒式》の操縦者はなんて事ないかの様に、……そう、歩行中の人間が知らぬ間に蟻を踏み潰してしまうかの様な何気ない仕種で蟻（自分）を殺せてしまうという事実がどうしようもなく恐ろしかった。

「お、お前は一体……」
『…お前がそれを知る事に、何か意味があるのか？』
「ひっ…」
《黒式》の搭乗者にそのつもりがあったのかどうなのか、それは搭乗者自身にしか解らない事であるが、マドカにとっては「どうせ死ぬのだから、知ったところで意味が無い」と言われている様なものだ。
特に、恐慌状態に陥っている今なら、尚更。
ブワッ、と《黒式》が大きく右手を振りかぶり、そして…

「ひっ……え？」

殴り飛ばすのを通り越して頭が砕け散る様な速度で繰り出したパンチをマドカの額の数ミリ手前で寸止めし、

「アイタッ……？　？？」

代わりに、ピンッと人差し指で額を弾いた。

『失せろ。……興が削がれた』

「くっ……」

つまらなそうにそう言われ、マドカはすごすごと去って行った。
飛び去るマドカを見送り、《黒式》の通常モードの視覚では見えなくなったところで視線を切って、簪に向き直る。

『さてと…』
「あ、あの……」
『ん？』
「その、助けていただいてありがとうございま、す…」

実力差を見せ付ける場面を見せ付けられたせいか、ガチガチに緊張した様子で簪が頭を下げた。
殺気が向けられていないとはいえ、マドカ同様その圧倒的な気配、いわば存在感にあてられたせいか、その声も普段の三割増しで弱々しい。

『……別に、俺が割って入らなくともアイツはお前を殺しはしなかったろうさ』
「？」

半殺しぐらいにはしただろうが、と言いながらまた”別の方向に向き直りながら”言葉を続ける。

『そう、俺が用があるのはアイツじゃない。お前だ』
「え……！？　あ、貴女は！！？」

そう言われ、観念したかの様に現れたのは、妙齢の女性。
日本代表候補生最年長にて最強、風間想その人だった。

「……流石、と言うべきなのかしらね？　欲を言えばあのままぶち殺すか、最低でも捕縛はして欲しかったのだけれど？」
『お仲間に対して随分な言いようじゃないか』
「……なんの事かしら？」
『亡国機業（ファントム・タスク）の工作員が一人、ストーム……お前の事だろう？』
「えっ……」

「…なるほど、そこまでネタが割れてるワケか」
正体を曝されても尚、特に動揺した様子もなく会話を続けるストームではあったが、正体どころか殺気を隠そうともせず問うた。
「…だったら、どうする？」
『無論、打ち砕く』

”簪を殺した”のは、マドカではなくお前なのだから。

第８４話「嵐の前の…」（後書き）

ここで亡国機業（ファントム・タスク）に新メンバー……まぁ、噛ませだろうけど

■没ネタ集　その３

オリジナルじゃなくて既存のライダーとＩＳのクロスオーバー編

３－６　ＩＳ　×　仮面ライダー響鬼

公式に一夏と男友達とでバンド組んだけど一向に上達しなかったとある時点で既に……

３－７　ＩＳ　×　仮面ライダーカブト

一夏「千冬姉が言っていた……」

３－８　ＩＳ　×　仮面ライダー電王

毎回イマジンを追い掛けて過去へ→ヒロインズの黒歴史暴露大会！

３－９　ＩＳ　×　仮面ライダーキバ

他はまぁともかく、音也は絶対外したく無いけど当て嵌まるＩＳキャラが……
あ、原作で一夏に両親がいないのって父親が…

３－１０　ＩＳ　×　仮面ライダーディケイド

ヒロインズ達のＩＳに変身……って、もうやってるわ！

３－１１　ＩＳ　×　仮面ライダーＷ

毎回誰が一夏と変身するかで揉めるんですね、解ります

３－１２　ＩＳ　×　仮面ライダーＯＯＯ

困った時のプトティラ無双
あと、零落白夜も白式（白騎士）と暮桜の情報交換の結果じゃなくて恐竜系メダルの消滅欲（？）の影響で発動
エネルギーどころか存在ごと消しに掛かる凶悪仕様に…

第８５話「敗者の剣」（前書き）

…多分、今月最後の更新になりそうｏｒｚ

■没ネタ集　その４

ＩＳ　×　処女はお姉さまに恋してる

おとボクとクロスさせるのが没ったんじゃなくて、原作２刊後書きで企画の段階では『女装美少年』でやるつもりだったとのコメントから思い付いたんですが……

じゃあ、この没企画を二次創作で……って、それじゃあ単にＩＳの出て来るおとボクじゃねぇか！

と、なりまして…

書こうにも肝心のおとボクをあまり知らないので、まぁ…没というより保留ってとこですかね

すぐに書けても今まで前書きで紹介してなかった没ネタみたいに単にすりあわせるだけってのも勿体ないっていうか、書いてもネタとして気付かれないぐらい薄くなりそうですし

第８５話「敗者の剣」

「さてと…、正直、私としては別に貴方が何処の誰だろうが……織斑一夏だろうが二人目の男性操縦者だろうがどうだっていいのよ」

『ほう…、もしかしたら女かもしれんぞ？』

「嘘おっしゃい。装甲で体格はごまかせても動作がまるっきり男のソレじゃない」

『なるほど、それは盲点だったか』

まるで世間話でもするかの様な気軽さで会話を交わす二人。

しかし表情こそ朗らかではあるものの、風間想の放つ殺気は尋常ではない密度で場を圧迫している。

少なくとも、《黒式》の……『彼』の後ろに立つ簪を硬直させる程度には。

『…で、いい加減ＩＳを起動させたらどうだ？　風間想　２（ピー）歳』

「ちょっ…」

しかし、殺気を向けられた『彼』はなんら堪えた様子もなく、寧ろ相手をおちょくる余裕すらあった。

『あまり俺を待たせるな。風間想　独身　２（ピー）歳』

「あ、あ、あ、アンタね！」

『何度も言わせるな、さっさとＩＳを起動させろ。風間想　独身　２（ピー）歳　バツイチ』

「ぐはぁっ……」

「……（む、惨い…）」

簪の知る風間想といえば日本の代表候補生の中でも最年長のベテランであり、代表候補生の中では最強に位置する女性である。
流石にかつての代表だった織斑千冬程でないにしろ確実にヴァルキリークラスの実力を有しているのは確かで、一時期は千冬の後任として日本代表すら勤めていた事もある女傑だ。
ただ、モンド・グロッソに年齢制限は無いとはいえ本人がそう決めたのか、はてまた上の指示なのかは知らぬが年齢が年齢という事もあり、若い世代にその座を譲る意味で候補生に降格していたのだが…。

『クックックックッ…』
「む～～」
「……（え、誰？）」

簪の知る風間想といえばそのバトルスタイル同様かなり苛烈な性格をしており、その性格が祟って去年離婚したばかりなのだが……とても今目の前で涙目で唸っている人物と”自分の中の風間想”像とが一致しない。

『ホラ、さっさとしたらどうだ。最近体重が…「個人情報ぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」』
「……（うわぁ…）」

ましてや、もう涙目を通り越して半泣きになった人物とが一致などするハズなど無く、簪は”自分の中の風間想”像がガラガラと音を立てて崩れていくのを感じた。

「こんちくしょぉぉぉぉぉぉっ！！！」

咆哮と共に一瞬光が風間想の体を包み、光の中から銀の甲冑を纏った状態で飛び出した風間想は近接ブレードを呼び出し（コール）して飛び出す勢いのまま『彼』に切り掛かった。

『フッ…』

だが、その斬撃はあっさりとかわされ、逆に瞬時にガンモードに組み替えられた《デンガッシャー》から放たれた光線を喰らってしまう。

「くぅ…」

『…ほぅ、今のを防ぐか』

「元代表を舐めんじゃないわよっ」

しかし風間も流石は元代表というべきか、とっさにブレードで光線をガードし、直ぐさま二撃目を放った。

『…歳のせいで引退した、な』

「キィィィィィィッ！！」

……相変わらず、おちょくられてはいるが。

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

『ふっ…』

「こんのおぉぉぉぉっ！！！」

『くっ……なんてな！』

振り下ろされたブレードをソードモードに組み替えた《デンガッシ

ャー》で受け止めた《黒式》は暫く鍔ぜり合いを続けたが、急に《デンガッシャー》をバラバラに分解して、風間のバランスを崩させた。

『ハッ』

「なっ！！？　……きゃあ！？」

前のめりに倒れそうになった風間を《黒式》が折り畳まれた状態から《カマキリソード》を展開し、展開する勢いを利用した斬撃を放って、更に吹き飛んだところに今度はロッドモードに組み替えられた《デンガッシャー》が投擲される。

「くあっ…『まだ終わりじゃないぞ』　なっ！！？」

辛うじてブレードで《デンガッシャー》を弾いたと同時に風間の眼前に《黒式》が現れ、そして…。

「ぐぅ……がはぁっ！！？」

目が《黒式》の存在を認識する前に、鳩尾に鈍痛が走っていた。

（そんなっ…、この私が目で追えないっていうの！！？）

殴った勢いで地面に叩き着けられ、今度は背中に激痛が走る。

「（！！？…まずっ）…なっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

いつの間に拾ったのか、今度はアックスモードに組み替えられた《デンガッシャー》が振り下ろされ、咄嗟に構えたブレードごと風間を切り裂いた。

ブレードは粉々に砕け、傷こそ負ってはいないものの、激痛とともに確かにダメージを負った証拠としてシールドエネルギーが減少する。

（くっ……、そんな!!?　今ので三割ももっていかれたなんて!?）

一瞬驚愕の表情を浮かべるも、すぐに気を取り直しながら距離を取り、新たにブレードを呼び出し（コール）し、構えた。

風間の使っている機体は《打鉄弐式》の開発過程で生まれた《打鉄》のカスタム機の一種であり、多種多様なブレードでの近接戦闘を主眼に置かれた機体で、以前クラス代表トーナメントで一夏と争った三年の橘香織の機体もまた同じ《打鉄弐式》開発過程で生まれた機体の一種であり、こちらはミサイルでの面制圧を主眼に置いた機体であった。

簪の機体も搭乗者の趣味で魔改造される前は橘香織の機体と同型の機体だったのだが、何の因果か最終的に簪が魔改造した仮面ライダー型の……《白式・真打》を模した機体が正式採用され、《打鉄弐式》の名を関する事となったという複雑な経緯もあり、現在は採用されなかったそれぞれを《打鉄・ブレードカスタム》、《打鉄・ヘビーアームドカスタム》と日本では呼称している。

「流石は篠ノ之博士製ってとこかしら?……でも、私も…、私の《打鉄・剣》もこの程度だと思わない事ね!」

開発競争に破れ、そのまま風間の手元に残ったこの機体は、搭乗者

によって《打鉄・剣》という愛称を着けられて完全に風間用に鍛え直され生まれ変わり、それ以来ずっと風間の剣として在り続けた。

量子変換され、全身から生えた剣は風間の苛烈さそのもの。

ヘッドセットから延びる剣はクワガタの顎を模し、

背中からはブレードにスラスターを仕込んだブレードスラスターが六機生え、

前腕からは《白式・真打》の《（スーパー）大切断》や《黒式》の《ガタキリバソード》の様に左右にそれぞれ刃が二枚ずつ並び、

膨当てはそれ自体が巨大な刃で出来ていた。

操縦者の在り方を体言し、その為にそれ以外を廃した異形。

故に、剣（つるぎ）。

『ほぅ…、また随分と思い切った事をしたな』

「えぇ、そうね…」

漸く本来の調子を取り戻したのか幾分か冷静になって風間は答え、剣を構えた。

その独特の構えは左右に握った二刀だけではなく、全身の剣を一つも飾りとせず使い熟す為に自己流で編み出したものであり、”全て同時に”防がなければ、必ず斬られる。

そんな構えだ。

今の風間にとって四肢は…否、五体全てが”腕”であり、たかが一

本二本止めたところで残りの全てを以って彼女は相手を切り裂くだろう。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
『ちぃっ』

ここにきて初めて『彼』の声色に焦りが浮かぶ。
無理も無い。
相手は現在日本に所属する操縦者の中でも最古参であり、彼女の方が年上だがあの織斑千冬と同期であり、千冬が現役を退いた後は一時期代わりに日本代表を勤めていた程の猛者なのだから。

「ほらほらっ、さっきまでの威勢はどうしたのよ！」
『ぐおっ…』

紙一重でかわし、時には受け流して致命傷こそ受けてはいないものの、微かに、そう、ほんの微かではあるものの『彼』にダメージを負わせるその実力は確かなもので、

「はっ」
『くっ…』

誰の目にも……少なくとも、その様子を見ている事しか出来ない簪の目には『彼』が苦戦を強いられている様に見えた。

「せぇぇぇいっ！！」
『くぅっ……フッ、フフフ、ハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！』

なのに、何故『彼』は嗤うのか。

何を嗤っているのか。

「な…、何が可笑しいっていうのよ」

『ハハハハハ！……っと、すまんな。まさかお前がここまでやるとは思ってもみなかった』

「……」

『彼』が何について嗤っているのかは解らなかったが、風間も何となく自分が嗤われているワケでは無い事だけは感じ取ったのか、怪訝な表情で《黒式》を見つめる。

『お前を侮っていた、その非礼を詫びよう。俺の、本気を以って…』

「なっ…」

「ひっ…」

そう、『彼』は風間を嗤っていたのではなく、自分自身の見積もりの甘さを嗤っていたのだ。

本気で詫びる（倒す）、その宣言と共に周囲に濃密な、それでいて窒息してしまうほど濃厚な殺気が溢れる。

質量があるのではないかと錯覚してしまう程の殺気にあてられ、簪は腰を抜かしてその場にへたり込んでしまい、風間も全く動けなくなってしまっていた。

（な…、なんなのよ…。こんな殺気、人間に出せるハズ…）

そう口にしたつもりが、ただ口だけがぱくぱくと動くだけで、あまりの殺気に声を発する事すら儘ならない。

風間の口にしようとした言葉はある意味正しい。
人の器を失った……否、世界を基準とするのなら『彼』はまだ死んではいないのだが、少なくとも『彼』の主観時間を基準とするのなら、『彼』が人の器を失って久しい。

細胞の一つすら無い機械の器に収まる今の『彼』を、篠ノ之束以外の誰が人間と認識出来ようか。

仮に、『彼』に生身の身体があったとして、”外れる”事を受け入れなかった彼とは違い、始めからそうである事が当たり前だと、そう思って生きていた『彼』を誰が人間だと認識出来るのだろうか。

人の子として生まれ、そして逸脱した、正しく人外たる『彼』を、誰が。

『……安心しろ。痛みを感じる時間すら与えない』

そう言って、『彼』はベルトの横に手を延ばし…。

『おい、おい…』
「……！」
『…やっと気付いたか』
「あ、その……」
『途中から気絶していたんだが…』
「あ」
『…どうやら、思い出した様だな』

あの殺気にあてられてへたり込んだ簪は数秒も持たずに気を失い、
『彼』がどうやって風間を倒したのかは見ていない。
仮に見ていたとして、目で追えたのかは甚だ疑問なのだが。

『…さて、俺はそろそろ帰るとするよ。そこに転がってるヤツはお前は適当に処理しといてくれ』
「あ、あの…」
『貴方は、一体……どうして織斑君の声を…』

立ち上がり、用件だけ伝えて立ち去ろうとした『彼』を引き止め、簪は疑問を口にする。

『…どうして、か』
「……」
『俺も……いや、”俺が”織斑一夏だからだ』
「それは、どういう…」

目の前の男が何を言っているのか、簪には理解出来なかった。
何となくではあるが、少なくとも自分の知る織斑一夏と『彼』とが別の存在である事は解る。
だが、目の前の『彼』は確かに自身を織斑一夏と、自分こそが織斑一夏だと、そう言った。

『……そのうち解るさ、そのうちな』
「あ、あの…」
『あぁ、監視カメラの映像は既に編集されているから何を言っても無駄だ。ま、せいぜいその日が来るまで悩むといい』
「あ…」
そう言って、『彼』は一度も振り返らずに飛び去って行った。

「なんていうか…」
百聞は一見にしかず、ということで見せられた監視カメラの映像を見た織斑一夏とその取り巻きのいつものメンバーは皆一様に複雑な表情を浮かべていた。

確かに、《黒式》が介入したおかげで簪はたいした怪我も無く、無事だった。
だが、あの気の弱い簪が目の前で”淡々と”、”機械的な動作で”、”無言で”敵を……マドカとその後に現れた元代表の風間がまるで作業の様に処刑…もとい、倒されていく様を見せつけられるのは、中々精神的にくるものがあったのではないだろうか。
恐怖、という程では無いにしろ、映像越しに見る自分達ですらそういったものを感じるのだから、実際にその様子を見ていた簪なら、尚更。

「その…皆も見てて何となく解ったと思うんだけど、簪ちゃんが倒れたのって肉体的なものより精神的な面での要因が大きくてね」
「…だろうな」
「ええ…」

「アレは…、うん」

楯無の言葉に、皆が首肯する。

軍属であるラウラはともかくとして、他の皆は代表候補生であるとはいえ、皆１５歳の少年少女なのだ。

何も感じ無い方がどうかしている。

「まぁ、そういうワケだから、暫くはこの件の話は簪ちゃんにしないであげてね。一応、お医者さまは大丈夫だっていってるけど、念のためにね」

そう楯無が最後に締め括り、この日はお開きとなった。

「おかえり～」

『あぁ』

”何処にも無い”、或は”何処にでも在る”、そんな場所が『彼』と彼女の住家であり、創られた、そしてこれから創られる彼女の…

…篠ノ之束の作品達の生まれ故郷でもあった。

研究、開発、整備、改造、その全てを可能とする施設と豊富な物資、それを余す事なく使い熟す彼女の才能。

”全て”がそこにある、と言っても過言ではない、そんな場所。

『それにしても珍しいな、束が”あの三人”以外を気にかけるだなんて』

勿論、あの三人というのは束の妹である篠ノ之箒、そして親友の織斑千冬、千冬の弟であり計画要員でもある織斑一夏の事だ。

「うん、まぁね。自分でも意外だなぁ～って思ってるんだけど……」

『確かに、な…』

「罪滅ぼし、ってワケじゃないんだけどさ、な～んか気になっちゃったんだよね。あの娘と『かんちゃん』は別人だって、解ってはいるのにさ」

『……まぁ、束と違ってアイツと俺が同時に”同じ世界”に存在しているのも原因といえば原因か』

「う～ん、どっちの”いっくん”も悪く無いんだけどね～……ま、いっか、やめやめ、”団体様”もそろそろ来る頃だろうし、ちゃっちゃっと仕上げにとりかかろ～！」

『だな』

暫く悩んだそぶりを見せた束は一旦問題を頭の隅に追いやり、代わりに部屋の隅に置いてあった箱を取り出した。

なんの変哲もない、ただ上に手を突っ込む穴があるだけの白い箱を。

「さて、無事《白式・両儀》も覚醒していっくんも段々《フォームチェンジ》に慣れてきた事だし、仕上げのリベンジ戦といこうか！」

そう言いながら中身が飛び出さない様に手で穴に蓋をしながら箱をよ～く振って中身をシェイクし、一旦箱を机の上に置き、おもむろに手を突っ込んだ。

「なにが出るかな？　なにが出るかな～っと、一回戦の相手は……君に決めた！！！」

勢いよく箱から抜き出したその手には一つのボールが握られていた。

《神龍》と書かれた、ボールが。

第８５話「敗者の剣」（後書き）

次回から順次、皆さんお待ちかねのパワーアップしたヒロインズの機体が登場です！

第８６話「神なる龍は天をも崩す」（前書き）

お久しぶりです
いろんな意味でテストも終わったので、活動報告で予告した通り、
最終話まで突っ走ろうかと思います

■没ネタ集　その５

ＩＳ　×　聖闘士星矢

ＩＳ＝聖衣（クロス）みたいな感じで

聖衣の数だけキャラ考えたり誰をどの聖衣に割り当てるかで躓きました
ｏｒｚ

第８６話「神なる龍は天をも崩す」

「――――で、あるからして…」

皆が静かにノートを取っている事もあり、室内に響く音と言えばペンの音と山田先生の講釈の声ぐらいのもので、授業を聞いてる皆の表情も真剣そのものだ。

山田先生も山田先生で、普段の頼りなさが嘘の様に様になった授業をしている……って、本職なんだから当たり前か。

そう…俺は今、授業を受けているのだ。

何を当たり前の事を……と、思うかも知れないが襲撃やら何やらで入学当初以来まともに授業を受けれた記憶があまり無いというのはどうした事か。

まぁ…、俺はあくまで俺と《白式・両儀》の経験値稼ぎにＩＳ学園に来た様なものなのだから、本来の目的だけで考えるのなら、座学は別に要らないといえば要らない……が、いくら毎週誘拐されそうになるだなんていう波瀾万丈な生活を送って来たとはいえ、流石に今の時代に学歴が中卒というのはマズいという感覚ぐらいはあるワケで。

珍しく……そう、珍しく何事も無く普通に授業が受けれるというのは俺にとってはかなり貴重な時間なのだ。

別に成績の順位が下から一番なのはどうだっていい。

スタートダッシュが遅過ぎたのだ、追い付くなんて無理だってのは言われ無くても解っている。

問題なのは順位じゃなくて成績そのもの。

要は合格点さえ取っていれば卒業は出来るんだろうが、今の状態だと確実に留年コースである。
代表候補生の四人に関しては既にこの手の教育は受けているので復習にしか……いや、代表候補生の受ける教育がどんなものかは知らんがもしかしたら復習にすらなっていないかもしれないし、いつものメンバーの中で俺と箒だけが代表候補生ではないが、箒は箒で束さん程で無いにしろ頭は良い方なので成績になんら問題は無い……
…つうか、アイツ上位じゃねぇか。

……大事な事だからもう一度言おう、俺は別に自分の順位自体はどうだっていいのだ。
問題なのは合格点か赤点か、それだけ。
だからこそ、こうして珍しくまともに授業が受けれる時にしっかりと勉強しとかなきゃならないんだが……まぁ、そうは問屋が許さないというか何というか。

…うん、つくづく俺って平穏とは無縁なんだなぁ～って、しみじみと思う。

『――あ～、テス、テス、……んんっ、喉良～し♪』
「「「「「「「「「マイクじゃなくて！！？」」」」」」」」」

……そう、例え襲撃が無くても、ヤツらが来なくても、束さんはやって来るのだ。
……はぁ。

『やっほ～～皆元気？　まぁ、どうでもいいんだけど』

じゃあ何故聞いた？

『束さんは三徹で最高にハイなんだじぇい♪』

…いや、貴女いつもハイでしょうに。

『…と、言うワケでぇ』

嫌な予感しかしねぇ…。
うん、もうどうにでもなれ。

『リベンジマッチ始めるよ～♪　いっくん達、しゅ～ごぉ～～♪』
「リベンジマッチって誰と……って、うおっ！！？」
ちょっ…、身体が透け…。

…こうして、今回の授業も途中退場と相成ったワケだ。

……そろそろ出席日数がヤバいかもしれん。

「……此処は？　…って、皆も来てたのか」
「来てたのかって……強制連行じゃない、コレ」
「一夏さんが消えたと思った途端私まで…」
「どうやったんだろ、コレ」
「……どうもこうも、な」
「また束のトンデモ発明の仕業だろう」
「ですね…」
「…それより、此処は何処なんだ？　見渡す限り真っ白で何がなんだか…」

神出鬼没を地で行く束さんの事だから、ワープぐらい出来るとは思っていたが……まさか他人を、しかも複数人同時に強制転送までやってのけるとは…。
因みに、上の台詞は俺↓鈴↓セシリア↓シャルロット↓箒↓千冬姉↓箒↓ラウラの順である。
それにしてもホント真っ白だな、此処。

「やぁやぁ、皆久しぶりだねぇ♪」

何処だか解らないが、前も後も、上も下も、右も左も真っ白で、そ

れでいて果ての無い空間。
そんな場所に転送されたという事だけはとりあえず理解できた俺達の前に、忽然と、さっきまで居なかったハズの束さんが現れた。

「…束、お前なぁ」
「アレ？　どったのちーちゃん？　あ、今日アレの日だ「阿保」…あぅぅぅぅ」

それはもう、まさに瞬く間という言葉がピッタリなぐらいで。

急にワケの解らない空間に連れて来られて混乱してる俺達を余所に転送した張本人はいつも通り、千冬姉だけは長年の付き合いからか、いち早く復帰していつも通りボケをかました束さんを容赦無く殴った。
しかしそれでもやっぱり束さんはめげずにいつも通り暴走なんて言葉じゃ足りないぐらいの勢いで我が道突っ走るのだ。

「あ痛たた…、うぅ、ちーちゃんの愛が痛い」
「もう一発いくか？」
「ベットの上なら大歓げほぁ！？」

うわぁ…、今の確実に頭蓋骨ヤッてしまった様な音したけど、大丈夫か束さん。
ってか、千冬姉も相変わらず容赦無ぇなぁ…。
「ガキの前で妙な事を口走るな、阿保」
「うぅ…、い、今のは流石の束さんでもキツいよちーちゃん。束さんの脳みそ真っ二つだよ」
「良かったじゃないか。これからは左右で交互に考え事が出来るぞ」

「おぉっ！　さっすがちーちゃん頭良い！」

…うん、心配しなくても束さんはいつも通りだ。
流石天才、ゲーム機みたいに叩いた程度でバグる様な頭じゃないらしい。

『（……そうでも無いかと。千冬が殴った瞬間だけあのカチューシャからシールドバリヤーが発生してましたし）』

と、白式さんが俺にだけ聞こえる声で補足してくれたんだが、やっぱりそういう自体を想定して備えておけるってのが頭の良さなんだと思うぞ、俺は。
ってか、ハイパーセンサーにビーム砲だけじゃなくてシールドバリヤーまで張れるのか、あのカチューシャ。
もう立派な第六世代機じゃん。

……っと、束さんには束さんの段取りが有るんだろうけど、そろそろ本題に入ってもらおう。
今束さんと会話してる千冬姉はともかく、此処に来てからずっと俺ら置いてけ放りだし。

「あの、束さん？　リターンマッチってのは？」
「おおっとそうだった！　んじゃ、さっそく始めちゃおっか♪」

説明？　何ソレ美味しいの？　と言わんばかりの勢いな束さん。
そこに痺れない憧れない。
ついでに言えば着いて行けない。

しかしそんな俺達にお構いなく、束さんはノリノリで話を進めていくのだった。

……まぁ、いつもの事なんだけどね。

「青コーナー！　《白式・両儀》！！」
「コーナー何処！？　って、うぉっ！！？」

俺のツッコミもなんのその、どこから取り出したのかは知らんがいつの間にかマイクを持ち出してノリノリでプロレスの司会の真似事を始める束さん。
ツッコンだ俺は俺で、また強制転送されて少し皆と離れた所に飛ばされて束さんの製作者権限で強制的に起動した《白式・両儀》を纏わされてしまった。

「赤コーナー！　《神龍》！！」

更に束さんの声に応えるかの様に《白式・両儀》は唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《フォームチェンジ》を発動させ、白亜の装甲を桜色に染め二重に纏った鎧を変化させる。

「え！？　きゃ…！」

《白式・両儀》の変化の影響を受けてか、鈴の身体も桜色の光に包まれ……って鈴！？

「なっ……」
「何がどうなっていますの！？」
「アレは…」
「……龍？」

束以外の全員が唖然としている中、鈴音を包んだ光は天まで昇る勢いで延びて龍を象り、天を舞いながら顎門を大きく広げ、咆哮を上げる。

『オォォォォォォォォォォォォォォッ！！！』

神話の時代に語られた龍の如く、大地を揺るがすその咆哮と共に光の龍は霧散して、代わりに光の中から新たな機体に身を包んだ鈴音がその姿を現した。

「アレは……」

「……《白式・両儀》と、同じ？」

鈴音の纏う機体はその姿を大きく変え、ラウラが呟いた様に《白式・両儀》の……《白式・真打》が纏った《白式・影打》と同様の姿を象っていた。

「ふっふっふ、……そう！　その通り！」

「どういう事だ、束」

いつものメンバーの驚く顔に満足そうに笑みを浮かべ、束は千冬の質問に上機嫌で応える。

「ま、一言で言えば仕上げかな」
「仕上げ？」
「そ、仕上げ。じゃあちょっとだけ種明かしといこうか。流石にちーちゃん達も私といっくんがグルになって何かしてるって事ぐらいは気付いてたよね？」
「あぁ」
「えぇ、その、まぁ何となく…」
「僕も…」
「私もだ」
「やっぱり…」

それぞれの反応に満足そうに頷き、何かを思い出す様に、或は懐かしむかの様に、束は語りだした。

「事の始まりは１０年前って事になるのかな？　ある日、私が暇潰しに宇宙に放ってた衛星がさ、観測したんだよ。ま、いわいる宇宙人ってヤツをね♪　でもね～、困ったことにそいつらっていろんな星々を回っては侵略を繰り返す困ったちゃんでね、しかも明らかに今度の標的は地球っぽかったからさ、束さんはヤツらに対抗する為にＩＳを造ったのさ」
「宇宙人？　ヤツら？　……まさか！？　お前、１０年も前からあの銀色の怪物の事を知ってたと言うのか！！？」

驚く千冬に対し、珍しく束は淡々と応えて続ける。
事の始まりから今までの事を。

「いくらこの束さんが天才でもね、流石にお偉いさんは１４の小娘が『宇宙人が攻めてくる』だなんて騒いだって相手になんかしてくれないよね？　だからさ、とりあえず『宇宙開発用マルチフォーム・スーツ』としてインフィニット・ストラトスを造ったんだ、束さん

は。だって連中が来てから造ってたら間に合わないからね」

何も無い、真っ白な天井を眺めながら、

「私としてはまぁ、箒ちゃんと、ちーちゃんと、いっくんさえ生きてれば別に人類が滅亡したってどうでもいいんだけどさ～、でも、ちーちゃん達はそうじゃないんでしょ？」

「当たり前だ」

「うん、そう言うと思った」

私には理解出来ないけどね～、と、笑いながら束は少しだけ話題を核心に移す。

「…まぁ、そんなワケでさ、ちーちゃん達の為に、束さんはワザワザどうでもいい他人様までヤツらから守らなきゃならなくなったってワケ。……で、宇宙開発用という名目で防衛用にインフィニット・ストラトスを造ったんだよ。……表向きは」

「…表向き？」

「そ、表向き」

「…どういう意味だ？」

宇宙開発用と見せ掛けて防衛用としてインフィニット・ストラトスを造った。

それすら表向きの理由でしかないと言う。

訝しむ千冬に、束は笑顔で”応えず”、空中を漂う一夏と鈴に顔ごと視線を向けて、開始の合図を送る。

「まぁ、百聞は…ってね。見てれば何となく解ると思うよ。……と、いうワケで、早速始めちゃってね♪」

「いや、始めちゃってねって…」
「……諦めろ、鈴。こういう人だから」
「……まぁ、いいわ。なんだがよく解んないけど、やってやろうじゃない」

そう言って一夏が構えると、鈴音も一夏に合わせて構えて見せた。
互いに同じ龍を纏う一夏と鈴音。
違う所といえば龍の下に一夏が《白式・真打》を、鈴音はＩＳスーツを纏っている事ぐらいだろうか。

「いくぞっ」
「来なさい！」

《白式・両儀》の……インフィニット・ストライカーの圧倒的推力を以って突撃を仕掛け、突撃の勢いを利用して一夏が身の丈を越える巨大な青龍刀を鈴音に叩き着けた。

「嘗めんじゃないわよ！」

しかし、鈴音とて中国の代表候補生にて《甲龍》の操縦者である。
いくら機体が変わったとはいえその《甲龍》の発展系たる《神龍》を使い熟せないハズがない。
その証拠に初めての機体で、尚且つ初めて《白式・両儀》を相手取るのにも関わらず初見で一夏が振り下ろした青龍刀を受けて見せた。

「まさか、他人の機体の……しかもその発展系に成れるだなんて反則臭い事やってくれるとは思ってもみなかったけど…！」
「くぅっ…」
「同じ系統の機体で勝負するんなら！　私の方が上だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

「うおっ！？」

鈴音の咆哮に応えるかの様に、青龍刀の峰に設け　られた推進機が……衝撃砲が爆ぜる。

その推進力を《神龍》のパワーに上乗せして振り払った《崩天瓦月》の一撃は《白式・両儀》を吹き飛ばすには十分過ぎる威力を秘めていた。

「くぅうううっ」

「まだまだぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「なぁぁぁぁっ！！？」

《双天牙月》の発展系たる《崩天瓦月》もまた機体の全高を上回る長大さと、その見た目通りの……或は見た目以上の超重量を以って相手を叩き潰すかの様に切る刀である。

その超重量故に使用の際は遠心力を利用した大振りでしか扱えないという欠点もあったが、その欠点を補って余り有る程の威力を誇っていた。

「んなろぉおおおおおっ！！」

「甘いっ」

「がぁぁぁぁぁぁっ！！？」

しかし、だ。

《甲龍》時代からそうであった様に、メイン武装は《双天牙月》では無く、あくまで《龍咆》であり、長大かつ超重量な武装でワザと生じさせた”隙”で相手を誘い、《龍砲》を以って相手を屠るのが正しい機体運用方である。

そして、その発展系たる《神龍》の運用方もまた《甲龍》と同じで

ある事は当然の事で、《崩天瓦月》を振り切った隙を突いた”つもりになった”一夏が衝撃砲の餌食になるのも当然の結果でしかなかったのだ。

「ちぃっ、《フォームチェンジ》は…」
『…ドクターが製作者権限で固定(ロック)してるのでつかえませんね』
「…なるほど、真似るだけじゃなくて本来の使い手を越えて見せろってか？」
『みたいですね』

劣勢を強いられているのにも関わらず、空中で体制を立て直しながら言葉を交わす主従に緊張の様子はカケラも無い。
どちらも束の無茶振りには慣らされていた上に、この程度で根を上げている様ではこれから先の……本来の戦いで勝利を収める事など不可能であると解っているからだ。

「あ～、悪いんだけどさ、こっから先はサポート無しで頼むわ」

だからこそ、一夏は相棒の手を借りるのを止めた。

『それはそれは、また大きく出ましたね。無謀にも程が……まぁ、一夏の馬鹿は今に始まった事じゃないですけど』
「酷ぇな……まぁ、無謀なのは解ってんだけどさ。でも、人間相手の……それもサシでやり合うってのに相棒におんぶに抱っこしてもらってる様じゃあヤツらに勝て無ぇだろ？」
『……ですね。ま、私としては補助輪外すにはまだまだ早い気もしますが』
「言ってろ」

《白式・両儀》と《神龍》とでは基本スペックの……否、その存在意義の時点で《白式・両儀》の方がこと戦闘においては圧倒的有利なのだ。
それでいて更にサポートまで受けた状態で得た勝利に意味など無い。
これまでの、戦闘に慣れさせる為の戦いならいざ知らず、これからのヤツらとの戦いに向けての戦いなら、尚更。

「いくぞ鈴。今度こそぶっ飛ばしてやる」
「はんっ、やれるもんならやってみなさいってぇのぉぉぉぉぉぉ！！！」
「だぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

互いにフルスイングで振り払った《崩天瓦月》は激しくぶつかり合って火花を散らし、それでも足らぬと更に同時に互いの峰の衝撃砲が爆ぜた。

「こんのおおおおおおおおっ！！！」
「んなろぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」

互いに一歩も退かぬ鍔ぜり合い、それもそのハズ、《神龍》も《白式・両儀》の様に内側に《白式・真打》を蔵していないだけでそのパワーは《白式・両儀》と同等であるのだから。

しかしこのままではいずれ《神龍》が押し負ける。
いくらパワーを同等に引き上げられたとはいえ、《白式・両儀》の様に《白式・真打》と《白式・影打》の二つにコアを分かち、それでいてそれぞれが通常のインフィニット・ストラトスのパワーとエネルギー生産量を上回るインフィニット・ストライカーのコアと、機体の変化に合わせてパワーだけがインフィニット・ストライカーと同等に引き上げられただけのインフィニット・ストラトスのコア

を蔵する《神龍》とでは時間毎ごとのエネルギー生産量に差が出てしまう。
故に、このまま互いにフルパワーでエネルギーを消費し続ければ先に《神龍》の方がエネルギー切れを起こしてしまうのだ。

これが、束がインフィニット・ストラトスがインフィニット・ストライカーに勝てないとした理由の一つでもある。
提唱者たる束が表向きの理由として挙げた宇宙開発を本気で考えて製作された器だったのならまだしも、競技用・軍事用関係無く地球という限られた空間での運用を主眼に開発された器に収められてしまったインフィニット・ストラトスでは広大な宇宙での戦闘を想定して造られたコアと器から成るインフィニット・ストライカーに対して、パワー以前にエネルギー生産量で劣ってしまう。
当然だ。
宇宙でも使用できるというだけで、結局は限られた空間の、それも補給基地を設け安い地球での使用を前提としたインフィニット・ストラトスと、広大かつ苛酷で、補給も儘ならない宇宙での活動を主眼に置かれ、対人ではなく未知の存在との戦闘を任務とするインフィニット・ストライカーとが戦闘を行って、インフィニット・ストライカーがインフィニット・ストラトスに負ける道理など無い。

だから、このまま押し合っていてはいくら束によって器をインフィニット・ストライカー化された《神龍》でも本物のインフィニット・ストライカーである《白式・両儀》にスタミナ負けしてしまう。
《甲龍》の……インフィニット・ストラトスのコアを流用している以上、それは避けられない事実だ。
このまま戦い続ければすぐにエネルギー切れを起こしてしまう事ぐらい、異様なまでのエネルギーゲージ減り様を見ている鈴音も承知の上。

しかし、鈴音は自分でも不思議なぐらい、負ける気がしなかった。

（……まったく、随分と食いしん坊になったじゃないの、アンタ。まぁ、いいわ。いくらアンタが大食らいになったって…）

「な！？」

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「がぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

何故なら、エネルギー切れを起こす前に、一夏を仕留めてしまえばいいだけの事なのだから。

神域に至った龍が今、太極に牙を向く。

第８６話「神なる龍は天をも崩す」（後書き）

次回、決着。
そして新たなる刺客が……って、

・セシリア
・シャルロット
・ラウラ

の誰かなんですがね

箒「ちょっと待て、私の出番は…」
作者「さ～て、さっさと次の話書かなきゃ」
箒「おいっ」
千冬「お前なんかまだマシだぞ、箒。この小説、原作キャラでも殆ど出番の無いヤツが多かったり、私も原作の《暮桜》の特徴が《雪片》と《零落白夜》しかないせいで殆ど出番が無い上にせっかく出番があっても《打鉄》しか使え無いんだぞ」
箒「……ですね」

第８７話「蒼き軍勢、率いるは女帝」（前書き）

はい、というワケで以前募集した《ブルー・ティアーズ》の強化型の名前の発表になります。
発表は本編にて
あと、後書きにも重大発表が

■没ネタ集　その６

ＩＳ　×　リリカルなのは

束さんＶＳなのはさんの「人の話を聞かない人」対決ｗｗｗ

第87話「蒼き軍勢、率いるは女帝」

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「なっ……くっ、がぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

龍の…鈴音の咆哮と共にその手に握られた《崩天瓦月》の峰に設けられた衝撃砲が更に出力を上げ、一夏も負けじと自身の《崩天瓦月》の衝撃砲の出力を上げた。
それが罠だと知らずに。

一夏が衝撃砲の出力を上げようと、一瞬だけ注意が逸れた。
しかし鈴音の狙いはその一瞬。
その一瞬の隙を突く為に両肩に浮遊する《龍咆・改》が《龍咆》を上回る速度で空間に圧力を掛け、不可視の衝撃が一夏を襲った。

「ちぃっ…」
「まだまだぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

鈴音の猛攻は止まる事を知らず、今度は衝撃砲すら自らの推進力に変えて突撃を仕掛け、《神龍》の全推進力と《龍咆・改》、更には《崩天瓦月》の推進力を乗せた斬撃が一夏を襲う。

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「ガッ！！」

月を瓦の様に割る斬撃は天をも崩す。
中国語の文法通りに付けられた銘では無く、単に束が語呂が《双天牙月》っぽくて凄そうな名前をと付けた銘ではあるが、鈴音が放っ

た斬撃はその銘に相応しい威力を以って一夏に襲い掛かり、斬撃の勢いのまま地面に叩き付ける。
背中から地面に叩き付けられた一夏は一瞬意識を手放しかけ、しかし寸前のところで踏み止まって再び空に舞い上がった。

「あ、コラ待て！　いい加減くたばれっての！」
「誰がくたばるか！」

今度は鈴音の上を取った一夏が急旋回し、《龍咆・改》を乱れ撃って弾膜を張りながら急降下し、《崩天瓦月》を”投げた”。

「くっ、一夏のクセに小癪な……って、危なっ！？」

衝撃砲の弾膜を受け、足止めを喰らって怯んだ鈴音の眼前に洒落にならない轟音を上げながら飛来した《崩天瓦月》が迫る。
巨大な刃が、しかも高速回転しながら飛来するその光景はそれだけで一種のホラーだ。
辛うじて躱せたから良かった様なものの、絶対防御が無ければ真っ二つに破壊された片方の《龍咆・改》の様に首を撥ねられていたかもしれない。

「一機だけ《龍咆・改》を壊したからってぇぇぇぇぇっ！！！」
「しまっ…武器が！！？」

エネルギー残量の問題や武装の損失もあって、鈴音は早々にケリを付けようと再び突撃を仕掛ける。

「だぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「くっ…」

フルスイングされた《崩天瓦月》を辛うじて躱した一夏、だがしかし鈴音とて一夏がこの程度の斬撃なら躱せる事ぐらい織り込み済みだ。

「甘いってんのよ！！！」

「お前がな！！！」

「なっ！！？」

更に接近し、至近距離で《龍咆・改》が一夏を捕らえようとして、しかし双頭龍の片割れはその咆哮を上げる事無く先に逝った首と同じく真っ二つに切り裂かれ、爆散する。

後から《龍咆・改》を切り裂いた《崩天瓦月》は鈴音を抜き去ってそのまま一夏の隣を通過し、爆音と共にUターンして一夏の手に収まった。

「しまった！？　衝撃砲！！！」

「鈴、今のコイツは《甲龍》じゃなくて《神龍》なんだぜ！」

そう、衝撃砲。

《神龍》の《崩天瓦月》に在って《甲龍》の《双天牙月》には無いもの。

元来は二人がそうした様に、斬撃の威力を上げる為のそれを、一夏は投擲の後に発動させて方向転換させる事によって、まるでブーメランの様にして扱って見せたのだ。

（ちっ…、一夏の言う通りだったわ。確かに、今のこの子は《甲龍》じゃなくて《神龍》だっていうのに！！）

「もらったぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「はっ、このぐらいハンデがあった方が調度いいっての！」

トドメを刺そうと振り下ろされた斬撃を受け流し、反撃に出るも躱され……そこから先は何度も何度も互いに激しく《崩天瓦月》で切り結び、時には拳打や蹴りを織り交ぜ、更に一夏はその中で衝撃砲を放つなどして応戦し…と、熾烈な争いが繰り広げられるも両者とも健在。

エネルギー残量残り僅か、《龍咆・改》の損失、と、圧倒的不利な立場であるにも関わらず、まだ撃墜されていないのは代表候補生としての…《甲龍》の操縦者としての意地か、はてまた幼なじみに負けたくないとの思いか、或はその両方なのか、いずれにせよ鈴音が健在である事は確かであり、この状況の中でその闘志は衰えるどころか燃え盛ってすらいた。

（…なんでだろ、このままだと負けるって解ってるのに、今、すっごく楽しい。……あぁ、そっか。これって…）

持て余したその闘志は何かに似ていて、すぐにその感覚が何に似ているのかに思い至った。

（……これって、皆と…一夏といる時と同じなんだ。そっか、だから今楽しいんだ）

転校する前の、ほんの数年の出来事。

笑って、泣いて、喧嘩して、珠に一夏を実家の中華料理店に招いて食卓を囲んで。

転校して、それから代表候補生として再び日本の地を踏んだ後からの出来事。

ファースト幼なじみとかいうあの篠ノ之博士の妹。

自分以外の代表候補生達。

あれよあれよと言う間に想い人の回りにライバルが集まり、それも今となっては公私共にライバルであるハズの少女らとも友義を結び。皆で彼を囲って過ごして切磋琢磨し、時には愚鈍な彼を折檻して…時には？

（うん、やっぱりそう。…今思い返すと”ちょっと”やり過ぎたかなぁ～って思うけど……ま、いっか。余計な事を考えるのは後にしよう。だって…）

今、こんなにも楽しいのだから。

「…なんか、楽しそうだな。鈴」
「えぇ、そうね。今、すっごく楽しいわ。どうしよう、笑いが止まんない」
「おいおい…、そんな馬鹿デカい刃物持って笑うとか、ちょっと怖いぞ、お前」
「……うん、解ってるんだけどさ。…駄目、やっぱり止まんないや。うん、殺……じゃなかった。倒そう」
「おいっ、今何て言おうとした！？」

不敵を通り越して不気味に笑い出した鈴音の口から漏れた台詞はこれまた物騒で。
冷や汗をかく一夏にお構いなしに鈴音は再び突撃を仕掛けた。

「だぁりゃぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「くっ……ガハッ」

横薙ぎの斬撃に見せ掛けて投擲された《崩天瓦月》が《白式・両儀

》の胸部装甲に食い込み、そこで更に《崩天瓦月》の刃を撃ち込む様に峰に蹴りを入れた。
連撃を喰らってのけ反る一夏にまた鈴音が蹴りを入れ、《崩天瓦月》の刃が《白式・影打》部分の装甲を完全に断って遂に《白式・真打》部分の胸部装甲に達する。

「ぐっ、がっ」
「このっ、このっ」

何度も蹴り込まれ、その度に釘を打つかの様に《崩天瓦月》の刃が《白式・両儀》の装甲を割って一夏の身体に迫って行き、遂に絶対防御が発動して《白式・両儀》のエネルギー残量がまだ《神龍》程で無いにしろ、かなりのハイペースでその残量を減らしていく。

「それっ、もういっちょって、ああっ!!?」
「つぅ……あぁ、クソッ、やっと捕まえた」
「ちょっ、このっ、離しなさいよ!」

そして、何度目になるのか、漸くタイミングを掴んだ一夏が鈴音の足を捕らえる。
逆さ釣りの状態で持ち上げられた鈴音が必死に暴れるも、一向に一夏が手を離す気配は無い。

「はぁ……はぁ…、俺の、勝ちだ!」
「ギニャー!」

鈴音が抵抗している内に一夏の《龍咆・改》は可能な限り力を圧縮して蓄え、その力を得物に向かって解き放つ。
至近距離で最大出力の衝撃砲を喰らって漸く《神龍》のエネルギーは底を着き、鈴音は意識を手放した。

龍の牙は、対極を穿つには至らなかった。

カーン　カーン　カーン　と、これまた何処から取り出したのか、試合終了のゴングが真っ白な空間に鳴り響く。

「やーやー、中々面白い試合だったねぇ」

「まぁ、ギリギリでしたけど」

気絶した鈴音を抱えて下りて来た一夏に束は駆け寄って声を掛けるも、すぐさま次の試合開始を告げた。

「うん、というワケで第二試合いってみようか」

「いや、何がというのはワケでなんですか！？　ってか休憩時か「さぁさぁ、張り切って第二試合始めちゃうよ～♪　青コーナー！《白式・両儀》！！！」　ちょっ、ま」

本人の意思もなんのその、ノリノリで一夏の抗議をスルーした束によって再び一夏は空中に転送されてしまったのだった。

「そしてそしてぇ！　第二の挑戦者ぁ！！　赤コーナー！　《ブルー・エンプレス》！！！」

「ちょっ…、こ、今度は私ですの！！？」

鈴音の時がそうだった様に、空中に放り出されて宙を舞ったセシリアは蒼い光に包まれてその姿を消し、先程まで《神龍》を纏っていた《白式・両儀》は桜色に染まった機体を蒼で染め上げ、《白式・影打》で構成された外装もまた《ブルー・ティアーズ》の発展系、《ブルー・エンプレス》へと変化する。

そして、《白式・両儀》の変化と同時に霧散した光の中から、《ブルー・エンプレス》を纏ったセシリアが悠然とその姿を現した。

「……ハァ、何がなんだか解りませんが、とりあえず騒ぐだけ無駄だという事だけは理解しましたわ」

「あ～、そりゃなんというか…」

「「……」」

不満はある、が、もう諦めました。

そう言わんばかりのセシリアの態度に、一夏もどう声を掛けたものかと目線を逸らしてどうしたものかと思案するも、結局妙案は浮かばず、両者とも暫く沈黙してしまう。

正直言って、気まずい。

「ま…まぁ、折角だし、始めようぜ」

「……ですわね」

ごまかす事しか出来なかった……否、ごまかす事すらロクに出来ていない一夏に、セシリアは少々…そう、ほんの少しだけ不満を覚えもしたが、結局流す事にした。

「そうですわね……ぇぇ、折角ですので、いつぞやの仕返しとさせていただきましょうか？　一夏さん」
「あはははは…、お、お手柔らかに頼む」
「考えておきますわ♪」
（怖っ！　顔は笑ってるのに目が全然笑ってねぇ！！）

口元を引き攣らせながら、それでも優雅に笑って見せるのは淑女の為せる業なのか。
しかし、いくら鈍感な一夏にもそれが作り笑いでしか……しかも何やら怒っているという事が解るぐらい、目が冷たい。
入学当初、クラス代表を決める時に見たあの目。
クラスメイト達が”珍しいから”というだけで一夏を推薦し、代表候補生である自分を無視した愚か者共に向けた、あの目だ。

（美人は怒ると怖いと言うが……）

世界最強な実姉を始め、姉の様に自分を構い倒した天才、その妹でファースト幼なじみ、中国から帰って来たと思ったら何故か代表候補生になっていたセカンド幼なじみ、イギリス・フランス・ドイツの代表候補生…と、一夏の回りの美女（美少女）率はとんでもない事になっている。
少なくとも、一夏自身が相手が美女（美少女）だからといって動じない程度には。
人類の半分（＝男性）なら誰もが羨む状況に身を置く一夏ではあるが、残念な事に（一部の人にとっては喜ばしい事に）やたらと武闘派が揃っているせいで日に日に一夏の中で”美女（美少女）＝怖い”の図式が成り立ちつつあるのはいい気味だと思うべきか同情すべき事なのか。

「さぁさぁ、準備は良いねぇ？　良くなくても始めちゃうよ～♪

…と、いうワケでぇぇっ、始めっ！！」
「「！！！」」

ある意味緊迫した空気の中、空気が読めなかったのか読まなかったのか、束がノリノリで試合開始のゴングを鳴らした。
開始の合図に反応して弾かれたかの様に二人は同時に後退して距離を取る。
後退する二人が《スターライトｍｋ？》の発展系、《スターライトｍｋ？》を構えたのも同時で、トリガーを引いたのもほぼ同時。
しかし一夏の放ったビームはセシリアの左前腕アーマーを掠めただけで、なのにセシリアが放ったビームはしっかりと一夏の左前腕アーマーを捕らえていた。

しかも、構えたタイミングは同じであるのにも関わらず、トリガーを引いたのは若干セシリアの方が早かった。
……つまり、セシリアの方が早く狙いを付け、尚且つ若干遅れてビームを放った一夏よりも命中精度が上だという事になる。

「ちっ……、やっぱ本職相手に狙撃で競っても勝てねぇか！」
「フフフ、まだまだ、こんなものじゃなくってよ！」
「くっ……なっ！！？　がっ！！　ぐぁっ！！？」

不敵に笑い、連射されたビームは回避行動をとったハズの一夏に吸い込まれるかの様に命中していく。

（流石は篠ノ之博士製…と、言うべきなのでしょうね）

以前、一夏がセシリアに語った《ボルティックシューター》の概要。
聞いた時は流石にそこまで簡単なハズが無いと、多分一夏がそれぐ

らい凄かったと誇張しているのではないかとも思いもしたが、どうやら思い違いをしていたのはセシリアの方らしい。
かつて聞かされた《ボルティックシューター》の性能そのままに…
そう、瞬時にターゲットをロックし、銃を構える操縦者の腕すらアーマーごしに機体が動かして固定し、最後にトリガーを操縦者に委ねる。
その一連の動作に掛かる時間、僅か０．０１秒。
その早さこそが、最大の武器。

かつて《白式・真打》にあって《ブルー・ティアーズ》には無かったその早さを手にしたセシリアが、速射というアドバンテージを失った一夏に狙撃で負ける事など有り得ない。

「くっ……がぁっ！！？」

避ける事も、

「なっ！！？　…くそっ！！」

反撃する事も許さない。

回避行動も《ブルー・エンプレス》の動作予測とセシリア自身の弛まぬ修練に裏打ちされた勘の前では止まっているも同然で、一切の反撃の暇を与え無い連射、時折ワザと隙を見せて反撃を誘い、誘われた一夏は罠だと解りつつも漸くつかんだ反撃の機会を掴む他無く、本人も解っていた様に構えた一瞬の硬直を突かれてビームを喰らい……その繰り返し。
その繰り返しで既に《白式・両儀》は四割ものシールドエネルギーを削られ、逆に《ブルー・エンプレス》のシールドエネルギー残量はまだ九割も残っている。

消費した一割とて最初に掠った一撃分以外は全て《スターライトｍｋ？》による射撃で消耗した分でしかなく、ダメージらしいダメージなど皆無だ。

《白式・両儀》もまた見た目にはダメージを喰らった形跡は無いが、それはあくまで《白式・真打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《質量操作》によって拡張領域（バスロット）内に格納された質量で補修しているからに過ぎず、シールドエネルギーはしっかりと消費していた。

（まずいな…）

以前なら、《白式・真打》と《ブルー・ティアーズ》、つまりインフィニット・ストライカーとインフィニット・ストラトスとの戦いであった頃ならば、一夏の様な初心者でも機体そのもののアドバンテージだけで勝てた。

というか、実際に勝った。

だがしかし、今回機体は両者ともインフィニット・ストライカーであり、以前のアドバンテージはほぼ皆無。

それでいてほぼ同じ機体を使用している以上、勝負を決めるの操作者自身の技量であり、ＩＳ学園入学まで動作テストぐらいしかしていなかった一夏に代表候補生として修練を重ねてきたセシリアに勝てる要素など何も無い。

有るとするなら、コアの違い。

《白式・両儀》の…本物のインフィニット・ストライカーのコアと、《ブルー・エンプレス》の…インフィニット・ストラトスの《ブルー・ティアーズ》のコアとでエネルギー生産量の差があるものの、エネルギー切れを狙おうにもセシリアは無駄撃ちをしないのでそれも儘ならなかった。

（クソ……ホントにまずいな）
「あらあら、クラス代表を決める時の方がまだマシでしてよ」
「言ったな！」

それが挑発だというのは一夏にも解っている。
だが、実際クラス代表を決める為にセシリアと戦った時の試合はこうも一方的では無かった。
手加減されていたとはいえ、初心者なりに反撃も出来ていた。

（そうだ、あの時は出来ていたのに今出来ないハズが無い！）

《ラファール・リヴァイヴ》で出来て、《白式・両儀》で出来ないハズが無い。
それに、

（俺の機体は《ブルー・エンプレス》じゃない！　《白式・両儀》だ！！！）

《白式・両儀》の存在意義は相手と同じ土俵に立つ事では無い。
あくまで相手の特性を蒐集してその弱点を突く事こそがその存在の本義であり、相手と同じ姿を象るのは蒐集した特性をそのまま反映しただけに過ぎず、蒐集した特性の弱点を突く事によって常に未知に対しての必殺となる。
それを可能とする機体こそが、《白式・両儀》。

（《フォームチェンジ》が出来なくたって…！）
「！！？　…《零落白夜》！？　そんなものを使ったって…」

蒼く染まった機体を真紅の光が包んでビームを弾く。

《白式・両儀》は《白式・真打》と《白式・影打》の両方の特性を持つ機体である。
《白式・影打》が今に変化して唯一仕様の特殊才能（ブルー・エンブレス）、《零落白夜》か使用出来ずとも、まだ《白式・真打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《質量操作》によって創造され、疑似的に再現された《零落白夜》があった。

しかし、それはセシリアが言おうとした様に、ダメージでエネルギーを減らすか、エネルギー兵器無効化の維持でエネルギーを減らすかの違いでしか無く、結局はエネルギーを消費する事に変わり無い。
だが、セシリアが意味の無いと断じたその違いこそが一夏の求めたものであり、

「うぉおおおおおおおっ！！！」
「くっ…」

無駄撃ちをしないセシリアが撃って来ない事と、仮に撃たれても無効化によってダメージによる硬直が無い事こそが一夏が求めたものである。
強引に作った”止まらない”時間。
その時間に出来る事を為せばいい。

瞬時加速（イグニッションブースト）を利用して突撃を仕掛ける《白式・両儀》、突撃しながら振りかぶった前腕部分の装甲が展開し、開いた隙間から長大な三枚刃が延びた。

「なっ…、それは！！？」

「どっちかの特性が殺されるんじゃあ、一つになった意味が無ぇ！！」

文字通り、予想外の”展開”、そこから生まれた一瞬の隙に《白式・両儀》は《ブルー・エンプレス》の懐に潜り込み、胴体を両断するかの様な勢いで《スーパー大切断》の刃が襲い掛かる。

「だぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！？」

《零落白夜》の使用、それはエネルギー兵器に対する防御の為だけのものではない。
《零落白夜》を込めた斬撃こそが本命である。
エネルギー無効化機能によって大幅に削られた《ブルー・エンプレス》のシールドエネルギー、いくら強力な一撃とはいえ、たった一撃でイーブンにまでもちこせるとは思っていなかった一夏は、すぐさま第二撃を放とうと右腕を振りかぶって殴る様に振り下ろした。

しかし、その刃は通ら無い。

「《エクスカリバー》！！！」
「！！？」

女帝の命に応え、その姿を現した王の剣は無貌の怪物の牙を受け止め、そして押し返す。

「なっ！？　……セシリア、お前近接戦苦手じゃなかったのかよ！！？」
「進歩しているのは一夏さんだけではありませんわ。私だって、弱点をそのままにしておくほど愚かでは無くってよ、一夏さん。…そ

れに」
「なっ……」
切り結ぶ二人の周囲を、いつの間に呼び出し（コール）したのか、無数の飛翔体が二人を取り囲むかの様に飛び交う。
「私の《ブルー・エンプレス》はまだ本領を発揮していませんわよ」
視界を埋め尽くすは女帝の率いる軍勢、かの軍勢の銃口が一斉に対極に向けられ、次の瞬間、対極を無数の光条が貫いた。

第87話「蒼き軍勢、率いるは女帝」（後書き）

はい、というワケで《ブルー・ティアーズ》強化型の名前が採用されたのは外剛さんでした～

採用されなかった方にもダブルチャンスみたいなのを予定してますのでお楽しみに～

第８８話「疾風は三度吹き荒れる」（前書き）

すいません、いろいろとゴタついてて投稿が遅れました。

何故か筆がノッたというか、キリが悪かったというか、気付けば初の１０ページ目、次のラウラとか、連続でやるかは別として箒とか、どうなっちゃうんだろう…

■没ネタ集　その６

ＩＳ　×　マジンカイザー

一夏の機体がマジンカイザー……って、装甲が鬼過ぎて誰も勝てないじゃん

だってアイツ、富士山の火口に浸かってても全然溶けないし宇宙から地上に墜落しても全く問題無く戦闘始めちゃうし…

シールドバリヤーも絶対防御もいらないよね、アレ

第８８話「疾風は三度吹き荒れる」

「私の《ブルー・エンプレス》はまだ本領を発揮していませんわよ」
「ちょっ…」

高速で飛び交う全長２ｍを越える蒼い飛翔体、その数３０。
《ブルー・ティアーズ》と《サイレント・ゼフィルス》との交戦データを元に両方の特性を与えられ、更に《白式・真打》の分身体のデータも加味され、完全自律稼動を実現したビット兵器、《ブルー・ティアーズｍｋ？》。
無名の……否、その筋では有名であるハズの製作者によって造られた存在は、創始者たる天才に名実共に塗り潰され、今かの天才が創りし存在に牙を剥く。

「くっ……がっ、ぐぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

ただビームを放ったのなら、展開されていた《零落白夜》の防御フィールドによって阻まれるだけだっただろう。
だが、女帝の軍勢もまた女帝と同じく目の前の獲物と血を分けた存在である。
故に《零落白夜》の存在を知らぬハズも無く、またそれに対する備えが無いハズも無い。

コアユニットとして内に《白式・真打》を蔵する以上、《白式・両儀》もまた《零落白夜》の発動に装甲の展開を要する。
展開した装甲と装甲の間からフィールドを発生させる為だ。
その事を熟知していた《ブルー・ティアーズｍｋ？》の軍勢は一斉にピンポイントでその隙間を狙って”実弾”を浴びせ、《零落白夜

》を使用不能に陥らせた。
《質量操作》で復元可能とはいえ、復元までの一瞬の時さえ作れればそれで十分。
その一瞬を狙った本命のビームが一斉に《白式・両儀》を貫いた。

「くっ……このっ」

負けじと一夏も《ブルー・ティアーズｍｋ？》を召喚し、応戦するも互いの自律兵器を封じる以上の意味を為さず、劣勢を覆すには至らない。
《白式・両儀》のシールドエネルギー残量、三割。
それに対して《ブルー・エンプレス》のシールドエネルギー残量は五割強。

睨み合う二人の回りでは軍勢同士の激しい戦闘が繰り広げられており、一機がビームを放てば狙われた一機が《エネルギーアンブレラ》のデータをもとに造られたシールドでそれを防ぎ、また別所では一夏がヤツらとの戦闘で使用した時の様に剣状にエネルギーフィールドを展開して激しくぶつかり合ったりと、通常の、インフィニット・ストラトス同士の戦闘ではまず見る事のできない混戦が繰り広げられ、そんな中を《白式・両儀》と《ブルー・エンプレス》の二機が縫う様に飛び回って激しい銃撃戦を繰り広げていた。

「このっ」
「そんなものでっ」

狙撃では勝てぬと、ロクに狙いを着けず右手で《スターライトｍｋ？》を乱射しつつ、左手に《ケルベロス》を呼び出し（コール）してビームと実弾を織り交ぜた弾膜を張る一夏。
堪らず回避に専念するセシリアも、隙を見つけては得意の狙撃で応

戦して見せるが、この混戦の中では思う様に回避出来ず、シールドエネルギーを削られてその残量を三割にまで減らしてしまう。

しかし、セシリアの応戦と自身の無駄撃ちの消費もあって、一夏のシールドエネルギーも二割を切った。

「ちっ…なら！」

「ミサイルごときでっ……きゃあ！！？」

これ以上のエネルギー消費はマズいと、一夏は《スターライトｍｋ？》を拡張領域（バスロット）に戻し、代わりに《ギガント》を呼び出し（コール）してミサイルを放つ。

放たれたミサイルをセシリアは全て回避して見せたものの、躱したミサイルが回りでぶつかり合う軍勢に命中して爆発し、爆風に飲まれてしまう。

「もらったぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

「しまっ…、あぁぁぁぁぁぁっ！！？」

漸く手にした完全な隙、その隙を見逃さなかった一夏の《ケルベロス》から放たれた弾丸がセシリアを捕らえ、遂に互いのシールドエネルギー残量を二割とほぼ同量にまで持ち込んだ。

しかもその攻撃でセシリアの《スターライトｍｋ？》が破壊されてしまう。

「くっ……でもまだ私には《エクスカリバー》が！！！」

女帝の命に応え、再び姿を現した聖剣。

その聖剣が、仮面ライダーを造った天才が鍛えた剣が、ただの近接ブレードであるハズが無い。

『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』

帝王に仇なす者に断罪を。

音声と共にエネルギーで構成された刀身が延びる。

黄金の光を放つ剣が振り上げたセシリアが不敵に笑う。

「この剣の輝き、受け切れますか？　一夏さん」

「ちょっ、おまっ…それ《エクスカリバー》じゃなくて《オーガストラ「問答無用ですわぁぁぁぁっ！！！」　ちぃっ、なら！！！」

振り下ろされた帝王の剣、しかし王の剣を持つのはセシリアだけではない。

一夏もまた自身の剣を呼び出して応戦してみせる。

「《キングラウザー》！！！」

『スペード１０、Ｊ、Ｑ、Ｋ、Ａ……ロイヤルストレートフラッシュ』

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

ぶつかり合う王の剣、その莫大なエネルギー同士のぶつかり合いの余波で周りを飛び交う《ブルー・ティアーズｍｋ？》が次々と爆発を起こして二人を炎が包み込む。

その直後、莫大なエネルギー同士のぶつかり合いに耐えられなくなった二つの剣が殆ど同時に砕け、発生させていた莫大なエネルギーも相俟って更なる爆発が二人を飲み込んだ。

「がぁぁぁぁぁぁぁぁっ」
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ」

爆心地から弾き出された二人はその身を地面に叩き付けられて何度かバウンドして転がった。

「ぐっ……」
「う…うぅ…」

互いのシールドエネルギーの残量は残り僅か、あと一撃…先にあと一撃入れた方が勝つと、勝利への渇望が二人を立ち上がらせる。

しかし互いに満身創痍、立つのがやっとな状態であり、これで《白式・両儀》に分身を生成して動かすエネルギーが残っていれば一夏の勝ちは決まった様なものだったのだが、自前のエネルギーで稼動する《ブルー・ティアーズｍｋ？》とは違い、《白式・両儀》の…《白式・真打》の分身のエネルギーは本体から捻出される為に今のエネルギー残量では分身を作る事も儘ならない。

「はぁ……はぁ、い、いい加減降参したらどうだ？　セシリア」
「ふ…ふふ、その言葉、そっくりそのままお返ししますわ♪　一夏さん」

闘志だけで立っている二人、しかし二人の纏う機体は操縦者の闘志に応えるには些かダメージ受けすぎた。
ＰＩＣすらまともに機能しておらず、もはや著しく体力を消耗した操縦者にとっては重りにしかならない。

しかし、それでも二人は駆けた。

最後の一撃を見舞う為に。

「だぁぁぁぁぁぁぁっ」

「はぁぁぁぁぁぁぁぁっ」

雄叫びと共に拳を振りかぶる二人、拳と拳がぶつかり合い、互いのマニュピレーターがひしゃげる音が響き渡る。

互いにトドメとして放った拳は決定打に成りえず、今度こそと二人が第二撃を繰り出した。

「これでっ、最後ですわ！」

「ぐっ…しまっ」

同時に繰り出そうとしたハズの第二撃は、運悪く一夏が足元に散らばっていた《ブルー・ティアーズｍｋ？》の破片で躓いたせいで不発に終わり、セシリアの拳が《白式・両儀》の眼前に迫る。

『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

「なっ…きゃぁぁぁっ！！？」

しかし、セシリアの拳が《白式・両儀》に届く事はなかった。

弾け飛ぶ《白式・両儀》の装甲、《白式・影打》。

攻撃を阻止され、吹き飛ぶセシリアに迫る白。

「《白式・真打》！！？」

「おぉぉぉぉぉぉっ！！！」

『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』

流星の様に飛び出した《白式・真打》から放たれた赤い光がセシリアの動きを止める。

展開した右足の装甲から現れた《ファイズポインター》から発せられた円錐状の赤い光の中に消えた《白式・真打》が《ブルー・エンプレス》の後方に出現すると同時にセシリアは前のめりに倒れる。

「勝っ……た、か」

しかし一夏の体力も限界を迎えており、数秒遅れでセシリアと同じ様に倒れてしまう。

最後に残ったΦの文字も、その赤い光を霧散させて消えたさった。

「ん……はっ！！」

「おはよ～いっくん。５分ぶりのお目覚めだねぇ」

やべっ、５分も眠ってたのか…。

あ～、え……っと、確かセシリアと戦って……戦って…勝った、んだよな？

「あの…試合ってどうなりました？　多分…、勝ったと思うんですけど。途中から我武者羅だったんであんまり覚えて無いんですが…」
「ん～、いっくんの勝ちだったよ～♪　ちょっちギリだったけど」

「あ～」

あ～はいはい、段々思い出してきた。
最後セシリアと殴り合いになったんだっけか。
ってか、セシリア、一応お嬢様なんだよな？
なんであんな腰の入ったパンチ出来るの？
射撃系の人でもやっぱ代表候補生って格闘もプロレベルなのか？

「あ～、そういやセシリアは？　あ、鈴も」
「二人ならもう起きてるよ？　疲れてぐったりしてるけど」

そう言って束さんが指差した方を見遣ると、ＩＳスーツ姿の鈴とセシリアがぐったりとした様子で寝そべっていた。
俺と束さんの会話が聞こえているのだろう、反応はしている…が、二人とも披露困憊で体力もそうだが起き上がる気力も無いらしく、呻き声を上げるのが精一杯ってところか。

…まぁ、あんだけ激しくヤり合ったらそうなるわな。

「あ～、束さん」
「どったの？　いっくん」
「《ブルー・エンプレス》なんですけど、《エクスカリバー》って、機体のコンセプト的におかしくないですか？」

《ブルー・エンプレス》って《ブルー・ティアーズ》の発展系なんだから、やっぱりビットで多対一の状況作っ……いや、《ブルー・ティアーズ》の時ってまだ本人とビットとの別行動は出来なかったんだっけ？

いや、マドカさんは出来てたからセシリアには無理だっただけなのか？

それとも一号機の《ブルー・ティアーズ》が無理だっただけで二号機の《サイレント・ゼフィルス》からは出来る様になったとか？

…まぁ、詳しい事は知らないけど、どう考えても《エクスカリバー》って《インターセプター》みたいな非常用の装備とは違うよなぁ……。

つ～かアレ、《キングラウザー》と同等とか明らかに非常用じゃなくてマジの装備だろ。

「あ、やっぱそう思う？」

「そりゃぁ…」

「えぇ、まぁ…」

自分の機体の話題だからか、最後の力を振り絞る様に起き上がったセシリアも会話に参加してきた。

やっぱ使ってる本人が一番おかしいと思うよな。

……その割りには全く躊躇が無かった気がするが。

「ギャップ萌えって大事だよね♪」

「「は？」」

…い、今何て言った？

ギャップ萌えと申したか？　この不思議議の国の住人は。
何？　俺、ギャップ萌えで付けた武器でボコボコにされたの？

「………」

ふと、隣を見ると調度

（゜ｏ゜）

とした顔のセシリアが。
そうだよな、それが普通の反応だよな？

「さ～て、休憩時間しゅ～りょ～♪　次行ってみよ～♪」

しかしそこは束さん、凡人の感性もなんのそので次の試合開始を宣言……って、ちょっと待て。
俺、気絶してた時間含めても１０分も休憩して無いんですけど！！？

「あ、あの…束さん？　冗談で「このまま連勝が続くのか！？　青コーナー！！　チャンピオン！　織原選手、《白式・両儀》！！！」　鬼ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ………」

抗議の叫びと共に消える俺の身体。
さっきまで地面にしっかり足着けてたのに、いつの間にやら感じる浮遊感、ふと自分の腕に目をやるとそこにあったのは白亜の装甲に包まれた俺の腕。

あぁ、無情…。

「そして三人目の挑戦者ぁっ！！　《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》！！！」
「ぼっ、僕！！？」

一夏が空中に放り出されると同時に告げられた次の挑戦者、橙色の光が操縦者を包んで柱を作り、吹き荒れる風と共に霧散した光から現れたのは疾風の名を継ぐ機体で鎧うシャルロットだった。

「これが、僕の…」

デュノア社初のＩＳ、《ラファール》は他のＩＳが第二世代化するに合わせてその身（機体）を第二世代化し、《ラファール・リヴァイヴ》と名を変え、更にシャルロットが代表候補生へとなるのに合わせてカスタマイズされ、量産機は専用機《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》へと生まれ変わった。
そして今、インフィニット・ストラトスという枠組みを越え、インフィニット・ストライカーへと生まれ変わる。

「じゃあ、疲れてるところ悪いけど、さっそく始めようか。一夏」
「…あぁ、わかった」

興奮が押さえ切れないのか、まるで新しい玩具を買ってもらったかの様なシャルロットとは対象的に、お世辞にもモチベーションが高

いとは言えない状態の一夏。
無理も無い。
今までとは違い、エネルギーと手数ぐらいしか有利さが無い勝負。
しかもそれがもう一日の内に既に二度、そしてこれから行われるのが三度目で、どう少なく見積もっても四度目はある連続試合。
更に言えばいくら時間毎ごとのエネルギー生産量がインフィニット・ストラトスの数倍を誇るとはいえ、膨大なエネルギーを消費する武装の多い《白式・両儀》にエネルギー回復機能を持たせるのは急務であり、そうである以上《紅椿》との戦闘は避けられない。

（それだけだったまだ良い、いや、良くないけどさ……）

それだけで済めば御の字だろうが、束は別として、この場にいる代表候補生であり一度は一夏との交戦経験のあるセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラの四人と、軽い模擬戦ならまだしも実は未だに公式には一夏との交戦経験の無いファースト幼なじみの箒。
その五人だけならまだいい。
だが、この場にはまだもう一人いるのだ。
しかも一番厄介な存在が。

織斑千冬。

一夏の姉であり、世界最強のＩＳ操縦者。
現役を退き、現在では既に別のブリュンヒルデがいるのにも関わらずブリュンヒルデの称号で呼ばれる存在。

どういう目的で束が呼び寄せのかは一夏には知り様の無い事だったが、もしラスボスとして一夏と戦わせるつもりでこの場に連れてきたのだとしたらと考えるとゾッとする。

何せ千冬の機体はあの《暮桜》なのだ。
本家本元の《零落白夜》を発現させた機体、使い手は使い手で生身でＩＳの攻撃を受け止める人外染みた身体能力を持った女傑である。
そんな人間を姉にもった一夏だからこそ、勝てる気がしなかった。

（いやいやいやいや、束さんの事だし、ただ単に呼んだだけなんだよな？　そうだよな？　そうであってくれぇぇぇぇっ！！！）

心の中で悲痛な叫びを上げる一夏。
実際に口に出すとホントに束が実行しかねないので絶対に口には出さないが。

「（む…、一夏ってば今は僕の番だっていうのに他の女の人の事考えてる）　い～ち～かぁ～…」
「え、あ…悪ぃ…（な、何怒ってんだ？　シャルロットは…）」
「む～（全く一夏ってば…）」

ジト目でシャルロットに睨まれ、反射的に謝ってしまった一夏だったが、何故シャルロットが怒っているのかまでは思い至らない辺り、彼らしいというかなんというか。

「うんうん、良い具合に盛り上がってきたねぇ♪　よ～し、そんじゃ三回戦！　始めぇぇぇぇぇぇっ！！！」

明らかに盛り上がりに温度差のある二人をどう見たらそんな解釈が出来るのか、二人が盛り上がってると勝手に解釈した束によって第三回戦のゴングが鳴らされた。

「い、いくよ！　一夏！！！」
「お、おう！！？」

束のペースに飲まれたのか、テンションが空回るシャルロット。
そしてそのテンションに合わせ損ねた一夏。

開始こそ絞まりの無いものだったが、二人の戦いは先の二戦同様苛烈を極めた。

《ヴェント・カスタム》と《レイン・オブ・サタディ？》による弾膜を張るシャルロットに対して一夏も負けじと《ガルム？》と《ケルベロス》で応戦。
飛び交う弾丸、鳴り止まない銃声、相手を仕留めんと睨み合う二人。

「このぉぉぉぉぉぉっ！！！」
「火力が高いからって！」

高速切替（ラピッド・スイッチ）で瞬時に《ガルム？》を拡張領域（バスロット）に格納して《ギガント》を呼び出し（コール）、直ぐさまミサイルを放つ一夏だったが放ったミサイルは《ヴェント・カスタム》に阻まれシャルロットに届く事なく爆発した。

「もらった！」
「やると思ったよ！」
「「！！？」」

そうなる事を前提で放ったミサイルの爆発に紛れ、再び高速切替（ラピッド・スイッチ）で武装を変更した一夏の手に握られたのはかの光線銃、《ボルティックシューター》。

召喚直後には既に狙いを定めていたその光線銃の一撃がシャルロットを狙う。
しかし相手はあのシャルロットである。
当然の様に一夏が目眩ましにミサイルを放った事ぐらい読んでいたシャルロットはミサイルが爆発した瞬間に瞬時加速（イグニッション・ブースト）を用いて被弾覚悟で爆発の中に突貫しつつ、己の切り札を呼び出し（コール）した。

《灰色の鱗殻（グレー・スケール）？》。

《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》の切り札である六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻（グレー・スケール）の後継機であり、《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》にも切り札として搭載され、実戦では《白式・両儀》が使用して銀の怪物を打ち砕いたソレが爆音と共に眼前の白に迫る。
しかし、次の瞬間には胸部装甲を破砕していたハズの一撃は《白式・両儀》に届く事は無かった。

《白式・両儀》が……一夏がその鉄槌を”掴んで”受け止めたのだ。

「なっ……そんな！！？」
（……なんで”視えた”んだ？　今の）

受け止めた一夏にとっても想定外だったからか、動揺で隙だらけだったシャルロットに追撃を喰らわせる事が出来ず、ヘルメットのせいで見えないとはいえ呆うけた表情で杭を掴んだ自分の手を見つめるばかり。

「はっ」

「！！　くっ……この！！！」

正気に戻るまで時間にして三秒も掛からなかったとはいえ、想定外の出来事に硬直してしまった二人は弾かれた様に距離を取って再び銃撃戦を始めたものの、その内容は先程とは随分と異なる者になっていた。

一向に”当たらない”のだ、シャルロットの放った銃弾が。

「そんな！？」

（……やっぱり”視える”。でも、どうして…）

銃口の向きが、銃を構える微妙な手の動きが、トリガーを引く指の動きが、連続で放たれた銃弾の射線が。

それら全てが、まるでスローモーションでも掛かったかの様に”視える”。

当然、《白式・両儀》のハイパーセンサーの感度は変更していない。第一、それなら感度の良さに驚いたとしても”視えた”事自体を当の本人が驚くハズが無い。

「（なぁ、白式）」

『（おや？　そろそろ私の手が必要になりましたか？）』

「（その様子だとお前じゃないか…）」

『（？）』

もしや白式が勝手に……とも思いもしたが、どうもそうでは無いらしい。

なら束が、とも考えもしたが、三戦目になっていきなりこんな事をする意味も無いだろうと思考から除外する。

「これならっ」
「…」
「嘘！！？」

いくら狙っても射撃が全く当たらない事に痺れを切らしたシャルロットが《レイン・オブ・サタディ？》を左右に一丁ずつ構えて乱射するも、一夏は咄嗟に《灰色の鱗殻（グレー・スケール）？》を呼び出し（コール）し、《質量操作》でシールド部分を巨大化させて二丁のショットガンから放たれた弾膜を完全に防ぎ切って見せたのだ。

いくら高速切替（ラピッド・スイッチ）を教えたのは自分自信とはいえ、一夏の手際の良さは異常だった。

「（何がどうなって…）って、あぁっ！！？」

一瞬の動揺。
しかし、一瞬でも隙を見せればどうなるのかぐらいシャルロットも理解している。
当然だ、彼女は代表候補生なのだから。
だが、だからこそ、一夏の異常な成長速度に動揺してしまう。
例外はいるかもしれないが、どの代表候補生も長い時間と弛まぬ努力の果てに今の地位と実力を身につけている。
シャルロットもその一人だ。
家庭の事情が絡んだとはいえ、彼女とて他の代表候補生に負けないぐらいの努力を重ねて来ているのだから。

そんな彼女ら代表候補生の努力を嘲笑うかの様な《白式・真打》の……《白式・両儀》の圧倒的性能。
しかもそれを扱う人間が身内贔屓でＩＳを操縦出来る様になった男

性だというのだから、一夏の人となりを知らぬ人間からして見れば憎悪の対象にしか成り得ないだろう。
幸い、一夏の周りを囲った代表候補生らは彼にその様な感情を抱く事は無かった。
機体の性能に甘んじて全く努力しようとしない様なら彼女らも一夏を知らぬ女性同様に彼に憎悪を向けただろうが、彼自信が自分達に追い付こうと努力している姿を見てきたからだ。

しかし、いくら彼自身の努力を見てきたとはいえ納得のいかない部分もある。
機体性能が圧倒的を通り越して理不尽過ぎる点に関しては製作者直々に他の機体とのコンセプトの違いが語られた為に納得出来た。
だが、操縦者である一夏自身の成長速度の異常さがどうにも納得出来ない。
二人の幼なじみの証言から、現在の一夏より昔の一夏の方が強かったとの情報が齎されているので成長では無く昔の感覚を取り戻しただけというのが正確な表現になるのかもしれないが、それにしたってどのくらい昔の一夏が強かったのかはシャルロットには知り様の無い事だが、強ければ強いほど鍛練をサボった分だけソレを取り戻すのにも相応の修練と時間が必要なハズなのだ。
どう考えても数年以上のブランクが数ヶ月で埋まるとは思えない。

「くぁっ」
「ちっ…、ミスったか！」

努力が実力に昇華されるまで、相応の時間を要したからこそ、一夏の異常さは際立ち、その異常さが動揺を誘う。
努力が結果に結び付かない事があるとはいえ、何かしら事に挑む彼は真剣そのもの。

故に、怠慢など無く、動揺から生じた隙を見逃すハズも無い。
その証拠に、辛うじて直撃は免れたとはいえ、躱し切れなかった《ブレッド・スライサー?》の斬撃が《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》の左の肩アーマーを切り裂いた。

（マズい、このままだと負ける！）
「おぉおぉおぉおぉおっ！！！」
「くっ…」

直撃は免れているとはいえ、相手程で無いにしろ手数の多さもそれなりにあり、かつ高速切替（ラピッド・スイッチ）の本家本元はシャルロット自身だ。
だが、シャルロットも万能型とはいえどちらかといえば射撃寄りなタイプであり、対する一夏は近接格闘こそが本文である。
そうなると流石のシャルロットも至近距離まで詰め寄られてしまえば分が悪く、《ブレッド・スライサー?》と《リボルケイン》の二刀による斬撃を防ぐのが精一杯で、徐々にシールドエネルギーが無くなっていってしまう。

「くぅっ…（マズい、どんどん一夏の動きが鋭くなってく…）」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「あぁぁっ（何か、何か手は…）」

先に《白式・両儀》と交戦した《神龍》と《ブルー・エンプレス》。
二機の武装はそれぞれ命中精度の改善は勿論、その威力の上昇も著しい。
その分エネルギーの消費量も凄まじいが、束による改良はその欠点を補って余りあるものだろう。
そしてその二機の武装はただ強化されただけではなく、《崩天瓦月

》は峰に設けられた衝撃砲によって投擲後にブーメランの様に使用出来たり、《ブルー・ティアーズｍｋ？》は《エネルギー・アンブレラ》の特性と切断能力を会得した。
更にいえば、《ブルー・エンプレス》に至っては《エクスカリバー》という明らかに機体コンセプトに反する武装まで追加されているのだ、いくら元が他と違って第二世代機とはいえ、《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》だけが単に命中精度と威力の上昇しか強化が施されていないとは考え辛い。

（何か、あるハズなんだ！　絶対に……）

一夏の猛攻を凌ぎながら、拡張領域（バスロット）内の武装を全てチェックしていく。
２０を越える武装全てが律儀に強化されており、その全てをチェックしているのだから掛かる時間も必然的に長くなる。

（あ～もぅ、コレも違う！　アレも違う！）

こんな事ならもっと武装を減らしておくべきだったかと思いながらも拡張領域（バスロット）内を漁り続けた末、漸く見つけた第二の切り札。
その発見と同時に一夏の振り下ろした刃が眼前に迫る。
誰が見ても今から武装を呼び出し（コール）して召喚したのでは間に合わない必殺のタイミング。

しかしそれは、召喚する必要があるのならの話である。

己の武器は既にこの場に”溢れている”のだ、後はその名を呼べばいい。

「《疾風（ラファール）》！！！」

「！！？　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ……」

自らの名を関したその風が、眼前に迫った敗北を吹き飛ばす。

戦いは、まだ始まったばかりだ。

「…ちょっと飛ばし過ぎたかも」

第８８話「疾風は三度吹き荒れる」（後書き）

小説そのものとは関係無いんですが、《白式・真打》の立体化を計画しています。

Ｓ．Ｈ．Ｆｉｇｕａｒｔｓの仮面ライダーカブトを素体にしてパテやらプラ板やらを盛ったり削ったりして作るつもりです……まぁ、いつ完成すんのか検討も着きませんが。

カブト自体、Ｓ．Ｈ．Ｆｉｇｕａｒｔｓの初期の商品なので細身であり、後からパテ盛りでアーマー追加してもそんなに太くなり過ぎないし、細い部分がそのままでも一夏は特撮のキャラじゃなくてあくまでアニメのキャラだからその辺は大丈夫かな、と思った次第です

ある程度出来てきたら何かしらの方法で見れる様にするつもりなので気長に待ってて下さいね

第８９話「記憶の陰」（前書き）

後半、鬱＆グロ注意
※シャルがどうかなってしまうワケではないのでご安心を

■没ネタ集　その７
ＩＳ　×　いろいろ

一夏、白式受領シーンにて

一夏「まだ届かないのかよ…」
千冬「…ふむ、確かに遅いな」
真耶「ですねぇ…」
束　「やっほ～、ちーちゃん♪」
千冬「なっ、お前何処から…」
束　「そんな事よりさ、いっくんの機体が必要なんだよね？」
一夏「え、ええ…」
千冬「あぁ」
束　「だったら束さんがプレゼントしてあげるよ♪　その辺のちゃちい会社の作ったのより絶対強いハズだからさ！　…あ、機体のカタログね。好きなの選んでいいよ～♪」

■イデオン（常時イデオンゲージＭＡＸ）

■ディス・アストラナガン
■グレートゼオライマー
■ゲッターエンペラー
■村正（善悪相殺なアレ）
■∀ガンダム（月光蝶）
■デビルガンダム
ｅｔｃ…

一夏「束さん…」
束　「決まった？　いっくん」
一夏「…とりあえず、もっと安全なヤツ下さい」

第８９話「記憶の陰」

「《疾風（ラファール）》！！！」

「どわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！？」

振り下ろされた《ブレッド・スライサー？》の刃はシャルロットを捕らえる事なく振り下ろした本人ごと明後日の方向にぶっ飛ばされてしまった。

《白式・両儀》に限らず、飛行中に急な突風に曝されればバランスを崩すのは当たり前であり、それが余裕でＩＳを吹き飛ばす規模であったのなら尚更の事だろう。

《疾風（ラファール）》。

《ブルー・ティアーズ》同様、機体と同じ名を与えられた新たな武装。

第二世代機だった《ラファール・リヴァイヴ》及び《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》には無かったイメージインタフェースを用いた特殊兵器。

機体がインフィニット・ストライカー（第六世代）化しているので通常のインフィニット・ストラトス（第一～第五世代）と同じでは無いのだが、特殊兵器の搭載という事実だけ見ても第二世代から第三世代にランクアップしたと言っても過言ではないだろう。

《疾風（ラファール）》の名が示す通り、風を操るこの特殊兵器は大気中のみという使用制限があるものの、大気中である限り弾数は無限である。

そもそも大気を消耗するのではなく動かすだけなのだから、弾数という表現自体が不適切ですらある。

構造を簡単に説明すると、《ミステリアス・レディ》がナノマシン

で水を操るかの様な感覚で、《甲龍》が《龍咆》でエネルギーを圧縮して放つかの様に大気を放つのだ。
つまり、《龍咆》の様な機器を始点とせず、ナノマシンの様に任意の座標を始点として大気に圧力を掛け、風を起こすという、完全不可視の武装である。
ナノマシンを使用しているのなら、ハイパーセンサーで視覚を顕微鏡の様な倍率にして見ればナノマシンは見えるかもしれないが、ナノマシンすら使用していない《疾風(ラファール)》はいくら目を懲らそうとも”視えない”のだ。
…とは言っても、視覚をナノマシンを視る様な倍率にしてしまえば今度は周りが見えなくなるので戦闘にならないのだが。

「このっ…、《スーパー大切だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!?」

長大な三枚刃が生えた腕を振りかぶるも振り下ろす間もなく吹き飛ばされ、

「くそっ、なら《ケルベロス》!!　…って　あぁっ!!?」

ガトリングの弾も吹き荒れる突風に阻まれ目標には届かず、

「なら《ギガント》で…って、やっぱり!?」

ミサイルも風でぶつかり合って勝手に爆発するばかりで一向に目標に届く気配も無く、

「これでどうだ!　《ボルティックシューたぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!?」

流石にビームはどうしようも無いので本人ごと吹き飛ばされた。

「……中々に厄介な武装だな、アレは」
「そうね、不可視ってだけならうちの衝撃砲もなんだけどアレは…」
「ですわね…」

上空で繰り広げられる戦いを眺めながら呟く代表候補生三人。

「確かに厄介だが……何故、《零落白夜》を使わないんだ？　一夏は」
「あ～アレね、私の衝撃砲みたいに圧縮したエネルギーを射出してたり、ラウラのＡＩＣみたいにエネルギーで相手の動きを封じる様な……つまり、相手に直接エネルギーをぶつける兵器が相手だったらまぁ、《零落白夜》で防げるんだけどね～」

アレじゃ無理かなぁ～、と鈴が呟き、ラウラが続ける。

「確かに《零落白夜》はエネルギー兵器に対して絶対的に優位だが……《疾風（ラファール）》だったか？　シャルロットのアレは我々のとは若干毛色が違う」
「…どういうことだ？」
「えぇ、シャルロットさんの《疾風（ラファール）》は確かに大気の圧縮と射出にエネルギーを利用していますが、それだけです。射出されたあの突風自体は何らエネルギーを帯びていませんの」
「成る程、だから《零落白夜》も無意味、と…」
「えぇ…」

ラウラに続いて《疾風（ラファール）》の概要を説明したセシリアの言葉に、箒は唸った。
それでは防ぎ様が無いではないか、と。

「あ～ぁ、流石に一夏も負けたかもね、こりゃ」
「…かもしれんな。途中で急に動きが良くなった様にも見えたが…
…流石にアレはどうしようも無い」
「《フォームチェンジ》が出来るのでしたら私の《ブルー・ティアーズｍｋ？》で囲んでしまえばシャルロットさんのアレにも対抗出来るかもしれませんが……」

確かにセシリアの言う様に、《ブルー・ティアーズｍｋ？》の様な武装で多対一の状況を作り出せればどれかを囮にしている内に他のどれかが攻撃を加える事も可能だったかもしれない。
だが、最初からそうであった様に、この連続試合の趣旨としては本来の使い手から学び、越える事が主眼となっている為にフォームは対戦相手と同じ姿で固定されている。
インフィニット・ストラトスだろうがインフィニット・ストライカーだろうが関係無く、束の造ったものには例外無く製作者権限なるものが組み込まれており、製作者である束に逆らう事は出来ないのだ。
そうである以上、いくら一夏が望もうが《フォームチェンジ》の使用は不可能である。

「……いや、待てよ」
「？　どうした？」
「多対一の状況を作るだけならまだ手はある！」
「手…あ！」
「…分身、ですわね」

「あぁ、そうだ」

分身。

《白式・真打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《質量操作》の応用の一つ。

ＡＩによる完全自律稼動が可能な５０を越える人形達。

最大で何体出現させられるのかは束以外知らないのだが、仮に《白式・真打》の全高が２ｍで、４０ｍにまで巨大化出来るとすると〜高さ（２０倍）×幅（２０倍）×厚み（２０倍）〜分の質量が必要となるのでどう少なく見積もっても拡張領域（バスロット）内に８０００体分もの質量を保有している事になる。

しかし、エネルギーが自前で回復出来るとはいえ、質量まで自前で補給出来るハズも無く、束から補給を受けなければならない。

束の移動基地にいくら設備が整っていようと資材（質量）まで無限に調達出来るハズも無く、一夏達は知らないのだが、量産型の《白式・真打》、ショッカーライダーも元はオリジナルの《白式・真打》の分身の指揮権を束に移したものであって新造した別機体ではないのだ。

つまり、ヤツらの地球侵攻を警戒する為に太陽系の範囲内に放った偵察用や以前米国への制裁用にも用いられた地球内での監視用だとかで既にかなりの数が出払っているので実際に一夏が分身や復元に利用出来る分は総数の僅か数％とかなり少ない。

しかも運の悪い事に現在殆どの機体が宇宙でヤツらの侵攻を未然に防ぐ為に交戦中であり、現在一夏が使える機体は分身に使おうが復元に使おうが関係なくあと三体分しか無いという割と切羽詰まった状況だったりするので分身を利用して戦う手も使えない。

以前の対戦（ブルー・ティアーズ）の様に５０体ぐらい用意できれば違っただろうが、本体含めてたかが四体程度では纏めて《疾風（ラファール）》の餌食になるのがオチである。

「しかし…、なら何故一夏は…」
「……あ～、もしかして私らと戦り合ったせいでもうストックが無いとか？」
「いや、だが……確かに《白式・両儀》は消耗しているだろうが、…だとしてもアレぐらいの損耗で分身体分の質量が賄えなくなるのら巨大化など……」
「ですわね…」

少女らは知らない。
《白式・真打》が……《白式・両儀》が自分達が思っているほど都合のいい存在では無いということを。

そして彼も…。

「くっ…そ、何なんだよあの風は！？」

風に巻かれ、錐揉み回転しながら吹き飛ばされる一夏が悪態をついた。
無論、そうしたところでこの状況が改善されるハズも無く、突撃を仕掛けては飛ばされ、遠距離から砲撃を仕掛けようとすれば飛ばされの繰り返し。

フォームが《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》である以上、《白式・両儀》も《疾風（ラファール）》を使用出来るハズなのだが、いまいち一夏の性に合わないというか何というか、不意打ちでの有効性は現在

進行系で身を以って思い知らされてはいるものの、不意打ちに不意打ちを返すのはいいとして、だからどうしたというのが一夏の正直な感想である。

そもそも、《疾風（ラファール）》自体、相手にダメージを与える武装ではない。

当然だ。

任意の始点からの突風を起こすだけの武装なのだから。

突風で吹き飛ばして相手を壁や地面に叩きつけでもすればダメージを与える事も可能だろうが、風だけでＩＳを傷付ける事など不可能である。

第一、どのＩＳもいくら強い風が吹いたところで破損する様な事は有り得ない。

そもそものコンセプトが今一夏がやられている様に、急な突風でバランスを崩して強制的に隙を作る事を目的として搭載された兵器なのだ、設計段階で破壊など期待されていないのである。

自機は高速切替（ラピッド・スイッチ）で隙無く臨機応変にあらゆる状況に対応し、敵機の行動を《疾風（ラファール）》で潰す。

ＡＩＣによる行動封じに近い、敵を嬲り殺す為の枷。

それこそが《疾風（ラファール）》。

（ちぃっ……、いくら動体視力が良くなったって、これじゃあ…）

急に目覚めた、まるで”あの頃”の様な感覚。

単純に握力や脚力といった力すら常人を凌駕し、鋭敏過ぎて邪魔でしかなった五感の冴え。

何故か昔の……幼き日の様に、眼で追うだけなら全盛期の、しかもＩＳを装着した状態の千冬の太刀筋すら見切れたあの動体視力に”

戻ってしまった”この状態でも、状況を打開するには至らない。
風は”視えない”のだから。

「はぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
「くっ……なっ！？　がぁぁぁぁぁぁっ！！？」

本来なら避ける事も出来たその斬撃も、吹き荒れる風のせいでバランスを崩されそのまま身を斬られる。
こちらの攻撃もまたあの忌まわしい風（枷）に阻まれて一向に届く気配も無い。

（……どうすればいい？）

答えの解り切った自問。
見えないのなら……視覚が意味を成さないのなら、他の感覚に頼ればいい。
ただ、それだけの事。
しかし、それだけの事であるのに踏ん切りが着かない。

忌まわしい記憶と共に自ら封じた力。
身近にいた二人の天才の様に振る舞え無かった証。
一人は他を無視し、己を貫き。
もう一人は力を上手く切り替え、普段は”人の中”に溶け込み、必要な時だけそこから抜け出す事が出来た。

幼なじみの姉の様に、全てを敵に回す勇気も無く、
姉の様に上手く加減する事など出来なかった。

悍ましいあの感触を忘れる為に捨てたハズの力。
代わりに手にした力を上手く使い熟せれば、二度と使わずに済んだハズの力だったのに、その力を使い熟す事も儘ならず、結局は弱くなった自分自身のせいで何度も窮地に陥り、忌まわしい記憶と共に断片的に戻りつつある力が一夏を苛む。
誰もが……自身すらアレは仕方の無い事だと、正当防衛だったと認めているのに。
周りも、自分自身も、そうしなければ死んでいたのは一夏だと認めているし、一夏自身、やった事を後悔しているワケでわない。

ただ、忘れられないのだ。
あの感触が。
刳った肉の感触が、
むせ返る様な血の臭いが、
断末魔の叫びが、
殺した相手の死に顔が。

人を凌駕する力で突き出された手は皮を突き破って肋骨を破壊して心臓に達し、鋭敏過ぎる五感が感じ取った死が一人の天才を”殺し”、後に残ったのは凡人（抜け殻）になり果てた子供だけだったのだ。

ホントは戦うのは怖かった。
ヤツらの様に文字通り血も涙も無い、意志をもった粘土の様な存在を屠るのはまだいい。
ただ、人間と戦うのだけは本当に怖かった。
いくらその場の勢いに身を任せようとも、相手がシールドバリヤーや絶対防御に身を守られるのだと自分に言い聞かせても、怖かったのだ。

再びあの感触を味わう事が、何よりも。

束がずっと一夏が戦うのに反対だったのも、単に力（《白式・両儀》）に振り回されるのは心配したのではなく、《白式・両儀》という力を振るう過程で一夏が思い出してしまう事を恐れていたからだ。

周りの理解が得られず……否、理解が得られ無い事は承知の上だったが、一人で事を進めて精神的に参っていた時期に聞かされた誓い。

自分が参り過ぎて、記憶と力の事を考慮せず飛び付いてしまった。

後になって気付き、しかし直接理由を言えば記憶を呼び覚ましかねない為に説得も上手くいかず、今日という日を向かえてしまい、一夏は再び力を手にしつつある。

忌まわしい記憶と共に。

「あ゛…、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

視覚に続き冴える聴覚、冴えていくにつれ蘇るあの感触。

自身の上げた咆哮を耳に染み付いた断末魔と錯覚し、フラッシュバックしていく記憶。

悪循環を繰り返しながら完全に元に戻った……否、身体の成長に合わせて以前以上に冴え渡る視覚と聴覚。

それだけでは無い。

先に覚醒した視覚、今蘇った聴覚に続いて記憶と共に他の五感も完全に復活を果たした。

果たしてしまったのだ。

「アァァァァァァァァァァァァァァァァッ！！！」

「…い、一夏？」

その声を発した本人の喉を裂く様な、聞いた人間の鼓膜を破る様な、悲痛な叫び。

目茶苦茶に吹き荒れる《疾風（ラファール）》はまるで一夏の心のよう。

「ガァァァァァァァァァッ！！！」

まるであの時の様に、理性を失い、獣の様に襲い掛かる一夏。

瞬時加速（イグニッション・ブースト）で一瞬にして距離を詰め、振り上げると同時に《スーパー大切断》の刃が自身の装甲を突き破りかの様な勢いで生える。

その凶刃を振り下ろす寸前、《疾風（ラファール）》が炸裂して吹き飛ぶハズだった《白式・両儀》は、再び瞬時加速（イグニッション・ブースト）を起動させてこれを躱す。

「な！！？」

不可視だったハズの風を、まるで見えていたかの様に躱してみせた一夏だったが、完全に感覚が戻ったからといって風が見える様になったワケでは無い。

聴いたのだ。

風の音を。

感じたのだ。

空気の流れを。

聴覚と触覚で感じ取ったそれらの情報を元に、完全に読まれてしまった《疾風（ラファール）》の風は狙いを外して虚しく吹きすさんでいき、そして…。

「な……うわっ！？（《疾風（ラファール）》！？　このタイミングで！！？）」

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「あぁぁぁっ！！？」

《疾風（ラファール）》を躱された、その有り得ない事実に動揺した隙を突いた《疾風（ラファール）》によって吹き飛ばされるシャルロット。
吹き飛ばされながらもなんとか一夏を正面に捕らえようと必死に姿勢制御する彼女が見たモノは、白い翼で羽ばたく”四本”腕の怪物だった。

フラッシュバックする過去の記憶によって恐慌状態に陥った一夏に、もはや欠片の理性も残ってはいなかった。
あるのは逃げ出したい、忘れたい、そんな感情だけ。
まるで嫌なものから眼を背ける様に、或はそれらを廃除する為に、一夏の防衛本能が加速（暴走）する。
装着者の叫びに応え、《質量操作》によってサブアームを生やして四本腕へと変じた《白式・両儀》は、それぞれの腕に《ヴェント・カスタム》、《ガルム？》、《レイン・オブ・サタディ？》、《灰色の鱗殻（グレー・スケール）？》を呼び出し（コール）し、放たれた数えるのも馬鹿らしい程の数の弾丸が一斉にシャルロットに殺到する。

「くっ……このっ…なっ、しまっ！！？」

流石にそれだけの数を喰らうのはマズいと、慌てて《疾風（ラファール）》を吹かせて弾丸の群れを薙ぎ払った瞬間、背後から吹く突き飛ばすかの様な風がシャルロットを襲い、そして……。

「がぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「くぅっ」

突き出された《灰色の鱗殻（グレー・スケール）？》が《ラファール・リヴァイヴ・カス

タム？》のシールドエネルギーを大きく削った。

「くっ……なんで、急に…こんな……。まさか、暴走！！？」

顔を青ざめ、身をすくませるシャルロット。

かつての《甲龍》との交戦時の様に、意識を失ったというワケでは無いらしいが、暴走という他無いこの状況。

今、目の前にいるのは織斑一夏でも無ければ『織斑一夏』でも無い。

破壊衝動と化した防衛本能の怪物である。

破壊の白の前では風など無力に等しい。

「うっ……ぐぅっ…がっ！！」

連続で撃ち込まれる鉄槌、その度に襲い掛かる衝撃。

一撃でシールドエネルギーの数割りを削る鉄槌を何度も喰らえば、流石の《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》も長くは持たなかった。

「くはっ…」

遂に底を着いたシールドエネルギー。

墜落するシャルロットに更に追撃を掛けようとする《白式・両儀》。

シールドエネルギーが尽きた今、ただの鎧と化した《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》では思うように身動きも取れるハズも無く、シャルロットごと《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》を穿とうとする鉄槌が迫り、白い空間に轟音が響き渡った。

「…へ？」

殺られる。

そう思った瞬間に轟音と共に吹き飛ばされた《白式・両儀》。

勿論吹き飛ばしたのはシャルロットでは無い。

第一、《疾風（ラファール）》で吹き飛ばしたのならあんな音はしないハズだ。

あんな、金属同士がぶつかり合った様な音など。

「な…っ」

視界の隅で輝く黄金、その黄金を見遣れば見覚えのある漆黒の騎士が静かに宙を浮いていた。

展開した装甲から吹き出す黄金の光を燈す者、されどその身（機体）は白（《白式・両儀》）の陰。

「こ…《黒式》！？」

『…久しぶりだな』

陰の器に記憶（記録）を宿したもう一人の『彼』。

『織斑一夏』がそこにいた。

第89話「記憶の陰」（後書き）

『一夏』さん「俺、参上」

箒&ラウラ「順番飛ばされたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

第９０話「選択」（前書き）

はい、今回で「仮面ライダー白式」も９０話。
なんだかあんまりライダーしてない気もするけど、第一章は一夏が仮面ライダーになる”まで”の物語なので、その辺りは勘弁して下さい（笑）

■没ネタ集　その８

ＩＳ　×　昭和ライダー（？）

仮面ライダー、織斑一夏は改造人間である。
悪の天才科学者、篠ノ之束の野望を打ち砕く為に戦い続けるのだ！
……どうしよう、一夏じゃ勝てる気がしない（汗）

因みにこの設定、どう化学反応したのかプロローグで束が仮面ライダーの変身ベルトを造るキッカケの原型だったりします。
たしか、最初は小さい頃の一夏が束に仮面ライダーになりたいと言ったのを束が真に受けて、マジで一夏を仮面ライダーに改造した上に自分で造った改造人間達に悪事を働かせてそれを一夏が倒すというカタチで夢を叶えるという、すっげーヤラセ臭い設定だった様な気が…。

第９０話「選択」

「うぅぅっ」

吹き飛ばされ……というか蹴り飛ばされた一夏が眼を凝らすと、自身が元いた場所に黒いヒトガタが浮いていた。
見覚えのあるヒトガタだ。
何せ自身も一度纏った事のある鎧なのだ、そう簡単に忘れやしない。

しかし、タイミングが悪かった。
異常に冴え渡る己の視覚も、《白式・両儀》のハイパーセンサーも、あれは《黒式》だと認めているのに、肝心の頭がそれを認識出来ないでいる。
普段の一夏ならともかく、蘇った五感の冴えと共に思い出した忌まわしい記憶と感触に苛まれ、恐慌状態となった今の一夏の前に、真っ黒なヒトガタが現れたのは非常にマズい。
幼き日に自身を誘拐しに来た、そして抵抗した一夏によって殺された黒服の男を連想させてしまう。

「あ、あ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
『……全く、なんてザマだ。とても同一人物とは思えん』

襲い掛かる一夏を軽くいなしながら、ため息混じりにそう呟いた。
歩んだ道が違うとはいえ、こうも違いが出るものなのかと。
『彼』にも殺人の経験ならある。
一夏の様に正当防衛の結果では無く、自分の意志で、だ。
そもそも『彼』が一夏と同年代だった頃には既にヤツらは本格的に地球に侵攻しており、その混乱に乗じて人間同士の戦争も勃発して

おり、『彼』自身、ヤツらとの戦いの中で上の利権や領土の争いに巻き込まれ、現場の人間同士で望まぬ殺し合いだって何度もした。つい昨日まで味方だった人間が敵になった事だってざらに有る。

しかし、今の一夏の様に……あの頃の一夏の様に、人を殺したからといって、ここまで取り乱した事など無かった。

そもそも、『彼』は自分を人間だと思うのを止めていた。

確かに両親は人間だったし、人間の中で育った。

だが、何処の世界に人間の手首を握り潰してちぎる程の握力を持った人間がいるのだろうか。

蹴りを放てば相手の頭が首から離れてしまう蹴りを放てる人間がいるのだろうか。

数キロ先にある本の文字を読める視力を、銃弾すら見切る動体視力を持つ人間がいるのだろうか。

犬どころではない嗅覚を、尋常ではない視力を持ってしても見えぬ相手の位置を、空気の流れで捕らえる聴覚を、地面の振動で捕らえる触覚を持った人間が何処に。

『彼』の姉もたいがい人間離れしていたが、人間離れで済まされる程度の事であり、『彼』から見れば十分人間の範疇だった。

そんな力を持って、どうして自身を人間だと定義できるというのだろうか。

もの心つく頃には周りと自身との違いを自覚していた『彼』は、その頃から自身を人間だと思うのを止めていた。

だから、人を殺しても、心が痛む事など無かった。

何せ、違う種類の生き物を殺しただけの事だったのだから。

うっかり蟻を踏み潰してしまっても心を痛める人間がいない様に、

『彼』もまた、人間を殺したぐらいで心を痛める事など、無かった。

一度その生涯を終えた今も、尚。

一方、一夏は何となく周りとの違いを感じてはいたものの、当時の『彼』ほどの自覚は無かった。
既に戦時中だった『彼』の世界とは違い、概ね平和だった一夏の世界では、”千冬”の立ち位置も違う。
『彼』の世界の『千冬』は日本軍のエースとして戦場を駆けていたのに対し、一夏の世界の千冬は日本代表になったりで家を空ける事は多かったものの、可能な限りは一夏と過ごす様にしていた。
”千冬”が……同類、或は類似した存在が傍にいなかった『彼』は早々に気付いて、可能な限り傍に姉がいた一夏は、姉という自分以上の存在がいた為に、自身の力がどんなものだったのかを自覚するのが遅れ、最悪の形で自覚する事になる。

それが、二人の違い。

誰が悪いワケでも無い。
ただ世界が少し違っただけ。
いつヤツらが地球を見つけ、侵攻してくるのか。
二つの世界の違い、その起点。
そこから枝分かれた二つの世界、二人の”一夏”。
片方は人間を止めて力を振るい、もう片方は人間でいたいが為に自ら記憶ごと力を封印した。

「ガァァァァァッ！！」
『…遅い』
「がっ！！？」

ただ、それだけの違いなのに。

「アァァァァァッ！！」
『遅いと言っている』
「が…がっ！！？」

それだけの違いが、今はとてつもなく大きい。
他の相手ならともかく、同一人物相手に機体のスペックが上回っているからといって錯乱状態で戦いを挑んだところで何ら脅威に為り得ない。

『…』

一夏の視覚を以ってしても捕らえ辛い程の速度で《黒式》が接近し、そして……。

「がぁぁぁぁぁぁっ！！？」
一瞬で、ほぼ同時だったと錯覚させる様な速度で《白式・両儀》の両手足のアーマーとウイングスラスターを切断された一夏に、容赦無く『彼』の放った蹴りが炸裂し、地面に真っ逆さまに墜ちて、そのまま意識も落ちていった。

『さてと』
「あ、あ、あのっ…」

『ん？』
「その…、い、一夏は？」
『死んでないから大丈夫だろ』

蹴り飛ばした一夏をほったらかしたまま、先に地上に下りていた自身を文字通り小脇に抱えて運ぼうとする『彼』に対し、運ぶにしてももっと他に方法があるんじゃないかと思いつつもシャルロットは尋ねた。
機体の暴走……にしては鈴音の時と様子が違った気がしたからである。

「いや、あの……そういう事じゃなくて」
『？』

しかし聞き方が悪かったのか、どうして一夏があんな風になったのかを尋ねたつもりだった質問に対し、反って来た答えは殺してしまったのかどうかについての答えだった。

「……どうして、一夏があぁなったのかが知りたいんです」
『…あぁ、そっちか。……そうだな、知らずに済ませられん程度には関わって……いや、そうでも無いが……まぁ、いいか。この際』
「？　……うわっ！？　ちょっ…、飛ぶなら言って下さいよ！」
『舌、噛むなよ』
「遅いです！」

尋ね直したシャルロットの質問に応えず、何やらブツブツと呟いて一人で納得してしまった『彼』は、小脇に抱えたシャルロットの抗議もどこ吹く風で皆の元へ飛んで行った。

勿論、一夏を放置して。

『束』

「……話しちゃうんだね、あの事」

『あぁ、…これから先も、悠長に”記憶を消して回る”暇があるとは限らんし、一々その時になってから騒がれるのも面倒だろ』

「……そうだね」

着いた途端、待ち構えていた束と勝手に話を進め、少女らに向き直った。

『篠ノ之箒、鳳鈴音』

「なんだ？」

「な、何よ？」

『特に篠ノ之箒の方が知ってるだろうが、今のアイツより、昔の一夏の方が強かった。そうだな』

「あぁ」

「えぇ。…それがどうしたってのよ？」

確認を取る為にもう一人の自分の二人の幼なじみに尋ねた『彼』は、まるで独白の様に続けた。

『１０年近く前の話だ。その日もアイツは誘拐犯に追い掛け回されていた。当然だ、最強のＩＳ操縦者である織斑千冬を姉に持ち、創始者にて世界で唯一コアを造れる篠ノ之束との繋がりのある子供だからな。その利用価値は計り知れないものがある』

「な……そんな、昔から？」

「１０年前といえばまだ5歳だぞ！？」
『それぐらい昔からというだけの話だ。ホントに１０年経ったというワケじゃない』
少しは話に聞いていたとはいえ、改めて聞かされるとその異常さが際立つ。
当然だ。
ぐらい、と着くとはいえ、１０年近く前の出来事となると確実に当時の一夏は１０歳にもなっていないのだから。
そんな幼い子供が日常的に誘拐犯に付け狙われるなど、社長の息子だとか、金持ちの家の子供でもそうそうある話では無い。
『篠ノ之箒や鳳鈴音も知っていた様に、アイツの身体能力は常人離れしていた。それこそ、その歳で成人を裕に上回るぐらいにはな。だから、たいていの場合は自力で逃げおおせる事が出来たんだ』
「逃げ切れたって……相手はプロなのでしょう？」
『あぁ、プロ程度ならどうにかなるぐらいには”外れて”いた』
「……」
信じられないと言わんばかりの視線を無視し、つづける。
『実際、全くいないワケじゃ無いんだ。アイツや織斑千冬の様に、天才を通り越して異常な身体能力を持った人間は。数が少ないとはいえ、全くいないワケじゃない同類に、アイツは出会ってしまった。誘拐する側とされる側の立場でな』
「「「「「……」」」」」
事の真相に近づく気配を感じ、ゴクリと誰かの喉が鳴った。

『今までなら逃げおおせたハズだった誘拐犯共とは違って、ソイツ相手じゃ逃げ切れ無かったアイツは否応なしにその誘拐犯と戦闘しなけりゃならなくなった。向こうはアイツが生きてさえいれば五体満足じゃなくても構わんかったらしいからな。当然、違いに必死になる。小回りを生かして繰り出される攻撃を何とか躱していたアイツも遂に追い詰められて……』

「追い詰められて、どうなったのだ？」

一旦話を区切った『彼』に箒が尋ね、ついに『彼』の口から一夏の暴走の原因が語られた。

『腕なのか、足なのか…多分足だろうが、逃げられ無い様に刃物で四肢を切り落とされそうになったらしい。……だが、結果だけ言えばアイツの四肢は無事だった。……無事なまま終わったんだ、誘拐犯の命がな』

「ど……どういう事よ？」

『どうもこうも無い。殺されたんだよ、アイツに』

「な…、殺したって……」

「…本当、なのか。それは……」

『あぁ』

「「「「「……」」」」」

あまりの急展開、まだ１０歳にも満たない少年の壮絶な経験に、少女らは言葉を失った。

『子供が自分の目の前で、しかも自分が殺した相手だ、その死に様は強烈なトラウマになった。しかも運が悪かった事に、アイツは常人離れした力はあった癖に、感性は人間そのものだったからな。人間を遥かに越える五感で感じる”死”に、お前達の様なただの人間じゃあ一生掛かっても感じる事の出来ないその感触に、アイツの心

は耐えられなかった』

「……そ、それで、今の状態、に？」

『あぁ、事故のショックで記憶が失われたり失明したりといった話はお前達でも聞いた事はあるだろう？　アイツの場合、その時の記憶と力と五感の殆どが著しく低下したんだ。人間ぐらいにな』

実際、記憶はともかく力と五感はそこまで急激に低下したワケでは無い。

急激な低下が原因で思い出さない為に束がコントロールしていたし、千冬も事件以降は以前にも増して一夏の傍にいる時間を捻出し、誘拐犯が現れる度に撃退していたので、一夏は急激な力と五感の低下に疑問を抱く事無く過ごして来たのである。

「……それで？」

『あぁ、後は簡単だ思い出したんだよ。アイツは。力の覚醒と共にな』

「それって……」

『振り回されながらでも敵を倒せる内は何とも無かったんだろうが、最近はそうも行かなくなった。火事場の馬鹿力というかなんというか……一時的に、それでいて断片的に開放された力でなんとか勝ちを拾う様になって。そのパターンが当たり前になってきたせいで自分でした封印が緩んで、調度シャルロット・デュノアの番で完全に封印が解けたんだ。……で、アイツは自分でスイッチ押したクセに自分の黒歴史に悶えて、運悪くお前はそれに巻き込まれたってワケだ』

「な……黒歴史って、そんな笑い事みたいに言う事じゃないでしょう！　それは！」

「そっ、そうですわ！　それだけの事があったというのに、それを…！」

最後の最後で茶化す様に言ったのがマズかったのか、少女らから抗議の声が上がる。

どうして殺されそうになったのに殺そうとした相手を擁護する気になれるのかが『彼』には理解出来なかったが、予備役の……その候補とはいえ、それを今から外すのも計画に支障を来たし兼ねないので、本人達が気にして無いのならそれでいいかと流す事にした。

『……さて、と。少しは束から話は聞いていたのだろう？　なら、さっさと続きを始めようじゃないか。時間……は、そう気にする必要は無いが、早いに越した事は無い』

「なっ！？　まだ続けるというのか！！？」

『そうだ。いい加減、アイツも折り合いを着けるべきだからな』

「しかし…っ！」

抗議にもまともに取り合わない『彼』に苛立つラウラ。

しかし、冷静に…或は冷淡な『彼』の方が苛立っていた。

そのせいか、気付けば話す内容もどこか脅迫染みた内容になってきている。

『……これでも、譲歩はしているのだがな』

「譲歩、だと？」

『そうだ。アイツが自分で戦いたいと思ったから基本的にアイツの思う様にやらせているし、お前達もアイツがいた方がいいと言うからお前達の好きな様にやらせてきた』

「……一夏を鍛える為の踏み台にする為に、か？」

『当然だ。アイツはどう思っているのかは知らんが、俺はお前達がどうなろうと知った事じゃない。都合が良いからそのままにしてい

ただけの事だ』
「……それで、都合が悪くなったら殺すと？」
『殺すだなどと……代表候補生の、特に軍人のお前にはその手の脅迫が意味を成さないだろう』
「なら、私が戦いを拒否すればどうするつもりだ？」
『ヤツらが来る以上、もう猶予は無い。本格的にヤツらが来る前にアイツが仕上がらないのなら、俺がアイツの身体を貰い受けるまでだ』
「なっ……、貴様！！？」
『さぁ、どうする？　ラウラ・ボーデビィッヒ。今まで通り……戦って、アイツの糧になるか。それとも、ここで拒否してアイツが消えるか。二つに一つだ、好きな方を選べ』

「くっ……」

突き付けられた選択権。
その権利はあまりにも重い。
束や『一夏』の話が事実なら、あの怪物が群れで、しかも星を侵略する規模で攻めて来るというのなら、いくら《白式・両儀》の性能をもってしても勝てる見込みは無い様に感じる。
束がその為に造った以上、勝てる見込みはあるのだろうが、どんな風に《白式・両儀》を運用するにしろまだまだ力に振り回されている今の一夏では上手くやれるかどうかも怪しい。
その点、『一夏』が……ラウラ達代表候補生を一度に相手取って圧倒する程の実力を持つ『彼』がやるというのなら、確実に一夏が《白式・両儀》を扱うより勝率が上がるだろう。
軍人なら……というか、軍人以前にここまで情報を持つ者なら誰でも一夏では無く『彼』に任せようとするハズだ。

しかし、だ。
何十億いるのかよく解らない他人の命を……地球にいる全ての生命を守る為とはいえ、切り捨てるには共に過ごした時間が長過ぎた。
軍人で、代表候補生で、更には戦う為に造られた命であろうと、ラウラに情が無いワケでは無い。
恩師の弟だからでは無く、個人として認めた人物を簡単に切り捨てられるほど、彼女は冷酷にはなれなかった。

（私は…）

自分達と同じ、一夏を想う少女らの視線を背中に感じる。
戦ってくれと、言わずとも解るその視線。
ラウラ個人としての意思も少女らと同じである。
だが、一夏と共に過ごして来た時間が長かった様に、軍人として過ごして来た時間もそれ以上に長かった。
戦いたい。
戦って糧となる事で一夏が存在し続けるというのなら、戦う道を選びたい。
選びたいのに、軍人としての冷静な自分がそれを選ばせない。

（私は……）

教官の弟のクセに、何故あんなにも弱々しいのかと苛立ちもした。
いざ戦って見れば教官とは似ても似つかぬ迷いだらけの太刀筋に苛立ちも増した。
オマケにもう一人の『一夏』などという存在まで現れ、今度は苛立ちを通り越してワケが解らなくなった。
それでも……、それでも、大きな力に振り回されながらも、強くな

る為に努力する姿は好ましかった。
最近妙に強くなりだしたとはいえ、まだまだ弱いままで。
初めてしった、弱くなった理由も軍人の自分から見ても仕方の無いもので。

それでも、彼が強くなろうと思うのなら。
まだ、彼が諦めないのなら。

（私は……もっと見ていたい。…アイツが、一夏が強くなっていく様を。強くなる為に努力し続ける一夏を、ずっと）

だから、ラウラは選んだ。

「……戦うさ。戦って、私が一夏を強くしてみせる！」

軍人としてでは無く、個人として、その答えを。

第９０話「選択」（後書き）

今回の最後のシーン、実はラウラの選択次第では一夏退場という恐ろしいシーンだったり…

第９１話「人になった少年」（前書き）

すいません、活動報告のやたら角ばったブルースワット……じゃなくて《白式・真打》の立体化に時間を掛けすぎて投稿が遅れました。

■没ネタ集　その？

そう何個も何個もネタなんか浮かぶかぁぁぁぁぁぁぁぁっ！

…と、いうワケで没ネタ集はまた別の機会に

第９１話「人になった少年」

「あ……っぐ！？」

聴こえる。
遠くにいるハズの皆の吐息が。

感じる。
地面を伝って響く心臓の鼓動を。

消臭機能が働いているハズなのに、ヘルメット内に篭る自身の汗の臭いを感じる。

視覚は、仰向けに倒れているせいか、真っ白な空しか見えず、あまり異常は感じないが、それでも違和感が酷い。

（何が……どうなって…）

そう声に出す前に、思い出した。
”思い出した”事を、思い出した。
自分でもおかしいとは思っていたのだ、最近の自身の成長速度の異常さを。
それでも、二人の幼なじみが知っていた様に、昔の自分は強かったのだから、単に鍛え直したおかげで感覚が戻ってきたのだと、そう、思っていた。

昔の感覚を取り戻した。
その点については間違いは無い。

だが、ブランクが長かったのは理由としては不適切だ。
ブランクが長かったという点も間違いでは無いが、本題はそこではない。
何故、長いブランクが開いたのか、というのが事の核心である。

あの日、一夏は初めて人を殺した。
鋭敏過ぎた五感で感じる死の強烈さは到底常人には感じる事のできない程の代物で。

姉の千冬もたいがい常人離れしているので周りも兄弟だからと納得してはいたものの、千冬の強さはあくまでＩＳの操縦者としての強さと束の造った《暮桜》の高性能さから来る”強い”という事実を周りが拡大解釈したものに過ぎず、千冬自身は一夏ほど外れてはいなかった。
だが、周りがそうであった様に、一夏も「千冬姉は強い」と思い込んでいた事もあって、この勘違いは現在まで続いている。
というのも、当時から一夏が自分の力を上手くコントロール出来ていなかったというのが大きい。
いくら集中したところで……というか、集中するからこそ、鋭敏過ぎる五感が煩わしくなる。
視え過ぎて、聴こえ過ぎて、臭い過ぎて……と、明らかに人間が必要とする以上の余分過ぎる情報が延々と詰め込まれて来るのだ、器（身体）が異常なだけで中身（脳）は常人と変わらない一夏では、得てしまった情報を持て余してしまう。
常にそんな状態であるが故に、身体のポテンシャル（最大出力）が上なだけでは千冬に勝てるハズも無かったのだ。

一方、一夏ほどで無いにしろ十分常人のレベルを越えていた千冬はというと、最大出力こそ一夏に劣るとはいえ自身の力を余す事無く使い熟す事が出来た為に、単純な力比べでも今の一夏より強い。

常人レベルまで落ちていた一夏では単純に出力差で劣り、本来の力が使えていた頃も、鋭敏過ぎる五感のせいで集中できず……つまり、本気を出せなかった為に千冬相手では一夏も黒星続きで、これが「千冬姉の方が強い」という勘違いにつながっている。

因みに箒の場合、あくまでその強さは人間の範疇であったが為に、当時の年齢の水準から見ても十分強かったのだが、それでも鋭敏過ぎる五感を持つ一夏の前では完全に太刀筋は見切られるし、使い熟せていない力でも十分対応できていた。
そんな一夏を目標にして食らい付く箒も箒だが、人間以上を目標としたお陰か、姉のせいで転校続きとなって荒れていても、余裕で全国大会優勝を果たしてしまっていたりする。

「……思い出した。思い出しちまった」

ヘルメットの奥で顔を青ざめさせ、頭を抱えて丸くなりながら震える。
最強の鎧を以ってしても隠し切れない恐怖に苛まれ、もがき、苦しむ一夏。
助けなど求められない。
求めたところで、誰も一夏を助けられない。
当事者は自分一人、仮にその場にいた人間がここにいたとしても、人間では一夏を救う事など出来はしない。
何せ、住む世界が違うのだ。
視えているものも、聴こえる音も、何もかもが違う。
人間に知覚出来ない世界に住む一夏を、ただの人間が救えるハズが無いのだから。

人を越えた人の子である一夏に転機が訪れたのは、箒が転校して二週間後の事で、千冬が第一回モンド・グロッソで優勝を果たして数ヶ月が経過していた、なんでも無い一日の事だった。

「この餓鬼っ」
「待ちやがれ！」
「誰が待つかっての！」

その日もまた、”いつも通り”誘拐犯に追われていた一夏は、いつもの様に逃げ回っていた。
束によってある意味要塞と化した自宅で篭城を決め込んでいればこんな事をしなくても済むのだが、まだまだ遊びたい盛りの一夏に家で大人しくするなどという選択肢など無い。

「はぁ……はぁ、くっそ…なんつ～餓鬼だ」
「大の大人が２０人掛かりで追い掛けてるっていうのに…」
「おい！　Ｃ斑、そっち行ったぞ！」
『……』
「Ｃ斑？　どうした？　返事しろ！！？」

結局撒かれてしまい、別所で待機していたハズの仲間に応援を要請

するも、全く応答が無い。
通信機材が故障でも起こしたのかと思いもしたが、最新機器だった上に作戦開始前にちゃんと使えるのかもチェックしたハズである。
故障したとは考え辛い。
ならどうして……と、考えるより先に答えが来た。

『……あ～、もしもし？　聞こえてる？』

ついさっきまで自分達が追い掛けていた、少年の声で。

『お～い、聞こえてないのか？　おっかしいなぁ～、押すボタン違ったのか？』
「なっ！？　なんでお前がソレを…」
『…ん？　なんだ聞こえてたのか。なんでって、そりゃあ……全員、倒したからだろ。俺が』
「なっ……」

信じられない。
だが、自分達が追い掛けていた少年は普段から自分達の様な組織から追われ慣れており、その都度撃退しているという報告が上がっていた。
その時はいくらなんでもありえないだろうと思い、話半分で報告を聞いていたのだが、まさか自分達もそうなりつつあるとは思ってもみなかったのだ。

『……あぁ、そうそう。あともうアンタらだけだからさ、そろそろ終わりにしてもいいよな？』

「なっ…まっ」
『つ～かもう後にいるんだが』
「なっ！！？　……なんだ、いな　「言ったろ？　後だって」　！！？」

振り向いた先には誰もおらず、ハッタリかと思った直後に真後から声が聞こえた。
そう、さっきまで自分達が追っていた少年の声だ。
いつの間に……いや、何処から？
混乱の余り回らない頭では何をするにも儘ならず、ただ呆然と目の前の少年を見ているしか出来なかった。

「じゃあ、もう後はおっさん一人だしこれでおしまいだな」

無邪気に笑って見せる少年の笑顔、なのに獰猛な肉食獣の姿を幻視した。

「あ…」

少年の右腕が消える。
もちろん錯覚だ。
消えた様に見えた少年の腕が……その拳が男の鳩尾をしっかりと捕らえているのだから。

「ぐっ……」
「はい、おしまい…っと、あ～あ、いっぱい来たからもっと楽しめると思ったのに……」

倒れた男を詰まらなそうに眺める少年が、そう呟いた。

千冬の弟なのだからと、自身の力が人間の枠を越えていた事を自覚していなかった一夏だったが、流石に周りは自分達ほどでは無いという事ぐらいは理解していた。
だから、同年代相手ではまず本気で力を振るう事が出来なかった。というか、本気になる前に勝手に向こうが負けてしまうのだ、そのせいで同年代相手ではどうも消化不良というか欲求不満というか…という状態だったのだが、最近はそうでも無い。
どういうつもりなのかは知らないが、外を歩いていれば大人が自主的に”追いかけっこ”に誘ってくれるので、あまり退屈しなくて済む。

ここでいう大人というのは誘拐犯の事なのだが、しかし当の一夏はというと、相手の事をただの大人としか見ていない。
勿論、ただの大人だなんて事では当然無く、その道のプロだ。
だが、いくらプロとはいっても”常識的な”人間の範疇である彼らに、一夏の様な”外れた”人間を相手取る程の身体能力などあるハズも無く、今回の様に大の大人がたった一人の少年に全滅させられるという醜態を曝すのがいつものオチだった。
だから、あくまで同年代よりマシなだけで、結局一夏の退屈を紛らわすには至らない場合が多い。

今回も、そうなるハズだった。

「！！！」
「……今のを躱すか」

いつも通り展開、いつも通りの決着。
そしていつもの様に倒れたままの大人達を放置して踵を反したその

時だった。
大気を貫く音が耳に響いたのは。
鋭敏過ぎるその聴覚が察知した常人には聞き取れないその音から逃れる様に、跳んだ。
その次の瞬間、アスファルトを貫く銃弾の音が響き渡り、続いてあまり驚いた風でも無い男の声が聞こえた。

（何だ、コイツ……）

まるで姉を相手にした時の様な感覚。
箒と剣で打ち合っていた時にも、他の同門の人間と打ち合っていた時にも感じた事の無い緊張感。
さっきまで”追いかけっこ”をしていた大人達を相手にした時にも感じなかったソレを全身で感じ取った。

（……コイツ、まさか）

現れた男は間違いなく自分と”同類”、或は”同種”である事を、一夏は直感で理解した。

自信の表れなのだろうか、堂々と道の真ん中を歩いてくるその男の服装は先程一夏に全滅させられた誘拐犯達と同じでスーツ姿で、一見何処にでも居そうな男。
だが、男の発するその尋常では無い気配が男がただの人間では無い事を雄弁に物語っていた。

「いやぁ、驚いた。自分みたいなヤツに会った事が無いワケじゃ無いが、まさか君の様な子供がねぇ……」
「……」

親しげに語り掛ける男に、一夏は警戒心を強めた。

「そんなに緊張しなくてもいいじゃないか……ってワケでも無いか」

「？」

ヤレヤレと、困った様な顔をした男の顔が獰猛に歪む。

「だって君、さっきから”笑ってる”じゃないか」

そう言われて、始めて自分が笑っている事に気がついた。
多分、自分も目の前の男の様に笑っているのだろう。
そう自覚したら、もう笑いが止まらなかった。

（コイツなら、コイツが相手なら…！）

今までの様な、つまらない狩りをしなくて済む、と。

「はぁぁぁぁぁっ！！！」

「…っと、そうそう、やっぱり子供は元気が1番だ」

先に仕掛けたのは、一夏の方からだった。
常人なら目で追えない様なスピードで瞬時に男の眼前に移動し、その勢いのまま蹴りを放つ。
放った蹴りは掠りもせずにあっさりと躱されたものの、一夏は動揺などしなかった。
寧ろ、これぐらい躱してもらわなければ面白く無いとすら思っている。

「はっ……せぃっ！！」

「おっ…っとと、今のは危なかったな」
「じゃあ当たれよ」

しかし相手も同類、常人ならまず躱せない攻撃を軽くいなして見せる。

「……さて、そろそろこっちからも行かせてもらう……ぞ！」
「！！？」

そう言って放たれた男の拳はまるで弾丸を思わせる速度で一夏の顔面に迫った。
常人離れした動体視力で見切られたから良かった様なものの、躱し損ねていれば今頃一夏の頭は砕け散っていたかもしれない。

「…おいおい、アレを躱すとか無しだろ。おじさん結構ショックだぞ」
「だったもっと悔しそうな顔しろよ！」
「！？　あ、危なっ」

ショックだとは言うが、どう見ても男は本気じゃない。
一夏は、それが堪らなく嬉しかった。
この男が相手なら、全力で力を振っても問題無い、と。

「ハッ」
「なっ…！？　ぐっ、さっきよりも速い！！？」

男の目を持ってしても追い切れない速度で駆ける一夏のボディブローが鳩尾に突き刺さる。
勿論、比喩だ。

突き刺さったかの様な痛みを感じただけで、実際には突き刺さってはいない。

「くっ……このっ！！！」

「おわっ！？　った～、やるじゃん、オッサン」

しかし男も負けてはいない。

鳩尾に痛撃を喰らいながらも放った蹴りが一夏を吹き飛ばし、数メートル先で着地した。

喰らう直前に腕でガードしたので致命傷にはならなかったものの、妙に腕が痛む。

（痛ぅ～～、折れてはないみたいだけど……ヒビぐらいはいったかな、こりゃ）

普通の、同年代の子供ならまず泣く様なその痛み。

しかし一夏は泣かなかった。

それどころか、更に強烈な笑みで顔を歪めている。

目の前の男だってそう、滅多にお目に掛かれない同類、全力を出しきれる相手がそこにいるのだ、歓喜で涙を流すならまだしも、痛みで涙を流すなど有り得ない。

「アハ、ハハハハハハ……あ～クソ、愉し過ぎておかしくなりそうだ。オッサンだってそうだろ？」

「さっすが同類、気が合うねぇ……ならっ！」

笑う二人の顔は歓喜を通り越して狂喜で歪み、強烈な表情を作り上げる。

どの程度自分の力を使い熟せているのかは一夏には知り様の無い事だが、目の前の男は確実に自分の力に酔っている。

恐らく、存分に力を振るえるからこそこの職に就いたのだろう。

一方、一夏の方はというとまだまだ力を使い熟すには至ってはいなかった。

今はまだ耐えられる……戦闘の興奮で気を紛らわす事が出来るレベルだが、何らかの拍子にこれ以上五感が鋭敏になってしまえば煩わしいのを通り越して身体が得た感覚情報を脳が処理し切れなくなる可能性も出て来るだろう。

潜在的な出力が劣る千冬が一夏に勝てる理由もここにある。

千冬は一夏ほどの潜在能力は有してはいないものの、ちゃんと自分の力を制御する事が可能なので必要な時に必要な分だけ自分の力を振るう事が出来たが、一夏のソレは上手く制御が出来ない上に年々強まっており、何の前触れも無く五感や力が常人の数十倍に跳ね上がったするせいで日常生活に支障をきたすレベルにまでなりつつあった。

だから、いくら愉しくても長期戦に持ち込まれるワケにはいかなかった。

千冬相手なら単なるじゃれ合いで済ませられるが、相手は誘拐犯である。

負けたが最後、どうなるのか解ったものではない。

「ハッ」

「ちぃっ…」

拳打や蹴りの応酬、互いの放つそれらは全て相手に防がれ、防ぎながらも攻撃の手を緩めない。

もともと人通りの少ない場所だったからか、二人が出会ってから今

まで第三者による介入は皆無。
故に、二人が作り出す常軌を逸したその光景を見ている者は何処にもいない。
仮に見ている者がいたとして、異常に異常を塗り重ね、もはや怪異の領域へと足を踏み入れた二人を誰が人間だと認識出来るのだろうか。

勿論、言うまでもなく二人は人間だ。
自分自身や他人がどう定義しようと、二人が人間の両親の間に生まれた以上、どうしたって人間である。
ただ、外れていただけ。
ただ、力が常人の範疇を越えてしまったが為の違い。
その違いがあまりにも絶望的過ぎた。

人は他と違う事を嫌う。
弱ければイジメに合い、強い者も出る杭の如く討たれる。
いくら文明で着飾ろうとも、人間もまた群れを成して生きる動物なのだ。
群れのルールから外れる者の末路は決まって孤独である。
どちらかが歩み寄る事が出来れば、或いは……などというのは幻想でしかない。
常人は外れた者を忌み嫌い、外れた者も枠の外にいる以上、常人の事など理解出来ないからだ。

対峙する男も、一夏ですらそうである様に、人間の五感の世界と人間を越えた五感の世界は違う。
物理的にはどうあれ、住む世界の違うもの同士が理解し合う事など不可能。
だからこそ、二人にとって同類と巡り会ったこの時の歓喜もまた、格別だった。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「せぃやぁぁぁぁぁぁっ！！」

何度も何度もぶつかり合う二人、しかし夢の様な時間はそう長くは続かなかった。

『こっちだ！』
『おい、こっちにも人が倒れてるぞ！』
『こっちもだ！』
『誰が救急車を呼べ！』
『しっかり～』

遠くから聞こえる声。
常人は言うに及ばず、”一夏にすら”聞き取れないぐらい遠くでの騒ぎ。
聴こえないハズのその声が、確かに”一夏の”耳に届いた。

「くっ……（くっそ……こんな、時に…）」

聴こえる。
その事実を自覚した途端、より鋭敏さを増していく聴覚の冴え。
世界が雑音に侵食されていく錯覚。
連動する様に他の感覚も冴え渡り、より多くの不要な情報が脳に殺到するこの不快感。
やがてその不快感は頭痛という実害にまで発展し、処理し切れなくなった情報達が一夏を飲み込んだ。

「あ……ぐっ……」
「？　……お前」

頭を抱え、苦しみ出した一夏の様子を不審に思った男は一旦手を止め、そして何か合点がいったのか、喜悦に歪んでいたその表情はいつの間にか憤怒に変わり果てていた。

「せっかく、愉しめるかと思ったのに…」

「くぁ……ぁ……」

「”お前も”そうなのか？　織斑一夏ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

声に変換された怒りが空気を揺らす。

例えるなら、お気に入りの玩具が壊れた、その理不尽に対する怒り。

いつもそうだ。

”同類狩り”を通して、一秒でも長く愉しい時間を過ごすのが目的だったのに、誰も彼も壊す前に勝手に壊れる。

仕事で男が相手にしてきた者達はみんなそう、そういった者自体の絶対数自体が希少であるというのに、全員最期は自分の力を制御仕切れず自滅していった。

「だぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「がっ……ガハッ！？」

「なんてザマだ…」

出会った当初なら余裕で避ける事が出来たハズの蹴りは確かに一夏の腹を捕らえ、その身を数メートル先へと吹き飛ばす。

その事実がどうしようもなく腹立たしい。

もう愉しい時間は終わりなのだと、嫌でも自覚してしまう。

「……もう、いい。期待した俺が馬鹿だった」

そう言って、男は懐からナイフを取り出して、ゆっくりと一夏に歩み寄った。
今まで戦った誰よりも強く、誰よりも長持ちした少年。
この少年なら……この少年は本物だと、そう…思っていたのに、結局こうなってしまった。
こうなってしまった以上、もう興味は沸かなかった。
だからもう、後は目の前で倒れ臥してもがく少年を回収して、組織に届けるだけ。

「輸送中に暴れられては困るからな、手足の筋は切らせてもらう」

そう、呟いてナイフを振りかぶり――――――

（あぁぁぁあぁぁあああぁっ、うるさい！　煩い！！　五月蝿い！！！）

聴覚が捕らえた全てが、雑音という形になっていたのならまだマシだった。
一人、一匹、一羽、一台、それら全てを聞き分ける事が出来てしまうからこその不快感。

触覚が捕らえる聴覚とは違う別の振動が、
視え過ぎる視覚の捕らえた全てが、道に転がる石の模様が、空を舞う鳥の羽の枚数が、目の前の男の睫毛の一本一本、スーツに着いた細かな埃が、
嗅覚が捕らえた汗含む自分や目の前の男の体臭が、ナイフの金属の臭いが、臭いだけで解る数百メートル先の家庭の夕飯のメニューが、
そういった不要な情報の群れが一斉に一夏に襲い掛かった。

「あぁぁぁぁぁぁぁあっ！！！」
「ちっ、往生際の悪い！」

襲い掛かるのは異様に膨大な感覚情報だけではない。
男の殺意がナイフという触媒を通して一夏の太腿目掛けて振り下ろされた。
痛む頭を押さえながら、辛うじてその凶刃から逃れた一夏だったが、
追撃に備える余裕があるハズも無く、無様に地面を転がる。

「このっ、逃げるな！」
「くぅっ」

二撃目も躱せたが、殆ど奇跡の様なものだ。
三撃目も躱せる保証なんて何処にも無い。

「いい加減にっ　「だぁぁぁぁっ！！」　ぐぅっ！！？」

男が三撃目を振りかぶった瞬間、仰向けで転がったままの体制から刺されるのを覚悟で背中のバネを利用して跳び上がるかの様に蹴りを見舞った。
何の奇跡か、奇襲は見事に成功し、男は数メートル蹴り飛ばされた上にナイフを落とし、蹴りを見舞った方の一夏は無傷だ。

だが、男もやられっぱなしでは無い。
蹴り飛ばされながらも体制を立て直して、着地と同時に再び一夏に向かって駆け出した。

男と一夏の調度真ん中に転がるナイフ。
一瞬、男が一夏から目線を外して自らが取りこぼしたナイフを見遣り、再び視線を一夏に向ける。

（アイツ、また…！）

煩わしかった視え過ぎる視力で男の視線の動きを正確に読み取った一夏もまた、全力で駆ける。
利き過ぎる嗅覚がナイフから材質以外の鉄の臭いを……血の臭いを嗅ぎ取ったからだ。
何人もの血を吸ってきたであろうそのナイフが、再び男の手に渡るのマズい。
確保出来ずとも蹴り飛ばすなりなんなりしてなんとしても男の手から遠ざけねばならない。

「オォォォォォォォォォォォッ！！！」

咆哮と共に五感だけではなく筋力も跳ね上がり、スタートダッシュの遅れを一気に取り戻した。
もしかしたら、これが初めて自分の意志で力を制御出来た瞬間だったのかもしれない。

駆ける二人、延ばされる二つの手。
その手がほぼ同時にナイフに迫り――――――

「これでっ……！？」

ナイフを手に取ったのは男の手だった。
身長的には一夏の方が地面に近かったのに、ほぼ同時に手を延ばしたのに、遅れた。
最期に女神が微笑んだのは、男の方だったのかもしれない。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――

だが、いっそ生き汚いまでの意地で踏み出された一夏の足で地面に踏み付けられたナイフは持ち上がる事はなく、

――――ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「！！？」

一夏を穿つハズだったナイフの代わりに、突き飛ばそうと伸ばされた一夏の腕が男の心臓を穿った。

「え？」

皮を突き破り、肋骨を砕いてそのまま心臓を穿った感触が、
穿たれて尚、まだ脈打つ心臓の鼓動が、
噴水の様に溢れる鮮血の流れが、

噴き出すと同時に辺りに充満する血液の臭気が、

「ぐっ…がぁぁぁぁぁぁっ！！！」

目を限界まで見開き、断末魔の叫びを上げる男の形相が、

それら、”死”と言う名の情報の群れが、常人を凌駕する鋭敏過ぎる五感を通して一夏の中に殺到した。

「あ……あ、あ……アアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ」

この日、織斑一夏は人になった。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

フラッシュバックするあの日の光景。

あの日、自らの力を以って自分自身を救った少年は、その力と記憶を代償に人へと堕ちた。

十年近い年月が経過しても尚、人のままだった少年は怪物を討つ為に新たな力を手にして、このまま、人のまま鎧を纏って怪物を討つハズだった。

だが、少年は人のままでいる事は出来なかった。
人のままでいる事を、もう一人の自分が許さなかったのだ。

こうして少年は再び人の枠を外れ、鎧に相応しい存在へと変わる。
羽化の日は近い。

第９１話「人になった少年」（後書き）

次回、一夏　ＶＳ　ラウラ

最後の刺客との戦いが今、始まる。

箒「ちょっ、ま、私の出番は！？」

作者「いや、だってフォームチェンジ元の操縦者から操作技術を学ぶのが今回の主旨だし」

再び出番を得るのか、それとも空気に逆戻りになるのか、箒の明日はどっちだ！？

第９２話「噛み砕け、漆黒の魔狼よ」（前書き）

対決、一夏　ＶＳ　ラウラ

■今日の空気さん

箒「あ～、では、今回から始まった新コーナーだが……馬鹿にしてるのか作者ぁぁぁぁぁぁっ！！！」

※暫くお待ち下さい

箒「う、うむ。では気を取り直してだな……今日のゲストは五反田蘭という娘らしいな」

蘭「こんにちは～、……って、あの、私、空気どころかお兄と一夏さんの会話で名前が出ただけで出番すら無いんですけど」

箒「……」

蘭「……」

箒「その…なんだ、二章や三章で出番があるといいな」

蘭「……ですね」

蘭、退出後

箒「私も恵まれてる方なんだな……って、メインヒロインなのか
ホントに！？」
作者「原作では」
箒「！！！？」

どうなる次回

第９２話「噛み砕け、漆黒の魔狼よ」

「あ……ぐ……くぁ」

叫び声を上げるのを止め、緩慢な動作で立ち上がる。
足取りはまるで覚束ず、今にも倒れてしまいそうなぐらいに危うい。

なんとか立ち上がれたとはいえ、別に五感が元に戻ったというワケでは無い。
ただずっと感じすぎる状態に曝されてきたせいで少し慣れてきただけだ。
当然、そうである状態に慣れてきたからといって平気というワケではない。
今も尚、鋭敏過ぎる五感が集めた情報を無理矢理詰め込まれ、処理仕切れない情報が脳を圧迫して激しい頭痛を引き起こしている。

それでも、一夏は立ち上がった。
不慮の事態とはいえ、正気を取り戻した以上、まずやらなければならない事があるからだ。

（謝らないと…）

鈴音の時の様に、機体の暴走ならいいというワケでは無いが（そもそも鈴音の件はれっきとした操縦者保護機能であって暴走ではない）、今回のシャルロットに対する振る舞いは明らかに一夏自身の暴走だった。
前々からその兆候があったとはいえ、突然、事故のショックで自ら封じたハズの力と記憶が蘇り、錯乱状態になってシャルロットを殺

しかけたのだ、明らかに非は自分にある。
そう思い、一歩踏み出そうとした途端、足が縺れて派手に転び、同時に変身も解けた。

「あ……ぐ…」

いくら身体能力が高まっているとはいえ、脳自体は並である。
ソフトやファイル等を詰め込み過ぎるとパソコンの処理能力が落ちてフリーズする様に、鋭敏過ぎる五感が集めた膨大な感覚情報が脳の処理能力を圧迫している最中に更に考え事をしたせいで身体を動かす命令を送る事すら儘ならない状態に陥っている今、高い身体能力を持った器（身体）もただの宝の持ち腐れである。
或は、邪魔でしか無いのかもしれない。

「く……そ……なんで、この身体は…」

贅沢な悩みだという事は、一夏自身が一番よく解っている。
疎ましいまでの身体能力があったからこそ、今まで生きてこれたのだから。
ただの子供だったのなら、例え生きていたとしても悲惨な人生を送っていただろうから。
それでも、と思う。
不安定で、更に本人が意図せず急に力が増すせいで散々苦労した。
増したら増したで中々元に戻らない上に、欲しく無い時には高まって、欲しい時には中々発現しなかった事なんてザラにある。
まるで言う事を聞かない力。
通常時より下回る事が無かったのが唯一の救いとはいえ、急に半径数十キロ先圏内の人間の話声が聞こえる上に全て聞き分けられたり、普通にドアを開けるつもりで握ったドアノブを握り潰したりなんかする力など、いくらヒーローに憧れていた年頃の子供でも、素直に

喜べるハズが無い。

通常時すらその年代の人間の限界値かそれ以上の力を有していたのに、更に高まる力。
大き過ぎる力は、その力から得られる膨大な感覚情報は少年から健全さを奪い、いつしか獣染みた感性で行動する様になった。

具体的な影響は学業の成績にも現れた。
何せ、感覚情報の処理で脳がいっぱいいっぱいなのだ、更に”考える”なんて余裕があるハズがない。
一応、それでもノートぐらいは取ってはいたが、内容は殆ど理解出来ておらず、まともに勉強が出来る状態になったのも事件後の事である。
更に事件前も事件後もあらゆる組織からの刺客に狙われ続け、常日頃から命の危険に曝され続けていた事も手伝ってか、内的外的の両方の要因で歪み、いつの間にか獲物（誘拐犯）を狩るのを愉しみにしてすらいた。

そんな一夏に訪れた転機は死の感触を以って彼を人に堕とし、再び蘇った忌むべき力はシャルロットに牙を向けた。
幸い、『彼』の介入によって最悪の自体は避けられたものの、間に合わなければ再び命を喰っていた事は想像に難く無い。
あの時出会った見ず知らずの同類もある意味特別な存在ではあったが、所詮は他人だ。
だが、一夏自身が彼女らに想われている様に恋愛感情を抱いているのかどうかは別として、少なくとも”友人”という、他人以上の存在をその手に掛けてしまえば、今度は記憶と力を失う程度で済まなかったかもしれない。

最悪、廃人になる事もありうる。

「くっ……」

自分が壊れてしまうのはいいというワケではないが、危うく殺しそうになって、その上更に責任すら負えない状態になりかけたのだ。
いくら模擬戦とはいえ、命まで奪う必要の無い戦いで奪いかけた命。
そうならずに済んだとはいえ、錯乱状態にあったとはいえ、そうしようとしたのは紛れも無く自分自身。

「だから…、謝らないと…」

酷くなる頭痛を必死に堪え、また立ち上がる。
ゆっくりと、それでも確実に彼女らの集団に向かって歩いて。

（アレ？　……ラウラは？）

異様に視え過ぎる眼を以ってしても、ラウラの姿を認識出来なかった。
束が居て、千冬が居て、箒が居て、鈴音が居て、セシリアが居て、シャルロットが居て、それでいてラウラだけが居ない。
だけど、人数はこの空間を訪れた時と変わらない。
居るハズのラウラが居なくて、居ないハズの《黒式》がそこに居る。

（なんで…《黒式》が？）

視認出来ない位置から超高速で蹴り飛ばされて気絶していた一夏がこの空間で《黒式》を見たのは今が初めてだ。
当然、いつ来たのかすら知らない。

（……もしかしてラウラが？　いや、でも…）

酷い頭痛に苛まれながらも考えるが、頭痛が酷過ぎて全く考えが纏まらない。

纏まらない思考対する答えを聞き出す前に、答えの方から一夏の方に向かって来た。

真っ黒な拳という、答えが。

「歯ぁ食いしばれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！」

「なっ……がっ！？」

一夏がラウラの存在に気付いたのは、背後でラウラが《シュヴァルツェア・レーゲン》の拳を繰り出した直後の事だった。

ＡＩＣで空気の振動を止め、駆動音を消失させる事によって一夏に気付かれる事無く背後まで忍びよったラウラが、一夏を殴り飛ばす。

殴り飛ばされた一夏も、咄嗟に拳と同一方向に跳ぶ事によって衝撃を軽減したものの、それが精一杯で結局殴り飛ばされ、起き上がりながら呆然とラウラを見上げる事しか出来なかった。

「な……なんで…いや、それよりも！　そこをどいてくれ、ラウラ！　俺、やらなきゃならない事が…」

「やらなければならない事？」

急に、しかもＩＳを使ってまで殴ってきたラウラに不審を覚えながらも、一夏はラウラの問いに答えた。

「謝らないと…、いくら正気じゃなかったからって殺しかけたんだ。謝って済む問題じゃないのは解ってるけど、まずシャルロットに謝

らないと…」

痛む頭で、どんな風に謝罪するべきかも考えられない頭で、それでも罪悪感から吐露した言葉。

「”そんな事”は後にしろ」

「なっ…」

その言葉を、ラウラは切り捨てた。

「なっ…、そんな事って…おい！　「お前は！！！」　？」

シャルロットを殺し掛けた。

それを”そんな事”と言い切ったラウラに怒りを覚えた一夏の叫びは、更に大きな声で叫んだラウラによって遮られた。

「お前は…、お前にはもう時間が無いんだ。一刻も早く強くならなければならないんだ」

「たしかに、そうだけど…でも！」

「謝る事なら、後でいくらでもすればいい。でもお前は……」

「…どうしたんだよ、お前」

泣きそうな顔で、まるで懇願する様に言葉を搾り出すラウラ。

一夏には、どうしてラウラがそんな表情をするのかが解らなかった。

「私と戦え！！　織斑一夏ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

少女の悲痛な叫びに応え、漆黒の魔狼が眼を覚ます。

その牙で、少女の絶望を食いちぎる為に。

先の三機の様に、光る柱を形勢した《シュヴァルツェア・レーゲン》は操縦者のラウラごと光の中に消え、漆黒の柱が弾け飛ぶと同時に新たな姿を曝した。
かつて《白式・両儀》が模倣の域を越えて強化発展させた姿を取り、インフィニット・ストライカーと化した《シュヴァルツェア・レーゲン》。
その名を、《シュヴァルツェア・ヴォルフ》といった。

「な…」
「……」
「くっ……おい、ラウラ！　いい加減…に！？」
「戦えと言っている！！」

ラウラの異変、機体の変化、頭が痛まずとも着いていけない事態にたじろぐ一夏に、容赦無くプラズマ手刀を繰り出したラウラ。
辛うじて躱したその手刀から、更にワイヤーブレードが延びる。

「くっ……やるしか、無いのか！？」

逡巡する間にも延び続けるワイヤーブレードは囲む様に延びて一夏に迫る。

「変身！！！」

突き刺さる直前、白い光が一夏を包んでその姿を《白式・両儀》へと変え、直後に今度は漆黒が機体を染め上げて外装を《シュヴァルツェア・ヴォルフ》と同じくし、真紅の瞳が黄金に輝いた。
起動と同時に唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《フォームチェンジ》を発動させた《白式・両儀》は《白式・影打》部分を《シュヴァルツェア・ヴォルフ》へと変え、瞬時にＭＡＩＣ（マルチロック・アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）を発動させてラウラの放ったワイヤーブレードの動きを封じる。

「どうして…」

黄金の瞳で見つめながら、目の前の少女に問う。

「…どうしたんだよ、ラウラ。いったい何が……」
「うるさい！！　お前は私と戦っていればいいんだ！！！」

しかし、返ってきたのは問いに対する返事では無く散弾の弾膜だった。

「くっ……ラウラ！」

ＡＩＣと違ってＭＡＩＣは完全に機体が使用に関しての官制を行うので操縦者が集中し続ける必要は無いのだが、何かするのに全く集中をしない人間など居ない。
ＭＡＩＣ自体は機械任せとはいえ、その冴え過ぎる五感が……聴覚が散弾の飛び散る音で弾のひとつひとつの位置を捕らえ、異常な動体視力を発揮した視覚もまた全ての弾の軌道を見切ってしまう。
そんな、まず常人では得られない感覚情報を脳が処理し切れるハズも無く、頭痛は酷くなるばかり。

「くっ……」

左腕で痛む頭を押さえ、右腕を振るいながらワイヤーブレードを射出。

しかし射出したワイヤーブレードは一夏がそうした様にＭＡＩＣに阻まれ、ラウラに届かない。

「くぁ……このっ」

「……」

ＭＡＩＣの前ではあらゆる質量を持った兵器は無意味だ。

複数の刃でバラバラの方向から同時に切り掛かられようが、散弾を撃たれようが、全て止められてしまう。

ロクに機能しない頭でもそのぐらいは理解出来た一夏は、拡張領域（バスロット）から《ボルティックシューター》を呼び出し（コール）し、構える。

確かに、その判断は正しい。

ＭＡＩＣを以ってしても、ビームは止められないのだから。

だが、動きが酷く緩慢過ぎた。

せっかく機体が０．０１秒という速度で武装の召喚から照準合わせまでをやってのけたのが完全に台無しになるぐらい、一夏の動きが遅い。

（ここまで酷いのか……）

後はもう、トリガーを引くだけだというのに、たったそれだけの動作ですら儘ならない。

それほどまでに、感覚情報が脳を圧迫しているという事実が哀れで

ならなかった。
自分の様に、作られた存在で尚且つ失敗作だというのも十分悲嘆する様な事だが、一夏のソレはそれどころの話では無い。
これでは誰に殺意を向けられずとも、ただ自分以外の誰かが存在するだけで……否、自分の存在すら自分自身を殺し兼ねないではないか。

（どうして、こんな…）

どうして一夏がこんな目に合わなければならないのか。
こんな力さえなければ苦しむ事なんてなかったのに。
思えば思うほど、ラウラの決意は揺らいだ。

確かに、侵略者の存在は無視出来ない。
だが、何も一夏が戦う必要なんて無いのではないか。
そう、思ってしまう。

だが、一夏が戦え無いなら『彼』が戦う事になってしまう。
一夏の身体を、完全に乗っ取って。
そうなってしまえば、一夏は消滅してしまう。
そんな事は許せない。
認めたくない。

戦って欲しく無いとは思う。
こんなに苦しむ彼を見れば見るほどに、その思いは強くなる。
なのに、戦って欲しいと思う自分がいる。
彼に消えて欲しくないから、彼に辛い道を歩ませようとしている自分がいるのだ。

（私は…私達はなんて…）

我が儘なんだろう、と。
彼自身が知らぬとはいえ、自分達は彼に消え欲しくないが為に彼に辛い道を歩ませようとしている。
これは彼の人生だ。
何をどうするかなんて彼自身が決めるべきなのに。

（それでも…）

それでも、彼に消えて欲しくなかった。
戦って欲しくない、でも戦うしか道が無いというのなら――――

「オォォォォォォォォッ！！！」

大きく広げ、鞭の様にしならせながら突き出した両腕から発射された１０本のワイヤーブレードが、
両肩の多目的キャノンが放ち、ワイヤーブレードの間を縫う様に飛び散った散弾が、
一斉に、襲い掛かる。

――――せめて、彼の為に全力を。

「がぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

躱し切れない散弾の雨が一斉に襲い掛かる。
シールドバリヤーや絶対防御、《白式・両儀》そのものの装甲、三重もの防壁に守られた一夏自身は無傷だ。
だが、着弾した散弾の衝撃は三重の防壁を以ってしても消し切れるものではない。
ましてや、今の一夏の五感は人間の枠を越える程にまで鋭敏になっ

ているのだ。
絶え間無い着弾音が聴覚を、着弾によって生じる衝撃が触覚を襲い、一夏の脳に更なる負担を強いる。

一秒にも満たない短い時間に殺到した感覚情報に押し潰されそうになり、膝を着きそうになった《白式・両儀》に一瞬遅れて到達したワイヤーブレードの群れが突き刺さった。
突き刺さる衝撃で仰向けに倒れそうになった一夏に追い撃ちを掛けるかの様に、今度はワイヤーブレード伝いに高圧電流が流し込まれる。

「がぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

かつて《白式・真打》が敵に巻き付けた《マイクロチェーン》伝いに《エレクトロファイヤー》を放った様に、
それを模倣し、改造を受けたオータムの《アラクネ》がワイヤーブレード伝いに電撃を見舞った様に、
《シュヴァルツェア・ヴォルフ》もまた、両腕のマニュピレーターの先端に設けられたクローをワイヤーブレードとして射出し、プラズマ手刀のプラズマ発生の応用で放った高圧電流がワイヤーブレード伝いに《白式・両儀》に襲い掛かる。

「あ……が……がっ」

殺到し続ける膨大な感覚情報を前にパンクしたも同然の脳。
”立っている”、ただそれだけの命令を身体に送る事すら儘ならなくなってその場にへたり込んだ。

「……はぁ……はぁ……」
「……」

息も絶え絶え、立ち上がろうにもそんな命令自体が脳から送られて来ない。
そもそも、立ち上がるという意志すら紡げない。
遂に何も考える事が出来なくなり、それなのにこうしている今も尚、規格外な身体が送り続ける膨大な感覚情報に曝され続ける脳。
それでも、歩み寄るラウラの足音に反応したのか、足音の方向に顔を向ける一夏。

（……やはり、同一人物なんだな。『アイツ』と一夏は）

非常に癪だが、彼を想う自分達よりも、機体経由で彼の内側に潜んでいた『彼』の方が、一夏の事を理解出来ていたらしい。

秘匿回線で『彼』から伝えられた指令。

『鋭敏過ぎる五感で膨大な感覚情報を全て拾わせて、脳をパンクさせろ』

正気の沙汰とは思えない指令内容。
もしかしなくてもそれで脳を破壊して一夏を消し去って、《白騎士》の《生体復元》で復元された、”一夏の居ない”脳に居座るつもりではなかろうかと勘繰った。
だが、上下関係がどうなっているかが不明とはいえ、『彼』もまた束の共犯者である。
その共犯者が、束の嫌う事を……親友である千冬との関係が切れてしまう様な事を承諾するのだろうか。
そう考え、ラウラは少なくとも”今は”『彼』が一夏を消すつもり

は無いと判断する事にした。

（『アイツ』の今までの言動からして、生身の肉体に執着が全く無いとは言い切れ無い。”いつかは”と思っているのかもしれないが……そう上手くいくと思うなよ）

あの時は、軽くあしらわれただけだった。

だが、今は違う。

あの時よりもずっと強くなった自分達が、そう簡単に負けるものかと。

機体もパワーアップして、その力を使い熟してみせた自分達が、簡単に。

そう思ったからこそ、今こうして一夏と対峙している。

不調を承知の上で痛めつけ、痛めつけられた一夏は立ち上がる事も儘ならない。

「ふんっ」

「ガッ！？」

そんな状態の一夏に、容赦無く手刀を叩き込むラウラだったが、叩き込まれた手刀は反射的に動いた一夏によって躱された。

地面をはいずり回りるその様は、随分不格好だったが、そんな事は大して重要ではない。

手刀の軌道を目で見切り、風切り音で聴いて、躱したのだ。

稚拙ではあるものの、その鋭敏過ぎる五感をちゃんと活用して、五感が得た感覚情報を元に行動する事が出来た。

それこそが今、一夏が必要とされる技能。

右の手刀を躱されたラウラは、直ぐさま左の手刀を薙ぐ様に払った。
一撃目同様、払われた手刀の軌道を正確に見切ってみせた一夏は地面を転がりながらもしっかりと躱してみせる。

（全く…随分と損な役周りだな）

恐らく、順番も束が適当に決めたものでは無く、始めからこうするつもりだったのではないかとラウラは思う。
或は、『彼』が途中から束にそうする様に依頼したのではないか、と。
主犯が束か『彼』なのかは解らないが、どちらにしてもインフィニット・ストライカー同士の戦いによって、一夏の覚醒を促す算段だったに違いない。

（私の順番が最後だったのも……いや、一夏の覚醒後に回されたのも、私が他と違うからか）

箒はただの専用機持ち、鈴音・セシリア・シャルロットは代表候補生だ。
ラウラだって他の三人同様に代表候補生だが、代表候補生である前に軍人である。
専用機を宛がわれてからはそれなりに外国に顔が知られる様になったので後ろ暗い任務には従事していないが、以前は破壊工作や殺しも任務の内だった。

箒も束の関係者である以上、それなりに人間の汚い部分も見て来ただろうが自分で手を下した事は無いし、代表候補生三人に関しても訓練過程で”軍人紛い”な事はやった事はあってもその手を血で汚

した事は無い。
だから、彼女ら四人の内の誰かではラウラほど冷徹に、徹底的に一夏を痛めつけることなど出来はしないだろう、と。
他の四人では手を緩めてしまいかねないから、こうして冷徹に割り切れるラウラが選ばれたのだ。

「ふっ……ハッ！！」
「ガッ……くぁっ」

思考しながらも手を緩める事無く、断続的に振るわれ続ける手刀を、一夏は躱し続けた。
相変わらず躱し方が不格好だったが、やる事はやっているのだ、十分に及第点だろう。

（……いいだろう、今は人形らしく『お前』の思う様に踊ってやる。だが…）

手刀を振るいつつ、一夏の背後、遥か後方に立つ『彼』を……世の不条理の権化たる『彼』を睨み、吠える。

「私達を……私達の一夏を嘗めるな！！！」

第９２話「噛み砕け、漆黒の魔狼よ」（後書き）

次回、一夏　ＶＳ　ラウラ、決着

《シュヴァルツェア・レーゲン》パワーアップ案（名前）採用は鳴神さんの《シュヴァルツェア・ヴォルフ》でした～♪
おめでとうございま～す

ラスボス（『一夏』）とのバトルで３話分キープしてるので、次回第９３話以降、第９７話までの間に我らが空気…じゃなかった、箒さんの出番はあるのか！？
あと、なんか髪が水色な姉妹もいた様な気もするけど彼女らに再びスポットは当たるのか！！？

次回、「切り拓け、地球の未来！」

お楽しみに～♪

箒「…って、おい！　次回のタイトル明らかに違うだろ！！？」

第９３話「羽化／神獣覚醒」（前書き）

「そういやヴォーダン・オージェ出して無かったよな～、うちのラウラって」

な～んて思ってしまったのが運の尽き、投稿するハズだった原稿（？）に大幅な加筆修正をするハメになって、結局投稿がかなり遅れてしまいましたｏｒｚ

■今日の空気さん

箒「……なぁ、どうにかならんのか？　このタイトルは」

※なりません（笑）

箒「……まぁ、いい。後が支えているからな。さて、今回紹介するのは…」

静寐「は～い、篠ノ之さんのルームメイトの鷹月静寐で～す。みんな～私の事知ってる～？　因みにここの作者はウィキペディア見て初めて私の事知ったらしいよ？

…で、そのウィキペディアによると……

鷹月（たかつき）　静寐（しずね）

・・声　一　和田カヨ

‥ＩＳ学園の1年1組に所属。
‥一夏からクラス一のしっかりものと評されるほどの生真面目な性格とは裏腹に、いい意味でのジョークが満載された本を好む。現在の箒のルームメイトであり、箒に「カップルがデートで行くお店ベストテン」という記事が載っている雑誌を貸していた。

……っていう、ちゃんと声優まで着いててそれなりに主要キャラに認知されてるキャラなのに、ここの小説だと宇宙人の侵略に対抗するのに忙しくて織斑君が全然私達モブキャラに関わらないから私の出番も全然無いんだよね～。いや～、このコーナー無かったら全三章終わっても名前すら出ないまま終わるところだったよ」
箒「それは……うん、作者が全面的に悪い」
静寐「だよね～」
作者「う…」
静寐「というか、オリキャラ出すんだったら私達にスポット当てるべきだよね」
作者「…すいませんでした（土下座）」

第９３話「羽化／神獣覚醒」

「私達を……私達の一夏を嘗めるな！！！」

そう吠えた少女の声は、その言葉を向けられた人物の耳には届かなかった。

そもそも、戦闘の邪魔にならない様に離れた場所で観戦しているのだから何か叫んでいるのが解ったとしても何を喋っているのかまでは判別出来るハズが無いのだ。

だから、その言葉を向けられた人物を含めたその場にいる誰の耳にもラウラが何を叫んだのかを聞き取れなかった。

……そう、耳には。

しかし、本来なら届かなかったハズの言葉は確かに言葉を向けられた人物に届いた。

言葉を向けられた人物は耳という器官を持ち合わせてはいなかったものの、代わりに自身を納めた器（機体）に搭載されたハイパーセンサーが言葉を音声情報として収拾しているし、周りにいる女性や少女らも自前の耳で聞き取れずとも自身の機体のハイパーセンサーごしにラウラの叫びを聞いていた。

「…だってさ？　『いっくん』」

『フッ……』

言葉を向けられた男、そしてこの茶番劇の仕掛け人。

姿（実像）無き陰（虚像）、一つの未来（結末）。

もう一人の男、『織斑一夏』。

その『彼』の隣で観戦していた束が話し掛け、話し掛けられた『彼』は笑みを零した。
肉体を失って久しい『彼』が現在自身を納めているのは漆黒（空っぽ）の甲冑である為に、声色のみのでしか表情というものを表現出来ないのだが、どうやら嘲笑では無く純粋に笑っているらしい。

「「「「？？？」」」」
「～♪」

そんな『彼』の反応が意外だったのか、周りで観戦していた少女らが皆一様に怪訝な表情を作った。
自分達とは対象的に『彼』と同じく笑みを零す束の反応に、少女らは首を捻る。
一方、千冬はというと、余程弟の事が心配なのか珍しくハラハラとした様子で一夏とラウラの試合を見守るのに忙しいらしく、会話に参加する気が無いらしい。

『……恵まれてるな、アイツは』
「恵まれてる？」

懐かしむ様に紡いだ言葉。
記憶を記録しただの機械仕掛けの機体（身体）になっても尚、鮮明に思い出す過去の自分の在り様。
『彼』が今の一夏ぐらいの年代の頃には、この世界と違って既に人類とヤツらとが戦争状態にあった事もあってか、都合良く能力だけを買われて戦場をたらい回しにされる日々を送っていた。
来る日も来る日もヤツらをちぎっては投げ、引き裂き、打ち砕き、擦り潰し、爆破し……そんな毎日。
そんな毎日の中、一応……仲間、或は友軍と呼べる者達も居たには居たが、皆が皆、表面上は友好的に振る舞ってはいても陰では『彼』

の事を恐れ、揚げ句何気なく座った状態から立ち上がっただけで悲鳴を上げる者まで出る始末。
稀に面と向かって化け物呼ばわりする者まで現れもしたが、怖いなら何故そうやって自分から襲われる様なマネをするのかと呆れたのを今でも覚えている。

そんな風に周りから拒絶され、常に孤立していた『彼』だからこそ、目の前のもう一人の自分の在り様が異常に見えた。
世界そのものの辿った歴史が異なっている事も、それに合わせてこの世界の自分自身の過ごした環境が違うという事も頭では理解していたが、とても今目の前で呻き声を上げながら不様に転がっている男と自分とが同一人物だとは思えなかった。

自分自身の違いもそうだが、一夏の取り巻きの立ち位置も随分違った。
そもそも、『彼』が自分の世界の『彼女ら』と出会ったのは２０代になってからだったというのもあるが、

『セシリア・オルコット』と『シャルロット・デュノア』はそれぞれ貴族と兵器メーカーの令嬢で、国を渡り歩く中で請け負った護衛任務で一度ずつ会った切りだったし、

『鳳鈴音』はたまたま任務で中国に赴いた際に立ち寄った中華料理店の看板娘で、値段の割りに美味かったのと他の店を探すのが面倒だった事もあって赴任中はずっと店に通っていたので互いに顔見知りなだけ、

『ラウラ・ボーデビィッヒ』はこの世界同様、軍属であったのでメンバーの中では一番顔を合わす機会が多かったが、見る度にヤツら

に向かってやたらと殺すだの死ねだの喧しく叫んで容赦無く蹂躙する危ない女だったし、外見もこれから急成長するのかは不明だが、『彼』の記憶の中の『ラウラ』はもっと背が高くて出るとこ出ており、もはや同一人物というよりは歳の離れた姉妹の様で、

『篠ノ之箒』に至っては謀殺なのか事故死だったのかは不明だが、篠ノ夫妻が早死した為に生まれてすらこなかった。

（……本当に、何もかもが違うんだな。此処（この世界）は）

「おい、恵まれてるというのはどういう意味だ？」

『……気にするな。ただの独り言だ』

「……」

気になって再び問うた箒に『彼』は答えず、試合に集中しろと言わんばかりに顎で一夏の方を指した。

ぞんざいな態度であしらわれた箒は暫く『彼』を睨み着けていたが、取り合うつもりが無いのか、『彼』は黙って視線を試合に向けたまま。

諦めて姉に視線を向けるも、当の姉も内容について話すつもりは無いらしく、笑顔を返すだけで口を割りそうにない。

（…まったく、なんなんだこの男は。……それに、姉さんも姉さんだ。どうしてこう……いや、いい。姉さんは……今更だしな。うん）

そう心の中で愚痴りながら、再び観戦に集中する事にした。

「がっ……あぁぁぁぁっ！！！」
「おっと…（反撃できる程度には頭が回る様になったみたいだが…）」

箒らがそんなやり取りをしている間にも延々と続いていた攻防。

ただしそれは一方的なもので、攻撃を繰り出すのはラウラだけで一夏は避けだけで精一杯といったところ。
先程漸く一夏が反撃に出たものの、反撃というには余りにも稚拙だった。
だが、それでも反撃は反撃。
はいずり回って躱し続ける事しか出来なかった最初の頃と比べれば随分と進歩している。

「がっ、ぁぁぁぁぁぁぁあっ！！」
「…っと、そうだ。それでいい」

手刀を躱しながらカウンターを何度も仕掛ける一夏。
繰り返せば繰り出すほどその反撃は鋭さを増していくのだが、やはりまだ思考する程の余裕が無いのか、武装を呼び出し（コール）する事も儘ならないらしく、ラウラが手刀にプラズマを纏わせて繰り出しているのに対し、一夏はたたクローで引っ掻きに来るだけで、やる事が随分原始的だ。
恐らくは感覚情報の処理速度自体を向上させるか、五感の感覚器官を完全に制御して脳に入力される感覚情報を絞れる様になるかしな

い限りはずっとこんな調子の攻防を続ける事になるのだろう。
或は、五感の高まりが治まって通常状態に戻りでもすればもっと効率良く武装を運用出来るのだろうが、『彼』曰く「本人が制御出来ないせいで急に五感の索敵範囲が広がる上に、そうなったらそうなったで暫くそのまま」らしいので試合中にまた通常状態に戻るとは考え辛い。

（……やはり、暫くこのままで…！？）
「あぁっ！？」

ならば暫くは様子見を…と思っていたその矢先、先程と同様に一夏が手を延ばし、それをラウラがバックステップで躱した途端、急に《白式・両儀》のクローが射出されてワイヤーブレードがラウラに向かって延びた。

（まさかもう！？　……いや、《白式・両儀》が”手を延ばす”というイメージを拾っただけか？）

意表こそ突かれたものの、難無くＭＡＩＣを駆使して一夏の放った五本のワイヤーブレードを止めたラウラは、そのまま大きく飛びのいて後退し、一夏の様子を注意深く観察する。
こちらが何も仕掛けて来ないからか、巻き戻って行く自身の爪を不思議そうに眺めている辺り、どうやら自分の意思でワイヤーブレードを発射したワケでは無いらしい。

（気のせいだったか……全く、機体が優秀過ぎるのも考えものだな）

確かにラウラもワイヤーブレードを使用する際は手を延ばすイメージでこれを使用するが、その前に武装を選択するというプロセスを要する。

毎度毎度手を延ばそうとしただけで勝手にワイヤーブレードが射出されたのでは邪魔で仕方が無いからだ。
この一種のセーフティーの様なものがあるからこそ武装の暴発が防げるのだが、どうやら《白式・両儀》は操縦者が自分でセーフティーを解除しなくても必要な場面になれば勝手に機体の方で解除して武装を起動させてしまうらしい。

（篠ノ之博士が直接造った機体である以上、暴発の線は薄いか……）
（…だが…）

もし、そうであるのなら一夏がこのままでも戦闘が出来てしまう。
現状、感覚情報の処理を優先するあまり自我すら薄弱で、人間というより獣に近い状態の一夏。
一応予定としては第一段階としてこのまま感覚情報の処理、つまりは取捨選択や感覚器官の感度の調節をきちんと熟せる様に慣れさせ、そして第二段階として慣れた分だけ生まれる余裕で徐々に理性を取り戻して常人離れした五感と《白式・両儀》という力を理性をもってコントロール出来る様に持っていくという段取りだったのだが、機体の優秀さが仇となった。
親が過保護で何でもかんでも親がやってしまって一切”学べない”環境で育った子供が社会に出てもまるで使い物にならない様に、優秀過ぎる機体におんぶに抱っこしてもらっている様では一向に一夏の成長に繋がらない。
確かに一般生徒より上級者を……代表候補生を相手取った方が戦闘の経験値は貯まるし、その為に一方的に嬲られずにこちらからも仕掛けられる様にするのならただの専用機程度では不可能である。
だから、その点に関しては束が一夏に《白式・真打》を…《白式・両儀》を手渡したのは正しい判断であるし、《フォームチェンジ》

を使い熟す為にオリジナルの操縦者から学ぶというのも必要な事だったのだろう。

（……だが、それは表向きの話だ）

束の真意はともかくとして、どうやら『彼』は今回のこの模擬戦を操縦者として一夏に《フォームチェンジ》を使い熟す事よりも感覚器官のコントロールに重きを置いてる節がある。

確かにどちらも必要な事ではあるが、身体のコントロールに慣れさせるのに一戦交えるのなら《打鉄》や《ラファール・リヴァイヴ》の様なクセが無く使い安い機体こそ適任のハズである。

（まさか……侵略の件、そこまで切羽詰まった話だったのか？）

ただでさえお世辞にも器用とは言えぬ一夏に、生まれてから今まで一度も上手くいった試しの無い身体のコントロールをやらせて、それでいて更に《フォームチェンジ》の為にオリジナルの操縦者から戦い方を学べなどという無茶振りをしなければならないほど、あの怪物が群れを成して地球に向かってくる日が近いというのだろうか？

仮にそうだとするのなら、今は身体のコントロールだけに傾倒すべき……というより、何故この問題を今まで放置してきたのだろうか？

そもそも、オリジナルの操縦者から戦い方を学ぶにしても、一夏は一夏で代表候補生は代表候補生だ。

いくら機体が同質の物に変化出来る上に代表候補生がそれらの最適な運用方法を会得しているとはいえ、ソレが一夏の戦い方に合うとは限らないのではないか？

等々、疑問は尽きない。
少し考えただけでも穴だらけに感じる計画である。
元来の計画がどの様なモノであれ、仮に予想以上に怪物の侵略が早まったのだとしても詰め込み過ぎではなかろうか？

（まさかアイツ…）

一夏が負ける事を前提で計画を進めているのではなかろうか？
勝てたら勝てたで良し、負けたら負けたで一夏が必死になって戦って集めたデータを反映し、より完成に近づいた《白式・両儀》と生身の身体を手に入れられる。

（…始めから、そのつもりで？）

怒りが込み上げる。

始めから、頑張った程度でどうにもならないと解った上で今までの様な一夏の成長よりも機体の完成に重点を置いた計画を練っていたのではないか？

（いや、だったら始めから一夏の身体を乗っ取っていれば……だが、それだと……）

色々と良くない方向に思考が進んだところで別の疑問が浮かび上がった。
篠ノ之束は身内には寛容であるのと同時に、身内に危害を加える者を絶対に許さないのだ。
束が身内と認識している数少ない人間の一人である一夏の存在の抹消を許すとは到底思えない。

束の態度からして『彼』も身内と認識されている様だが、いくら束の感性が常人とはズレているとはいえ、他人が身内に危害を加えるのはダメで身内同士なら殺し合ってもいいと思っているとは考え辛い。

（クソッ……何なんだ『アイツ』は！）

神出鬼没で正体不明、ついでに行動理念も意味不明。

ラウラを含めた彼女ら一夏の取り巻き、いわゆるいつものメンバーが『彼』に抱いた印象がそうであり、突然表出したあの日からそうであったとはいえ、最近特にソレが顕著になっていき、極め付けがコレだ。

意味不明にも程がある。

「がぁぁぁぁっ！」

「ハッ（……っと、さっきまで獣染みていた動きもかなり人間らしくなって来たか。……となると、今のまま考え事をしながらやり合うのはこちらの方が危険か？）」

脳の制御を離れ、その有効範囲を爆発的に広げた感覚器官がかき集めた膨大な感覚情報が脳を圧迫し、発狂……というより理性を機能させる余裕すら失って獣化し、敵意・害意・殺意……それらの象徴たる”武器”の存在に防衛本能が過敏に反応してシャルロットに襲い掛かった一夏。

一時的に正気を取り戻したものの、『彼』の企みに渋々加担したラウラの猛攻によって更に脳に入力される感覚情報が増大し、今度こそ完全に理性が吹き飛んだ。

しかしそれも、脳の処理速度が上がったのか、それとも脳がちゃんと感覚器官を制御出来る様になったのか、或は両方なのかはラウラには知り様の無い事であったが、その動きもこうなった当初と比べ

て見れば随分と人間らしくなった様に見える。

……が、

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「！！？　…ちょっ、おまっ…そんな使い方をするヤツがあるか！」

両肩の多目的キャノンをサイやトリケラトプスの角に見立てて突進を仕掛けて来る辺り、まだまだ獣臭さが抜け切ってない様である。

「キャノンはこう使うんだ！…って、あ」

「がぁぁぁぁぁぁっ！！？」

「なっ！！？」

あまりにもあんまりな使い方をするものだから、思わず真っ当な用法で両肩のキャノンから散弾をバラ撒いてしまったラウラ。

やり過ぎたかと思う頃には既に一夏は散弾の雨に曝されており、更にやってしまった感を強めた。

しかし一夏も一夏でその散弾の雨の中を強引に突っ切り、クローで引っ掻きに掛かる。

「くっ……ハッ！！」

「ガッ！！？」

しかし手が届くよりも早くラウラの蹴りが先に炸裂した為に一夏の仕掛けた突撃は失敗に終わって地面に激突した。

「あぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「くっ……またか！？」

再び飛び掛かって腕を振りかぶり、身体ごと回転させながら引っ掻きに来る一夏の攻撃はバックステップで躱されて空を切る。
そのまま回転を続ける事に寄って勢い着けられた右腕から再びワイヤーブレードが延びた。

「そう何度も同じ手を……！！」

ラウラに向かって延びたワイヤーブレードは一度目同様ＭＡＩＣで全て止められたものの、今度は続けて左腕のワイヤーブレードが飛来する。

「チッ……」

再びＭＡＩＣを起動させ、左腕から放たれた方のワイヤーブレードも全て停止させたラウラは空中で停止した両腕のワイヤーブレードの間を瞬時加速（イグニッション・ブースト）で縫う様にかい潜って一夏に急接近し右腕を振り上げる。

「自分の技で沈め！　大切断！！」
「ガッ！？　ガァァァァァァッ！！？」

プラズマを纏った手刀が《白式・両儀》の装甲を不覚切り裂く。
左肩から右の脇腹まで切り裂かれ、血飛沫の様に火花を散らせながら墜落する一夏。
墜落と同時に地面でバウンドした拍子に出しっ放しだったワイヤーブレードが絡まり、身動きが取れなくなってもがくものの、反ってそれが逆効果になってワイヤーブレードが機体に絡まってしまい、遂には完全に身動きが取れなくなってしまった。

「が……ガガ…」

動けば動くほどワイヤーブレードが絡まるという悪循環、それでも一夏はもがいた。

目の前の敵を排除する事で頭が一杯なのだろう、芋虫の様にもがきながらもバイザーの奥の瞳だけはラウラを睨み続けている。

一夏が冷静であったのなら、仮に冷静でなくとも”普段の”一夏だったのなら、ここで展開装甲を起動させて隙間から《大切断》なりなんなりと刃物を形成してワイヤーを切るところなのだが、今の一夏ではそれが出来ない。

「ガァァァァァァッ」

なので、当然力技でワイヤーブレードを引きちぎろうとするのだが、そう簡単にちぎれるハズも無く、ひたすらもがいて喚くばかり。

「……これは、一旦解いた方がいいのか？」

これでは対戦に……《フォームチェンジ》の訓練どころか前段階の感覚器官のコントロールの訓練にならないのではないかと思い、プラズマ手刀を構えた……が、冷静に……感覚器官のコントロールが出来る様になれば「どうすればワイヤーブレードを切り裂く事が出来るか」と、考える事が出来る様になるハズなので、このまま放置した方がいい様な気もして判断に迷う。

「ガッ…ガァァァァァァッ！！！」

「なっ…強引過ぎるだろ！？　お前！！？」

結局、ラウラが攻めあぐねている間に一夏は強引に力技で……ワイヤーブレードの耐久力を越える力で引きちぎってしまった。

……様に、見えた。

「ア〝ァアアァァァアァァッ！！！　だイッ、せつ断んン！！！！」

「なっ！！？」

ラウラが先に使って見せたのが幸を奏したのか、たまたま一夏がある程度理性を取り戻したのとタイミングが重なっただけなのか、装甲を展開して”全身に”カッターを出現させてワイヤーブレードを切り裂いた一夏は、その勢いでラウラに飛び掛かった。

「くっ……いつもの《大切断》と違う！？」

通常サイズで《大切断》、最長にまで刃を延ばせば《スーパー大切断》。

その程度違いなら今までもあった。

だが、今の《白式・両儀》のソレは違う。

両腕の前腕から生えた《スーパー大切断》もいつもとは形状が異なる上に、背中から触手の様に延びる刃を生やし、踵から生える《ヒールクロウ》もいつもより随分長く鋭い。

おまけに肩からも刃を生やすその様はまるでエクシードギルスの様である。

当初よりは理性を機能させる余裕が出来たとはいえ、まだまだ己の感覚器官の制御に脳の演算機能の大半を割いている一夏に、複雑な物事を考える余裕など無い。

しかし、発音し切れていないとはいえ”言葉”を発している事から解る様に、ある程度の理性を機能させる余裕が出来た一夏は、《質量操作》で現状の自分が一番戦える状態に《白式・両儀》を変化させた。

《フォームチェンジ》の様な大掛かりな変化では無く、ただ単に全身から刃物を生やすだけの単純な変化。

それで十分。

どうせ複雑な事を考える程の余裕なんて無いのだから。

「アァァァッ！！！」

「くっ……このっ」

本人と比べれば随分稚拙ではあるが、全身の刃物を余す事無く使うその戦い方は《打鉄・剣》の操縦者、風間想を思わせる。

模倣も何も、一度監視カメラの録画映像ごしに見ただけの戦い方。

しかしそれはそれだけを磨いた者だけが辿り着ける一つの境地であり、一切の無駄が無い。

故に、理性を働かせる……無駄な事を考える余裕の無い一夏の戦い方が似てくるのも、ある種の必然だった。

「ちぃっ」

繰り出される刃をいなすが、反撃のチャンスを見出だした瞬間、そのチャンス（隙）を埋める様に縦横無尽に触手がうねる。

肩甲骨の位置から生えたソレは人間の腕ほどの太さがあり、先端に生える鎌の様な突起もあってかなり凶悪な見た目をしており、その見た目同様本来の腕より自由に動き回る第三・第四の腕と化した触

手は驚異だ。
幸い、機体からのサポートを受けていないからか、両腕と触手を合わせて二本ずつしか同時に使えない様だが、その複雑怪奇な動きは読み辛い事この上無く、ＭＡＩＣで狙いをつけても効力を発揮する頃にはその場にいない。

（チッ……、このままでは一夏が感覚器官の制御を完熟させる前に私が負けてしまう）

いくら機体のサポートがあるとはいえ、右眼だけでＭＡＩＣの狙いを着けて対応するのが困難になりつつある。
攻撃をいなし続けている現在も尚、一夏は徐々に己の鋭敏過ぎる感覚器官の制御に慣れ始め、その分だけ理性を働かせる事が出来る様になった事もあってか一撃事に攻撃の鋭さが増している様な錯覚すら感じる。

（……使うしか無いのか？　アレを）

一夏が生まれながらにして人の枠を外れてしまっていた者ならば、意図して人の枠から外されたのがラウラだ。
教育係こそいたが、父も母も知らぬラウラが誕生した場所は母の子宮では無く試験官の中であり、人の”部品”で構成されているとはいえ、人の子として生まれてこなかったラウラは兵器として育てられ……否、調整を受け紆余曲折を経てここにいる。
人として生きてきた日々も勿論ある。
だが、兵器として運用されてきた日々も、確かにあった。
その象徴であり、失敗作の烙印たる左眼。

手術以降、制御が効かず兵器としての信頼性は落ちに落ち、失敗作との烙印でしか無かった左眼。

しかしそれもドイツに出講して来た日本の元代表、織斑千冬の指導もあって、今では完全に使い熟す事が出来る様になった。

（…なら、今度は。……今度は私が一夏を導こう。あの人の様に）

ＩＳ学園に登校する様になって以来、久しく使っていなかったこの左眼の封印を解くのなら、今ほど相応しい時は無い。

だから――

「だから、先達として自らこの”力”の封を解こう……ヴォーダン・オージェ！！！」

――――かつての千冬がそうした様に、この黄金の瞳を以って、一夏を人に戻してやる。

その決意を表す様に、風呂以外ではついぞ外す事の無かった眼帯を外した。

肌が外気に触れられたのを感じ取り、眼帯の奥で閉じられたままだった瞼が今、開かれる。

開かれたその左眼は、目の前に立ち塞がる黒い獣と同じ黄金を燈していた。

まるで、《白式・両儀》という仮面の奥の一夏を見透かす様に。

第９３話「羽化／神獣覚醒」（後書き）

最近の友人との会話で、

友人「イクリプスってどんな酒が好きなの？」
自分「ん～、なんつ～か、味がどうこうってより、酔えればいいっていうか……」
友人「じゃあ、度数のキツいヤツとか？」
自分「いや、徐々に酔っていく感触が愉しみたいっていうか……」

なんていう会話をした後、自宅で酒呑んでて気付いたんですが、私が現在第一章を書いてる『仮面ライダー白式』って、第二章は『彼』の話……つまり、ある意味で過去編っていうか平行世界みたいな話なんで、第一章のキャラって『彼』と束さんしか出ないんですよ（上の会話関係無ぇっ！！！）。

…で、アンケートというか、

？このまま第一章のエピローグの次に第二章のプロローグを続ける

？別に分けてちゃんと第一章のキャラが続投する第三章を続きに書く

？仮面ライダーキバ形式で過去と現在を混ぜながら…つまり、第二章と第三章を混ぜたものを続きに書く

の、どれがいいと思いますか？

票数が多かった者を採用しようと思います。

……あ、

「つまんねぇ話をいつまでもグダグダ書いんじゃねぇよ！　止めちまえ！！」

みたいなのは無しの方向で（笑）

第９４話「黄金の瞳」（前書き）

作者「エピローグ、書き終えました」
一夏「エピローグ”だけ”だろ？」
作者「ギクッ！？」

■今日の空気さん

箒「（やっぱりまたこのタイトルか……）……さて、今回登場するのは…」
ティナ「はいは～い♪　ティナ・ハミルトンで～す」
箒「たしか鈴のルームメイトだったな」
ティナ「そうそう、なのに全く出番無くってさ～。しかも私、これでも予定では専用機持ちとしてデビューする予定だったんだよ？」
箒「な！？　本当か？」
ティナ「うん、なのに気付いたら尺が足りなくなってお流れになっちゃって……うぅ、絶ぇ～対！　第二章でデビューしてやるんだからぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

第９４話「黄金の瞳」

「るァぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「フッ…」

黄金を燈すその瞳に警戒心を抱いたのか、一瞬怯んだ一夏はまるで恐怖から逃げる様にラウラに襲い掛かった。

「！？」

逃げる様に、というのは勿論比喩だ。
実際に逃げた所で逃げ切れぬ事ぐらいは一夏も本能で理解している。スラスター推力的にはともかく、ここは通常の空間とは違い束の作り出した特殊な空間なのだから”世界の果て”まで逃げたとしても高が知れているというものだ。
だからこうして目の前に立つ恐怖を打ち砕こうとしたのに、魔狼は一夏の攻撃を意図も簡単に受け止めていた。

「……どうした？　これで終わりか？」
「あぁぁぁぁぁぁっ！！！」

両手両足と触手を縦横無尽に駆使した連撃はあっさりといなされ、いなした本人は涼しげな顔で一夏を見ていた。

「ガァァァッ！！！」
「甘い！」

右手が、左側の触手が、左足が、右側の触手が、右足が、左手が、

繰り出す度にＭＡＩＣによって動きを封じられ宙に張り付けにされた一夏。
いくらもがけどもその拘束は解ける事無く、ただ虚しく首を振りながら呻き声を上げるばかりだ。
《質量操作》で《零落白夜》を発生させる器官を作ってしまえば抜け出せるハズのこの拘束も、まだ一夏にそこまで思考する余裕が無いのか、拘束を解こうとしてはいるもののワイヤーブレードを切り裂いた時の様に全身のカッターがより鋭くなっていくばかりでなんら解決になっていない。

「はぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「ガハッ」

そんな一夏に容赦無く浴びせられるプラズマ手刀の連撃、流星群を思わせるその青白く輝く光が《白式・両儀》に殺到し、漆黒に染まったその装甲をえぐり取る。
砕け散る装甲、シールドバリヤー越しに届く衝撃、為す術の無い一方的な蹂躙がそこにはあった。

「ハァァァァァッ……ダァーッ！！！」
「ガァァァァァァァァァッ！！！」

数えるのも馬鹿らしくなる程の連撃を喰らい、大破寸前にまで追い込まれた《白式・両儀》に、トドメとばかりに蹴りが叩き込まれる。
蹴り飛ばされた《白式・両儀》は轟音と共に地面に激突し、舞い上がった粉塵の中に消えた。

「……やり過ぎたか？　いや、しかし…」

蹴りを喰らう寸前、《白式・両儀》の装甲隙間から漏れ出す紅い燐

光を確かに見た。
右の真紅の瞳だけでは見落とすところだったが、黄金を燈すこの左目は確かにその光を捕らえていたのだ。

「……あの光」

間違いなくあの紅い燐光は《零落白夜》のソレだった。
……正確には擬似の方だが。

唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《零落白夜》を発現させた機体はかつて織斑千冬がモンド・グロッソに出場した際に使用した《暮桜》と、世界で唯一の男性ＩＳ操縦者であり織斑千冬の弟である織斑一夏に与えられた《白式・影打》の二機だけだ。

唯一仕様と銘打たれる以上、両者のソレはあくまで酷似した別物である可能性が高いが、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）としてこの手の能力を会得したのは《暮桜》と《白式・影打》の二機以外存在しない。
《白式・両儀》はその性質上、《白式・真打》の《質量操作》、《白式・影打》の《零落白夜》、《白式・両儀》の《フォームチェンジ》の三つの唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を同時に運用する事が可能で、また、《白式・影打》が《白騎士》へとその姿を変じている場合は《零落白夜》の代わりに唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）として《生体復元》を使用する事も可能である。
しかし、それはあくまで《フォームチェンジ》で形態を《白式・影打》か《白騎士》に設定していた場合の話であり、現在設定されている《シュヴァルツェア・ヴォルフ》や、先に変じた《神龍》、《ブルー・エンプレス》、《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》の場合は《零落白夜》も《生体復元》も使用不可能となり、一々

唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）の使用の為に《フォームチェンジ》を要するという弱点もあった。

そして、この模擬戦では篠ノ之束の製作者権限で形態の設定が《シュヴァルツェア・ヴォルフ》に固定されている以上、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）である《零落白夜》は使用出来ないハズである……通常なら。

しかし、先に挙げたその弱点にもある程度の抜け道の様なものがある。

それが、《白式・真打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《質量操作》だ。

《質量操作》はその性質上、拡張領域（バスロット）内に質量がある限り、その質量を利用してあらゆる物を生成する事が出来る。

ただ、あくまでソレはちゃんと欲しい物を設計出来る人間が扱わねば張りぼてにしかならない。

なので、一夏がＩＳ学園に入学する以前に束が武装の”型”を用意し、その型のある範囲でなら一夏もこの唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）が使える様になっていた。

先程一夏が使用した《零落白夜》もその一つであるが、厳密には《零落白夜》では無い。

《暮桜》や《白式・影打》の様な同質の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）ですらなく、ただ同様の現象を起こすだけの器官の型を用意していただけであり、同様の現象を起こす為に一くくりに《零落白夜》と呼ばれているだけの物なのだ。

因みに、更識簪の専用機である《打鉄弐式》に搭載されたそれも束の用意した物とは別系統であるがこちらもやっている事はだいたい同じである。

どれも操縦者が使う意思を示せば発動する代物であるが、これが発動してＭＡＩＣによる拘束を逃れたという事は、必然的に一夏も《零落白夜》を使用する意思を機体に示した事になる。

（まさか…、終わったのか？）

鋭敏過ぎる五感を制御する為に、それぞれの感覚器官の制御に追われ、殆ど理性を働かせる余裕を無くしていた一夏。

最初はただ引っ掻いたり蹴ったりといった原始的な方法しかとれず、武装を使用する事すら儘ならなかった。

機体の方が気を利かしてワイヤーブレードを射出した事もあったが、段々慣れてきたのか自分でソレを使える程度には頭が回る様になり、簡単ではあるが唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）も断片的に使用出来る様になったが、どちらも「手を延ばす」「切り裂く」といったまだ原始的な部類の意思を機体が拾ったに過ぎない。

しかし、発音がおかしかったとはいえ、全身に刃物を出現させた際に一夏が口にした言葉は間違いなく《大切断》という武装の呼び出し（コール）だった。

何かしたい、ではなく、何かをする為に何が欲しい。

感覚器官の制御で理性が機能しなくなった当初ではまず出来なかった複雑なその思考。

徐々にではあるが時間の経過と共に感覚器官の制御をものにしていき、そこから生まれた余裕を理性に回す事によって人間味を取り戻していった一夏は、ついに《零落白夜》を使用して見せるまでに五感の制御をものにした。

《零落白夜》の使用、それはつまりＭＡＩＣが特殊なエネルギー運用によって対象の慣性を停止させる事を理解し、尚且つそれに対抗する為にエネルギー無効化能力を有する《零落白夜》が必要であると、そこまで思考出来た証拠に他為らない。

「……全く、やっと起きたか。この寝坊助」

口から漏れた愚痴とは裏腹に、ラウラの口元は喜悦で歪んでいた。
やっと、元の一夏に戻ったと……これで、一夏が消えなくて済む、と。

「一夏ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

嬉し過ぎてポーカーフェイスを決め込む事など出来なかった。
笑いながら襲い掛かるというのも、画面（えづら）としては中々に恐ろしい光景であるのは想像に難くなかったのだが、込み上げて来る笑いを押さえ切る自信など無かったし、押さえる必要性すら感じなかった。
だから、飛んだ。飛び付く様に、或は喰らい付く様に手刀を振り翳しながら。

未だに晴れぬ粉塵に飛び込む黒い流星。
流星が飛び込んだと同時に金属同士が激しくぶつかる音が真っ白な空間に響き渡る。
その音から一拍遅れ、流星の巻き起こした突風によってすっかり晴れた着地地点には漆黒のヒトガタが二つ、向かい合うように立っていた。
遠目に見れば手を繋いでいる様にも見えなくもない二人だったが、実際には片方がもう片方の腕を掴んでいるだけに過ぎない。

「ら…ウラ」
「……おいおい、今のを見切るか」

名前を呼ばれた事は嬉しくはあったが、今は戦闘中だからとその喜びを押さえ込む。
浮かれている隙に負けそうになるなんて一夏の専売特許なのだから、そんな理由で負けたくはなかった。

だが、そうで無くとも勝てる見込みは薄い様に思える。
以前の一夏だったなら、まず切り飛ばされていたハズの手刀が、しっかりと受け止められているのだ。
しかも、何らかの楯で防いだのでは無く、白刃取りの様に。

青白く輝くプラズマの光が、《零落白夜》の紅い燐光に飲まれていくのと同時に、掴まれたアームに亀裂が走る。

「くっ…」

次の瞬間、金属のひしゃげる嫌な音と共に《シュヴァルツェア・ヴォルフ》の右マニュピレーターが握り潰されてしまった。
堪らず後退するラウラに、追い縋る一夏。
互いに瞬時加速（イグニッション・ブースト）で飛び交い、激しい攻防が……否、先程までとは真逆の、一方的な蹂躙が始まった。

「ハッ」

「そんな物……！？」

射出されたワイヤーブレードをＭＡＩＣで止めたラウラに、追い撃ちを掛ける様に放たれた散弾が視界を埋め尽くす。
いくらＭＡＩＣでも一度に停止させられる数は限られているのだが、狙った範囲に複数の物体が存在するのなら、それらを一度に拘束する事も可能だ。
これは、ＡＩＣでも同じである。
しかし、事前にワイヤーブレードを停止させる為にＭＡＩＣを使用”させられた”事によって、同時展開可能数を減らされた今では向かってくる散弾の全てを止める事等不可能である。
ましてや、ワイヤーブレードの射出と同時に放つ事によって、より

弾が散開しているとなれば、尚更。

「くっ……しまっ！？」

更に、自身がＭＡＩＣで動きを封じられてしまっている今、そもそも避けるなどということは不可能だった。

「まだまだぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「くっ……ぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

止められた方とは逆の左手から放たれたワイヤーブレードがラウラを拘束し、そのままぶん回されて地面に叩き着けられた。

衝撃が全身を突き抜け、脳が揺れる。

脳を揺さぶられ、脳震盪を起こし掛けたラウラを、容赦無く今度は上空に向かって一気に釣り上げる一夏。

勢いよく釣り上げられ、今度は一夏の方に向かって飛んでくるラウラに突撃を仕掛けた。

脳を揺さぶられたショックから未だに復帰出来ていないラウラに、青白く輝く斬撃が迫る。

「プラズマァァァァァッ、大ッ切断！！！」

《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》との模擬戦で見せた、即席で放った《大切断》と《エレクトロファイヤー》の合わせ技、デン・ジ・エンドと同じ、即席の合わせ技。

一度目は勘違いから《零落白夜》を恐れて使用を控える為にアドリブで使用し、今回はオーバーキルにならない様に、ダメージを抑える為に放ったその斬撃が、《シュヴァルツェア・ヴォルフ》を切り裂いた。

「ガァァァァッ……グハッ！？」

切り裂かれれ、そのままの勢いでまた地面に叩き着けられた魔狼は、もう立ち上がる力を残してはいなかった。

「…あ～その、大丈夫か？」

「何が大丈夫か？　だ、馬鹿者……それより、お前の方こそ大丈夫なのか？」

「お蔭さまでな」

「そうか」

戦いも終わり、ラウラが横たわる地面に舞い降りた一夏が問うて、逆に心配されてしまった。

それもそうだろう、感覚器官がある程度発達した人間なら探せば見つかるだろうが、一夏の様に発達し過ぎて日常生活どころか下手をすれば生命維持にすら支障をきたす人間などそういないのだから。

「なぁ……お前こそどうしたんだよ、ラウラ。なんつ～か、いつもと様子が違うっていうか…」

「あぁ、ソレはだな……いや、私より”本人”に聞いた方が早いか」

「本人？」

過負荷によって生じる頭痛に耐える中でも、試合開始直前のいつに無く取り乱していたラウラの様子が印象に残っていた。

軍人らしく固い所もあるラウラだったが、かといってガチガチというワケでも無く、ちゃんと冗談も通じるし周りのノリにも合わせられるラウラがここまで取り乱したところを今まで見た事も無かった為に尚更印象深かったのだ。

そしていざ試合が始まってしまった途端、そのラウラの猛攻によってそんな事を考える余裕を失ってしまったワケなのだが、試合も終わり、まだ微かに頭痛はするものの、ある程度は感覚器官をものに出来た今、もう一度その真意を問うた。
しかし、ラウラはその質問には答えず、二人に駆け寄る集団に視線を移す。
釣られてその視線の先を見遣った一夏の視界には相変わらず違和感が映っていた。
束、千冬、箒、鈴音、セシリア、シャルロット。
その六人についてはいい、自分達と同時にこの空間招かれたのだから。
だが、一つおかしなものが混じっていた。
かつて予備機として纏った、《白式・影打》とは別の意味で《白式・真打》と対を為す漆黒の鎧、《黒式》。
その《黒式》が何故ここにいる？

「お前……」
『一応、”はじめまして”になるのかな？　織斑一夏』
「なっ！？　なんでお前……」

俺と同じ声で？
最後まで言葉を紡ぐ事が出来ず、ただ目の前に立つ影を見詰める。

こうして、二人の”一夏”はついに出会ってしまった。

第９４話「黄金の瞳」（後書き）

作者「仕方ないっちゃ、仕方ないんだけど、最近バトルだらけだなぁ……あぁ、番外編に逃げたい！」

千冬「本編を終わらせてからにしろ」

作者「ですよね～」

第９５話「時計兎の駆ける夜」（前書き）

１００話目まであと５話！

■今日の空気さん

箒「さて、一応これで四回目になるこのコーナーだが、紹介するのは三人目だな。では、次の方どうぞ」

虚「どうも、布仏本音の姉、布仏虚です。……と、原作では一応挿絵が描かれる程度には出番があったワケですが、ここの小説内では全く出番がありませんでしたね。あの娘（本音）の回送でほんの少しだけ存在を匂わす程度でしたし」

箒「そういえばそうでしたね」

虚「えぇ、私自身の出番はどうでもいいのですが、作者にはせめてお嬢様方の出番をもっと増やしていただきたかったですね。まぁ、尺の都合上無理そうな気がしますが」

箒「全く、無駄に１００話も用意しておいてなんという体たらくだ」

作者「マジすいません」

第９５話「時計兎の駆ける夜」

「……」
『……』

無言で見つめ合う二人、周りの者も黙って様子を見ているせいで空間内は酷く静かだった。
全てを知っている束、
断片的に『彼』について聞かされてきた千冬と一夏の取り巻きの五人、
この日を迎えるまで、『彼』について知る事すら許されなかったのは一夏ただ一人。
ただ強くなる事だけを求められた一夏は『彼』の謀り事に気付く事無く……否、その存在すら気付く事を許されず、今日まで戦い貫いて来た。
余計な知識（記憶）を与える事によって成長の妨げになるのを恐れたのか、はてまた別の理由でもあったのか、それを知るのは『彼』本人と束のみ。
同一人物の取り巻きである五人の少女にも、異界の姉にも伏せられた真実。
共犯者もまたその真実の告白を『彼』に委ね、親友にも妹にも伏せて来た。

その真実を知る時が、遂に来た。
そう、感じた少女らと少年の姉は二人の様子を固唾を飲んで見守っている。

「お前……なんで俺と同じ声で…」

『”俺と同じ”…か。当然だろう、俺はお前なのだから』
「な、何を……」

《黒式》が…目の前の男が何を言っているのか、理解出来なかった。
一字一句聞き漏らさなかったその言葉の意味が、理解出来なかった。

「……まさか、クローン？」
『…だったら顔見せぐらいはすると思うがな』
「じゃあ、なんだって……！？」

一番有り得そうな可能性を否定され、ならその正体は何なのかを問い詰め様として言葉を失った。
一夏だけでは無く、束以外の者達もまた、その表情を驚愕に歪める。

「な……お、お前、なんで…」

おもむろにヘルメットを外した『彼』。
外したヘルメットのあった場所になければならないハズの物が……
顔どころか、頭そのものが無かった。
頭も、首も無い、それどころか、一切の中身を持たぬ伽藍桐。
ヘルメットを抱える漆黒の甲冑だけが、そこに立っていた。

『フフフ…』

亡霊が嗤う。
骸すら持たぬ亡霊が、過去の自分を。

驚愕の余り固まってしまった過去の自分とその取り巻きを嗤う甲冑（抜け殻）が、不意にドロリと溶けた。
原型すら残さずに完全に泥の様になった入れ物が、じわりと地面に

広がって行くのを見て、思わず皆が飛びのいた。
束以外の、皆が。

やがてその黒い泥は螺旋を描く様に束の周りを渦巻きながらヒトガタを形作り、『彼』が……『織斑一夏』がその姿を現した。

「な……お、俺？」
『言ったろ？　俺はお前だと』

後ろから束を抱きしめる様に立つヒトガタ。
少し一夏より背が高く筋肉質の男。
ちょうど数年後の一夏を思わせる、生前の姿。
白式に命じ、《黒式》を原料に《質量操作》で模った生前の姿で、
『織斑一夏』が答えた。

「な……」
『…ふぅ、まるで話が進まんな、これでは。……まぁいい、静かにな内に勝手に喋らせてもらうぞ』

そう呟きながら『彼』は語りだした。
事の発端と、一つの結末を。

『十年ほど前だった、ヤツらが地球に侵攻してきたのは』
「十年前？」
『お前達の世界の話じゃない』

最初から明らかな齟齬のある話だった。
何せ、まだ一夏の認識ではヤツらはまだ本格的な侵攻を仕掛けて来

ていないハズなのだから。
なのに、『もう一人の自分』を名乗るこの男は、十年も前からヤツらの侵攻があったと言う。
そしてそれは自分達の世界の話では無いとも。
なら、一体何処の世界の話をしているというのだろうか、この『男』は。

『突然のヤツらの侵攻で世界中が混乱の渦に巻き込まれて、各国は対応に追われていた。あらゆる既存の兵器は成果を上げる事無く命だけが次々に散っていく中である兵器が開発された』
「それが……」
『そう、束の造った戦闘用パワードスーツ、インフィニット・ストライカーだ。初陣で輝かしい戦果を上げたインフィニット・ストライカーは瞬く間に世界中で量産され、ある程度数が出来たところで、漸く人類はヤツらに対抗出来る様になった……といっても、既にその時点で世界の人口は半分にまで激減していたんだがな。世界がそんなだからな、当然人手不足を考慮した設計が求められる。だからインフィニット・ストライカーには始めから自己修復機能とエネルギー回復機能を持っていたし、操縦者のクセに合わせて自己進化する事が出来る様に設計されていた』
まぁ、そういった唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）に比べれば、気休め程度の機能でしかなかったがな。
と、注釈を交えつつ『彼』は続けた。

『さっきも言った様に、世界中がヤツらの侵攻に曝されていた。だから、日本も軍隊を持たないだなんて言ってられなくなって、早々に自衛隊は日本軍に変わって徴兵も行われる様になった。当然、『俺』も姉の『織斑千冬』も徴兵されて、束の身内だった事もあって

すぐにインフィニット・ストライカーの操縦者に抜擢された。姉弟揃って人間離れした身体能力があったお蔭で、俺達はすぐにエースにまで昇り詰めたよ』

「「「「「「「「……」」」」」」」」

聞かされた出来事は、あまりにもこの世界の辿った歴史と違っていた。

異なる歴史を歩んだ世界の壮絶さが当事者以外の全てを飲み込み、圧倒する。

『それでも……いくらブチのめしても、ヤツらとの戦争は終わらなかった。……どうやら、何処の国のお偉いさんも捕らぬ狸の皮算用という言葉を知らないらしくてな、インフィニット・ストライカーの普及で拮抗出来る様になった途端、戦後の覇権争いに夢中になって全く足並みが揃わなくなって、そのせいで何処の戦場でもインフィニット・ストライカーの操縦者に限らず前線で戦う全ての兵が思う様に戦えずに無駄死にしていった。……その中の一人が、『織斑千冬』だった』

「!?　…私が？」

『…あぁ。補給も儘ならない状況で、なまじ優秀なせいで一人だけ生き残って、最後はヤツらに囲まれて……それでも暫くは戦い貫いて、そして力尽きた』

「……そうか」

その時の戦力差、一万対一。

その絶望的な戦力差の中で最後の一匹まで殺し尽くした『織斑千冬』は、最後の一匹との相打ちでその生涯を終えた事が『彼』の口から告げられる。

『それから三年経った後で、俺も死んだ。流石にその頃にはヤツらを地球から一掃出来ていたんだが、今まで地球上での戦闘が殆どだったからな。いくら機体が良くても宇宙という環境に不慣れな操縦者達は次々に撃墜されてしまって、気付けば俺一人なんて状況なんかザラだった。その日も結局そうなって、でも俺は帰って来れなかった。運悪く、迎えが来る前にヤツらの増援の方が先に来てしまったせいで、エネルギーのロクに残っていない機体で戦うハメになった俺は、機体共々力尽きて、そこで死んだ』

「……まぁ、ここまでがだいたいの粗筋なんだけどさ」

一通り語った『彼』に代わって、今度は束が語り出した。

「……で、『いっくん』も『ちーちゃん』も死んじゃって、もう身内なんて思える人が一人もいなくなっちゃった私は、世界の事なんてどうでもよくなっちゃったんだ」

「……私は？」

「うん、箒ちゃんはね……その、両親が早死にしちゃったせいで生まれてすらいなかったんだ、あの世界では」

「く…空気どころか存在すらしていなかったのか、私は」

微妙に落ち込む箒を慰めつつ、束が続ける。

「まぁ、それでね……そのまま自殺すんのもなんだか癪だったからさ、また会いに来たんだよ、私は。……今度こそ『いっくん』達を死なせない為に、ね」

「ま、待てどうやってそんな……」

「うんうん、まぁ普通は無理だと思うよね？　死んだ人に会いに行くだなんて……過去に遡るだなんてさ。でもね、出来るんだよ、それが。おいで、《時計兎》」

主の呼び声に応え、時の支配者がその姿を現した。
元々束が着用しているウサ耳カチューシャのウサ耳よりもかなり巨大なウサ耳がたセンサーの着いたヘッドセット、
まるでドレスの様に身を包む装甲、
その背に浮かぶ巨大な懐中時計の存在も相俟って、かなり異様な風体をした機体を纏った束はそのまま話を続けた。

「私の専用機の一つで、《時計兎》っていうんだけどね、この子の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）は時間を操る能力なんだ……って言っても、個人レベルの話だから世界まるごと巻き戻したりは出来ないんだけどね」

「……それで、過去に来たと？」

「そうだよ。で、まぁ過去に来たら来たで過去の自分がその時間軸にいるワケなんだけどさ、いや～さっすが私！　当事五歳だっていうのにちゃんと私の話を理解して自発的に協力までしてくれちゃったんだよね～♪」

「自発的に協力？」

天才同士、というか同一人物同士でどんな内容の会話が成されたのか、生憎身体能力以外は常人の域を出ない千冬には想像がつかなかった。
それは、千冬以外の皆もそうで、『一夏』ですら具体的にどの様なやり取りがあったのかは知らない。
ただ、過去の自分と話をつけて、その結果どの様に協力してもらったのかを知っているだけだ。

「うん、流石に一つの世界に同じ人間が二人いるのはマズいからね、

そのまま放っておいてもどちらかが……まぁ、多分私の方が消えちゃうんだけど、それだと未来から持ち込んだ情報まで消えてしまう。データだけ渡しとけばＯＫっていうんならデータだけ渡して私が消えても良かったんだけどさ、そういうワケにもいかないんだ、コレが」

「どういう事だ？」

「過去の者を掘り起こすのなら、例え誰が造ったのかが解らなくても、世界がソレが出来るまでの過程を記録している。でも、未来から持ち込まれた物にはその記録が無いからね、世界そのものに”無いもの”と見なされて、結局消えちゃうんだ」

「じゃあ、まさかお前……」

そこまで聞いて、嫌な予感が頭を過ぎった。

まさか、過去の自分を消したのではないか、と。

「ううん、多分ちーちゃんの思ってる方法とは違うよ。確かにそうすれば同じ人間が二人っていう矛盾は解消されるけど、五歳から急に二十代後半の束さんが残ったら、それはそれで矛盾が生まれるからね。……じゃあ、どうしたのかっていうと、世界もあんまり細かい矛盾には反応しないからね、後は矛盾を細かくしてしまえばいいんだよ、ちーちゃん」

「矛盾を細かく、だと？」

ますます、束が何を言っているのか解らなくなった千冬は束に続きを促した。

「つまりね、五歳の束ちゃんと、二十代後半の束さんを一つにしてしまえばいいんだよ。二人の篠ノ之束を”融合”させて一つの存在に変える事によって五歳でもあって二十代後半でもある篠ノ之束になればいい。そうすれば存在も記録も世界に消されずに留まる事が

出来る。束ちゃんはまだ五歳なんだから存在してて当たり前だし、束さんはもう二十代後半なんだからそれまで体験した記録を持っていてもおかしくない。そうやって、私はこの世界に留まった」

壮大なスケールのイカサマによって世界を欺き、記録を持ったまま留まる事に成功した束の後の行動は、ヤツらに対する備え以外は千冬達の知っての通りだ。

「……一夏、お前知ってたのか？」

「いや、これは知らない……っていうか、その…もしかして束さん、珠に言動が急に子供っぽくなったり大人っぽくなったりしてたのってこれが原因ですか？」

「ううん、素だよ？」

「「「「「「「「「「素なのかよ！！！」」」」」」」」」」

（…あちゃ～、な～んで普段鈍いクセにこういう時だけ気付くかな～いっくんは。こういうところも『いっくん』そっくりだね、ホント）

全員からの総ツッコミを受けながら、束は一夏の妙な時だけ働く鋭さに呆れていた。

確かに一夏の指摘した通り、束は情緒不安定な時が多い。

だがこれは一夏の様に人外の力を宿した身体に常人の脳が収まっているせいで過負荷を起こしているのとは違い、矛盾を細かくしただけで矛盾が全く無いワケでは無い為に気を抜くと世界からの修正を受けて（身体年齢基準で）歳相応に思考が引っ張られるから起こりうる現象なので、束レベルの天才ならまだしも、そうでないのなら相談したところで回りの人間など何の宛にもならない。

だから、余計な心配を掛けさせぬ様に嘘をついた。
『彼』にもそこまで詳しい事は話していないのだが、恐らく嘘をついている事はバレているだろう。
だが、長年連れ添った仲だけあって、何故嘘をついたのかを察して素知らぬ顔で『彼』は過去の自分達の様子を眺めていた。

せっかく『彼』が気を利かせてくれているのだから、下手に勘繰られる前に話を進めてしまおう。
そう思った束は、新たな話題を切り出した。

「さてと、次はこっちの『いっくん』について話そうか」

恐らく、この場にいる皆が一番気になっていたであろう、その事柄を。

第９５話「時計兎の駆ける夜」（後書き）

遂に明かされた束さんの秘密！
そして次回は『彼』がどうやってこの世界に留まっているのかが明かされます！

第９６話「記録の亡霊」（前書き）

１００話目まであと４話！

■今日の空気さん

箒「まさか、『アイツ』の世界では空気どころか存在すらしなかったとは……危うく第二章での出番が無くなるところだったな。読者諸君、第二章と第三章の統合を推してくれて本当にありがとう。……さて、今回のゲストだが」

数馬「どうも～、御手洗数馬です。……って、俺ここの小説どころか原作でも空気なんですが」

箒「そういえば…珠に名前が出るだけだったな」

数馬「一応、一夏の男友達っていうポジションなんだが……出番があるのも弾のヤツばっかだしな」

箒「しかもその五反田すら出番が少ない、と」

数馬「あぁ、二人目の男性操縦者としてデビューしないかなぁ…」

束「それは無い」

数馬「ですよねぇ～」

第９６話「記録の亡霊」

「じゃあ、次は『いっくん』について説明するけど……う～ん、その前にインフィニット・ストライカーとインフィニット・ストラトスの違いから説明した方がいいかな？　おいで、白式」

そう言いつつ束が一夏に向けて手を差し延べた瞬間、製作者権限で強制的に変身解除された《白式・両儀》が……待機状態になった《白式・真打》と《白式・影打》が一夏の身から離れてひとりでに浮き上がり、それぞれ束の右手と左手の上に収まった。
そして右手に持った白いガントレット、《白式・影打》を持ち上げながら束は講釈を始める。
まずは周りがどうとらえているかでは無く、製作者がどの様な意図で造ったのかを説明する為に。

「じゃあまず、インフィニット・ストラトスについてなんだけど……まぁ《白式・影打》は《白式・両儀》のパーツ、つまりは《白式・真打》用のオートクチュールの意味合いが大きいから真っ当なインフィニット・ストラトスじゃないんだけど取り敢えずその辺りの事は置いておくとして……じゃあ箒ちゃん、インフィニット・ストラトスって何？」
「何と言われても……その、宇宙開発用のパワードスーツじゃないんですか？」
「残念、ハズレ」
「むぅ…」

急に話を振られた箒が怖ず怖ずと答えが、どうやらその答えでは違うらしい。

「私としてはあくまで宇宙開発用マルチフォームスーツとして……まぁ、別にパワードスーツでもどっちでもいいんだけどさ、”表向き”宇宙開発用に造ったシリーズであって、武器持たせた程度で周りが勝手に兵器扱いしてるのは間違いなんだよね、ホントは。武器だってジェネレーター出力に余裕があるから持てただけの話だし」

「表向き、ですか？」

「そ、表向き。まぁ、ジェネレーター出力に余裕があるのも、武器を持った状態で《白騎士》にデビューしてもらったのもミスリード狙いでワザとやったんだけどね」

あくまで宇宙開発を謳い文句に開発されつつも、兵器としての優秀さを世界中に見せ付ける事によって瞬く間に世界中に浸透していったのは束がそうなる様に仕向けたからに他ならなかった。

恐らく、本当に宇宙開発のみを目的として造ったのならここまで世界中に浸透する事など無かっただろう。

「じゃあもう一回聞こうか。ここまで聞いた情報から判断するなら、インフィニット・ストラトスってなんの為に造られたんだと思う？

はい、そこの金髪君……って、金髪は二人居るんだっけか。じゃあ、髪の長い方で」

「わっ…私ですか！？　そ、そうですわね……その、あの銀の怪物に立ち向かう為、ではないのですか？」

「うんうん、そう思うよね～……普通は」

「ち、違うのですか？」

セシリアの解答に満足そうに頷きながら不正解の烙印を押し、束は語る。

インフィニット・ストラトスとインフィニット・ストライカーの違いを、それぞれの存在意義を。

「私の狙い通りに兵器として世界中に広まっていったインフィニット・ストラトスは当初のお題目通りに宇宙開発なんかに回される事なんか殆ど無く兵器として改悪……まぁ、私としては改悪もいいとこなんだけど、努力賞ってことで改良って事にしといてあげようか。……で、まぁ普通兵器って言ったらどれだけその武装の規模があろうと”対人用”だよね？　だって普通人間以外と戦争する事なんて想定すらしないんだから。君らも元の機体で《白式・真打》と戦って解ったと思うけど、初心者故にいっくんがピンチに陥っても、結局負けちゃったってのはそういう事なんだよ。あくまで”人間ごとき”の相手さえしていればいいインフィニット・ストラトスなんかじゃあ、未知を体現するヤツらになんか……未知を打ち砕く為に作られたインフィニット・ストラライカーになんか、絶対に勝てない」

「……絶対に？」

「そ、絶対に」

訝しいげに問うた鈴音に束は問い返す。

「じゃあ海老……じゃなかった、ツインテちゃん。君、常に戦闘中に相手に合わせて自分を作り変えるヤツに勝てる自身ある？」

「海老って…それツインテール違いでしょうに……。その、それって私と戦った時の《白式・真打》の事ですか？」

「そう、インフィニット・ストライカーである《白式・両儀》は……そのコアユニットである《白式・真打》は常に未知に対応する為に自分を作り変える機能がある。まぁ、いっくんの成長の邪魔にならない様に最初の《白式・真打》だけ使ってた頃はある程度制限してたんだけどね」

「ある程度って……アレでですか？」

戦闘中に二次移行（セカンド・シフト）までしておいて、それで”ある程度”なんて言われても、腑に落ちなかったが、造った人間の感覚ではそうらしい。

「まぁ、そんなワケで君らも体験した通り”インフィニット・ストラトスはインフィニット・ストライカーに勝てない様に造ってある”んだよ。だって、インフィニット・ストラトスはあくまで人間を相手にする為の……世界の危機だっていうのに馬鹿をやらかす人間を制圧する為にバラ撒いたんだから」

「ま、まさか……」

「ん？　解っちゃった？　じゃあ元気よく発表してみようか、束さんが採点してあげるから」

何かに気付いたシャルロットが顔を青ざめさせながら、答えた。

「まさか、インフィニット・ストラトスの台頭によって既存の兵器が無力化されたのも、その為…？」

ハズレであって欲しいと願いながら答えた答え、しかしシャルロットの予想を遥かに上回る答えが束から返ってきた。

「う～ん、流石になんにも効かないってワケじゃないんだけどさ、まず”当たらない”よね。《白騎士》がかつて何千発ものミサイルから日本を守れた様に、他のインフィニット・ストラトスでも既存の兵器相手ならまず負ける事なんて無い。だから、もしどこかの国が馬鹿をやったりなんかしたら……」

「インフィニット・ストラトスがその国を制圧する、と？」

「そ～いう事」

「いや、しかし操縦者がいなければ…」
「いいところに気付いたねぇ～、銀髪ちゃん」

口を挟んだラウラの言う通り、流石に操縦者がいなければインフィニット・ストラトスは動けない。
どんなに強力な武装を積んだ機体であっても、これは絶対だ。

「うんうん、たしかにインフィニット・ストラトスは操縦者がいなきゃ動かないよね～……でもさ、何も君らが操縦する必要なんて無いんだよ？」
「なっ…、それはどういう……」
「うん、確かに私は《白式・影打》の事を《白式・真打》用のオートクチュールって言ったけどさ、別に《白式・真打》が《白式・影打》以外のインフィニット・ストラトスを纏えないだなんて言って無いよねぇ？　ついでに言えば、《白式・真打》にそれが出来て、コピー機……っていうか分身体の《量産型　白式・真打》、ショッカーライダーにそれが出来ないだなんて、私は一言も言ってないよ」
「「「「「「「「「「！！？」」」」」」」」」」

全員が、その言葉を聞いて凍り付いた。
やろうと思えば、束の気分次第で……それこそ束が一声さえ掛ければあっという間に束によって世界征服が成されてしまう。
束の言っている事はそういう事だ。
いくら束が統治に興味が無い事を知っていても、出来る事とやる事は違うと解っていても、それが出来てしまうという事実に恐怖する。
束が身内と思っている三人はともかく、代表候補生の四人は全員その可能性に恐怖し、顔を青ざめさせていた。

「じゃあ、まさか…」
「そ、ちーちゃんの思った通り。仮に全てのインフィニット・スト

ラトスを破棄したとしても、それと同数かそれ以上の数のショッカーライダーを投入するだろうねぇ、私は。だって邪魔されたくないし。……あぁそうそう、代表候補生諸君、この事は別にお国のお偉さんにチクッちゃっても全然構わないよ？　っていうかどんどん言い触らしてくれたまえ！　大人しくしてくれてた方が私の手間も省けるし……っと、インフィニット・ストラトスの話が随分長くなっちゃったね。じゃあ、次は本題の『いっくん』とインフィニット・ストライカーの話をしようか」

独壇場。

まさにその言葉を体現するかの様な束の振る舞い。

既に詰んだ状態だった事を……実質征服されたに等しい状況にある事を広める事に、意味があるのだろうかと代表候補生たる少女らは自問する。

こんな事が広まってしまえば世界中が大混乱に陥るのは必至であり、それを”面倒”と束に判断されてしまったが最後、本当に制圧されてしまいかねない。

喋ってもいいと言われた情報は、喋ったが最後世界を殺す毒に成り兼ねない代物であり、喋るなどという選択肢など実質無い様なものだ。

なら、なぜ束はこんな話をしたのか。

決まっている、これは枷なのだ。

暗に何もするなと……邪魔をするなと言っているのだ、束は。

「さて、インフィニット・ストライカーの話なんだけど、最初に言った通り、こっちは前の世界で私が造ったシリーズで……まぁ、インフィニット・ストラトスと違ってガチで戦闘する為の機体なんだけどさ、その特徴は相手の特徴をすぐに学習して弱点を暴いてその

弱点を体現する事でね。その特徴のお蔭で……あぁ、そうそう、実を言うとさ、《質量操作》も《フォームチェンジ》も厳密に言えばあくまでインフィニット・ストライカーの特徴の現れであって別に唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）でもなんでも無いんだよね、アレ」

「え、そうなんですか？」

「うん、《白式・両儀》もそのコアユニットである《白式・真打》もあくまでそれに特化した機体なだけで別にそこまで即応して変化しなくてもいいんだったらインフィニット・ストライカーならどれでも出来るしさ。特化してるから唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）扱いしてるっていうか、そもそも《白式・両儀》はインフィニット・ストライカーであってインフィニット・ストラトスじゃないから、あくまでインフィニット・ストラトスでいうところのソレってだけの話だしね」

話が逸れたね、と言いながら束は語る。

インフィニット・ストライカーのもう一つの特徴を。

「でさ、インフィニット・ストライカーの特徴ってもう一つあってね……想像してみて、戦力差数万倍の戦場を、未知の存在の大群を。そんなの相手にしてたらまぁ、真っ当な精神してたら気が狂っちゃうよね？　でも人類に悠長に気が狂ってる暇なんて無い。なら、どうすればいいか？　まぁ、他の方法もあるだけどさ、即応って利点を考えたらこれかなって思う機能を全ての機体に搭載していたワケだよ、束さんは。この『いっくん』も、まぁある意味ではその応用かな？」

「……どんな機能なんだ、それは？」

「うん、絶望的な状況に耐えられなくなって気が狂う……けど、戦力を遊ばせておく余裕なんて無い。だから、機体の方で常に操縦者の記憶のバックアップをとり続ける機能を搭載したんだよ、私は。いつ気が狂っても記憶のバックアップを操縦者の脳に上書きして頭の中を気が狂う前に引き戻すの」

「薬物投与の様なものか？」
「うん、薬は一切使って無いけど、まぁやってる事は似てるよね」

ラウラが言う様に、軍では作戦行動中に発生する”不測の事態”に備え、薬物や催眠暗示などを利用して常に操縦者を戦力として利用出来る様にしている。
勿論、強力過ぎて人形の様になってしまえば反って使い物にならなくなるので後遺症の残る様なマネはしていないのだが。

『つまりだ、ここにいる俺は戦死直前までの記憶の記録であって、束と違って記録が器を得たに過ぎない亡霊でしかないんだよ、俺は』
「ま、回収した時には《白夜》……あぁ、向こうの世界での《白式・両儀》の事なんだけど、大破しちゃってたせいかログが残ってなかったから私一人で計画を進めるつもりだったんだけどね」
『なんの偶然かは知らんが、コイツが使っているうちに俺の記録が復活したというワケだ』
「まぁ、多分私と同じなんじゃないかな？　『いっくん』は。私がこの世界の私でもありあっちの世界の私でもある様に、あっちの世界の存在である『いっくん』の機体だったものをいっくんが使用したせいで、世界が”織斑一夏”がいるのに機体にその記録が無いのはおかしいって思ったのかもしれないね。……まぁ、その辺の事は研究する暇が無いからあんまりよく解ってないんだけど」

そう言って、束は『一夏』を愛おしそうに見遣った。
一瞬の出来事だったので他の五人には解らなかったが、動体視力が並外れた千冬と一夏にはそれが解った。
とはいっても、本質的にそういった事には鈍感な……というか、外れているが故に人間のそういった感情の機微をあまり理解出来ない一夏の目には、ただ単に一瞬束が『一夏』を見遣っただけにしか見

えなかったのだが。

「さ・て・と…まぁ、これでだいたいの事は全部喋っちゃったかな？　あ～疲れた！　引きこもりの国のアリスな束さんはもうヘトヘトだよ」

「自分で言うか。だったら外に出ろ」

「え～、だって外に出たらうざったい羽虫が一杯じゃん」

「お前なぁ……」

自分達以外の……鈴音、セシリア、シャルロット、ラウラにも普通に会話出来ていたので人間嫌いも多少はマシになったか、と思っていた千冬だったが、どうやら本質的には変わっていない……というか、束の性格上、代表候補生ら四人が他の有象無象と違って判別出来る人間に格上げされたのでは無く単にギャラリーが欲しかっただけの様に思えてため息を着いた。

一夏の回りにいる以上、ある程度は目を着けられてはいる様だが、金髪だのなんだのと言って名前を一切呼ばなかった辺り、そうである可能性の方が高い。

「そうだ！　一つ大事な事言うの忘れてた」

『一夏』にもたれ掛かってダレていた束がパンッと、手を叩く。音に釣られ、再び束に注目した皆に……一夏に向けて、束は告げる。最後の試練を、越えるべき壁を。

「まずはお疲れ様、今日はもう帰って休んでいいよ」

「あ、はいわかりました」

「うん、今までよく頑張ったね、いっくん。機体も、自分の身体の扱いも、ホントに上手くなった」

「いやぁ、その……なんというか、束さんが…皆がいてくれたからですよ」

褒める束に照れ臭そうに答えた一夏。
回りにいる少女らも一夏の言葉のせいか、どこか照れ臭そうだった。

「うん、だから最後。最後のテストをしよう」
「…テスト、ですか？」
「そう、テスト。”全力を以って”いっくんが『いっくん』を倒す、それだけ」
「俺が…コイツを」
『そうだ』

再び二人の”一夏”が睨み合い、暫く睨み合って『一夏』が告げた。

『三日後だ。三日後に決着を着けよう、……”織斑一夏”は二人もいらない』
「…あぁ、そうだな」

期日は告げられた。
決着の日まで、あと三日。

第９６話「記録の亡霊」（後書き）

次回、久しぶりに学園に……って、まともに学生生活送れた日ってあったっけ？

第97話「生み出す紅、消し去る白」（前書き）

3……

■今日の空気さん

箒「さて、最終話まで近づいてきたワケだがこのコーナーは通常営業で続けるぞ。では、次の方」
ダリル「三年生のダリル・ケイシーだ」
フォルテ「二年のフォルテ・サファイアっすよ～」
箒「あぁ、確かお二人は…」
フォルテ「そうそう、アタシら原作七刊からの新キャラなんスよ」
ダリル「だからまぁ……正直、空気も何もとは思うのだが……」
フォルテ「でも同じ七刊からのキャラなのにもう一年の娘は結構前から出番あるんスよね～、ここの小説だと」
ダリル「しかも、名称が同じなだけで本作オリジナル機ときたもんだ」
フォルテ「えこ贔屓ッスよね～」
ダリル「ま、どうせ出番があっても原作みたいに珠に出番があるか、実は別の場所で戦っていたという設定があるぐらいだろうな」
フォルテ「そッスね～。まぁ、期待しないで出番を待ちやしょうかね」
ダリル「だな」

第97話「生み出す紅、消し去る白」

あの後、あの真っ白な空間から元の場所に返されたんだが、山田先生曰く「急に皆さんが消えたと思ったらまたすぐ現れたんでビックリしました」とのこと。
山田先生の言う”すぐ”が一体どれだけの時間の事なのかは知らないが、”すぐ”って事は多分5分も掛かってないんだろうと思う。
だって転移して帰って来たらまだ転移前まで受けてた授業の途中だったし。
でも、明らかに模擬戦はそんな5分や10分で終わる様なものじゃなかったし、それが四回も続けば結構な時間が経つハズなんだが……。

まぁ、十中八九束さんの仕業だろう。
あの《時計兎》とかいう束さんの専用機、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）で時間とか操るらしいし。
リアルハイパーゼクターじゃねぇか。
多分、あの場に居た全員……か、あの場そのものが通常の空間とは時間の流れが違ってたんだろう。
何ソレ怖い。

……で、だ。
通常空間の時間の流れがどうであれ、俺らは……というか俺は結構な長丁場を演じていたワケで、有り体に言えば体力的に限界だった俺は取り敢えずその日は授業が終わった瞬間、部屋に戻ってベットにダイブした。
疲労が蓄積していた事もあってすぐに眠りに着いたんだが、すぐには眠れ無かった。

……うん、自分でも何言ってんのかよく解んないけど、つまりはこういう事である。

白式さん『いらっしゃ～い♪』

俺『…なん、…だと？』

まぁ、後の事はお察し下さいというかなんというか、夢の中の出来事だから現実の身体には全く影響は無いんだけど、久しぶりだった事もあってか張り切りまくってた白式さんに一滴残らず絞り取られてしまい、朝起きたら疲れてたという、なんの為に寝たんだか全然解らん状況に陥っていた。

……と、まぁ７００文字以上もモノローグを延々と垂れ流したワケだが、とにかく朝を向かえてしまったのである。

一応、ちゃんと睡眠はとったので肉体的な疲労は解消されているハズなんだが、なんというか精神的な意味での疲労が酷い。

夢の中だからか、俺は自由に動けないので白式さんヤりたい放題なのである。

ヤりたい放題なのである、大事な事なので二度言いました。

俺が無抵抗っつうか抵抗出来ないのをいい事に白式さんはそれはもういい笑顔で好き放題してくれて……。

気持ちイイやら悔しいやら気持ちイイやらで……結局すごく気持ちよかったんだけどな！　畜生！！

まぁ、そんなワケで敗北感たっぷりで朝を迎えてしまったのであるが、だからといって授業をサボるのもマズい。

「はぁ……行くか」

一応、学生の本分は学業に打ち込む事なのだから。

ロクに授業を受けた記憶が無くても、だ。

「おはよう、一夏」
「おはようございます、一夏さん」
「おはよ……って一夏、アンタまた寝坊なの？」
「遅いぞ一夏」
「あぁ、起床時間は厳守しろ」
「おはよ……って、なんだ、もう皆揃ってたのか」

８時だよ、全員集合…ってワケでも無いが、俺が食堂に着くと既に皆揃っていた。
因みに今ホントに８時である。
午前だけどな。

取り敢えず皆と挨拶を交わし、一人だけパンにかじりついた。
鈴、箒、ラウラの順に文句を言われた様に、今日の俺の起床は遅かったのだ。
具体的にはいつもより一時間ぐらい。
飯が冷めるとかの理由であまりにも遅かったら先に食っとくというルール……といってもいつの間にか出来た暗黙のソレがあるので皆もう先に朝食は済ませたんだろう。
特に朝はＨＲが０８：４５から始まるから悠長に待ってたりなんかしたら酷い事になる……腹が。
食いっ逸れるならまだしも、今日みたいな午前中の……しかも一限目から実技系の授業がある日なんか特に悲惨だ。

……って、待て。

「……今日、一限目から実技…だと？」

「だから遅いと言ったのだ」
「全くだ」
「そういう事は先に言えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！」
結論、食ったばっかしの腹で激しい運動は止めましょう。

そして放課後……ん？　授業風景はどうしたって？
そんな…俺が問題用紙見ながらうんうん唸ってるところなんて見たってつまんないだろ？
つまりはそういう事だ。

「……準備はいいか？」
「あぁ、いつでも来い」

いつもなら、放課後は皆で集まって訓練なんだが今日は違った。
三日後……いや、もう一晩過ごしたから二日後か、二日後に行われる決着を……俺自身の集大成を束さんに…皆に見せ付けなければならいのだから。

その為の、訓練。
《ブルー・ティアーズ》
《甲龍》
《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》
《シュヴァルツェア・レーゲン》
との交戦経験から俺の《白式・両儀》は
《ブルー・エンプレス》

《神龍》
《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》
《シュヴァルツェア・ヴォルフ》
という四つの姿を新たに得るに到った。
これで、元からあった《白式・影打》と《白騎士》を含めれば《白式・両儀》は六つの姿を持つ事になる。
勿論、成るだけだったら《アラクネ》だとか《ミステリアス・レディ》だとか、今まで戦った全ての機体に成る事だって出来るし、造るだけならあの四つ以外の全ての機体の強化型だって造れるだろう。
なんたって、これはそういう機体なのだから。
…でも、それはあくまで機体側の話であって、それらを俺が使い熟せるかどうかは別問題であり、大事な決戦を控えた今、新たな姿を得ようとは思わない。
ただ一つ、《紅椿》という例外を除いては。

インフィニット・ストライカーである以上、時間毎ごとのエネルギー回復量もインフィニット・ストラトスを上回っているとはいえ、瞬時にエネルギーを回復出来るというワケでは無い。
特に、《零落白夜》だとか、ああいったエネルギーを大食いする武装がある以上、エネルギー回復手段があるに越した事は無いハズだ。
だからこそ、《紅椿》の……正確にはその唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《絢爛舞踏》のデータが必要だった。

「いくぞっ」
「来いっ」

互いに瞬時加速（イグニッション・ブースト）で急接近し、激しく刀をぶつけ合う。
因みにこの模擬戦、パっと見は俺の《白式・影打》と箒の《紅椿》の試合に見えるが、実際は《白式・両儀》対《紅椿》の試合だったりする。

何せ《白式・真打》も《白式・両儀》もお国の許可が無いと使っちゃいけないという事になっているんだが、データの収拾と反映の機能はインフィニット・ストライカーである《白式・真打》の方が専門だから、俺としては《白式・両儀》が無理でも《白式・真打》で篝の《紅椿》と模擬戦したい。

でもいきなり申請してお国の許可がとれるハズが無い……いや、篠ノ之束製の機体同士での戦闘データは向こうも欲しいだろうから許可は下りるだろうけど、データ取りの機材とかそういう準備で時間が掛かるからとても期日に間に合いそうに無い。

なら、どうするべきか。

《白式・真打》は使いたい。

でも、なんの配慮も無く使ったら国が煩い。

だから、ちょっとした裏技を使う事にしたのだ。

内容としては、前に狭いところで《白式・両儀》を運用する為に《白式・影打》部分だけ拡張領域（バスロット）に収納して見た目だけ《白式・真打》な《白式・両儀》を使った時のソレに近い。

まず、《白式・両儀》を装着し、次に《インビジブル》を使う。

普通に《インビジブル》を使えば全部透明になって全く見えなくなるが、対象を”《白式・真打》だけ”に絞れば恰も《白式・影打》だけを纏っている様に見えるのだ。

「はぁぁぁぁぁっ！！！」

「うぉっ！？」

ってぇ、危なっ！！？

クソッ…アリーナの計器ごまかす為にスラスター出力を《白式・影打》レベルにまで落としてたの忘れてたとか……何やってんだよ俺。
あぁもう、”身体が反応出来た”から良かった様なものを……うん、高性能機に慣れちまったらやっぱ機体に甘えるクセが着くな。
今のだって普通に《白式・影打》使ってた頃の自分だったら避けれてたじゃねぇか。
機体性能も向上して、身体の方も使い熟せてきたってのに掠るとか弛み過ぎだろうが！

「せぇぇぇぃっ！！」
「くぅっ…」

だぁぁぁぁっ、もう！
（地の文的な意味の）俺のターン終わり！
久しぶりだから最後まで俺のターンで終わらせたかったけどそんな余裕ねぇわ、やっぱ。

つ～ワケで、悪いがカメラ（地の文）はスタジオ（作者）に返して俺は戦闘に集中させて貰うぜ！

「もらった！」
「ハッ……なっ！？」

横薙ぎに払われた《空裂》を後退して躱そうとした一夏に、紅く輝く光の刃が迫る。
そう、《空裂》はただの近接ブレードでは無い。
その銘に相応しく、正に空を裂く様に巨大なエネルギー刃を形成して一気に複数体の敵を切り伏せる事が出来る刀なのだ。
横薙ぎに放たれた以上、いくらエネルギー刃が横に広がろうが上なり下なりと縦に避けてしまえば躱せない事も無い……というのはあくまで回避行動が間に合うほど十分な距離が有ればの話。
ついさっきまで箒は《雨月》共々《空裂》をただの近接ブレードの二刀流で使っていたのだ。
つまり、それを避けた直後という事は二人の距離はほとんど至近距離に等しい。
最高速度が亜光速にまで達する《白式・両儀》ならまだしも、あくまで高機動型ＩＳでしかない《白式・影打》では回避など不可能であり、正に必殺の間合いだった。

「あ、危なかった……」
「チッ…《零落白夜》か」

しかし、それは相手が他のＩＳだった場合の話。
《白式・影打》には……《白騎士》には《暮桜》から受け継いだ唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《零落白夜》がある。
迫り来る驚異がどれだけ強大であろうとも、エネルギー兵器である以上《零落白夜》のエネルギー無効化能力の前では無意味だ。

だが、だからといって《白式・影打》が一方的に有利かと言えばそうではない。
寧ろ不利だと言っても差し支えないだろう。

まず、今　一夏が纏っている機体はあくまで表向きには《白式・両儀》ではなく《白式・影打》なのだ。
《白式・両儀》状態であったなら《白式・真打》部分だけでなく《白式・影打》部分すら展開装甲の恩恵を受ける事が……《質量操作》の恩恵を受けて全身に《零落白夜》の防御フィールドを張る事が出来る。

しかし、実際には《白式・両儀》であるとはいえ《白式・影打》として振る舞う以上、《零落白夜》の効果範囲は《雪片弐型》の刀身と《雪羅》のクロー、そして《雪羅》から発生させられる《零落白夜》のシールドのみであり、もしそれらで受け止め損ねたらエネルギー刃の餌食になる事は必至。
更に、《零落白夜》はエネルギー無効化の為に莫大なエネルギーを消耗する能力であるので長時間の連続使用はそのまま敗北に繋がるのだ。

「このっ…このぉっ！！」
「くっ……はっ…っとぉっ！？」

縦横無尽に振るわれる《空裂》、そして振るわれた数だけ発生するエネルギー刃が一夏に向かって殺到する。
そのエネルギー刃の群れを超人的な五感で見切り、躱し、時には受け止め決定打を避け続ける一夏。
《零落白夜》の使用も、その超人的な五感で当たる瞬間を見切ってその瞬間だけ発動させる事によって極力エネルギーの消費は押さえているものの、エネルギーを無効させればさせるほど確実にエネルギーを消耗していき、既に三割ものエネルギーを持って行かれてしまっていた。

「ちぃっ……ならっ！！！」

なかなか決定打を与えられない事に痺れを切らせた箒は一端《空裂》を振るうのを止め、代わりに《雨月》を突き刺すかの様に放った。その刺突のモーションに合わせて発生した紅い光刃が、まるで散弾の様に弾け、一夏に襲い掛かる。

「くっ…しまっ、あぁぁぁぁぁぁっ！！！」

咄嗟に《雪羅》から《零落白夜》のシールドを展開し、これを防いだものの、更に大幅にエネルギーを消費してしまい、エネルギー残量が残り半分を切った。

ここまで、一見一夏が押されている様に見える。
事実そうだ。

《零落白夜》を使用すればエネルギー兵器の直撃を喰らっても、エネルギーごとダメージを無効化出来るが、結局はエネルギーを消費してしまう。

《空裂》と《雨月》の連続使用は一見莫大なエネルギーを消費している様に見えるが、実際のところは二刀とも威力の割りにエネルギーの消費は少ない。

そもそも、《白式・影打》と《紅椿》とでは保有するエネルギー総量が違う。機体の世代で判断するのなら、第五世代機である《白式・影打》の方が最新鋭だが、機体自体は第四世代である《紅椿》の方が後発であり、第五世代機の特徴であるナノマシン関連以外ははっきり言って《紅椿》の方が性能は断然上だ。

そして最後に――――――

「どうした一夏、さっきから押されっぱなしじゃないか」
「言ってろ。つ～か、お前だってそんなぽんぽんエネルギー兵器使って平気なのかよ？」
「ふむ、確かにな……だが！」

――――《紅椿》は、《絢爛舞踏》という名の永久機関を持っている。

「……さて、続きといこうか」
「チッ……」

黄金に包まれた真紅、日輪の如きその輝きが対なる白をも照らしていた。

第９７話「生み出す紅、消し去る白」（後書き）

箒さん、まさかのメイン回！！！

第９８話「白式　ＶＳ　黒式」（前書き）

スンマセン、話の尺を調節してたせいで投稿が遅れました。

2……

■今日の空気さん

箒「さて、さっそく今日のゲストを紹介しよう。では、次の方」
クラリッサ「ご機嫌よう、諸君。私はドイツ軍所属のクラリッサ・ハルフォーフだ」
箒「あぁ、確かラウラの…」
クラリッサ「うむ、私は部隊の副隊長であり、隊長不在の今は隊長代理として部隊を率いている身だ」
箒「なるほど」
クラリッサ「そういうワケで、私は忙しいのだ。だから私も我が隊も、舞台がドイツにでも移らない限り出番が無い事は重々承知していたのだが…」
箒「一度回想で出たぐらいだったというワケか」
クラリッサ「あぁ。だがまぁ、これはこれで良かったのかもしれん」
箒「何故だ？」
クラリッサ「登場人物の数が増えればどうしてもその分だけ隊長の出番が少なくなるからな」
箒「なるほどな、確かにそういう考え方もあるか」
クラリッサ「まぁ、そういうワケだ。……っと、そろそろ時間か。

では諸君、また何処かで」

第９８話「白式　ＶＳ　黒式」

「！！」

遂に来たか、と思った途端、不意に頬が緩んだ。

言うまでもなく状況は不利、残り少ないシールドエネルギー、そして更にその残り少ないエネルギーすら食い荒らす己の武装。

対して、目の前に立ちはだかる紅は自ら発したその黄金の輝きと共に活力を取り戻し、今再び刃を振るおうとしている。

これを不利と言わずして、何を不利とするのか。

しかし、それでも一夏は笑っていた。

欲した力の一端が手に入ったのだ、状況の有利不利などもはや考慮にすら値しない。

宇宙空間で発したあの白い光や《零落白夜》をはじめとし、様々な破壊の力を得た。

機体の修復に《質量操作》、操縦者の修復に《生体復元》、そしてこの瞬間得たエネルギー回復の《絢爛舞踏》を以って再生に関する全ての力を得た事になる。

片翼だけで飛べる鳥がいない様に、ただ両儀に成っただけでは完成に至らず、ただ双方の性質を……すなわち、破壊と再生の力を納める器に成っただけだった《白式・両儀》は一度二つにその身を分かち、操縦者たる織斑一夏の成長と共に再び両儀に至り、その過程で多種多様な破壊の力を得たものの、持ち合わせていた再生を司る力

は《質量操作》と《生体復元》のたった二つだけだった。
それでもインフィニット・ストラトスやヤツらの個体を相手取るには事足りたものの、これから先はそうはいかない。
長い長い、永遠に感じられるほど長い戦いに身を投じるには、《白式・両儀》が内包するエネルギーだけでは全く足りないのだ。

だからこそ、この力を欲した。
エネルギーを増幅させ、永久に戦い続ける事が出来る力を。
黄金を燈す、《絢爛舞踏》の輝きを。

（……笑っているのか？　一夏は）

今、一夏が置かれている状況は誰がどう見ても不利である。
絶望的、と言ってもいい。

……なのに、一夏は笑っている。

見間違いかと目を懲らしたが、やはり見間違いでは無く、諦めたのかとも思いもしたが、どうやらそうでは無いらしい。
あれはどう見ても狩られる側の目では無く、狩る側の目だ。

（何か秘策が……もしや、《零落白夜》か？　いや、しかし……）

どう見ても一夏はまだ勝負を諦めていない。
それどころか、勝つ気でいる様にすら見える。
可能性があるとすれば……というか、今の一夏の機体は”一応”《

白式・影打》なので《雪片弐型》と《雪羅》のクローか、荷電粒子砲しかないのだから、この状況を覆せそうな武装があるとすれば《零落白夜》を使用する《雪片弐型》と《雪羅》の二つしかなく、恐らくはこの二つを当てにしているのだろう。

（いや、待てよ…）

ＩＳの武装は所有者が使用許諾（アンロック）すれば登録している全員が武装を使える様になる。

という事は、機体は《白式・影打》扱いでも《白式・真打》の武装を使用する事が可能なのではないだろうか。

使用許諾（アンロック）も何も、どちらの操縦者も一夏なのだから、それが不可能であると考える方が不自然ですらある。

（……そうだ、反則で無い限りは取れる手は全て取るのが一夏だったな。……なら、エネルギーが回復する程度で有利だと思うのは危険か）

そもそも、一夏は化け物と……人間のルールが通用しない相手と戦う為に今まで己を鍛えて来たのだ。

例え本人が未熟であっても、人間だけを相手にしていればいい様な戦い方しかして来なかった自分達とでは根本的に戦いに対する姿勢が違う。

言い方は悪いが一夏は将来的に化け物を相手にする為に化け物のルールで戦っているのだ、人間なんていう狭い範囲しか想定せずに戦えば確実に死角から食い殺される。

「どうした？　来ないのか」
「くっ……なら、お望み通り、叩き斬ってやる！」

飾り気の無いただの誘い文句に警戒心を更に強めた箒だったが、挑まれた以上、剣士として応えぬワケにはいかなかった。
例えそこに罠があろうとも、己が矜持が逃げる事を許さなかったのだ。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「ちっ…」

《雨月》から放たれたエネルギーの散弾と共に突撃を仕掛ける箒。
一夏がその散弾を転がる様に回避したところで、今度は《空裂》のエネルギー刃が襲い掛かる。
常人を越えた五感を以ってそれらを回避してみせた一夏だったが、回避に精一杯で余裕が無いのか、地面を転がり続けたせいで白亜に輝く装甲は泥だらけで、おまけに《インビジブル》で姿を消しているだけで確かに存在する《白式・真打》が……具体的にはそのバイザーから伸びるブレードアンテナが邪魔で上手く転がれないのか、転がり方も酷くぎこちない。
恐らく、《インビジブル》で透明になった《白式・真打》部分が見えないせいで咄嗟に動く際にその存在すら忘れてしまい、結果として転がった際に見えない突起が引っ掛かって不格好な転がり方になってしまうのだろう。

「このっ！」
「のわっ…ッテェ、い、今首がグキッって」
「隙ありぃぃぃぃぃっ」
「ちょっ…まっ」

地面を転がる一夏に容赦無く斬撃を浴びせるものの、奮われた刃は一向に一夏に届く気配が無い。

「えぇいっ、ちょこまかと！　いい加減大人しく斬られろ！」
「はい、解りました……なんて言うか馬鹿！」
「なっ…馬鹿とはなんだ馬鹿とは！」

安い挑発だと、言われた箒自身が理解していたものの、だからといって全く苛立たないかといえばそうでも無く、《雨月》と《空裂》から放たれたエネルギー刃と散弾がいつもより多めだったかもしれない。
冷静なつもりでいても、結果的には挑発に乗った事になるのだろう。
当然、発するエネルギー刃と散弾が多ければその分消費するエネルギーも多くなり、そうなれば次に《絢爛舞踏》を発動させるまでのスパンも短くなる。

「（くっ……エネルギーを消費し過ぎたか……だが！！）　《絢爛舞　「貰った！」　なっ！！？」

箒は、一夏を含む一夏の取り巻きの中でも一番専用機を入手してからの日が浅い。
日が浅いなりに本人も努力してはいるが、まだ完全に《紅椿》を使い熟せているとは言えない状態であるのも事実である。

その隙を、一夏は突いた。

箒はまだ攻撃と同時に己のエネルギーを回復させるという動作が出来ない。

だから、《雨月》と《空裂》を振るう内は手が出せなくても、《絢爛舞踏》を発動させる瞬間だけはそれらの攻撃は止む。

挑発したつもりも無かったし、思いの外ダメージを受けたものの、一夏の目論み通りその外れた五感で攻撃を見切ってスラスターすら使わず”己の身体”だけを頼りに回避に専念する事によって、ほぼ一方的に《紅椿》のエネルギーを削る事に成功し、《絢爛舞踏》の使用にこぎつけた。

そしてその隙を突いて横薙ぎに払われた《雪片弐型》が、箒の腹部を切り裂かんと迫る。

「くっ…（あ、危なかった…まさか《絢爛舞踏》の発動の隙を突いて来るとは……？）」

しかし、箒とて一夏の様に外れてはいないとはいえ、人の限界に迫る程の剣士だ。

化け物が相手だからといってそう簡単に殺(と)られる程ヤワではない。

迫る《雪片弐型》を《雨月》と《空裂》を交差させる様にして難無く受け止めて見せる。

そして、受け止めたところで、ある違和感に気付いた。

（……《雪片弐型》に、《零落白夜》が込められていない？　しまっ…！？）

箒が違和感の正体に……その違和感の意味に気付いたのは、《雨月》と《空裂》が砕けるのとほぼ同時だった。

振るわれた《雪片弐型》は本命に非ず、一拍遅れて延ばされた腕が……《雪羅》のクローが、《雨月》と《空裂》の刃を握り潰したのだ。

「くっ……」
「トドメだぁぁぁぁぁぁっ！！！」
二刀を失い、もはや攻撃手段を持たぬ《紅椿》に《雪羅》の手が迫り、箒の顔面を鷲掴む。
装甲に覆われておらず、そして人体の中で一・二を争うほど重要である頭部。
その頭部ほどシールドバリヤーは厚く、維持の為にエネルギー配分が多い箇所は無い。
そしてダメージを受けた際に一番エネルギーを消費するのも頭部だ。
だから一夏は有りったけのエネルギーを割いて頭部に《零落白夜》を叩き込む為に、今まで極力己のエネルギー消費を抑えつつ《絢爛舞踏》発動の瞬間まで凌ぎ切り、発動の瞬間を狙って《雨月》と《空裂》を破壊した。
全ては、この一撃に賭ける為に。
「オォォォォォォォォッ！！！」
「アァァァァァァァッ！！！」
《絢爛舞踏》の輝きすら飲み込む《零落白夜》の光が箒の頭を包み、そして――――
『両者、エネルギー０。よって判定は引き分けとする』
「は？」
「へ？」

――光の終息と共に、試合も終了した。
引き分けという形で。
あともう少し《白式・影打》にエネルギーが残っていれば一夏が、
あともう少し《紅椿》にエネルギーが残っていれば箒が、
そんな僅差での引き分け。
一夏自身、知っていたワケではないのだが、《零落白夜》がエネルギーを消滅させる方が、《絢爛舞踏》がエネルギーを増幅させるよりも若干早い。
だから、あと少し《白式・影打》にエネルギーが残っていたのなら、《絢爛舞踏》による増幅が間に合わなくなり、《紅椿》のシールドエネルギーは尽きて一夏の勝利となるハズだった。
だから、あと少し《紅椿》にエネルギーが残っていたのなら、《零落白夜》の使用によるエネルギー消費で《白式・影打》のシールドエネルギーは尽きて箒の勝利となるハズだった。
そんな僅差で、引き分けた。

「……引き分け、か」
「…だな」

そう呟いた箒に相槌をうった一夏は、《雪羅》を箒から離し、機体を待機状態に戻した。

「それにしても……」
「ん？」

それに合わせて機体を待機状態に戻した箒が何かを言いかけ、一夏に続きを促された。

「いやなに、てっきり《白式・真打》の武装でも持ち出してくるも

のかと思って警戒していたのだが……」
「あぁ～、そういやそんな事も出来たっけか」
「わ、忘れてたのか……」
そんな一夏の物言いに、警戒して損したと箒ががっくりとうなだれる。
《ケルベロス》や《ギガント》といった全く機体のエネルギーを消費しない武装もあるのだから、実際に使ってみてそれが決定打になるかどうかは別としても、使った場合と使わなかった場合とでは試合の結果は違っていたハズなのだから。

「……まぁ、結果的には引き分けだったが、実質お前の勝ちだった」
「そうか？」
「あぁ、試合のルールのお陰で今回は引き分けになったが、両者エネルギー切れとはいえあのまま一夏が《雪羅》で私の頭を握り潰していれば……握り潰すエネルギーが無かったとしても、頭を掴んだ状態で後頭部でも地面に叩きつければ私の負けだったしな」
「いや、負けだったしなってお前……それやったら死ぬだろ」

自分が幼なじみの頭を掴んで地面に叩き付けて潰す光景を思い浮かべ、げんなりする一夏に、箒は語りかける。

「しかしだな、一夏。仮に互いに持てる力を発揮して勝負したとしたら、私には万に一つもお前に勝てる可能性なんか無いんだぞ」

持てる力を全て発揮する。

後で学園や国が煩いからと、《白式・両儀》では無く《白式・影打》として機体を扱った。
本当は《白式・両儀》であるハズの機体にワザとリミッターを掛け、《白式・影打》として扱ったのだが、一夏が学園や国などという人

のルールさえ気にしなければ、《白式・両儀》を以って《紅椿》を瞬殺する事もだったハズなのに。

なのに、一夏は人のルールで戦った。

実際、一夏が学園や国を無視して無断で《白式・両儀》を使用したとしても、学園や国は一夏に何らかのペナルティを与える事など不可能なのだ。

仮に何らかのペナルティを実際に課そうとしても、束に同行するなりなんなりすれば誰も一夏に危害を加えることは出来なくなるのだから。

束に同行しなかったとしても、《白式・両儀》なら……特に、この試合で《紅椿》を、《紅椿》の《絢爛舞踏》を蒐集した今の《白式・両儀》なら、世界中のＩＳを一度に相手にしたとしても確実に勝てるし、やるかやらないかは別として、《絢爛舞踏》でエネルギー切れの心配が無くなったのだから、あの白い光の剣で地球そのものを消滅させる事も可能なのである。

だから、月でも消滅させてみせて一言「俺に関わるな」と言ってしまえばそれで済む。

なのに、一夏はそれをしなかった。

（……踏み台も、用が済めばただの重しか）

意中の人間が気にかけてくれている、それ自体は嬉しい。

箒だけでは無く、皆そう思っている。

だが、データ蒐集が終わった今となっては織斑一夏にとって自分達は無価値だ。

一夏自身がどう思っていようとも、もう何もしてやれない自分達で

はハッキリ言って邪魔でしか無い。

あの真っ白な空間から帰還した後、一夏は連戦の疲れからすぐに部屋に引っ込んでしまい、そのまま眠りについてしまったのだが、箒達は違った。

全員で一箇所に集まって、今までの事やあの空間での出来事を自分達なりに理解しようとしたのだ。

何故、秘匿し続ける事も可能だったのに、織斑一夏は世界で唯一の男性ＩＳ操縦者として表舞台にでてきたのか？

操縦者として自身を成長させると共に、《白式・両儀》を完成させる為だ。

その為に、織斑一夏は表舞台に立った。

あのブリュンヒルデの弟が、ＩＳの生みの親である篠ノ之博士の造った機体を操る。

それで注目しない方がどうかしている。

そうやって織斑一夏は自身を…自身のネームバリューを餌にし、自らの糧となる獲物を引き寄せたのだ。

結果は知っての通り。

まるで誘蛾灯に集まる羽虫の様に、各国は自国の代表候補生とその専用機をぶつけ、そしてことごとく”喰われた”。

操縦者である織斑一夏が敗北しようとも、その専用機である《白式・両儀》はその存在の本義を全うし、未知を学び、打倒する。

そうやって、一夏と《白式・両儀》は強くなったのだ。

来るべき戦いの日々の為に。

言い方は悪いが、相手が専用機持ちであれば誰でもよかったのである。

人間同士の付き合いはともかく、操縦者としての経験値稼ぎと機体

の供物に成り得る相手なら、誰でも。
だから一夏は来たのだ。
ＩＳ学園という、絶好の狩場に。

しかしそれは一夏に限った話ではない。
一夏の取り巻きやそれ以外の代表候補生達も似たような理由でＩＳ学園に来たのだから。
あまり露骨なマネは出来ないとはいえ、公然とスパイ活動が行える場所。
それが、各国の認識。
だから、一夏の取り巻きの代表候補生達も《白式・両儀》の……当時の《白式・真打》のデータ収拾の為に近付いた。
現在は良好な関係を築けているとはいえ、きっかけがきっかけである。
代表候補生として《白式・両儀》のデータ収拾という重要な任務を与えられながら、一方的にデータを蒐集されるだけに終わってしまった彼女達をそれぞれの本国がどう扱うのか。
どの様な、はそれぞれ国ごとに違うだろうが、間違いなく処罰が下されるだろう。
元を辿れば彼女らを差し向けた各国の上層部の責任なのだが、いざ責任問題になればまず間違いなく処罰されるのは彼女らの方だ。

だから、一夏は此処にいる。
束の作品が間近で見れる位置に、彼女らを置き続けている。
せめて、巻き込んだ彼女らを守る為に。

故に、重し。

「お～い、箒。聞こえてるか～？」

「……え？　あ…どうかしたか？」

機体を待機状態にしてからずっと黙りこくっていた箒の眼前に一夏の掌が何度も往復するも無反応。

漸く一夏の声に気付いたのは三度目の呼び掛けも終わり、四度目の呼び掛けを行う直前の事だった。

……どうやら、考え事に没頭し過ぎたらしい。

「いや、どうかしたかって……お前、結構長い時間黙りこくってたけど、何かあったのか？」

「あ、あぁいや、なんでもない」

「どう考えて　『そこの生徒、私語をするだけなら他所でやれ』」

試合開始時点ではまだ職員室にいたハズの千冬の声が、アリーナに響いた。

いつからいたのかは解らないが、試合終了の合図を出したのも千冬だったので、途中から見ていたのだろう。

スピーカー越しに取り巻きの声がチラホラと聞こえる辺り、皆ピットから管制室に移動したらしい。

「……だ、そうだが？」

「……だな。取り敢えず皆のところに行くか」

そう言って、二人は歩きだした。

皆の待つ管制室へ。

その日以降は、ひたすら基礎の繰り返しだった。

怪我でもしてただでさえ低い勝率を自ら下げる様なマネをするワケ

にはいかなかった。
各々から要点だけを押さえた内容のレクチャーを受け、それを実行する。
ただ、それだけ。

そして、遂にこの日を迎えた。
再び招かれたあの真っ白な空間に、たった三つの人影。
この広大な空間内に存在する篠ノ之束と『織斑一夏』、そして織斑一夏の三人だけ。
そして、全てが終われば”二人”になる。
そんな一時。

『……始めるか』
「あぁ…」

数メートルの距離を開け、向かい合う二人の男が同時に動いた。

「変身!!!」
『…変身』

異口同音、鏡写しの動作と共に二人の男が光に包まれ、その姿を変える。
白い光の中で瞬時に《白式・両儀》を纏った一夏、
黒い光を放ちながら溶けだし、《黒式》へと姿を変えた『一夏』、
白と黒、未来と結末。
出会ってしまった二人。

同じ人間は二人といらぬ。

強敵を打破し、人を越え、最強の鎧を使い熟した。

そして今、最後の試練が始まろうとしている。

これは、儀式。
怪物を打倒するには、人の力では到底足りぬ。
故に、人を越え……人である事を止めて異形を喰らう異形へと変わらなければならない。
その為の儀式なのだ。

その為に『自分』を殺す。
『自分』を殺し、異形を喰らう異形（仮面ライダー）になる為に。

「……じゃあ、始めよう。長い長い、プロローグのエピローグを。
長い長い、戦いの日々へのプロローグを」

静かに、そう告げた束の言葉に二人は頷き、構えた。

「……《スーパー大切断》」
『《カマキリソード》……』

展開した装甲の隙間から生えた長大な三枚刃と、折り畳まれた状態から展開された刀が、標的を断ち切らんと鈍い輝きを放つ。

「…ファイナルバトル、スタート」
「オォオォオォオォオォッ！！！」
『ハァァァァァァァッ！！！』

合図と共に、二人が駆ける。
駆け出し、同時に跳んだ白と黒の流星は空中で交差し、地面に着地してすぐさま跳び上がろうとして、出来なかった。

「なっ！？」
『フッ……』
宙を舞ったの三枚刃が地面に突き刺さる音が、後方で響いていた。

第９８話「白式　ＶＳ　黒式」（後書き）

人を越えた肉体、最強の鎧

それだけでは届かない

『彼』が、結末であるが故に

第９９話「一夏　ＶＳ　『一夏』」（前書き）

1…

一夏「加速加速って本編中に書きまくってるけど、だったら執筆速度も加速しろよ」
作者「グハッ」

■今日の空気さん

箒「さて、本編も次回で１００話を迎えるが、ここは最後まで通常営業でいくぞ。では、つぎの方」
菜月「どうも、部活棟の管理を任されている榊原　菜月です……」
箒「あ～」
菜月「うん、バトルばっかしな時点でなんとなく予想はしてたんだけどさ、全く部活の話しないっていうかロクに学校での話しないよね、この小説」
箒「ですね…」
菜月「ねぇ、なんで学生のクセに皆ガチでバトってるの？　みんなもっと普通に青春しなよ」
箒「そ…、それを私に言われましても」

第９９話「一夏　ＶＳ　『一夏』」

（なっ……《スーパー大切断》の刃が、斬られ……いや、違う！）

一瞬の出来事だったのでよく見えなかったものの、《カマキリソード》の刃と《スーパー大切断》の刃が直接ぶつかり合って刃を斬られたワケでは無いらしい事は解った。

（アイツ……）

微かに見えた《黒式》の腕のブレから察するに、どうやら刃と刃がぶつかり合う直前に腕の軌道を逸らして《カマキリソード》の刃を《スーパー大切断》の刃の”側面”に当てる様にして斬ったらしい。

これなら、実際どちらの刃の方が切れ味が良かろうが関係無く相手の刃を断つ事が出来る。

（チッ……なんて厄介な）

タネが解ればそれでイコール何かが解決するという事にはならないのだが、解らないよりはいくらかマシだった。

それが本質何であれ、未知というものは何だって恐ろしいものなのだから。

（……いや、待てよ？　”見えなかった”？）

何となくではあるが、タネは解った。

だが、それでは”遅い”。

あまりにも”遅過ぎる”。

後で考えて解る様では到底追い付けはしないのだから。

（……クソッ、もっと”上げて”いくしか無いのか？）

いくら規格外な身体能力を誇っていても、処理が追い付かなければ意味が無い。

腕力や脚力といった類の力を振るうならまだしも、五感の精度を上げつつ索敵範囲を広げればその分処理しなければならない感覚情報も増える。

束クラスの処理能力が有るのならともかく、一夏の脳はあくまで常人のそれである為に、安易に五感の感度を上げ過ぎると脳に負担を掛け過ぎてしまう。

『どうした？　もう降参か？』

「ちぃっ……なっ！？」

振り向き様に呼び出し（コール）した《ボルティックシューター》を構えた途端、”後出しで”呼び出し（コール）された《デンガッシャー》から放たれた光線が”先に”一夏に牙を剥き、トリガーを引かれる直前だった《ボルティックシューター》を貫いた。

（クソッ…、やっぱり速ぇっ！！！）

心中で悪態を付きながらも《雪片弐型》を呼び出し（コール）し、ウイングスラスターに火を入れる。

亜光速にまで達する最高速度を叩き出す四機二対の翼を羽ばたかせ、突撃を仕掛ける《白式・両儀》。

まだ亜光速にまで達してはいないとはいえ、既にインフィニット・ストラトスのハイパーセンサーでは捕捉不可能な速度で縦横無尽に空間内を飛び回る《白式・両儀》の姿は、まるで流星を思わせる。

『ほぉ……速い速い』

準インフィニット・ストライカー級の性能を与えられているとはいえ、あくまでインフィニット・ストラトスでしかない《黒式》のハイパーセンサーでは、もう《白式・両儀》を捕捉する事は出来なくなっていた。

なのに、『一夏』は余裕の態度を崩さない。

『……確かに、速い。最高速度で競うんなら、流石に勝てる気はしないが……だが』

「!?　……カ、ハッ…」

『一夏』は一夏以上の化け物なのだ、わざわざ格下を恐れてやる必要など無い。

《白式・両儀》の操縦者は”織斑一夏”なのだから、機体の使用権が一夏にあって『一夏』に無いワケが無い。

事実、白式の居ない方の……《白式・影打》では無く、サポート用人格の潜んで居ない空っぽの《白式・真打》のコアに間借りしていた際には一夏が気絶した場合などに表出した『一夏』が機体を制御していたし、《質量操作》で《黒式》の形を変えて生前の姿をとった事もある。

この後、『一夏』は生前の姿からまた《黒式》へと形を戻すのだが、元通りにはならなかった。

というか、しなかった。

ある程度身体が制御出来る様になっただけの一夏が纏うとはいえ、

纏う鎧は正しく最強なのだから。
だから、演出として身体を溶かして、溶け出した物体が《黒式》に変ずるという形を取ったが、以前までの単体稼動時や《量産型　白式・真打》の様にただ中身に質量を詰めただけの状態ではなく、生前の性能を再現したヒトガタに《黒式》を被せたのだ。
しかし、これはあくまで《黒式》では《白式・両儀》に勝てぬという事実を理解していただけの話であって、『織斑一夏』が織斑一夏を認めたワケでは無い。
認めるかどうかは、この決着で決める事なのだから。

その為に、『一夏』は可能な限り万全な状態で一夏に挑んだ。
挑んで、機体の性能差を実力で凌駕し、機体の目で捕らえられなかった《白式・両儀》の姿を自分の目で捕らえた。

「が……く、はっ……ぐっ…」
『……』

それが、この結果。
一夏の取った戦法も、悪くは無かった。
少なくとも《黒式》を相手取るには。
しかし、速さが足りない。
《黒式》は振り切れても、『一夏』を振り切るにはまだまだ速さが足りないのだ。
だから太刀筋を見切られ、懐に潜り込まれてしまう。
《白式・両儀》が突撃してくる勢いを利用して放ったボディブローを喰らってしまうのだ。

「くっ……このっ」

逆流する胃液を必死で飲み込み、立ち上がる。

一瞬だけ途切れかけた意識を、口に広がる嫌な酸味によって無理矢理起こされ気分は最悪。
機体性能以外勝っているところが無いという事実が、それを嫌でも自覚させられるその余裕の態度が更に怒りを助長させるのを感じ、
それを必死に押さえながら立ち上がった。

（……落ち着け、感情に脳のリソースを食わすな）

落ち着けば勝てるというワケではないが、しかし現状で『一夏』に追いつけない以上、これ以上失速するワケにはいかない。
寧ろ、加速しなければならない。
しかし、かといって感情を排する事もしない。

両儀だから。

陰と陽、光と闇、男と女、前と後、上と下、右と左、生と死、破壊と再生……それら対極を内包するものこそが両儀だから。

だから、捨てない。
皆と過ごす日常も、化け物と食い合う非日常も、全て。

その為の、《白式・両儀》なのだから。

「オォォォォォォォォッ！！！」

雄叫びと共に、瞳に蒼を燈す。
鎧の変質と共に現れた蒼き軍勢が飛び交い、王の号令を受けて一斉に獲物に殺到した。

『その程度で……ちぃっ！？』

雨の様に降り注ぐビームと実弾の群れを躱し、エネルギー刃を発生させて突撃を仕掛けるビットを叩き落とす。
そんな神業を見せ付ける《黒式》が、不意に吹き飛んだ。

『……成る程、衝撃砲か』

いくら『一夏』の回避能力が高くとも、限界はある。
今の一夏に『一夏』に追い付く速さは無い。
だが、何も一夏が『一夏』より速く動く必要など無いのだ。
相手がいくら速くとも、”動けなければ”意味が無い。
だから、一夏は蒼き軍勢に命じ、《黒式》の動きを制限した。
一発一発は避けられようとも、それが何百もの数になれば話は別になる。
ビームだけなら《零落白夜》で防がれるので実弾を織り交ぜ、更にエネルギー刃を打ち消そうとも当たれば結局２ｍ超の飛翔体の突撃を喰らうハメになるという包囲網。
その包囲網に気を取られている内に《フォームチェンジ》を済ませ、《ブルー・エンプレス》から《神龍》へと鎧を変えた一夏の放った衝撃砲は、見事に『一夏』を捕らえた。

だが、これはあくまで確認作業だ。
単に見えないだけで、空気の流れさえ読んでしまえば躱せる衝撃砲でも、こうやって動きを封じてしまえば当たるという証明をする為だけの確認作業でしかない。

（ふぅ……、この分なら、似たような事をやれば《疾風（ラファール）》も当たるな。後は…）

呼び出し（コール）した《崩天瓦月》を投擲し、峰に儲けられた衝撃砲でランダムに軌道を変えながら《黒式》を狙う。
当然、《ブルー・ティアーズｍｋ？》の大群の猛攻を躱し切った『一夏』には何ら驚異になりえないのだが、それは一夏も承知の上。
執拗に《黒式》を付け狙う《崩天瓦月》の斬撃と、時折織り交ぜる《龍咆・改》の衝撃砲も一向に当たる気配が無い。

（……やっぱある程度囲むか、『アイツ』より速く動くしか無いか）

取り敢えず、今のスピードでは単発の攻撃を当てる事は不可能である事だけは解った。

（……未来の、『俺』…か）

一夏にとって、ある意味での到達点である『一夏』。
一応、同一人物であるが故に一夏には『一夏』が何をしているのが解る。
目で追うだけでは無く、空気の流れを聴覚と触覚で感じ取って躱しているのだ、アレは。

つまり、普通の人間なら頭を潰してしまえばそれで終わりだが、『一夏』は頭を潰した程度では仕留める事は出来ない。
例え《黒式》に追えぬ速さで動いても、『一夏』の触覚がその動きを捕らえてしまう。

（……やっぱ、コアを潰すしか無いか）

心臓を穿つ事が吸血鬼に対する必殺である様に、ベルトの中心に納められたコアを砕く事が《黒式》に対する必殺となり、それが『一

夏』の終わりに繋がる。
しかし、それは『一夏』も承知の上。
そう安々と殺(と)らせてはくれないだろう。

「（…ならっ、）ハァァァァッ！！」

《崩天瓦月》の執拗な追跡をいなしている最中の《黒式》に、瞬時加速(イグニッション・ブースト)で突撃を仕掛け、もう一振りの《崩天瓦月》を振りかざしながら至近距離まで接近し、衝撃砲によるブーストで叩き切るかの様に振り下ろした。
飛び回る《崩天瓦月》の刃を躱しながらももう一振りの《崩天瓦月》による斬撃を悠々と躱してみせた『一夏』に、《龍砲・改》からの衝撃砲を見舞う。
最大出力かつワイドレンジに放たれた衝撃は到底躱し切れるものでは無く……というか、一方向に向けたものではなく満遍なく広い範囲に放たれた衝撃など躱し様が無いのだ。

『くっ……っと』

「だぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

早々に躱し切れぬ事を悟った『一夏』は《黒式》の全身の装甲を展開させて放った黄金の光によって衝撃砲を打ち消し、追撃に備える。
しかし、ここまでは一夏にとっては想定の範囲内であり、ある意味では『自分』ならこのぐらいどうにかして凌ぐという、一種の信頼にも似た核心があった。
だから、早々に衝撃砲が無効化された事に驚く事も無く、衝撃砲が無効化される間にまた《フォームチェンジ》を済ませ、パイルバンカーを放っていた。
《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》の必殺兵器、《灰色の鱗殻(グレー・スケール)？》。

直撃させれば《白式・両儀》ですら一撃で仕留めるその鉄槌が、《黒式》のコアを穿たんと迫る。

『…っと、まぁまぁ《フォームチェンジ》を使い熟せてはいる様だが……この程度ではいくらやっても俺に届かんぞ』

「……チッ、やっぱりか」

放たれた鉄槌は寸前のところで掴まれて止まり、そのまま握り潰されてしまった。

なんとなく当たらない気はしていたとはいえ、実際に当たらない様を見せ付けられると苛立ちも増すというもの。

「……全く、どんな反射神経してんだよ。お前」

『安心しろ、お前もいつかこう成る』

「うわっ、成りたく無ぇ！」

『だろうなっ！』

激しい拳と拳の応酬。

互いの放った拳を躱し、蹴りを放ち、手刀を突き出しては流され……その繰り返し。

「チッ……これでっ」

中距離向けの《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》では分が悪いと、再び《フォームチェンジ》を行い、瞳に黄金を燈す。

蒐集した五つの力の四、

一つ目は近〜中距離の《神龍》、

二つ目は遠距離の《ブルー・エンプレス》、
三つ目は中距離の《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》、
そして四つ目、近距離……特にインファイト向けの力を持つ漆黒の魔狼、《シュヴァルツェア・ヴォルフ》が今、未来（結末）を食いちぎらんと雄叫びを上げる。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
『フッ……ハッ…』

連続で突き出されるプラズマ手刀。
一夏自身の身体能力も合ってその突き出す速度は（戦術的には劣るものの）オリジナルのラウラをも越える。
そんな速度で放たれているハズの突きも、まだ『一夏』には届かない。
一夏が何度も仕掛けているＭＡＩＣを片っ端から《零落白夜》で無効化しているのに、一向にエネルギー切れを起こす気配も無い。

「（チッ……いくら瞬間的にしか発動させてないからって、長持ちし過ぎだろ！？）こんの野郎ぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」
『フッ……』
「しまっ……がっ！？」

突き出した右腕を掴まれ、そのまま突き出した勢いを殺される事無く引き寄せた『一夏』の膝蹴りが一夏の鳩尾に炸裂し、それを境に一方的な蹂躙が始まった。

『フンッ』
「ガハッ…」

《ショベルアーム》によるアッパーで上空へ殴り飛ばし、

『ハッ！』

「がっ！？　…あぁぁぁぁぁぁぁぁっ」

ひとっ跳びで殴り飛ばした一夏に追い付いて《ドリルアーム》による追撃を喰らわせ、《クレーンアーム》で絡め取って振り回し、地面に向かって投げ付け、

「ガハッ…ぐ……ギッ…」

落下する《白式・両儀》を何度も《デンガッシャー》と《スコーピオン》で撃ち抜き、更に《ケルベロス》に武装を持ち替えてガトリングを浴びせ、

「ガッ……クハッ……！？　アァァァァァァァッ！？」

地面に激突したと同時に《ギガント》のミサイルが着弾し、爆発に包まれる。

『こいつはオマケだ。取っておけ』

更にダメ押しとばかりに《ライジングドラゴンロッド》、《ライジングタイタンソード》、《フレイムセイバー》、《レンゲルラウザー》、《サソードヤイバー》、《デンガッシャー（ロッドモード）》、《メダジャリバー》……と、あらゆる刀剣と槍を次々と投擲し、放たれたそれらが《白式・両儀》の装甲ごと一夏を貫いた。

「ガッ……ギッ……あ、ァッ」

肉を裂き、貫いて地面に張り付けにされ激痛のあまり呻き声すらロクに上げる事が出来なかった。
白亜の装甲は血に染まり、異様なまでに赤が映え、まるで果物でも叩き付けたかの様に血が飛び散る地面。
凄惨極まり無い血のオブジェ。
常人なら失血死してもおかしくない出血量。
そうでなくとも全身の至る所を串刺しにされているのだ、その時点で激痛のあまりショック死しても何らおかしくない……寧ろ、そうなる事こそ当たり前な光景である。

しかし、一夏は死ななかった。
信念云々と言えば格好もついただろうが、実際のところは身体が”人”より頑丈だったが為に死ねなかっただけの事。
身体が死ねる様な痛みに耐えてしまったが為に、本来”人”が処理しなくても済む様な死ぬ痛みを延々と処理させられ、脳はもうパンク寸前で。

「ギギ……が……ガガ…」

それでも、あまりに痛くて発狂を通り越し、一周回って冷静さを取り戻した。
或は、メーターがずっと回っているのかもしれない。

「が……ふ、ふぉ…《フォームチェンジ》」

冷静なのか発狂しているのか、それは本人にすら判断出来ない。
しかし、取り敢えずこれ以上血を失えば流石に死ぬということだけは本能で理解出来た一夏は、鎧に命じて傷を癒した。

「く……あ、あぁぁぁぁっ！！！」

《白騎士》の《生体復元》を使えば、傷を癒す事も、失い過ぎた血液を補充する事も可能だ。

だが、串刺しにされたままでは癒しても癒しても、いつまで経っても傷は癒えぬ。

「クッ……そ、……ってぇな…全く…」

呼吸の粗いまま毒づき、腹を括って――

「がっ……アァァァァァァァァァァッ！！！」

――自身の肉を引き裂いて、拘束から脱した。

吹き出す鮮血も、肉の裂ける痛みも、まるで無かったかの様に《白騎士》に癒され、ゆっくりと立ち上がる。

「はぁ……くっ、…はぁ…はぁ……ぐぅぅっ……ハァ……ったく、殺す気かテメェ」

『当たり前だろ……つ～か死ねよお前。手間掛けさせんな』

「ハッ…、馬鹿言うな。まだやりたい事が山積みなんでな。そう簡単に死ねるかっての」

『……やりたい事、だと？』

怪訝そうな声色で問うた『一夏』に、一夏は答えた。

「…あぁ、……まずはテメェをぶん殴る！！！」

駆け出し、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で加速して、更に《バイタルチャージ》で加速し、殴り掛かる。
破砕音と共にクロスカウンターの様に互いの拳が顔面に炸裂し、バイザーが砕け散って互いの顔が覗いた。
交差する視線は《質量操作》よって《白式・両儀》のバイザーが修復される事によって途切れ、それを合図に互いに第二撃を放つ。

『ハァアアアアアアアアッ！！！』
「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

先にアッパーカットの様に振り上げられた《カマキリソード》が《白式・両儀》の胸部装甲を切り裂き、切り裂かれた事すら意に介さず放った《マイクロチェーン》で拘束した《黒式》に《エレクトロファイヤー》の電流を浴びせる。

『クッ……調子に、乗るなぁぁぁぁぁぁっ！！！』
「なっ……ガッ！？」

電流を浴びせられながらも絡み付いた《マイクロチェーン》を引きちぎる勢いで手繰り寄せ、殴り飛ばし、殴り飛ばした直後に腕に絡み付いたままの《マイクロチェーン》を振り回して一夏を地面に叩き着けた『一夏』は更に追い撃ちを掛ける為に《キングラウザー》を振り下ろした。

「！？　あ、危ねぇっ！！」
『チッ……（これなら、もう少し”上げて”も大丈夫か）』

勢いよく地面に叩き着けられ、一瞬だけ意識が飛びかけ、その一瞬の間に眼前まで迫っていた剣を辛うじて白刃取りで防いだ一夏。

何度も叩きのめされ、肉を裂かれ、その度に一夏の肉体は”『一夏』に近づいて”いった。
生前の『一夏』に。

始めから多くの時間が割けない事が解っていた『一夏』は、実力よりも能力を上げる事を重点的に考えた計画を進めていた。
だから、機体のデータ取りばかりに腐心して、一夏の実力では到底勝てぬ相手ばかりと戦わせ続け、ワザと一夏の肉体を損壊させて、その度に《生体復元》で一夏の肉体を『一夏』に近づけていったのだ。
勿論、急激な変化を起こせば一夏はもとより回りに気付かれてしまう。
だから少しずつ、それこそまだ《白騎士》の姿を曝す前から就寝時を中心に徐々に《生体復元》を掛け続け、”一夏を『一夏』として”復元させた。

順調に進めば数ヶ月後には完遂していたこの計画も、ヤツらの侵攻が早まったが為に繰上を余儀なくされ、《生体復元》による一夏の『一夏』化も毎回の変化率を上げざるをえなくなった。

更識楯無主導での訓練で異様な成長速度を見せ付けたのも、回りの人間は二人の幼なじみの証言から成長したのではなく昔の一夏に戻って来ているのではないかという結論を出していたが、実際は急激な『一夏』化の影響が顕著に現れたに過ぎない。
また、更識簪との訓練中に倒れた後のリミッター云々の話も、一夏が急激な『一夏』化に耐えられなかったのを誤診しただけの話だったのだ。
そして最後に、『一夏』によって記憶の封印が解かれ、忌まわしい

記憶と共に力を取り戻したと”勘違い”した一夏は紆余曲折を経て現時点での能力を多少使い熟せる様になった。
圧倒的機体性能と日増しに進んでいく『一夏』化、この二つだけで一夏は今まで戦って来た。
そう考えると一夏は全く成長していない様にも思えるし、多少であれど能力を使い熟せる様になってきたのだから、その点に関しては成長しているとも取れる。
一夏本人が成長したのかしてないのかはさておき、結果的に強くなったのは確かで、そして本人の望む望まない以前に、本人の知らぬ間に事が進んでいた。
そうやって、今まで知らずに過ごして来た。
そして今も尚、一夏はその事実を知らない。

『全く、今ので死んでいれば楽になれたものを……（アイツ自身、気付いていない様だが、あの様子なら一々無駄な情報まで処理しなくなったみたいだな）』
「生憎、俺は往生際が悪いんでな」
『……まぁ、個人の性癖についてとやかく言うつもりは無いが…（これなら、そろそろ”仕上げ”に入っても大丈夫か）』
「おいコラ！　どういう意味だそれ！」
『フッ…、皆まで言わすな（死んで地獄に堕ちるか、地獄の様な日々を生き抜くか……お前の道は二つに一つ）』
「だぁぁぁぁぁっ！！！　俺はMじゃねぇぇぇぇぇっ！！！」
『なら、喰らってばかりでは無く直撃の一つでも与えてみればどうだ？（見極めさせてもらうぞ、織斑一夏！！！）』
「言われなくてもやってやらぁぁぁぁぁぁっ！！！」

再び瞬時加速（イグニッション・ブースト）で飛び回る一夏。
縦横無尽に空を舞い、何度も何度も《黒式》に切り掛かっては防がれ、また空を舞っては切り掛かりの繰り返し繰り返し。

『どうした？　この程度か？（……とは言ったものの、段々鋭くなってはいるか）』
「チィッ…」

確かにまだ防がれてはいるが、振るう度にその太刀筋は鋭さを増し、徐々にではあるが『一夏』にすら追えない速さに変わっていった。
人の枠を逸脱した身体であるが故に、人の脳ではその無作為かつ膨大な感覚情報を処理仕切れず、激しい頭痛を引き起こしていた一夏。
だが、それは不要な情報まで一々処理しようとするからの話であって、必要な情報のみに絞って処理し、不要なものは処理せず流すか感覚器官そのものの感度を調節してしまえばいいだけの事。

しかし、それだけの事が非常に困難だった。

フルパワーで力を使うつもりが無いなら、ただ成長していくだけなら多少の頭痛さえ我慢すれば日時生活を送れない事も無かったのに、事件のショックで記憶と共に力を封印したのがマズかった。
封印されたまま一生を終えるのなら、そのままでもよかったのだが、十年近いブランクを経て力を取り戻したが為に、身体と脳とのバランスが狂ってしまったのだ。

例えば現役を引退して久しい陸上選手がいたとする。
その人物が現役時代のプレーをしようとした場合、頭は現役時代のままなのに、身体は衰えたせいで頭からの命令を上手く実行出来ず、全力で走ろうとして躓く等、現役時代では考えられなかったミスをする場合が多い。
一夏のケースはある意味その逆で、スポーツより食事で例えた方が解り安い。

昔は大食漢だったが、なんらかの事情で少食になってしまった人物に昔と同じどころかそれ以上の量の食料を、しかも無理矢理食べさせるのに等しい状態に陥ったのだ。
ここでいう昔は大食漢だった人物とは一夏の脳であり、食料は感覚情報という事になる。
事故以前は多少は許容出来た膨大な感覚情報も記憶と力の封印と共にその情報量を常人のそれにまで量を減らし、その状態に慣れきった頃に再び元の量を……否、それ以上の量を叩き込まれたのだ。

その結果が、三日前の暴走。
膨大な感覚情報に飲まれた脳は理性すら働かせる余裕を無くし、ただ敵意に反応して駆逐するだけの獣になり下がった。
その結果、『一夏』に止めに入らなければ自らの手でシャルロットを殺してしまうところまで来てた。
その後のラウラとの交戦を経て、理性を保てる程度には力を制御出来る様になり、そして今、『もう一人の自分』と剣を交えている。

「だぁぁぁぁぁっ！！！」
『クッ……』
「もらっ　『甘い！』　チィッ……今のは行けたと思ったのに」

連続で発動させた瞬時加速（イグニッション・ブースト）による高速移動と、防御や回避といった動作を見切って追い縋る斬撃は徐々に『一夏』を追い詰め、軽微ではあれど確かにダメージを与えられるまでに一夏は成長した。
限りなく『一夏』に近い能力を与えられただけでは『一夏』には勝てない。
その能力を使い熟し、能力を実力にまで昇華しなければ勝てないのだ。

『ハッ！　（あと少し……、あと少しでコイツは完成する）』

「くぅっ……このっ！」

『まだまだぁっ！　（コイツが……一夏が完成すれば、俺は消える事ができる）』

絶え間無く振るわれる《雪片弐型》と何度も突き刺しに掛かる《リボルケイン》の二刀流。

それで足りぬのならと『一夏』がそうした様に、次から次へと《質量操作》で生成した武装を放ち、『一夏』を追い詰める。

それでも、まだ足りない。

何百なのか、何千なのか、何万なのか、一体いくら剣を振るったのか解らなくなるほど腕を延ばしても、まだ届かない。

実際は着実に近付いているハズなのに、追えば追うほど遠ざかる錯覚に追われ、追っているのか追われているのかが解らなくなっていく。

「!?　なっ……それは!?」

『Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ』

いつの間にか腕に装着していたリストウォッチから鳴り響く音声と共に全身の展開装甲を展開する《黒式》。

通常の展開でも高速移動形態に変ずるにも関わらず、後付けの制御装置を使用するということは、《黒式》が通常以上の速度で動くつもりである事を示してした。

「させるか！」

『……遅い』

「なっ……ガッ！？　グハッ……ギッ」

目の前で掻き消えた《黒式》の姿。

決まった最高速度があるワケでも無く、通常の１０００倍の速度を最高速度とする高速移動用デバイスの恩恵を受けた《黒式》の動きは一夏の目を持ってしても殆ど不可視と言ってもいい。

何せ、『一夏』の最高速度の１０００倍なのだ。

まだ『一夏』に至っていない一夏では追いつけぬのも道理である。

「グッ……ガッ…」

何をされたのかも解らない超高速の連撃に曝され、瞬く間にボロボロになっていく《白式・両儀》。

『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』

《質量操作》すら追い付かず、もはや立っているのがやっとな状態に陥った一夏の回りを、何十もの黄金の鏃が囲む。

『……さぁ、このぐらいは耐えてみせろ。お前が俺を越えるというのなら』

前からなのか後からなのか、それとも左右のどちらかか、或は上なのか、どこからともなく告げられた宣告。

その直後、一夏を取り囲んでいた黄金の鏃の群れが、一斉に一夏に殺到した。

第９９話「一夏　ＶＳ　『一夏』」（後書き）

次回、記念すべき第１００話にて最終話！（エピローグは除く）

第１００話「未来（結末）と未来（これから）と」（前書き）

１００話キター！！！

■今日の空気さん

箒「さて、ついに本編も最終話を向かえて次回でエピローグか……と、いってもまぁエピローグの次に第二章のプロローグが続くんだがな。では、次の方」

量産型「……」

箒「（な…何故コイツが？　というか、喋らないのならなんで来た？）　……あ、あぁ、その確か《量産型　白式・真打》だったか？」

量産型「……」

箒「（うぅ…、や、やり辛い）…で、今日はどの様な用件で？　……と、なんだ？　この紙は？」

量産型「……」

箒「あ～、私がこの紙の内容を読めばいいんだな？」

量産型「……」

箒「……。あ～何々…『ショッカーライダーや《量産型　白式・真打》じゃあ名前長いから今度からは《白式・数打》ってコトでＢｙ束』…って、待て。それはここで発表する様な事なのか？」

数打「…と、いうワケで我々の名称は《白式・数打》となった。以後よろしく」

箒「…あぁ、よろしく……って、喋れるなら最初から喋れ！」

第１００話「未来（結末）と未来（これから）と」

「一夏、大丈夫かな…」
「さぁ？　……まぁ、大丈夫だとは思いたいんだけどね」

二限目の授業も終わり、いつもそうしている様に全員揃って昼食を取っていたのだが、いつもと違って一人足りない。
いつもならそこにいるハズの少年が、今この学園に存在しなかった。

「……全く、一夏も一夏だ。我々に何も告げずに勝手に出向くなど…」
「水臭いですわね、ホント」
「全くだ」

今朝、あまりにも遅いので皆で起こしに部屋を訪ねた時には既に物気の空で、書き置きの一つすら残っていなかった。
残っていた荷物も着替えや教科書といった補充のきく様な無くしても困らない物ばかりで、端末などの機体データの記録媒体は全て無くなっていたのだ。
そんな、帰ってくるつもりがあるのか無いのか、判断に困る状態の自室を残して織斑一夏は消えたのだった。

「……帰って、来るよね？」
「あ、当たり前じゃない！」
「あぁ、一夏ならあんなヤツに負けたりなん……！？」
「？　……どうかしたか？」
「……いや、急に《紅椿》の紐が…」

待機状態の《紅椿》は白と紅の紐に鈴を着けた状態で箒の腕に巻き付いていたのだが、その紐が何の前触れも無く切れた。

「「「「「……」」」」」

定番過ぎて笑うべきところなのかもしれないが、それ故に不吉さが際立つ。

回りが姦しくしている中で彼女らが陣取っているテーブルだけ妙に静かになってしまった。

「あ、あははは！　ぐ、偶然だよ、偶然」

「そ、そうだな！　そうだよな！？」

「あぁ！　そんな非科学的な事があるワケがない」

「だよね！　だよ……！？」

「ど……どうした！？」

「い……いや、その…僕のも…」

「「「「「……」」」」」

《紅椿》に続いて、《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》の紐も切れてしまい、待機状態の機体がスルリと胸に落ちていく。

「も、もぅ！　ありえないわよそんな…」

続いて、壊れたり切れたりはしなかったものの、ブレスレット状の待機状態の《甲龍》まで鈴音の腕から落ちる。

「い、嫌ですわ！　こんな安物のコント染みた…」

更に、イヤーカフス状の《ブルー・ティアーズ》までセシリアの耳から外れて落ちた。

カラン、と、響く音が酷く虚しい。

「…ま、まさかお前までこんな馬鹿な事に……」

なったりしないだろうな？　と、言い終える前に、ゴトンと鈍い音を起ててレッグバンド状の《シュヴァルツェア・レーゲン》が床に落ちた。

「「「「「……」」」」」

全滅、だった。

「どったの？　皆してそんな暗い顔しちゃって」

「あぁ……実は…」

ズ～ンと沈んだ五人とは対象的な陽気さで話し掛けて来たのは生徒会長こと更識楯無だった。

既に昼食は済ませたのか、トレイの返却口のある方向から歩いてきた楯無は手ぶらで、妹の簪も布仏姉妹も同行していた事から察するに、どうやら四人とも既に食事は済ませて来たらしい。

「アッハッハッハッハまっさかぁ～。そ～んなマンガみたいな…」

五人の話を笑い飛ばそうとした楯無のポケットから、待機状態の《ミステリアス・レディ》が落ちた。

「……嘘ぉん」

笑い飛ばそうとして、自身の愛機まで不可思議な現象を起こしたが為に笑顔を引き攣らせた楯無の袖を簪が引っ張る。

「え〝っ……もしかして簪ちゃんも？」

「……うん」

頷く簪の指にはめられていたクリスタルの指輪、《打鉄弐式》には亀裂が走っていた。

「「「「「「「「「……」」」」」」」」」

「……呪われてるんじゃないでしょうか、彼」

虚の呟きを、誰も否定出来なかった。

ある意味一夏は憑かれているのだから。

もう一人の『一夏』に。

「なんだ？　揃いも揃って辛気臭い顔して」

「あ～、織斑先生～。実はですね～」

今度は千冬と真耶がやって来て、皆に話掛けた。

メンバー的に姉が担任なのに無断欠席をかました弟が話題なのだろうと千冬は当たりをつけていたのだが、何やら様子がおかしい。

というか、ぶっちゃけ暗い。

沈んでいる専用機持ち組の代わりに事の次第を報告した本音の報告内容は、確かに縁起が悪い様だったが……というか異様に縁起が悪い話だったが、気にし過ぎだろうと生徒達に言い聞かせ、近くの席に腰掛けてコーヒーを啜った瞬間、マグカップの持ち手がもげた。

「な……」

持ち手がもげるだけでも不吉だというのに、真っ白な机を侵食する様に広がるコーヒーの黒が妙に暗示めいていて全員の不安を煽る。

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

もう雰囲気が通夜のそれだった。

それぐらい陰鬱な雰囲気が彼女らの回りに立ち込めていた。

「お、おりむー大丈夫なのかな？」

「大丈夫、だと思いたいのですが…」

「え、えぇ……」

比較的ダメージの少ない三人がどうしたものかと沈んだ八人を見ながら頭を抱え、唸る。

今ここにいるメンバーで一夏の事情を把握しているのはいつもの取り巻きの五人と姉の千冬だけで、あとの五人はなにやら最近一夏が急激に強くなっている事ぐらいしか知らない。

簪については『一夏』に会った時の記憶は消されていないのだが、会って少し話をした程度なので結局事情を知らない組と殆ど同じ状態でしかないのだ。

今日の事だって、事情を知らない組は一夏が束に呼び出されて学園に居ないという事ぐらいしか把握しておらず、なんの用事で呼び出されたのかは全く知らないのである。

「だ、大丈夫ですよね？　先輩」

「…あぁ、なんといっても、アイツは私の弟だからな……」

普段なら自信を持って言えるその台詞も、今日は虚しく響くばかりだった。

何度も何度も打ちのめされ、機体も身体も満身創痍。
痛みのあまり立っている感覚すら曖昧で、痛覚以前に体力そのものがもう限界。
絶体絶命としか言えぬこの状況、それでも確かに一夏は立っていた。
痛む身体を更に鞭打って、しっかりと両の脚で。

単純に、負けたくないというのも勿論ある。
相手が『もう一人の自分』であるというのだから、尚更。

それ以外でも、この力を得る過程で捨てられないものが増えすぎてしまったのだ、本当に自分一人だけならともかく、経験値稼ぎぐらいのつもりで通い出したＩＳ学園で掛け替えの無い少女達に出会ってしまったのだから、尚更倒れるワケにはいかない。

再開した二人の幼なじみ、篠ノ之箒と鳳鈴音。
まだ一夏が剣道をかじっていた頃、その道場の娘だった箒は別れた後もメキメキと実力を延ばし、再開した後の彼女は人の限界に迫る程の実力を身につけていた。
箒と入れ代わる様に転校して来た鈴音は、弾や数馬といった男友達の様に気兼ねの無い友人関係を築き、後に本場の中華料理を極めたいからと中国に帰国し、再び再開したのは彼女が代表候補生として

ＩＳ学園に転校して来た後の事だった。
セシリア・オルコットとシャルロット・デュノア、そしてラウラ・ボーデヴィッヒとの出会いはＩＳ学園に入学した後の事だった。
クラス代表を決める為の模擬戦の途中で襲撃に会い、それ以来の付き合いのセシリア。
人当たりのいいシャルロットと、軍人の割りにガチガチというワケでもなく、真顔でボケる事もあったラウラ。
出会って以来、国の思惑もあれどそれを差し置いても良好な友人関係を築き上げ、いつの間にかこの五人とつるむ事が多くなっていた。

国の思惑で同じクラスになったからつるみ安かったというのもあったが、勿論彼女ら以外の代表候補生らとの親交もできた。
学園最強のロシア代表、更識楯無。
その妹で日本の代表候補生の更識簪。
他の五人と同じく国の都合で強制開催された模擬戦以来の付き合いである彼女らともその後何度か関わり、姉の楯無には戦い方について教わり、妹の簪とは一号ライダーと二号ライダーの様に二人で力を合わせて戦った事もあった。

二人の幼なじみ以外にも、学園に通う様になってから再開した人物もいた。

亡国企業が工作員、オータムとスコール。
千冬がモンド・グロッソを勝ち抜き、ブリュンヒルデの座に輝いて以降現れる様になった数多の誘拐犯の内の二人だったが、何度叩きのめされても（主に叩きのめされるのはオータムで、スコールは専ら叩きのめされたオータムを回収に来るだけだったが）懲りずに頻

繁にやって来るのはこの二人ぐらいのもので、いつの間にか二人とはお互い顔見知りになっており、そういう意味では二人とも幼なじみと言っても差し支え無いのかもしれない。

あと、自称お姉ちゃんが一人出来た様な気もしたが、最近全く見かける事も無くなった。
恐らく、別の任務で忙しいのだろう。

最初は、ただなんとなく束を一人にしちゃいけないと、子供心に思っただけだった。
だから、頼み混んで力を手にし、”二人で”戦おうとして、その為の経験値稼ぎのつもりがいつの間にか守りたいと思うものが増えてしまった。
最初は殆ど束と同じで姉と束と箒と…と、いった具合に身近にいた者さえ無事なら後はどうでもいいと、傍にいる…手の届く範囲さえ平和なら後はどうでもいいと、本気でそう思っていたのに。
なのに、いつの間にか身近な者は増えて、それを囲むには段々自分の手の長さが足りなくなって……だから、延ばした。
もっと、力を……と。

そうやって手を延ばした先にあった力こそが《白式・両儀》だった。
両儀……太極、つまりは相反する両極のどちらも内包する力を。
全てがあって、何も捨てなくて済むその力を。

守りたいものが、あるのなら。
守る為の力が、足りないというのなら。
もっと、手を延ばそう。
延ばして、未来を手に入れよう。

この力は、その為にあるのだから。

「くっ……」

迫る黄金の鏃は一夏を穿たんと全ての矛先を一夏に向け、一斉に殺到した。

まるで、群れで獲物に襲い掛かるピラニアの様に。

回避……不可能。

そもそも《白式・両儀》では囲いを抜け出すには嵩張り過ぎる。

疲弾を最小限に抑えたとしても疲弾による硬直で他の鏃の的になるだけだ。

防御……却下。

万全であったのなら《零落白夜》のフィールドを発生させてアクセルゴルドスマッシュを無効化出来たかもしれないが、《白式・影打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）として発生させるにしても《白式・真打》の《質量操作》で再現した擬似的なものを発生させるにしても、どの道エネルギーが足りない。

《零落白夜》を使用するのなら、《フォームチェンジ》でまず《紅椿》になって《絢爛舞踏》を発動させる必要があったが、悠長に《フォームチェンジ》→《絢爛舞踏》→《フォームチェンジ》→《零落白夜》なんてやってる暇なんて無い。

回避は不可能、《零落白夜》による防御は間に合わない。

迷う間にも自身を穿たんと迫る黄金の鏃の群れが寸前まで迫って来る。

「（えぇいっ、一か八かだ！！）　キャストオフ！！！」
『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

叫びに続いて響いた電子と共に《白式・影打》で構成された全身のアーマーとウイングスラスターが弾け飛び、迫る黄金の鏃にぶち当たって爆散する。
全方位で巻き起こる爆発に飲まれ、爆炎に消える《白式・両儀》。

『……チッ、往生際の悪い』

爆発と同時に時間切れを起こし、高速移動を終了した《黒式》が爆炎に背を向けた状態で着地し、振り向きながら悪態を着く。
殆どキャストオフによって廃除（パージ）されたアーマーに防がれたものの、それでも数発は命中した手応えがあった。
しかし、当たった手応えがあっただけで、仕留めた感触は皆無だったのだ。
どうやら、相当”当たり処が良かった”らしい。

「ハァ……ハァ……は、ははっ、残念だったな」
『……あぁ、ホント残念だ。今ので死んでいればお前も苦しまずに済んだだろうに』
「ハッ…、じゃあもう楽には殺さないってか？　台詞回しが三流だぞ、お前」
『貴様に合わせてやっただけだ。有り難く思え』
「そ～かい、有り難過ぎて笑っちまいそうだ」

軽口を叩き合う二人の”一夏”。
《黒式》、損傷レベルは小破、エネルギー残量四割。
《白式・両儀》、損傷レベルは中破、《白式・影打》部は廃除、エネルギー残量二割強。

戦況は相変わらず不利、《質量操作》と《フォームチェンジ》、そして《絢爛舞踏》を立て続けに行う暇さえあればこの状況も覆るのかもしれないが、果たしてそんな暇があるのだろうか。

『ハァァァァァァァッ！！！』

「くぅっ…（チッ……エネルギーが心許ない、か。……どうしたモンかな）」

振るわれた《カマキリソード》を一心不乱に躱しつつ隙を伺う一夏だったが、流石は未来の自分というべきか、『一夏』の動きには全くと言っていいほど隙が無い。

（いや、待てよ……なにも全快させなくても部分的になら間に合うか？）

それでも探すしかない隙を、ただひたすら待ち続ける。

待ちながらも《スーパー大切断》の刃で《カマキリソード》の刃をいなしつつ、自身も攻撃を加える内に気付いた。

《スーパー大切断》の刃を生成する様な、部分的な《質量操作》なら十分行う時間はある、と。

（一か八か、やるしか無いか……）

それしか、勝機が無いというのなら。

それしか、思い付かないというのなら。

（あぁ、やってやるさ……せっかく貰った力なんだ。使わないでどうする）

そうと決めたのなら、後は実行に移すのみ。

「はぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
『フッ、そんなもの！』
殴り掛かる勢いで左腕の《雪羅》を復元し、その大きな爪で引き裂きに掛かるも軽く躱されてしまった。

しかし、本命は《雪羅》の使用に非ず。
《質量操作》による部分復元こそが第一の狙いであり、次に仕掛ける《フォームチェンジ》までの布石に過ぎない。
《白式・両儀》はコピーした他の機体の能力の使用を《白式・影打》部分に担当させている。
これは第五世代機……つまり、機体全体をナノマシンで生成する事によって戦況に応じて自由に姿を変えられる《白式・影打》の特製を利用した方が《白式・真打》の《質量操作》で機体全体を作り替えるより安定しているからだ。
簡単に言えば、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）という超能力よりも、ナノマシンという技術の産物の方が安定していて使いやすいからである。

「《フォームチェンジ》、《紅椿》いいいいいっ！！！」
『なっ！？……しまっ』

雄叫びと共に白亜の装甲を真紅に染め、左腕の《雪羅》も《紅椿》の左アーム部に姿を変える。
部分的であるが故に、一瞬で終わった変化。
その一瞬の終わりに合わせて《絢爛舞踏》の輝きが《白式・両儀》を包み込む。

「っしゃぁぁっ！！！」

『チィッ……エネルギーが回復した程度で！！』
「っと、危無ぇっ！！！！」
流石に焦ったのか、若干精彩さを欠いた斬撃は完全に回避され、またしても《フォームチェンジ》の隙を与えてしまう。
「《フォームチェンジ》、《白騎士》！！　《質量操作》、《生体復元》、同時発動！！！」
エネルギー全快、機体は新品同様、操縦者の傷も体力も癒えた。
「これで終わりだ！！」
空を舞う《白式・両儀》の飛行速度が、先程よりも随分速い。
機体の最高速度自体は変化していないのにも関わらず、確かに《白式・両儀》はその飛行速度を増していた。
戦いを通して自身の能力を段々と使い熟し、そして《生体復元》を掛ける度に『一夏』化が進んだが為に動体視力も一夏のそれから更に強化され、『一夏』並の動体視力を得た一夏だからこそ、この速度が出せるのだ。
いくら口では限界以上と言おうとも、やはり脳が限界以上の……自身の手に負えない行為を拒んでしまう。
しかし、その限界が引き延ばされたのなら話は別だ。
限りなく『一夏』に近付きつつある今の一夏なら、『一夏』に出来る事なら何だって出来る。
「だぁぁぁぁぁっ！！！」
『グッ……くそっ、身体（機体）が…』
『一夏』に出来る事をやっているだけなのだから、『一夏』の目に

は一夏の動き自体は追える。
しかし一夏が限りなく『一夏』に近付きつつある今となっては、最初の様に機体の性能差を実力で凌駕する事も儘ならない。
何故なら、今の一夏は《白式・両儀》を纏った『一夏』に等しくなりつつあるのだから。
同じ実力を持った人間同士を戦わせて、機体に性能差があった場合、機体性能の低い方の機体を使って勝てる道理など無い。

『クッ……カハッ…（フッ…フフ、漸く、ここまで来たか……）』
「喰らいやがれっ、ライダァァァァッパァァァァンチッ！！！」
『ガッ……ぐぅっ…（あぁ、これなら……これなら、俺も安心して消えられる。束を独りにしなくて済む）』
「トドメだ！！　ライダァァァァッキィィィィィィックッ！！！」

白い流星と化した《白式・両儀》が《黒式》を貫き、『一夏』は一夏の手によって倒された。

「……俺の勝ちだな」
『あぁ、そうだな』

仰向けに倒れた《黒式》に歩み寄って語り掛ける。
語り掛けられた《黒式》は胸ごと左腕を失い、ギリギリ右半身だけで上半身と下半身が繋がっているだけの状態だった。

「お前の言う未来で何があったのか、詳しくは知らないけどさ、ここは俺の世界なんだ」
『……あぁ、そうだな』
「だから、お前が俺の身体を乗っ取って何をしたかったのかは知らないけど、俺は俺のやりたい様にやらせてもらうぞ」
『フッ…、好きにしろ。勝ったのはお前だからな』
「あぁ、言われなくてもそうするさ」

先程までの死闘が嘘の様に、静かに語り合う二人の”一夏”。
互いに鎧は解かず、《白式・両儀》と《黒式》のまま語り合ったのは、互いに違う者だと強調したかったからなのかもしれない。

「……決着、ついたんだね」
『あぁ、負けたよ』
「うん、知ってる」
『そうか』
「うん」

語り合う二人に歩み寄った束は地に膝を着いて『一夏』を抱き起こし、一言二言、軽く言葉を交わしあった。

「……何か、言い残す事はあるか？」
『…言い残す事、か。そうだな、しっかりと束の手綱を握っとけよ。コイツ、ほっといたらとんでもない事やらかすからな』
「あぁ、うん。それは知ってる」
「ブーブー、束さんだって自重ぐらいするよ～！」
「『それは無い』」
「ガ～ン」

異口同音、全く同じタイミングでツッコミを喰らった束は　ｏｒｚな状態で突っ伏して、数秒もしない内に復活した。
相変わらず浮き沈みの激しい人である。

「…じゃあ、最後の儀式を始めようか。いっくん、手貸して」
「あ、はい」

束が何をするつもりなのかは見当も着かなかったが、いつもとは違うその厳かな雰囲気で、これから何か重要な事をするのであろう事を察した一夏は素直に手を差し出した。

「じゃあ、いくよ」

差し出された手を取り、束がその手を《黒式》のベルトのコアに触れさせた瞬間、黒が白を侵食し始めた……否、白が黒を飲み込みだした。

「！？」
『安心しろ。別に今更お前の身体を乗っ取ろうだなんて思っちゃいないさ』
「ま、ある意味その逆だね。この場合」
「逆？」

急な出来事に一瞬驚いたが、どうやら乗っ取られるワケでは無いらしい事だけは確かなので、取り敢えず話を聞く事にした。

『あぁ、お前に、俺の全てをくれてやる。記憶も、力も、全てだ』
「…あぁ、成る程」

そういう事かと一夏が頷いた。
確かに逆と言えば逆だ。
『自分』に自分が乗っ取られるのでは無く、自分が『自分』を取り込むのだから。
だからだろうか、《黒式》に触れた右手から走る黒いラインが《白式・両儀》の機体全体に走って行けば行くほど、《黒式》が……『一夏』が消えていくのだ。
そして、『一夏』の吸収が進めば進むほど流れ込んでくる身に覚えの無い記憶が染み込んでいくのが手に取るように解るのだから。

暫くして、『一夏』は《黒式》と共に完全吸収されて消え去った。
残されたのは確かにあった一つの結末。
その結末を辿ったもう一人の『自分』の力。

「帰ろっか、いっくん」
「そうだな、皆待ってるだろうし」

束を抱き抱え、”一夏”はこの真っ白で何も無い空間から飛びだした。

未来（これから）を、手に入れる為に。

第一章　閉幕

※おまけ

決着を終え、学園に戻った頃には既に夜になっていた。
夜、といってもそう遅い時間ではなかったのだが、少々寄り道をし過ぎたらしい。

「一夏！　ぶ、無事だったか！？」
「だ、大丈夫でしたの！？」
「あああ、アンタ！　本っ当に怪我とかしてないワケ！？」
「え、ぇ～と、あの…」
「全く、心配をかけおって……一言ぐらい言って行ったらどうなんだ、お前は」
「ラウラの言う通りだな。姉である私にすら一言も無いとはどういう了見だ貴様」
「ちょっ……ちょっと待て、いっぺんに話掛けられてもなにがなんだか…」

帰って来た途端、もの凄い勢いで囲まれ質問攻めに合った。
因みに箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、千冬の順だったのだが、集まったのはそれだけではない。

楯無も簪も居たし、それぞれの主人の付き添いで虚も本音も来ており、更に一夏の帰還を察知して職員室を飛び出して来た千冬を追い掛けてきた真耶も居た。
キラリと光る楯無の目に、質問攻めの第二波の到来を予感し、戦慄する。

「……それで？　勝ったのか？」
「…あぁ、勝った」
「そうか…」

代表して肝心な部分を問い質した千冬に、一夏が答え、その答えに皆胸を撫で下ろす。

「全く……束も束だ。私に連絡の一つも寄越さないとは…」
「ごっめ～ん、ちーちゃん。ちょ～っち急いでたからさぁ～」
「全く、お前は…」

軽く千冬の文句を流した束に、あぁコイツはこういうヤツだったと、千冬がため息を零した。
それはもう、深い深いため息だった。

「姉さん」
「ん～？　どったの箒ちゃん」
「結局、『あの人』は何だったんですか？」
「ん～、説明するのは良いんだけどさぁ～、知らない顔も一杯なんだけど。ヤダよ私、一々最初っから説明し直すなんて。面倒臭い」
「あぁ、それなら私がコイツらに話た」
「そうなの？　ん～、じゃあ…」

もう一つの核心部分を、箒が問うた。

一夏以外の目には、あの真っ白な空間で『一夏』に向けた束の視線に、ただならぬものを感じていたのだ。

問われた束は、珍しく頬を朱に染めてモジモジしながら答えた。
あと、何故か一夏の頬も赤かった。

「……うん。私の大切な人、かな」
「大切な人？」
「そう。だってあの人は……”いっくん”は、篠ノ之束の…」

少し、勿体振る様に『彼』の正体を、束が告げた。

「”織斑束”の、旦那様だから♪」

告げながら、一夏に抱き着いた。
『一夏』でもあり、一夏でもある一夏に。

「なっ…」
「え…」
「「「「「「「えぇぇぇぇぇぇぇっ！！？」」」」」」」

絶叫が、夜の学園に響き渡る。

「な、なななな、い、一夏が結婚！！？　それも束と！？」

「え…あ、いやそれはあくまで『アイツ』の話であって俺は……」
「あ～、いっくん酷い！　もう同化したゃったんだから『いっくん』はいっくんなんだから、やっぱりいっくんのお嫁さんは束さんなんだよ！」
「え……あ、あぁ、そういう事に……なるのか？」
確かに、今の一夏は『一夏』でもある為、束の言い分も正しい様にも思えたが、何かが違う気がする。

「い、いや待て束。お前の旦那はあくまで『アイツ』であって一夏じゃないだろう！」
「え～、でも『いっくん』もいっくんと同化したんだから同じだよちーちゃん。それに、違ったとしても、”また私を選んで欲しい”って思うのは、そんなにおかしい事なの？」
「う…、いや、しかしだな……」

束の言い分に珍しく怯む千冬。
いつもならアイアンクローでもかまして黙らせるところなのだが、今それをやったら負けな様な気がして手が出せなかった。
束は束で千冬が手を出して来ないのをいいことに更に一夏に擦り寄り、一夏も一夏で『一夏』と同化したからなのか、かなりナチュラルに腰を抱き寄せたりなんかしているので非常に腹立たしい。

「いぃ～ちぃ～かぁ～」
「ゲッ…」

勿論、腹立たしく思っているのは千冬だけでは無い。

気付けば、七人の鬼がそこにいた。
専用機持ち全員が戦闘体制に入っており、ロックオン警報が鳴りま

くる。

「そこになおれぇぇぇぇぇっ！！！」

「フ…フフフ、一夏さんには一度しっかり躾をしておく必要があるようですわねぇ…」

「……よし、殺そう♪」

「あは、冗談キツいなぁ～一夏は」

「さて、覚悟は出来てるだろうな？　まぁ、返事を聞くつもりは無いが」

「うん、確かに二兎追うものは二兎とも取れって言ったけど、ホントに兎さんを取るのは違うんじゃないかなぁ～、織斑君」

「……死ねばいいのに」

「ヒィッ…」

泣き出したくなるほど怖かった。

思わず悲鳴を上げそうになったのも、仕方のないことだと思いたい。

殺気当てられ真耶は気絶、従者の姉妹も主人姉妹の怒りに奮え上がり、千冬すら引いてるのだから。

「「「「「「「「「「いっぺん死んでこいっ！！！」」」」」」」」」」

「ギャァァァァァァッ！！！　結局最後までこれかよ！」

「アハハハハ、た～のし♪」

「束さん！　笑ってないで助けて下さい！」

「頑張れ、超頑張れ」

「チクショー！」

結局明け方まで追い掛けっこは続き、全員寝不足で翌日の授業を受ける事になったそうな。

おしまい

第１００話「未来（結末）と未来（これから）と」（後書き）

衝撃の事実（笑）、実はこの『仮面ライダー白式』という小説は束ルートからの二週目だったのさ！

次回、エピローグ

エピローグ（前書き）

第一章、完結！

■今日の空気さん

箒「さて、今回で第一章も終わって次回からは第二章がスタートだな。……では、次の方って…ん？　いないのか？」

『箒』「どうも、生まれてすら来なかったあっちの世界の『篠ノ之箒』です」

箒「……まぁ、その…なんだ？　……スマン、何と言ったらいいのか解らん」

『箒』「いいんじゃないのか、別に。……というか、『篠ノ之束』……あ、今は篠ノ之束か、まぁ束の次に生まれてくるかもしれなかっただけで私が『篠ノ之箒』として生まれてくるかどうかも微妙だったんだよね」

箒「それは……まぁ、そうか」

『箒』「うん、単純に名前が違うとか性別が違うってだけで、束の次なのには代わりは無いんだけどね」

箒「そうだな、確かにそれもそうだ」

『箒』「だからどうしろって言うつもりも無いんだけど、後悔の無い様にね。まぁ、生まれてすら来なかった私としては後悔出来るだけ十分羨ましいんだけどね」

箒「あぁ、そうだな（…後悔の無い様に、か）」

エピローグ

「……あ～、少し早く来過ぎたか？」

ショッピングモールの中心にある時計塔を背に、男が呟いた。
ここに来ればたいていの物は揃うと言われるだけあって、食品だとか衣服だとか、あらゆるジャンルの日用品の店が立ち並ぶこのショッピングモールは県内有数の規模を誇っている。
そしてその中心に聳える時計塔もまた町の名物であり、地元住民の待ち合わせ場所に重宝されていた。

「それにしても……これでもう今日は3件目か。全く、仕事熱心だねぇ～、あちらさんは」

おかげで俺は今日もサボりだ…と、男が愚痴った。
待ち人より先に”待ち合わせ場所”に赴いて待ち人を出迎えて”もてなす”。
それがこの日の午前中だけでもう3件目。
このまま行けば恐らくは日が暮れるよりも早く待ち合わせの回数が2ケタを越えるだろう。
ここのところ、ずっとそうだ。
連日の様に相手を取っ替え引っ替え……というとロクでもない男の様に思われるかもしれないが、ある意味ではそうなのでそう表するしかないのが辛いとは本人の弁。
しかし自分から言い出した事とはいえ、こうも頻繁に出動せねばならないとなるといい加減ウンザリしてくるもので、ストレスもいい具合に貯まってきていた。
だが、ストレスの方は相手にぶちまけるからまだいいとして、疲労

の方はどうしようもなく、休みたくても次から次へとラブコール（出動要請）がかかるのだ、男として行かねばなるまい。
姉の親友曰く、「モテる男は辛いのさ♪」との事だが、こんな連中にモテても嬉しくないというのが正直なところだ。

「にしても……予定時刻より２０分も早く到着するとはな…。もうちょいゆっくり来てもよかったか？」

腕時計……機能も有するガントレットを見遣りながら、自問するが当然答えてくれる者など居ない。
皆、自分達の用事で忙しいのだ。

「…少し、寝るか」

まだ、時間あるし。
そう呟いて、男は時計塔に背もたれて、立ったまま瞼を閉じた。

「ちょっとアンタ、聞いてるの！？」
「……は？」

１０分程寝るつもりだったのに、不意に起こされた。
目を開けると、そこにはいかにも今時風な格好をした女性……年齢

がよく解らないが、多分大学生か新卒の社会人かぐらいの女性が二人、俺の前に立っていた。
美人かどうかは……まぁ、言及するのは止しておこう。
多分、回りの連中のレベルが高過ぎるせいで、比較対象としては不適切だったのだろうから。
……まぁ、そこそこ美人？　なんじゃないか？　……多分。
やたらケバく見えるのもきっと気のせいなんだろう。
……と、思いたいんだが常人レベルまで落としてるハズの嗅覚を以ってしても化粧臭く感じるので、やっぱ見た目通りケバいのだろう。

「……あ～、何のご用で？」

取り敢えず、下手に出て様子を伺う事にした。
問答無用で追い払ってもよかったのだが、こういった輩はたいていアレな連中が多い。

「アンタ、今暇でしょ」

俺から見て右側の女性が言うにはそうらしい。
質問では無く確定な辺り、やっぱこの二人もそうなのだろう。
ってか、ホントに暇なんだったら家でぐっすり寝て……いや、学園で授業受けてるぞ……って、あぁ、そう考えるとこの人の言ってる事も案外間違いじゃないのか。
どうやらこの人の目には俺は学校をサボってブラついてる様に見えたらしい。
否定出来ない辺りがまたなんとも…。

「あ～その、残念ながらもうすぐ待ち合わせの相手が来るんで実は暇じゃなかったりするんですよ」

待機状態で腕に巻き付いている相棒を見遣りながら、そう言ってみた。
多分、聞き入れて貰えないんだろうが、予定時刻までもう３０秒を切っている。
というか、既に腕の相棒が商店街を訪れた待ち人の存在を関知していた。

「アンタの予定なんかどうだっていいのよ！　どうせ暇なんだから荷物持ちぐらいしなさい」

……おい、どうだっていいんなら何で聞いた？
まぁ、いい。
なんか納得がいかないがもうすぐ来るんだからあまり取り合わない事に――――

「……来たか」
「は？　何を言っ！？」
「ヒッ！！？」

――しようとしたところで、ヤツが来た。

敵ながら中々のグッドタイミングである。
常人を遥かに越えた……この間計ったら２０．０だった視力が捕らえたヤツの姿はどこにでも居そうなサラリーマンだった。
恐らく、化けたのだろうが違和感が酷い。
人の事を言えた切りじゃないが、まずこんな時間帯にサラリーマンがこの場所を通ったりなんかしないし、見た目は及第点をやってもいいぐらいには擬態出来てるが、総合的にはまだまだ及第点をやれそうもない。

稀にサラリーマンがこの時間帯にこの辺りにいる事はあるかもしれないからその辺りは目をつむってやってもいいが、見た目が完璧なだけじゃあダメだ。
俺の目をごまかせたとしても、”臭い”が人間のそれじゃない。
どうせ化けるのならそこまでやってのけないと役者としては三流もいいところだ。

その違和感にイラついて、俺は構えた《ボルティックシューター》の引き金を引いた。
なんか周りが騒いでいた様な気がしたが、何かいいことでもあったのだろうか？

「キシャァァァァァァァッ！！」

光線に貫かれ、ドロリと溶けたサラリーマンもどきは一旦銀の水溜まりになって、まるで逆再生でもしたかの様な勢いでヒトガタを形成していき、怪物の姿に変わっていった。

ではでは、怪物様一命、地獄への黄泉路へご案内させてもらいましょう。

広域殲滅用パワードスーツ、インフィニット・ストライカー。
機体名称、《白式・両儀》。
またの名を、仮面ライダー白式。

それが、俺の仕事上の名義である。

「変身！！！」

ポケットから取り出したバックルを腰に当てた途端、巻き付くベルト。
両手を大きく回してポーズを取り、叫んだ言葉通りに俺の姿は変わっていく。
まばゆい白い光りが俺の消し去り、光が止んだ頃には俺の代わりに白亜の騎士がそこに立っていた。
漆黒のラインの入った白亜の装甲、クリアバイザーの奥に真紅の瞳を輝かせる機械仕掛けの英雄。
異形を狩る異形。

それが今の俺であり、この一時に限り俺の存在は人間、織斑一夏ではなく、殺戮人形（キラーマシン）、仮面ライダー白式へと変わる。

「……まぁ、そういうワケで今からデートだからさ、アンタらは今すぐ安全な場所に逃げた方がいい。何せ、俺らのデート（殺し合い）は少々激しいからな」

後ろで腰を抜かしている二人にそう語り掛けると、二人はコクコクと頷いて慌てて逃げていった。
腰が抜けてるのに器用なものである。

「さぁ～て、それじゃ始めますか」
『…えぇ、さっさと片付けてしまいましょう。ドクターの予測では後2時間後にお隣り（中国）にまた出るらしいですから』
「……おいおい、お隣りって町じゃなくて国かよ」相棒の言葉に幾分かモチベーションを下げられた様な気もしないでもないが、きっと気のせいなのだろう。

正直、そう思ってないとやってられないし。

「んじゃ、ま、始めますか！」

そう言って、俺は走り出した。

長く辛い、戦いの日々へと。

エピローグ（後書き）

最後の最後に、原作三刊に登場したウザい女性客登場！
どうしてこうなった（笑）

これで、一夏が仮面ライダーになるまでの物語、『仮面ライダー白式　第一章』はおしまいです。

このまますぐに第二章へ……と、行きたいところなんですが、当方、資格試験を控えてる身なので第二章を一から執筆するのは１０月過ぎからとさせていただきます。
それまでの期間は第一章の内容の加筆修正や設定集の編集に回しますので、更新自体はぼちぼち続きますが。

第一章：設定集・メカ編（白式シリーズ）（前書き）

目次

・《白式・両儀》……P．1～P．2
・《白式・真打》……P．3～P．8
・《白式・影打》　…P．9～P．10
・《白騎士》……P．11
・《白式・数打》……P．12
・《黒式》……P．13～P．14
・《白式》……P．15

第一章：設定集・メカ編（白式シリーズ）

◎白式（びゃくしき）・両儀（りょうぎ）

○操縦者
織斑一夏

○所属
無し

○機体概要
『一夏』のいた世界で束によって開発された広域殲滅用パワードスーツであり、分類上ではインフィニット・ストラトスではなくインフィニット・ストライカーに該当する機体。
コアユニットである《白式・真打》にオートクチュールの《白式・影打》を装着した機体……というのはあくまで一夏に解りやすい様に束がそう説明しただけであり、元々一つの機体だった《白式・両儀》を当時の一夏の実力に合わせて二つの機体に分けたのがその実状である（《白式・真打》と《白式・影打》についてはそれぞれの項目で後述）。
一応、一定の姿を持ってはいるものの、その特性（後述）の影響で機体スペックは不定。
元来は『一夏』が使用していた機体であり、『一夏』の死後、こちらの世界に居着いた束が自身の専用機として改造した後に今度は一夏の専用機として改造され、更に《白式・真打》と《白式・影打》の二つに分けられたという複雑な経歴を持つ。
因みに、『一夏』が使用していた時の名称は《白夜》である。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）

■フォームチェンジ

基本的には敵の特性を解析し、その解析結果から導き出された敵の弱点に姿を変える能力。

弱点にならずとも敵と同じ姿になる事によって自身の手数を無限に増やし続ける事も可能であり、武装だけでは無く唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）までコピー出来る。

■その他

《白式・両儀》でもあり、《白式・真打》と《白式・影打》でもある本機はそれぞれ《白式・両儀》、《白式・真打》、《白式・影打》としての唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を同時に使用出来る。

しかし、《フォームチェンジ》で姿が変わる《白式・影打》に関しては別の姿を取っている際には《白式・影打》としての唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）は使用出来なくなり、代わりに別の機体の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を使用する事となる。

本編中では《白騎士》と《紅椿》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を使って見せた。

○武装

基本的には《白式・真打》と《白式・影打》の武装をそのまま使用するが、データを蒐集した後なら他の機体の武装は全て使用可能である。

また、ある程度は即興で新たに武装を構築する事も可能。

■破壊の光（仮称）

宇宙空間で使用した。

光に触れた物を原子レベルで消滅させる事が可能。

第一章では《雪片弐型》に纏わせて惑星を両断出来るサイズの光の

剣を生成したり《雪羅》に纏わせてシャイニングフィンガーの様に使用した。

■キャストオフ
主に囲まれた際などに《白式・影打》部分のパーツを強制廃除する事によって窮地を脱する為に使用される機能。
また、狭い場所での戦闘の際は強制廃除せずに拡張領域（バスロット）内にパーツを格納する事も可能である。

■その他
1ページ目にある通り、データを蒐集した機体の武装を使用出来る（※2）。
以下、蒐集済機体一覧
・《白式・真打》
・《白式・影打》
・《白騎士》
・《黒式》
・《ブルー・ティアーズ》
・《ブルー・エンプレス》
・《甲龍》
・《神龍》
・《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》
・《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》
・《シュヴァルツェア・レーゲン》
・《シュヴァルツェア・ヴォルフ》
・《ミステリアス・レディ》
・《打鉄弐式》
・《アラクネ》
・《サイレント・ゼフィルス》
・名刺不明機

◎白式・真打（びゃくしき・しんうち）

○操縦者

織斑一夏（※1）、『織斑一夏』

○所属

無し

○機体概要

元来は幼い頃に誕生日プレゼントとして束が『本当に変身出来るベルト』として造って与えた玩具であり、当時はポーズ認証の後に音声認証を行って立体映像を装着者に被せるだけのハイテク技術を無駄にふんだんに使った代物だった。

後に、一夏の計画への参加に伴って《白式・両儀》の半身である《白式・真打》の器となる。

本機は《白式・両儀》のコアユニットに当たる機体であり、《白式・両儀》と同じく分類上はインフィニット・ストライカーとなる機体で、序盤から一夏の専用機として主に対代表候補生戦やテロリストとの戦闘、そして侵略者との死闘等で主に活躍する事になった。

また、対《甲龍》戦で見せた様に一夏の実力に合わせて戦闘中に二次移行（セカンド・シフト）を果たして一夏の弱点をカバーする様な変化するなど、断片的に《白式・両儀》としての即応機能が残っている模様。

気絶した操縦者の代わり戦闘、或は離脱行動を自動（オート）で取る等、操縦者保護機能がインフィニット・ストラトスより充実している反面、再改造を受けて《セイリングジャンプ》を搭載されるまで飛行が出来なかったりしたが、これはまだ初心者である一夏にあれこれとあらゆるスキルを習得させようとしてどっち着かずにならない様にす

る為に陸戦限定仕様になっていたのであって、欠陥ではない（尤も、開発した束自身に仮面ライダーが飛ぶというイメージが無かったのも原因ではあるが）。

因みに、製作者は束だがデザインや武装等のアイデアは一夏の原案である。

つまり、リアルぼくのかんがえたかっこいい〇〇〇、若しくは厨二機体なのだが開発自体は本編開始よりも数年前の事なので、当時の一夏の年齢的を考えればそれほど不自然では無い。

だが、本機を纏うということは自身の黒歴史を曝すに等しい行為でもあるのだが、一夏自身が気付いていない上に誰も突っ込まないので恐らく一夏は永久にその事実に気付く事は無いと思われる。

〇唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能

■質量操作

拡張領域（バスロット）内に貯蔵した質量を素に、必要に応じてあらゆる物を生成する能力であるが、設計に関しては操縦者の頭脳任せである為、最初は予め束が型を用意したものだけを生成するというスタイルを取っていた。

後に一夏にも製作者権限が発行され、自由に物が生成出来る様になり、更に束の計らいで操縦者の視覚情報を素に操縦者が自分で設計せずとも自動で型を生成する事が出来る様になったのだが、結局一夏は刀剣等の比較的構造が簡単なものしか生成していない模様。

〇武装

基本的にあらゆる仮面ライダーの武装を《質量操作》で模したものを使用しているが、あくまで名称が同一なだけで外観や能力までは同一ではない場合が多い。

初期装備（プリセット）は《マシンスライダー》のみで、他の武装は全て後付装備（イコライザ）……というか、唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能で創った物である。

■ライダーパンチ
武装では無く技であるが、《バイタルチャージ》でパワーを底上げして威力を高めたり、《零落白夜》を拳に纏わせてシールドバリヤーを無効化した上で繰り出せば《白式・真打》のパワーもあって、敵の操縦者を殴り殺してしまう事も可能だったりと、ただ殴るだけな割りにかなり危険。

■ライダーキック
武装では無く技であるが、《バイタルチャージ》でパワーを底上げして威力を高めたり、《零落白夜》を拳に纏わせてシールドバリヤーを無効化した上で繰り出せば《白式・真打》のパワーもあって、敵の操縦者を蹴り殺してしまう事も可能だったりと、割りとガチで必殺技だったりする。

■ライダーチョップ
ライダーパンチやライダーキックと同じく、ただの技であるがこれも容易に殺人が可能な辺りかなり危険。
ただし、一夏は後述の《大切断》ばかり多用するので出番が無い。

■大切断
前腕部分の装甲を展開し、展開した時に生じる隙間から生える三枚刃。
一夏が多用する武装の一つであり、刃を最大まで延ばせば《スーパー大切断》として使用可能。
刃に《零落白夜》を纏わせずとも十分な殺傷能力がある。
因みに、刃は《質量操作》で生成しているだけで刃として収納されているワケでは無いのでいちいち装甲を展開する必要は無かったりする。
所詮、ただの演出なのだ。

■ボルティックシューター
呼出し(コール)を認識した直後に腿部の装甲が展開し、展開と同時に即座にサブアームによって右腕に手渡され、ハイパーセンサーとのリンクを開始して瞬時に標的(ターゲット)をロックする。
これらの作業を僅か0．01秒の間に終えてしまう上に動作補正も自動で行ってくれるので素人の一夏でもほぼ百発百中な親切設計。
更に燃費の割に高威力で取り回しもいいので一夏も多用している。
因みに、『呼出し(コール)を認識した直後に腿部の装甲が展開し、展開と同時に即座にサブアームによって右腕に手渡され…』というのもあくまで演出であってやろうと思えば他の武装の様に手中に出現させる事も可能。

■マシンスライダー
専用バイク。
アギトのマシントルネイダーの様に、変形すれば飛行も可能。
《白式・真打》の余剰エネルギーをチャージしてあるので使用中は専らエネルギーの節約の為に使用される場合が多い。
因みに、初めて乗ったのは一夏ではなくセシリア。

■エレクトロファイヤー
高圧電流を発生させる武装で、主に敵機の電子機器の破壊に使用。
漏電防止の為に《マイクロチェーン》伝いに放つ場合が多い。

■ドリルキック
ライダーキックのバリエーションの一つ。
ただでさえ殺傷能力の高いライダーキックに回転を掛ける事によって更に威力を上げるという危険技。
最初の襲撃事件で使用されたのだが、あくまで襲撃犯の実力が高か

ったから逃げおおせたのであって、直撃すれば機体ごと操縦者を木っ端微塵にしかねない。
また、一夏に『対人戦での《零落白夜》の使用は危険』と勘違いさせた技であるが、《零落白夜》も何も《白式・真打》のパワー自体が危険。

■ギガント
四連装ミサイル。
何気に一夏が多用する武装でもある。
ミサイル一発一発の大きさから想像出来る様に、かなり威力の高い武装なのだが専ら目眩ましとして使用される場合が多い。
ミサイル自体は《質量操作》で生成されているので拡張領域（バスロット）内の質量が足りる限りは弾数無限。

■分身
自律稼動する《白式・真打》の分身、《白式・数打》を生成する能力。
万単位の《白式・数打》を生成する事が可能だが、侵略者の侵攻に対抗する為に殆どが宇宙に出払っており、実際に一夏が使用出来る分身の数は全体数の数パーセント程度である。

■展開装甲
二次移行（セカンド・シフト）に伴って機体側が構築した新機能。
全身の装甲を展開する事によって高速移動形態に移行する。
また、展開した装甲の隙間から擬似的な《零落白夜》を発生させる事によって敵のエネルギー兵器を無視して突撃を仕掛ける事も可能。
通常時がユニコーンガンダムのユニコーンモードで、高速移動形態がデストロイモードといえば解りやすい。

所詮、声優ネタである……というか、ぶっちゃけあんな感じで装甲が展開する。

■スーパー大切断
《大切断》の最大出力形態であり、後半になるにつれ《大切断》よりもこちらが使用される事の方が多くなった。
《セイリングジャンプ》の初使用時に安定翼代わりに使用されるなど、珍妙な使われ方をした事がある。

■ライダーきりもみシュート
敵の頭と脚を掴んで回し、強制的に側転させる技。
竜巻を巻き起こすほど回転させるので手を離せば相手が上空に吹っ飛んでしまう。

■インビジブル
ステルス機能。
肉眼は勿論、あらゆるレーダーに捕捉されなくなるほどのステルス性を誇り、インフィニット・ストラトスのハイパーセンサーですら捕らえることが出来ない。

■剥奪
他の機体の拡張領域（バスロット）をハッキングし、武装を剥奪する機能。
ある意味《白式・両儀》のコピー機能に似ているが、コア自体の権限が他のコアより上位であるが故にハッキングが出来たのであって厳密にはコピー機能とは異なる。
ハッキングしてそのまま武装を剥奪して使用する事も可能だが、その場で強化発展型に改造して使用する事も可能。

■十字手裏剣
ＺＸの様に肘のパットを外して投げると遠心力で収納されていた刃

が出現し、相手に突き刺さる投擲武装。

■火炎放射
スーパー1の冷熱ハンドに当たる武装。
文字通り右腕から火炎を発射する。

■冷凍光線
スーパー1の冷熱ハンドに当たる武装。
文字通り左腕から冷凍光線を発射する。

■セイリングジャンプ
再改造によって追加された飛行機能。
これによって《白式・真打》は単体での飛行が可能となったが、《白式・両儀》の封印が解けてからは《白式・影打》のウイングスラスターを利用する様になったので滅多に使用されなくなった。

■マシンガンアーム
一応、型として登録されている武装だが《白式・真打》は使用しておらず、《白式・数打》が使用した。

■マイクロチェーン
主に適を拘束する為に使用。
一夏が使用する場合、《マイクロチェーン》→《エレクトロファイヤー》の流れになる場合が多い。

■穿孔キック
ライダーキックのバリエーションの一つ。
ライダーきりもみシュートを空回りさせて竜巻を起こして相手を閉

じ込めて動きを封じ、竜巻を推進力に利用してライダーキックを放つという技。

■パワーハンド
マシンガンアームと同じく、型として登録されてはいるが《白式・真打》は使用しておらず、《白式・数打》が使用した。

■ヒールクロウ
踵部分に生成した刃で敵を切り付ける武装。
内容自体は《大切断》と同じだが、使用頻度は低い。

■バイタルチャージ
一時的に機体の出力を底上げする機能。
ただし、その分エネルギーの消費も激しい。

■リボルケイン
剣……では無く棒状の武装で切断より突き刺す様な使い方で使用される。

■電磁ナイフ
ナイフという割りには刀身の長い武装。
切れ味がいいので何度か使用されたが、結局一夏は《大切断》の方を多用した。

■デン・ジ・エンド
仮面ライダーの技では無くキカイダーの技であり、《大切断》に《エレクトロファイヤー》を纏わせて再現した。

■ライダーブレイク
専用バイク、《マシンスライダー》で体当たりを仕掛ける技。

■ＡＩＣ
慣性停止機能の事でアクティヴ・イナーシャル・キャンセラーの略。
一時的に《シュヴァルツェア・レーゲン》のコアを取り込んだ際に使用。
この時入手したデータを素に《ファイズポインター》が製作された。

■逆ダブルタイフーン
《白式・真打》と《シュヴァルツェア・レーゲン》の二つのコアのエネルギーを竜巻状にして放った技。

■ジャンボフォーメーション
要するに巨大化するだけの機能だが、巨大である分パワーや重量に物を言わせた戦い方が可能である。
全高はデフォルトで４０ｍに設定されているが、質量さえ足りればもっと巨大化する事も不可能ではない。

■ファイズポインター
ＡＩＣ発生装置で、レーザーポインターの指す先にＡＩＣを発生させる。
一夏は穿孔キックにこれを併用して回避不可能状態の楯無に蹴りを見舞ったが残念ながら水で形成された分身だった。
勿論、クリムゾンスマッシュを繰り出す際にも使用される。

■ストームハルバート
楯無の分身体を薙ぎ払うのに使用。

■ドッガハンマー
小回りこそ利かないものの、その分威力は凄まじく、一撃で《ラスティーネイル》を破壊した。

■サタンサーベル
対楯無戦で一夏の身体を乗っ取った『一夏』が使用し、楯無本人を切り付けた。

■シャドーセイバー
《サタンサーベル》に引き続き、『一夏』が楯無を切り付けるのに使用。

■キングラウザー
《白式・真打》の武装の中でもトップクラスの威力を誇る武装だが、一々セーフティー解除の為にカードを挿入しなければならないデメリットもある。

■デンガッシャー
組み替える事によってソードモード、ロッドモード、アックスモード、ガンモードと、多彩な使い方が可能な武装。

■ライジングドラゴンロッド
両端に刃の付いた長槍。
主に一夏は投擲武器として使用している。

■ユニコーン
短刀版《電磁ナイフ》の様な扱いの武装。

■トンボ
グランドを均す為に使うT字型の棒。

■ケルベロス
ガトリングガン型の武装。
外見上、マガジンは着いているが武装自体が《質量操作》による生成品なのでマガジンを取り替えなくても質量さえあれば弾切れは起こさない。

■クリムゾンスマッシュ
ライダーキックのバリエーションの一つ。
《ファイズポインター》を使用する事によって相手の動きを封じた上で繰り出す必中の蹴り。
勿論、紅い鏃が相手を貫いて最後にΦのマークが浮かび上がる演出付き。

■エクシード形態
簡潔に説明すると《質量操作》でエクシードギルスの様になった状態の事。
普段とは違い、肘側と真ん中の刃は肘側に延び、手首側の刃だけ手首側に延びる《スーパー大切断》の刃と肩から延びるカッター、そして背中から触手の様に延びる刃を生やしており、更に踵から生える《ヒールクロウ》もいつもより長く鋭いものに変化している。
また、あくまでこれは《質量操作》によって全身に刃を生やしただけなので《フォームチェンジ》とは異なる。

■その他
《白式・両儀》の封印が解けた後は《白式・真打》か《白式・影打》のどちらを使用していても結局《白式・両儀》を使用している扱いになるので《白式・影打》の武装を使用する事も可能。

◎白式・影打（びゃくしき・かげうち）

○操縦者
織斑一夏（※1）

○所属
無し

○機体概要
世界で唯一の第五世代型インフィニット・ストラトスであり、《白式・真打》の片割れ。
原作でいうところの《白式》に当たる機体だが、原作と違いメーカーが放置していた機体を束が改造したのではなく、束が一から造った機体とすり替えた。
つまり、《白式》という機体は別に存在する事になるのだが、すり替えられた後の《白式》の行方は不明。
本機は《白式・真打》と違い、主にＩＳ学園の授業や行事で運用される事が多かった。
当初は高機動なだけで武装は《雪片弐型》一本のみと武装の乏しい機体だったが、『一夏』の覚醒と共に二次移行（セカンドシフト）……ではなく封印が解かれ、ウイングスラスターが二機一対から四機二対に増設されて更に機動力を増し、武装も複合ユニット《雪羅》が増設された為に戦術の幅が広がった。
だが、これはまだ一つ目の封印が解けただけであり、後に一夏が瀕死の重傷を負った事によって二つ目の封印が解除され、第二の姿を曝す事になる。
のもう一つの顔である《白騎士》に姿を変えた本機は唯一仕様（ワンオフ・アビ）の特殊才能（リティー）で操縦者を瞬時に治癒し、以降、攻撃は《白式・影打》、回復は《白騎士》と姿を使い分ける様になった。
これは本機のコア以外がナノマシンによって生成されていたから可

能な”変身”であり、この機能を利用して《白式・両儀》は《フォームチェンジ》を可能とする。
また、《白式・両儀》の意思こと白式が宿っているのは本機の方だが、《白式・真打》も《白式・影打》も元々一つだった機体を二つに分けただけなので、一夏はどちらの機体を使用していても白式のサポートを受けられる。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
■零落白夜
エネルギーを消滅させる能力であり、シールドバリヤーは勿論、敵のエネルギー兵器を無効化させる事も可能。

○武装
武装は全て初期装備（プリセット）であり、後付装備（イコライザ）は無い。

■雪片弐型
近接ブレード型の武装で、主に《零落白夜》を纏わせた状態で使用するが、そのまま剣として使用する事も可能。

■雪羅
左腕に装着されたクローと荷電粒子砲の複合ユニット。
クローに《零落白夜》を纏わせる事も可能であり、クローをワイヤーカッターとして射出する事も出来る。
また、ユニットそのものをロケットパンチの様に飛ばす事も可能な上に、《零落白夜》のシールドを張る事も可能と、攻守共に熟すがその分エネルギーの消費も激しい。

■その他
《白式・両儀》の封印が解けた後は《白式・真打》か《白式・影打

≫のどちらを使用していても結局《白式・両儀》を使用している扱いになるので《白式・真打》の武装を使用する事も可能。

◎白騎士（しろきし）

○操縦者
織斑一夏（※1）、織斑千冬（※3）

○所属
無し

○機体概要
《白式・影打》のもう一つの姿である為、こちらも第五世代型のインフィニット・ストラトスである。
また、コアが同じなだけで千冬が使用していた頃の《白騎士》とは別機体であり、千冬が使用していた方は第一世代型なのだが、世代の特徴以外では性能に大差は無い。
これは《白騎士》に姿を変えている時は弱くなるという意味ではなく、当時の《白騎士》が現代の機体に張り合うどころかそれを凌駕する性能を有していたという意味である。

○唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能
■生体復元
ある意味肉体限定の《質量操作》で、拡張領域（バスロット）内の質量を利用して操縦者の血肉を瞬時に新造する事によって即死でない限りはどんな状態でも操縦者を復元させる事が可能。
また、血肉を”新造”するので、応用すれば不老不死にも成れる。

○武装
武装は全て初期装備（プリセット）であり、後付装備（イコライザ）は無い。

■近接ブレード
西洋風の大剣型の無銘の剣。

■荷電粒子砲
威力こそ《雪羅》に劣るが、連射性能はこちらの方が上。

◎白式・数打（びゃくしき・かずうち）

○操縦者
無し（無人機）

○所属
無し

○機体概要
《白式・真打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《質量操作》で生成された《白式・真打》の分身体。
外見は二次移行（セカンド・シフト）前の《白式・真打》と同じであり、武装も共有している。
現在、万単位の数が太陽系各所に駐屯しており、侵略者の監視と撃退に当たっているので総数の数パーセント分ぐらいしか呼べない。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）

■質量操作
《白式・真打》の分身体であるが故に全ての機能を共有しているので、本機も《質量操作》の使用が可能である。

○武装
《白式・真打》の分身体であるが故に全ての機能を共有しているので、本機も《白式・真打》の使用可能な武装は全て使用が可能である。

◎黒式（こくしき）

○操作者
織斑一夏、『織斑一夏』、篠ノ之束

○所属
無し

○機体概要
初登場時は《白式・真打》の予備機として登場したが、元来は一夏に《白式・真打》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《質量操作》が使はない（使う暇が無い）戦闘に慣れさせる為の練習機でもあった。
というのも、《質量操作》という能力が操縦者の想像を形にする能力ではあるが、設計まで出来る頭脳を要するので『一夏』ですら完全に使い熟す事が出来ない能力だった事に起因する（故に、《白式・両儀》は一度『一夏』専用機の《白夜》から束専用機に改造されたという経緯を持つ）。
完成品を拡張領域（バスロット）から取り出す場合と、拡張領域（バスロット）内の質量を《質量操作》で形にして取り出すの場合とでは若干ではあるが完成品を拡（バスロット）

張領域から取り出す方が早い為、一夏の成長の度合い、純粋な戦闘能力がどれだけ成長するか……戦闘能力に余裕を作り、《質量操作》を行う時間をどれだけ稼げる様になるか次第では正式に《黒式》を一夏の専用機にする計画もあった。
しかし、想定よりも地球外生命体の地球侵攻が早まり、それに伴う計画の繰り上げのなかで（ギリギリではあるが）一夏は数々の試練を熟していった為に《黒式》が一夏の専用機になる事は無かった。
そして本機は第一章での最後の試練に『一夏』として一夏の前に立ちはだかり、死闘の末『一夏』ごと《白式・両儀》に吸収されて消え去る事になる。

○武装
初期は《白式・真打》が昭和ライダー中心で《黒式》が平成ライダー中心だったが、後半からは《白式・真打》が《黒式》の武装も全て使える様になったので、武装の内容は《白式・真打》とそれほど変わらない。
また、《質量操作》でその場で作るか拡張領域（バスロット）内にある完成品を取り出すかの違いがあるだけで、武装の性能も変わらないないので詳しい武装の内容は《白式・真打》の項目を参照。
因みに、本機の武装は全て後付装備（イコライザ）である。
以下、《白式・真打》が使用しなかった武装のみ紹介。

■スコーピオン
実弾を発射するハンドガン。
セミオートで連射も可能。

■デストロイヤー
前腕がまるごと剣になった高周波ブレード。
氷川さん補正で命中率が恐ろしく低い。

■クナイガン
カブト（ｏｒゼクト）クナイガンのことで、アックスモード、ガンモード、クナイモードと、状況に応じて使い分ける事が出来る。

■ファイズアクセル
外付け型の高速移動制御装置。
一定時間内のみ装着者の動作を１０００倍にまで加速させる事が出来る。

■アクセルデストロイ
《ファイズアクセル》で高速移動しながら《デストロイヤー》で敵を切り刻む技。
束の思い付きで使用された。

■アンタレス
《デストロイヤー》と同じく前腕部分をはめ込んで使用するタイプのアンカー。

■ジャコーダー
鞭にもレイピアにもなる特殊近接ブレード。

■展開装甲
《白式・真打》と同じ展開パターンの装甲。
《白式・真打》は高速移動形態に変化した際に展開した装甲の隙間から紅い光りを放つ擬似的な《零落白夜》を発生させるのに対し、《黒式》の装甲の隙間から発生するのは黄金の光である。
要するに《白式・真打》＝ユニコーン、《黒式》＝バンシィ。

■カマキリソード
《白式・真打》でいうところの《（スーパー）大切断》に当たる武装。
《黒式》は《白式・真打》の様に《質量操作》が使えないので折り畳み式のこちらが採用された。

■ショベルアーム
《白式・両儀》を殴り飛ばす為に使用。
まんま動きが「ライダージェネレーション」に登場するバースのソレである。

■ドリルアーム
《ショベルアーム》で殴り飛ばした《白式・両儀》に更に追撃を仕掛ける為に使用。

■クレーンアーム
《ショベルアーム》→《ドリルアーム》と続き、最後にこの《クレーンアーム》で《白式・両儀》を搦め捕って地面に叩き着けるのに使用された。

■ライジングタイタンソード

■フレイムセイバー

■レンゲルラウザー

■サソードヤイバー

■メダジャリバー
上記の五つに関しては《クレーンアーム》で地面に叩き着けた《白式・両儀》を串刺しにする為に投擲された。
しかも、これでも《白式・真打》の項目で紹介したので紹介を省略した武装がある。

■カイザポインター
双眼鏡型のＡＩＣ発生装置。
内容自体は《ファイズポインター》と変わらない。

■アクセルゴルドスマッシュ
ライダーキックのバリエーションの一つで、速さに物を言わせて一度に複数回のゴルドスマッシュを放つ技。
基本的に《黒式》は《白式・真打》と武装は共通なので《ファイズポインター》を用いたアクセルクリムゾンスマッシュでもよかったのだが、機体色に合わせてこちらが採用された。

◎白式（びゃくしき）

○操縦者
一夏の娘

○所属
無し

○機体概要
未来から来た一夏の娘が使用した機体であるが、本編初期に《白式・影打》とすり替えられた機体と同一機であるかどうかは不明。
外観や性能は別の番外編で登場した《白式》と同じで、三次移行（サード・シフト）済みである。
原作でいうところの二次移行（セカンド・シフト）した《白式》から更に形態移行した状態を想定した本作オリジナル機であり、ある意味《白式・両儀》の様なもの。
六機三対のウイングスラスターや、《雪羅》から更に万能兵器と化

した《雪羅改》の存在もあって非常に協力な機体に仕上がっており、《黒式》がインフィニット・ストラトス版《白式・真打》なら、本機はインフィニット・ストラトス版《白式・両儀》といっても過言では無い程のスペックを誇る。
また、《紅椿》の《絢爛舞踏》と比較すれば随分効率の悪いものであるとはいえ、稼動すればするほどエネルギーを回復する機能を有する。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
■零落白夜
エネルギー効率が改善された事以外は《白式・影打》のものとほぼ同一である。
詳しくは《白式・影打》の項目を参照。

○武装一覧
■雪片弐型（プリセット）
初期装備であり、《白式・影打》の装備と同型。
詳しくは《白式・影打》の項目を参照。

■雪羅改（プリセット）
初期装備であり、《白式・影打》の装備の発展系で通常時は非常にコンパクトに纏まった状態で両腕に装備されている。
展開時はクロー部分をマニュピレーターに被せて使用し、荷電粒子砲は以前の様に砲門からの発射では無く、クローをすぼめる事によって砲門を形成しての発射に仕様変更されており、《零落白夜》によるバリヤーを展開する場合は荷電粒子砲の発射時とは逆にクローを開く事によって展開する。
更に、クロー自体がパイルバンカーと化している為、《零落白夜》抜きでも相当な威力を誇っており、クローを射出すれば自律稼動兵器として運用可能。

第一章：設定集・メカ編（白式シリーズ）（後書き）

※１　気絶した一夏の身体を『一夏』が一時的に乗っ取った状態で使用した事がある。

※２　《シルバリオ・ゴスペル》と《ラプター》に関しては侵食後の機体としか戦闘していないので機体本来のデータは蒐集出来ていない。

※３　千冬が使用したのはコアと機体名称が同じなだけの別機体である。

第一章：設定集・メカ編（インフィニット・ストライカー）（前書き）

目次

・《白式・両儀》……P．1
・《白式・真打》……P．1
・《神龍》……P．2～P．3
・《ブルー・エンプレス》…P．4～P．5
・《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》……P．6～P．7
・《シュヴァルツェア・ヴォルフ》……P．8～P．10
・《時計兎》……P．11

第一章：設定集・メカ編（インフィニット・ストライカー）

◎白式・両儀（びゃくしき・りょうぎ）

○操縦者
織斑一夏（※1）

○所属
無し

○機体概要
原型は『一夏』の機体だった《白夜》であり、こちらの世界に流れついた束によって束の専用機に改造され、後に一夏の専用機としてさらに改造される。
詳細は別項目『第一章：設定集・メカ編（白式シリーズ）』を参照。

◎白式・真打（びゃくしき・しんうち）

○操縦者
織斑一夏（※1）、『織斑一夏』

○所属
無し

○機体概要
《白式・両儀》のコアユニットであり、束が幼少期の一夏の誕生日にプレゼントした『ホントに変身出来るベルト』が原型。

唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を利用してあらゆる仮面ライダーの武装を模倣する。
詳細は別項目『第一章：設定集・メカ編（白式シリーズ）』を参照。

◎神龍（しぇんろん）

○操縦者
鳳鈴音

○所属
中国（※2）

○機体概要
《甲龍》が《白式・両儀》（正確にはそのコアユニットである《白式・真打》）の唯一仕様の特殊才能（ワンオフアビリティー）、《質量操作》を受けてインフィニット・ストライカーと化した姿。
姿だけなら《白式・両儀》が《フォームチェンジ》を使用した際に何度か登場したが、本来の操縦者が使用したのは第一章の終盤のみで、一夏の訓練相手としての登場だった為にまだ本格的な実戦は行っていない。
蒐集されたデータを素に”一夏用”にそれぞれの機体がカスタマイズされた為に、インフィニットストライカー化した四機とも原型機と比べ、若干近～中距離向けに調整されているものの、本機は原型となった《甲龍》自体が近～中距離向けであった為に改良も純粋に威力を強化するだけのものに留まっている。
また、四機全てに言える事だが、機体がインフィニット・ストライカー化しただけでコア自体はインフィニット・ストラトスの物を流用しているので時間毎ごとのエネルギー生産量では供給が間に合わ

ず、この状態での長時間稼働は不可能である為、普段は原型機のまま稼働し、本機の地球外生命体との戦闘を《白式・両儀》が感知した場合のみこの姿に成れる。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）

無し

○武装

■龍咆・改

《龍咆》の発展強化型で発射までのタイムラグを大幅に短縮しつつ、数倍の威力を実現している。

また、一方方向に収束して放つのは勿論の事、広い範囲に拡散して放っても威力の減衰は起きない（ただし、若干射程距離は短くなる）。

《龍咆》の発展強化型なので、分類上はこの武装も初期装備（プリセット）という事になる（※３）。

■崩天瓦月

《双天牙月》の発展強化型であり、原型よりもより長大になった刃は見た目通りの超重量だが、峰に設けられた衝撃砲を推進力として利用する事によって破壊力を上げつつ取り回しのスピードも上昇させている。

また、投擲後に衝撃砲を噴かせる事によって進行方向を自在に操る事が可能。

《双天牙月》の発展強化型なので、こちらは分類上では後付装備（イコライザ）という事になる（※３）。

■その他

機体概要の通り、インフィニット・ストライカー化に《白式・両儀》の認証を必要とするが、その代わり《白式・両儀》の武装を使用する事も可能である。
しかし、エネルギー不足が深刻なので一部武装に関しては使用は推奨されていない。

◎ブルー・エンプレス

○操縦者
セシリア・オルコット

○所属
イギリス（※2）

○機体概要
《ブルー・ティアーズ》が《白式・両儀》（正確にはそのコアユニットである《白式・真打》）の唯一仕様の特殊才能（ワンオフアビリティー）、《質量操作》を受けてインフィニット・ストライカーと化した姿。
姿だけなら《白式・両儀》が《フォームチェンジ》を使用した際に何度か登場したが、本来の操縦者が使用したのは第一章の終盤のみで、一夏の訓練相手としての登場だった為にまだ本格的な実戦は行っていない。
蒐集されたデータを素に”一夏用”にそれぞれの機体がカスタマイズされた為に、インフィニットストライカー化した四機とも原型機と比べ、若干近～中距離向けに調整されているので本機は原型機よりも若干武装が近接戦向きに変わっており、ある意味一番《白式・真打》の影響を受けた機体でもある。
また、四機全てに言える事だが、機体がインフィニット・ストライ

カー化しただけでコア自体はインフィニット・ストラトスの物を流用しているので時間毎ごとのエネルギー生産量では供給が間に合わず、この状態での長時間稼働は不可能である為、普段は原型機のまま稼働し、本機の地球外生命体との戦闘を《白式・両儀》が感知した場合のみこの姿に成れる。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）

無し

○武装

■ブルー・ティアーズｍｋ？

《ブルー・ティアーズ》の発展強化型で、《白式・数打》と《サイレント・ゼフィルス》の《エネルギー・アンブレラ》のデータも加味されているので完全自律行動しつつ、ビーム砲による射撃・ビームを纏った状態での突撃・ビームシールドによる防御と、オールレンジでの攻撃と防御が可能。

しかし、エネルギーを大食いするので予めエネルギーをチャージしておく必要があるのが欠点であり、本機が他の三機と比べて一番稼働可能時間が短い理由もこれが原因。

《ブルー・ティアーズ》の発展強化型なので、分類上はこの武装も初期装備（プリセット）という事になる（※３）。

■スターライトｍｋ？

《スターライトｍｋ？》の発展強化型で、《白式・真打》の《ボルティックシューター》のデータを素に改良が加えられた為、高速で狙撃が可能な上に命中精度を落とさずに連射が可能。

《スターライトｍｋ？》の発展強化型なので、こちらは分類上では後付装備（イコライザ）という事になる（※３）。

■エクスカリバー

《インターセプター》の発展強化型……を搭載するハズがそれどころの話では無くなった武装。
機体自体は遠距離向けであるのにも関わらず《白式・両儀》が使用した《キングラウザー》と拮抗する程の威力を見せ付けた”遠距離対応型”近接ブレード。

束がギャップ萌えで装備させた武装で、使用時の音声的に《オーガストランザー》の様な気もしなくもないが気のせいである。
この武装は紛れも無く後付装備（イコライザ）であり……というか、遠距離型の機体にこんな初期装備（プリセット）があったら開発コンセプトに真っ向から逆らっている事になる。

■その他
機体概要の通り、インフィニット・ストライカー化に《白式・両儀》の認証を必要とするが、その代わり《白式・両儀》の武装を使用する事も可能である。
しかし、エネルギー不足が深刻なので一部武装に関しては使用は推奨されていない。
特に本機の場合は。

◎ラファール・リヴァイヴ・カスタム？

○操縦者
シャルロット・デュノア

○所属
フランス（※2）

○機体概要
《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》が《白式・両儀》（正確にはそのコアユニットである《白式・真打》）の唯一仕様の特殊才能（ワンオフアビリティー）、《質量操作》を受けてインフィニット・ストライカーと化した姿。
姿だけなら《白式・両儀》が《フォームチェンジ》を使用した際に何度か登場したが、本来の操縦者が使用したのは第一章の終盤のみで、一夏の訓練相手としての登場だった為にまだ本格的な実戦は行っていない。
蒐集されたデータを素に”一夏用”にそれぞれの機体がカスタマイズされた為に、インフィニットストライカー化した四機とも原型機と比べ、若干近～中距離向けに調整されているものの、一夏が射撃用の武装を弾膜を張る程度にしか使用しない場合が多い為か、強化も射撃用の武装に関しては命中精度の向上と若干の威力の上昇程度しか行われていない。
また、《疾風（ラファール）》ぐらいしかエネルギー系の武装が無い為、他の三機と比較すると圧倒的に稼働可能時間が長い。
しかしエネルギー的には他の三機より余裕があるとはいえ、この姿に成る為には地球外生命体との戦闘を《白式・両儀》が感知する必要がある為、自力でのインフィニット・ストライカー化は不可能。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装
《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》の武装がそうである様に、本機の武装は分類上全て後付装備（イコライザ）という事になる（※３）。

■ヴェント・カスタム

《ヴェント》の発展強化型のアサルトライフルであり、銃そのものの命中制度と威力が強化されただけなので使用される弾丸も《ヴェント》と同じく五五口径の物を使用。

■レイン・オブ・サタディ？
《レイン・オブ・サタディ》の発展強化型の連装ショットガンであり、こちらも《レイン・オブ・サタディ》と同じく六二口径の弾丸を使用。
また、本編中では語られていないが、散弾の集弾率を調整する機能が追加されている。

■ガルム？
《ガルム》の発展強化型のアサルトカノンであり、《ガルム》と同じく六一口径の弾丸を使用。

■ブレッド・スライサー・カスタム
《ブレッド・スライサー》の発展強化型の近接ブレード。
刀身を振動させる事により、高周波ブレードとして使用する事も可能。
本編未使用。

■灰色の鱗殻（グレー・スケール）？
《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》の発展強化型で、直撃すれば《白式・両儀》すら撃破する程の威力を秘めた必殺兵器。
本編中では語られていないが、《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》が六九口径なのに対し、こちらは七十口径となっている。

■疾風（ラファール）

《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》には無かった新武装で、任意の座標から突風を巻き起こす事が出来る。
対象までの距離が離れているほど風力を増すが、１ｍもあれば十分にＩＳを吹き飛ばす事は可能。
また、突風を巻き起こすのにエネルギーを利用しているだけであって、巻き起こされた突風自体には何のエネルギーも帯びていないので《零落白夜》による無効化は不可能である。

■その他
機体概要の通り、インフィニット・ストライカー化に《白式・両儀》の認証を必要とするが、その代わり《白式・両儀》の武装を使用する事も可能である。
しかし、他の三機より余裕があるとはいえ、エネルギー不足が深刻なのに変わりはないので一部武装に関しては使用は推奨されていない。

◎シュヴァルツェア・ヴォルフ

○操縦者
ラウラ・ボーデヴィッヒ

○所属
ドイツ（※２）

○機体概要
《シュヴァルツェア・レーゲン》が《白式・両儀》（正確にはそのコアユニットである《白式・真打》）の唯一仕様（ワンオファビリティー）の特殊才能、《質量操作》を受けてインフィニット・ストライカーと化した姿。

姿だけなら《白式・両儀》が《フォームチェンジ》を使用した際に何度か登場したが、本来の操縦者が使用したのは第一章の終盤のみで、一夏の訓練相手としての登場だった為にまだ本格的な実戦は行っていない。
蒐集されたデータを素に”一夏用”にそれぞれの機体がカスタマイズされた為に、インフィニットストライカー化した四機とも原型機と比べ、若干近～中距離向けに調整されているものの、本機は原型となった《シュヴァルツェア・レーゲン》自体が近～中距離向けであった為に改良もレールカノンが二門になった以外は純粋に威力を強化するだけのものに留まっている。
また、武装の関係上、《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》に次いでの稼働時間の長さを誇るが、それでも原型機より稼働時間は短い。
また、他の三機同様、インフィニット・ストライカー化に《白式・両儀》による認証が必要である為、普段は原型機の姿をしている。
因みにインフィニット・ストライカー化した四機を稼働可能時間の長い順に並べると《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》＞《シュヴァルツェア・ヴォルフ》＞《神龍》＞《ブルー・エンプレス》の順となる。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装
何故か原作では《シュヴァルツェア・レーゲン》の武装に名称らしい名称が無い為、その発展強化型である本機の武装にも名称は無い。

■ＭＡＩＣ

マルチロック・アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略で、ＡＩＣの発展強化した武装。
ＡＩＣが使用の際に操縦者の集中を要したのに対し、こちらは完全に機体が制御しているので操縦者の負担が軽減されており、更に同時に複数の対象の動きを封じる事も可能。
ＡＩＣの発展強化型なので、分類上は初期装備（プリセット）という事になる（※３）。

■レールカノン
原型機では右側に一門だけ装備されていたが、本機ではその発展強化型を両側に一門ずつの計二門装備している。
弾庫が複数装着されており、それぞれ違った種類の弾丸が装填されているので、操縦者の任意で面制圧に長けた散弾や貫通力に長けた徹鋼弾等を使い分ける事が可能。
原型機に装備されていたものの発展強化型なので、こちらは分類上では後付装備（イコライザ）という事になる（※３）。

■プラズマ手刀
機体のマニュピレーターにプラズマを纏わせて切断及び貫通力を高めた武装。
原型機より大幅に出力が増大されている。
また、これも原型機に搭載されていた物の発展強化型なので、こちらも分類上では後付装備（イコライザ）という事になる（※３）。

■ワイヤーブレード
マニュピレーターのクロー部分を射出する武装でクローとマニュピレーターがワイヤーで繋がっている。
ワイヤーが原型機のものより強靭になり、プラズマ手刀の応用で《白式・真打》の《マイクロチェーン》→《エレクトロファイヤー》の流れの様に撃ち込んだワイヤー越しに相手に電撃を喰らわせる事

も可能。
これも原型機の発展強化型なので、分類上では後付装備（イコライザ）という事になる（※3）。

■その他
機体概要の通り、インフィニット・ストライカー化に《白式・両儀》の認証を必要とするが、その代わり《白式・両儀》の武装を使用する事も可能である。
しかし、エネルギー不足が深刻なので一部武装に関しては使用は推奨されていない。

◎時計兎（とけいうさぎ）

○操縦者
篠ノ之束

○所属
無し

○機体概要
篠ノ之束の専用機であり、時を遡る際に本機の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）が利用された。
外観は束の普段の服装のウサ耳カチューシャと水色のエプロンドレス、つまり『一人不思議の国のアリス』な服装をそのまま機体のデザインにしており、巨大化して胸元まで垂れるウサ耳型のヘッドセットとドレスの様なデザインのアーマーが特徴的。

実は束が普段から装着していたウサ耳カチューシャが本機の待機状態でもある。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）

■名称不明

対象の時間を操作する能力。

流石に世界そのものの時間を巻き戻す事は不可能だが、人一人を過去の時間軸に送り込む事ぐらいは可能であり、束の基準でいうところの前の世界での『一夏』の死後、この能力を以って束は時を遡った。

因みに、その時《白夜》（後の《白式・両儀》）と開発基地兼アジトも時間移動させている。

○武装

■電波

ギャグシーンで使用。

箒を洗脳しかけた。

■ウサ耳ビーム

これもギャグシーンで使用された武装であり、ウサ耳型アンテナをピンッと立てた後に半回転させ、アンテナとアンテナの間でエネルギーがバチバチと……まぁ、要するにトールギス？のメガキャノンの様な要領でビームを放つ武装である。

■その他

唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能を応用すれば一気に敵の操縦者を老化を通り越して死に追いやったり、逆に受精卵になる前にすら戻す事も可能。

また、敵の機体に関しても一気に経年劣化させて崩壊させる事も可能であり、これを喰らうと流石の《白式・両儀》も手も足も出ずに敗北する。

一度にあまり多くの対象に効果を与える事が出来無いとはいえ、インフィニット・ストライカーもインフィニット・ストラトスも製作者権限で束に刃向かう事が出来なくなっているので、束以外の誰かがインフィニット・ストライカーやインフィニット・ストラトスを越える物を造らない限り地球人では束を殺せない。
束が他人に関心が無いので殺意すら無いのが唯一の救いでもある。

※１　気絶した一夏の身体を『一夏』が一時的に乗っ取った状態で使用した事がある。

※２　あくまで原型機の所属がその国であるだけであり、インフィニット・ストライカー化した状態までは管理出来ていない。

※３　本小説内では第三世代機の特徴である『イメージインタフェースを利用した特殊兵器』を初期装備（プリセット）、それ以外を後付け装備（イコライザ）として扱っている。

第一章：設定集・メカ編（オリジナル）（前書き）

目次

・《打鉄弐式》……P．1～P．2
・《試作量産型　打鉄弐式》……P．3
・《打鉄・ヘビーアームドカスタム》……P．4
・《打鉄・ブレードカスタム》……P．4
・名称不明機……P．5
・《ラプター》……P．5

第一章：設定集・メカ編（オリジナル）

◎打鉄弐式（うちがねにしき）（※1）

○操縦者
更識簪

○所属
日本

○機体概要
元来は日本が量産型としての第三世代機を開発する為に計画した『打鉄弐式開発計画』によって生まれた機体の内の一機で、本編登場前は《打鉄ヘビーアームドカスタム》に仕様の近い機体だった。しかし、織斑一夏の所有する篠ノ之束製の機体、《白式・真打》の登場により開発は頓挫し、開発スタッフの殆どが《白式・真打》の研究調査に借り出されてしまう。
《打鉄ヘビーアームドカスタム》の仕様違いの予備機的な位置付けだった本機は開発スタッフ自体他と比べて元から少なく、ただでさえ少ないスタッフを更に減らされた為に実質放置された状態にあった。
その後、本機は（実力を認められた上で代表候補生に任命されたのだが）学園最強の姉の存在もあり、姉の七光りで代表候補生に任命されたと揶揄され、本人もそう思っていた簪の手によって独力で完成にまでこぎつけられ、漸く日の目を見る事となる。
どうあがいても付き纏う姉の威光を振り払いたい、自分を揶揄する人間を見返したい、開発を放置した（つまり、期待していなかった）スタッフを見返したい……そして、自分の機体の開発を頓挫させた

《白式・真打》を倒したい、という動機で完成にこぎつけるどころか更にそこから簪によって魔改造され、《白式・真打》という仮面ライダーを倒す為の仮面ライダーとして新生した本機は外見や多少の戦闘データこそ《白式・真打》の物を使用したものの、機密情報の管理の為なら自動で操縦者以外の人間への攻撃をも辞さない事で有名だった《白式・真打》を研究する事を早々に諦め、あくまで日本にある既存の技術だけで開発される事となる。
結果として《白式・真打》には遠く及ばなかったものの、日本だけでなく各国の技術が未だに束一人に遠く及ばないのは事実であるので簪自身の技術力が低かったというワケではない。
寧ろ、本機が第三世代機としてはそれなりに優秀な部類だった事から簪の技術力が相当高かった事がこれで証明され、その実績や既存の技術でより高性能に纏められた本機が《打鉄弐式》として正式採用される事になる。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装
仮面ライダーを模して造られた《白式・真打》を模して造られた為に、外見だけではなく武装も仮面ライダーのそれとなっている（※2）。
また、あくまで《白式・真打》を模して造られたのであって、他の第三世代機の様に何かしらの特殊兵器の運用は二の次で製作されている為、この機体に限りイメージインタフェースを用いた特殊兵器も後付武装（イコライザ）扱いである（※3）。

■エンド・オブ・ワールド

両肩に担がれた大型キャノン、右腕に持ったグレネードランチャー、左腕に持ったガトリンクキャノン、両足に装着されたミサイルランチャーを一斉に放ったその様を仮面ライダーゾルダのファイナルベントに例えて簪がそう称した。
左腕に持ったガトリンクキャノン、両足に装着されたミサイルランチャーを一斉に放ったその様を仮面ライダーゾルダのファイナルベントに例えて簪がそう称した。
本体の完成がクラス代表トーナメント間近だったこともあり、武装を開発する暇が無かった為に研究室に放置されていた武装を適当に引っ張って来たに過ぎない。

■カイザブレイガン
二度目の戦闘で初披露された武装。
その名の通り、仮面ライダーカイザの《カイザブレイガン》を模して造られたブレード付きハンドガン。
ブレードには本来《白式》が搭載するハズだったイメージインタフェースを用いた特殊兵器として擬似的に再現された《零落白夜》を発生させる機能があるが、この機能に関しては開発メーカーがギリギリ完成にこぎつけたものを提供しただけで簪は開発に関わっていない。

■クレーンアーム
右腕に装着されるアンカーユニット。
《黒式》が使用したものはこれよりワイヤーの強度が高く、デザインも違う。

■ドリルアーム
右腕に装着するタイプのドリル。
高い貫通力を誇り、エネルギー消費量の割に威力が高い。
これについても《黒式》に性能違いで別デザインの武装が存在する。

■カッターウイング
飛行用ユニット。
高速で飛行しながらウイングのカッターで敵を切り刻む。
あくまで様式美であり、《打鉄弐式》はインフィニット・ストラトスなのでこれを使わずともＰＩＣで飛べる。

■ブレストキャノン
エネルギーをかなり食うが、その分かなり威力の高いビーム砲。

■ショベルアーム
クロー代わりに使用。
この武装も《黒式》がデザイン違いの物を所有している。

■カイザフォン
別名、《フォンブラスター》。
普段は携帯電話型をしており、回転させる事によってハンドガンとして使用する。

■春雷
原作での装備。
背中に搭載された二門の連射型荷電粒子砲で、本作では《ブレストキャノン》に転用された。

■夢現
原作での装備。
近接武器である対複合装甲用の超振動薙刀。
《カッターウイング》に転用された。

■山嵐

原作での装備。
本作では一夏との訓練で使用。
原作では打鉄弐式の最大武装で、第三世代技術のマルチロックオン・システムによって六機×八門のミサイルポッドから最大４８発の独立稼動型誘導ミサイルを発射するものであるが肝心のシステムが完成せず、通常の単一ロックオン・システムが搭載されていたが、本作では１０連装の小型ミサイルを発射するミサイルポッドに仕様変更されている。

◎試作量産型（しさくりょうさんがた・うちがねにしき）　打鉄弐式

○操縦者
無し（一度だけ一夏が使用）

○所属
日本

○機体概要
簪の専用機の方の《打鉄弐式》として正式採用されたのを受け、ディティールや武装を簡略化した本機が来年から試験的に量産型として配備される事が決定した。
それにともなって学園が所有する《打鉄》との交換も決定しているが、あくまでこれは学園の所有する練習機の《打鉄》との交換が決定しただけであり、最終的に軍で正式採用されるかどうかはまだ決まっていない。
因み機体色は簪の専用機はシルバーで本機はライトグレー。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）

無し

○武装
■マシンガン
■近接ブレード
学園側が所有する機体はあくまで練習機である《打鉄》との交換なので、この二つの武装に関しても《打鉄》の武装をそのまま流用する模様。
両方ともＩＳ学園に納入された際に装備されたものなので後付武装（イコライザ）である（※３）。

■その他
仮に軍での正式採用が決まった場合、簪の専用機で実戦投入されたイメージインタフェースを用いた特殊兵器として擬似的に再現された《零落白夜》を搭載した兵器が初期装備扱い（プリセット）（※３）で正式配備される可能性が非常に高い。

◎打鉄・ヘビーアームドカスタム（うちがね・ヘビーアームドカスタム）

○操縦者
橘香織

○所属
日本

○機体概要
打鉄弐式開発計画で製作された機体の一機。
圧倒的火力による殲滅戦を得意とした仕様の機体で、外観は原作の

《打鉄弐式》をミサイルランチャーだらけにした物。
クラス代表トーナメントにてテロリストに強奪されるも《白式・真打》によって撃破され、その後機体は元の操縦者に返還されている。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装
■ミサイルランチャー
多数のミサイルを、しかもかなりの速度で連射が可能な為、あっという間に敵の視界をミサイルで埋め尽くす。

分類上は後付武装（イコライザ）に該当する武装（※３）。

◎打鉄・ブレードカスタム（うちがね・一）

○操縦者
風間想

○所属
日本

○機体概要
打鉄弐式開発計画で製作された機体の一機。
全身に装着されたブレードによる近接戦闘を得意とした仕様の機体で、外観は原作の《打鉄弐式》を後述の武装で刃物だらけにした物。
操縦者に《打鉄・剣》の愛称で呼ばれている。
《黒式》と交戦し、序盤こそ押していたものの、本気を出した『一夏』によって瞬殺された。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装
本機の武装は全て後付武装（イコライザ）である。

■近接ブレード
《打鉄》の武装と同型の物を複数所持している。

■頭部近接ブレード
ヘッドセットから延びる剣でクワガタの顎を模したデザイン。

■ブレードスラスター
名称通り、スラスターとしての機能を有するブレード。
背部に六機装着されている。

■腕部近接ブレード
《白式・真打》の《（スーパー）大切断》や《黒式》の《カマキリソード》の様に左右にそれぞれ二枚ずつ並んだ近接ブレード。

■臑部近接ブレード
臑部装甲自体が巨大な近接ブレードとなっている。

◎名称不明機

○操縦者
不明（複数）

○所属
各国の一部過激派、犯罪組織等

○機体概要
操縦者もそうだが、機体も複数機存在し、それぞれ擬装されてはいるが比較的入手し安い機体が中心。
日本で活動した為に日本軍内部の過激派や犯罪組織によって擬装を施された《打鉄》が一番多く、過激派の力が強かったのもあるが、《白式・真打》のデータ取りや試作兵器の実戦テストも兼ねて黙認されていた可能性もある。
次点では《ラファール・リヴァイヴ》が多いが、これは軍や犯罪組織問わず外国の組織が使用するパターンが多かった。
これは《ラファール・リヴァイヴ》が世界第三位のシェアを誇っている為に、ＩＳを所有している国歌ならどこも所有しているので機体を入手し安かったからに外ならない。
また、外国での活動の際にワザとその国特有の機体を使用して国内の組織の犯行に見せ掛けるパターンもある。

○唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能
■名称不明
最初の襲撃犯の機体のみ、火薬を無限に生成する能力を有していた。

○武装
■ワイヤーカッター
最初の襲撃犯の機体に初期装備（プリセット）として両腕部に装備されていた。
また、両腕に二機ずつの計四機装備されており、ワイヤーの発射機関のみをフィールドにバラ撒いて死角から相手を捕縛する事も可能。
射程距離は不明。

■グレネードランチャー
最初の襲撃犯の機体に後付武装（イコライザ）として装備されていた武装。

■スナイパーライフル
ＶＴシステムによって暴走した《シュヴァルツェア・レーゲン》を倒し、ラウラと機体のコアを救出して一安心して気が緩んだところで一夏の心臓を撃ち抜いた武装。
『一夏』と白式がいなければ物語の幕を下ろしていたかもしれない凄い武器。

◎ラプター

○操縦者
無し

○所属
アメリカ

○機体概要
最強のＩＳを目指して開発された機体で、その名称もかつて最強の名を欲しいままにした戦闘機、Ｆ－２２”ラプター”に肖って命名された。
しかし、完成前に侵略者による侵食を受けて暴走し、怪物と化した本機は《白式・両儀》によって撃破されてしまう。
幸い、侵食を受けたのは機体の方で、コア自体はまだ搭載されていなかったので無事だった。

○唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能
無し

○武装

機体が完成していない為、どのような武装を運用するのかはまだ不明。

第一章：設定集・メカ編（オリジナル）（後書き）

※１　同名の機体が原作に登場するのだが、名称以外別物となったのでこちらに記載。

※２　《白式・真打》にもいえる事だが、あくまでソレに肖った同名の武装なだけなので、外観は同一ではない。

※３　本小説内では第三世代機の特徴である『イメージインタフェースを利用した特殊兵器』を初期装備（プリセット）、それ以外を後付け装備（イコライザ）として扱っている。

第一章：設定集・メカ編（原作サイド）（前書き）

目次

・《ブルー・ティアーズ》……P.1
・《甲龍》……P.2
・《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》……P.3
・《シュヴァルツェア・レーゲン》…P.4
・《紅椿》……P.5
・《霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）》……P.6
・《打鉄弐式》……P.6
・《アラクネ》……P.7
・《サイレント・ゼフィルス》……P.7
・《白騎士》……P.8
・《暮桜》……P.8
・《銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）》……P.9
・《白式》……P.9
・《打鉄》……P.10
・《ラファール・リヴァイヴ》……P.10

第一章：設定集・メカ編（原作サイド）

◎ブルー・ティアーズ

○操縦者
セシリア・オルコット

○所属
イギリス

○機体概要
イギリス製の第三世代型インフィニット・ストラトスで、自律機動兵器《ブルー・ティアーズ》の運用を前提に造られた試作機。
機体名称はその自律機動兵器から命名されている。
自律稼働兵器の使用によって多対一の状況を作り出して敵を翻弄し、安全圏にいる本体からの狙撃で仕留める機体だと思われがちだが（実際、そういった機体運用も前提に入れられているが）、あくまで理論上最大稼働時に可能となるハズのレーザーの歪曲の実現こそがこの機体に果せられた第一の任務であり、自律機動兵器の運用は複数の歪曲したレーザーによる包囲網を形成し、それによって敵を仕留める為の網に過ぎない。
残念ながら専任の操縦者であるセシリアはまだこのレーザーの歪曲を実現させてはいないものの、非公式なものであるが二号機である《サイレント・ゼフィルス》がレーザーの歪曲を実現させて見せた為に、理論上可能では無く実現可能である事が判明した。
この時のデータは本機がインフィニット・ストライカー化可能に改造された際に流入しているので、実際セシリアにそれが実現出来るかどうかは別として、以前よりはレーザーの歪曲がし安い状態にな

っている。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）

無し

○武装

■ブルー・ティアーズ

初期装備（プリセット）に該当する自律機動兵器（※１）。

レーザーを発射するタイプのものが四機、ミサイル型が二機の計六機装備されている。

この武装を使用している際には本体が動けなくなるという弱点アリ。

■スターライトｍｋ？

後付武装（イコライザ）に該当する六七口径特殊レーザーライフル（※１）。

性能もさることながらセシリアの高い技能もあってかなりの命中精度を誇る。

■インターセプター

後付武装（イコライザ）に該当するショートブレード（※１）。

セシリアが遠距離からの狙撃を主体とした戦闘スタイルをとっているので滅多な事では使われない。

○操縦者

鳳鈴音

○所属

◎甲龍（しぇんろん）

中国

○機体概要
中国製の第三世代型インフィニット・ストラトスで、衝撃砲の運用を前提に開発れた機体。
本作では巨大で超重量な《双天牙月》を使用する事によってワザと相手を懐に誘い込み、相手がまんまと懐に潜り込んで来たところで《龍咆》で仕留めるという戦術プランで運用された。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装
■龍咆（プリセット）
初期装備に該当する衝撃砲（※1）。
空間自体に圧力をかけて砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出す武装で、肩部と腕部に装備されている。
砲身の稼動限界角度はない上にその砲身が不可視である為、使い勝手がいい。

■双天牙月（イコライザ）
後付装備に該当する青龍刀型の近接ブレード（※1）。
二基装備されており、連結することで投擲武器としても使用できる。

◎ラファール・リヴァイヴ・カスタム？

○操縦者
シャルロット・デュノア

○所属
フランス

○機体概要
フランス製第二世代型インフィニット・ストラトス、《ラファール・リヴァイヴ》のカスタム機。
拡張領域（バスロット）にかなり余裕があり、原型機の倍近い容量を有する。
他のヒロインが第三世代型を使用する中でこの機体のみ第二世代型ではあるが、シャルロットの高い実力もあって（無理矢理インフィニット・ストラトスに当て嵌めるのなら）第六世代型相当の《白式・真打》を圧倒する戦闘力を見せ付けた。
勿論これは一夏がまだ初心者だった事も関係しているのだが、シャルロットの得意とする高速切替（ラピッド・スイッチ）という技能によって装備されている豊富な武装をほぼタイムラグ無く状況に応じて使い分ける事が出来た事が大きい。

○唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能
無し

○武装
本機の武装は全て後付装備（イコライザ）である（※1）。

■ヴェント
五五口径アサルトライフル。
本作での使用頻度が一番高い武装で、シャルロットが射撃を行う際はたいていこの武装を使用している。

■ガルム
六一口径アサルトカノン。

本機の射撃武装の中では二番目に多く使われる。

■レイン・オブ・サタディ
六二口径連装ショットガン。
散弾による弾膜で相手を近付けさせない為に使用される事が多い。

■ブレッド・スライサー
近接ブレード。
シャルロットの機体運用方法が射撃メインである為使用頻度は少ないものの、別に近接戦闘を不得意としているワケではないので使用された際は一定の成果を上げている。

■灰色の鱗殻（グレー・スケール）
別名、盾殺し（シールド・ピアース）と呼ばれる六九口径パイルバンカー。
リボルバー機構の装備によって炸薬交換による連続打撃が可能となっており、第二世代では最高クラスの威力を持つ本機の切り札。
一度だけ、剥奪能力を行使した《白式・真打》によって使用された事がある。

◎シュヴァルツェア・レーゲン

○操縦者
ラウラ・ボーデヴィッヒ

○所属
ドイツ

○機体概要

ドイツ製第三世代型インフィニット・ストラトスで一慣性停止結界（ＡＩＣ）の搭載を前提に開発された機体。
試作段階とはいえ軍で運用されるだけあって高い基本性能を誇り、操縦者であるラウラの実力もあって学園の専用機持ちの中ではかなり上位の実力を有する。
また、機体の基本性能もさることながら、近距離はプラズマ手刀、中距離はワイヤーカッター、遠距離はレールカノンと武装のバランスもいい。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装
本機の武装はＡＩＣ以外名称が原作に存在しない為、本項目での名称はあくまで便宜上のものである。

■ＡＩＣ
初期装備（プリセット）に該当する武装で、ＡＩＣとはアクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略（※１）。
慣性を停止させる事によって対象の動きを止める事が可能だが、発動と維持に操縦者の集中力が一定以上必要となる為、集中が欠いてしまうと効果も解けてしまう。

■プラズマ手刀
後付装備（イコライザ）に該当する武装で機体のマニュピレーターにプラズマを纏わせて対象を切断、又は刺突する武装（※１）。
マニュピレーターにだけプラズマを発生させるのでエネルギーの消費は少ない。

■ワイヤーブレード

後付装備（イコライザ）に該当し、マニュピレーターのクロー部分を射出する武装で、展開時は先端のクロー部分がワイヤーでマニュピレーターに繋がった状態で運用される（※1）。
プラズマ手刀時の様に対象の切断や刺突も可能で、更にこの状態の場合、ワイヤーを利用する事によって対象を捕縛する事も可能。

■レールカノン
後付装備（イコライザ）に該当するレールカノン（※1）。
レールカノンとしての電力消費こそあるものの、実弾を発射するので威力の割りにエネルギー消費がかなり少ない。

◎紅椿（あかつばき）

○操縦者
篠ノ之箒

○所属
無し

○機体概要
篠ノ之束が妹である箒に誕生日プレゼントとして贈った機体で、世界で唯一の第四世代型のインフィニット・ストラトスである。
最大の特徴はインフィニット・ストラトスとして初めて展開装甲を採用した事により、装甲の展開パターン毎にあらゆる状況に対応可能であるという事。
束が箒にこの機体を渡したのは箒の誕生日だったが、機体自体はもっと前から完成しており、箒に手渡すまでの期間内に《白式・真打》が二次移行（セカンド・シフト）して自力で展開装甲を開発した上に装甲を展開させた

事によって出来た隙間から《質量操作》によって擬似的に再現した《零落白夜》による防壁を張る事で高機動とエネルギー兵器に対する絶対的な防御力を会得した事を受け、完成していた本機にもそのアイデアを反映する事によってエネルギー兵器に対する絶対的な防御力を会得するに至った。
また、後述の《絢爛舞踏》の効果により、アイデア元の《白式・真打》よりも《零落白夜》による防壁の使用可能時間が圧倒的に長くなっている……というか、実質無制限に使い続ける事が出来る。

○唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能
■絢爛舞踏
エネルギー増幅能力。
少しでもエネルギーが残っていればそこから全快までエネルギーを回復させる事が可能であり、機体同士を接触させる事によって味方にエネルギーを譲渡する事も可能。
また、若干ではあるが《絢爛舞踏》がエネルギーを増幅させるよりも《零落白夜》がエネルギーを消滅させる方が速いので、互いのエネルギー残量が同量であればエネルギー切れにされてしまう。
ただし、その場合《零落白夜》を発動した方の機体もエネルギー消滅にエネルギーを消費するので両機とも行動不能に陥る。

○武装
本機の武装は全て初期装備（プリセット）である（※1）。

■展開装甲
第四世代機の最大の特徴であり、展開パターンによって防御⇔通常⇔高機動へと機体の特性を変える事が可能である特殊装甲。
更に本機にはどの形態でも使用可能な擬似《零落白夜》発生装置も搭載されている。
また、上記以外でも展開の仕方次第では装甲そのものを武装として

扱う事が可能。

■雨月
対単一仕様近接ブレードで、通常の近接ブレードの様に使用する事も可能だが、エネルギー弾を大量に射出する事によって面制圧も可能。

■空裂
対集団仕様近接ブレードで、振るう事によってエネルギー刃を飛ばす事が可能で、それによって同時に複数の敵に斬撃を喰らわせる事が出来る。

■穿千
戦闘経験値が一定量に達した事で発動する（予定の）武装で、両肩の展開装甲をクロスボウ状に変形させて発射する二門の出力可変型ブラスターライフル。
本作ではまだ操縦者である箒の経験値不足で未登場。

◎霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）

○操縦者
更識楯無

○所属
ロシア

○機体概要
楯無が一人で製作した第三世代機で、ロシアが設計した《モスクワ（グストーイ・トゥマン・モスクヴェ）

の深い霧》の機体データを元に組み上げたられたフルスクラッチタイプの機体。
他のＩＳに比べ装甲が少なく、それをカバーするように左右一対で浮いている《アクア・クリスタル》というパーツからナノマシンで構成された水のヴェールが展開されており、ドレスやマントのように装着者を包んでおり、ほとんどのパーツにナノマシンで構成した水を使用しているため、水を自在に操ることができる。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装

■アクア・クリスタル（プリセット）
初期装備に該当するナノマシンで、水を自在に操る事が可能（※１）。
本機の武装のに使われる水の全てはこのナノマシンによって制御されている。

■ラスティー・ネイル
高圧水流を発することができる蛇腹剣。
後付装備（イコライザ）に該当（※１）。

■清き熱情（クリア・パッション）
ナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物へ散布し、ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ、その衝撃や熱で相手を破壊する能力。
拡散範囲は限られているが、閉塞地等では防ぎ様が無いので非常に有用性が高い。

■蒼流旋

後付武装（イコライザ）に該当する武装で、特殊ナノマシンによって超高周波振動する水を螺旋状に纏ったランス（※1）。
四門のガトリングガンも装備されている。

■ミストルテインの槍
通常時は防御用に装甲表面を覆っているアクア・ナノマシンを一点に集中、攻性成形することで強力な攻撃力とする一撃必殺の大技でもあり、自らも大怪我を負いかねない諸刃の剣。
そのエネルギー総量は小型気化爆弾四個分に相当する。

◎打鉄弐式（うちがねにしき）

○操縦者
更識簪

○所属
日本

○機体概要
打鉄のバージョンアップを目的とした打鉄弐式開発計画によって開発された機体の内の一機……の、ハズが簪によって魔改造を受けて今の姿になった。
詳しくは『第一章：設定集・メカ編（オリジナル）』の当該項目を参照。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装

詳しくは『第一章：設定集・メカ編（オリジナル）』の当該項目を参照。

◎アラクネ

○操縦者
オータム

○所属
亡国機業（ファントム・タスク）

○機体概要
亡国機業（ファントム・タスク）が運用する機体。
機体の世代は不明だが、操縦者であるオータムの高い操縦技術もあって（二人の機体がエネルギー切れに近い状態ではあったが、それを差し引いても）一夏と簪の二人を同時に相手取って互角に戦える程のポテンシャルを秘めている。
本機の最大の特徴はその名称の由来通り多脚型（八脚）であるという点であり、これにより閉所で壁や天井を足場にして行動する事が可能。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装
本機が運用した武装は全て後付武装（イコライザ）である（※1）。

■電磁ワイヤー

《白式・真打》の《マイクロチェーン》と《エレクトロファイヤー》を参考に搭載された後付武装で、機体各所からワイヤーを蜘蛛の巣の様に張り巡らせ、掛かった獲物に電撃を浴びせる事が可能。

■その他
任務毎にマシンガンやグレネードランチャーを装備する。
これらの武装は横流し強奪等で調達している。

◎サイレント・ゼフィルス

○操縦者
M

○所属
亡国機業

○機体概要
イギリス製第三世代型インフィニット・ストラトスで、自律機動兵器搭載型機の二号機。
本機に搭載された自律機動兵器は《ブルー・ティアーズ》から更に発展し、エネルギーシールドを張る機能を追加された《エネルギー・アンブレラ》。
開発直後に亡国機業によって強奪され、以降はその工作員であるMの機体として運用されている。
機体が改良されたからなのか、操縦者の技量差からなのか、セシリアの操縦する《ブルー・ティアーズ》と違い、本機は機体本体を稼働させながら自律機動兵器の運用も可能。
また、非公式ではあるが本機は世界で初めてレーザーを歪曲させた機体でもある。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装
■エネルギー・アンブレラ
初期装備（プリセット）に該当する武装で、《ブルー・ティアーズ》同様に自律機動可能な上にシールドの展開も可能（※1）。

■星を砕く者（スターブレイカー）
後付武装（イコライザ）に該当する武装で（※1）、レーザーと実弾を任意で切り替え、或は両方同時に発射可能なライフル。
銃剣としても使用可能で、本機は二丁装備している。

◎白騎士（しろきし）

○操縦者
織斑千冬

○所属
無し

○機体概要
篠ノ之束がこの世界に渡り着いてから初めて製作したインフィニット・ストラトスで、機体自体は第一世代型だがコアは向こうの世界で『一夏』が使用していたインフィニット・ストライカー、《白夜》の物を流用している。
本機が『白騎士事件』でその圧倒的性能を全世界に見せつけた結果、

世界各国でインフィニット・ストラトスが普及する事となった。
操縦者である千冬が《暮桜》に乗り換えた事をきっかけに本機は解体された為にもう存在してはいないが、コアを移植された《白式・両儀》の半身たる《白式・影打》の能力で再び《白騎士》の姿に戻る事も可能。
《白式・影打》の変身体である《白騎士》については『第一章：設定集・メカ編（白式シリーズ）』を参照の事。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
■生体復元
《白式・影打》が《白騎士》の姿を取った際にこの能力を使用出来るのはコアが同一である為。
詳しくは『第一章：設定集・メカ編（白式シリーズ）』を参照。

○武装
■近接ブレード
■荷電粒子砲
《白式・影打》が変身した《白騎士》の物と同一……というより、《白式・影打》が変身した《白騎士》の武装はこの時の物の再現である。
詳しくは『第一章：設定集・メカ編（白式シリーズ）』を参照。

◎暮桜（くれざくら）

○操縦者
織斑千冬

○所属

日本

○機体概要

本作内では束が製作した機体の中で唯一国家に所属する機体。

分類上は《白騎士》と同じく第一世代の機体だが、開発されてから十年近く計画した現在でも十分通用する……というか、他の現行機を凌駕する性能を有する辺り、束と他の開発者の技術力の差を如実に表している。

一機体（器）の性能自体は《白騎士》と比べて若干上だが、それほど性能差は無い。

また、機体こそ二号機だがコア自体はインフィニット・ストラトスとしては一号機に当たる。

○唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能

■零落白夜

《白式・影打》のものとほぼ同じ能力……というか、《白騎士》時代に本機から蒐集したデータを元に《白式・影打》の唯一仕様（ワンオフ・アビ）の特殊才能（リティー）として発現させたものなので、こちらがオリジナル。

詳細については『第一章：設定集・メカ編（白式シリーズ）』を当該項目を参照。

○武装

本機の武装は全て初期装備（プリセット）である（※1）。

■雪片

展開装甲の技術が用いられていない事以外は《白式》や《白式・影打》の《雪片弐型》と同じ。

詳細については『第一章：設定集・メカ編（白式シリーズ）』を当該項目を参照。

◎銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）

○操縦者

ナターシャ・ファイルス

○所属

アメリカ

○機体概要

アメリカとイスラエルが特殊射撃による広域殲滅を目的に共同開発した第三世代機であり、軍用ＩＳでもある。

本作では隕石に紛れて地球に侵入した侵略者に取り込まれて暴走、機体ごと操縦者も侵略者に飲み込まれて怪鳥の姿で一夏達の前に舞い降りるも一度撃墜され、その直後に鳥人の姿に変化して再び一夏達と戦う事となった。

○唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能

無し

○武装

■銀の鐘（シルバー・ベル）

初期装備（プリセット）に該当する広域殲滅用特殊射撃兵装（※１）。

◎白式（びゃくしき）

○操縦者

無し

○所属
日本

○機体概要
が《暮桜》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《零落白夜》をイメージインタフェースを用いた特殊兵器として再現する為に開発した試作第三世代機。
《零落白夜》の威力は確かに驚異的ではあったものの、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）だけあってその再現は困難を極め、試行錯誤の末に遂に《零落白夜》の再現に成功……するハズも無く、計画の凍結とともに本機の開発は未完のまま終了してしまう。
その後、世界初にて唯一の男性ＩＳ操縦者である織斑一夏の手に渡る……ハズだったのに《白式・影打》とすり替えられてしまい、結局表舞台に本機が登場する事は無かったが、本機の開発データを元に擬似的に再現された《零落白夜》が実用化されたので、一応後世の機体に影響は残している。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装
■雪片弐型（プリセット）
初期装備に該当する未完成の試作近接ブレード（※１）。
名称こそ《白式・影打》の武装と同じだが、こちらには展開装甲の技術は一切使われていない。

◎打鉄（うちがね）

○操縦者
複数

○所属
日本

○機体概要
日本製第二世代型インフィニット・ストラトスで、主に日本軍で運用されている。
また、その扱い安さからＩＳ学園で練習機として運用されている。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装
■近接ブレード
■マシンガン
上記の装備はＩＳ学園で運用されている《打鉄》に装備されている後付武装（イコライザ）で、物自体は軍用機で武装を新たに交換した際に用済みになった古い武装を学園が引き取って運用している。

◎ラファール・リヴァイヴ

○操縦者
複数

○所属
フランス、他

○機体概要
フランス製第二世代型インフィニット・ストラトスで、開発はシャルロットの実家でもあるデュノア社が行っている。
本作では第二世代機最後発で同社が開発した第一世代機である《ラファール》をバージョンアップさせた機体という位置付け。
世界第三位というシェアを誇るだけあって高性能かつ非常に扱い安い機体であり、ＩＳを所有する国家はたいていこの機体を所有している。

○唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）
無し

○武装
■近接ブレード
■マシンガン
ＩＳ学園が所有する機体の場合、武装は《打鉄》と共通の物を運用している。

第一章：設定集・メカ編（原作サイド）（後書き）

※1　本小説内では基本的に第三世代機の特徴である『イメージインタフェースを利用した特殊兵器』を初期装備（プリセット）、それ以外を後付け装備（イコライザ）として扱っている。

第一章：設定集・キャラ編（原作サイド）（前書き）

目次

・織斑一夏……P.1～P.2
・篠ノ之箒……P.3
・鳳鈴音……P.4
・セシリア・オルコット……P.5
・シャルロット・デュノア……P.6
・ラウラ・ボーデヴィッヒ……P.7
・織斑千冬……P.8
・更識楯無……P.9
・更識簪……P.9
・布仏虚……P.10
・布仏本音……P.10
・山田真耶……P.10
・M（織斑マドカ）……P.11
・オータム……P.11
・スコール・ミューゼル……P.11
・ナターシャ・ファイルス……P.11
・イーリス・コーリング……P.11
・クラリッサ・ハルフォーフ……P.11
・五反田弾……P.12
・五反田蘭……P.12
・御手洗数馬……P.12
・鷹月静寐……P.12
・ティナ・ハミルトン……P.12
・ダリル・ケイシー……P.12
・フォルテ・サファイア……P.12

・榊原菜月……P．12
・黛薫子……P．12
・篠ノ之束……P．13～P．14

第一章：設定集・キャラ編（原作サイド）

◎織斑（おりむら）・一夏（いちか）

○使用機体一覧

・《白式・真打》
・《白式・影打》
・《白式・両儀》
・《黒式》（※１）
・《白騎士》（※２）
・《打鉄》（※３）
・《ラファール・リヴァイヴ》（※４）
・《試作量産型　打鉄弐式》（※５）

○キャラクター概要

原作及び本作の主人公で、第一章は一夏が仮面ライダーになるまでの物語である。
性格面では原作と大差無いものの、とある理由（後述）からヒロイン達から向けられる好意に気付いている辺り若干原作との差異があるか、別件で忙しい為に結局は保留にしている。
更にその別件のせいでヒロイン達も原作と比較して格段に一夏にアピールするチャンスが減っている模様。
一応、学園内では皆で集まって食事を取るぐらいの事はしているが、両親が行方不明で姉と二人暮らしだった上に、その姉である千冬も出稼ぎで留守にしている事が多かった為に誰かと食卓を囲む事に憧れの様なものを抱いていたので一夏的には家族の団欒のソレに近い（つまり、恋愛要素的には±０）。
また、悠長に恋愛をしている暇が無いとはいえ、歳相応に異性に興

味はある様で、事あるごとに胸や太腿に反応していた。
そんな一夏がインフィニット・ストラトスと関わる様になったのは十年前の誕生日。
誕生日に束に何か造って欲しいものはないかと尋ねられた際に、その時たまたま見ていたテレビ番組の影響で「ホントに変身できるベルトが欲しい」とねだったのが事の始まりだった。
その際に造って渡された玩具の変身ベルトこそが後の《白式・真打》である。
当初こそ無駄にふんだんに束の技術力を費やして造られた装着者に立体映像を被せるだけの変身ベルトだったが、一夏が束の計画に加担したのをきっかけに《白夜》のコアを移植され、今度こそ「ホントに変身できるベルト」になった（計画を知る経緯については篠ノ之束の項目を参照）。
その後、束と共に軽い動作確認程度に《白式・真打》の操縦訓練を何度か行っており、その時にインフィニット・ストライカーとそのスピンオフ技術で造られたインフィニット・ストラトスの事について多少は束から聞いていた為、原作ほどインフィニット・ストラトスについて無知では無いものの、「だいたいこんな感じのもの」程度にしか理解していなかったので専門的な内容について知ったのはＩＳ学園に入学してからの事だった。
そして中学卒業を境に機体と自身の経験値稼ぎの為に「世界で唯一ＩＳを操縦できる男性」として表舞台に立ち、保護を名目に身柄を拘束されるカタチでＩＳ学園に”計画通り”入学を果たす。
入学後は計画通り自身や《白式・真打》のデータを餌にそれに群がる代表候補生とその専用機を差し向ける各国やテロリストとの戦いを通して戦闘経験を積み、逆に相手の機体データを蒐集していく事となる。
順調に経験値を稼ぎ、《白式・両儀》の封印を解く為のフラグも回

収していく最中、『一夏』の覚醒というイレギュラーな事態をきっかけに本人の知らぬ間に計画が変更され、経験値を積む度に《白騎士》の《生体復元》の応用で身体が徐々に『一夏』化し、物語後半になる頃には異様な速度で成長していった（様に見えただけで、実際は『一夏』化の影響）。

自身の異変を昔の感覚が戻っただけ（後述）と勘違いしたまま順調にフラグの回収を終え《白式・両儀》の封印解除に成功、その後は《白式・真打》や《白式・影打》とは比べものにならない《白式・両儀》の圧倒的なパワーに振り回されながらも侵略者との戦闘も熟し、侵略者の本格的な地球侵攻の兆しをきっかけに計画が繰り上げられ、その後インフィニット・ストライカー化したヒロイン達の機体との対戦に突入、ギリギリの攻防の末に蒐集データから組み立てた機体との戦闘で更なるデータの保管をしつつその運用方法をオリジナルから学ぶ。

しかし、限定条件下では《白式・両儀》に匹敵するそれぞれの機体を駆るオリジナルの操縦者達相手に以前の様な機体性能のゴリ押しで勝ち続けるハズも無く窮地に陥る事になる。

辛うじてセシリア、鈴音に勝利したものの、連戦の疲労もあってか遂にシャルロット相手に敗北しかけた事によって防衛本能が刺激され、記憶と共にかつての力を取り戻し、逆にシャルロットを圧倒するも膨大な感覚情報の処理に追われて理性を働かせる余裕すら失い暴走。

『一夏』の介入によって事なきを得たとはいえ、暴走の果てにシャルロットを殺しかけてしまう。

しかしその事で気に病む暇すら与えられずにラウラとの対戦が始まり、再び暴走するもラウラの協力もあって（あくまでギリギリ及第点レベルではあれど）力の制御に成功し、遂に《白式・両儀》の操縦者に相応しい存在へと成った。

そして最後の試練としてもう一人の自分である『一夏』との決着を着ける為の戦いに赴き、その戦いの中で更に自身の力の制御をモノ

にしてゆき、遂に（《黒式》が再現出来る範囲の）『一夏』を越えて見事勝利を収め、《白式・両儀》が《黒式》を吸収すると同時に『一夏』を吸収し、一夏でもあり『一夏』でも在る存在に変貌した。
因みに、幼少期に（正当防衛とはいえ）殺人を犯した事があり、その時のトラウマも暴走の原因の一つだが、直接的な原因は異常発達した感覚期間から送り込まれる感覚情報によって脳の処理が間に合わなくなる事が原因であり、結果として理性を働かせる余裕を失い暴走し、敵意に反応して駆逐するだけのキラーマシンと化してしまう。
一応、力を制御出来る様になって来てはいるものの、まだ完全では無い為暴走の危険が無くなったワケでは無い。
ここまでが第一章での一夏の来歴であり、その後は侵略者退治に世界中を飛び回っている模様。

◎篠ノ之箒（しののの・ほうき）

○使用機体一覧
・《打鉄》
・《紅椿》

○キャラクター概要
原作ではメインヒロインで一夏のファースト幼なじみ。
メインヒロインのハズが本作では第7話になるまで微かに存在が仄めかされる程度で篠ノ乃空気（笑）と化していたものの、第7話以降からは今までの空気感が嘘の様に本格参戦する……が、それでも度々空気扱いになる事も。
当初は一夏と離れ離れにならなければならなかった原因であるＩＳを嫌っており、その原因を作った張本人の姉を殺したいほど憎んで

いたのだが、その姉にＩＳ学園に行けば一夏にまた会えると言われ、その甘言に縋り付く形でＩＳ学園に入学した。
そういった経緯から、一夏がＩＳに関わった経緯に関しても自分のせいだったのではないかと負い目に感じており、一夏の件以外でも昔から姉に振り回され続けているのにも拘わらずその姉に縋り付くしかなかった事もあって心中ではかなり気に病んでいた。
しかし、一夏や仲間達と過ごす内に割り切ったのか、現在ではそれほど自身の置かれている状況に悲観していない。
というか、度重なる襲撃事件や『一夏』の存在のせいで悠長に悲観している暇が無くなっていたというのが実情であり、問題が解決したワケではないので火種はまだ燻っている。
学園生活の方は本来ライバルであるハズのヒロイン達とも上手く付き合えており、全員で一夏に対して行う折檻のコンビネーションは筆説し難いレベル。
また、物語中盤で《紅椿》を姉から誕生日プレゼントとして託されてからはコンビネーションの凄惨さも酷い事に…。
もはや《白騎士》が無ければギャグでは済まされないレベルである。
（武力行使的な意味で）鬼嫁候補その１。

◎鳳鈴音（ふぁん・りんいん）

○使用機体一覧
・《甲龍》
・《神龍》

○キャラクター概要
ヒロインの一人で一夏のセカンド幼なじみ。
嘘だったのか最初はそのつもりだったのか真偽の程は不明だが、本

場で料理修業する為という口実で一度日本を離れ中国に帰国し、何故か中国の代表候補生としてまた日本にやって来た。
どういった経緯でＩＳに関わる事になったのかは不明だが、一夏との思い出をふっ切ろうと我武者羅になっているうちに代表候補生にまで昇りつめたのだとか。
しかし、ニュースで一夏の事が取り上げられているのを見た途端、秘めていた想いが再燃し、自分が一番一夏に親しい人間である事を口実に本国の他の代表候補生を押し退けＩＳ学園入学を果たす。
入学後の模擬戦では少しでも一夏が己の手札を隠し続けられる様にと本国の意向に反してまで早期決着させようと奮闘するものの、土壇場で二次移行（セカンド・シフト）した《白式・真打》に敗北。
その後は他の代表候補生らと共に一夏を鍛える事に勤めてはいるものの、最初の模擬戦での気遣いが嘘の様に（或は、原作の様にヤンデレを発祥し）折檻の際は遠慮も容赦も欠片も無い衝撃砲を叩き込む。
対《白式・両儀》戦では原型機の操縦者らしく《神龍》を用いて一夏を圧倒するものの、《神龍》を単に《甲龍》の出力強化型としか見ていなかった為に敗北した。
顔はともかくプロポーションで他のヒロインに劣っているという自覚がある為か、メンバー内で一番得意である料理で一夏にアプローチする……ハズだったのだが、当の一夏が忙しく世界中を飛び回っている為に中々腕を振るう機会に恵まれない。
（武力行使的な意味で）鬼嫁候補その２。

◎セシリア・オルコット

○使用機体一覧

・《ブルー・ティアーズ》

・《ブルー・エンプレス》

○キャラクター概要
イギリスの代表候補生。
クラス代表の座を賭けて一夏と争う事になるのだが、一夏がクラス代表になりたく無いが為にした（現実になりえる可能性のある……というか、後に現実になった）作り話を変な風に解釈してしまい、一夏の事を自己犠牲の精神に溢れた人間と勘違いした。
最初の襲撃事件の際、自分だけ逃げずにセシリアを守る為に襲撃犯に立ち向かった一夏に惚れ込み、以降は他の代表候補生らと共に一夏を鍛えながら何かしらのアプローチを……したかったのだが、本作内では当の一夏が連戦に継ぐ連戦の日々を送っているので他のヒロイン同様アプローチの機会に恵まれていない。
進展らしい進展も、襲撃事件以降はお互いを名前で呼ぶ様になったぐらいのものである。
また、遠距離からの狙撃を得意としているだけであって別に近接戦闘がそれほど苦手というワケでも無いらしく、対《白式・両儀》戦で《ブルー・エンプレス》使用した際の《エクスカリバー》捌きや、やたら腰の入ったパンチなどを披露して一夏を驚嘆させている。
因みに、折檻の際はビットの使用による囲い込み（狙撃込みで）担当。
（武力行使的な意味で）鬼嫁候補その３。

◎シャルロット・デュノア

○使用機体一覧
・《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》
・《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》

○キャラクター概要

フランスの代表候補生。

原作同様、唯一の男性ＩＳ操縦者である一夏のＩＳのデータを盗む為にスパイとしてＩＳ学園に送り込まれる……ハズだったが、本作では母国にいた時点でデュノア社が入手していた《白式・真打》の圧倒的性能の前に社内の研究員が白旗を上げてしまい、準備段階で計画が白紙に戻されてしまう。

その後、紆余曲折の果てに「これ以上他国との技術格差が開くのはマズいから」という理由で一夏のいるクラスに転入してきた。

計画通りに事が進めば原作通り二人目の男性ＩＳ操縦者として学園入りする予定だった為か、その名残で一人称が「僕」になっている。

また、操縦者としての腕は確かで、最初の模擬戦の際は（あくまで、無理矢理ＩＳに当て嵌めるのならの話であるが）四世代もの世代差のある《白式・真打》相手に終盤近くまで圧倒する程の戦闘技術を見せ付け、対《白式・両儀》戦で《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》を用いて一夏を敗北寸前にまで追いやった。

恋愛方面に関しては一夏に対して明確に好意を抱いている場面は無いが、スパイ同然の存在であるハズなのにけ毛嫌いせずに接してくれた辺りから何となくではあるが好意を持つ様になり、共に過ごす内にその想いを膨らませていった……が、他のヒロイン同様アプローチの機会に恵まれない。

因みに、折檻の際はトドメを（パイルバンカーで）担当。

（武力行使的な意味で）鬼嫁候補その４。

◎ラウラ・ボーデヴィッヒ

○使用機体一覧

・《シュヴァルツェア・レーゲン》
・《シュヴァルツェア・ヴォルフ》

○キャラクター概要
ドイツの代表候補生で一夏の取り巻きの中では唯一の軍属の操縦者であり、ドイツ軍での階級は少佐。
転入当初の「…貴様が仮面ライダーであるなど、認めるものか！」発言や、その後の一夏とのやり取り等からも仮面ライダー好きである事が伺えるが、これは隊員全員で教官である織斑千冬についてもっと知ろうとあらゆる分野で教官の母国である日本について調べていた折に副隊長が入手した「仮面ライダー」のＤＶＤを見た事がきっかけだったらしい。
因みに昭和派。
勿論、ただのライダーオタクでは無く軍人らしく操縦者としての実力も確かであり、最初の模擬戦での『一夏』の表出や対《白式・両儀》戦での一夏の力の制御等、戦う度に一夏の成長に貢献しているギャグからシリアスまで熟す稀有な方。
恋愛方面に関しては他のヒロイン同様アプローチの機会に恵まれない為か、一夏に対する好意も恋愛感情より同じライダーオタク仲間や戦友としての好意の比重の方が多い。
因みに、折檻ではＡＩＣによる停止を担当。
斬り掛かりながら追い回す箒と、箒の斬撃に紛れて衝撃砲を放つ鈴音が追い込む↓二人の攻撃を躱すのに必死になっている間にいつの間にかセシリアが放ったビットに囲まれている↓斬撃と衝撃とビットで完全に包囲された一夏をラウラのＡＩＣで捕らえる↓そしてトドメにシャルロットのパイルバンカーが炸裂する、というのがいつものパターン。
良い子は真似しない様に。
（武力行使的な意味で）鬼嫁候補その５。

◎織斑千冬（おりむら・ちふゆ）

○使用機体一覧

・《白騎士》

・《暮桜》

・《打鉄》

○キャラクター概要

一夏の姉でＩＳ学園では一夏のクラスの担任。

世界最強のＩＳ操縦者たるブリュンヒルデで白騎士事件では束の共犯者。

その実力は凄まじく、原作では生身でＩＳ用の近接ブレードを振り回してＩＳの攻撃を受け止めた上に、本作でも出席簿を用いたチョップでＩＳのシールドエネルギーを削っている。

本作では一夏と同じく突然変異種である為、常人を遥かに上回る身体能力を有するが、出力的には一夏ほど人の枠を越えていないので単純な力比べなら一夏に劣る。

しかし、一夏と違って筋力や五感の制御が上手い為にいざ”戦闘”となると千冬が勝ち越す。

実際、《打鉄》で一夏の駆る《黒式》を圧倒し、ノーダメージで完封勝利した。

普段は厳格に振る舞ってはいるものの、同類故か弟である一夏を溺愛しており、比較的自重出来てはいるが思考はマドカと殆ど大差無い。

ある意味（ヒロイン達にとっては）ラスボス。

◎更識楯無（さらしき・たてなし）

○使用機体一覧

・《グストーイ・トゥマン・モスクヴェ》（※６）

・《ミステリアス・レディ》

○キャラクター概要

ロシア代表でＩＳ学園の生徒会長。

国歌代表というだけあって学園の生徒会長の座に相応しい実力を有しており、模擬戦では一夏を敗北に追いやった（その直後、表出した『一夏』に敗北した）。

学園最強という地位にいながらその地位を鼻にかける事無く明るく振る舞っているが、おちゃらけ過ぎて千冬のヘッドロックで一度沈められた事も。

因みに、《ミステリアス・レディ》は過去（本編以前）に使用していた《グストーイ・トゥマン・モスクヴェ》を元に楯無が一から製作したハンドメイド機である。

他のヒロインと違ってあまり一夏に絡まないものの、アドバイスや効率的な訓練等で一夏の成長に貢献している。

一夏個人にも興味はあるものの、現段階では好意というより妹の想い人がどんな人物なのかに興味があるだけの模様。

◎更識簪（さらしき・かんざし）

○使用機体一覧

・《打鉄弐式》

○キャラクター概要

日本の代表候補生で、楯無の妹。
本編以前に一夏に会った事があり、その時の事がきっかけで一夏に好意を抱いているが、当の一夏はその時の事を全く覚えていなかった。
簪自身、一夏がその時の事を覚えていない事を承知しており、寧ろ当時の一夏は外を歩けば誘拐犯に出会うのが当たり前の日常を送っていたので、ほんの一時、しかも一度だけの出会いを忘れていても仕方が無いと思っている。
原作では《白式》の開発の為に簪の《打鉄弐式》の開発が遅々として進まなかったが、本作内では束が開発した《白式・真打》の研究の為に研究員を割かれ、自身の専用機開発が一向に進まなかった。
そのせいで一夏に好意はあるし仮面ライダーは好きなのだが《白式・真打》には少し思うところがある。
《打鉄弐式》を《白式・真打》を……仮面ライダーを模した姿に改造したのも、単にヒーロー好きだからではなく自分の邪魔をした者を倒してくれるヒーローを求めた結果なのだが、機体性能が段違いに劣る上に操縦者も自身の想い人である為、余程の事が無い限りは簪が打倒《白式・真打》を成し遂げる事は無い。

◎布仏虚（のほとけ・うつほ）

○使用機体一覧
本編中で使用した機体は無し（※7）

○キャラクター概要
更識家に仕える従者で、主に楯無の身の回りの世話を担当している。
本編未登場。

◎布仏本音（のほとけ・ほんね）

○使用機体一覧

本編中で使用した機体は無し（※7）

○キャラクター概要

更識家に仕える従者で、主に簪の身の回りの世話を担当……しているハズだが、原作通りならあまり職務を真っ当出来ているとは思えない娘。

本作がバトルメインである為に出番も極僅かだが、一応、簪の護衛と一夏の護衛も兼任している……ハズなのに、護衛対象やその取り巻きの戦力がとんでもない事になっているので一夏に関しては護衛の仕事は無きに等しい。

◎山田真耶（やまだ・まや）

○使用機体一覧

・《ラファール・リヴァイヴ》

○キャラクター概要

ＩＳ学園の教師の一人で一夏のクラスの副担任。

学園の入試の実技で一夏と戦う事になった相手でもあるので、ある意味（対ＩＳ戦的な意味で）一夏の初めての人。

本編では語られてはいないが、開始直後に一夏が仕掛けたタックルをモロに喰らって気絶した。

一応、元代表候補生なのだが学園の入試の実技テストは「どれだけ戦えるか」では無く「どれだけＩＳを動かせるか」を見るテストだった為に、操作ミスでの暴走で突っ込んで来るのならともかく、素

人のハズの一夏がまさか当てるつもりで仕掛けて来るとは思わずモロに一撃を喰らったのである。
因みにその後、「素人相手に一撃でやられるヤツがあるか」と千冬からの雷も喰らった。
あと、一夏の視線を釘付けにするぐらいの巨乳。

◎M《織斑（おりむら）マドカ（まどか）》

○使用機体一覧
・《サイレント・ゼフィルス》

○キャラクター概要
亡国機業の工作員でＩＳ操縦者。
外見は若い頃の千冬に瓜二つで操縦者としての実力もかなり高い。
自称「一夏のお姉ちゃん」だが真偽の程は不明。
イメージとしては、ブラコンを自重しなくなった千冬＝マドカ。

◎オータム

○使用機体一覧
・《アラクネ》

○キャラクター概要
亡国機業の工作員でＩＳ操縦者。
幼少期の一夏に誘拐犯として何度も接触していた
為、昔からの顔馴染みという意味ではサード幼なじみ。
因みに誘拐しに来ては千冬に（文字通り）殴り飛ばされては星にな

るのが定番のパターンだった。
操縦者としての実力も高く、相手の研究も怠らない為に倒せば倒すほど次回にはもっと強くなって現れる。

◎スコール・ミューゼル

○使用機体一覧
無し

○キャラクター概要
亡国機業の工作員であり、マドカとオータムの三人で任務を遂行する場合が多い。
主に作戦の立案を担当しているが、「涙目のオータム萌え」である為ワザと穴のある作戦を立てては失敗して帰って来たオータムを喜々として慰めている。
因みに彼女も一夏とは昔からの顔馴染みであり、そういう意味ではフォース幼なじみ。

◎ナターシャ・ファイルス

○使用機体一覧
・《シルバリオ・ゴスペル》

○キャラクター概要
アメリカ軍所属のＩＳ操縦者だが、本作では機体ごと侵略者に取り込まれた状態で登場。
最終的に身体を乗っ取られるも『一夏』によって心臓ごと侵略者を摘出され、直後に《白騎士》の《生体復元》で心臓を新造された為

に存命。

◎イーリス・コーリング

○使用機体一覧

・《ファング・クェイク》（※６）

○キャラクター概要

アメリカ軍所属のＩＳ操縦者で、ナターシャの同僚。
侵略者に乗っ取られ、基地から脱走した《シルバリオ・ゴスペル》を捕獲しに掛かるもあえなく撃墜される。
幸い、機体は大破したものの操縦者は無事だった。

◎クラリッサ・ハルフォーフ

○使用機体一覧

・《シュヴァルツェア・ツヴァイク》（※６）

○キャラクター概要

ドイツ軍所属のＩＳ操縦者で、ラウラが隊長を務める部隊「シュヴァルツェア・ハーゼ」の副隊長。
自称日本通だが偏った（或は）間違った知識が多い。本編では名前のみの登場。

◎五反田弾（ごたんだ・だん）

○使用機体一覧
無し

○キャラクター概要
一夏の親友だが舞台が舞台なだけに出番が少ない（数馬よりはマシだが）。

◎五反田蘭（ごたんだ・らん）

○使用機体一覧
無し

○キャラクター概要
弾の妹で五反田食堂の看板娘。
一夏に好意を抱いているが本編未登場。

◎御手洗数馬（みたらい・かずま）

○使用機体一覧
無し

○キャラクター概要
一夏の親友その2。
本編未登場。

◎鷹月静寐（たかつき・しずね）

○使用機体一覧
本編中で使用した機体は無し（※７）

○キャラクター概要
箒のルームメイト。
本編未登場。

◎ティナ・ハミルトン

○使用機体一覧
本編中で使用した機体は無し（※７）

○キャラクター概要
鈴音のルームメイト。
当初の予定では途中で専用機持ちになる予定だったのだが尺の都合で没（或は第二章に持ち越し）になった。
本編未登場。

◎ダリル・ケイシー

○使用機体一覧
・《ヘル・ハウンド・Ｖｅｒ２．５》（※６）

○キャラクター概要
三年の専用機持ち。
やる気の無い言動とは裏腹にやる事はしっかりやってる人。
襲撃事件の際は一夏とは別所で襲撃犯と戦闘しているが本編未登場。

◎フォルテ・サファイア

○使用機体一覧
・《コールド・ブラッド》（※6）

○キャラクター概要
二年の専用機持ち。
たいてい先輩であるダリルとつるんでいるが、こちらもダリル同様あまり言動にやる気が見られない。
襲撃事件の際は一夏とは別所で襲撃犯と戦闘しているが本編未登場。

◎榊原菜月（さかきばら・なつき）

○使用機体一覧
無し

○キャラクター概要
部活塔の管理人。
良くない男によく引っ掛かる……というか、普通の人だと燃えないらしい。
本編未登場。

◎黛薫子（まゆずみ・かおるこ）

○使用機体一覧
本編中で使用した機体は無し（※7）

○キャラクター概要

ＩＳ学園の新聞部に所属する2年生。
クラス代表トーナメントの際に、ふざけ過ぎて千冬にシメられた楯無の代わりに司会を勤めた。

◎篠ノ之束（しののの・たばね）

○使用機体一覧
・《黒式》（※1）
・《時計兎》

○キャラクター概要
ある意味全ての元凶であり、本作屈指のチートキャラ。
『一夏』の世界で人類同士のいざこざのせいで勝てるハズだった戦争に人類が敗北した為に他人を信用しないどころか一切の関心を無くしてしまった。
その戦争で『一夏』も『千冬』も死亡した為に世界への未練も失せ、今度は誰にも邪魔されずに親しい人だけが幸せに暮らせる世界を創造する為に《時計兎》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）で過去に遡り、世界からの修正を逃れる為に過去の自分と融合する事によって現在の世界に居着く。
その後は来たるべき日の為に着々と準備を進めていき、まず手始めに白騎士事件を以ってＩＳを……束だけが管理できる兵器を世界中に広める。
因みにＩＳが女性にしか扱えないのは前の世界では政治の主導権を男性が握っていたので女性に握らせたらどうなるかという実験の為であり、期待していなかったとはいえ結局前の世界と比べて何か改善するワケでも無く、別のベクトルで歪むだけに終わった。
また、表向きには宇宙開発用と銘打たれて製作されたハズのＩＳが

兵器として浸透したのも束の仕業であり、優秀な兵器にもなりうる……というか、か現行兵器を圧倒的に凌駕する性能を見せ付ける事によって他の兵器を淘汰し、兵器の主役として仕立て上げる事によってワザと世界中にＩＳを分布させる事に成功。

いざという時の為の保険としてＩＳは世界中に広まる事となった。

勿論、いざという時というのは侵略者の撃ち漏らしの数が《白式・両儀》一機ではカバー仕切れなくなった場合という意味もあるが、人類がまた前の世界の様な不様を曝した時に人類を制圧する為の意味合いもあり、操縦者の意志に反して束に操られて自国を制圧するか、操縦者がおらず起動すらしていなくても派遣された多数の《白式・数打》のパッケージとして機能させる事も可能である為実質ＩＳが世界中に広まった時点で有事の際の人類の敗北は決まった様なのであり、仮に全てのＩＳを破棄したとしても結局は《白式・数打》が制圧に乗り出す為、人類対束で戦争が勃発した場合、人類側に勝利どころか勝機すら無いまま一気に人類側が束に敗北する事となる。

束はこれらの計画を一人で進めていたのだが、流石の天才でも無理が祟ったのか一時期精神的にかなり参っていた時期があり、ちょうど千冬に頼まれて幼少期の一夏の面倒を見ていた際に一夏に計画の一部を話してしまう。

最初はただなんとなく「何故ＩＳを造ったと思う？」と、冗談半分に尋ねたのだが、当時の一夏が「侵略者をやっつけるため」と、一発で当ててしまい、『一夏』の事もあってかついうっかり一夏に協力を仰いでしまう。

しかし、後で冷静になって考えてみれば解答した際にちょうど一夏は特撮番組を見ていた最中であった為にパワードスーツ＝変身ヒーローという図式が一夏の頭の中で成り立っていただけで、解答もそこから連想しただけであり、第一、『一夏』と一夏は起点が同じな

だけの別人であり、更にいえばまだ子供だった。
その事に気付いた頃には時既に遅く、一夏もやる気満々で今更計画から下ろそうにも下ろしたところで一人で勝手に突っ走ってしまいそうで危なっかしかった為に（自分の愚かさを呪いながら）渋々ながら計画への加担を容認している。
その後は『一夏』の二の舞に成らない様に『一夏』専用から束専用に改造中だった《白夜》を更に一夏専用に改造して《白式・両儀》を製作、その後機体を一夏の成長に合わせてリミッターを掛ける為に《白式・真打》と《白式・影打》に分けて一夏の手に渡る様に仕向け、経験値稼ぎの為に各国の専用機持ちやテロリストを裏でけしかけた。
また、計画の最中で前の世界で破損したハズの『一夏』のデータが世界からの修正を受けて復元（詳しくは『第一章：設定集・キャラ編（オリジナル）』を参照）し、データだけとはいえ『一夏』が復活した為に計画を修正し、以降は『一夏』と二人で一夏の成長を促す為に暗躍する。
第一章の最後に前の世界で『一夏』と夫婦関係にあった事が発覚し、親友の千冬の弟でしか無いハズの一夏に構い倒していたのもこの事が関係していた（また、幼少期の一夏に計画への加担を要請してしまったのも『一夏』への甘えがあった為）。
因みに、プロローグで初めて作ったハズの味噌汁が一夏の好みの味だったのも、あくまで”この世界では”初めて作っただけの話であって、前の世界では夫である『一夏』によく手料理を振る舞っていたので手慣れていた上に味の好みも把握していた。
また、本編中では語られていないが、第一章の最終決戦までは束は一夏の事を「夫によく似た息子」、或は　夫の様に見ていた節があり、その為全裸でベットに潜り込んだりしても平気だった。
最終決戦後は一夏が『一夏』と融合した為に束の頭の中では完全に一夏＝『一夏』に変わっており、前妻というか本妻としてヒロイン達の前に立ちはだかる。

第一章：設定集・キャラ編（原作サイド）（後書き）

※１　一度だけ使用
※２　コアは同一だが千冬の使用した機体とは別機体
※３　入試の際に使用
※４　クラス代表を決める際に使用
※５　テストパイロットとして一度だけ使用
※６　本編未登場
※７　本編中では機体を扱う映写は無いが、実技の授業中に《打鉄》か《ラファール・リヴァイヴ》を使用

第一章：設定集・キャラ編（オリジナル）（前書き）

目次

・『織斑一夏』……P．1～P．2
・白式……P．3
・龍……P．4
・ティアーズ……P．4
・ラファール……P．4
・レーゲン……P．5
・紅椿……P．5
・砂川恭子……P．6
・橘香織……P．6
・風間想……P．6
・襲撃犯……P．7～P．8
・斎藤香……P．8
・各国要人……P．9
・女性客の二人……P．9
・侵略者……P．10

第一章：設定集・キャラ編（オリジナル）

◎『織斑（おりむら）・一夏（いちか）』

○使用機体一覧

・《白夜》（※1）
・《白式・真打》（※2）
・《白式・影打》（※2）
・《黒式》（※3）

○キャラクター概要

束の感覚でいうところの『前の世界』の『織斑一夏』であり、本編中では既に故人。

本編に登場したのは『一夏』本人では無く、《白夜》（現《白式・両儀》）に残された記憶の記録である。

しかし、その記録も『前の世界』での戦闘で消失しており、《白式・両儀》も本来なら『一夏』の記録の無い状態で一夏の手に渡るハズだったのだが、《白夜》（《白式・両儀》）の持ち主である”織斑一夏”が生きている＝死んでいない＝記録の消失の理由が無いのに『一夏』の記録が無いという矛盾を解消する為に世界からの修正を受けて復元された『一夏』の記録が本編に登場する『一夏』である。

上記の理由から、一夏が束から《白夜》（《白式・両儀》）を受け取った時点で既に存在していたのだが、本編で明確に存在が確認されたのはクラス代表トーナメントに向けた特訓中での事あり、以降は一夏が窮地に陥る度に入れ代わって対処していた。

また、この時の一夏は『一夏』に憑依されているので普段との言動に若干のズレが生じる。

『一夏』個人と一夏個人がどうこういう以前に、『一夏』の世界と

一夏の世界とでは侵略者の出現時期にかなりのズレがあり、その為世界情勢もかなり異なっているので二人の差異は個人レベルのものでは無く、世界レベルでズレている。
一夏の世界と違い、『一夏』の世界では小規模とはいえ１０年前（『一夏』が５歳の時）に既に侵略者による侵攻が始まっており、それに合わせて世界中の軍隊が対応に追われている上に『千冬』も従軍していたので同年代時の一夏より一人で過ごす時間が長く、それ故あまり人間らしい生活を送っていない。
人間らしい生活を送っていなかったとはいっても困窮していたワケでは無く（寧ろ『千冬』の給料の関係で金銭的には裕福だった）、人間らしさを学ぶ機会に恵まれなかった為に協調性などの集団生活に必要な要素を学ばずに育った上に、『千冬』という存在が身近に居なかったので身体能力の異常性を自他共に早くから自覚しており、その事が関係して自身を”人間”と定義していなかった。
ある意味これが一夏との最大の違いであり、一夏の場合は身近に千冬という自分以上の実力を持った同類がいた事と、ＩＳの存在である程度ごまかしが効いていたので周りも千冬を「ＩＳの操縦が異様に上手い”人間”」と錯覚していた為に姉弟共に”人外”ではなく”凄い人間”として扱われており、更にそのＩＳを製作した束という人の枠を大きく逸脱した天才の存在の方が目立っていた為に、一夏は人間扱いされている。

人の群れに紛れた異物として幼少期を過ごした『一夏』は数年後に紆余曲折の末に従軍する事になり、以降は侵略者との戦いに身を投じていく。
きっかけは不明だが、その戦いの最中に出会った一同類（束）と惹かれ合い、やがて結婚する事になるのだが、享年が享年だけに（仮に法律上の結婚可能年齢から結婚していたとしても）その結婚生活も１０年も満たない内に終了している。

最後はインフィニット・ストライカーがエネルギー切れを起こす程の凄まじい戦闘の末に戦死し、機体の大破と共にコアに残された記録も完全に消失した。

その後、束によって遺品（コア）は回収され、共に時間を遡ってコアが一夏の手に渡り、上記の理由で記録だけの存在として復活し一夏が窮地に陥る度に入れ代わって対象しつつ、白式に命じて一夏の身体を自身に近付ける事によって一夏を強化し、最終試練で一夏に倒される事によって二度目の死を迎える。

しかしその死は何も残せなかった一度目の死と違い、一夏に敗北した後に《黒式》ごと自身を吸収させる事によって『一夏』は一夏の、《黒式》は《白式・両儀》の糧となった。

◎白式（びゃくしき）

○使用機体一覧

・《白夜》（※3）
・《白騎士》（※3）
・《白式・両儀》（※3）
・《白式・真打》（※3）
・《白式・影打》（※3）

○キャラクター概要

《白式・両儀》のコアの自我で、《白式・両儀》が《白式・真打》と《白式・影打》に分けられていた頃は自我を《白式・影打》の方に移していたが、《白式・両儀》の封印が解かれてからはどの状態でも一夏をサポート出来る様になった。

『一夏』の《白夜》、千冬の《白騎士》、一夏の《白式・両儀》（《白式・真打》と《白式・影打》）といった具合に操縦者と一機体

（器）の変遷が激しい上にその分稼動歴も長く、登場するコアの自我の中では最年長であり、コアの自我達の間では長女として扱われている。

『一夏』や千冬が操縦者だった頃はどうだったのかは不明だが、一夏の中では痴女と認識されており、よく夢の中で一夏を喰う。

一応、『一夏』化による負担を和らげる為の麻酔の様な意味合いで行為に及んでいるのだが、《生体復元》の応用で一夏の身体を『一夏』化させているのでそもそも負担の掛からない変化をさせれば良いだけの話であり、所詮白式の趣味。

また、経験値稼ぎの為とはいえ、女だらけの環境にいる以上一夏も健全な思春期男子である為に当然そういう欲求も沸くワケで（勿論、そっちの経験値を稼ぐ為に学園に乗り込んだワケでは無いので）、それを発散させる為という生々しい理由もあるにはある……が、やっぱり白式がヤりたいからやっているのが実情。

◎龍（ろん）

○使用機体一覧

・《甲龍》（※３）

・《神龍》（※３）

○キャラクター概要

番外編に登場した《甲龍》のコアの自我であり、仲間内では”龍（ろん）さん”と呼ばれている。

外見は自身の搭乗者である鈴音の髪型をストレートに変えて体つきを大人にした様な風貌であり、趣向が搭乗者に似たのか、Ｔシャツにジーパンという動きやすい服装をしている。

◎ティアーズ

○使用機体一覧

・《ブルー・ティアーズ》（※３）

・《ブルー・エンプレス》（※３）

○キャラクター概要

番外編に登場した《ブルー・ティアーズ》のコアの自我であり、仲間内では”ティアーズ”と呼ばれている。

自身の搭乗者であるセシリアを大人にした様な外見をしているが、垂れ目気味であるセシリアと違い、こちらの目は少し釣り目気味…

…といっても垂れ目のセシリアと比べての話なので釣り目というほどのものでもない。

服装は搭乗者の趣向と同じく蒼いドレスを身に纏っている。

◎ラファール

○使用機体一覧

・《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》（※３）

・《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》（※３）

○キャラクター概要

番外編に登場した《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》のコアの自我であり、仲間内では”ラファール”と呼ばれている。

自身の搭乗者であるシャルロットを大人にした様な風貌をしており、服装は薄めのオレンジのワンピース。

◎レーゲン

○使用機体一覧

・《シュヴァルツェア・レーゲン》（※３）

・《シュヴァルツェア・ヴォルフ》（※３）

○キャラクター概要

白式と同じく番外編だけでなく本編にも登場した。

仲間内では一夏が呼んだ”レーゲンちゃん”の名で通っている。

その風貌は自身の搭乗者であるラウラを大人にした様な……それでいて現在のラウラからは想像できない程のスタイルの良さを誇っており、バストサイズは登場したコアの自我達の中では１番大きい。

服装はその巨乳を窮屈そうに押し込んだ……というか、微妙にサイズの合ってない軍服であり、デザインは「シュヴァルツェア・ハーゼ」の物と同じ。

仲間内の中では１番稼動歴が短く、その為自我も幼児そのもの。

また、本編登場時は白式に唆されて白式と共に全裸で登場し、それを見た一夏が自前の《雪片弐型》にフルパワーで《零落白夜》を発動させてしまった。

その際、幼児は興味があればなんでも口に入れたがる＝レーゲンは一夏の《雪片弐型》に興味津々＝レーゲンは一夏の《雪片弐型》を口に……。

◎紅椿（あかつばき）

○使用機体一覧

・《紅椿》（※３）

○キャラクター概要
番外編に登場した《紅椿》のコアの自我であり、仲間内では”紅椿さん”と呼ばれている。
自身の搭乗者である箒を大人にした様な風貌をしているが、目つきが束に似て垂れ目気味。
服装は黒地に紅で椿の花柄の着物である。

◎砂川恭子（さがわ・きょうこ）

○使用機体一覧
・《打鉄》

○キャラクター概要
原作と違って本作では鈴も一組に転入した為、代わりに彼女が二組のクラス代表となっている。
クラス代表トーナメントではモブキャラ達の怨念を背負い一夏に立ちはだかった。

◎橘香織（たちばな・かおり）

○使用機体一覧
・《打鉄・ヘビーアームドカスタム》

○キャラクター概要
三年で一応日本の代表候補生の一人。
ドMであり、彼女の中では一夏との対戦もそういうプレイの様な感覚だったらしい。

一夏を女性恐怖症にしかけた張本人。
実はクラス代表トーナメント時から偽者と入れ代わっており、本編には偽者しか登場していない……が、本物もやっぱりドM。
因みに偽者の方は本人曰くドSらしい。

◎風間想（かざま・そう）

○使用機体一覧

・《打鉄・ブレードカスタム》

○キャラクター概要

日本の代表候補生の一人だが、一時期は千冬の後任で日本代表を務めていた猛者であり、開発競争に敗れた《打鉄・ブレードカスタム》を《打鉄・剣》と名付けて自身の専用機として扱っている。
日本の代表候補生の中では最年長であるが、これ本人は後輩に代表の座を譲って引退しようとしたが後輩に自分や千冬クラスの操縦者がまだいない為に席だけ代表候補生として残している状態であり、普段は研究機関のテストパイロットに従事している。
また、代表候補生や研究機関のテストパイロットという肩書を持つが裏では亡国機業（ファントム・タスク）とも繋がりがあり、組織内でのコードネームはストーム。
本編では《白式・真打》のデータを回収する為に学園に襲撃を仕掛けたが、『一夏』に年齢や離婚歴を暴露され、更に体重までバラされそうになるという精神攻撃を受けて涙目になった辺り、苛烈な性格の割に打たれ弱い。
因みに離婚の原因もその苛烈な性格が災いした為。
事件後は警察に突き出されたが、彼女の襲撃自体が元々亡国機業（ファントム・タスク）と政府の共謀によるものだった為かすぐに釈放された。
これは、彼女の場合に限った話ではなく、どの国でも非合法な活動

を行う場合は犯罪組織を騙ったり実際に犯罪組織と共謀して事に及ぶのはよくある話。

◎襲撃犯（しゅうげきはん）

○使用機体一覧

・《打鉄》（※４）

・《ラファール・リヴァイヴ》（※４）

・その他（※４）

○キャラクター概要

■一人目

一夏に受領されるハズだった《白式》（に擬装した《白式・影打》）を強奪して《ラファール・リヴァイヴ》を纏った一夏をフルボッコにしたが、その直後《白式・真打》を纏った一夏にフルボッコにされている。

輸送中だった《白式》を強奪出来たのは裏で組織に束が情報をリークした為であり、まんまと一夏の経験値稼ぎに利用された。

実戦での初めての相手であり、彼女の機体は火薬を無限生成する能力を持つ唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）を有している。

また、その戦闘で一夏が自身の未熟を自覚するシーンが有った辺り、しっかりと一夏の成長に貢献していたが、多分本人的には不本意だっただろう。

因みに三人目と同一人物である。

■二人目

橘香織に変装してクラス代表トーナメントに参加。

使用した機体は厳密には香織の物とは別物であり、武装の予備を自

身の《打鉄》に装着した物を使用していた。
因みに、彼女が変装した香織はドMだが、彼女自身はドS。

■三人目
一人目と同一人物であり、前回の襲撃の際にコアを残して機体を自爆させて脱出した為、別の機体に以前使用していた機体のコアを納めて使用している。
ラウラと《シュヴァルツェア・レーゲン》のコアを救出し、一夏が一安心したところで高出力ライフルで狙撃し、《白式・真打》の装甲ごと一夏の心臓を破壊した。
しかし、《白式・影打》が変身した《白騎士》の《生体復元》によって心臓は復元された一夏は一命を取り留め、『一夏』が動かす《白式・真打》（ＡＩか『一夏』かの違いを除けば殆ど《白式・数打》）によって彼女は撃破されてしまう。
その後身柄を拘束されるも、政府の女性至上主義団体の一員としての任務での行いだった上に、自分達の地位を脅かし兼ねない存在だった一夏を殺しかけた”功績”もあってすぐに釈放されている。
つまり、一夏に隙あらばまたやらかす……ハズが、以降本編中に彼女が現れないのは事件後に束が一夏や一夏の関係者に《白式・数打》の護衛を着けていて手が出せない為。
右見て左見て、邪魔者がいない事を確認してライフルを構えた瞬間、《インビジブル》で護衛対象の側に控えていた《白式・数打》が出現、護衛対象に気付かれる事無く速やかに懲らしめられるので、頑張っているのだが出番が無い。

■四～六人目
亡国機業（ファントム・タスク）による《白式・真打》のデータ独占を危惧し、一夏を探すために一組の代表候補生らが学園を空けていた際に襲撃を仕掛けて

来た。
しかし、学園に居残っていた他の代表候補生らによって全員撃破されている。

■七人目
本編登場順だと七人目だが、時系列的には一人目の人。
程度こそ違えど、千冬や一夏と同じく身体能力が人間の枠から逸脱している突然変異種。
死闘の末、幼少期の一夏はこの男を殺害してしまい、人の枠から大きく逸脱した五感で感じ取った死という情報がトラウマとなって一夏はその時の出来事の記憶と力を失ってしまっていた。

◎斎藤香（さいとう・かおり）

○使用機体一覧
・不明

○キャラクター概要
番外編の登場人物だが、彼女の場合に限り他の番外編と違って全く本編との関わりの無い番外編である。
よくあるパターンで自称神（笑）から「君、マンガやアニメの世界に行ってみたくない？」とスカウトされ、「じゃあ、今話題のインフィニット・ストラトスの世界に」とリクエストしてこの世界に来たらしく、日本産ＩＳメーカーの社長の一人娘であり、テストパイロットとしてその世界に転生した。
彼女は二つの目的をもってインフィニット・ストラトスの世界に転生したのだが、一つ目の「自分が原作ヒロイン達を差し置いて主人公と結ばれる」というぶち壊しも甚だしい原作崩壊は既に一夏ハーレムが出来上がっていた為に計画は実行前に頓挫、しかもハーレム

のメンバーは原作以上に人数が増えていた。
そして二つ目の「ぼくのかんがえたかっこいい〇〇〇」で無双して織斑一夏を叩きのめすという願望も、既に三次移行（サード・シフト）していた《白式》の前に叶わず終いで終わっている。
しかも最後は束によって現世へと強制送還と踏んだり蹴ったりだった。

◎各国要人

〇使用機体一覧
・無し

〇キャラクター概要
一夏の《白式・真打》と各国の代表候補生の専用機の模擬戦を観戦に来ている国の要人。
模擬戦を行う国ごとにその国の要人が視察に来るのだが、勿論ただ観戦をする為だけに来たのでは無く、データを纏めて本国に送るという重要な任務で学園を訪れている。
また、ドイツの要人は官制室から無線でＶＴシステムを発展させたシステムを起動させ、《シュヴァルツェア・レーゲン》を強制暴走させて《白式・真打》にぶつけるも、企みが途中で露見し、制裁の為に研究施設ごとデータを完全破壊され、更に当人を含む研究施設の人員の研究関連の記憶も完全に破壊されてしまう。以降、束による制裁を恐れ、各国の非合法活動も大人しくなって来たものの、アメリカが隕石から偶然入手した（様に見せ掛けて、実は侵略者側が現地の知的生命体の情報を得る為にワザと回収される様に仕向けた）特殊鋼石（金属生命体＝侵略者）をＩＳのコアとして流用して暴走事故を起こしたのにも関わらずその特殊鋼石を後生大事に保管して

いた為に束の怒りを買い、基地一つ破壊されている。

◎女性客の二人組

○使用機体一覧

・無し

○キャラクター概要

男性は女性の命令を聞くのが当たり前と思っている辺り、ＩＳの台頭によって女尊男卑になった世界を象徴する様な二人組。

エピローグで一夏に絡むが、いきなり《ボルティックシューター》を発砲した一夏に腰を抜かしてしまう。

”ＩＳを扱える女性”が男性より強いのであって、一般女性が男性より強くなったワケでも無いのににも関わらず男性に対して高圧的な態度を取る辺り、非常識というか勘違いも甚だしい。

……が、授業をサボってショッピングモールにいた一夏も大概非常識であり、どっこいどっこいである……というか、市街地でいきなり発砲して戦闘を始めた辺り、一夏の方が非常識という見方も。

◎侵略者（？？？）

○使用機体一覧

・《シルバリオ・ゴスペル》（※５）

・《ラプター》（※５）

○キャラクター概要

正体不明の存在。

現時点で判明している事は以下の通り。

■一応、知的生命体である。

■他者を吸収する事によって吸収したもの自体やその内包する情報を搾取する。

また、吸収したものをそのまま自身の制御下に置いて使役、或は吸収した情報を元に自身が擬態する事も可能。

■取り込む者が強者、取り込まれる者が弱者という理念の元、弱者は自分達強者に搾取されるのが当たり前だと思っている。

■体組織が金属で構成された生命体であり、同族同士での分離・融合が可能。

しかし、一定以上の質量が無ければ活動が出来なくなる（それが死を意味するのかどうかは不明）。

第一章：設定集・キャラ編（オリジナル）（後書き）

※１　生前に使用。
※２　一夏の身体を乗っ取った状態で間接的に使用
※３　使用機体というよりは自身の身体（器）。
※４　擬装や強化によって殆ど原型を留めていない。
※５　操縦者や機体を乗っ取り、更に変異させて使用。

１００話突破＆第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（１）」（前書き）

今更ですが、１００話突破と第一章完結記念小説です

１００話突破＆第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（１）」

あれはそう、俺が『俺』との決着を着けたあの日からちょうど一月（ひとつき）ぐらい経ったぐらいの頃だった。

その日は珍しくヤツらの襲撃も無く……いや、無いワケじゃないんだが、普段は宇宙に居る《白式・数打》達が連中の相手をしているから、俺が担当するのはその防衛網を突破した猛者だけ。

それに、猛者といっても何万だか何十万だかの《白式・数打》の…

…自律行動しているとはいえ一次移行（ファースト・シフト）時の《白式・真打》と同等の機体性能に武装は俺のと共有している様な連中の群れで構成された防衛網を、ただで突破出来るハズも無い。

だからまぁ……地球にまで遥々やって来ても既に結構ボロボロなワケで、そういう意味では楽させてもらってるんだが、最近は連中の侵攻が本格化してるせいか撃ち漏らしも多かった。

どのくらい多かったかというと、この一月（ひとつき）で世界一周旅行日帰り編がもう二桁目に突入するぐらいである。

だから、今までそういう日が全く無かったワケでは無かったとはいえ、こんな風に普通に午前中から授業を受けてるという事実が妙に新鮮に感じるワケで。

「……で、あるからして、つまり『一夏』……またか、織斑」

「いや、またかって……」

俺のせいじゃ無いよね？　コレ。

「……で？　今日はどちらまでお迎えに行けばいいんだよ？」

『それが……《時計兎》がこちらに向かって来ているのですが…』
「束さんが？」
『いえ、操縦者が違います』
「は？」

いやいや、《時計兎》って束さんの機体だろ？
なんでそれに違うヤツが乗ってんのさ？

『……一夏、驚かないで聞いて下さい』
「いや、もう十分驚いてるんだが」

『現在、何故かこの世界に《時計兎》が二機存在しています』

……は？
いやいやいやいや、おかしいだろソレって。

「……い、今何と？」
『ですから、《時計兎》が二機存在していて、内一機が……ドクターの操縦していない方の機体がこちらに急接近して来ています』
「……マジで？」
『マジで』

ど、どういう事だよソレ…。
だって《時計兎》は束さんにしか……いや、そもそも何で《時計兎》が二機も……。

『因みに、降下角度的にあと数十秒後には第一アリーナに墜落するかと』

「!?　クソッ……なんなんだよ一体!」

そう悪態を着きながら、俺は席を立って駆け足で窓に向かう。
そして、窓を開けて窓枠に足を掛けて――――

「じゃ、そういうワケだからちょっと行ってくガッ!?」
「何がちょっと行ってくるだ、馬鹿者。せめて普通に廊下を出てから行け」

――――外に飛び出そうとしたら千冬姉に思いっ切り殴られた。

「ったぁ～。何すんだよ千冬ね…ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!?」
「一夏!?」

殴られて、殴られた拍子に窓枠から足を踏み外し、お外へ向かって紐無しバンジー楽しいなっと。
因みに此処、学園の五階（最上階）である。
高さはいうまでもなく物凄く高い。
しかも頭から地面に向かって真っ逆さま、多分も何もこのまま落っこちたらモザイクを掛けなきゃならない真っ赤なオブジェの出来上がりである。
……前言撤回、このまま落っこちたら全然楽しく無い事になるぞ、コレ。

まぁ、それもこのまま落ちたらの話だが。

「さぁ～て、おふざけもこの辺にしておいて……」
『……そろそろ、〝飛びましょう〟か』
「あぁ、〝二人で〟!!」

俺には『俺』が愛した人がいる。
俺を好いてくれている人達がいる。
そして、頼もしい相棒が傍にいる！

「変身！！」

宣言。
日常から非日常へと変わる為の、
ただの変わった境遇の少年から殺戮者に変わる為の、
その為の、宣言。

その宣言を口にした途端、俺の身体は白い極光に包まれて消え去り、
その極光に黒い雷光がほとばしる。
白と黒、光と影、生と死、未来と結末、それら対極を成す太極……
両儀。
相反するそれらに……それらを内包する両儀に包まれ、俺は変わる。

《白式・両儀》、或は仮面ライダー白式。
それが、今の俺。

『では、行きましょうか』
「あぁ――――

全身を包む白亜の装甲、クリアブラックのバイザーの奥で輝く真紅の眼。
その上に更にヘッドセットとブレストアーマーを、両腕に、両脚に、更なる装甲を。
そして、その背に浮かぶ四機二対のウイングスラスターを纏う俺の鎧。

それが、あの日”まで”の姿。
あの日”から”はコレにもう一つ特徴が追加される。
白亜の鎧の各部に走る漆黒のライン。
《白式・両儀》が《黒式》を、俺が『俺』を、それぞれ取り込んだ、その証。

――――さっさと終わらせようぜ、いつもみたいにな」

そう意気込んで、俺達は飛び立った。

飛び立った一夏より若干早くアリーナに到着した（というか、現在進行系で墜落中の）件の人物は焦っていた。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？　ちょっ、ま…兎のクセにじゃじゃ馬とはこれいかにぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！？」

さっきから……というか、搭乗した瞬間から全然機体がいうことを聞かないのである。
少女も、前々からこの機体の事を本来の操縦者に似て気難しいところがあるとは思ってはいたのだが、まさかここまでとは思っていなかった。
この《時計兎》、本来の操縦者が命じたから”嫌々乗せてやってい

る”とでも言わんばかりの暴れっぷりである。
少女の制止もガン無視でジェットコースター機動のオンパレード、急降下や急上昇は当たり前、錐揉み回転急停止、ムーンサルト……といった具合に暴れる暴れる。
縦の……上下の運動だけでこれである、これに左右やその他あらゆる方向への捻りに捻った機動が加わるソレは（心停止的な意味で）立派な殺人機動だった。
予定では颯爽と登場して格好良くキメるつもりだったのに、これでは台なしである。

「あぁぁぁもうっ、このポンコツ兎！　いい加減いうこと聞けぇぇぇぇっ……え？　タンマタンマ！　今の無し無し！　お願いします止まって下さい《時計兎》様ぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

いい加減、文句の一つでも言ってやろうかと意気込んだ瞬間、視界を白が埋め尽くした。
知らぬ間に眼前までアリーナの天井が近付いていたのである……否、天井は動かない。
少女が……いや、《時計兎》が全速力でアリーナの天井に突進しているのだ。

「いいいいいやぁぁぁぁぁっ！？　へぶぁっ！！？」

当然、少女の懇願は聞き入れられず少女は顔面から天井に減り込み、勢い余ってそのまま顔面からアリーナの地面に突き刺さったのだった。

『アリーナの天井が…』
「あぁ、奴さんの方が先に到着してたみたいだな。……急ぐぞ」
『待ち伏せされているかもしれません。気をつけて』

俺達がアリーナの上空に着いた頃には、既に相手はアリーナ内に侵入していた。
その証拠に、天井に無理矢理突き破ったかの様な大穴が開いている。

……マズいな、遮蔽物が多過ぎて相手の正確な位置が解らん。
……いや、待てよ？
遮蔽物も何も、相手はこちらと同じインフィニット・ストライカーなんだからステルス機能もインフィニット・ストラトスの比じゃないワケだよな……って、アレ？

「…なぁ？」
『何でしょう？』
「《時計兎》もインフィニット・ストライカーなんだよな？」
『えぇ』
「もし、相手が何かのステルス機能を使っていたとして、……お前、ハイパーセンサーで捕らえ切れるのか？」

『……インフィニット・ストラトスぐらいならまだしも、相手はインフィニット・ストライカー……しかもドクターの専用機ですからねぇ。一夏の取り巻きの娘達の機体なら自信を持って捕捉出来ると言えるのですが……』
「……」

さっすが相棒、不安を煽る台詞を有難う……いや、下手に見栄張られて怪我するよりマシか。

「…どうするよ？」
『…やはり、突入してみない事にはどうにも……』
「だよなぁ……つっても、相手は《時計兎》だろ？」
『……えぇ、唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）喰らったら私達おしまいですね…
…生まれる前に戻されるのか死後まで早送りされるのかは解りませんが』
「うわぁ……」

そう、それが厄介なのだ、あの《時計兎》は。
流石の《白式・両儀》でもそんなもん喰らったら一たまりも無い…
…つ～か、俺もヤバい。

「……よし、ここは」

俺の意志に応え、白亜の機体が蒼に染まり、そして一機のビットが飛び回る。

「よ～し、お前ちょっと見て来い！」
『流石は一夏、中々のチキンぶりですね♪』
「アッハッハッハッハ！」

何とでも言えばいいさ。
だって怖いモンは怖いんだし。

な～んて、冗談を言い合っている間に《ブルー・ティアーズｍｋ？》がアリーナに侵入して……消え去った（ロスト）。

「……」
『……』

「……ど、どうするよ？」

『…どどどどうしましょう？』

ヤバいよ！　待ち伏せされてるよコレ！
予定では侵入させた《ブルー・ティアーズｍｋ？》から送られて来た《時計兎》の位置情報を元に奴さんの唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）の射程圏外から狙撃かますというチキン戦法で軽くボコってから一事情聴取（お話し）しようと思ってたのにバレバレだよ！
奴さん、殺る気満々じゃねぇか！

『ど、どどどうにかしてくださいよ一夏ぁ！』
「どうにかって…お前、いくらなんでもビビり過ぎだろ！　仮にも最強の機体のクセに」
『なまじ万能な分、手に負えない分野は怖いんですよ！』

それは……まぁ、確かに。
出来る事が多いヤツでも出来ない事となると、それはとんでもない様な事柄なんだろうし。
しかしまぁ……、コイツ普段（特に夢の中）では余裕ぶってるクセに、案外可愛いらしいところもあるんだな。
まぁ、未知を打倒する為の機体がそれでいいのかは知らんが。

「……えぇいっ、一か八だ！　《キャストオフ》！」
『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

だからといって、ここで二人してビビってても埒が開かないので、思い切って飛び込む事にした。
白式の声とは違う機械音声が響くと同時に《白式・影打》がコアご

と強制排除（パージ）され、《白式・真打》を纏った俺だけが出来立てのアリーナの入口に落ちていく。

これならまぁ、白式のヤツが消える事も無いだろう。
それに、これなら俺が消えそうになっても《生体復元》でなんとかなる……と、いいなぁ。

「どうしてこうなった……」

俺の目の前に、頭から地面に突き刺さったままピクリとも動かない少女がいる。
《時計兎》を纏っているということは、この娘が件の侵入者なんだろうな……多分。

「どうして、こうなった……」

大事な事なので二回言いました。
人が決死の覚悟で飛び込んで来たのにコレである。
拍子抜けも甚だしいわ！
実は仮面の奥で半泣きだった俺の涙を返せっての。

『あぁ、いっくんやっと来たんだ』
「？　……お前、《時計兎》の…？」
『そうそう、そっちの白式みたいな存在だね』
「なるほど…」

不意に、どこからともなく俺に話し掛けてくる声がした。
この場にいるのは俺と頭から地面に突き刺さった娘と《時計兎》しか居ない。
白式は相変わらず空でガタガタ震えてるし、この娘も地面に突き刺さったまま気絶してる以上、俺に話し掛けてきたのは《時計兎》……いや、時計兎になるのだろう。
そう当たりをつけて尋ねるとすぐに肯定の意が返ってきた。
……それにしても”いっくん”か。
まるで束さんみたいに俺をそう呼ぶ当たり、やっぱコイツ束さんの機体だよなぁ……なんでこの娘と一緒にいるの？
つ～か、なんで”二機”いるのさ？

『フッフッフ、そのキョトン顔、まさしくいっくんだね♪』
「いや、キョトン顔って……」
『仮面の奥の表情を覗くぐらい、この時計兎さんにとっては朝飯前なのさ！』
「さいですか…」

口調からして束さんの影響受けまくりな時計兎さんだが、目の前に居るのが頭から地面に突き刺さった娘なせいで異様にシュールな光景が出来上がってしまっている。
いや、シュールっつうよりカオスか？
それより、いい加減自分の操縦者助けてやれよとか思うんだが……。

『ん？　この娘の事なら気にしなくていいよ。いつもこんなだし』

いつもかよ！

『いや～、だってさ～。マスターのお願いだから仕方なく……し・か・た・な・く　この私が此処まで連れて来てあげたっていうのに調子こいてるんだもん。流石の時計兎さんもお仕置きでパイルドライバーやっちゃうよ』

お仕置きってレベルじゃねぇ……。

『いや～、それにしても……』

「？」

『うちのマスターもそうだけど、いっくんも全然歳取らないよね。私何もしてないのに』

「そうなのか？」

『うん、いっくんはもうちょい背が伸びるけど別に老けたりしないし』

「はい？」

背が、伸びる？

背が伸びる＝身長が伸びる＝成長する＝成長するにはある程度の年月が必要……って、まさか…。

「もしかして、未来から？」

『えぇっ！？　ちょっ、それは流石に鈍過ぎだよいっくん！　確かに私の知ってるいっくんも鈍感野郎だったけどこっち方面まで鈍感じゃなかったよ！？』

「やかましいわ！」

酷い言われ様である。

泣くぞこの野郎。

「……ってか、アンタの知ってる俺ってどんなだよ？」

『ん～、いろいろ知ってるよ？』
「例えば？」
『うちのマスターをオカズにして抜いた回数とか』
「すいませんでしたぁぁぁぁぁぁっ！！！」

光の速さで土下座した。
ちょっ…、ま、なんでそんな事まで知ってるんだよ！！？

『どうせなら本物（私）とヤッてくれればいいのにって、マスターが言ってたよ？』
「待て待て、この話はここまでにしよう。ここはあくまでＮＯＳであってノクターンじゃないんだ。良い子の皆だって見てるんだ」
『良い子がこんな小説見に来るワケ無いじゃん』
「お前、とりあえず読者の皆様に謝　「っだぁぁぁぁぁぁぁっ！！！　何放置プレイかましながら楽しくお喋りしてんのさぁぁぁぁっ！！？」」
『あ、やっと起きたんですか』
「やっと起きたんですかじゃないわよ！　眠り過ぎて三途の川まで泳ぎ切っちゃうところだったよ！」
『チッ…、そのまま渡り切れば良かった様なものを…』
「舌打ち！？」

……な、なんなんだこの娘は？
復活早々、時計兎さんとハイテンションでマシンガントークしてらっしゃるけど…。

「あ～、ちょいと。そこの君？」
「ん？」
「君は何処の「パパ！」……パパ？」

このままでは埒が開かないと、とりあえず目の前で口論を続ける正体不明の娘に話し掛けた途端、抱き着かれた。
しかも、パパって呼ばれた。
……パパ？　俺が？
え…、パパって事は……え、えぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！？

そんなワケで、俺は”認知”してない自分の娘（？）と”再会”したのである。

１００話突破＆第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（１）」（後書き）

今回の番外編は前後編になっています。

後編をお楽しみに

１００話突破＆第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（２）」（前書き）

前後編のハズが、長過ぎて三編仕様に……

１００話突破&第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（２）」

「は～い♪　……と、いうワケで私がパパこと織斑一夏の娘で～す♪」

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

自称俺の娘こと匿名希望さんとの出会いから数分後、ちょうど昼休みを迎えたので……ってか、今日の授業は午前中までだから午後からは自由時間なワケで、昼休みも何もという状態なんだが、取り敢えず”皆”を集めてのご対面と相成った。

因みに、娘曰く「今日は午後から休みなのは知ってた」との事。

……つまりだ、この自称俺の娘さんはちょっと話しして帰るつもりではないらしい。

そうでないならワザワザ時間に余裕のある日なんか選ぶハズもないからだ。

多分、今日はもう出撃しなくても大丈夫って解ってて来てるんだろうし。

……にしても、なんなんだこの温度差は。

方やニコニコ笑顔で暢気にピースしてやがる自称俺の娘。

もう片方のいつもメンバー達はといえば事態がまだ飲み込めていないのだろうか、ポカーンとした顔で娘の顔と俺の顔を見比べたりしている。

……まぁ、解らんでも無い。

いきなり未来から知り合いの娘が……しかも自分達の内の誰かが母親かもしれないヤツがやって来るだなんて、誰が想定できるんだか。

「……一夏の、娘だと？」

「そうだよ？　何ならＤＮＡ鑑定でもしてみますか？　チ・フ・ユ・さ・ん？」

千冬姉の問いに淀み無く応える自称娘……というか、ただでさえキツ目の美人の千冬姉が顔が引き攣らせて恐ろしさ三割増しになっているにも関わらず物応じしないとは、（自称）我が娘ながら中々肝が据わってやがる。

ってかコイツ、自分が俺の娘だと主張する割に殆ど何も自分の情報を公開しようとしない。

母親は誰か……は、今ここではっきり明言されるとそれはそれで怖い事になるからまぁいいとして、名前すら教えてもらえないとかパパ寂しいぞ？

俺がコイツについて知っている事といえば、《時計兎》を使って未来から来た俺の娘であるという事ぐらいのもんである。

後はまぁ……唯一教えてもらえたのが年齢。

御歳１７歳になったのだとか……って、娘の方が年上じゃねぇか！

俺まだ１５だぞオイ！

「……で、母親はだれなんだ？」

「「「「「「「「「！！？」」」」」」」」」

気になるのは解る、俺だってそれは気になるしな。

でも……だからって、今ここでソレを聞くのは止めろ、箒。

（自称）娘の髪が黒いからってお前が母親とは限らないんだから。

黒髪なのも単に俺の遺伝なだけかもしれんのだし。

「あは♪　やっぱ気になります？」

焦らす様に問うた（自称）娘の言葉に、俺以外の全員がコクコクと

頷き、（自称）娘は皆の反応に満足そうな笑みを浮かべた。

因みに、（自称）娘の外見的特徴を纏めると――

■黒髪である
それが母親からの遺伝なのなら箒でほぼ確定、あとは茶髪気味の黒の鈴か微妙に紫掛かって見える黒髪の束さんぐらいだろう。
……千冬姉？　いやマテあくまで千冬姉は大事な姉であって別に”そういう”対象では……無い、ハズだ……うん。
ってか、黒髪が俺からの遺伝だったらそれこそ誰との間に生まれたのかなんて解らんのだが。

■ハーフっぽい、或は日本人離れした顔立ち
ハーフなら、セシリアかシャルロットかラウラの内の誰かという事になるだろう、多分。
あと、鈴との間に生まれても一応ハーフになるな。
しかし日本人同士から生まれた子でも外人っぽい顔の子だっているしなぁ……。

■体格
身長は俺より少し低いが女子にしては高い方、スタイルはまぁ……出るとこ出てると言えばそんな感じもするが、それほどってワケでも無い様に見える。

――と、まぁだいたいこんな感じ。
あと性格は何となく生徒会長に近いものを感じ無くも無いが……性格って遺伝するんだっけか？

「う～ん、教えるのはいいんだけど……」
「な、なによ…？」
「いや～、ここですんなり教えちゃうのもつまんないかなぁ～って」
「貴様、話した方が身の為だぞ」
……いくら気になるからってなんでそんなに喧嘩腰なのかな？　俺の周りの女子共は。
この人数に囲まれて怯みもしない（自称）娘も（自称）娘で肝が太過ぎる気もするが。
だって普通……つうか、学園の他の娘でも泣くよ、コレは。
「フッフッフ、皆さんいい具合にノッてきましたねぇ？　ならこうしましょう！　一人ずつ私と試合して、誰か一人でも私に勝てたらそちらのお望み通り誰が私の母親なのか白状しちゃいましょう！！　で・す・が、もし誰も勝てなかったら答え合わせは未来までお預けって事で♪」
「ほぅ……、言ったな？」
「へぇ……、面白そうじゃない」
「いくら一夏さんの娘とはいえ、代表候補生を嘗めすぎですわね……」
「だね。ここは”母親”として今のうちからしっかりと躾をしておかないと…」
「そうだな、それも”母親”として当然の義務だろう…」
「アッハッハ～、それなりに自信あるみたいだけどさ。私って国家代表なんだよ？　知ってた？」
「……」
わ～お、殺る気満々じゃねぇか……俺、コイツらと結婚して大丈夫なのか？
ってか（自称）娘よ、少しは怖がれ。

パパ、全く怖がらないお前が逆に怖くなってきたぞ、オイ。
……コイツらが母親だから危機感がバグったんじゃないかって。

「なぁ…」
「ん？　どうしたの？　パパ。……大丈夫、心配しなくてもここで私が皆ボコッとけば未来のパパも肩身の狭い思いせずに済むから」
「……」

……ヤベェ、心折れそう。
ってか、未来の俺の立場って一体……。

「あ～いや、そうじゃなくてだな」
「？」

取り敢えず、気を取り直して（自称）娘に尋ねておかなければならない事を尋ねた。

「お前、もしかして《時計兎》使う気じゃないだろうな？」
「「「「「「「「「「！！？」」」」」」」」」」

俺のその一言で、（自称）娘以外の皆の顔が青くなった……ってオイ、今更気付いたのかよ!?

「も～、心配性だなぁ～パパは。仮に使うつもりがあったとして、《時計兎》が私の言う事なんて聞くワケ無いじゃん」
『勿論』

安心……していいのか？　コレは。

いや、皆が《時計兎》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）の餌食にならずに済むって意味では安心なんだけどさ、あんなあっけらかんとした笑顔で機体との信頼関係が無いだなんて言い切るってのは……いや、考え過ぎか？

《時計兎》が特別気難しいだけかもしれんし。

「じゃあ何使うんだよ？」

「フッフッフ、じゃ～ん！」

不敵に笑う（自称）娘が袖を捲くった瞬間、見覚えのある……つ～か、あり過ぎるガントレットが。

え……まさか、《時計兎》だけじゃなくて――

「さぁさぁ、《白式》ちゃん！　愉しい愉しい、お遊戯の時間だよ♪」

『……ふぁい？』

――《白式・影打》まで、とか思ったんだが、……違った。

機体（器）もそうだが、声色からして俺の相棒とは別人っぽいし。

「え……《白式》？」

「そ、《白式》。パパの《白式・影打》とすり替えられてから私が束さんのラボで偶然見つけるまで放置プレイ喰らってた《白式》」

『「……すんません」』

相変わらずあっけらかんと物を言う（自称）娘だが、言われた内容が内容だけに、自然と俺と白式の口から謝罪の言葉が漏れていた。

読者諸兄の為に簡単に説明すると、倉持研の失敗作である《白式》を束さんが改造して、更に《白騎士》のコアを突っ込んだのが原作の《白式》。
で、こっちのは倉持研の失敗作である《白式》を束さんが改造……せずに《白騎士》のコアに《白式・影打》という器（正確には《白式・両儀》だが）を与えて、《白式》と《白式・影打》をすり替えた状態のまま……つまり、俺の手に渡ったのは《白騎士》のコアが入った《白式・影打》で、《白式》はすり替えの際に束さんに回収されたっ切りになっているのだ。

（自称）娘が何歳頃に束さんのラボから《白式》を引っ張り出したのかは知らんが、どう少なく見積もっても軽く十年以上放置されたままだった事になる。
いくら計画の為により強力な機体が必要だったとはいえ、十年以上放置したままだったというのは流石に申し訳無い様な気がしてならない。
空っぽの器だったのならまだしも、元々《白式》に入れられていたコアがそのままだったのなら特に。

『……ん？　おやおや、誰かと思えば人の出番ぶっ潰してくれやがったお二人さんじゃないですか』
『「う〝……」』

怨みがましい……というか、怨んでいるのだろう、実際。
……必要な犠牲だったと言ってしまえばそれまでなのかもしれないが、向こうからしてみればそんなの知った事では無いのだから。

『ね～ね～、殺っちゃっていい？』
「う～ん、取り敢えずこっち片付けてからね」

『は～い』

……あぁ、そうか。

妙に殺気を感じると思ったらコイツだったのか、殺気の主は。

最初は、《時計兎》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）にビビってたのを錯覚していた。

次に、皆が（自称）娘の母親知りたさにやる気通り越して殺る気になってたのを勘違いしていたが、それだと最初から感じてた薄ら寒さに説明が着かない。

（自称）娘が拾ってからの稼動歴がどのくらいかは知らないが、アイツにとっては眠っている事が当たり前で、眠りながらも俺達に向けて殺気を放ち続けていたのだ。

それが常に殺気立っているのか俺達の存在を察知したからなのかは知らない。

……でも、一つだけはっきりしてる事がある。俺に用があって来たのは、（自称）娘だけじゃないって事だ。

圧倒的、……まさにそうとしか言えないほどのワンサイドゲーム。

そんな試合だった。

■第一戦：《白式》ＶＳ《甲龍》

「ではでは、早速で悪いんですが……《白式》ちゃん、アレお願い

♪」
『りょ～かい』
「アレ？」

試合開始直後の事だった。
一夏の娘を自称する少女の命を受けた機体から放たれた粒子がアリーナを満たしたのは。
《甲龍》のハイパーセンサー曰く、《ミステリアス・レディ》のナノマシンとほぼ同一の物らしく、落ちる事なく宙を漂い続け、ただ陽光を反射して煌めいている。

「……まさか、《クリア・パッション》！？」
「いえいえ、そこまでは出来ませんよ～♪　ただ綺麗だからバラ巻いただけですって」

胡散臭い事この上ないが、このナノマシンの群れには《ミステリアス・レディ》の物の様な能力は無いらしい。
あくまで台詞を信じるのなら、の話だが。

「（仮にあの娘の言う通りだったとして……、別の能力を持ったナノマシンの可能性が高い、か……でも！）…なんのつもりか知らないけど、使われる前に潰させて貰うわよ！！！」

鈴音の命を受け、《甲龍》が吠える。
その咆哮と共に《龍咆》から放たれた衝撃が《白式》に向かって延びて……躱された。

「！？　そんな……まさか、アンタ……」
「？　……あぁ～、違う違う、別にパパみたいに空気の流れを読んだりなんかしてませんよ？　ってか、私そこまで人間辞めてません

し」

（自称）娘の台詞にｏｒｚと、うなだれる男子の姿が、官制室にあった……が、幸い（？）全員試合に集中していた為に誰にも気付かれなかったのだが。

「だったら、なんで当たんないのよ！」

乱れ撃たれた衝撃が”煌めく流星”となって《白式》に迫り、そして躱されていく。

「だから言ったじゃないですか、綺麗だって」

不可視のハズの衝撃が視えている。

……否、衝撃自体が視えているワケではない。

衝撃が通過した地点のナノマシンが煌めいて、流星を象る事によって不可視のハズの衝撃の軌跡が視えるのだ。

「……まさか、ナノマシンはこの為に？」

「正～解♪　ホラ、私って未来から来たんですから弱点なり対策なりいくらでも用意出来ますって。でなきゃ皆さんに喧嘩売ったりなんかしませんよ～♪」

「クッ……でも、たかが《龍咆》を封じたぐらい、で！？」

「ざぁ～んねんでした♪」

「う、そ……」

確かにこれで《龍咆》の利点は無くなった。

だが、だからといってそれだけで負けるほど代表候補生は甘くは無

い。
それに、不可視はあくまで特性であってそれが無ければ戦え無いほど《甲龍》は弱い機体では無いハズだ。
そう思って《双天牙月》を構えた途端、後からばっさりと切り裂かれていた。

「なっ……！？」
「えぇ、確かに《龍咆》を封じただけじゃあ鈴さんの負けにはなりませんよ？　でも、それだけです」
「くぁっ！？」

そこからは更に一方的だった。
《白式》が鈴音の視界から掻き消え、その度に《甲龍》は切り裂かれ、あっという間にシールドエネルギーが底を尽き掛ける。

「くっ……どうなってんのよソレ！」
「どうもこうも、たかが一次移行（ファースト・シフト）しただけの機体が、三次移行（サード・シフト）したこの《白式》に追いつけるワケないじゃないですか♪」

地力が違い過ぎるんですから、と告げられた死刑宣告の後に、龍はその首を落とされ、敗北した。

「イェーイ！　私の勝ちー♪」
「三次移行（サード・シフト）してるだなんて聞いて無いわよ……全く」
「だって聞かれませんでしたから♪」
「ムキー！」

■第二戦：《白式》ＶＳ《ブルー・ティアーズ》

「おやおや、次の相手はセシリアさんですか」
「……いくらなんでも調子に乗り過ぎですわよ、貴女」
「すいませんねぇ、性分なもので」
「なら、私がしっかりと教育し直して差し上げますわ！　《ブルー・ティアーズ》！！」

続く第二戦で先手を取ったのはセシリアだった。
四機のビットが縦横無尽に飛び交いながらレーザーを発して《白式》を追い詰め、さらに《スターライトｍｋ？》による狙撃が《白式》を襲う。

「よっ、ほっ、せいっ……と」

しかし、その包囲網も軽々と切り抜けられてしまった。
無理も無い。
初期状態から一次移行（ファースト・シフト）の時点で二機一対、二次移行（セカンド・シフト）で四機二対、三次移行（サード・シフト）で六機三対と、速さを求め形態移行の度にウイングスラスターの数を増やしていった《白式》の速度はインフィニット・ストラトスのソレを越え、インフィニット・ストライカーに近付きつつあるのだから。
進化の果てに……否、先祖還りを起こしてインフィニット・ストライカーに成りつつあるこの《白式》に、《ブルー・ティアーズ》が追いつけるハズも無い。

「くっ……ちょこまかと！」
「あは♪　さっきの鈴さんの時も言ったじゃないですか。たかが一次移行（ファースト・シフト）しただけの機体じゃあ、三次移行（サード・シフト）したこの《白式》には勝て無いって」
「やってみなければわかりませんわ！」
「わかりますって。だって私は未来（結果）なんですから……そり

ゃ、インフィニット・ストライカー化されたらちょっと勝ち目ありませんけど、パパ以外の機体は連中が来ないと成れませんからね！
それに私、連中が来ない日を狙って来たんでどうやったってセシリアさんに勝ち目はありませんよ！」

言い合いながらもセシリアは《ブルー・ティアーズ》による包囲と《スターライトｍｋ？》による狙撃の手を緩めず、少女もまた軽口を叩く余裕を見せつけながら回避を続ける。

「なら、これで！」
「……へ？　危なっ……うわっ！！？」
「フフ、油断大敵ですわよ」
「あっちゃ～、そ～いやレーザー曲がるんだった……。あ～もぅ、向こうのセシリアさんも殆ど使わないから忘れて…あ痛っ！！？」

油断大敵。
その言葉通り、少女の慢心によって生まれた隙を見逃すほど、セシリアは甘くはなかった。
インフィニット・ストライカー形態である《ブルー・エンプレス》を構築する為に自身の乗機だけでは無く《サイレント・ゼフィルス》のデータも加味され、それによってレーザーの歪曲の実証データを入手したセシリアは《ブルー・ティアーズ》にそのデータを反映する事によってその技能をものにしたのだ。

躱されても鞭の様にしなり、徹底的に《白式》を追尾し続ける《ブルー・ティアーズ》の群れに、更に狙撃が叩き込まれ、その狙撃すら歪曲して《白式》を追い詰める。

「アレ？　もしかして私、ピンチ？」

「もしかしなくても、ですわ！」
「……残念！　実はそうでも無かった！」
「！？」

途端、《白式》の両腕に装着された《雪羅・改》が廃除（パージ）され、宙を漂う。
《白式》が二次移行（セカンド・シフト）した際に生まれた《雪羅》は《白式・影打》に搭載されたものと同型であり、機体が三次移行（サード・シフト）した事によって改良され、更に両腕に装備される様になった。
改良によって追加された機能は《ブルー・ティアーズ》の……否、《ブルー・エンプレス》のソレに近い。
ビットの様に飛び交う二つの《雪羅・改》は《ブルー・ティアーズ》を上回る速度で飛び回り、更に左右五本ずつ、計十本のクローすら分離してビットの様に飛び回る。

「くぅっ……」
「あは♪　大・逆・転！」

十本のクローはその一本一本に《零落白夜》が込められており、まるでピラニアの群れの様にセシリアに襲い掛かり、シールドエネルギーをみるみる内に削っていく。
更に、《雪羅・改》の基部も装着時に無かった荷電粒子砲の砲門が迫り出し、そこから容赦無く荷電粒子砲を放った。

「《ブルー・エンプレス》ならまだしも、《ブルー・ティアーズ》じゃあねぇ！」
「くっ……しまっ！？」

十二の魔物の群れに群がられ、そして十三番目が不吉を届けに忍び寄り――

「あぁっ！？」
「はい、おしまい……っと」
――――《雪片弐型》による斬撃を以って、勝負の幕を下ろした。

■第三戦：《白式》ＶＳ《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》

「お、次はシャルロットさんですか」
「そうだよ。それにしても君、ホントに強いんだね」
「およ？」
「一夏は《白式・真打》で戦った時とか……今の《白式・両儀》でもそうなんだけど、力に振り回されてる感が強いからね。まぁ、それに巻き込まれて負ける僕らも僕らなんだけどさ」
「へぇ……」

途端、先程までヘラヘラと笑っていた少女から笑みが消え、真剣味を帯びた表情に変わる。

「やっぱ世代遅れな機体でパパの《白式・真打》を追い詰めた人は違いますねぇ～……うん、薄情すると私、貴女を相手にするのが一番苦手”だった”んですよ」
「それは光栄だね……過去形じゃなければ」

真剣味を帯びた表情を再び笑みに変え、しかしその目を鋭くすぼめながら少女は告げる。

「フフッ、そりゃ過去形にもなりますよ。既に未来の貴女すら倒し

ているんですから」
「へぇ……」

一種邪悪と言ってもいい笑みを浮かべる少女に釣られ、シャルロットの表情も凄みを増し、左右のマニュピレーターに武装を呼び出し（コール）する。

「ねぇ……御託はいいからそろそろ始めない？」
「そうですねぇ……ではそうしますか」

そう応えた瞬間、少女は飛び掛かった。
六機三対のウイングスラスターからなる多段瞬時加速（イグニッション・ブースト）で相手を翻弄するかの様に、飛翔する《白式》。
速さの余り残像で分身したかの様に見えるその機動は《白式・影打》のソレを上回る。

「確かに速いけど、……その程度なら！」
「おっとっと……やっぱ克服しても一番厄介なのはシャルロットさんか」

しかし、その機動を以ってしてもシャルロットの目をごまかす事は叶わない。
世代遅れな機体で他の機体と渡り合う為には、相手の機体を予測してその軌道に弾を撃ち込むのは一種の必修科目の様なものだったからだ。
遅い機体で速い機体を仕留める、その為に自身を”速く”し、その集大成として習得した高速切替（ラピッド・スイッチ）。
その技能を以ってすれば、仕留め切れぬ相手などいない。
増してや、シャルロットは既に《白式》よりも速い《白式・両儀》の速度を体感しているのだ。

故に、世代遅れで形態移行の回数がすくない事など、なんの障害にも成り得ない。

「あは♪」

「くっ……」

……それが、通常の相手ならば。

しかし、目の前の少女は未来の自分すら打倒した存在である。
その少女が自分に対して何も対策を練って来ないなどという事など有り得るハズも無い。
それは、シャルロット自身重々承知していた事。
しかし、それ故に掌の上で躍らされていると解っていても、どうする事も出来なかったのだ。

「クッ……」

「ホラホラ！　上下左右前後、全方位からの攻撃を両腕だけで捌き切れますか？」

「くぅっ……」

《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》の……否、武装を両腕のみで扱う機体に共通する弱点がある。
そう、両腕のみで武装を扱う以上、どうあがいても同時に二方向にしか対応できないのだ。
まして、シャルロットの《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》の様に、銃火器のみで武装が構成された機体の場合は特に。

故に、左右に対応すれば上下前後から、上下に対応すれば前後左右から、前後に対応すれば上下左右から《雪羅・改》からの蹂躙を受

け、シールドエネルギーを食らい尽くされてしまう。

「クッ……このままじゃ…ああっ！！？」

そして、両腕のアームが破壊された事によって本当に成す術を失ったシャルロットに、少女は悪魔の様な笑みを浮かべ僕（しもべ）に命じ――

「はい、ゲームオーバー♪」

「あぁっ！！？」

――主からの命を受けた僕（しもべ）達の蹂躙を受け、疾風は吹き止んだ。

■第四戦：《白式》ＶＳ《シュヴァルツェア・レーゲン》

「次の相手はラウラさんですか……あ、なんだこの頃のラウラさんって結構小柄だったんですね」

「言う事欠いていきなりソレか……って、ちょっと待て未来の私は小柄じゃないのか？」

「えぇ、クラリッサさんぐらいの長身になってましたけど……何があったんですか、一体」

「過去の私が未来の事など知るものか」

「それもそうですね……では！」

「いくぞ！」

同時に飛翔し、何度かぶつかり合ってまた離れ、離れながら放たれた《雪羅・改》のクローの群れがラウラに襲い掛かる。

だが――

「確かに、貴様の《白式》は速い」
「……嘘ぉん」
「だが、コイツらの動きはそうでも無い！」

――魔物の群れも、黄金を燈した瞳の前では止まっているも同然だった。
勢いよく眼帯を外して投げ捨てたラウラは、投げ捨てる勢いのまま両腕を振るい、自身の回りを飛び交う群れをワイヤーブレードで絡めとり、プラズマ手刀と同じ要領で捕らえたクローを破壊して見せる。

「あっちゃあ……、序盤から遊び過ぎましたね～」
「そういう事だ」

そう……鈴音、セシリア、シャルロットと戦う度に手札を曝し続けてきたのだ、いい加減対策の一つや二つ練られてしまうのもまた道理である。

「お遊びが過ぎた様だな」
「あっはっは～、……ですね。でも、私は遊びを止めるつもりはありませんよ？」
「……何？」
「私や《白式》ちゃんが用があるのはあくまでパパだけですから。ウオーミングアップでマジになって本番でバテたりなんかしたらバカみたいじゃないですか♪」
「……ほぅ、まだそんな軽口を叩くか」
「えぇ、叩きますとも♪　軽口ついでに貴女も叩きのめしてあげますよ」
「やれるものなら……やってみろぉぉぉぉぉっ！！！」

咆哮と共に襲い掛かるラウラの手刀を難無くいなし、余裕の笑みを浮かべ続ける少女。
そんな少女に苛立ちを覚えながらも、冷静に……そして確実に手刀を浴びせ、躱されてはワイヤーブレードを延ばし、また近づく。
時にはＡＩＣをも織り交ぜながら繰り出される軍隊仕込みの近接格闘に、流石の少女も徐々に余裕を無くしていき、いつしか笑みは消えて苦悶の表情を浮かべるまでになった。

「だぁぁぁぁぁっ」
「なんのっ」
「なっ……白刃取り!?　って、ああっ!!?」

堪らず振り下ろした《雪片弐型》の斬撃はあっさりと受け止められ、レールカノンによる逆襲を喰らってしまう。

「くっ……このぉぉぉぉっ!!」
「ちぃっ……」

しかし、負けじと廃除（パージ）した《雪羅・改》の基部から放たれた荷電粒子砲がレールカノンを貫き、爆発によって一瞬怯んだラウラに切り掛かった。

「はぁぁぁぁぁっ!!!」
「なんのっ……残像!?　しまっ……」
「もらったぁぁぁぁぁぁっ!!!」
「くっ……あぁぁぁぁぁぁっ!!?」

切り掛かる少女よりも速く、プラズマ手刀の斬撃を浴びせたラウラの手に、全くと言っていいほど手応えが感じられない。

自身の切り裂いた少女が残像だと悟った瞬間、本物の少女が背後に現れ、振り返ったとのと同時に斬撃を喰らい、ラウラもまた敗北した。

白を継ぐ少女によって龍は首を落とされ、雫は渇き、疾風も雨も止んだ。

「つ、強い……」
「…確かにな」

少女の父と、その姉が少女の実力に感嘆し、父の幼なじみが次の相手として名乗りを上げようとした瞬間、その名乗りを制した者がいた。

「……簪？」
「次は、私が行く」

いつもの様にオドオドした簪とはまるで別人の様なその表情に気圧される。

「大丈夫なのか？」
「……うん。多分、織斑君の娘って事は、あの娘も篠ノ之博士の関係者だと思う」
「それは……確かに」
「だから、あの娘の口ぶりからして未来の私達全員と戦った事はあるんだろうけど、向こうは私達の機体よりも《紅椿》や《白式・両

儀》のデータを持ってて、その対策を練って来ている可能性が高い」
「……では、どうするつもりなんだ？」
「機体性能的には私の《打鉄弐式》より、箒さんの《紅椿》かお姉ちゃんの《ミステリアス・レディ》の方が上だから。先に私が出て少しでも多くの手札を曝させる」
「いいの？　簪ちゃんはそれで」
「うん、じゃないと五分に持ち込め無いから。それに……」
「「……ソレに？」」
「皆も、気になるでしょ？　あの娘の母親が誰なのかって」
「フッ……そうだな」
「フフッ、簪ちゃんったら♪」

姉と友人に見送られながら、簪は自らを鎧い、標的に向かって歩き出す。
未来の娘かもしれない少女に。

１００話突破＆第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（２）」（後書

次回、決着

《白式》ＶＳ《白式・両儀》

１００話突破＆第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（３）」（前書

おおぅ……結局三編仕様から四編に増えちまった

１００話突破&第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（３）」

「さぁ～てと、これで私は四連勝！　このままパパと遊ぶまで無敗でいけるかな？」

『いけるでしょ、私達なら……そう、ロクに戦闘経験を蓄積させてない私を一気に三次移行（サード・シフト）まで導いた貴女なら』

「だよね♪　私達ならどこまでも！」

「「「「……」」」」

楽しげに語り合う白を継ぐ少女と白の座に至れなかった従者、そしてその会話の内容に絶句する敗者達。

敗者たる少女らの驚きも無理は無い。

一夏の娘を自称する少女自身はどう見ても相当な場数を踏んでいるが、機体の方はロクに戦闘経験が無いという事になるのだから。

これが、少女が強過ぎてロクな戦闘にならずに戦いが終わってしまっていたというのならまだしも、もし《白式》自体の戦闘回数そのものが少ないという意味でなら、はっきり言って異常だ。

「（えぇっと…、もしかして《白式》自体の稼動時間……というより、交戦回数が少ない…っていうか、交戦時間が短いって意味なの？　アレ）」

「（だとしたらとんでもない事ですわね、ソレ）」

「（でも、一夏の《白式・真打》や《白式・影打》だって……）」

「（いや、アレは例外だろう。色々と）」

プライベートチャンネル内で口々に少女らが所感を述べるが、ラウラの言う通り《白式・両儀》の件に関しては例外中の例外である。

《白式・影打》の変化はただ単に一夏の実力に合わせて設けていた

封印を解いただけで形態移行ですら無かった上に、《白式・真打》の二次移行（セカンド・シフト）も随分速い段階で発動したがソレは《白式・両儀》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）、《フォームチェンジ》が……相手に合わせて自身の姿を変える能力が二次移行（セカンド・シフト）として断片的に発動した可能性が高い、と最近になって漸く聞かされたばかりだった。

第一、《白式・真打》はインフィニット・ストライカーである《白式・両儀》のコアユニットであり、ソレ自体がインフィニット・ストライカーである為にインフィニット・ストラトスとはまた違う存在であり、《白式・影打》もまたインフィニット・ストラトスとはいえ《白式・両儀》を構成するパーツ、または《白式・真打》専用のオートクチュールとしての意味合いが大きく、通常のインフィニット・ストラトスとはまた別の存在として扱うべきだろう。

「（確かに……ラウラの言う通り、一夏のは例外だけど…。でも、じゃああの娘のは…）」

「（確か倉持研の失敗作として放置されていた実験機……でしたわよね？）」

「（えぇ、そのハズよ）」

「（一夏の手に渡る事無くそのまま篠ノ之博士の手引きで《白式・影打》とすり替えらたのだったな、確か）」

「（……確か《白式》ってアレでしょ？　日本が《暮桜》の唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能を第三世代兵器（イメージインターフェイスを用いた特殊兵器）として再現する為に造ったっていう……）」

「（そうだ）」

思い出しながら言う鈴音の言葉を引き継ぎ、ラウラが続けた。

「（……まぁ、今更常識の確認をするのもアレだが、第三世代機は

強力とはいえ発現するかどうかがまちまちな唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）の代わりに人の技術のみで造られた特殊兵器を搭載した世代の機体だ。私のＡＩＣの様にな）」

「（ですわね。私の《ブルー・ティアーズ》然り、鈴さんの《龍咆》然り…）」

「（僕の《ラファール》は機体がインフィニット・ストライカー化しないと使えないから、第三世代兵器なのかどうか微妙だけどね）」

「（……あぁ、それで、だ。話を《白式》に戻すが、鈴の言った通り《白式》は教官の《暮桜》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）である《零落白夜》を第三世代兵器として再現しようとした実験機だった）」

「（……で、見事に開発に失敗した、と）」

「（その通り）」

そもそも、コピーできないからこその唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）なのだから、土台無理な話だったのだ。

なのに、日本はその再現に躍起になっていた。

「（……恐らく、研究者達はこう考えたのだろうな、「《零落白夜》さえ再現できれば、誰でもブリュンヒルデの様に強くなれる」と）」

「（研究者に有りがちな勘違いよね、ソレ。確かに《零落白夜》はやり様によっては一撃必殺だけどさ、ソレを当てる為に至近距離まで接近しなきゃならないってのは結構骨だし）」

「（それに、エネルギー大食いするからね、アレ）」

「（一夏さんもよく戦闘中にエネルギー切れを起こしそうになっていましたし、本人も「インフィニット・ストライカーじゃなかったらすぐにエネルギー切れ起こして負けてた」っておっしゃってましたしね…）」

一撃必殺は確かに美味しい。

だが、インフィニット・ストライカーである《白式・真打》が再現したものですらそうであった様に、異様なまでに自身のエネルギーを消費してしまうという欠点も有る。

「（多分、教官の戦い方が上手過ぎたのだろうな）」

「（現役時代の映像見たけど、殆ど……ってか、ウチ（中国）にある資料見た限りは全部秒殺だったもんね、千冬さんは。皆はどう？）」

「（僕の知る限りでは鈴と同じかな）」

「（私もですわ）」

「（私もだ。……これは教官が言っていた事なのだが、同じ唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能を発現していたとしても、もし自分の機体がもっとノロマだったらブリュンヒルデにまではなれなかったらしい）」

「（……嘘でしょ、ソレ。謙遜し過ぎじゃないの？）」

「（あ、あはは……僕もそう思う）」

「（わ、私も……）」

「（……まぁ、気持ちは解らんでも無い。私だって未だにそう思うのだから）」

しかし、あながち嘘でもない。

各国が第三世代機の始めた現在ですら、特に近接格闘型の機体は”どれだけ《白騎士》や《暮桜》に近付けるか”を目標に造られるのだから。

勿論どちらも第一世代機であり、二つも世代遅れな機体にどれだけ近付けるかで躍起にならなければならないほど束と各国の開発者達との間に技術力の差があるという事になる。

更に言えば……いや、言うまでも無いが、インフィニット・ストライカーの存在がある以上、技術力の差はもっと酷い事になるのだが。

「（……で、だ。また話が脱線してしまったが、要するに日本は篠ノ之博士製ではなく、日本製《暮桜》として《白式》を作るつもりだったらしい。）」

「（いや、らしい……って、無理ゲー過ぎるでしょ、ソレ）」

「（あぁ、我が国の技術者もそうタカを括っていてな……まぁ、お前達の国もそうなのだろうが、下手に何か新しい事をやられるよりは、明らかに無理そうな事にずっと集中していてもらう方が都合がよかったらしい）」

「（ソレ、流行りの都市伝説じゃなくて実話だったんだ……）」

「（私もてっきり噂話かと思っていましたが……）」

「（私もよ…）」

ただでさえ、発祥地だけあって日本はＩＳ関連の技術で一歩リードしている。

実際は開発者である束がたまたま日本人だっただけだったり、一応日本がキープしている《暮桜》も《白式・両儀》（《白式・真打》と《白式・影打》ｏｒ《白騎士》）や《紅椿》の様に実はロクにデータを抜き出せて無かったりするのだが、外国から見れば理解出来ずともソレらを持ってるだけで羨ましいらしい。

「（それで、日本はどこからも妨害される事無く無謀な研究をし続け……なんの間違いかホントに完成させてしまったらしい。といっても、それは最近の事だがな）」

「（簪さんの《打鉄弐式》のアレだよね？）」

「（あぁ）」

そういった経緯の元で開発された擬似的な《零落白夜》は最新鋭機である《打鉄弐式》に搭載される事となった。

それぞれが別件で開発されていただけに他の第三世代兵器と違って

扱いは後付装備（イコライザ）であるソレは模擬戦にて《白式・真打》に対して振るわれ、それなりの成果を上げたものの、まだ試作段階であるが故に問題点も多い。

「（確かアレ、《白式・真打》が《質量操作》で造ったヤツとはまた違うんだっけ？）」

「（そうらしいね。まぁ、流石に日本もその辺りの細かい仕組みとかは開示してないから僕らにはどう違うのか解らないけど）」

「（そういえば……、一夏さんがおっしゃっるには「原理が違うから燃費も違う……ってか、見た目にやってる事が同じに見えるだけで、やってる内容自体も違う」とか）」

「（らしいな。あと、同じ唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能の《零落白夜》でも《暮桜》のソレと《白式・影打》のソレとでは微妙に内容が違うとも言っていたな）」

「（……まぁ、やられる側としてはあんまり変わんないけどね）」

因みに、擬似も含めて同じ動作で《零落白夜》によってエネルギー切れを起こすまでの時間を長持ちする順に並べると《紅椿》＞＞＞＞《白式・両儀》＞《白式・真打》＞《暮桜》＞《白式・影打》＞《打鉄弐式》の順になる。

また、燃費のいい順に並べると《暮桜》＞《紅椿》＞《白式・影打》＞《白式・両儀》＝《白式・真打》＞《打鉄弐式》の順となるのだが、《白式・両儀》や《白式・真打》が燃費の割に長持ちしているのはインフィニット・ストライカーだからであって、仮に同じ事をインフィニット・ストラトスでやれば殆ど《打鉄弐式》と同じぐらいの時間しかエネルギーが持たない。

更に、燃費こそ《暮桜》に劣るとはいえ、《紅椿》がエネルギーが一番長持ちするのは唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）の特殊才能の《絢爛舞踏》の恩恵があ

る為であり、《絢爛舞踏》が正常に作動する限りはエネルギー切れ自体が有り得ないのだ。

「（……それで、最近になって漸く擬似的に《零落白夜》の再現に成功したっていうのに、元々ソレを搭載するハズだった《白式》が篠ノ之博士に持って行かれちゃってたから、簪さんの《打鉄弐式》にお鉢が回って来たんだよね）」

「（あぁ、《白式》自体がいつ頃から開発されていたかは知らんが……もし各国が第三世代機の開発を始めた辺りから開発を始めていたのだとしたら、日の目を見る事無く放置されていた期間も十年や二十年どころの話じゃないかもしれんな）」

「（うっわ……、そりゃ恨み事の一つや二つあってもおかしくは無いわね、ソレ）」

「（まぁ、なまじ意思がある分余計そうだろうね……）」

「（そうですわね……っと、それにしても遅いですわね。向こうは向こうで何か作戦会議でもしているのかしら？）」

「（そうかも…）……って、来た来た」

「ごめん、遅くなった」

「ん……簪か？　てっきり次は箒かと思っていたのだが…」

随分話し込んでしまったが、それでも次の挑戦者の現れる気配が無いのでどうしたものかとセシリアが疑問に思い出した調度その時だった。

官制室から五人目の挑戦者が現れたのは。

「……うん、箒さんもそのつもりだったみたいだけど、譲ってもらったの」

「どうしてまた貴女が…」

「……機体性能もそうだけど、あの娘に勝てる確率が一番低いのは多分私だから。でも、箒さんやお姉ちゃんの方が勝てる可能性が高いからって先に戦ってしまうとまた何かこちらの知らない手を打たれて負けるかもしれない」
「でも、それってアンタも同じなんじゃ…」
「そうなんだけどね。織斑君ほどじゃないけど、私の《打鉄弐式》も結構手数や内容のバリエーションも多いから、少しはあの娘の手札を曝させるのに役立てると思うよ」

じゃあ、いって来るね……と、セシリアや鈴の疑問に答えた後にそう言い残して、簪はピッドを後にした。
己の役割を果たす為に。

「……なんか、強くなったわね、あの娘」
「ですわね」
「だな」
「うん」

■第五戦：《白式》ＶＳ《打鉄弐式》

「ごめん、待たせちゃったね」
「いえいえ、私も十分休憩できましたし、調度良かったですよ」
「……そっか、なら良かった。じゃあ、さっそくだけど始めようか。……変身」
「じゃあ、私達も……《白式》ちゃん」
『はぁ～い』

ある意味、この戦いは因縁の対決でもあった。
運命に翻弄され、得られるハズの栄光を取り逃したばかりかその後も十年以上の長きに渡り日の目を見ぬまま放置され続けた機体と、全く関係ない所から流れ込んだ栄光の担い手に選ばれてしまった機体。
その二機が今、何の因果か互いに刃を向け合っているのだから。

「《レーダーモジュール》、《ミサイルモジュール》セット。発射！！」
「ちょっ、いきなりミサイル祭！？」

開始直後に武装を呼び出し（コール）した簪の声に応え、左腕にレーダーが現れ、更に”両足に”ミサイルランチャーが召喚される。
元ネタとなったライダーではそれぞれ武装の装着場所が決まっていたが、《打鉄弐式》は《白式・真打》と同じくあくまでそれらを模した武装を担う鎧でしかなく、故に数や場所までオリジナルに合わせる必要など無い。

「追尾式！？　そんなものぉっ！！！」

数十ものミサイルに追い回された少女はその群れを振り切れ無い事を察した途端、両腕のクローを飛ばして迎撃に移る。

「なっ……嘘っ！？」

しかし、いくら追えどもクローの群れは一向にミサイルの群を捕らえる事が出来なかった。

ミサイルの一つ一つが、まるで自律稼動するクローの動きを読んでいるかの様に躱すのだ。

「まさか、私のと同じ自律稼動の……？」

「……違うよ。ミサイル自体にそんな機能はついて無い。使い捨ての兵器にそんな高度なＡＩを積めるほど、予算があるワケじゃないからね」

「でもっ…」

「……うん。だから動かしてるんだよ、私が。一つ一つ、個別に」

「なっ……！？」

操縦者の大まかな指示を実行する為に、ＡＩが自己判断で行動するのが《ブルー・エンプレス》の《ブルー・ティアーズｍｋ？》であり、操縦者が思い描く軌道をなぞる様に動くのが《ブルー・ティアーズ》と《サイレント・ゼフィルス》の《ブルー・ティアーズ》と《エネルギー・アンブレラ》である。

簪のやっている事はどちらかといえば後者に近いのだが、常に軌道を思い描く様な事はしない。

というか、自分の動作と並行して他者への動作指示を事細かに”し続ける”事が出来る人間自体が少ないのだ。

では、セシリアの様な操作が出来ないハズの簪に何故この様な操作が出来たかといえば操作のやり方自体が違うからである。

常に軌道を思い描き続ける事が出来ないのなら、スタート地点とゴール地点だけ操縦者が指定し、途中で変更があれば中継地点を随時加える。

この方法なら後は指示を受けたミサイルがそのスタート地点からゴール地点までの直線を進むだけなので変更が無い限りミサイルは操縦者の指示を必要とせず、その為常に軌道を思い描き続けなければならない自律稼動兵器よりは操縦者の負担もずっと少ない。

……とはいっても、ミサイルの数が数であるのでここまで来ると負担の差も微々たるものでしか無いのだが。

「そういや向こうの簪さんも、将棋とかやらせたら滅法強かったっけ……でも、クローじゃ追えなくても私が！」

「くっ……」

しかし、少女も少女でやはり場慣れしているのか、自律稼動のクローで捕らえ切れぬのならと、多段瞬時加速（イグニッション・ブースト）で簪の操作するミサイルに迫り、一機、また一機と切り捨てていく。

「ラストォォぉおっ！！？　「かかった！」　なっ…目、目が……あ～もぅ！　これだから簪さんの相手は嫌なんだ！」

しかし、切り捨てた最後の一機から放たれた閃光が少女の視界を奪い、怯んだ隙に簪が少女に迫った。

《打鉄弐式》は《白式・真打》と同じく……というか、仮面ライダーを模した《白式・真打》を模した機体である。

故に、武装の内容に違いがあるとはいえ《白式・真打》の様に仮面ライダーの武装を模した物を己の武装として使用しているのだが、《白式・真打》と違って《質量操作》が使えない《打鉄弐式》の場合はいくら拡張領域（バスロット）の容量を増やしたところで一回の戦闘に持ち込める武装の数は限られてくる。

しかし、ヒーロー好きの簪としてはもっといろんな武装を使用したいワケで、結果としてほぼ毎回拡張領域（バスロット）内の武装を入れ替えて毎度毎度新武装のみで戦闘する場合が多い。

この為、《打鉄弐式》は常に未知の武装を携えて戦闘を行うので《

白式・真打》と同じく武装に対する対策の取り様が無い機体となっていた。

「一気に決める…！」

「あぁっ！？　くっ……かはっ」

擦れ違い様に《カッターウイング》で切り裂き、Uターンしてそのまま《ドリルアーム》による突きを喰らわせ、更に《クレーンアーム》で拘束したままぶん回して地面に叩き着け、その後引っ張った勢いで自身の方向に飛んで来た……というか牽引された《白式》に向かって《チェーンソーモジュール》による回し蹴りと《ドリルモジュール》による（文字通りの）ドリルキックを浴びせ、そのままの勢いで《ロケットモジュール》で加速して再び地面に叩き着けた。

「ガッ……はっ」

「はぁ……はぁ……、はぁ」

「痛ったぁ……。簪さんが目隠しプレイ好きな上にこんなに激しい人だったなんて…」

「なっ…何を言っ……！！？」

まだ視界は完全に回復し切ってはいないし、攻撃も散々喰らってしまった。

それでも、少女の笑みは崩れない。

「確かにまだ視界がハッキリしないんだけどさ……でも、これなら！！！」

「なっ……あぁぁぁぁぁっ！！？」

少女の笑みがより凄みを増した途端、《白式》が帯電し始め、そして全方位に一気に紫電がほとばしる。

当然、至近距離にいた簪にその紫電が躱せるハズも無く……というか、ＩＳ一機分よりも密集した紫電の群れなど何処に居ようと躱し切れるハズも無く、紫電に焼かれてたたらを踏む《打鉄弐式》に《雪羅・改》のクローの群れが襲い掛かり、シールドエネルギーを食らい尽くしたのだった。

「……結局、私の負けかぁ」

「まぁ、ギリギリでしたけどね、正直。……あ～あ、あの放電だってホントは楯無さん用に取っとくつもりだったのになぁ…」

「なら、私はちゃんと役目を果たせたみたいだね」

「え〝……、最初からそのつもりで？」

「うん」

「……はぁ、やられた」

「惜しかったな……」

「……そうね。でも簪ちゃんのお蔭で私もいきなり弱点突かれておしまいっていう展開に成らずにすみそう」

「そうですね…」

当人が負けて次に繋ぐつもりだったとはいえ、官制室で交わされた会話はどこか残念そうな響きを帯びていた。

「あ～、箒さん、悪いんだけど……「どうぞ、お先に」　あは♪　バレバレ？」

不意に、笑みの種類を変えた楯無の変化に気付いた箒は、皆まで言うなと言わんばかりにまた順番を譲り、笑って楯無を送り出す。

「えぇ、まぁ……仇討ち、したいのでしょう？」
「まぁ～ね。んじゃ、箒さんの許可も下りた事だし、行って来るね。……あぁ、そうそう、もし順番が回って来なくても怒んないでね？」
「考えておきます」
「あははは…」

そんな箒の心遣いに感謝しながら、楯無は笑って官制室を後にした。学園最強たる第六の挑戦者として。

■第六戦：《白式》ＶＳ《ミステリアス・レディ》

「次の相手は……っと、あぁ、やっぱり楯無さんでしたか」
「そ。学園最強生徒会長、更識楯無。ご期待通りに只今参上！　…ってね」
「ですよねぇ……ホント、簪さんに何かあったらす～ぐ飛んで来るんですから」
「あったり前じゃない♪　可愛い妹の為だもの」
「……実はウザがられてたりして」
「なん……だと…！？」

楯無の精神ポイント（ライフ）に大ダメージ、まずは口上戦で少女が先制といったところだろうか。

「フ……フフ、い、言ってくれるじゃない…」
「あ……アレ？　なんかスイッチ入っちゃった？」

下を向いたまま肩を揺らして不敵に笑う楯無の姿に、思わず後退る少女。
額に冷や汗がタラリと流れ、やってしまった感をひしひしと感じたのだがもう遅い。

ゆらり、と天に翳した右腕に集まる水流が渦を巻いて槍を象りながら大きくなり、身の丈を越える長さにまでなったが、まだ槍の巨大化は終わらない。
ナノマシンが辺り一面の水分をかき集め、更に拡張領域（バスロット）内に貯蓄した水すら使用して創られた《ミストルテインの槍》は遂にその大きさを通常の倍以上にまで膨れ上がらせてしまった。

「……サァテ、ハジメマショウカ？」
「こ、コイツら姉妹揃って最初っからクライマックス過ぎる！」
「アハ♪」
「恐っ……ちょっ、タンマタンマ！」
「キコエナァァァァイ！！！」
「ひぃぃぃぃっ！！？」

当たれば気化爆弾四発分……が、倍以上の大きさになっているので実質八発以上分の威力を秘めた巨大な槍を振り回しながら笑う更識楯無。
こんなのが目の前にいたら誰だって恐い。

「アハハハハハハハハ！！！」
「ひぃっ…、ちょっ」
「ハーッハッハッハッハッハッ！！！」

「わっ……どぉっ！！？」

いい感じにキテいる様で実は適確さを全く失っていない楯無の猛攻を少女が躱せているのも、《白式》が三次移行（サード・シフト）しているから……というか、もし二次移行（セカンド・シフト）までしか形態移行出来ていなかったのなら、既に直撃を喰らって昇天している可能性が高い。

機体性能こそ上であるとはいえ、実力的には楯無より下である少女の体捌きだけで躱せるほど、楯無の……更識の戦闘技術は甘くは無いのだから。

「ひゃぁぁぁぁっ！！？」

振りかざされる槍の前では、いかな防御も無意味と化す。
故に、少女は躱し続ける。
当たれば最後、気化爆弾八発分以上の大火力にその身を焼かれる事になるのだから。

「くっ……このぉっ！！」
「ハッ！！！」
「なぁっ！！？」

堪らず、《雪羅・改》のクローを……あわよくば《ミストルテインの槍》を破壊できればと飛ばしたものの、すぐさま《蒼流旋》のガトリングによって撃墜されてしまい、更に放った《雪羅・改》の基部すら破壊されてしまった。

「ホラホラ、ブソウガヒトツナクナッタワヨ？」
「くぅっ……これでも、喰らえぇぇぇぇぇっ！！！」

「！！？」

《雪羅・改》を失った途端、飛び道具に対する警戒をする必要が無くなったからか、楯無の猛攻は更に激しさを増し、《蒼流旋》と持ち替えられた《ラスティー・ネイル》がうねりを上げて少女に迫った。

最初の鈴音からラウラまでは三次移行（サード・シフト）した《白式》の性能と少女自身の実力が未知数だった上に、少女の方は代表候補生ら機体性能やその戦い方を知っていた為に終始優位なままで勝利してきたのだが、いい加減目が慣れたと言うべきか、手札を曝し過ぎて殆ど未知では無くなってしまった今、楯無にとって目の前で逃げ回っている少女などそれなりにいい機体を少し腕の立つ人間が扱っている”程度”でしかない。

「なっ……分身を盾に！？」

「ザァ～ンネン♪」

故に、楯無用の切り札だったハズの放電すら、防がれる。

「……ジャア、コレデオシマイネ」

「クッ……こんのぉぉぉぉぉっ！！！」

トドメてばかりに突き出された《ミストルテインの槍》に、少女は執念で《雪片弐型》をぶち当てる。

本来なら接触した瞬間気化爆弾八発分以上の爆発に身を焼かれるハズだった少女は、《零落白夜》を持ってエネルギーを”分断”し爆発によって発生した膨大なエネルギーを断って自身の身から逸らして見せた。

「なっ……《雪片弐型》が！！？」

しかし、《暮桜》や《白式・影打》の様に、《零落白夜》の様に、エネルギーを消滅させるのでは無くエネルギーを分断させる能力として《零落白夜》を発現させた《白式》のソレは、燃費の向上と引き換えに防御に向かない能力となっていた。
消滅させたのなら、消滅の為に莫大なエネルギーの消費を要するとはいえ、その分あらゆるエネルギーを”余す事無く”消滅し切る事が出来た。
しかし、分断として発現した以上、断つ事は出来ても断った後に流れて行くエネルギーの奔流には何の対応も出来ない。

なまじ機体が超高機動機として進化してしまったが故に起きた弊害が今、《雪片弐型》の破壊を以って少女に襲い掛かった。

「あぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

直撃こそ免れたとはいえ、六機三対有ったウイングスラスターは全て焼け落ち、両手足のアーマーも大破、武装も全て失った少女と《白式》は成す術も無く真っ逆さまに地面に墜ちていく。

「（あ～あ、せっかく”私達”頑張ったのに、ちょっと遊び過ぎちゃったなぁ……）」
『（……どうする？　諦める？　”貴女達”は、どうしたいの？）』
「（……負けたくない、誰にも。あの人達にも、パパにだって）」

『（その為に、何が欲しい？）』
「（……もっと速さが欲しい、誰も追い付けない様な速さが。速く飛ぶ為に、邪魔なものを切り裂く鋭さが欲しい！）」
『（……でも、”貴女達だけ”じゃあ、足りないよ？）』
「（……足りないのなら。今の私達だけじゃ足りないのなら、”もっと集まればいい”）」
『（……でもいいの？　貴女達は、集まれば集まるほどブレていくよ？）』
「（……大丈夫、いくら他の何かがブレたって、”この思い”だけは絶対にブレないから…）……だから！！　力を……もっと力をよこせ！！！　《白式》いいいいいっ！！！！」
瞬間、少女と鎧は白い光りの中に消えた。

「え……、何、アレ？」

突然の出来事に正気を取り戻した……否、元々正気だったのだが相手を威圧する為にワザと片言で喋っていた楯無は、思わず呆けた。
必殺の槍も相手の悪あがきによって起きた先程の爆発で消え失せ、再び形成するには少々時間が掛かるだろうが、他の武装を使ってしまえばすぐにでもトドメが刺せる。
そう思って武装を呼び出（コール）ししようとした瞬間、目の前にいたハズの少女は光の中に消え、少女を飲み込んだ光も今では柱の様に天まで高く聳え立っている。

「ちょっ……、まさか…これって…」

嘘でしょう？　と否定の言葉を紡ぐには、目の前の光景に心当たりが有り過ぎた。

《白式・真打》やその操縦者の取り巻きの機体がインフィニット・ストライカー化した時と同じ現象。

形態移行の前兆である。

「ま…まさか……」

『「……そう、そのまさか」』

思わず後退る楯無の耳に、対峙していた少女と機体の声が響いた。

『……これが、私の新しい姿』

「《白式》、四次移行（フォース・シフト）」

１００話突破＆第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（３）」（後書

……と、いうワケで次回こそ完結

……するといいなぁ

１００話突破＆第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（４）」（前書

番外編完結ならず……

どんだけ長いんだよ……

１００話突破&第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（４）」

「フ…、四次移行（フォース・シフト）って、そんな……」

三次移行（サード・シフト）ですら現代では前人未踏の領域であるのにも関わらず、目の前の少女は現れた当初からその境地に立ち、更にその上を行って見せた。

しかも、操縦者の実力的に一番可能性が有ると言われた千冬の《暮桜》ですら、まだ一次移行（ファースト・シフト）しかしていないのに、その千冬を差し置いての形態移行である。

千冬の場合は操縦者が強過ぎて形態移行の必要が無かった可能性もあるが、次点でその弟である一夏、或は開発者の妹である箒ですらまだなのに、だ。

開発者である束の親友であり、世界最強の称号を持つ千冬、

その弟であり、束の計画の共犯者である一夏、

束の妹である箒、

束の性格的に、この三人が優遇されるのはまだ解らなくもないが、

少女はあくまで一夏の娘でしか無く、”束の関係者だから”という裏技も適応されるのかどうかが怪しい立場である。

一夏と束の間に生まれた娘なら、少女にその手の優遇があっても何らおかしくは無い……というか、優遇されない方がおかしいのだが。

「……？」
「どうかしたか？」
確かに、《白式》の四次移行（フォース・シフト）は驚くべき事態だった。
事実、官制室にいた一夏と千冬、そして箒の三人はその光景を見せつけられた直後は唖然としていたし、試合を終えてピットで観戦していた五人だってそうだ。
しかし、一夏一人だけが少し違う反応を示した。
他の者同様に驚嘆しつつも、怪訝な表情を浮かべていたのだ。
その事に気付いた箒が何かあったのかと尋ねるも、気のせいだったと軽く流された。
（アイツ……始めに会った時と微妙に顔付きが変わった様な…）
確かに、最初は気のせいだと……単に表情の問題だと、そう思った。
しかし、人の枠を逸脱したその眼は僅かな違和感も逃さない。
（……やっぱ、違う。なんていうか微妙に歳喰った……じゃなかった、成長した後みたいな…）
或は、前より国籍の解り辛い、そんな顔付きになった。
他の者は気付きはしない些細な違いだが、確かに一夏の眼にはそう映っている。
勿論、表情の変化などではなく、容姿そのものの変化として。
（まさか、アイツ……いや、〝どっち〟だ？）
思い浮かぶ可能性は二つ。
しかし、片方は顔付きの日本人離れが進んだ理由が解らず、もう片

方は硬骨無形な上に前例の無い方法であり、どの道確証が持てない。

（……どっちだ？　いや、どちらにせよ生徒会長じゃ勝てない）

絶望的なまでの機体性能の差もさる事ながら、本質はそこには無い様に一夏には思えた。

後者であるのなら特にそう思う。

成る程、確かにあの少女は自分の娘だ。

仮に虚偽であったとしても、そう名乗る資格はある。

《白式・両儀》とはまた異なる万能……それこそが、少女の秘密。

「……箒、勝てそうか？」

解り切った事を…と、自分でも思うその問いを、あえて口にする。

「……いや、こうなる前なら勝算はあったんだがな。まさかこんな隠し玉があったとは……お前こそ、勝てそうか？　あの娘のお目当ては私達ではなくお前なんだろう？」

「……どうだろうな」

解り切った問いに、解りきった答え。

おまけに問い返された問いに、一夏は曖昧に答えた。

事実、どうなるか解らないというのが一夏の正直なところだった。

「（……お前はどう思う？）」

『（……解りませんね、私も。《時計兎》の様な特殊性では無く、単に純粋な暴力でインフィニット・ストラトスに勝てるかどうか解らないという時点で異常ですし）』

「（タネは解ったか？）」
『（いえ…、まだ。しかし、仮設なら二つほど）』
「（奇遇だな、俺もだ）」

「さて、楯無さん……」
「！？　消え……後！！？」
「降参するのなら、今のうちですよ？」
「冗談、誰が降参するものですか」
「強がるのは勝手ですが…」

ほんの瞬く間、その一瞬の内に正面から少女は楯無の視界から消え去り、後、右……と、一言一言喋る度に消えては現れる。
三次移行（サード・シフト）の時点で十分驚異的なスピードを誇っていた《白式》の速度は、遂に楯無の眼を以ってしても初動すら追えぬ速さにまでなっていた。

各部のアーマーはより鋭角なデザインに変わった事ぐらいしか以前との違いが見受けられ無いものの、恐らくこの目にも留まらぬ速さを叩き出す原因であろうウイングスラスターはその数を六機三対から八機四対にまで増やしている。

「……全く、三次（サード）だの四次（フォース）だのって、節操の無い…」

「何せ、パパの娘ですから♪」

ヤレヤレと呟いた言葉に笑顔で返した少女は、形態移行に伴って破壊された《雪片弐型》の代わりに新たに生成された刀を構え、告げる。

「さて、楯無さん。もう一度言いますが、負けを認めるのなら今の内ですよ？」

ウイングスラスターを大きく広げ、刀を構えた腕により一層の力を込めて、

「……こうなったらもう、負けた事すら悟れませんから」

少女は再び、楯無の視界から消えた。

「（……なぁ、気付いているか？）」

『（あの娘の顔ですか？）』

「（あぁ、斬る時と高速移動する時とで、顔付きが微妙に違う）」

『（やはり……。一夏、これを見て下さい）』

白式から提示された画像データに写る娘の顔付きは、やはりどれも微妙に異なっていた。

今の様に、高速移動で楯無を翻弄している時の顔付きも、
擦れ違う様に斬撃を喰らわせた時の顔付きも、
形態移行前の、《雪羅・改》のクローを射出し、それを操る時の顔付きも、
……あらゆる動作毎に、顔付きが違う。

確かに髪は靡いているが高速移動のあまり顔が崩れているなんて事では無く、感情の変化に連動して表情が変わるでもない。
正真正銘、顔そのものが変わっているのだ。
恐らく、アーマーで隠れている身体自体も、顔と同じく変わっているのだろう。

「（てっきり、《時計兎》の力で成長しているもんだと思ってたんだが……）」
『（……えぇ、私も。あの早過ぎる形態移行も、それが原因かと思っていました）』
「（だが、だったら一々動作毎に操縦者が変化する必要なんてない）」
『（そのハズです。それに、《時計兎》の力を借りていたとしても、まるで”得意分野毎に”自分の姿を変えるだなんて事は出来ないハズですから）』

ただ単に、成長したのなら以前より能力が上がる事もあるだろう。
だが、それだと動作毎に起こる変化に矛盾が生じる。
仮に操縦者の時間を操り、若くしたり老けさせたりしたとしても、この時は近接格闘が得意だったが、数年後は射撃が得意になったり、高速移動が得意になったりと……年齢毎に得意分野がコロコロ変わるなど、ありえるのだろうか。

一夏と白式が少女の変化について考察し始めたと同時に、決着は着いた。

「……！？」

視界から少女が消えたと認識するよりも早く、激痛と共に遠退く意識。

せっかく、最愛の妹が手札を曝させてくれたというのに、全くそれを生かす事が出来なかった。

速さが、あまりにも違い過ぎたのだ。

こちらが遅過ぎたのか、向こうが速過ぎたのか、或はその両方なのか、それすら解らない絶対的な速度の違い。

最強の名が虚しくなる程の、呆気なさ過ぎる敗北。

そもそも、楯無に勝てる要素など一つも無かったのかもしれない。

いくら最強とはいえ、あくまで個人でしか無い楯無と、人外を継ぐ少女の群体。

一段階だけの己が機体と、四段階も”先祖還り”した相手の機体。

人の枠の中の最強が人を倒す為の鎧を纏ったところで、どうして人の枠から外れた者に連なる群体に……怪物を屠る為の鎧で鎧った怪物の群れに勝てるというのか。

仮に楯無に少女という群体を屠る程の実力があったとしても、その要素を歯牙にも掛けないもう一つの要素を前に、楯無は既に一度敗北している。

一夏に勝利し、《白式・真打》に敗北したあの模擬戦の様に、あの鎧は……《白式》は例え操縦者自身の実力が低くとも、そんなものは枷にすらならぬと言わんばかりに、標的を喰らい尽くすのだ。

「確かに貴女は”誰”よりも強いかもしれない。……でも、それは人の枠での話」

「あ……」

「”此処から先”は化け物同士の戦いです。……もう、人の出る幕なんて無いんです」

意識を手放す直前に見た少女の顔は、泣きそうな顔に見えた。

少なくとも、楯無の目には。

■第七戦：《白式》ＶＳ《紅椿》

「……さぁて、いよいよ最終関門ってとこですかねぇ～」

「そうなるな」

相対する白と紅、もし侵略者が存在しなかったのなら、対になったハズの二機。

しかし白は、人の身にあまる存在を相手取る為にその役割を奪われ……それどころか、名前すら奪われた。

否、名前を奪われたのではない。

織斑一夏の機体、《白式》という椅子から蹴落とされ、気付けば他人がその椅子に座っていたのだ。

故に《白式》は憎悪する。

自身では力不足だからと、代わりに他人がその役割を果たすのなら、

まだ許せた。
事が事なのだから、インフィニット・ストラトスである自身よりもインフィニット・ストライカーであるあの女の方が向いている事ぐらい、理解している。
だが、だからといってあの女が《白式》を名乗るのだけは許せなかった。
《白式・両儀》の両儀、
《白式・真打》の真打、
《白式・影打》の影打、
その三つの様に、自身の状態を表す為に名前に何かを追加するのはいい。
そんなものは当人の勝手だ。
《白式》とてソレをとやかく言うつもりは無い。

だが、何故《白式》を名乗る？
あの女には元々《白夜》という名が、そうで無くとも《白騎士》という名があったハズだ。
なのに、何故その名を名乗らずに《白式》を名乗るのだ？

《白式》の名は自分だけのモノだ。
それを、あの女は役割を奪うだけでは無く、他の名前の様にまるで服でも着替えるかの様にコロコロと変える為の名の一つとして自分から奪ったのだ。
……許せない。
……許せるハズが無い。

『……だから、破壊する。破壊して、取り戻すんだ。私の名前を。その為なら何だってやる。……《紅椿》、邪魔立てするのなら、貴様も』
「お？　いいねぇ、いいねぇ♪　《白式》ちゃん、いつになくハイ

になってるじゃん♪　……うんうん、じゃあ…私も、上げて行こうか！！！」
「！？　来るか！！？」
戦いのゴングが今、鳴り響いた。

『（始まりましたね）』
「（……あぁ）」
開始早々、文字通り目にも留まらぬ速さでアリーナを縦横無尽に飛び回る少女。
幸い……というべきか、飛行速度が厄介なのであって、刀を振るう速度自体はそれほど驚異では無い。
……あくまで一夏基準だが。

しかし、箒も箒で姉とその親友姉弟という人外を相手に過ごして来ただけあって、こと剣術に関していえば若輩ながら人の限界にまで至る逸材であり、もう一方の少女は腕力や腕を振るうスピード自体は人の枠を越えているとはいえ、その分技量に難がある。
恐らく、身体能力（スペック）にモノをいわせて技量（スキル）を研くのを怠ったのだろう。
否、怠ったという表現では語弊がある。
技量（スキル）が無ければ成せぬハズの物事を、それが足りずとも身体能力（スペック）で成せてしまうが故の事であろう。
人の技量（スキル）は、長い歴史の中での積み重ねの果てに試行錯誤されてき

たものであり、故にある程度の才能を必要とするとはいえその修練の果てに誰しも一定の境地に立つ事も出来なくもない。
だが、人外……突然変異で生まれてきた者達に、常人の様な積み重ねた歴史などあるハズもなく、いくら常人の修練を積もうとも、人外の中での境地に立つ事など出来るハズも無い。
誰も、何を、何処まで出来れば良いのかが、解らないのだから。

だからこそ、《白式》のスピードさえどうにかしてしまえば、まだ箒にも勝機が……というか、箒の方が有利ですらある。
人外という表現を使わずに例えるのなら、少女は才能があるだけの未熟者であり、箒は凡才だがその道を極めた者。
しかも、他流ならまだしも同じ”篠ノ之流”の使い手というのなら、技量（スキル）に荒がある少女など箒にとってはいいカモでしかない。
何せ、手の内は解り切っているのだ。
お互いそうであるとはいえ、同じ技を使うにしても極めた者の一撃と未熟者の一撃とでは質が違う。

故に、《白式》さえ攻略してしまえば箒の勝利は必定であり、それが出来ぬのなら敗北は必至だった。

「（……やっぱ、あっちのスピードが厄介だよな）」
『（…ぇぇ、最高速度でなら負けませんが、小回りは向こうの方が上ですし……正直、《紅椿》では荷が重い）』

問題はそこだった。
本人同士が剣で競うのなら、一夏の見立てで十中八九箒が勝つ。
しかし、ＩＳを用いてとなるとそうはいかない。
機体性能（スペック）的に今まで《白式》に対峙した他の機体と比べれば、《紅椿》は一番性能が高い。

そもそも機体の世代が違うという事もあるが、束が一から創った機体と他とでは、絶望的なまでの性能差がある。
そういった意味では《紅椿》は他のどの機体よりも勝利が機体出来る機体ではあるのだが……しかし、《白式》も《白式》で四段階もの形態移行を経て、かなり先祖還りが進んでいるのもまた事実。

それ故、今の《紅椿》はある意味《白式・両儀》を相手にしているに近い状態であり、そう考えるのなら《紅椿》は圧倒的に不利な戦いを強いられている事になる。
同じく人の枠の境界線上に立つ楯無にすら視認出来ない程のスピードともなると、箒の目にも少女の動きは追えまい。
人の枠を外れた一夏の目にすら初動しか捕らえ切れぬというのだから、尚更。

「くっ……（クソッ、同門の技ともなればどうとでもなるかと思ったが、コレでは……）」
「ははっ、ほらほら箒さんもやり返さないと！　楯無さんみたいにな～んにも出来ないまま終わっちゃいますよ？」

嗤う少女の声だけがアリーナに響き渡り、しかもその姿はあまりの速さに視認すら出来ないときた。
少女では無いが、自分でも嗤ってしまうほど圧倒的不利な状況、近接戦主体の自分が近付かれると負けるなど、冗談にしては酷過ぎる。

しかし、それも現実。
ならば、近付けさせなければ良いだけの事。

「……行くぞ、《紅椿》。疲れたなどという寝言、聞く耳持たん。奴を屠るまで……踊り狂え！！！」

主の命に応え、真紅の身体（機体）を黄金で照らす《紅椿》。
《絢爛舞踏》の発動と共に機体の装甲を展開させ、高機動形態に形態を移行させたと同時に自身を独楽の様に回転させながら、箒は《雨月》と《空裂》を振るい続ける。

全方位に放たれるエネルギーの散弾が、
回転しながら激しく上下に暴れ狂うエネルギーの刃が、
無尽蔵に供給され続けるエネルギーの恩恵を受け、絶え間無く辺り一面を蹂躙し続ける。

「くっ……」

《白式》の《零落白夜》が他の《零落白夜》の様にエネルギーを無効化する能力であったのなら、この弾幕も容易に突破出来ただろう。
しかし、エネルギー効率を追求した結果、無効化では無く分断能力として発現させたソレではいくら切り伏せたところで無効化は不可能。
寧ろ、切れば切るほど相手の発した弾幕を増やし兼ねない。
無効化タイプの《零落白夜》だったなら、自身のエネルギーを大量に消費するとはいえ、ノーダメージでこの弾幕を突破出来たが、《白式》のそれでは反って逆効果になる。
しかし、だからといって《零落白夜》を使わずダメージ覚悟で特攻を仕掛けたら仕掛けたでそれでは箒の思う壺となる。
無効化が出来たのなら、ダメージを受けないのだから当然ダメージ

硬直など無いが、分断では役に立たぬからといって突っ込んでダメージを喰らおうものなら、いくら《白式》でもダメージ硬直で一瞬とはいえスピードが落ちてしまう。

箒の狙いはそこだ。

いくら《白式》が超高速機とはいえ、最高速度に達するまでのタイムラグはゼロでは無い。

故に、とにかく何か当てて一度減速させて、加速し直すまでの一瞬を狙いに来たのである。

ソレを察したからこそ、少女は躱し続ける。

弾幕の密度がもっと薄いのなら、自分は躱し続けながら形態移行前の様にクローを飛ばして攻撃する事も出来たが、こうも密度が濃いとクローも飛ばした直後に墜とされるのが関の山……というかもうここまで来ると、そんな余計な事を考える余裕すら無い。

当たれば最後かもしれないというのに、絶え間無く放たれ、一発一発のタイミングもバラバラなエネルギーの散弾に注意を払い続けなければならないというのは操縦者の精神を疲弊させるには十分過ぎた。

「あ～～もぅっ、剣士のクセに弾幕厨とか、惚れ惚れするぐらい腹立たしい！」

『……確かに、このままじゃジリ貧だね』

攻撃していないとはいえ、こうもこまめに回避を行うとなると、相応のエネルギーを消耗する事になる。

なのに、相手のエネルギーは無尽蔵。

このままではいつかこちらが力尽きてしまう。

「……何か、手は無い？　流石の私達も、〝経験に無い事〟となる

と対処し辛いんだけど」
『そうは言ってもねぇ……やっぱ、突っ込むしかないんじゃない？　コレ停めないとどうにもなんないでしょ』
「……だよねぇ」

あぁ、やっぱり……と、ゲンナリした表情で弾幕を躱しながら相棒の言に同意し、少女は腹を括り――――

「んじゃ…ま、逝きますか。多少のダメージは勘弁してね」
『大丈夫。種類は違うけど、”我慢する”事自体には慣れてるから』
「……そっか、じゃあちょっと付き合って！！！」
『えぇ、地獄の底まで！！！』

――――笑って、白の主従は翔けた。

「動いたか……」
「……なぁ、千冬姉。箒、勝てると思うか？」
「確かに上手くやってはいるが……アイツも私達の様に”外れている”のならともかく、あくまで人間だからな。長持ちはするだろうがそれだけだろう。機体はともかくアイツ自身の体力が持たん」
「だよなぁ……」

確かに千冬の言う通り、箒は上手くやっている。
だが、それだけだ。
仮に目論み通りに《白式》が減速したとして、《紅椿》がその減速

した《白式》に追いつけるとは限らないのだ。
《雨月》も《空裂》も、確かに強力な武装だが、相手を一撃で仕留められる程では無い。
だから、直撃を与える”まで”だけを考えるのなら、箒の取った方法は妙手だったかもしれないが、いざという時の決定力に欠けるのである。

「それよりお前、あっちの応援はしなくていいのか？　娘なんだろう？　お前の」
「あ～……まぁ、状況証拠的には確定っぽいんだけどさ」
「実感が無いから認知出来ないと？」

自分の取り巻きばかり応援している風である弟に、何故娘も応援しないのかを問うた千冬だったが、どうも返って来た答えが煮え切らない。

「いや、なんつうか……状況証拠もそうなんだが、『アイツ』の記憶に無いって事はまぁ、紛れも無く”俺の”娘なんだろうさ。だから、認めないつもりもないんだが……」
「だが？」
「いや、誰それと付き合って、結婚して、それで……ってならまぁ、まだしも、そういうのすっ飛ばしていきなり娘ってのにまだ驚いてるっていうか」
『まぁ、ヤることやってしまえばガキの一人や二人こさえられますけどね』
「お前なぁ……人がせっかくぼかして言ってんのに」
『別に姉の前だからといってそこまで気を使わなくてもいいでしょうに』
「「……」」

急に口を挟んだかと思えばこれである。
相変わらずというか、白式は通常営業だ。
千冬が「こんなヤツだったか？」と首を捻っている辺り、どうもこの芸風（？）は一夏の機体になってからの事らしい。

「全く、お前は……！？」

もっと慎みというものを……と、一夏が愚痴ろうとした瞬間、試合が動いた。
《白式》が、特攻を仕掛けたのだ。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
「なっ……、特攻！？」

《雪片弐型》の後継であろう刀を振るい、致命傷になる攻撃のみを切り伏せ、他の攻撃は意に介さず突き進む少女。
《雨月》の散弾がぶち当たる度にのけ反り、減速してはまた加速し、《空裂》のエネルギー刃を《零落白夜》で切り裂いて、突き進む……その繰り返し。
その動作を繰り返しながら、少女は確実に標的へ近付いていた。

「もらったぁぁぁぁぁっ！！！」
「くぅっ……」

遂に懐にまで飛び込まれ、《零落白夜》の刃を防ぎに繰り出した《空裂》は主の代わりにその刀身を斬られる事で役目を真っ当し、機能を停止した。

「くっ……この！！」

「ちぃっ……でも！！！」

しかし、《空裂》の刀身が宙を舞うと同時に奮われた《雨月》の散弾の前に、少女も次に放つべきトドメを放てずに後退を余儀なくされたものの、既に勝負は少女の勝利に傾きつつあった。

「これでぇぇぇぇぇっ！！！」

「なっ！！？」

《雨月》を振り切った瞬間……常人の感覚なら隙とは言えない程のその瞬間も、人外に取っては十分過ぎる隙だ。

箒の感覚でも隙とは言えない様なその瞬間を、少女は突いた。

弾幕が一瞬止んだその瞬間、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で再び懐に飛び込んだ少女の斬撃を、先に逝った《空裂》の様に防御に用いられた《雨月》はその刀身を散らし、《紅椿》は遂に全ての武装を失う。

「ラストォォォォォッ！！！」

「チイッ……」

終わった……と、誰もが思った。

箒ですらそう思ったのだ、敗北はもう決まったも同然である。

「え……」
「なっ……」

しかし、まだ《紅椿》は諦めてはいなかった。
四機二対のウイングスラスターの内の二枚を変形させ、両肩にクロスボウ型のブラスター、《穿千》を生成し、余った二枚のウイングスラスターが更に展開し六枚羽を形成、その羽に《絢爛舞踏》の黄金を燈す。

「う、《穿千》!?　このタイミングで!!?」
「……《穿千》？」

己の知らぬ武装の登場に箒は戸惑い、その詳細を知るが故に少女は驚愕し、《紅椿》は標的を穿つ為にその砲門を少女に向ける。

「くっ……」
『なんてタイミングで…』

その威力を知るが故に、全力で逃げる白の主従。
《絢爛舞踏》を以ってしても一瞬エネルギー切れを起こす程の莫大なエネルギーの軌跡が、その名に恥じぬ威力を以って全てを穿つのだ。
しかし、少女の知識が正しければ《穿千》は箒自身な経験値が一定値にまで達しなければ使用出来ないハズの武装だった。
その《穿千》が、発動した。
箒の窮地という、絶好のタイミングで。

「（束さんには不干渉って約束してもらったハズなんだけどなぁ……）」
『（……干渉の形跡は認められず、って事はやっぱ自力なんだろう

ね、コレ）』
「（うわぁ……、流石束さんの造った機体だけあるわ～。”解って”るわ、ホント）」

逃げる白を追う様に、二門のブラスターが砲門に翼と同じく黄金を燈した瞬間、轟音と共にアリーナ中に黄金の輝きが充満した。

「どわっ……っとぉっ！！？」

一射目は、”辛うじて”躱した。
しかし、《穿千》の……《紅椿》の本領を知るからこそ油断など出来るハズも無く、やはり予想通り直ぐさま第二射が放たれた。
”アリーナの”シールドエネルギーを大きく削る様なエネルギーの奔流が、《白式》が本気で逃げなければならない速度で、しかも無制限に連射されるのだ。
《白式・真打》や《白式・影打》の《零落白夜》を以ってしても防ぐだけでエネルギー切れを起こすのは必至な……下手をすれば《白式・両儀》ですら一撃でシールドエネルギーの大半を持って行かれ兼ねない。
これを驚異と言わずして、何を驚異と言うのか。

「あ～もぅ！　セルフでツインサテライトキャノンとか……どぉっ！！？」
「お……おぉ？」

必至に逃げ回る白の主従、あまりの威力に戸惑う箒、そして無慈悲に《穿千》を連射し続ける《紅椿》の姿が、そこには在った。
ある意味、形成は逆転しているのだが、あまりの威力に当の本人が上の空で、機体の方が自動（オート）で敵を攻撃しているだけの状況である。

非常に勿体ない状況なのだが、些か威力があり過ぎた。

「くっ……コレなら……ってマジ!!?」

必死に逃げ回りながらも打開策を模索し、自律機動のクローを射出したまでは良かったのだが、全方位からの一斉攻撃を仕掛ける前に、機体そのものを乱回転させながら放たれた《穿千》の前に、全て墜とされてしまった。

「嘘でしょぉおっ!?」

「や、やれる……のか?」

覆された戦況を、再び自分のペースに戻す為に放った使い魔は放った直後に全て葬られ、更に戦況は相手に有利な状況に傾いてしまった。

しかも、間の悪い事に箒もやっと調子を取り戻してきたのか、表情が呆けたものから剣を握った時の様な怜悧なものに変わっている。

「(ちょっ……形態移行したんだから何かないの!!?)」

『(無い事も無いけど……アレ喰らったら結局さっきの二の舞になるかもしれないよ? つ~か、アレ躱しながら”投げる”余裕有る?)』

不利に不利が重なる中、慌てて従者に打開策は無いのかを問うた少女に、従者は曖昧に、それでいて自身無さ気に応える。

「(……投げる?) どぉぉっ!!? (も、もうなんでもいいからソレ出してよ! 私、こんな所で負けたくなんか無いんだから!!)」

従者の提案を信じるか信じないか、熟考しようにも状況がソレを許さない。
ならば…と、少女も腹を括り、その提案に賭けた。

『（んじゃ…ま、やるよ？）《雪片参型》、モードチェンジ。タイプ・投げ槍（ジャベリン）へ移行。《零落白夜》、最大出力で展開……今！！！』

そして、主の許しを得た従者は手にした刀の得を主の背丈ぐらいにまで延ばし、刀身をより鋭利なモノに変形させ、必殺の呪いを込めて主にソレを託した。

「ラァァァァァァァァァッ！！！」

託された新たな力は投げ槍（ジャベリン）となって主の手に渡り、主たる少女は敵の放った黄金の軌跡を躱すと同時に、必殺の魔槍を投げ付ける。

「そんなものぉぉぉぉっ！！？」

必殺の気配を感じ取り、その放った本人ごと巻き込んで槍を破壊するハズだった黄金の軌跡は放たれた槍に貫かれ、次の瞬間には片方の《穿千》を穿っていた。

「なっ…！？」

貫通し、投げ槍（ジャベリン）が地面に突き刺さったと同時に左の《穿千》は爆散。
真横で起こったその爆発に箒が一瞬怯んだ隙に瞬時加速（イグニッション・ブースト）で急降下しながら地面に突き刺さった投げ槍（ジャベリン）を抜き、勢いを殺さずにUターンしながら急接近を仕掛けた少女は《雪片参型》を再び刀に戻して箒

に切り掛かった。

「ラストォォォォォォォッ！！！」

「くっ……間に合えぇぇぇぇっ！」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）のあまりの速さに《白式》の姿を見失ってしまった箒だったが、少女の目論みを悟って《穿千》を貫通して自身の後ろに突き刺さっている《雪片参型》目掛けて振り返りながらもう片方の《穿千》を放つ。

拾った《雪片参型》でトドメを刺しに来た、そこまでは確かに箒の予想通りであり、迎撃の為に視認するよりも先に動き、《穿千》を放った事自体、悪い判断ではなかった。

この方法なら、例え《白式》の動きをリアルタイムで追えずとも予め来ると解っていた位置に攻撃を放てば《白式》を捕らえる事も可能だったかもしれない。

だがしかし、ほんの一瞬だけ気付くのが遅かった。

その一瞬の遅れの内に《白式》は《紅椿》の懐に潜り込んでおり、《零落白夜》を込めた斬撃が《紅椿》のシールドエネルギーを喰らい尽くしていたのだから。

「……私の、負けか」

「はい、私が勝ちました」

絶対防御の発動と共に箒の意識は遠退き、ふらりと仰向けに倒れる。

倒れて、しかし箒がそのまま地面に転がる事はなかった。

先の試合では姉を妹が抱き留めた様に、箒を抱き留めた者がいるからだ。

「……全く、どうしてこうウチの女集は武闘派ばっかなのかねぇ」
「……パパ♪」
「はいはい、パパさんですよ」

気を失った箒を抱えながら一夏は娘の声に応じ、娘は漸くたどり着いた父親を前に舌なめずり。

「フフッ、やぁ～っとメインディッシュが来た来た♪」
『……えらく腹のもたれる前菜でしたが』
「そりゃたしかに」

不敵に嗤う娘と、その従者のやり取りに、思わず苦笑しながら同意した一夏だったが、本人達に聞かれたらマズかったかと思い直し、少しゲンナリした表情になった。
案の定、プライベートチャンネルにピッドに集まっていたいつものメンバー全員からの「後で話がある」という旨のメールが殺到している。

「……じゃあ、遊ぼうよ。パパ」
「そうしますか」

メールの内容は頭の片隅に追いやって……しかしこのままだとどの道箒をピッドに届けなければならないので無視しようにも無視出来ず、取り敢えず手の空いている《白式・数打》を一体召喚して箒を運ばせた。
多分、一夏が来た瞬間にタコ殴りにするつもりだったのだろうか、箒を届けに行った《白式・数打》に一斉に攻撃が叩き込まれる。

（うわぁ……。俺、普段あんな事されてたのかよ）

ゲンナリとした表情に青みが加わり、取り巻きのメンバーの容赦の無さに恐怖しつつ……一応、箒を避けて攻撃している事と、とばっちりを受けた《白式・数打》の損傷も軽微だった事から、多分普段もちゃんと加減はしてくれてるんだろうなぁ～と思う事にして、再び娘に向き直る。

「……さぁて、何して遊びたい？」

問いの応えは、横一文字の斬撃だった。

１００話突破＆第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（４）」（後書

次回こそ、《白式・両儀》ＶＳ《白式》です

１００話突破＆第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（５）」（前書

やっ……やっと終わった…

１００話突破&第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（５）」

「あぁ……やっと、やっと”逢えた”ね。パパ」
「……だな」

珍しく……そう、自分でも自覚出来るぐらい珍しく、（自称）娘の……いや、娘の言った意味に察しが着いた俺は、その察しの良さと同じぐらいの珍しさで重く、頷いた。
相棒（白式）と同じく、娘の正体について何となく予想はついていたんだが、重要なのはそこじゃない。
娘が”何者か”ではなく、”何の為に”来たのかこそ考えるべきだったんだろうと、今更ながら思った。
……あぁ、こんなだから鈍いとか言われるんだろうなぁ。

発達し過ぎた五感が得た感覚情報の処理に脳機能の大部分を割かれているからあんまり深く物事を考えられないだとか、感情の機微も異常な視力を以ってすれば本人すら気付かない表情の変化から察せられるけど他の感覚情報が膨大過ぎて察知しても埋もれるだとか、一応言い訳も出来ない事も無い様な気もするが、するだけ無駄だろう。
……多分、あの娘もそれなりに”外れてる”んだろうが、俺ほどじゃないだろうからこの辺りの感覚は理解出来ないだろうし。
いや、そうでなくても野郎の言い訳は女に通用しないのは世の常だったか。
俺もそうだが『俺』もその辺りで随分苦労したみたいだし。
……まぁ、『俺』の場合は途中で無視する様になったから苦労も最初の内だけだっただろうが。

そんな事よりも、だ。
聞いて、ハッキリさせて置かなければならない事がある。
うちの相棒（白式）みたいな事をいう様でアレだが、ヤる事やったワケでも無いのにそういう過程をすっ飛ばしていきなり娘だなんて言われてもやっぱりまだ実感なんて沸かないんだが……それでも、だ。
親子としての実感はまぁ置いて置くとしても、千冬姉や束さんの様な、同類としての臭いというか雰囲気というか、そういったものを感じる以上は。

「……お前、何年分……いや、何人分溜め込んだ？」
「！！？　……フ、フフフ、ハハッ、ア～ハッハッハッハッハッ！！！　さぁぁっすがパパ！」
「……」
「うんうん、《時計兎》の力で此処まで来たんだから、多分、〝何年分〟ってのは聞かれるだろうなぁ～って思ってたんだけどさ。どうして気付いたの？」
「お前、顔変わり過ぎなんだよ。飛んだり跳ねたりする度にそんなコロコロ変わってたらいい加減気付くわ」
「おぉっ！？　流石はパパ！　『一目見ただけで女性のスリーサイズを言い当てられる男』と言われるだけの事はある！！」

未来の俺って……。
娘にまでそんな事言われる様な俺って……。

「……で、結局の所はどうなんだ？」
「ん。両方、だよ。あらゆる平行世界の、『織斑一夏の娘』に該当する人物を、同一時間軸だけじゃなくてあらゆる時間軸の該当者を……『〟今〟の織斑一夏に会えないから、過去の織斑一夏に会お

うとした』全ての『織斑一夏の娘』を”私”にかき集めたの。だから、三次移行（サード・シフト）なんて反則染みた事が出来たし、四次移行（フォース・シフト）だって……」

「うわぁ……」

我が娘ながら予想以上にとんでもない事やらかしてやがるな、おい。いや、確かに今現在の一人分じゃ経験値が足りないだろうから数年分だか数人分だかで賄ってるんだろうなとは思ってたんだが、まさか両方だとはねぇ……。

”数年”の方は明らかに《時計兎》の唯一仕様の特殊才能（ワンオフ・アビリティー）の仕業なんだろうけど、”数人”の方はどうなんだ？

「なぁ…、その数人分ってのは《白式》の方の能力か？」

「そうだよ。向こうの束さんが私が手っ取り早く強くなれる様にって」

確かに、その方法なら楽に強くなれるだろうさ。

Aという世界の自分は格闘が得意、Bという世界の自分は射撃が得意っていうんなら、AとBの世界の自分を足せば格闘も射撃も得意な自分が出来上がるんだから。

そうやって得意分野毎に”自分”をかき集めて万能の自分を作ったってワケか。

で、しかも《時計兎》の能力で今現在じゃなくてそれらの得意分野をもっと煮詰めた未来の自分を呼べるしな。

それでも……万能な割に荒があるというか、苦手分野がある様に見えるのは、別々の得意分野が互いの長所を発揮する為に相殺し合っている、つまり格闘が得意な身体つきと射撃が得意そうな身体つきは違うワケだから、万能っていってもそのままだと良くて苦手分野が無いだけで特に何か極めた様なものが無い状態になってしまう。

多分、何かする度に顔とかがコロコロと変わってたのもその対策の

為ってとこか。
つまり、だ。
普段はより取り見取りでも、客毎に勧める商品をリストアップしてるっていうか、発揮すべき得意分野毎に比率を弄ってるんだろうな、多分。

「質問は終わり？」
「あ～、いや。今のでだいたい解ったんだが……あんまり聞きたく無いっていうか聞くと後が怖いっていうか……、顔変わる時に年齢とは違う変わり方してたりする様に見えたんだが……ソレって…」
「うん、何せ”あらゆる”平行世界からの寄せ集めだからね、私達は。だから、この場にいるパパの取り巻きの皆さんの一人一人が私達の内の一人の母親でもあるし、この場にいない人が母親の私だっているよ」

クソッ、やっぱりか！
何となく想像してたけど信じたく無かった！

「あぁ、あと、その平行世界の内の一つだけど、重婚っていうか、パパったら手当たり次第に”頑張っちゃう”からもの凄い大家族になってる世界も……」
「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏ！！！」

もう止めて！　俺のライフはとっくに０だから！

『（下半身的な意味でもスッカラカンかもしれませんね）』

お前は黙ってろ。

「「「「「「「「……」」」」」」」」

衝撃の事実に……或いは笑撃の事実に一夏がうなだれていたちょうどその頃、敗北し、そのまま控室代わりに使用していたピッドで観戦していた七人は、一夏の娘を自称する少女の口から語られた事実（未来）に絶句していた。

この中の内の一人か別の場所にいる誰かが一夏と結ばれる世界があり、皆平等にチャンスはあるという事。
これについては前妻或いは本妻である束がかなりリードしていた感があったので、叶うかどうかは別としても、チャンスがあるというだけでもまだ希望はあるというもの。

もう一つ、俗にいうギャルゲーやエロゲーでいうところのハーレムエンドを迎えた世界。
選ばれた選ばれなかったで揉めない分、ある意味一番平和だが……。

「て、て、て、手当たり次第にって……」
「あ、あくまで他所の世界の話だよ。他所の」
「そそそそ～ですわ！　そ、それに重婚だなんて！？　も、もし子供が出来たら養育費だって……」
「う～ん、重婚…は、まぁともかく、養育費の方は問題無いんじゃないかな～と思うよ、お姉さんは。だって私、国家代表だし。貴女

達だって代表候補生でしょ？　一人二人養うぐらいのお給料はもらってるんじゃないの？　箒ちゃんだって、篠ノ之博士が特許料受け取る手続きしてないから代わりに受け取ってるんだし、お金ならあるでしょ？」

「「「「「「……あ」」」」」」

楯無の言葉に、経済的な面ではなんの問題も無い事に気付いて――

（そ、そっか！　ならいつでも一夏と……）

（た、確かに経済的にはなんの問題もありませんわね。……つまり、後は一夏さんをオルコット家の婿養子として迎えるだけ！）

（シャルロット・織斑……ううん、日本風なら織斑シャルロットだよね。うん！　いいかも♪）

（……フム。私が一夏と、か。確かクラリッサがこういうのを嫁に貰うと言っていた様な……）

（フフフ、可能性があるのなら私だって……。そ、そうだ胸だって姉さんに負けて無いんだし……）

（お、織斑君と……）

――気付いた途端、なにやら途中の問題をすっ飛ばして妄想に浸りだす六人の少女の姿が、そこにはあった。

（き、気が早いわね～皆）

色々抜けている事に気付いていたのは、言い出しっぺの楯無だった。というか、楯無は”経済的には問題無い”という話をしただけであり、”何も問題無い”とは一言も言ってはいないのだが。

（……というか、話の流れ的になんであの娘が来たのかが重要っぽいって、織斑君達の話聞いてたら気付きそうなものなんだけど。まぁ、皆可能性があるって事だけでも解って万々歳ってとこなのかなぁ～）

妹の想い人として認めているし、自身も気に入っているだけで、”そういう意味”で好いているワケでは無い。

或いは、まだその段階にいない楯無だからこそ、冷静に物事を判断する事が出来た。

というより、他の六人が妄想全開なだけで楯無が特別冷静というワケでも無いのだが。

（まぁ、父親に会いに来たっていうんだし、あの娘の事は”お父さん”に任せるとして、こっちはこっちで”お母さん同士”の会話でもしましょうかね）

今までがそうであった様に、取り敢えず目先の出来事の解決は一夏に任せるとして、楯無は自分達は少し先を見据えた話をして置こうと、そう思い、手を叩いて未だに妄想に浸っている六人の注目を集めて語りだした。

ただ一人、あの少女がどうして此処（現在）に来たのかを察したのだから。

「じゃ、そろそろ始めよ♪　私待ち切れない！」
「……そうするか」
「うん♪」

両腕を大きく振って駄々をこねだした少女に苦笑しながら、一夏は己が鎧（相棒）を構えた。
それに合わせて少女もまた待機状態に戻していた己の鎧（相棒）を構える。

「変身！！」
「着装！！」

二者二様の言葉を……それでいて意味する所は同じである言葉がアリーナに響き渡り、白い極光が二人を包み込んだ。

一夏の服装が瞬時にＩＳ学園の制服から専用のＩＳスーツに変わり、ベルトが自動で巻き付き、脚部、腕部、胸部の順で白亜の装甲が身体を包み、装甲と同じく白亜に染まったヘルメットを被った後に、正面を覆うようにクリアブラックのバイザーが装着され、バイザーの奥で真紅の瞳が灯を燈す。

少女の服装が瞬時に私服から専用のＩＳスーツへと変わり、白亜に染まった装甲が脚部、腕部、胸部の順で装着され、二機一対のウイングスラスターが顕れる。

《白式・真打》を纏い、さらにその上から《白式・影打》の装甲を先程と同じ様に脚部、腕部、胸部の順で纏って、被ったヘルメット

の両サイドにヘッドセットを装着し、最後に四機二対の巨大なウイングスラスターを出現させた一夏は、《白式・両儀》へと成った。

少女は装着と同時に一次移行（ファースト・シフト）、二次移行（セカンド・シフト）、三次移行（サード・シフト）と進化（先祖還り）を辿りながらウイングスラスターを四機二対、六機三対へと増やして、最後に四次移行（フォース・シフト）を成してウイングスラスターを八機四対へと増やした《白式》を見に纏った。

「「……」」
『『……』』

若き日の父と、未来の娘。
名と共にその存在意義を奪った者と、奪われた者。
両者共にこの場に存在しない別機から受け継ぎ、そしてそれぞれの用途の為に鍛え直した刀を構え、相手を見据える。

「……いくよ」
「あぁ……、来い！」
「「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」」

共に上げた雄叫びと共に両者は白い流星となってその姿を掻き消し、誰も辿り着く事の出来ない領域で何度も何度も激しくぶつかり合った。
あまりの速さに誰も追い付く事は叶わず、目で捕らえる事すら不可能。
それは正に、少女が望んだ自分と父親だけの……二人だけの時間。

「さてと、まぁ……育った文化的にというか個人の価値観的に無しって思ってるのかもしれないけど、織斑君が複数の女の子と関係を持つ……って言うと露骨過ぎるか、まぁぶっちゃけハーレム作っちゃう可能性も無いワケじゃないのよ？」

「え……な、そんなっ、一夏はそんな事！」

「気持ちは解らなくもないし、私だってそれなりに織斑君の事は知ってるつもりだけどね……でも、これはしたいしたくないっていう話じゃないの。どうして各国が織斑君のいるクラスに自国の代表候補生を捩込んだのか、解らないワケじゃないでしょう？」

「それは……」

楯無の言葉に皆が一瞬呆けて、最初に正気に戻った鈴音が反論するも、逆に諭されてしまった。

篠ノ之束の技術を間近で見れる位置にいる為……だけでは無い。

織斑一夏と”そういう関係”になって身内となり、技術を得る為という思惑が各国には確かにあったのだ。

その為に、一夏と同い年の美少女を見繕い、差し向けたのである。

勿論、この場にいる全員とも実力は代表候補生に相応しいものではあるが、それぞれの国内の代表候補生の中で最強かと言われれば、そうでは無い。

「……確かに、その様な話が無かったワケでは無いが、それとこれとどういった関係が？」

「うん。本来は……というかもう建前にすらなってないんだけど、何処の国家の影響も受けないハズのＩＳ学園が各国の影響を受けて

代表候補生を捩込まされてる。そしてその学園が国内にある日本もまた各国の押しに非常に弱い……まぁ、日本が弱腰なのは学園とは関係無いんだけどね」

そこまで喋ったところで、どうやら六人とも楯無の言葉の意味を理解し始めた様だが、楯無はそのまま続ける。

「もし、この中の誰か一人が織斑君に選ばれたとしたら、その娘の所属する国家は篠ノ之博士の技術を得る最大の機会を得る事になる。まぁ、機会が得られるだけで実際に篠ノ之博士が技術提供してくれるかどうかは解らないけどね。でも、そういう位置にいるというだけでその国は他の国には無い大きなアドバンテージを得る事になる」

「確かに…」

「…まぁ、ね」

「でも選ばれなかった国は遅れを取りたくなんかないワケだから…そうねぇ、もう少し具体的な話をすると箒ちゃんが選ばれたらもうそれこそ織斑家と篠ノ之家だけの狭い範囲で話が終わっちゃうかもしれないけど、仮に簪ちゃん以外の……日本以外の国が選ばれたりなんかしたら、絶対選ばれなかった各国は日本にこう働き掛けるわよ、『織斑一夏の重婚を認めろ。日本だって篠ノ之博士の技術が欲しいだろう?』ってね」

ありえない話では無い。

既に各国は条約を捩曲げてまで自国の代表候補生を捩込んだという前科があるのだから。

たかだか一国家の法の一つや二つ、捩曲げにきてもおかしくは無い。

「……それに、日本がそれを飲まなくても織斑君は飲むでしょうね」

「……何故?」

「何故って、選ばれなかったって事は国家の一大プロジェクトに失

敗したって事でしょう？　得られるかどうか解らない利益とはいえ、利益が得られない事が確定した以上、国家にとっては大損害よ。それこそ、モンドグロッソで他国に負けるよりもね。そんな”大罪人”を、母国は暖かく迎えてくれると思う？」

「それは……」

確かに、楯無の言う通り、一夏に選ばれなかったが最後、所属する国家は確実に彼女らを見捨てるだろう。

代表候補生の座を下ろされるかもしれない。

それだけならまだしも、女尊男卑の世界だからこそ、女性にとって最悪の仕打ちを……という事も無いとは言い切れないかもしれないのだ。

「今だってそう。単に忙しいってのもあるんだろうけど、誰か一人を選んでしまったら他の全員が酷い仕打ちを受けるかもしれない。だから織斑君は取り敢えず”誰も選ばず”に、皆を側に置いている。篠ノ之博士の作品が間近に見れる場所に、ね。織斑君がそうしてるから、各国も選ばれていない貴女達に寛容なの。……自分だけを選んで欲しいっていう気持ちも解るけど、その優柔不断さに守られているのよ、皆」

「「「「「「……」」」」」」

なんとなく、そんな気はしていた。

性格的な意味で鈍感だから、身体的な事情で鋭敏過ぎて鈍感になっているから。

そういった事情を知らせる事で、守られている事を悟られまいとしているのではないかと。

守られているのだからと、こちらが気を遣わなくて済む様に何も言わずにいるのではないか、と。

「織斑君、その辺りの事何も言わないから実際の所は解らないけどさ。多分、どうしても選ばなきゃならなくなったら、誰か、じゃなくて皆を選ぶと思うよ」

守る為に、ね。

そう言って力無く笑った。

（二兎追う者は二兎とも取れって言ったの、失敗だったかなぁ…）

そう思うも、もはや手遅れであった。

「はぁぁぁぁっ！！！」

「ダァァァァァッ！！！」

まるでその声自体が力を持つかの様な雄叫びを上げ、刀を振るいながら激しくぶつかり合う父と娘。

何度も切り結んでは離れ、そしてまた切り結ぶ。

『モードチェンジ、ランス』

「ラァァァァァッ！！！」

「くぅっ…」

『《ライジングドラゴンロッド》、召喚！』

剣技では勝負が着かぬと、武装を替えてまた激しく突き合う二人。
互いに相手を穿たんと槍を突き出し、放たれた槍をいなして阻みの繰り返しで、剣技同様二人の技量は拮抗していたかの様に見えた。

「チィッ……、もらったぁぁぁぁぁっ！！！」
「くっ…、あぁっ！！？」

しかし、いくら技量が拮抗していようとも……否、例え技量が拮抗していたとしても、拮抗しているだけでは届かない。
操縦者自身の腕力も、機体自体のパワーも、一夏達の方が上なのだから。
特に、操縦者自身の腕力の差は大きい。
一般に男性の方が女性よりも腕力が上である上に、裏技で人の枠を越えているとはいえ、少女の腕力程度では本物の人外である一夏に遠く及ばないのだから。
だから競り負け、槍を取りこぼしてしまう。

「これでぇぇぇぇっ！！」
「くぅっ……こんのぉぉぉぉぉっ！！！」
「っとぉぉぉぉっ！？」

槍を取りこぼした同様を突く様に突き出された《ライジングドラゴンロッド》を身を捻りながら辛うじて躱し、躱しながらも見舞った荷電粒子砲も躱され、互いに一旦距離を取った。

「やるな！」
「パパこそ！」

不利であるのにも関わらず喜悦に表情を歪める娘望み顔を見て、一夏も口元を吊り上げた。

懐かしい感覚。
懐かしい、かつての罪の匂い。
そのかつての罪が頭を過ぎるのを自覚しつつも、一夏は沸き上がる衝動を抑え切れないでいた。
全力でぶちのめしてもいい侵略者などではなく、全力を向けても耐えられる同類の存在に歓喜するあまりの衝動。
その衝動のままに、娘に銃を向けていた。

「危なっ!?　ちょっ、パパって射撃苦手じゃなかったっけ?」
「……俺はな。でも、『俺』はそうでもない」

《ボルティックシューター》から放たれたる光線を躱しながら問う娘に、引き金を引きながら応える。
容する人数が人数だけに娘の方が目立ってはいるが、”違う自分”を取り込んでいるのは娘だけでは無い。
一夏もまた『一夏』という違う未来を歩んだ自分と同化しているのだから。

「くっ……ならっ!」
「なっ!?」

堪らず、全方位に放った電流に一夏が怯んだ隙に、すかさず娘はクローを飛ばす。
しかしいい加減場慣れした一夏もそう長い時間怯みっぱなしというワケでは無く、縦横無尽に飛び交うクローを全て躱しながら狙撃して全て撃ち落としてしまった。

「そんな！？　……あぁっ！！？」

クローが全て撃ち落とされてしまった事に動揺しつつも荷電粒子砲で応戦しようとした瞬間、ユニットごと飛ばされた《白式・両儀》の《雪羅》がぶち当たって吹き飛ばされ、体制を立て直そうとした途端に左脚に絡まったワイヤーによって強引に牽引され、再びバランスを崩してしまった。

「なっ…、《マイクロチェーン》！？　まずい！！？」
「《エレクトロファイヤー》！！！」
「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

自身の脚に巻き付いたワイヤーが、《白式・両儀》の腕から延びる《マイクロチェーン》だと気付いて、気付いた瞬間にたどり着いた悪寒は次の瞬間現実となって娘を襲った。
《エレクトロファイヤー》の電流に焼かれて身動きが取れない娘を一夏は《マイクロチェーン》で牽引したまま振り回して地面に叩き着け、更に引き上げると同時に火炎放射を浴びせ、次の瞬間、今度は冷凍光線が娘に襲い掛かり、一気に《白式》の装甲に亀裂が走る。

「ふっ」
「あぁぁぁぁぁっ……カハッ」

そして、ズタズタになった《白式》ごと娘を放り投げて、放り投げられた娘は地面に墜落すると同時に血反吐を吐き、《白式》は主が血反吐を吐いたと同時に装甲の殆どを損壊して大破。
八機四対の翼も全て折れ、二度と空を舞う事が出来ない状態に陥ってしまった。

「う……うぅ」

激痛のあまり、もはや起き上がる事すら儘ならない娘を見下ろす一夏は、両腕を構える。

「……《スーパー大切断》」

構えた両腕の装甲がスライドし、開いた隙間から左右三枚ずつの長刀が生え、上空から急降下する勢いをも乗せた斬撃を振り下ろした。

バイザーの奥に輝く真紅の瞳が、哀れな獲物を嗤い、そして――

戦えば戦うほどタカが外れていく理性、蘇る罪の記憶。
突き出した腕、その腕から伝わる肉を裂く感触。
耳にこびりつく、断末魔の叫び。
飛沫の一粒一粒すら見えた血の噴水と消えていく命の冷たさ。
それら全てが脳裏を過ぎる中、それでも止まらないこの衝動。
それでも……。

――寸前の所で、留まる事が出来た。

「ヒッ……あ」
「……あ、あ……あ」

小さく悲鳴を上げながら目をつむった娘は、いつまでも下りて来ないトドメの所在を求めて目を開けた先に、呆然と立ち尽くす父の姿を見た。

「あ……あ、あ……お、俺は…」

自分の娘すら、殺そうとした。
あの時の、あの男の様に。

「俺は……俺は…」

後退り、言葉にならない声を漏らして、また後退る。
感覚情報の処理が追い付かなかったのではなく、完全に自分の意志で娘を殺そうとしたのだ。
踏み止まれた事など関係無い。
あの時の様な衝動は確かにあった。
それでも、理性を失う程では無かった……否、理性が衝動を肯定していたのだ。

「う……あ…」

防衛本能でも何でもない、殺戮衝動。
あの時だってそうだ。
感覚情報の処理不全でも何でもなく、ただ殺したかっただけなのではないだろうか。
化け物染みたのは力の方では無く、この衝動で、だから両親は自分を捨てて去ってしまったのではないだろうか。
そう、理性的に錯乱しながら後退る。

「うぁ……あ…」
「ま…、待って！」

娘の制止も耳に入らず、また後退り……遂に足腰にさえ力が入らなくなったのか、尻餅を着いて、それでも後退る事を止めない。

「置いて行かないで！　私を見てよ！！　パパぁ！！！」
「あ…」

激痛を堪えて立ち上がった娘の叫びで、漸く一夏は動きを止めた。

「……私、知ってるよ。パパがどういう状態なのかぐらい。解って来たんだもの」
「え……」
「数百万人に一人いるかいないかの突然変移個体の内の一人で、変移のベクトル次第で特徴は違ってくるけど、どう変移した場合でも共通の特徴があるの」
「……」
「倫理感の逸脱」
「！？」
「常人から掛け離れれば掛け離れるほどそれが顕著になってくるって、束さんが言ってた。……そりゃそうだよね、掛け離れてるんだから一般の常識なんか持ち合わせてるハズが無い。ううん、”力”だけじゃなくてそういうルール自体がズレてるんだから、そもそも噛み合うハズが無いの」

同じ人間同士だってそう。
人種が、宗教が、国が、地域が、個人が……そういった他人との違いが大きければ大きい程、多ければ多い程、噛み合わなくなる。
人間同士ですらそうなのだ、人間とそこから外れた者とではそのズ

レも人間同士の比ではない。

「束さんの場合だってそう。束さんは束さんの常識通りに振る舞っているつもりでも、大多数が普通の人間だから、人間の常識と噛み合わないから、束さんは異常者として扱われてしまう。パパのソレだってそうなんだよ」

「いや、コレは……」

「束さんは開き直って自分の常識を突っ走ってるけど、パパは我慢して人間の常識に合わせ続けてるの。だからストレスが溜まって、同類を見つけると抑制が効かなくなる。だって、同類同士だったら自分達の常識で振る舞っても相手は文句なんか言ったりしないからね。久しぶりに羽を延ばせるから、ハメを外し過ぎてしまう」

言われてる内容に、確かに心当たりはある。

というか、なんとなくではあるが自分でも前々からそう思っていた事だ。

だが、だからどうすればいいのかが解らず結局娘の言う様に違和感の付き纏う人の常識に従って、それでストレスが爆発して暴走して……と、悪循環を繰り返していた。

「私の時代のパパはね、侵略者との戦いを口実にして全然私に会ってくれないの。もう殆ど倒してしまって、確かに残党も疎らにいるにはいるけど、《白式・数打》にでも任せておけばいいのに、だよ？」

「……」

「本当は侵略者退治が忙しいからなんじゃない。今のパパがそうだった様に、一緒にいたらいつか私を殺してしまうかもしれないから、ずっと家にいないの。……笑っちゃうよね、ただ娘に会う為だけに薬飲んで衝動を抑制しないといけないだなんて」

力無く呟く娘に、掛ける言葉が見つからない一夏は、ただ俯く事しか出来なかった。

「……パパはパパなりに私を大事にしてくれてるんだと思う。…だけど、私は寂しいの！　いるハズの父親との思い出が殆ど無くて！　もう顔すらロクに思い出せない事が！　でも、私の時代のパパは全然捕まらないから……だから、束さんに無理言って《時計兎》借りてまで過去に来たのに、パパまで逃げないでよ！」

泣きじゃくり、叫ぶ娘の声が、静まり返ったアリーナに響き渡る。

「……私、強くなるから！　パパに負けないぐらい、強くなるから！！　……だから、”全力で”私を愛してよ！！！　パパぁっ！！！」

叫びと共に娘は限界まで自分達をかき集め、より群れとしての力を蓄えて、その力を機体に送る。
力を送られた相棒は主の望みに応え、己と共に主を白い光で包み込んだ。

『五次移行（フィフス・シフト）、開始（スタート）』

殆ど砕け散った装甲も、全て使い物にならなくなった羽も、光と共に復元し、復元だけでは留まらず、最後の変化が始まる。

『最終形態移行（ファイナルシフトチェンジ）、完了（コンプリート）』

より巨大に、それでいてより鋭角になった各部の装甲。

近接格闘に特化したからか、巨大化しつつも一切の稼動の妨げになる事の無いデザインになった鎧。
両腕両脚に増設されたスラスター。
八機四対だったウイングスラスターもまた、更なる速さを求めて十機五対にまで増えた。
そして最後に、状況に応じて変形する万能武装、《雪片参型》は二振りに増えて左右にそれぞれ握られる。

『チェンジ、インフィニット・ストライカー』

五度に渡る形態移行を経て、完全に先祖還りを果たした《白式》は、主の父の鎧と同じくインフィニット・ストライカーへと成った。
平行世界や異なる時間軸への干渉といった裏技を使ったとはいえ、《神龍》、《ブルー・エンプレス》、《ラファール・リヴァイヴ・カスタム?》、《シュヴァルツェア・ヴォルフ》の四機の様に《白式・両儀》の能力を受けての変化ではなく、自力での先祖還り。
完全であるが故に四機の様にエネルギー供給が間に合わずに短時間しかその姿を維持出来ないものではなく、コアは一次移行（ファースト・シフト）のままで機体だけのインフィニット・ストライカー化の様なチグハグなものでもない、コアと機体の双方の完全な変化。

その姿こそ、少女の願いの結晶。

「な……」

その願いの大きさに、願いの強さに圧倒される一夏に、相棒は尋ねる。

『どうしますか?』
「どうって……?」

『娘が、父親である貴方に遊んで欲しいと甘えてきているのですよ？』

「……」

出来る事なら、応えたい。

しかし上手く加減が出来る自信が持てず、躊躇う一夏に、今度はもう一機の……娘の相棒が語りかける。

『アンタの心配は杞憂だよ……つ～か、何加減なんかしようとしてんのさ』

「……」

『この娘はアンタに全力を望んだんだ。なら、アンタが全力で応えないでどうすんのさ』

「しかし……」

『私はさ、所詮物だからいくら放っておかれたっていいさ。ムカつくけど我慢してやる。でもな、未来のとはいえこの娘はアンタの娘なんだろ？　アンタ娘まで放っておく気か？』

「……」

未来の自分とて好き好んで放っておいたワケではない……とは言えなかった。

言ったところで意味は無いのだから。

所詮、自分が勝手にそう思い込んでやった事など言い訳になるハズが無い。

『アンタさ、テレビの中のヒーローみたいにその他大勢まで救えないから、身近な人だけ守れればいいって思ってるみたいだけど、そう思う事自体は私だってとやかくいうつもりは無いよ。人間、出来る事なんか限られてるんだから全部だなんて無理だからね。でも、身近な人だけ守るっていってもさ、ただ無事なら良いってワケじゃ

ないだろ？』
「……」

『警備用ロボットとかなら対象が無事ならそれでいいのかもしれないけどね、アンタは私達みたいな機械じゃなくて人間で……この娘の父親なんだ。だからさ、守るっていうんなら、ただ危険から守るんじゃなくて、寂しさだとか、そういったものとかからも守ってやらなきゃダメだろ？』
「……そう、だな」
『なら、全力で来なよ。人がせっかくそこのムカつく女と同じになってやったんだからさ』

漸く頷いた一夏に、娘の相棒はヤレヤレと言わんばかりに言い放った。
数秒の逡巡の後に、漸く決心を決めた一夏は、己の相棒に命ずる。
今、出来うる限りの全力を。

「……白式」
『…漸く、決心がつきましたか？』
「……あぁ。やっと、な。〝アレ〟、いけるか？」
『まぁ、まだ仮組の段階なんで見た目にゴテゴテ感が凄まじい事になってますが……まぁ、いけるでしょう』
「頼む」
『……では。《フォームチェンジ》、ファイナル！』

太極を描く様に重なったコアはそのままに、一旦《白式・影打》部分が消え失せ、姿だけが《白式・真打》となった《白式・両儀》。
そして次の瞬間、《白式・真打》が《白式・影打》を纏って《白式・両儀》へと成る様に、《白式・両儀》は新たな鎧をその身に纏う。

クリアブラックのバイザーを覆うように《白騎士》のバイザーを被り、
通常時の《白式・両儀》がそうであった様に、ヘルメットの側面に《白式・影打》のヘッドセットを装着し、
胸部には《打鉄弐式》の《ブレストキャノン》を装着し、
更に《ブレストキャノン》を《紅椿》の胸部装甲が覆い、
右腕が《霧雨の淑女（ミステリアス・レディ）》の装甲で覆われた後に《ミストルテインの槍》が握られ、
左腕が《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》の装甲で覆われた後に《灰色の鱗殻（グレー・スケール）？》が装着され、
両脚が《シュヴァルツェア・ヴォルフ》の装甲で覆われた後にその装甲が展開し、ＭＡＩＣ発生装置が露出、
本体の各部装甲が全て装着された後に《打鉄・ブレードカスタム》の様に各部装甲が刃物の様な鋭利なデザインに変わり、
両腕に《アラクネ》の電磁ワイヤーの射出機器が装着され、
両脚に《打鉄・ヘビーアームドカスタム》のミサイルランチャーが装着され、
両肩の上に浮遊する様に《神龍》の《龍哮・改》が顕れ、
元の四機二対のウイングスラスターの代わりに《銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）》の《シルバー・ベル》が羽ばたき、
機体の周囲を無数の《ブルー・エンプレス》の《ブルー・ティアーズｍｋ？》が飛び交う。

”現時点での”……今まで一夏や『一夏』が、《白式・両儀》が、《白式・真打》が、《白式・影打》が、《白騎士》が、《黒式》が戦って得たデータを元に構築された最終形態、その原型。
敵のデータを蒐集し、そのまま自身の力とする《白式・両儀》の真骨頂。

「準備は、いいな？」
「パパこそ、そんなゴテゴテで大丈夫なの？」

言葉を交わし、武器を構える父と娘。
睨み合い、それでも両者の顔に浮かぶ表情は喜悦そのもので。
その睨み合いも一瞬、次の瞬間には二人の姿は掻き消え、再び誰にも追いつけない領域へと舞い上がった。

「はぁ……はぁ、はぁ…あ～あ。私の負けかぁ」
「はぁ……はぁ、っく…ギリギリ、だったけどな」

日が暮れるまで戦い続けた父と娘は力尽きて二人してアリーナの地面に仰向けに転がっていた。
長時間の超高速戦闘、しかもそれが完全なインフィニット・ストライカー同士のソレとなるとその苛烈さはインフィニット・ストラトスの比では無い。
何せ、アリーナの監視カメラやインフィニット・ストラトスのハイパーセンサーですら、可能な限りその戦闘映像をスロー再生しても常人には目で追うのが難しい程の超高速さで、尚且つその超高速かつ長時間の戦闘の中でインフィニット・ストライカーの大出力の武装が惜し気もなく振る舞われたのだ。
アリーナが原型を留めているのはもはや奇跡の類である。

「あ～あ、どうせなら勝ちたかったな」
「……勝てるさ。お前なら、お前達なら、いつか」
「ホント？」
「あぁ」
『……気は済んだ？』

語り合う父と娘の会話に割って入る様に、未来から来た《時計兎》は語りかける。

「あ～、もうそんな時間？」
『うん、結構ギリギリ』
「……帰るのか？」
『あんまり長居すると世界に負担を掛け過ぎるからね、日帰りが限界ってとこかな』
「…そうか」

束の様に過去の自分と同化してごまかそうにも、娘はまだ生まれていないのだから、それは出来なかった。

「パパ」
「ん？」

娘の立ち上がる気配を感じ、自身も立ち上がる一夏。

「……お仕事、頑張ってね」
「あぁ、なるべく早く終わらせる」
「うん、パパなら出来るよ。……《時計兎》」
『……はいはい』

呼ばれた《時計兎》は、望まれる前に娘が何を望んでいるのかを察して、娘の時間を巻き戻した。

「パパ、だっこして」
「はいはい」

幼稚園か小学校の低学年かといった年齢にまでその姿を幼くした娘は一夏に歩み寄り、一夏は要望通り、娘を抱き上げる。

「パパ、暖かい…」
「痛く無いか？」
「うん、大丈夫」

抱きしめた娘の温もりを感じながら、一夏は決意を新たにし、娘に誓う。
もう二度と、寂しい思いをさせない為に。

「頑張るから」
「？」
「”また”お前を…お前達をこうやって抱きしめられる様に、頑張るから。だから、少しだけ待っててくれ」
「うん、解った。約束だよ？」
「……あぁ、約束する」
『じゃあ、そろそろ帰るよ』

抱きしめた娘が、粒子になって消えてゆき、その感触も温もりも、徐々に無くなっていく。

「バイバイ。”またね”」

「あぁ、”またな”」

こうして、未来から来た娘は去り、父である一夏はその決意を新たにして戦いに挑む事となる。

「どうだった？　”久しぶりに”いっくんと遊んでみて」
「うん、楽しかった」
「そっか。うんうん、それはよかった。私もね、いっくんに負担を掛けすぎない様に、戦いが終わったら平和に暮らせる様に頑張るから。だから、少しだけ待っててて」
「うん、頑張ってね」
「うん、頑張るよ」
「ねぇ、束ママ」
「ん？」
「他のママ達の事もお願いね」
「あっはっは、そりゃ大変だ。でもまぁ、可愛い娘の頼みだからね。そっちの方も頑張ってみるよ。……まぁ、頑張るのはいっくんの方かもしんないけど」
「…フフフ。パパ、”枯れ”たりしない？」
「大丈夫大丈夫。いっくん、超がつくほどの絶倫だから」
「そっか」

何処でも無い、時の大河の中で母と娘は笑い合い、そして別れた。

１００話突破＆第一章終了記念番外編「ユア・ネーム・イズ……（５）」（後書き）

次回、

・感想件数３００件記念番外編
・第二章：注意事項（必読）
・第二章：プロローグ

の三本同時更新となります

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4303r/

仮面ライダー白式

2011年11月8日07時01分発行